

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第183集

大屋敷A古墳群

平成15~17年度国道362号交通連携事業（2B）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

第1分冊

2008

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第183集

大屋敷A古墳群

平成15~17年度国道362号交通連携事業（2B）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

第1分冊

2008

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

序

浜松平野の北辺を扼する丘陵地帯は天竜奥三河国定公園に指定されている景勝地で、多くの市民が豊かな自然に触れ合う憩いの場となっている。

人類史の始原より恵まれた環境であったことは、この丘陵地帯に位置する根堅遺跡において本州唯一の旧石器時代人骨、いわゆる浜北人が出土したことからも窺われる。その後、縄文時代人が生業・生活の証跡として多数の遺跡を残したが、弥生時代以降、天竜川が形成した平野全域を臨める立地条件もあってか、丘陵の南面する部分が墓地として利用されるに至った。古墳時代前期より三角縁神獣鏡を副葬する前方後円墳が存在し、同後期に入ると恐らく興覚寺後古墳を始祖とする大屋敷古墳群をはじめ、高根山古墳群、雲岩寺古墳群、向野古墳群、泉古墳群などの大規模群集墳が多数展開しており、県内はもとより、東海地方有数の群集墳分布地域となっている。恐らくは、これらの古墳群の造営主体がアラタマのクニとも呼ぶべきまとまりをもって、磐田原台地に古墳時代の早い段階から奥津城を営んだイワタの首長層に対抗した時期もあったであろうが、造墓活動が下火になった8世紀初頭以降、当該地域は龜玉郡として遠江国の一行政区に編入された。爾来中世に至るまで、当地域は遠江における手工業生産、就中窯業的一大拠点として考古学的には注目されることになる。大屋敷古墳群の造営が盛行した時期からすでに築場瓦窯跡群が操業され、川原寺式瓦や特殊な器種の須恵器を焼造したことが近年の調査研究で明らかとなった。さらに、宮口古窯跡群の一支群を構成する大屋敷古窯跡群のうち大屋敷1号窯が調査され、平安時代中期の灰釉陶器を生産していたことが判明し、宮口古窯跡群の操業体制や灰釉陶器から山茶碗への移行過程を探る上で貴重な資料となっている。

大屋敷C古墳群および大屋敷1号窯を対象とした前回調査に引き続き、今回の調査は東隣する大屋敷A古墳群について実施された。大屋敷A古墳群の古墳62基が新たに調査され、C古墳群同様に横穴式石室を基本的埋葬施設とし、7世紀を中心とする大規模群集墳であることが明らかにされた。興覚寺後古墳も含めた大屋敷古墳群全体の成り立ちについて重要な情報を提供したことは言うまでもなく、遠江における古墳埋葬施設の導入・発展の様相を追究する上で貴重な資料となつた。今後は調査成果を分析に加えた様々な角度からの議論が行われ、我が国の古墳研究総体に資するような研究成果が生まれることを期待する。

末尾になったが、静岡県浜松土木事務所、浜松市、旧浜北市教育委員会をはじめ今回の調査に当たりお世話になった関係諸機関に深謝致すとともに、3年次超にわたる現地調査と2年次に及ぶ整理作業に従事した調査員ならびに作業員の苦労を勞いたい。

平成20年3月10日

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

所長 斎藤 忠

例　　言

- 1 本書は、静岡県浜松市浜北区尾野地内に所在する大星敷A古墳群の発掘調査報告書である。なお、本書は2分冊で構成し、第1分冊には第1～4章、第2分冊には写真図版を掲載している。
- 2 調査は、国道362号交通連携事業（2B）に伴う埋蔵文化財調査として、平成15～18年度に静岡県浜松土木事務所から、平成19年度に浜松市から委託を受け、静岡県教育委員会文化課の指導のもとに、財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。
- 3 発掘調査期間は、平成15年2月28日～平成18年3月31日の、延べ4年次37ヶ月間である。資料整理・報告書作成期間は、平成18年7月1日～12月28日、平成19年10月1日～平成20年1月31日の、延べ2年次10ヶ月間である。
- 4 調査体制は以下のとおりである。

平成14年度（本調査）

所長 斎藤 忠、副所長 飯田英夫、常務理事 兼田徳幸、総務課長 本杉昭一
総務課副主任 鈴木訓生、調査研究部長 山本昇平、調査研究部次長兼資料課長 栗野克己
調査研究部次長 佐野五十三、調査研究四課長 足立順司、調査研究員 桶田光俊

平成15年度（本調査）

所長 斎藤 忠、副所長 飯田英夫、常務理事 兼田徳幸、総務部次長兼総務課長 鎌田英巳
総務課副主任 鈴木訓生、調査研究部長 山本昇平、調査研究部次長兼資料課長 栗野克己
調査研究部次長 佐野五十三、調査研究三課長 足立順司、調査研究員 桶田光俊、小木 充
補助調査員 鈴木 源

平成16年度（本調査）

所長 斎藤 忠、副所長 飯田英夫、常務理事 平松公夫、総務部次長兼総務課長 鎌田英巳
総務課副主任 鈴木訓生、調査研究部長 山本昇平、調査研究部次長兼資料課長 栗野克己
調査研究部次長 佐野五十三、調査研究三課長 足立順司、調査研究員 桶田光俊、小木 充

平成17年度（本調査）

所長 斎藤 忠、常務理事 平松公夫、総務部次長兼総務課長 鈴木大二郎、事業係長 野島尚紀
総務課主事 望月高史、調査研究部長 石川素久、調査研究部次長 栗野克己
調査研究部次長兼調査研究二課長 佐野五十三、保存処理室長 西尾太加二、調査研究員 小木 充
北野寿一、増田充弘、大林 元、中村雅之

平成18年度（資料整理）

所長 斎藤 忠、常務理事 平松公夫、総務部次長兼総務課長 鈴木大二郎
調査研究部長 石川素久、調査研究部次長兼調査課長 及川 司、保存処理室長 西尾太加二
調査研究員 大林 元、調査研究部主事 望月高史

平成19年度（資料整理）

所長 斎藤 忠、常務理事兼事務局長 清水 哲、事務局次長兼総務課長 大場正夫
事務局次長 稲葉保幸、事務局次長兼調査課長 及川 司、調査研究員 大林 元
事務局主事 望月高史

- 5 現地での基準点測量、空中撮影、写真測量ならびに遺構実測の一部を㈱フジヤマに委託した。また、資料整理において遺構図面のデジタルトレースを㈱東京航業研究所に委託した。

- 6 発掘調査に際し、当研究所評議員 向坂鋼二先生に現地指導を賜り、静岡大学名誉教授 伊藤通玄

先生に石室石材および石製品材質を鑑定して頂いた。また、資料整理において浜松市生活文化部生涯学習課の鈴木一有氏に金属製品の鑑定・図化指導を頂いた。

- 7 金属製品の保存処理および遺物の写真撮影は当研究所技術員等が実施した。
- 8 本書は、発掘調査に当たった調査研究員の所見をもとに調査研究員 大林 元が執筆した。
- 9 本書の編集は、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。
- 10 発掘調査資料および出土遺物は、静岡県教育委員会文化課が保管する。

凡　　例

- 1 現地測量については、日本測地系（旧測地系）を使用した。測量図・実測図もこれに準拠する。
- 2 土層記における土色は、小山・竹原1999に基づき分類した。
- 3 本書で使用した遺構の表記は次のとおりである。
SX 性格不明遺構
- 4 遺物実測図において、土器の断面図は以下の網掛けによって製品の種別を表現している。



須恵器



土師器・土師質土器



陶器

- 5 本書では、大谷2004第1分冊を「C古墳群報告書」と略称し、その内容を「C古墳群の調査」と呼称する。同様に、大谷2004第2分冊を「大屋敷1号窓報告書」と略称し、その内容を「大屋敷1号窓の調査」と呼称する。
- 6 古墳および石室の分類・部位名称は、C古墳群報告書ならびに静岡県考古学会2003に準拠した。
- 7 各古墳の石室検出状況図において、縦断面図には主軸にかかる崩落石材の全てを図化したが、横断面図では天井石以外の崩落石材は省略した。また、天井石は網掛けによって存在を示した。
- 8 出土遺物のうち須恵器について、本書における「坏身」とはC古墳群報告書の「杯身、無台杯、有台杯」を総称する。また、同書において「杯蓋、返蓋、摘蓋」とされた器種を同様に「坏蓋」と称す。
- 9 本書においては、湖西古窯跡群を中心とした遠江の須恵器編年（鈴木敏2001）を使用する。その曆年代表等については、C古墳群報告書とは少々異なるので、対応関係を以下に記す。

C古墳群報告書			本　　書		
遠江編年	陶邑田辺編年	曆　年　代	遠江編年	陶邑田辺編年	曆　年　代
遠江Ⅱ期	MT15	6世紀前半	遠江Ⅱ期	MT15	6世紀前葉
遠江Ⅲ期前葉	TK10	6世紀前半～中葉	遠江Ⅲ期前葉	TK10	6世紀前葉～中葉
遠江Ⅲ期中葉	TK43	6世紀後半	遠江Ⅲ期中葉	TK43	6世紀後葉
遠江Ⅲ期後葉	TK209	6世紀後半～末葉	遠江Ⅲ期後葉	TK209古段階	6世紀末葉～7世紀初頭
遠江Ⅲ期末葉	TK217	7世紀前半	遠江Ⅲ期末葉	TK209中・新段階	7世紀前葉
遠江Ⅳ期前半	TK217	7世紀前半～中葉	遠江Ⅳ期前半	TK217	7世紀前葉～中葉
遠江Ⅳ期後半	TK46	7世紀後半	遠江Ⅳ期後半	TK46	7世紀後葉
遠江Ⅳ期末葉	TK48	7世紀末葉	遠江Ⅳ期末葉	TK48	7世紀末葉
遠江Ⅴ期前半	MT21	8世紀前半	遠江Ⅴ期初頭	MT21	8世紀初頭
遠江Ⅴ期前半		8世紀前半	遠江Ⅴ期前半		8世紀前葉

目 次

序	
例 言	i
凡 例	ii
目 次	iii
挿図目次	iv
挿表目次	vi
第1章 調査の経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法	1
第3節 発掘調査・資料整理の経過	5
第2章 位置と環境	10
第1節 地理的環境	10
第2節 歴史的環境	10
第3章 大屋敷A古墳群の調査	13
第1節 大屋敷A古墳群の基本構造と概要	13
第2節 1区の調査成果	23
第3節 2区の調査成果	147
第4節 3区の調査成果	248
第5節 古墳時代以外の主な出土遺物	347
第4章 大屋敷A古墳群の評価	387
第1節 大屋敷A古墳群の群構成と石室の変遷	387
第2節 墳丘施設について	393
第3節 出土遺物について	394
註	397
引用・参考文献	397

(第2分冊)

写真図版 1~159

挿図目次

第 1 図	大屋敷 A 古墳群調査前地形測量図	2	第 61 図	A10号墳丘図	66
第 2 図	大屋敷 A 古墳群調査後地形測量図	3	第 62 図	A10号墳石室検出状況図	68
第 3 図	大屋敷 A 古墳群 3 区 運送便アレンチ配図	4	第 63 図	A10号墳石室検出状況横断面図	69
第 4 図	周辺遺跡分布図	11	第 64 図	A10号墳石室・閉塞石実測図	70
第 5 図	大屋敷古墳群分布図	13	第 65 図	A10号墳基底石・墓坑実測図	71
第 6 図	大屋敷 A 古墳群基本土層堆積図 その 1	19	第 66 図	A10号墳周溝遺物出土状況図	73
第 7 図	大屋敷 A 古墳群基本土層堆積図 その 2	20	第 67 図	A10号墳出土金属製品実測図	73
第 8 図	大屋敷 A 古墳群基本土層堆積図 その 3	21	第 68 図	A10号墳出土土器・玉類実測図	74
第 9 図	大屋敷 A 古墳群基本土層堆積図 その 4	22	第 69 図	A11号墳丘図	76
第 10 図	1 区調査後地形測量図	23	第 70 図	A11号墳石室・墓坑実測図	77
第 11 図	A 1 号墳丘図	24	第 71 図	A11号墳周溝遺物出土状況図	79
第 12 図	A 1 号墳石室検出状況図	25	第 72 図	A11号墳出土遺物出土状況図	81
第 13 図	A 1 号墳石室・閉塞石実測図	26	第 73 図	A11号墳出土遺物実測図	82
第 14 図	A 1 号墳基底石・墓坑実測図	27	第 74 図	A15号墳丘図	83
第 15 図	A 1 号墳周溝遺物出土状況図	28	第 75 図	A15号墳石室検出状況図・実測図	85
第 16 図	A 1 号墳出土遺物実測図	28		遺物出土状況図	85
第 17 図	A 2 号墳丘図	29	第 76 図	A15号墳基底石・墓坑実測図	84
第 18 図	A 2 号墳石室検出状況図	30	第 77 図	A15号墳周溝遺物出土状況図	87
第 19 図	A 2 号墳石室実測図	31	第 78 国	A15号墳出土遺物実測図	87
第 20 図	A 2 号墳閉塞石実測図	32	第 79 国	A16号墳丘図	89
第 21 図	A 2 号墳石室遺物出土状況図	32	第 80 国	A16号墳石室検出状況図	90
第 22 図	A 2 号墳基底石・墓坑実測図	33	第 81 国	A16号墳石室・閉塞石実測図	91
第 23 図	A 2 号墳出土遺物実測図	34	第 82 国	A16号墳基底石・墓坑実測図	
第 24 図	A 3 号墳丘図	35		墓道遺物出土状況図	92
第 25 図	A 3 号墳石室検出状況図	36	第 83 国	A16号墳出土遺物実測図	94
第 26 図	A 3 号墳石室実測図	37	第 84 国	A17号墳丘図	95
第 27 図	A 3 号墳基底石実測図	38	第 85 国	A17号墳石室・閉塞石実測図	96
第 28 国	A 3 号墳周溝遺物出土状況図	38	第 86 国	A17号墳石室検出状況横断面図	97
第 29 国	A 3 号墳出土遺物実測図	39	第 87 国	A17号墳石室実測図	98
第 30 国	A 4 号墳丘図	39	第 88 国	A17号墳石室遺物出土状況・閉塞石実測図	101
第 31 国	A 4 号墳石室検出状況図	40	第 89 国	A17号墳基底石・墓坑実測図	
第 32 国	A 4 号墳石室・間仕切石実測図	41		墓道遺物出土状況図	99
第 33 国	A 4 号墳基底石・墓坑実測図	42	第 90 国	A17号墳周溝遺物出土状況図 その 1	102
第 34 国	A 5 号墳丘図	43	第 91 国	A17号墳周溝遺物出土状況図 その 2	103
第 35 国	A 5 号墳石室・閉塞石実測図	44	第 92 国	A17号墳出土土器・玉類・金属製品実測図	104
第 36 国	A 5 号墳石室地盤状況横断面図	45	第 93 国	A17号墳出土鉢形器実測図	105
第 37 国	A 5 号墳石室実測図	46	第 94 国	A17号墳出土小刀実測図	106
第 38 国	A 5 号墳石室遺物出土状況図	47	第 95 国	A18号墳東西横断面図	106
第 39 国	A 5 号墳基底石・墓坑実測図	48	第 96 国	A18号墳出土遺物実測図	107
第 40 国	A 5 号墳出土遺物実測図	49	第 97 国	A19号墳丘図	108
第 41 国	A 6 号墳丘図	50	第 98 国	A19号墳石室検出状況図	109
第 42 国	A 6 号墳石室検出状況図	51	第 99 国	A19号墳石室実測図	110
第 43 国	A 6 号墳石室検出状況横断面図	52	第 100 国	A19号墳石室遺物出土状況図	111
第 44 国	A 6 号墳石室・閉塞石実測図	53	第 101 国	A19号墳基底石・墓坑実測図	112
第 45 国	A 6 号墳基底石・墓坑実測図	54	第 102 国	A19号墳出土土器・玉類・金属製品実測図	112
第 46 国	A 6 号墳出土遺物実測図	54	第 103 国	A19号墳出土金属製品実測図	113
第 47 国	A 7 号墳丘図	55	第 104 国	A20号墳石室検出状況図	114
第 48 国	A 7 号墳石室検出状況図	56	第 105 国	A20号墳石室実測図	115
第 49 国	A 7 号墳石室実測図	57	第 106 国	A20号墳石室遺物出土状況図	116
第 50 国	A 7 号墳石室遺物出土状況図	58	第 107 国	A20号墳基底石・墓坑実測図	117
第 51 国	A 7 号墳基底石実測図・墓道遺物出土状況図	59	第 108 国	A20号墳出土土器実測図	117
第 52 国	A 7 号墳墓坑実測図	60	第 109 国	A20号墳出土金属製品実測図	118
第 53 国	A 7 号墳出土遺物実測図	61	第 110 国	A21号墳丘図	118
第 54 国	A 8 号墳石室検出状況図・墓坑実測図	61	第 111 国	A21号墳石室検出状況図	119
第 55 国	A 8 号墳石室実測図	62	第 112 国	A21号墳石室実測図	120
第 56 国	A 8 号墳出土遺物実測図	62	第 113 国	A21号墳基底石・墓坑実測図	121
第 57 国	A 9 号墳丘図	63	第 114 国	A22号墳丘図	122
第 58 国	A 9 号墳石室・墓坑実測図	64	第 115 国	A22号墳石室検出状況図	123
第 59 国	A 9 号墳出土土器・金属製品実測図	64	第 116 国	A22号墳石室・基底石実測図	124
第 60 国	A 9 号墳出土玉類実測図	65	第 117 国	A23号墳丘図	125

第118图	A23号墙石室检出状况图	126	第179图	A32号墙石室检出状况图	181
第119图	A23号墙石室检出状况横断面图	127	第180图	A32号墙石室实测图	183
第120图	A23号墙石室实测图	128	第181图	A32号墙石室遗物出土状况图	185
第121图	A23号墙基底石·墓坑实测图	129	第182图	A32号墙基底石·墓坑实测图	188
第122图	A23号墙周溝·墓道遗物出土状况图	130	第183图	A32号墙周溝·墓道遗物出土状况图	189
第123图	A23号墙出土遗物实测图	131	第184图	A32号墙出土·器类实测图	190
第124图	A24号墙石室检出状况图	132	第185图	A32号墙出土玉器实测图	191
第125图	A24号墙石室实测图	133	第186图	A32号墙出土金属制品实测图	192
第126图	A24号墙基底石·墓坑实测图	133	第187图	A33号墙石丘图	194
第127图	A24号墙出土遗物实测图	133	第188图	A33号墙墓穴实测图·遗物出土状况图	195
第128图	A25号墙丘图	134	第189图	A33号墙出土遗物实测图	196
第129图	A25号墙石室检出状况图	135	第190图	A33号墙周溝遗物出土状况图	196
第130图	A25号墙石室实测图	136	第191图	A34号墙墙丘图	197
第131图	A25号墙石室遗物出土状况图	137	第192图	A34号墙石室残山状况图	198
第132图	A25号墙基底石·墓坑实测图	138	第193图	A34号墙石室实测图	199
第133图	A25号墙出土遗物实测图	138	第194图	A34号墙东北坑实测图·遗物出土状况图	200
第134图	A26号墙墙丘图	140	第195图	A34号墙出土遗物实测图	201
第135图	A26号墙石室检出状况图	141	第196图	A35号墙墙丘图	203
第136图	A26号墙石室实测图·遗物出土状况图	142	第197图	A35号墙石室检出状况图	203
第137图	A26号墙基底石·墓坑实测图		第198图	A35号墙石室夹实测图	204
	墓道遗物出土状况图		第199图	A35号墙基底石实测图	205
第138图	A26号墙出土遗物实测图	144	第200图	A36号墙石室检出状况图	206
第139图	1区遗物外小土·表面采集·古墙时代以降遗物实测图	146	第201图	A36号墙石室·基底石夹实测图	207
第140图	2区剖查后地形单张图	147	第202图	A36号墙出土遗物实测图	207
第141图	A12号墙墙丘图	148	第203图	A37号墙墙丘图	208
第142图	A12号墙石室检出状况图	149	第204图	A37号墙石室检出状况图	209
第143图	A12号墙石室实测图·遗物出土状况图	150	第205图	A37号墙石室实测图	210
第144图	A12号墙基底石·墓坑实测图	151	第206图	A37号墙基底石实测图	211
第145图	A12号墙周溝遗物出土状况图	152	第207图	A37号墙出土遗物实测图	212
第146图	A12号墙出土土器实测图	152	第208图	A38号墙石室检出状况图	212
第147图	A12号墙出土金属制品实测图	153	第209图	A38号墙石室实测图	213
第148图	A13号墙墙丘图	154	第210图	A38号墙基底石·墓坑实测图	214
第149图	A13号墙石室实测图·遗物出土状况图	155	第211图	A38号墙出土遗物实测图	214
第150图	A13号墙周溝遗物出土状况图	157	第212图	A39号墙石室残山状况图	215
第151图	A13号墙出土土器实测图	158	第213图	A39号墙石室·基底石夹实测图	216
第152图	A13号墙出土须恵器·金属制品实测图	158	第214图	A39号墙石室遗物出土状况图	217
第153图	A14号墙墙丘图	160	第215图	A39号墙出土遗物实测图	217
第154图	A14号墙石室检出状况图	161	第216图	A40号墙墙丘图	218
第155图	A14号墙石室实测图	162	第217图	A40号墙石室检出状况图	219
第156图	A14号墙出土遗物实测图	162	第218图	A40号墙石室实测图	220
第157图	A27号墙墙丘图	163	第219图	A40号墙底込込縫檢出状况图	221
第158图	A27号墙石室检出状况图	164	第220图	A40号墙石室遗物出土状况图	222
第159图	A27号墙石·附墙石实测图	165	第221图	A40号墙墓坑实测图	223
第160图	A27号墙底込込縫实测图	166	第222图	A40号墙底込込縫遗物出土状况图	224
第161图	A27号墙出土遗物实测图	166	第223图	A40号墙出土土器实测图	225
第162图	A28号墙石室检出状况图·墓坑实测图	167	第224图	A40号墙出土金属制品实测图	226
第163图	A28号墙墙丘图	168	第225图	A41号墙石室实测图	226
第164图	A29号墙石室检出状况图	169	第226图	A41号墙石室遗物出土状况图	227
第165图	A29号墙石室实测图·遗物出土状况图	170	第227图	A41号墙出土遗物实测图	228
第166图	A29号墙基底石·墓坑实测图	171	第228图	A42号墙墙丘图	229
第167图	A29号墙周溝遗物出土状况图	172	第229图	A42号墙石室检出状况图	231
第168图	A29号墙出土遗物实测图	172	第230图	A42号墙石室检出状况横断面图	232
第169图	A30号墙石室检出状况图	173	第231图	A42号墙石室·閉塞石实测图·遗物出土状况图	233
第170图	A30号墙石室实测图·遗物出土状况图	174	第232图	A42号墙基底石·墓坑实测图	235
第171图	A30号墙基底石·墓坑实测图	175	第233图	A42号墙出土遗物实测图	235
第172图	A30号墙出土遗物实测图	175	第234图	A43号墙石室·基底石实测图	236
第173图	A31号墙墙丘图	176	第235图	A43号墙出土遗物实测图	237
第174图	A31号墙石室检出状况图	177	第236图	A44号墙石室残山状况·实测图	238
第175图	A31号墙石室·閉塞石实测图·遗物出土状况图	178	第237图	A44号墙出土遗物实测图	239
第176图	A31号墙基底石实测图	179	第238图	A45号墙石室·基底石实测图	240
第177图	A31号墙出土遗物实测图	180	第239图	A61号墙石室检出状况图	241
第178图	A32号墙墙丘图	187	第240图	A61号墙石室·閉塞石实测图	242
			第241图	A61号墙石室遗物出土状况图	243

第242図	A61号墳基底石・墓坑実測図	244	第293図	A54号墳石室遺物出土状況図	291
第243図	A61号出土遺物実測図	245	第294図	A54号墳基底石・墓坑実測図	292
第244図	2区遺構外出土・表面採集遺物実測図	245	第295図	A54号墳出土遺物実測図	292
第245図	SX01実測図	246	第296図	A55号墳壇丘図	293
第246図	SX02実測図	247	第297図	A55号墳石室検出状況図	295
第247図	3区調査後地形測量図	248	第298図	A55号墳石室検出状況横断面図	294
第248図	3区北西部調査区南壁セクション図	249	第299図	A55号墳石室実測図	297
第249図	A47号墳壇丘図	250	第300図	A55号墳内蔵石実測図	300
第250図	A47号墳石室検出状況図	252	第301図	A55号墳石室遺物出土状況図	301
第251図	A47号墳石室検出状況横断面図	253	第302図	A55号墳基底石実測図	303
第252図	A47号墳石室実測図	254	第303図	A55号墳葛底石実測図	305
第253図	A47号墳石室遺物出土状況図	255	第304図	A55号墳出土器実測図 その1	307
第254図	A47号基底石実測図	256	第305図	A55号墳出土器実測図 その2	308
第255図	A47号墓坑実測図	257	第306図	A55号墳出土器実測図 その3	
第256図	A47号墳周溝通路出土状況図	258		玉瓶・金属製品実測図	309
第257図	A47号出土土器実測図 その1	259		A56号墳壇丘図	311
第258図	A47号出土土器実測図 その2		第308図	A56号墳石室検出状況図	313
	金属製品実測図		第309図	A56号墳石室検出状況横断面図	315
第259図	A48号墳壇丘図	261	第310図	A56号墳石室実測図	317
第260図	A48号壇丘内検出状況図	262	第311図	A56号墳石室遺物出土状況図	319
第261図	A48号墳石室実測図	263	第312図	A56号墳基底石・墓坑実測図	321
第262図	A48号石室遺物出土状況・閉塞石実測図	264	第313図	A56号墳出土器実測図 その1	323
第263図	A48号壇底石・墓坑実測図	265	第314図	A56号墳出土器実測図 その2	
第264図	A48号出土土遺物実測図	266		金属製品実測図	324
第265図	A49号墳壇丘図	267	第315図	A57号墳石室検出状況図・墓坑実測図	326
第266図	A49号墳石室検出状況図	268	第316図	A57号墳石室実測図・遺物出土状況図	327
第267図	A49号墳石室・閉塞石実測図	269	第317図	A57号出土土遺物実測図	327
第268図	A49号基底石・墓坑実測図	270	第318図	A58号墳壇丘図	328
第269図	A49号墳石室遺物出土状況図	271	第319図	A58号墳石室検出状況図	329
第270図	A49号出土土遺物実測図	271	第320図	A58号墳石室実測図	330
第271図	A50号壇壇丘図	272	第321図	A58号石室遺物出土状況図	331
第272図	A50号壇石室検出状況図	273	第322図	A58号基底石・墓坑実測図	332
第273図	A50号壇石室実測図	273	第323図	A58号出土土遺物実測図	333
第274図	A50号基底石・墓坑実測図	274	第324図	A59号墳壇丘図	334
第275図	A51号墳壇丘図	275	第325図	A59号墳石室・SX03検出状況図	335
第276図	A51号壇石室検出状況図	276	第326図	A59号墳石室実測図・遺物出土状況図	336
第277図	A51号洁石室実測図	277	第327図	A59号出土土遺物実測図	337
第278図	A51号壇石室遺物出土状況図・ 基底石・墓坑実測図	278	第328図	A60号墳壇丘図	338
第279図	A51号出土土遺物実測図	279	第329図	A60号壇石室検出状況図	339
第280図	A52号墳壇丘図	279	第330図	A60号壇石室実測図(第2床面)	340
第281図	A52号壇石室検出状況図	280	第331図	A60号壇石室実測図(第1床面)	341
第282図	A52号壇石室実測図	281	第332図	A60号基底石・墓坑実測図	342
第283図	A52号基底石・墓坑実測図	282	第333図	A60号出土土遺物実測図	342
第284図	A52号出土土遺物実測図	283	第334図	A62号壇石室検出状況図	343
第285図	A53号壇石室検出状況図	284	第335図	A62号壇石室実測図	344
第286図	A53号壇石室実測図	285	第336図	A62号基底石・墓坑実測図・遺物出土状況図	345
第287図	A53号壇底石実測図	286	第337図	A62号出土土遺物実測図	345
第288図	A53号出土土器実測図	286	第338図	A63号壇石室検出状況・石室実測図	346
第289図	A53号出土金属製品実測図	287	第339図	A63号壇基底石実測図	346
第290図	A54号壇壇丘図	287	第340図	3区遺構外出土・表面採集遺物実測図	347
第291図	A54号壇石室検出状況図	288	第341図	大屋敷A古墳群出土土器実測図	348
第292図	A54号壇石室実測図	290	第342図	大屋敷A古墳群出土鏡貸影図	348
			第343図	大屋敷A古墳群単位群分区図	388

挿表目次

第1表	周辺跡跡一覧表	12
第2表	大屋敷A古墳群古墳観察表	14
第3表	大屋敷A古墳群出土土器観察表	349
第4表	大屋敷A古墳群出土玉類観察表	370
第5表	大屋敷A古墳群出土金属製品観察表	381
第6表	大屋敷A古墳群出土土器観察表	386
第7表	大屋敷A古墳群單位群別古墳消長表	389

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯

東名高速道路の交通量増加により第二東名高速道路が計画され、静岡県を東西に横断する東名高速道路にはほぼ併行して北側に路線が決定された。この路線内に位置する浜松市浜北区（旧浜北市）に第二東名高速道路浜北インターチェンジが建設されることになり、それに伴いアクセス道路としての国道362号線の交通過密、特に高速道路を利用する大型車の大幅な増加が予想された。しかし、現状の国道362号線は路幅狭隘な地点が数箇所存在し、大型車の対向走行が不可能な場所や見通しの劣悪な場所もあるという事由により、歩行者など地域住民の交通安全確保にも配慮した道路拡幅が不可欠となり、国道362号線のバイパス建設が計画された。

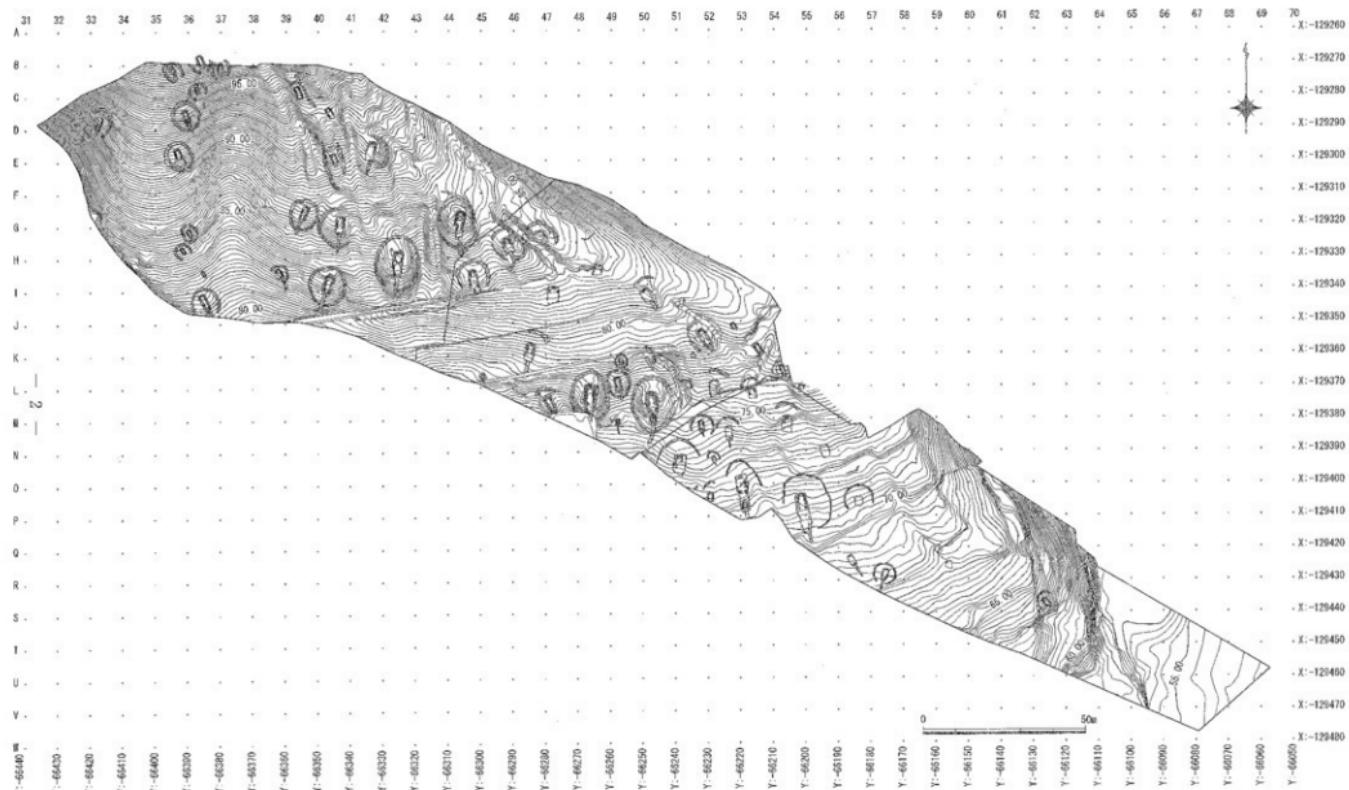
バイパス建設工事に先立ち、静岡県浜松土木事務所工事2課が路線内の埋蔵文化財の有無について浜北市教育委員会生涯学習課文化財係および静岡県教育委員会文化課に対し照会を行なったところ、大屋敷C古墳群、大屋敷A古墳群、大屋敷古窓跡群が所在するとの回答が得られた。この回答は昭和62年（1987年）に浜北市教育委員会により実施された分布調査の成果に基づいている。回答を受けて、静岡県教育委員会文化課と浜松土木事務所の協議により、開発予定地内のうち宮口配水池の所在する谷以西の部分17,500m²に対して遺跡の確認調査および本發掘調査を実施することが決定した。対象となった遺跡は大屋敷C古墳群および大屋敷1号窓であり、平成12年1月から平成15年1月までの延べ4年次23ヶ月間をかけて財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所により発掘調査が実施された。その主たる成果として横穴式石室を埋葬施設とする古墳51基、平安時代中期の灰釉陶器窓跡1基、さらに縄文時代遺跡としての大屋敷遺跡の陥し穴5基が挙げられ、これらの内容は平成16年8月に刊行されたC古墳群報告書および大屋敷1号窓報告書に収められている。

大屋敷C古墳群の発掘調査に引き続き、開発予定地の東半部24,100m²についても大屋敷A古墳群が所在するため、やはり発掘調査を実施することが静岡県教育委員会文化課と浜松土木事務所の協議により決定された。調査は静岡県教育委員会文化課の指導のもと、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が行なう運びとなったが、C古墳群の調査とは異なり、基本的に確認調査の工程を省略し、本調査の表土除去段階で古墳その他の遺構の存在を確認する方法が採られた。そして、大屋敷C古墳群の調査が完了した翌月の平成15年2月から大屋敷A古墳群発掘調査の準備作業に着手した。

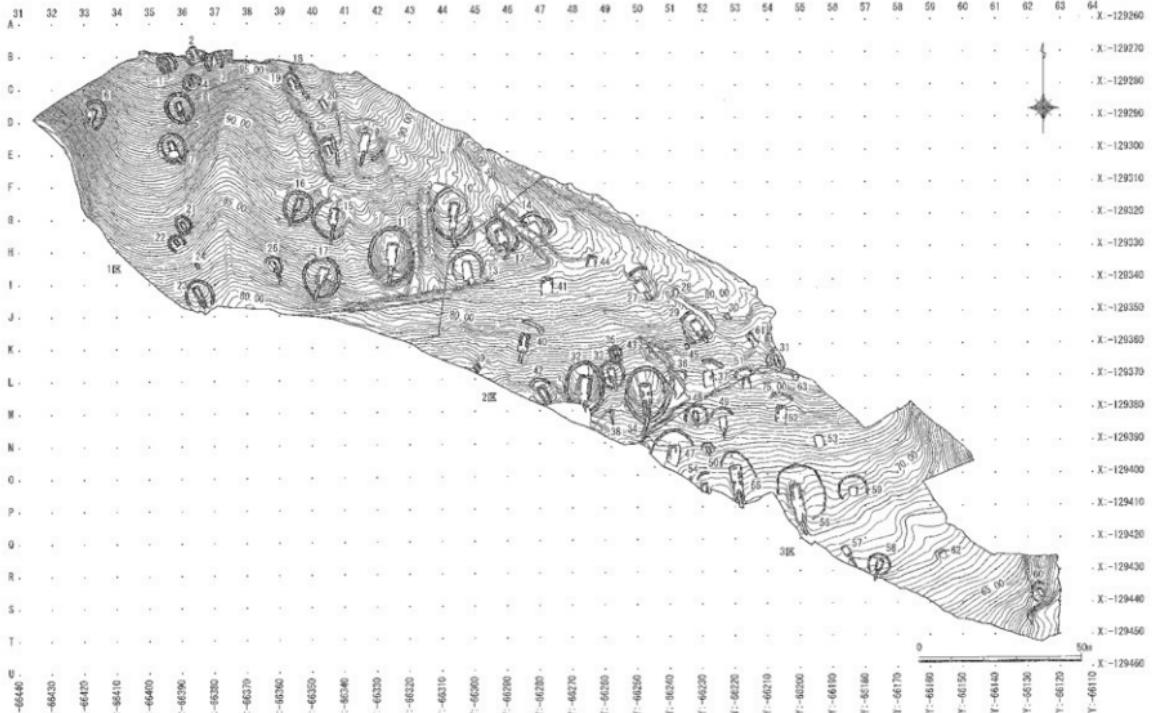
第2節 調査の方法

C古墳群の調査では調査区内に位置する2箇所の深い侵食谷を以て調査区を東西4区に区分したが、A古墳群が立地する丘陵斜面地の現況は深い谷が南北方向に数箇所存在するも、基本的には南東方向に延びる舌状尾根の連続する南側斜面となっている（第1図）。そのため、地形の起伏による調査区分法は採用せず、調査区の西端から発掘に着手して平成15～17年度の各年度ごとの調査終了範囲をそれぞれ西から1区、2区、3区と設定した（第2図）。発掘調査は旧国土座標（日本測地系）に準拠したC古墳群の調査の座標グリッドを継承し、南北方向にA、B、C…、東西方向に31、32、33…と定め、各グリッドは北西コーナーの杭を基準に呼称した（第1・2図）。

調査前の状況はマツやカバなどの自然樹林で覆われており、樹林伐採後、重機による切株抜根を兼ねた表土除去を行なった後、人力で表土の最下部分を掘り下げながら不自然な地形の盛り上がりや石材・

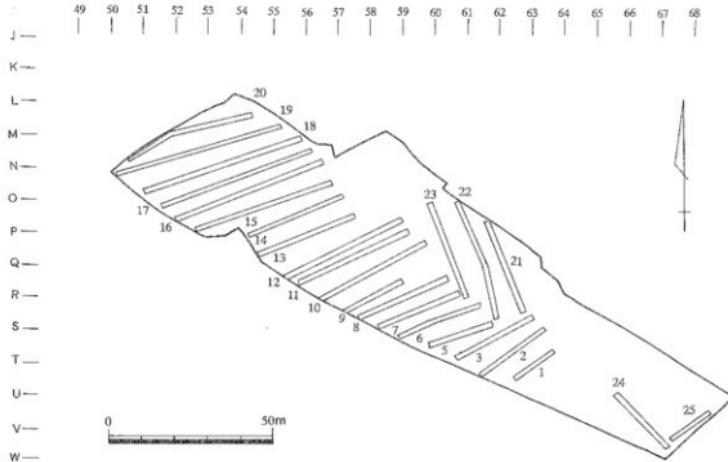


第1図 大屋敷A古墳群調査前地形測量図



遺物の集中を指標に古墳の存在を特定する。なお、3区に限り、本調査に先行して幅約1.5mのトレンチ掘削による確認調査を実施した（第3図）。古墳1基ごとに十文字の土層帯を設定し、墳丘表土の掘削および埋葬施設盗掘坑の土砂を除去した後、周溝および石室を検出す。この時、あらためて石室の主軸ラインを設定し、実測作業の基準とする。主軸ラインをはじめとする実測基準線の設定や遺物の出土位置測量にはトータルステーションを使用した。周溝は土層帯として残す部分を基準にトレンチを設定し、土層を確認しながら掘削し、土層堆積状況が確認された段階で全体を掘り下げる。周溝から出土した遺物は出土状況を写真撮影・実測し、順次取り上げる。石室は検出状況を撮影・実測後、転落石材を含む覆土を除去し、土層図を作成しながら遺物・閉塞石・敷石等の精査を行なう。精査の過程で必要に応じて撮影・実測の記録作業を実施し、石室の床面上の遺物を取り上げ完全洗浄した後、各古墳の完掘状況を写真撮影する。墳丘・周溝全体を含む各古墳全景および規模の大きい石室の完掘状況の撮影にはローリングタワーを最大3段使用した。各古墳の撮影には大型カメラ（4×5）・中型カメラ（6×7）・小型カメラ（35mm）を使用し、写真記録はモノクロネガ・カラーポジ・カラーネガで保存している。また、各区の全古墳の石室が完掘され、調査に区切りが出来た段階でラジコンヘリコプターによる各区全体の空中写真撮影・空中写真測量を実施した。石室の実測図を作成した後、裏込め土層の記録を作成しながら基底石を残して石室を解体する。基底石の状況を記録した後、基底石を除去し墓坑を完掘する。墳丘盛土が残存する場合、盛土除去後に旧地形測量図を作成する。

掘削・精査により生じた排土はベルトコンベアまたは小型のクローラダンプを用いて調査区進入路に近い古墳空白域まで運搬して仮置きし、定期的にダンプトラックで場外搬出した。調査区の南側は住宅地および農地に接しているため、高さ2~3mの土止めを打設して排土等の流落を防いだ箇所もある。また、石室の掘削土は小玉などの微細な遺物を含む可能性があるため、廃棄する前に水洗篩作業により遺物を検出した。石室内の精査に当たり、残存する壁石材に転落の危険がある場合、ロープで背後に打設した支え杭と縛いだり、両側壁に単管とジャッキベースによる切りばりを取り付けることで現状保存および事故防止に努めた。



第3図 大屋敷A古墳群3区確認調査トレンチ配置図

第3節 発掘調査・資料整理の経過

平成14年度（2003年2～3月）

平成15年2月28日に発掘調査の準備工に着手し、同日、大屋敷A古墳群全域の自然林伐採前状況の空中写真撮影を実施した。3月5～6日に進入路を造成し、伐採作業は3月一杯かけて行なわれた。

平成15年度（2003年4月～2004年3月）

平成15年4月2日に現地ブレハブの設営を開始し、同4～7日に伐採完了直後の地形測量および基準点測量を実施した。4月8日に重機による1区の表土除去を開始し、同10日には重機の後を追うように人力による表土除去に着手し、統いて古墳の検出・精査を行なった。重機による表土除去は人力作業の進捗状況に合わせてその後も断続的に実施した。実測作業については、4月17日に検出した各古墳の実測用基準杭の打設を始め、同21日に各古墳の各種実測を開始した。また、1区南辺の土止め施工が5月2日に完成した。雨天時には発掘調査事務所にて写真・図面・遺物の台帳を作成し、須恵器や土師器などの土器については水洗・注記を行ない、可能なものは接合も実施した。さらに、石室掘削土の水洗篩作業も主に雨天時の作業となつた。

石室の精査が或る程度進むと作業の主体は掘削から実測に移行するが、実測要員は決して多くなかつたため、やがて実測作業は遅れ気味となつた。そこで7月17日以降、各古墳実測作業の一部を㈱フジヤマに委託した。

7月24日に2回目の基準点測量、8月4～5日に調査終了部分の地形測量を実施し、1区の調査工程は後半に入った。古墳は検出順に仮番号として仮1号墳、仮2号墳、仮3号墳…と呼称していたが、10



1 重機による進入路造成



2 重機による表土除去



3 人力による表土除去・古墳検出作業



4 古墳発掘作業

月10日には仮10号墳とともに2区の領域に立地する仮13号墳の調査に着手し、同14日には同じく2区の仮12号墳の検出・精査を開始した。翌15日に仮11号墳の調査を開始し、1・2区の境界付近で古墳の調査工程がやや錯綜した状況を呈することとなった。1区の調査が終盤に至った11月29日で現地説明会を実施し、参加者は141名を数えた。

平成16年1月28～29日に1区の空中写真撮影および空中写真測量を実施し、同3月18日には仮10・11号墳を除く1区の古墳の調査が完了した。一方、2月5～6日に新たなな進入路を重機により造成するなど、2区の調査の準備も進めた。

平成16年度（2004年4月～2005年3月）

平成16年4月5日に2区の重機による表土除去および土止め施工を開始し、同日、2区の基準点測量も実施した。約1ヶ月間、重機と人力による表土除去を継続した後、5月6日に1区の仮10・11号墳、翌7日に2区の仮12・13号墳の精査を再開した。当年度で初めて精査に着手したのは仮14号墳で、5月12日のことであった。

9月7日に2回目の2区グリッド杭打設を実施し、2区の発掘調査は折り返し点に至ったが、調査内容以外の諸問題にも対応しなければならなくなつた。この年度は特に夏の暑気が烈しく、肉食性の蜂をはじめとする害虫が調査区内外で大量発生したため、10月4日、浜北市役所に駆除を依頼した。また、9～10月は県内に大型台風が幾度も襲来し、調査区の斜面を流下する大量の雨水の処理をめぐって周辺にお住まいの方々からたびたび苦情を頂いた。そこで10月12日に台風22号に備えて調査区の集水枡を清掃・大型化した。

曲がりなりにも諸問題を克服し、12月4日には2区の現地説明会を開催することができ、参加者は66名を数えた。12月15～16日に2区の空中写真撮影および空中写真測量を実施し、2区の各古墳は石室を解体しながらの調査工程に入った。

平成17年2月2～3日に3区の調査前地形測量を実施し、翌4日に重機による3区の表土除去を開始した。2月7日には3区の人力による表土除去・古墳検出を開始し、年度末の3月29日まで継



5 ベルトコンベア・クローラーダンプによる堆土運搬



6 石室実測作業



7 石室覆土ふるい作業



8 古墳撮影前清掃

統した。一方、1区東端の仮10号墳が3月9日に、同じく仮11号墳が3月10日に調査を終了した。1区の調査はようやく完了したが、2区の主要な古墳の調査は次年度繰り越しとなった。

平成17年度（2005年4月～2006年3月）

平成17年5月16～18日、3区にグリッド杭を打設し、3区の古墳調査が本格化した。西から進めてきた調査区が東に遠く移動したため、6月30日、3区北西部付近に現地プレハブの新設を開始した。7月13日に仮42号墳の、8月8日に仮32号墳の調査が終了し、2区の調査は完了した。

8月4日、浜北市教育委員会と現地協議を行ない、大屋敷A古墳群の各古墳の埋蔵文化財登録上の正式番号を検討した。その結果、発掘調査の過程で付した仮番号から「仮」の字を外し、序数は変更せずに各古墳の名称とすることが決定された。例えば「仮4号墳」は「大屋敷A古墳群4号墳」となり、以後、本書では「A4号墳」と略称する。ただし、A46号墳は今回調査区の南方すでに調査・登録されており、この時点で3区にて検出された古墳が仮60号墳に達していたため、2区の仮46号墳は例外的にA61号墳と命名された。従って、今回の調査では「A46号墳」は欠番扱いとなっている。

10月7日、浜北市立龜玉小学校が校外活動として現地見学に訪れた。同19日には当研究所評議員の向坂鋼二先生に現地調査指導を受け、11月30日には静岡大学名誉教授の伊藤通玄先生に石室石材・出土石製品の鑑定を受けた。10月29日に3区の現地説明会を開催し、雨天にもかかわらず参加者は188名を数えた。平成18年2月14日、3区北辺の中部電力鉄塔離隔地帯に接する未調査区域の重機による表土除去を実施し、翌15日、今回調査最後の古墳となるA63号墳を検出した。3月1日に現地の撤去作業を開始するとともに春季の長雨に備えて排水路・集水溝を補強した。3月10日に現地プレハブを、同24日には調査区南東麓の発掘調査事務所を撤収し、大屋敷A古墳群の現地調査は完了した。



9 古墳写真撮影



10 石室石材抜き取り作業



11 ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影



12 現地説明会（遺構解説）

平成18年度（2006年7月～12月）

平成18年7月1日より大屋敷A古墳群の遺構図面整理、遺構トレース版下作成、出土土器の接合・復原、出土遺物の実測を静岡市駿河区谷田所在の当研究所本部にて実施した。膨大な枚数の遺構実測原図を修正したものをスキャニング素図としてデジタルトレースする方法を探り、各種全体図および古墳遺構図のほとんどをデジタルトレース業務として外部委託した。ただし、各古墳周溝遺物出土状況図と古墳以外の遺構図に限って、手書き墨入れの言わばアナログトレースにより作成した。遺物図については、遺物の実測が終了した段階でトレース版下を作成し、トレースを実施した。さらに遺物実測図の注記・所見に基づき、コンピュータへのデータ入力により遺物観察表を作成した。また、当研究所写真室にて遺物の単体・集合写真撮影を行なった。

大屋敷A古墳群出土の脆弱遺物として金属製品が存在する。平成16年度より断続的にクリーニングなどの基礎的処理を行なってきたが、これらの劣化遅延措置を含む保存処理作業および現状記録と不可視部分実測のためのX線写真撮影を当研究所保存処理室にて実施した。

以上の作業を12月末日に終了したが、当年度の資料整理期間内に果たせなかつた作業も少なくはなく、次年度に引き継がれるに至つた。

平成19年度（2007年10月～2008年1月）

平成17年7月1日、静岡県西部の12市町村が合併し、大屋敷古墳群の所在する浜北市も新しい浜松市に編入された。さらに平成19年4月1日、浜松市は政令指定都市となって区制が導入され、旧浜北市域は浜松市浜北区と定められた。浜松市の政令指定都市昇格に伴い、それまで静岡県が管轄していた浜松市内の国・県道路関連事業の多くが浜松市に移管された。国道362号交通連携事業（2B）も同様の経緯で平成19年度より浜松市に移管され、これに付随する大屋敷A古墳群の埋蔵文化財調査業務も静岡県浜松土木事務所に代わり、あらためて浜松市から当研究所に委託される運びとなつた。



13 現地説明会（遺物展示解説）



14 焼玉小学校による現地見学



15 土器接合作業



16 土器復原作業

平成18年度の資料整理作業を引き継ぎ、平成19年10月1日から平成20年1月31日まで実施した。前年度に作成したデジタルデータを含むトレース図を加筆・修正し、必要に応じて土器と金属製品の再実測・再トレースも行なった。また、現地で撮影した遺構主体の写真と前年度撮影の遺物写真を写真図版として版組（割り付け）した。これらの作業に併行して報告書本文を執筆し、挿図・挿表・写真図版と併せて報告書の編集を行なった。

報告書印刷業務入札の結果、㈱みどり美術印刷に印刷を委託した。平成20年1月より報告書原稿を順次入稿・校正し、出版に至った。また、報告書作成作業と併行して記録類および遺物の収納作業を実施し、静岡県教育委員会文化課へこれらの調査資料を引き渡し、平成20年3月末日、6年次にわたる大屋敷A古墳群の全調査を終了した。



17 土器実測作業



18 遺物トレース作業



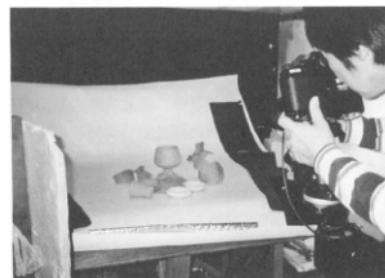
19 金属製品X線写真撮影



20 金属製品保存処理作業



21 データ入力(遺物観察表作成)



22 遺物写真撮影

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

大屋敷A古墳群の所在する浜松市浜北区は静岡県西部に位置し、南北に広大な浜松市の中央部を占めているが、平成17年7月1日の浜松市への編入合併以前は浜北市であった。浜北区の地形は北部の丘陵・山地、西部の三方原台地、東部の河岸段丘、中央～南部の扇状地状平野の4つに区分され、これらの形成には区の東辺を南流する天竜川が大きな影響を及ぼしている。浜北区北部の丘陵地帯は南アルプスの赤石山脈から南方に派生する弓張山脈の先端に相当し、古天竜川が形成した扇状地状平野に向かって熊手状の小尾根が多数伸びており、浜北北麓丘陵と呼ばれることがある。現在、この丘陵地帯は天竜奥三河国定公園の一部であり、さらにその一部が静岡県立森林公园に指定されている。浜北区の古墳は浜北北麓丘陵と三方原台地縁辺部に集中しており、前者は浜北北麓古墳群、後者は特に内野地域に多く分布することから内野古墳群と総称される。大屋敷古墳群は浜北北麓古墳群に属し、A・B・Cの3大支群に区分されているが、このうち興覚寺後古墳を含む大屋敷B古墳群は浜北北麓丘陵の南側に広がる三方原段丘面の平坦地に立地しており、丘陵斜面地に展開する大屋敷A・C古墳群こそ典型的な浜北北麓古墳群であると言えよう。

第2節 歴史的環境

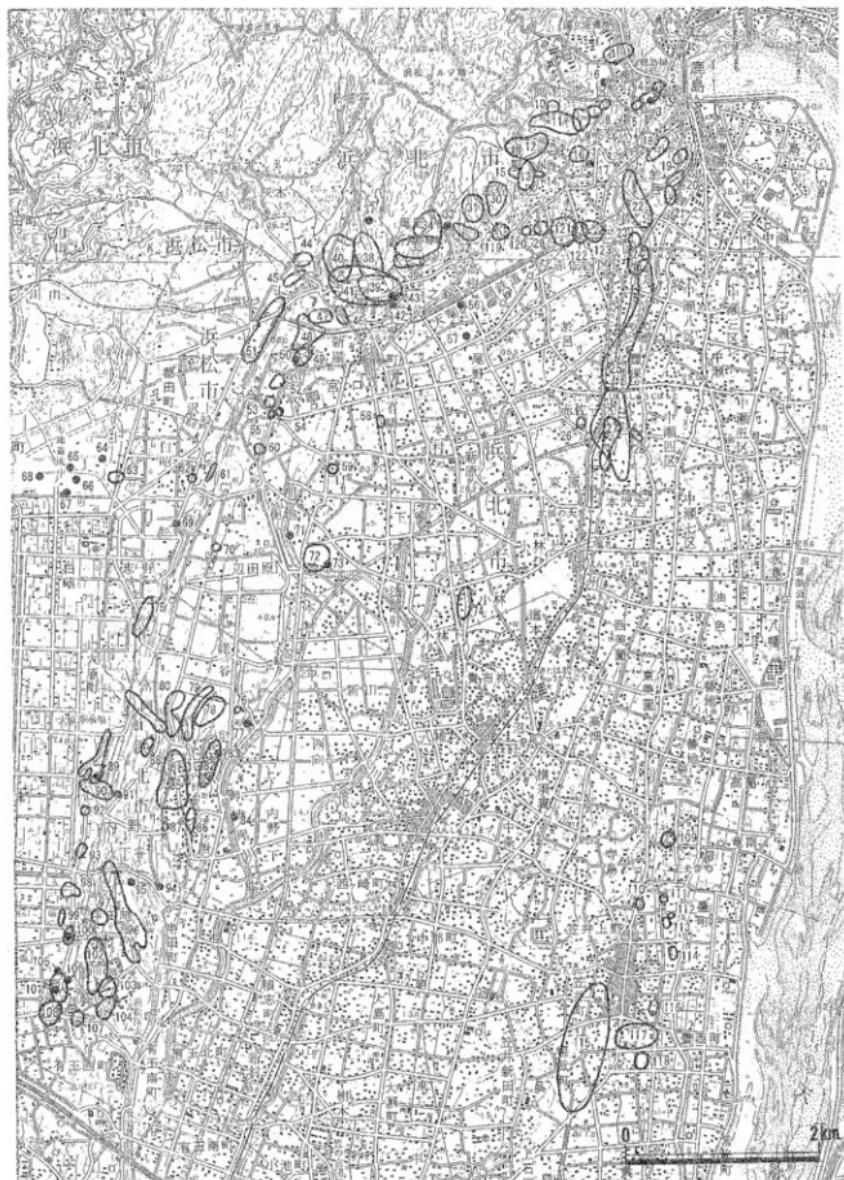
浜北区域における旧石器時代遺跡は、天竜川を挟んで対岸の磐田原台地上に較べれば少ないが、特筆すべき遺跡としてヒヨウやトラなどの動物化石骨とともに「浜北人」と命名された2体分の人骨が出土した根堅遺跡が挙げられる。これらの人骨は現在本州唯一の確実な旧石器時代人骨となっている。

縄文時代草創期では浜北北麓丘陵沿いの中通遺跡で200基以上の炉穴と30基以上の集石炉が検出され、また、大屋敷遺跡では同早期前半の粗縄文土器が採集されており、縄文時代の早い段階から人類の営みが活発化する。縄文時代前期の遺跡は確認されていないが、中期になると三方原台地上と浜北北麓丘陵上に多くの遺跡が分布し、同後・晚期にも大屋敷遺跡や向山II遺跡などは継続している。

弥生時代の遺跡は縄文時代よりも少ないが、芝本遺跡で前期の水神平式土器が出土し、中期には芝本遺跡や東原遺跡など低位段丘上に集落を営む傾向がある。これら2遺跡は後期に大規模集落へ発展する。

本章第1節で述べた浜北区の2大古墳群のうち先に古墳が出現するのは内野古墳群であり、三角縁神獣鏡が出土した前方後円墳の赤門上古墳が前期後半に築造される。単独立地の中規模古墳が造営されるのは古墳時代中期前半までの特徴のようであり、同中期後半には群集墳と称される墳丘直径10～20m程度の小規模円墳から成る古墳群が盛行し、古墳の基數は急増する。浜北北麓古墳群では雲岩寺B古墳群がこれに相当する。古墳時代後期前半には前方後円墳と大型の右片袖式横穴式石室を併せ持つ興覚寺後古墳が築造され、当古墳以降、浜北北麓古墳群の造営が活況を呈し、古墳時代終末期の7世紀代に最盛期を迎える。当古墳群中には金銅製鰐付冠帽が出土した涼ノ御所古墳など、豪華な副葬品を有する古墳もあるが、これに対し、内野古墳群では富岡古墳群などが造営されるものの、古墳基數は少ない。

多くの古墳の存在にもかかわらず、浜北区域の古墳時代集落の様相は依然不明と言っても過言ではない。僅かに、大門西遺跡などで7世紀の堅穴住居跡数軒が検出されたに過ぎない。律令期に至ると、現在の浜北区域は龜玉郡・磐田郡・長田郡の3郡に編入されたらしいが、当時の官衙や集落の遺跡調査はあまり進んでいない。一方、8世紀前半においても当地域の多くの古墳群で築造・追葬が行なわれた。



第4図 周辺遺跡分布図

第1表 局辺遺跡一覧表

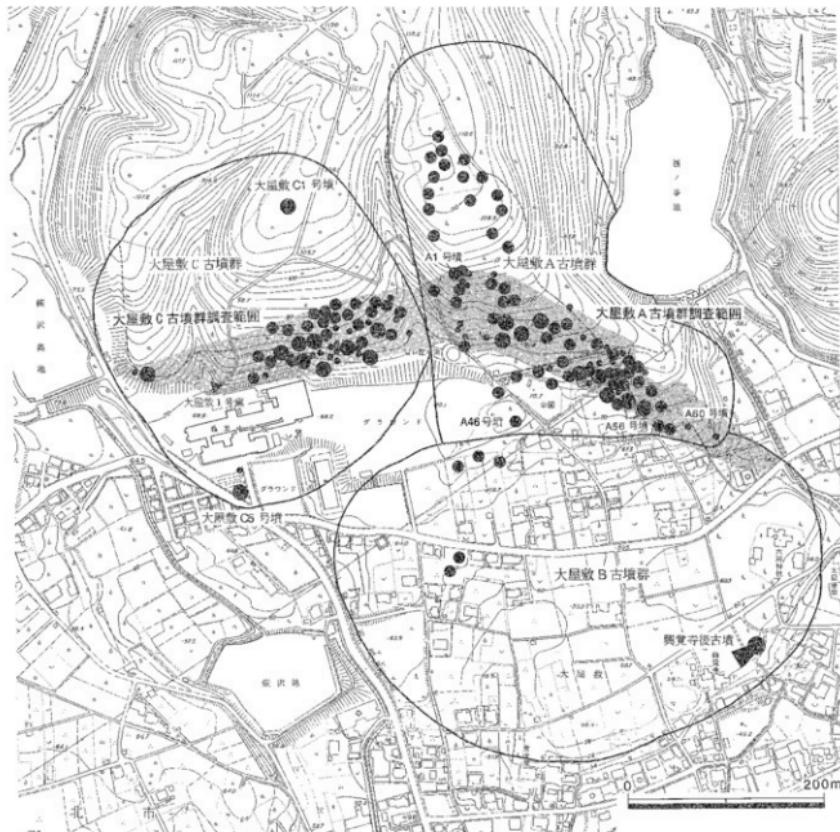
No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	百ヶ瀬遺跡	縄文	63	浜上B古墳群	古墳
2	内野Ⅱ遺跡	縄文・古墳	64	浜上Ⅲ遺跡	縄文
3	向野古墳群(合涼ノ御所古墳)	古墳	65	浜上Ⅳ遺跡	弥生
4	向野古墳群	古墳	66	白堜Ⅱ遺跡	縄文～弥生・中世
5	向野Ⅰ遺跡	縄文	67	白堜Ⅰ遺跡	弥生
6	北根塙古墳	古墳	68	前原Ⅳ遺跡	旧石器・縄文
7	神氣山古道跡	縄文	69	志野遺跡	縄文
8	勝栗山A古墳群	古墳	70	辻田原古墳	古墳
9	鶴巣山古墳群	中世・近世	71	櫛池遺跡	旧石器・縄文(中)
10	勝栗山A遺跡	縄文	72	馬池遺跡	弥生・古墳・古代
11	勝栗山B古墳群	古墳	73	浦水遺跡	弥生～平安
12	泉A古墳群	古墳	74	新原遺跡	古墳
13	泉B古墳群	古墳	75	桃ヶ谷古墳群	古墳(後)・古代
14	根堅遺跡	旧石器	76	巳ノ山古墳	古墳
15	泉壇堅母	中世	77	山林遺跡	弥生(後)・鎌倉
16	北谷遺跡	縄文・中世	78	辻田平古墳群	古墳(中・後)
17	中坊遺跡	中世	79	二木ヶ谷石鏡塙古墳群	古墳(後)
18	向山A古墳群	古墳	80	二木ヶ谷古墳群	古墳(後)
19	向山I遺跡	古墳・奈良	81	二木ヶ谷石橋塙古墳群	古墳(後)
20	向山Ⅱ遺跡	縄文	82	内野上古墳群(合赤門上古墳)	古墳(前・中)
21	向山B古墳群	古墳	83	内野御陣屋跡	近世
22	御馬ヶ池古墳群	古墳	84	内野小西遺跡	中世
23	旧赤井中学校内遺跡	縄文・古墳・近世	85	椎原平山古墳群	古墳(中・後)
24	芝本古墳群	古墳	86	神明社上古墳群	古墳(中・後)
25	芝本遺跡	縄文・古墳	87	藍音ツブラ古墳	古墳(中)
26	東原遺跡	弥生・古墳	88	太田坊古墳群	古墳(後)
27	七ツ塚遺跡	不明	89	玄阿古墳群・高岡大谷遺跡	縄文(中)・古墳(後)
28	麻助島遺跡	江戸	90	八丁谷遺跡	古墳
29	中尾遺跡	中世	91	柴地遺跡	縄文(中)
30	雲岩寺A古墳群	古墳	92	佐左右衛門山古墳群	古墳
31	雲岩寺B古墳群(人形山)古墳群	古墳	93	内野西古墳群	古墳(後)
32	雲岩寺C古墳群	古墳	94	船岡山遺跡	弥生
33	東ノ谷丘墓	古代	95	梁場石遺跡	縄文(中)・弥生・中世
34	高根山A古墳群・高根山墳墓群	古墳(後)	96	下畑遺跡群・下畑B-1古墳群	旧石器～近世
35	高根山B古墳群	古墳	97	矢海道遺跡・下畑A古墳群	旧石器～近世
36	高根山C古墳群	古墳	98	半田山G古墳群	古墳(後)
37	西ノ谷古墓	中世	99	半田山田古墳群	古墳
38	大羅敷A古墳群	古墳(後)	100	半田山A古墳群・半田山面遺跡	縄文(中)・古墳(後)
39	大羅敷B古墳群	古墳(後)	101	半田山B古墳群・半田西ノ谷遺跡	縄文・古墳(後)
40	大羅敷C古墳群・大羅敷1号窓	古墳(後)・平安	102	半田山C古墳群・半田山I遺跡	弥生(中)・古墳(後)
41	大羅敷遺跡	縄文・弥生・古代	103	半田山D古墳群	古墳(後)
42	大羅敷塙古墳群	中世	104	半田山E古墳群・半田山F古墳群	古墳(後)
43	興安寺後古塙	古墳(後)	105	初生遺跡	縄文
44	北新堀A古墳群	古墳(後)	106	有玉古窪	古墳(後)
45	北新堀B古墳群	古墳	107	足尾西A古墳群	弥生(後)・古墳(後)
46	新屋古墳群	古墳(後)	108	瓦屋西B古墳群・瓦屋西1遺跡	縄文(早後)・弥生・古墳(後)
47	新屋遺跡	縄文・中世	109	上石原遺跡	古墳～中世
48	吉名古窪古墳群	古代	110	岡浦遺跡	古墳～中世
49	深榮I遺跡群	古代	111	八幡西遺跡	中世
50	新池東遺跡	古墳	112	細ノ森遺跡	古墳(後)～中世
51	諫栄古窪古墳群	古代	113	八幡南遺跡	古墳～中世
52	諫栄II遺跡	古代	114	服飾神社境内遺跡	古代
53	十数丘遺跡	古代	115	相模御遺跡群	古墳～中世
54	十数I遺跡	弥生	116	諫栄の遺跡	古墳～中世
55	土取遺跡	古代	117	狩口遺跡	古墳～中世
56	猿屋遺跡	古代・中世・近世	118	茶ノ木田遺跡	古代
57	長者塙	中世	119	中通遺跡	縄文～中世
58	野口前遺跡	古代	120	寺泡土遺跡	中世
59	野口遺跡	縄文	121	大門西跡	古代～中世
60	天神山遺跡	古代	122	上野ノ塙跡	中世
61	櫻池古墳群	古墳(後)	123	籠場瓦窯遺跡	西周～奈良(初)
62	志野古墳群	古墳			

第3章 大屋敷A古墳群の調査

第1節 大屋敷A古墳群の基本層序と概要

1 大屋敷古墳群の分布状況

浜北北麓古墳群は天童川平野の扇頂と称し得る浜松市天童区鹿島から浜松市浜北区宮口までの東西約5kmの範囲に造営された古墳群である。大屋敷古墳群は浜北北麓古墳群では西寄りに位置し、西ノ谷池を挟んで東側の高根山古墳群と対峙している。大屋敷古墳群は浜松市浜北区宮口大屋敷地区に所在する大屋敷A・B・C古墳群の総称であり、浜松市立龜玉中学校の南東側平坦地に立地する大屋敷B古墳群、B古墳群の北側に北北西から南東方向へ伸びる丘陵上に展開する大屋敷A古墳群、谷（C古墳群の調査



第5図 大屋敷古墳群分布図

第2表 大屋敷A古墳群古墳観察表

※数値の単位は全てmである。また、「+」は「以上」、「-」は「以下」、「±」は「前後」を示す。

古墳名	墳丘			周溝		石室						
	南北×東西規模	盛土残存高	埴丘施設	残存率	最大幅	主軸方位	形態	玄室プラン	全長	玄室長	玄室最大幅	奥壁幅
A1	5.4×3.9			11/12	1.10	N-30°36'-W	無袖式	胸張形	2.18	2.18	0.72	0.50
A2	5.0+×5.6			5/12	0.80	N-22°30'-W	單室系 擬似両袖式	胸張形	3.80	2.26	1.01	0.86
A3	5.5+×4.5		埴丘内配石?	3/4	0.95	N-3°12'-W	無袖式	奥窄まり形	2.30	2.30	0.84	0.53
A4	4.0×4.4			3/4	0.95	N-21°33'-W	横穴式石室	奥窄まり形	1.70	1.70	0.60	0.40
A5	8.0×6.6			完周	1.30	N-23°42'-W	单室系 擬似両袖式	胸張形	3.46	2.16	1.02	0.57
A6	8.0×5.2			7/12	1.30	N-18°9'-E	单室系 擬似両袖式	長台形	4.00	2.70	1.04	1.04
A7	8.2×6.5			完周	1.35	N-21°18'-W	单室系 擬似両袖式	長方形	2.90+	2.41	1.22	1.02
A8						N-7°15'-W	無袖式	奥窄まり形	1.28	1.28	0.42	0.35
A9	9.0+×10.0+	0.5	区画帯	1/8	1.10	N-13°21'-E	右片袖式?					
A10	14.3×11.0	0.85	埴丘内配石	7/12	1.40	N-12°3'-E	右片袖式	胸張形	5.74	3.50	1.86	1.49
A11	15.4×12.5	0.7	区画帯	3/4	1.25	N-5°51'-E	右片袖式	長方形?				1.62+
A15	11.2×10.0+	0.3		5/8	0.70	N-8°33'-E	右片袖式	長方形	5.39	3.25+	1.48	1.39
A16	8.2×7.4			完周	1.10	N-23°30'-E	单室系 擬似両袖式	胸張形	3.52+	2.43	1.06	0.86
A17	11.2×10.1	0.1		完周	1.30	N-19°20'-E	右片袖式	胸張形	5.30	3.50	1.47	1.20+
A18												
A19	5.5+×4.0+			1/8	0.75	N-36°25'-W	单室系 擬似両袖式	胸張形	3.80	2.29	1.15	0.83
A20						N-33°29'-W	無袖式	奥窄まり形	2.78	2.78	1.14	0.74
A21	4.8×3.5			完周	0.80	N-28°45'-W	無袖式	胸張形	2.09	2.09	0.80	0.45
A22	3.5+×3.9			3/4	0.80	N-37°21'-W	横穴式 横穴式石室	胸張形	1.82	1.82	0.64	0.28
A23	8.4+×7.2			3/4	1.05	N-28°12'-W	单室系 擬似両袖式	胸張形	5.37	2.40	1.06	0.58
A24						N-28°42'-W	横穴式小石室	長台形	1.45	1.45	0.52	0.48
A25	6.5+×			1/6	1.20	N-24°9'-W	無袖式	奥窄まり形	2.75	2.75	1.05	0.58
A26	5.1×4.6+			7/12	0.80	N-32°12'-W	单室系 擬似両袖式	胸張形	2.90+	1.86	1.00	0.63
A12	9.7×8.4+			5/8	0.90	N-22°3'-W		奥窄まり形	2.31+	2.31+	1.45	1.19
A13	8.8+×8.7	0.22		3/4	1.55	N-6°25'-W						
A14	8.5+×7.5+			1/2	1.25	N-31°5'-W						
A27	8.0+×			1/6	1.00	N-34°28'-W					1.10+	1.00
A28						N-3°0'-W						
A29	9.3+×7.5+	6.22		1/2	1.15	N-33°35'-W	单室系 擬似両袖式?		5.80±	3.20±		
A30						N-31°2'-W	無袖式	胸張形	2.02	2.02	0.79	0.56
A31	5.1+×3.7+			1/3	1.55	N-19°0'-W	单室系 擬似両袖式	奥窄まり形	3.08	2.00	0.76	0.59

石室							墓坑			墓道		坐通・壁面初期 (遠江國年)	
玄門側幅	鏡道長	鏡道最大幅	鏡門側幅	官底具	前庭敷地幅	鏡芯石残存	村原施設	プラン	今長	最大幅	全長	最大幅	
0.49					2段			長方形	2.60	1.99	2.40+	1.12	IV期前半～末葉
0.92	1.54	0.94			2段	奥燃石支石	隅丸長方形	4.17+	2.30				IV期後半
0.81							隅丸長方形	3.92	2.01				IV期前半～ V期初頭
前壁幅 0.48						開仕切石	此方形	2.49	1.59				IV期後半～ 末葉？
0.91	1.30	1.09	0.93			鏡道に鏡道 の延長石列	長方形	4.12	2.31	3.50	1.02		IV期後半
0.94	1.30	0.93	0.78		1段	前庭列石	長台形	5.16	2.08				IV期後半
1.05	0.52+	1.03					長方形	5.28	2.43	3.07	1.42		IV期後半
0.40							長方形	1.46	0.64				IV期末葉？
							右片袖形	6.22	2.92	4.34	0.90		III期後葉
1.60	2.24	1.01	0.92		3段		右片袖形	8.75	3.22	5.52	1.49		II期中葉～末葉
							右片袖形	8.03	3.34	5.17	1.42		III期後葉
1.40	2.14-				1段		右片袖形	5.78	2.80	5.78	1.04		IV期前半
0.92	1.09+	0.88			2段		長方形	4.20	2.26	4.92	0.94		III期後葉～IV期 後半～V期初頭
1.42	1.80	1.09			4段		隅丸長方形	6.66	3.11	4.25	1.23		II期末葉～ V期初頭～前半
													IV期後半～末葉
0.87	1.61						長方形	4.27	1.93				IV期前半～末葉 ～V期初頭
1.12							隅丸長方形	3.63	1.87				IV期後半
0.61					1段		脚抵長方形	2.52	1.39				IV期前半以降？
前壁幅 0.44						開仕切石	長台形	2.39	1.25				IV期前半以降？
0.86	2.97	0.87	0.78				長台形	6.42	2.21	0.95+	1.04		II期中葉～IV期 末葉～V期初頭
前壁幅 0.38							隅丸長台形	2.12	1.08				IV期前半？
1.03							長方形	3.87	2.04				IV期後半～後半
0.64+							隅丸長方形	3.56	2.00	3.60	0.91		IV期後葉～ V期前半
							短台形	5.40	3.40	5.10	1.06		IV期後半～ V期前半
							隅丸長台形	6.18	2.90	3.65+			III期後葉～ IV期後半
							長方形	4.57	3.46+	1.66+			III期中葉～ IV期後半？
					3段		長方形	5.02	3.49	2.58	1.22		IV期前半
							隅丸長方形	2.15	1.50				V期？
2.60±	1.06						羽子板形	7.22	2.87	1.02	1.05		IV期大葉～ V期初頭
							長方形	2.38	1.63				V期前半
0.66	1.08	0.73	0.73		4段		長台形	3.86	1.70	0.37+			IV期後半～末葉

古墳名	塚丘			周溝		石室						
	南北×東西	底土残存高	培丘断続	残存半	最大幅	主軸方位	形態	玄室プラン	全長	玄室長	玄室最大幅	支脛幅
A32	14.0×9.9	0.9	墓坑造段	5/6	1.40	N-4° 27'-E	右片袖式	脚張形	7.50	4.84	2.14	1.73
A33	7.7×5.8	0.34		完溝	1.15	N-12° 58'-W	単室式 假想同袖式?					
A34	15.0×11.2	0.75		完溝	2.80	N-5° 48'-W	複室系 假想同袖式?		7.00±	2.30±		
A35	3.5×3.1			7/8	0.55	N-20° 3'-W	無袖式	奥窄まり形	1.72	1.72	0.64	0.42
A36						N-10° 36'-W	無袖式	脚張形	2.17	2.17		0.60+
A37	7.5+×	0.4		1/6	1.30	N-4° 20'-W			2.80±			1.00±
A38						N-1° 27'-W	整穴系 横穴式石室	奥窄まり形	1.70	1.70	0.50	0.32
A39						N-33° 28'-W	無施式	長方形	1.96+	1.96+	0.69	0.56
A40	9.0+×			1/6	1.70	N-10° 55'-E			3.75+			1.20
A41						N-5° 0'-E			3.30+			
A42	8.3+×	0.11		1/4	1.15	N-30° 0'-W	单室式 假想同袖式	脚張形	5.18	2.77	1.33	0.70
A43						N-24° 3'-W			1.86+			
A44						N-7° 27'-E			1.86+			
A45						N-15° 6'-W	無袖式?	長方形	0.91+		0.60	0.53
A46						N-34° 36'-W	单室系 假想同袖式	脚張形	3.22+	2.17	1.01	0.80±
A47	15.0+×13.0+	0.9		5/12	0.85	N-0° 0'-W		脚張形	5.45+		1.48	1.01
A48	5.7+×6.3	0.16		5/8	0.70	N-8° 30'-W	無袖式	奥窄まり形	2.70	2.70	0.92	0.64
A49	6.8+×			1/3	0.65	N-7° 35'-W			3.80±			0.70+
A50	3.2+×3.2+	0.1		1/2	0.40	N-17° 25'-W	無袖式	奥窄まり形	1.24	1.24	0.66	0.46
A51	6.3+×			1/4	0.75	N-11° 2'-W	無袖式?	脚張形	2.80+	2.80+	1.22	0.95
A52	8.8+×			1/4	0.80	N-0° 0'-W		長方形?	3.38+			1.26
A53						N-13° 52'-W			3.67+			
A54	5.7+×5.8+			1/4	0.85	N-0° 0'-W	假想同袖式	脚張形	2.18+	1.97	1.10	0.68
A55	15.6+×11.5+			3/8	0.50	N-11° 33'-W	複室系 横置同袖式	脚張形	9.60	3.87		1.28+
A56	17.2+×14.0			7/10	0.50	N-9° 0'-W	右片袖式?	奥窄まり形	11.20	4.15+	1.54	1.32
A57						N-28° 15'-W			2.90±			0.62+
A58	5.7+×6.3			7/8	0.58	N-18° 36'-E	無袖式	脚張形	3.03	3.03	1.17	0.65
A59	6.3+×8.1			5/8	0.65	N-2° 10'-W			2.04+			1.49±
A60	4.4+×4.5+			1/2	0.68	N-34° 23'-W	無袖式	脚張形	2.22	2.22	1.04	0.64
A62						N-10° 50'-W			1.30+			0.69+
A63						N-2° 26'-E			0.85+			

石室								墓室		墓道		箇別・埋葬時期 (遼江編年)	
玄門側幅	辦道長	辦道最大幅	後門側幅	前底長	前底最大幅	頂底石残存	付属施設	プラン	全長	長大幅	全長	最大幅	
1.85	2.66	1.40	1.20					右片袖形	9.80	4.42	1.60+		Ⅳ期中葉～ Ⅳ期前半
								隅丸長方形	4.51	2.24	2.94	0.94	Ⅳ期末葉～ V期初葉
1.45+	2.50±		1.40±	2.20±	1.06		立柱石支石	羽子板形	10.24	3.59	6.46	1.22	Ⅳ期末葉～ V期前半
0.53								隅丸長方形	2.35	1.52	2.57	0.76	Ⅳ期末葉以降
								長方形	2.97	2.47+			V期初葉
							基底石支石 人口CSX1	隅丸長方形	4.93	3.25			Ⅳ期後半～末葉
最深幅 0.37								隅丸長方形	2.45	1.58	2.39	0.45	V期前半
								隅丸長方形	2.77+	1.98			Ⅳ期末葉
							床込め壁	長方形	5.96	3.04	3.54	1.17	Ⅳ期中葉～ Ⅳ期前半
							基底石支石	長方形	5.40	3.49			Ⅳ期末葉～ Ⅳ期後半
0.96	2.41	0.85	0.80			6段	基底石支石	隅丸長台形	6.60	2.82			Ⅳ期後半～末葉
							床3面		2.03+	1.18+			Ⅳ期末葉
							基底石支石	長方形？	3.59+	2.90			Ⅳ期後葉
							高底石支石 床2面	隅丸長台形	1.66	1.25			Ⅳ期初頭以降？
0.80	1.05+	0.80				3段		長方形	4.76	2.04			Ⅳ期後半～末葉
								羽子板形	6.58+	3.86			Ⅳ期末葉～ Ⅳ期前半
0.82						4段		隅丸長方形	3.63	1.91	1.70	0.75	Ⅳ期前半
						1段	床込め壁	長方形	4.47	2.17	2.60	0.76	Ⅳ期後半～末葉
								隅丸長方形	2.18	1.38	0.97	0.33	Ⅳ期後半以降？
								隅丸長方形	3.56+	2.43			Ⅳ期後半
							基底石支石	隅丸長方形	5.25	3.26			Ⅳ期前半
							基底石支石 ？	長方形？	4.15+	2.65			Ⅳ期後半～ Ⅳ期初葉
1.02	0.21+	0.61					崩落石材？	長方形？	2.83+	2.13			Ⅳ期初期
1.75±	3.88	1.54	1.16	1.85	1.40	4段	基底石支石	右片袖形	11.60	3.62	2.05+	1.07	Ⅳ期後葉～ Ⅳ期後半
7.05-		1.21						右片袖形	12.62	3.85	3.69	0.83	Ⅳ期中葉～ Ⅳ期後葉
0.88								隅丸長方形	3.63	1.86	4.28	0.90	Ⅳ期中葉～ Ⅳ期後葉
							基底石支石 SX03	長台形	2.90	2.50			Ⅳ期前半～末葉
0.90							床2面	隅丸長方形	3.02	2.04	0.66+	0.42	Ⅳ期後葉～ Ⅳ期後半
								隅丸長方形	2.35+	1.94			Ⅳ期後葉～ Ⅳ期初葉
									1.42+	2.07			Ⅳ期後半以降？

で謂う4区)を挟んでA古墳群西側かつ龜玉中学校北側の緩斜面に造営された大屋敷C古墳群に区分されている(第5図)。

2 大屋敷古墳群中の主要古墳・古墳群の概要

(1) 興覚寺後古墳

別名は六所神社内古墳であるが、現在は興覚寺の裏山に所在するため興覚寺後古墳と呼ばれており、大屋敷B古墳群の南東辺に位置する。東北東-西南西方向の主軸を有する全長35mの前方後円墳であり、後円部には南南東に向けて開口する全長8.15m、玄室長5.6m、玄室幅2.5mを測る右片袖式横穴式石室が施設されている。墳丘・石室ともに保存状態は良好で、玄室高は奥壁で2.4m、羨道高は1.8mを測り、持ち送り手法などの石室構築技術を明瞭に観察できる。石室床面は上下2面確認されており、遠江編年Ⅲ期前葉に築造され、同Ⅲ期中葉に追葬が行なわれたと考えられる。石室からの出土遺物には金銅装馬具、銀象嵌鍔付大刀(大谷2003)、鉄鎌、刀子、碧玉製管玉、ガラス製丸玉、須恵器がある。

(2) 大屋敷C1号墳

現況の大屋敷C古墳群中最北端の古墳で、丘陵尾根上に立地する。分布調査で古墳の中央部に石材が確認されており、埋葬施設は横穴式石室と推定されているが、未調査の古墳である。

(3) 大屋敷C5号墳

龜玉中学校の校門付近に保存されている円墳で、龜玉中学校内古墳なる別称がある。墳丘は東西10~11m、南北12~13m、高さ2mを測る。未調査のため、埋葬施設の形態等は不明である。

(4) 平成11~14年度調査の大屋敷C古墳群

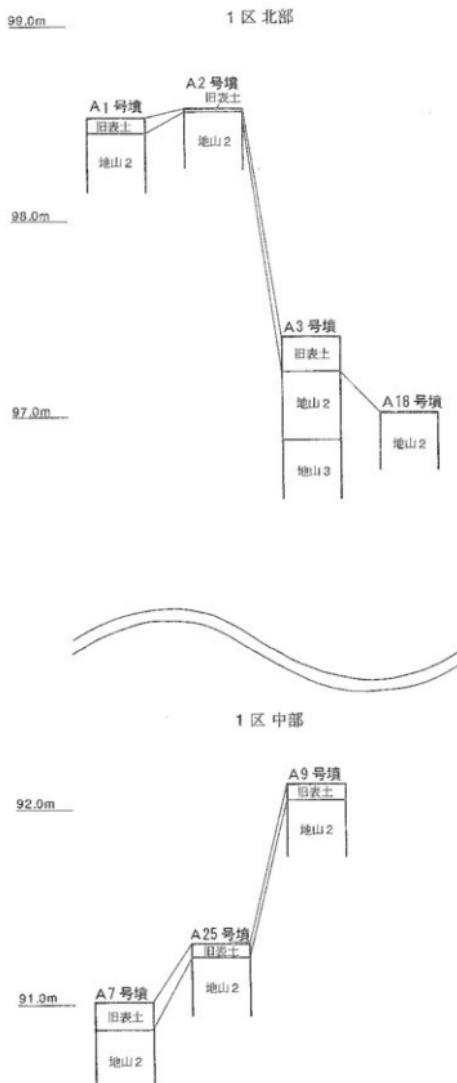
大屋敷C古墳群は54基以上で構成される古墳群であるが、平成11~14年度に発掘調査の対象となったのは51基である。一部の古墳で墳丘盛土が残存しているが、盛土は石室の裏込めと連続して盛られた一次墳丘であることが判明した。周溝の残存によって墳丘の平面形が分かる古墳は全て梢円形に近い円墳である。51基全ての古墳が横穴式石室を埋葬施設とし、形態を特徴し得る横穴式石室の内訳は複室系擬似両袖式4基、單室系擬似両袖式19基、無袖式8基(可能性のあるものを含めれば11基)となっている。最大の横穴式石室(註1)はC19号墳の複室系擬似両袖式で全長7.5mを測り、構築時期は遠江IV期前半に比定される。最小の横穴式石室はC34号墳の無袖式で全長0.55mを測り、遠江V期前半に構築された可能性がある。大屋敷C古墳群51基は石室開口方位または墓道の伸延方向が収束する谷・渓谷により大きく4つの支群に区分することができるが、全体として遠江IV期前半に古墳群の形成が始まり、同V期前半に最後の古墳築造と追葬が行なわれて廃絶する。

(5) 大屋敷A46号墳

大屋敷A古墳群の最南端に位置し、龜玉中学校のグラウンド南東側に所在する。昭和63(1988)年~平成3(1991)年、浜名高等学校史学部により大屋敷B古墳群の群構成解明を主たる目的として発掘調査された。それによると、当古墳は破壊が著しく、墳丘の規模は不明であるが、横穴式石室を埋葬施設とすることが判明している。刀子、耳環、須恵器、赤彩品を含む土師器が出土しており、築造時期は7世紀前半と推定されている。

3 大屋敷A古墳群の概要(第2表)

大屋敷A古墳群は最大80基以上で構成されると想定されるが、今回の調査で発掘対象となった古墳は62基である。このうち15基に墳丘盛土の残存が認められたが、二次墳丘まで確認できる古墳は数基に過ぎない。周溝は44基の古墳で検出されたが、残存率にはばらつきがあり、完周状態で検出できた周溝も、本来の周溝の下半部以下が削平を免れたものと考えられる。



第6図 大屋敷A古墳群基本土層堆積図 その1

地表面を覆う腐植土主体の表土、古墳造営当時の地表層であった旧表土、地山に大別される。表土につ

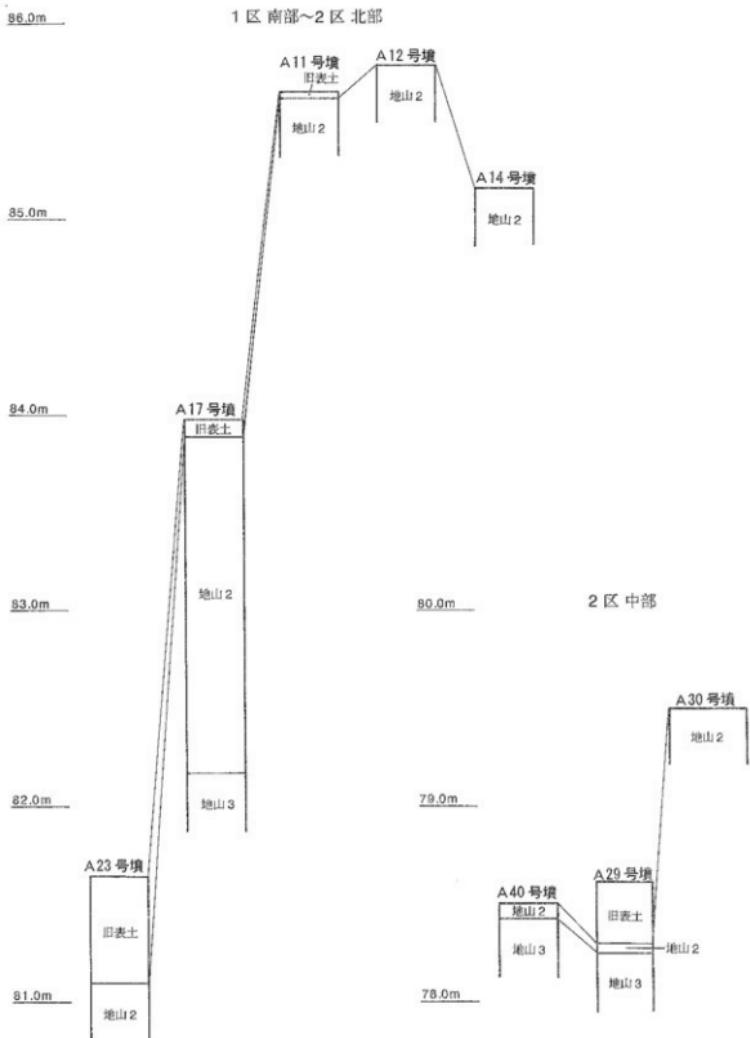
石室は古墳のほぼ中央に掘削された墓坑内に構築されるが、石室の床面をできるだけ水平に保つため墓坑底面全面に土を敷き、それから石室の基底石を配する場合、墓坑に敷かれた土を「掘形床土」と称し、石室石材を或る程度積み上げてから石室内の床面に土を敷いて水平を期する場合を「床面貼り土」と呼称する。次節以降の各古墳検出状況図の土層注記にも両者を区別して記載したが、厳密には掘形床土か床面貼り土か判別し難い場合が多い。

大屋敷A古墳群の埋葬施設は基本的に横穴式石室であるが、例外的に竪穴系横穴式石室が3基、竪穴式小石室が1基存在する。両者とも追葬を拒んだ單次埋葬施設であるが、前者が横穴式石室の構築技法を採用するなど、横穴式石室から派生したと想定されるのに對し、後者は横穴式石室の系統を踏まない埋葬施設と考えられる。これら以外で形態の判別し得る横穴式石室の内訳は右片袖式5基（可能性のあるものを含めれば7基）、複室系擬似両袖式1基（可能性のあるものを含めれば2基）、単室系擬似両袖式11基（可能性のあるものを含めれば13基）、室構造の單複が不明の擬似両袖式1基、無袖式14基（可能性のあるものを含めれば16基）となっている。

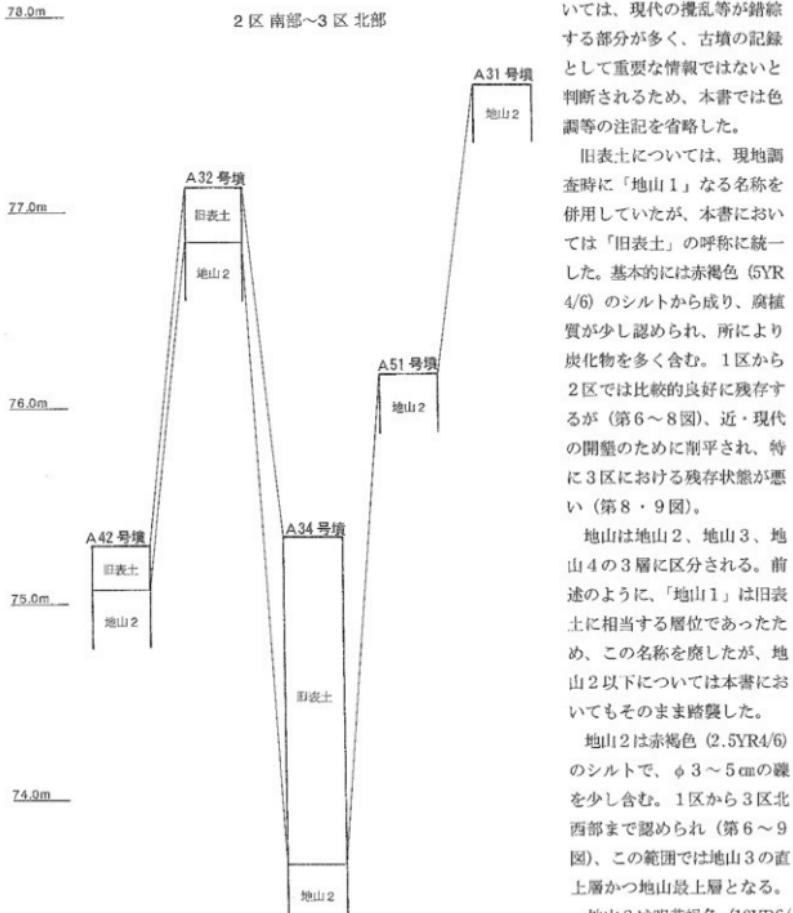
須恵器を主体とする出土遺物から見れば、大屋敷A古墳群は遠江III期中葉に築造が開始され、継続的に基數を増やしながら同IV期前半～末葉に築造の盛期を迎、同V期初頭～前半に至っても少數ながら築造が行なわれ、追葬も為されたことが判明する。

4 大屋敷A古墳群の基本層序

大屋敷A古墳群の基本層序は現在の



第7図 大屋敷A古墳群基本土層堆積図 その2



第8図 大聖殿A古墳群基本土層堆積図 その3

調査前に著しく削平を受けているかでない場合は検出できなかった層位である。調査区全域に存在するが、標高68m以下の3区南東部では地山2に代わり、地山最上層として堆積している(第9図)。これは、3区南東部において地山2が全面的に人為による削平を受けたのではなく、もともと地山2の堆積が及ばなかったためと考えられる。

地山4は暗赤褐色(5YR3/3)～極暗褐色(7.5YR2/3)のシルトで、3区においてのみ確認された。丘

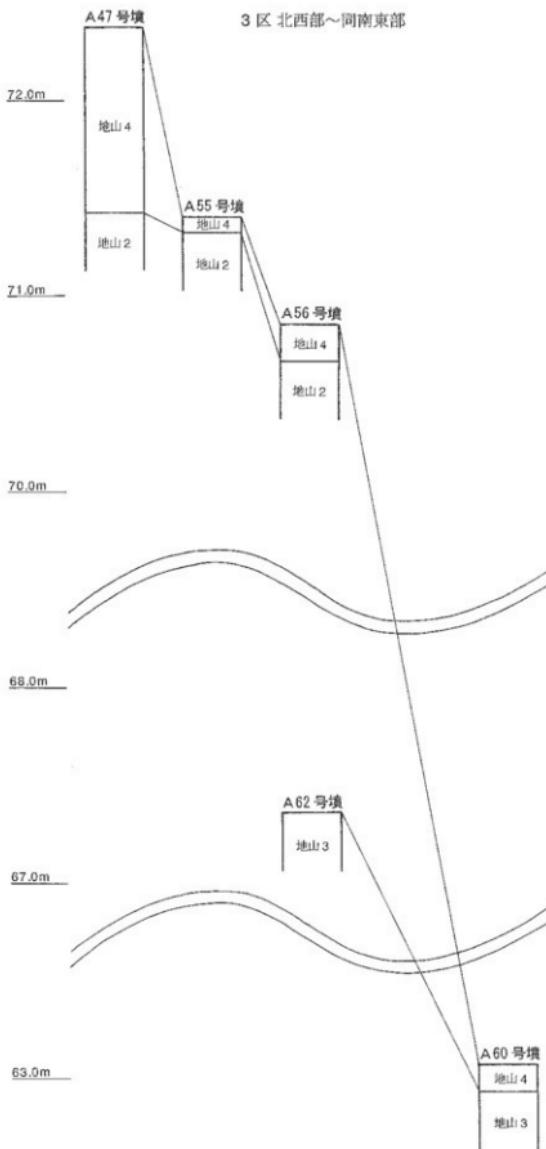
いては、現代の擾乱等が錯綜する部分が多く、古墳の記録として重要な情報ではないと判断されるため、本書では色調等の注記を省略した。

旧表土については、現地調査時に「地山1」なる名称を併用していたが、本書においては「旧表土」の呼称に統一した。基本的には赤褐色(5YR4/6)のシルトから成り、腐植質が少し認められ、所により炭化物を多く含む。1区から2区では比較的良好に残存するが(第6～8図)、近・現代の開墾のために削平され、特に3区における残存状態が悪い(第8・9図)。

地山は地山2、地山3、地山4の3層に区分される。前述のように、「地山1」は旧表土に相当する層位であったため、この名称を廃したが、地山2以下については本書においてもそのまま踏襲した。

地山2は赤褐色(2.5YR4/6)のシルトで、 ϕ 3～5cmの礫を少し含む。1区から3区北西部まで認められ(第6～9図)、この範囲では地山3の直上層かつ地山最上層となる。

地山3は明黄褐色(10YR6/6)のシルトで、 ϕ 7～20cmの礫を多く含む。地山2の直下に存在するため、トレンチ等を深く掘削するか、地山2が



陵斜面を東へ下るほど色調は暗くなり、礫の含有率が高く、また含まれる礫も大きくなる傾向があり、A60号墳付近では最大 $\phi 40\text{cm}$ に達する礫が含まれている。層序としては、3区西半部では地山2の直上層、同南東部では地山3の直上層となり、いずれの場合も地山最上層として確認されている（第9図）。つまり、大屋敷A古墳群の地山の中では地山4が最も新しく堆積したと判断される。

古墳の床込め（掘形床土または床面貼り土）・裏込め・盛土には、基本的に大屋敷A古墳群が立地する丘陵の外部から搬入された土は確認できず、上記の旧表土と地山の混合土が用いられたと考えられる。従って、各古墳における床込め・裏込め・盛土の土層注記の差異は、旧表土・地山各層の混和度の違いを示しているものと理解できる。

第9図 大屋敷A古墳群基本土層堆積図 その4

第2節 1区の調査成果

1 1区の概要（第10図、図版2・3・14）

1区は平成15年度を中心に発掘調査が実施され、調査表面積は10,000m²、確認された古墳は23基を数える。このうち、埋葬施設のみが検出され、周溝が確認されなかった古墳が3基（A8・A20・A24号墳）、一部が調査区外に連続し、全墳検出は果たせなかった古墳が3基（A2・A3・A23号墳）、全墳調査区外に位置し、今回の調査では遺構の記録はないが、付近の調査区内より遺物が出土したため、大屋敷A古墳群の古墳として命名した古墳が1基（A18号墳）存在する。

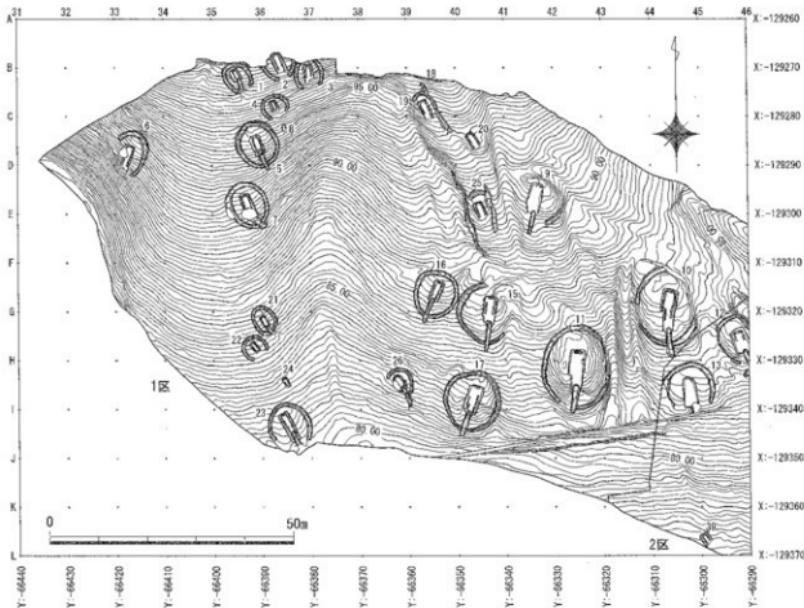
1区のほぼ中央、グリッド列37・38を南北に走る谷が存在し、当区の古墳の大部分はこの谷を取り囲むように立地する。この谷の西側のグリッド列34・35の南北尾根を隔ててA6号墳が孤立している。グリッド列33以西は大屋敷A古墳群と同C古墳群とを分界する南北谷となっている。グリッドB38～F40、グリッドB40～E41、グリッドF43～H43にも狭隘な小谷が南北に走り、後述する2区・3区に較べて1区は甚だ起伏に富んだ地形を呈している。

2 古墳

(1) A1号墳

①墳丘・周溝（第11図、図版15）

墳丘盛土は遺存していない。周溝は南南東の約1/12を除いて良好に検出された。周溝に囲まれた範囲は南北5.4m、東西3.9mを測り、南北に長い椭円形プランの円墳である。



第10図 1区調査後地形測量図

②埋葬施設（第11～14図、図版15・16）

埋葬施設は古墳の中央よりやや北寄りに構築された無袖式横穴式石室で、南南東に向けて開口する。玄室 平面形は奥壁幅と玄門幅がほぼ等しく、中央部がやや広い胴張り形を呈す。側壁は円礫を小口積みし、右側壁で最大6段、左側壁で最大5段残存し、基底石から3段目以上の持ち送りが顕著である。

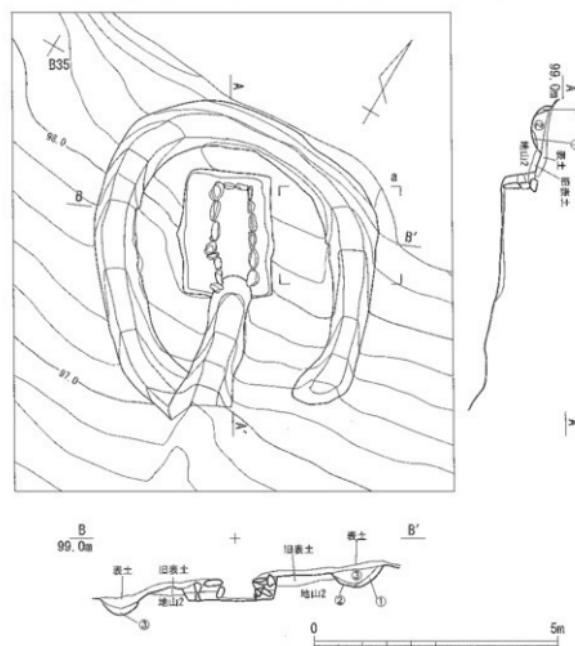
側壁の裏込めには裏込め土一層の厚さよりも大きな円礫を多數配しているが、その設置に規則性は見られない。奥壁は側壁2段分の高さを有する角礫2石を立てて基底石とし、その上2段は角礫を1石ずつ用い、3段積みとなっている。また、奥壁の2段目は長手積み、同3段目は平手積みである。なお、敷石は確認されておらず、石室の破壊の程度が小さく、閉塞石さえ残存することから、築造当初より敷石は敷設されなかつた可能性がある。

閉塞石 玄門付近の

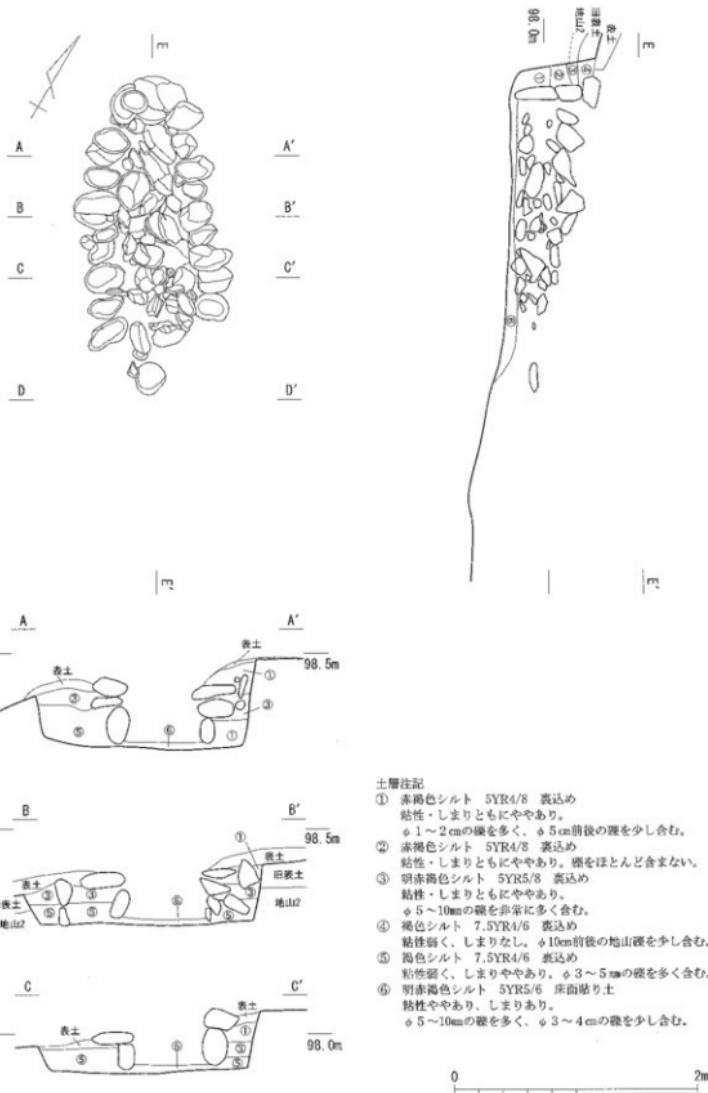
床面貼り土は厚さ15cmで、墓坑内で最も厚く床込めされている。その上に円礫が2段積まれた状態で残存していたが、小口積みと平手積みの双方が認められる不統一な積み方の閉塞石である。

基底石 側壁の基底石は、玄室幅が最大となる箇所の右側壁2石と玄門の右側壁1石が円礫を小口置きする以外は円礫を長手置きしている。つまり、基底石の配石はこれら2箇所で石材寸法と石室プランを調整して完成させたと考えられる。

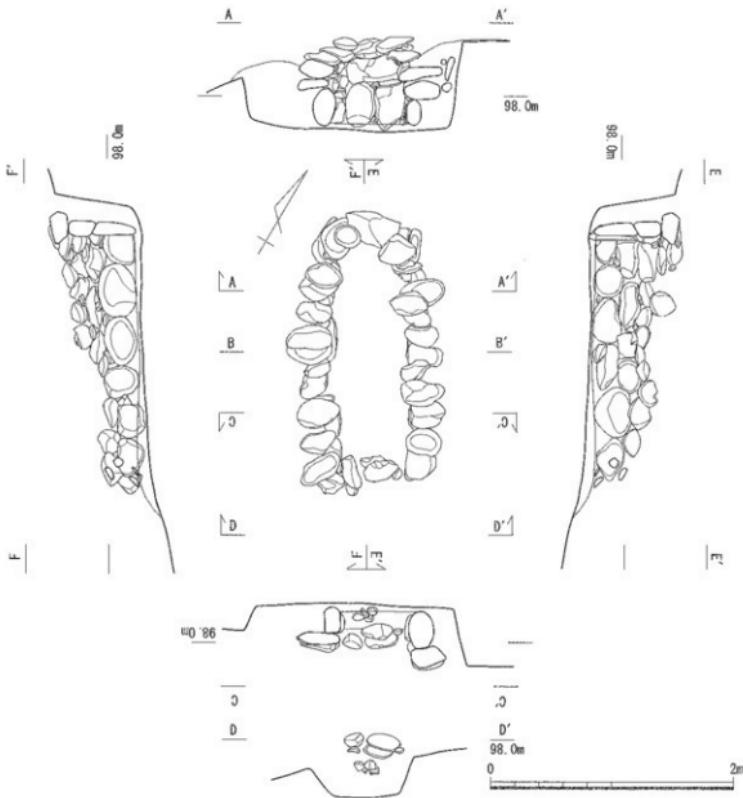
墓坑・墓道 墓坑は若干中央部の幅が大きくなるが、四隅の直角を整えた長方形プランである。奥壁の基底石2石を据えるための土坑が掘削されているが、それ以外の掘り込み等の施設は見られない。石室は墓坑の中央ではなく、やや左壁寄りに構築されている。墓道は墓坑の主軸に対し右に振れているが、方角的には真南へ直線的に伸びている。図では墓道が中途で擾乱等により中断しているかのように見えるが、実はその先の幅約1.3mの流路状地形に連続する。或いは、この流路状地形こそA1号墳の本来の



第11図 A1号墳填丘図



第12図 A-1号填石室検出状況図



第13図 A 1号墳石室・閉塞石実測図

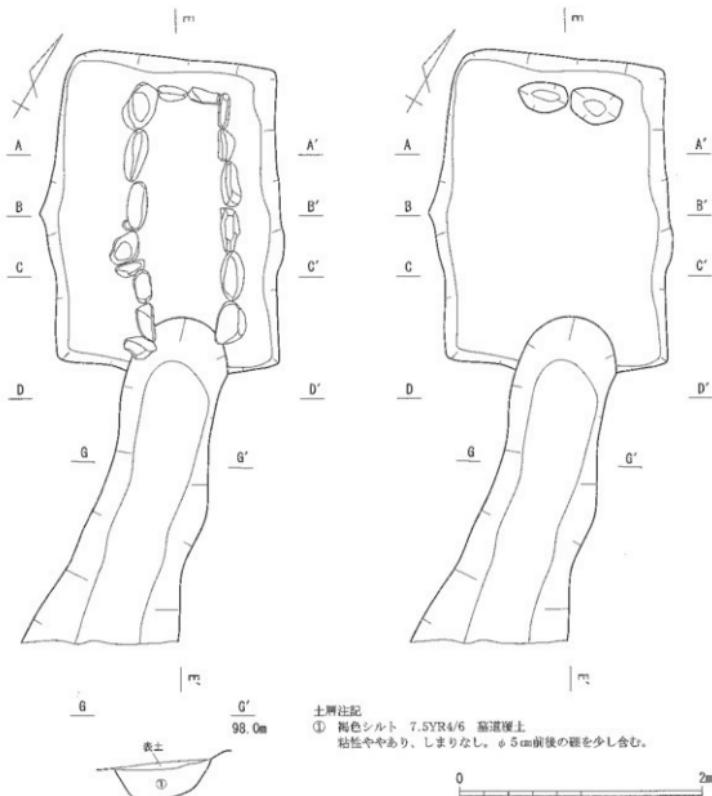
墓道の姿であったとも考えられる。

③遺物の出土状況（第15図、図版16）

埋葬施設からの出土遺物は皆無であり、遺物は主に周溝の東側部分において出土した。周溝底面付近で須恵器1点（8）が出土した以外は周溝覆土の最上部で出土しており、いずれも小片化した須恵器である。

④出土遺物（第16図、図版127）

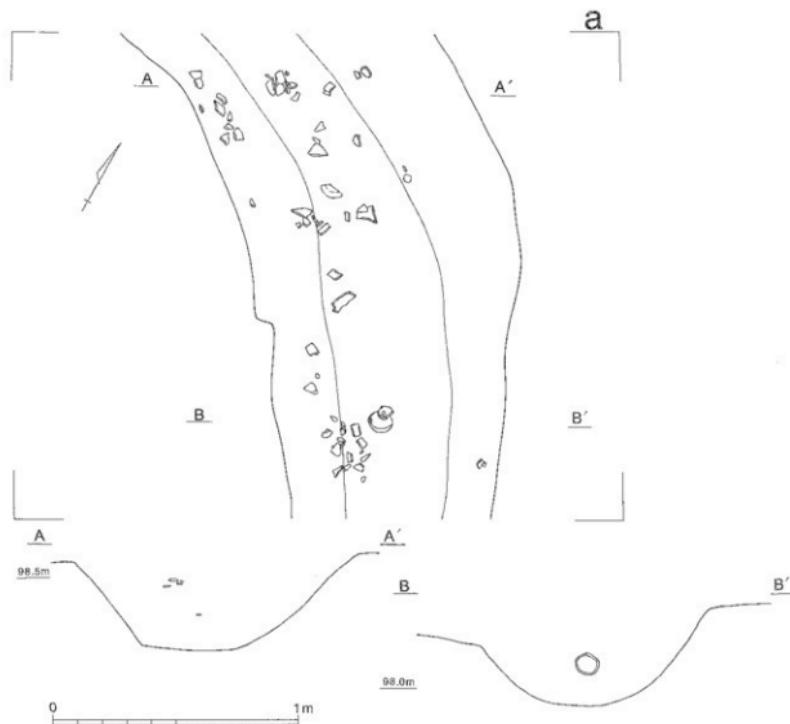
須恵器 当古墳の出土遺物は須恵器のみである。2は返りの付く壺蓋の中では口径に対し器高が大きく、比較的古い型式と考えられ、遠江IV期前半に比定される。3は周溝外出土の壺蓋で、遠江IV期末業に比定される。4の摘みも遠江IV期末業の所産であろう。壺身5・6は遠江IV期前半、同7は同IV期後半の口縁部である。壺8は頸部が短く、遠江IV期前半に比定される。10は無蓋高壺の壺部であり、遠江IV期前半～後半に位置付けられる。



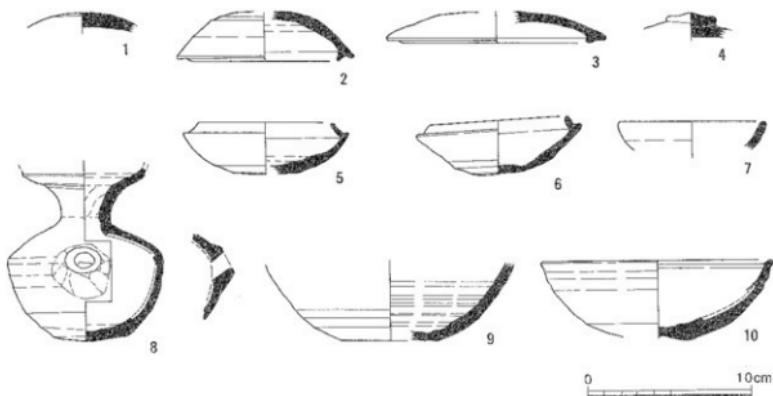
第14図 A 1号墳基底石・墓坑実測図

⑤小結

A 1号墳は比較的小規模な無袖式横穴式石室を有する古墳であり、使用された石材の大きさや形質、さらに石室構築技法の不統一性等を考慮すれば、大屋敷A古墳群の中でも階層的に劣位であると言わざるを得ない。石室よりの出土遺物はないが、周溝出土遺物から判断すれば、A 1号墳は遠江IV期前半に築造され、同IV期後半～末葉に追葬が行なわれた可能性を指摘し得る。



第15圖 A 1號墳周溝遺物出土狀況圖



第16圖 A 1號墳出土遺物實測圖

(2) A 2号墳

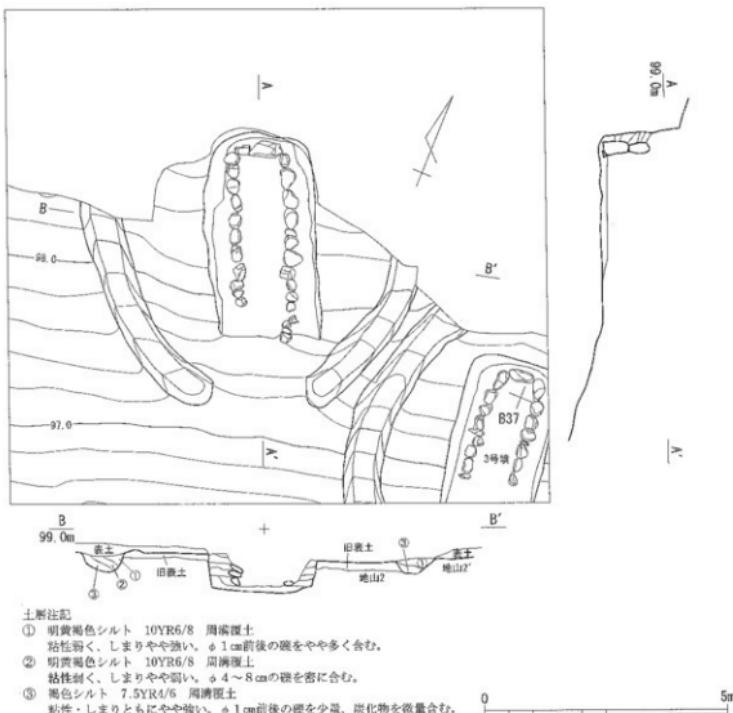
①墳丘・周溝（第17図、図版17）

墳丘の北半部は調査区外に位置し、周溝の残存状況の詳細は不明であるが、石室の開口部付近まで周溝が残っている状況から推測すれば、周溝の残存率は完周に近いと考えられる。墳丘盛土は遺存していないが、周溝に囲まれる範囲は東西5.6mを測り、南北はこれを超えると推定されるため、南北に長い梢円形の墳丘プランを呈すると考えられる。

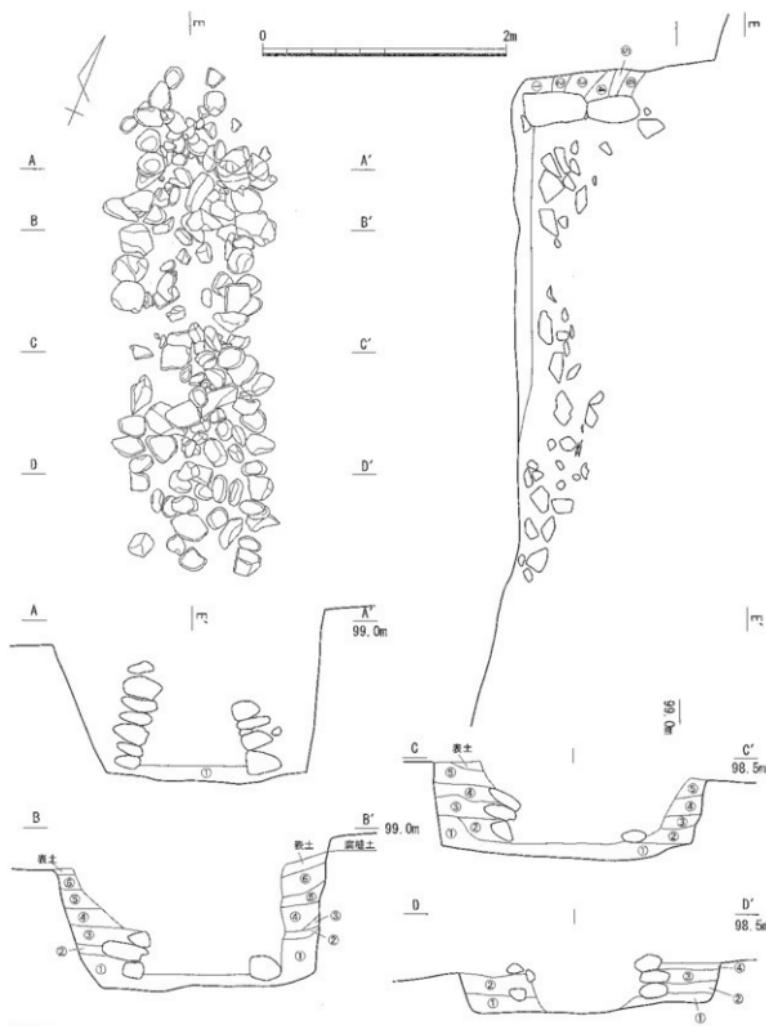
②埋葬施設（第18~20・22図、図版17~19）

古墳全体の検出は断念したが、埋葬施設は完全検出するべく、墓坑の掘形を追って調査区を北へ局所的に拡張した。その結果、検出された埋葬施設は全長3.8mの単室系擬似両袖式横穴式石室であり、墳丘のほぼ中央に構築され、南南東に向けて開口する。石室検出時に大規模な盜掘坑が確認されているため、玄門の玄室側で天井石の可能性がある石材が小片化している状況も、大掛かりな盜掘の痕跡と考えられるが、全ての崩落石を天井石であった石片と壁材とに峻別することが困難であったため、天井石は図化していない。敷石は全く確認されていないが、元来敷設されなかったと考えられる。

玄室 玄室プランは胴張り形で、奥壁幅が最も狭い。2段積みした大型の板状角礫（註2）の右側に小型角礫を5段積みにし、併せて奥壁を構成している。これは、当初左側の大型2石のみで奥壁を構成し、



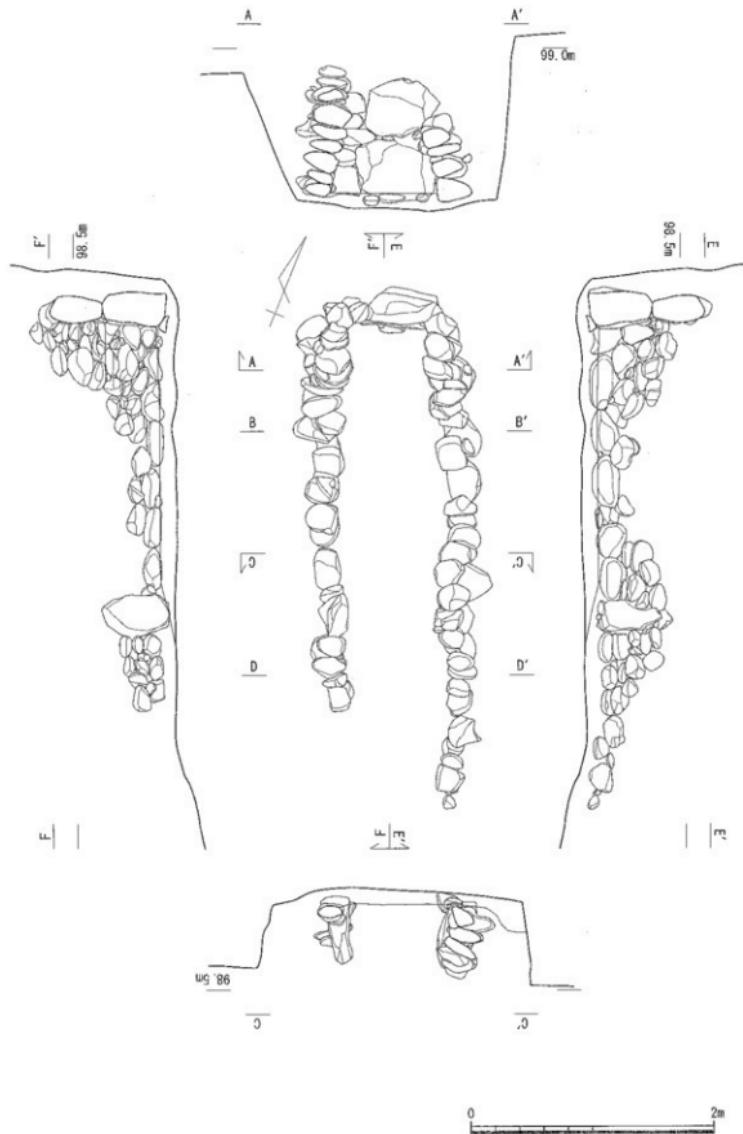
第17図 A 2号墳墳丘図



土層注記

- ① 暗褐色シルト 7.5YR4/6 裏込め・鰐形底土
粘性強く、しまりやや強い。φ 1 ~ 3 cm の礫を少し含む。
- ② 暗褐色の炭化物を含む。奥壁の背後では φ 20 cm 前後の裏込め礫を含む。
- ③ 暗褐色シルト 7.5YR4/3 裏込め
粘性やや弱く、しまりやや強い。φ 10 cm 前後の礫を含む。
- ④ 暗褐色シルト 7.5YR5/8 裏込め
粘性やや強く、しまり強い。φ 2 mm ~ 10 cm の礫を含む。
- ⑤ 暗褐色シルト 7.5YR5/6 裏込め
粘性やや強く、しまり強い。
φ 1 ~ 3 cm の礫を少々、炭化物を比較的多く含む。
- ⑥ 黄褐色シルト 10YR5/6 裏込め
粘性弱く、しまり強い。φ 1 ~ 4 cm の礫をブロック状に含む。

第18図 A 2号填石室検出状況図



第19圖 A 2号填石室实测图

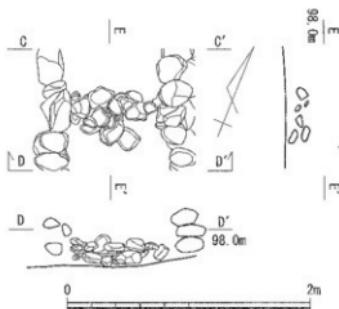
下段の石を鍛石とするつもりであったが、玄室が極端な胴張り形になることを避けるためには横に石材を継ぎ足さざるを得なかつたものと推測される。

側壁は基底石を長径30~40cm前後の比較的大きな円礫で配し、その上に小型の円礫を最大8段小口積みにしており、最も良好に残存する右側壁の奥壁付近では高さ1.05mを測る。また、基底石の壁面は内傾しており、側壁の持ち送りはすでに基底石から始まっていると言える。なお、両側壁ともに明確な目地通りは認められない。

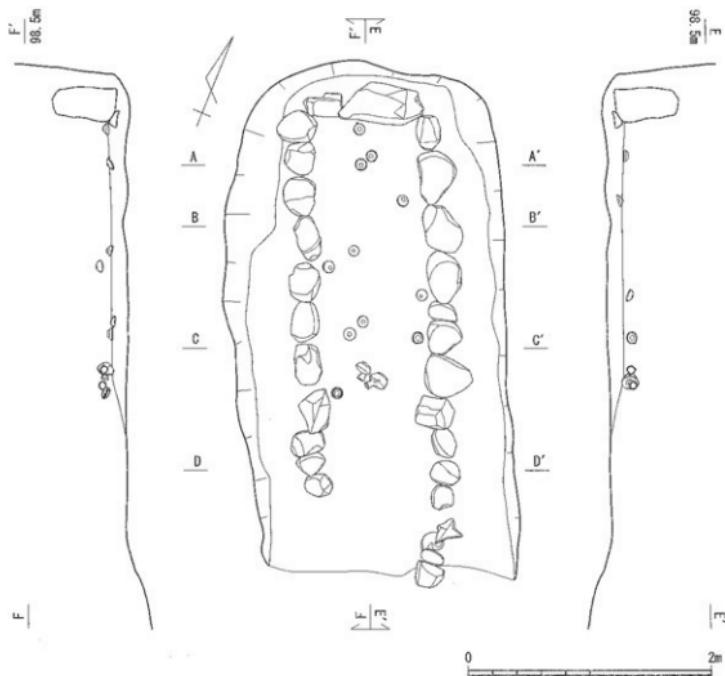
玄門は高さ50cm超の柱状角礫を用いて立柱石としているが、立柱石の側壁からの突出は僅か4cmである。

また、立柱石は玄室左側壁の4段目にに対応している。

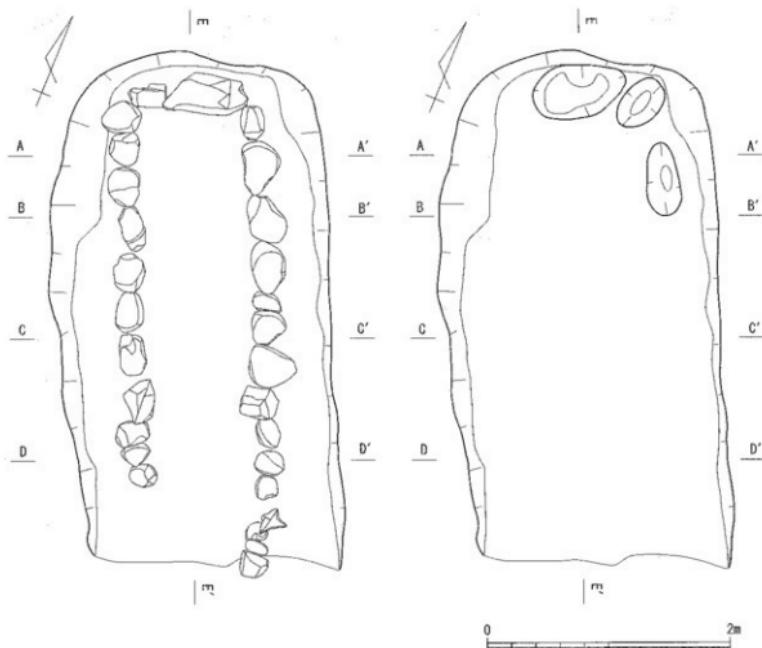
羨道 羨道プランも玄室同様に胴張り形を呈す。立柱石を境に羨道から掘形床土が認められなくなるが、閉塞石が残存することから、盜掘等により失われたのではなく、築造当初から羨道の床面を玄室より低く造る意図が窺われる。側壁は玄室よりも小型の円礫を小口積みして積載されている。D-D'断面では



第20図 A 2号墳閉塞石実測図



第21図 A 2号墳塞石室遺物出土状況図



第22図 A 2号墳基底石・墓坑実測図

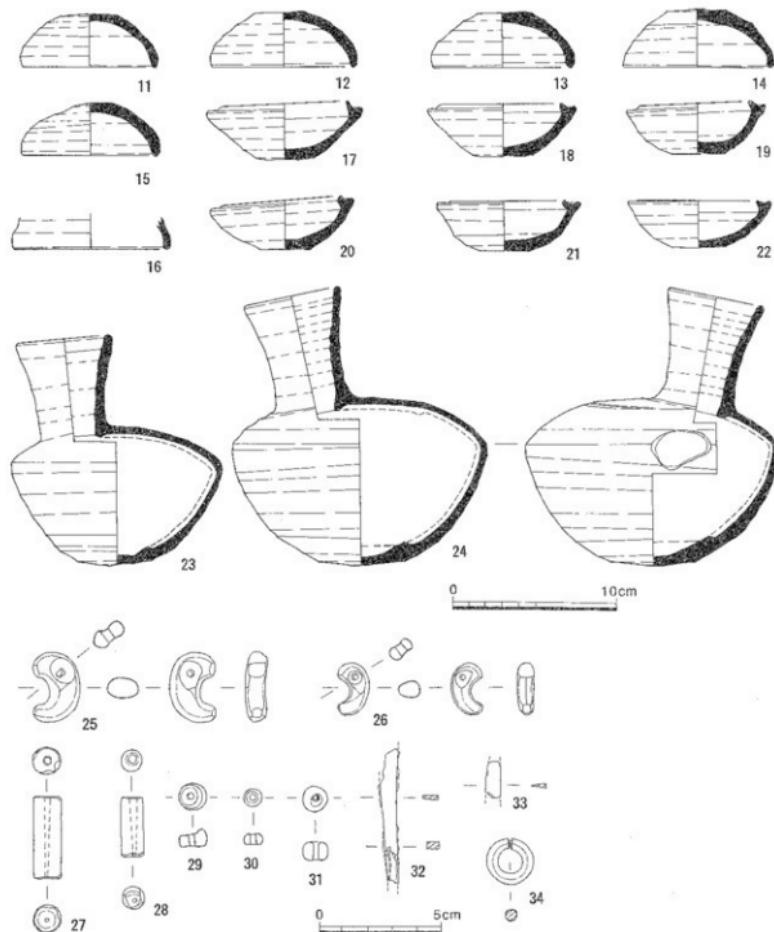
左側壁3段目から持ち送りが始まっている。側壁が最も良好に遺存した部分は左側壁の立柱石に接する箇所で、5段、高さ0.52m残存しているが、玄室側壁との連続性は認められず、玄室と羨道は別々に構築された可能性が高い。また、玄室同様に明確な目地通りは認められない。

閉塞石 玄門の立柱石間に2段、基底部部分で横3列残存している。円礫を用いているが、大きさにばらつきがあり、積み方にも一定の規則性を看取することはできない。

基底石 奥壁の2石は壁面を描えており、玄室の特に奥側の幅を確保しようとした意图が窺われる。玄室側壁の基底石の大部分はやや扁平な円礫を平手置きで配石するが、右側壁最奥の1石と左側壁の立柱石より奥3石は小口置きしており、この2箇所で石材の寸法を最終的に調整したと考えられる。つまり、奥壁基底石と立柱石を先に設置し、右側壁は立柱石から奥へ基底石を順次配し、左側壁は奥壁から玄門に向かって基底石を配していくという手順が想定される。

奥壁石支石 第22図には図化していないが、第18図の縦断面図と第19図には奥壁左侧基底石の支石を描写した。長径10~20cmの円礫3個を平置きし、奥壁石の玄室側基部を支えている。

墓坑 石室は隅丸長方形プランの墓坑の中央に構築されている。奥壁基底石のうち左側の大型石および左側壁基底石の奥2石を据えるための土坑が掘られている。墓道は検出されておらず、羨道左側壁の残存する最前石が墓坑から突出するように見えることからも、墓坑の前部は破壊されていると考えられる。



第23図 A 2号墳出土遺物実測図

③遺物の出土状況（第21図、図版19）

出土位置の明らかな遺物は全て玄室から出土した。須恵器14点（11～24）はほぼ床面直上で出土し、耳環34は右側壁沿いで確認された。玉類では土製丸玉31が奥壁沿いで出土したが、他の6点（25～30）は玄室北部の覆土を鏟にかけて検出した。

④出土遺物（第23図、図版8・127・128）

須恵器 坯蓋11～16、坯身17～22は遠江IV期後半に比定される。平瓶23・24も同時期の所産である。24の体部屈曲部には焼成後穿孔が1箇所認められる。

玉類 25・26は蛇紋岩製の勾玉である。27・28は碧玉製の管玉である。29は蛇紋岩製の白玉である。30・31は丸玉で、31は土製である。30は黄緑色の色調を呈すが、ガラス製か否か判然としない。

金属製品 32は刀子の茎であり、柄の木質が残存している。33は刀子の切先の可能性がある。34は銅芯金剛張の耳環である。

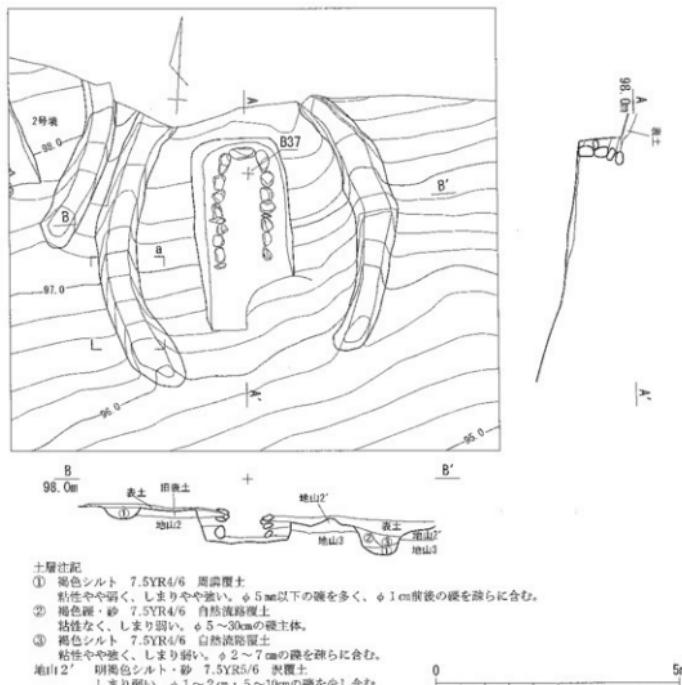
⑤小結

A 2号墳の築造時期は玄室出土遺物から遠江IV期後半に比定される。出土遺物が複数時期に及ぶ様相は見られないため、追葬については不明である。A 2号墳の横穴式石室は大屋敷A古墳群の单室系擬似両袖式としては平均的な規模であり、階層的にも当古墳群では中程度に位置付けることができる。

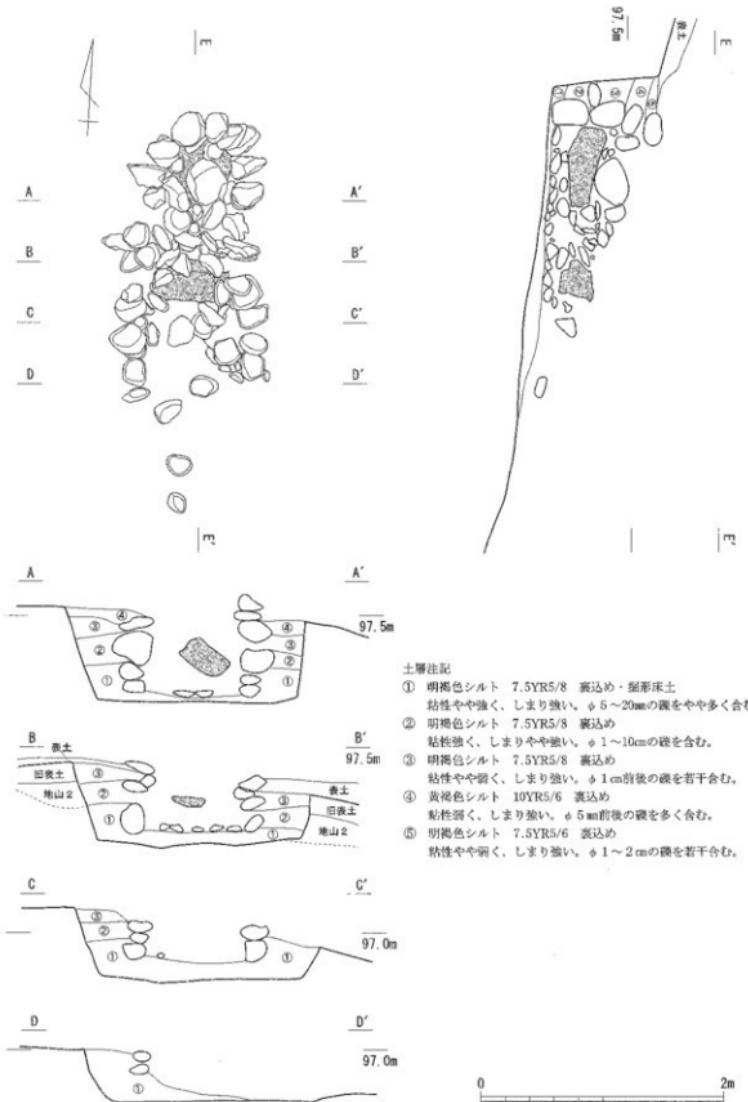
(3) A 3号墳

①墳丘・周溝（第24図、図版20）

A 2号墳の東側に隣接するが、切り合い関係はない。墳丘の東半部は古墳時代以前に沢であった場所が埋積した旧地表面（地山2'直上）に立地する。墳丘盛土は失われている。周溝は約1/8が調査区外に存在するが、擾乱された墳丘南東部を除いて概ね良好に残存する。周溝に囲まれた範囲は東西4.5m、南北5.5m以上を測り、墳丘は南北に長い橢円形プランを呈す。なお、周溝の東側は当古墳発掘後に自然流路と化した形跡がある。



第24図 A 3号墳墳丘図



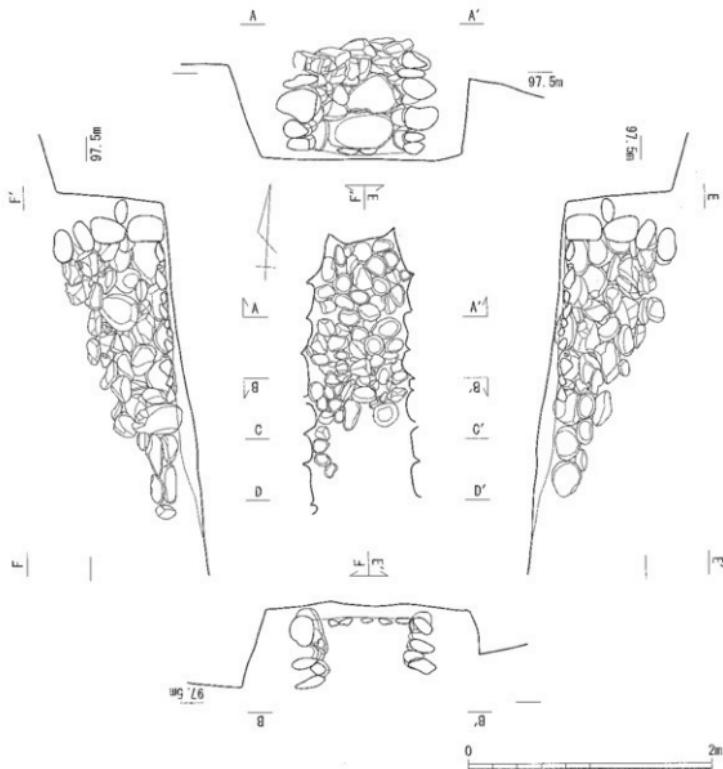
第25図 A 3号墳石室検出状況図

② 墓葬施設（第25～27図、図版20・21）

埋葬施設は無袖式横穴式石室であるが、右側壁のみに立柱石を配する特異な形態を有す。

天井石 原位置を保持するものはないが、奥壁付近と玄室中央部に計2石の崩落天井石を確認することができた。いずれも角礫で、幅0.5～0.64m、長さ0.33～0.66mを測る。奥壁付近の1石の上に、残存する側壁のどの石材よりも大型の円礫が載った状態で検出されたが、性格は判然としない。

玄室 玄門から玄室後部まで幅がほぼ等しく、奥壁幅のみ狭くなる奥窄まり形の玄室プランである。奥壁はやや大型の円礫2石を長手積みし、鏡石としている。奥壁の3段目以上は中・小型の円礫を小口積みして前方へ持ち送り、最大5段、高さ0.91m残存する。側壁は小口積みされているが、使用される石材には円礫と角礫の両方が存在し、大きさにも相当のばらつきがある。このため、側壁に一貫した目地通りは認められない。右側壁の奥壁より前方1.4m地点に高さ0.42mの角礫が立柱石として設置されている。立柱石の側壁からの突出は8cmを測る。このような片側の側壁のみに立柱石を配する横穴式石室を「擬似右片袖式」などと呼称せず、現時点では無袖式の範疇で捉えておきたい。



第26図 A 3号墳石室実測図

敷石 前述の立柱石より後方は遅く敷設されているが、これより前方は右側壁沿いに4石残存するに過ぎない。敷石としては大振りの、 $\phi 10\sim 25\text{cm}$ の円礫を使用している。

基底石 まず奥壁の基底石を据え、その両側に同時に進行的に角礫または円礫を長手置きで直列配置して両側壁の基底石を形成した様相が窺われる。

B-B'断面付近の両側壁に1石ずつ、およびD-D'断面付近の右側壁に1石が小口置きで設置されており、これらの箇所で石材の長さを調整したと考えられる。

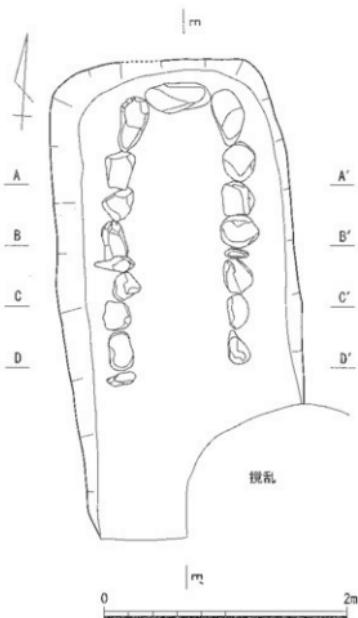
墓坑 墓坑は石室奥壁の背後で現地表面より1.0m掘り込まれている。墓坑の後壁と奥壁2段目の背後下端との間に幅20cmの扁平な円礫が挟まっており、埋め込み土に加えて奥壁2段目石を支える石と考えられる。墓道は確認されなかった。

③遺物の出土状況（第28図、図版21）

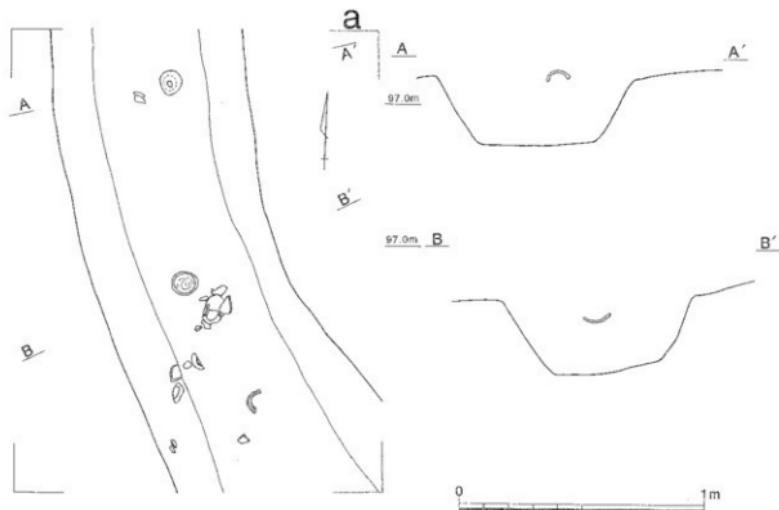
石室よりの出土遺物は皆無であり、周溝南西部の覆土中から須恵器が少量出土した。

④出土遺物（第29図、図版128）

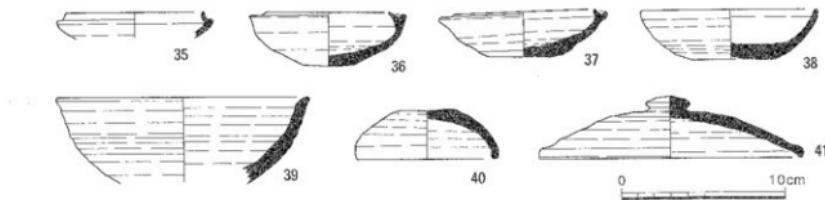
須恵器 35~41は全て周溝より出土した。环身35・37・38は遠江IV期前半、环身36および环蓋40は遠江IV期後半に比定される。無蓋高环部39は遠江



第27図 A 3号墳基底石実測図



第28図 A 3号墳周溝遺物出土状況図



第29図 A 3号墳出土遺物実測図

IV期末葉、坏蓋41は同V期初頭に位置付けられる。

⑤小結

周溝出土ではあるが、出土須恵器から見ればA 3号墳は遠江IV期前半に築造され、その後継続的に遠江V期初頭まで追葬が行なわれた可能性がある。全長4m近い墓坑に対して石室の全長は2.3mとかなり小規模であり、本来の両側壁が開口部から1m以上失われている可能性も否定できない。

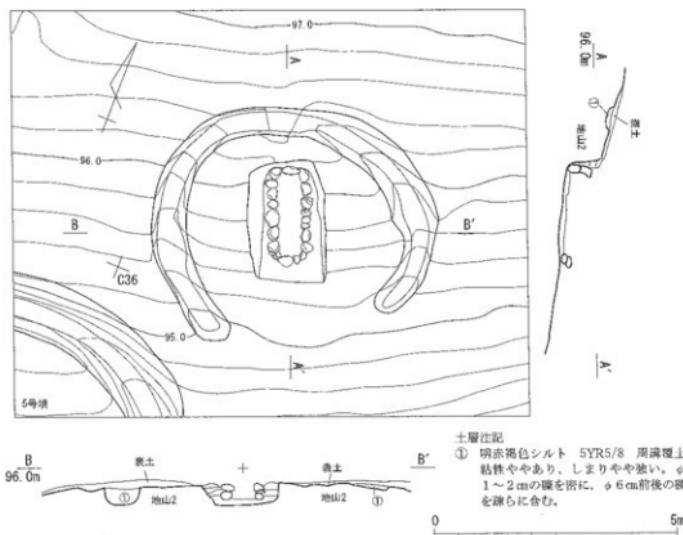
(4) A 4号墳

①墳丘・周溝（第30図、図版22）

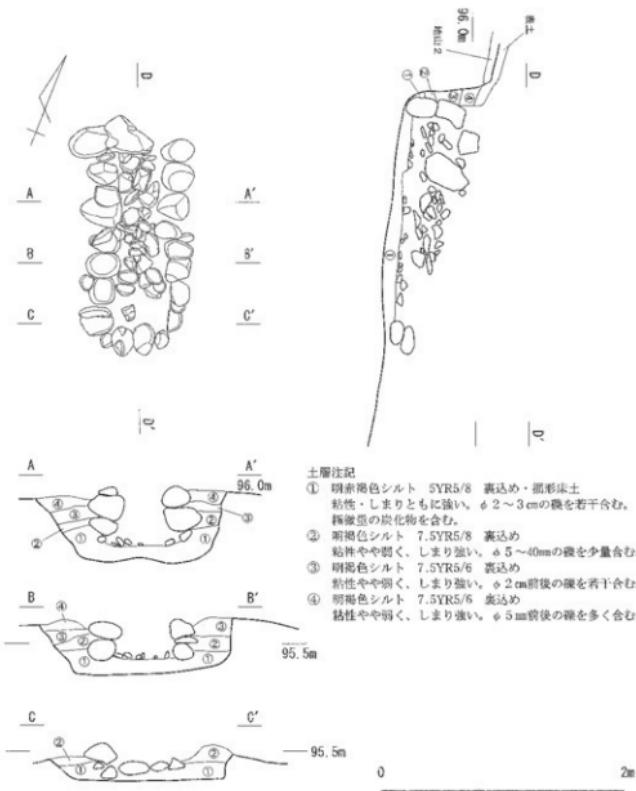
墳丘盛土は流失している。周溝は埋葬施設の前方を除く約3/4周分が検出され、周溝により開まれる範囲は東西4.4m、南北4.0mを測り、ほぼ正円に近い円墳である。

②埋葬施設（第31～33図、図版22・23）

埋葬施設は墳丘のはば中央に構築され、北北西—南南東方向の主軸を有する堅穴系横穴式石室である。



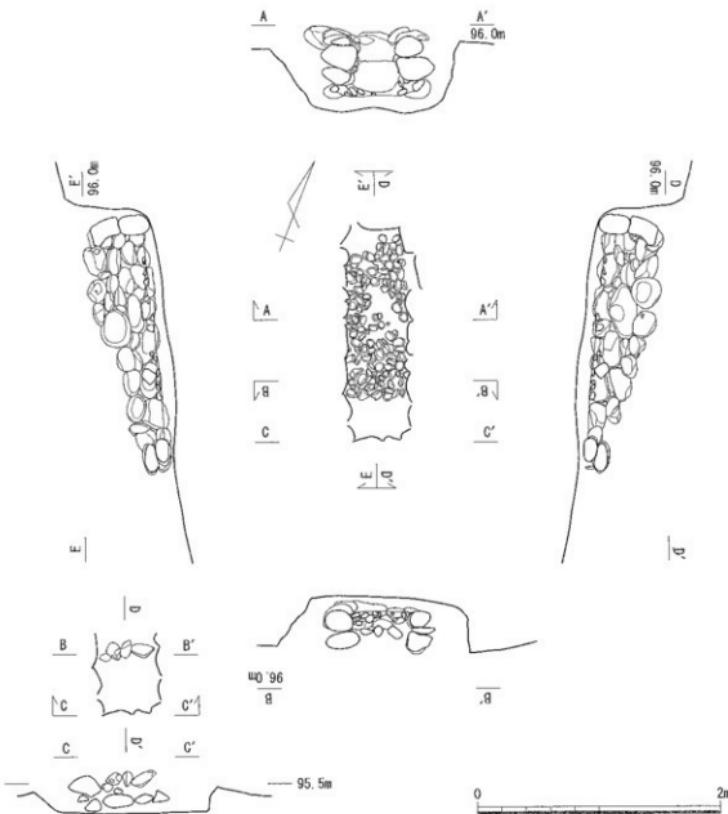
第30図 A 4号墳墳丘図



第31図 A 4号填石室検出状況図

石室 前壁から奥壁前方0.2mまで石室の幅は0.5mとほぼ一定で、奥壁幅が0.4mと狭くなる奥窄まり形の石室プランである。奥壁はやや大型の円礫2石を長手積みし、鏡石としている。これは大屋敷A古墳群において中・小規模の横穴式石室によく見られる奥壁形態であり、当石室のような堅穴系横穴式石室が通常の横穴式石室から派生したことが理解できる。奥壁に相対する前壁は2段残存し、円礫を小口積みしている。側壁も同じく円礫を小口積みし、2段目から持ち送りが見られ、右側壁では最大5段、高さ0.56m残存するが、両側壁とも目地通りはほとんど認められない。これは、積載の中途で基底石よりも大型の礫を用いたり、また、そうすることによって生じた間隙を小型の円礫で充填するように積載したりといった、計画性の乏しい石室構築を行なったためと考えられる。

間仕切石 B-B'断面において、石室内部を空間分割する間仕切石が検出された。敷石の上に厚さ約10cmの盛土を施し、その上に割損した円礫4石を横に並べ据えているが、据え方に規則性は看取されない。間仕切石によって石室は後部：前部=2:1に分割されている。

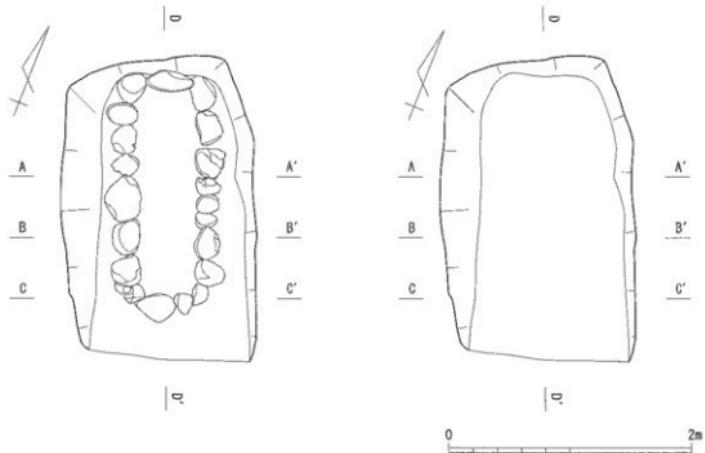


第32図 A 4号填石室・間仕切石実測図

敷石 現状では右側壁最奥部付近と石室中央～左側壁寄りで敷石が欠如しているが、石室の破壊・崩落の際に散乱したと考えられ、築造当初はこれらの箇所にも敷石が敷設されていたと想定される。一方、前壁より後方0.3mまでは敷石が全く検出されず、これはほぼ当初原状どおりと推定される。上記の間仕切石の存在と何らかの関係がある状況かもしれない。

基底石 A-A'断面から前壁に至る両側壁基底石は円礫を用い、小口置きと平手置きを併用しながらも直列平行を意識した並びとなっている。両側壁基底石の南南東端面に4石から成る前壁の小口置き基底石列が接しており、この前壁が開口する横穴式石室の閉塞石ではないことが理解できる。他方、A-A'断面より後方では奥壁石の左右端部に接するために、両側壁の各基底石が石室に向かう面の平面的角度を微調整している様相が窺われる。ここでも、小口置きと平手置きが併用されている。

墓坑 墓坑は北側で現地表より0.8m掘り込まれている。プランはやや不整な長方形を呈す。底面には基



第33図 A 4号墳基底石・墓坑実測図

底石の裏込めに連続する掘形床土を厚さ最大18cm施しており、さらに掘形床土は奥壁より前方約0.5mで高低差5cm前後の段を成す。見方によつては、この段と前述の間仕切石とで石室は前後3つの空間に区分されると解釈できるかもしれない。なお、墓坑には墓道は付設されていない。

③出土遺物

遺物は出土していない。

④小結

出土遺物皆無の状況から見れば、A 4号墳の築造時期は不明である。しかしながら、A 4号墳はA 5号墳の北北東に隣接しながら当古墳の周溝を避けるように周溝を掘削していることから、A 5号墳よりも新しくかつ近しい時期に築造された可能性が想定される。後述するように、A 5号墳の築造時期は遠江IV期後半であるため、A 4号墳は遠江IV期後半～末葉頃に築造されたと仮定しておく。

A 4号墳の堅穴系横穴式石室は追葬を拒否した單次埋葬の埋葬施設であり、全長1.7mという規模もこれを支持すると考えられる。にもかかわらず、石室内は間仕切石により2つの空間に、掘形床土の段も区画施設と解釈すれば3つの空間に分割されている。A 4号墳の間仕切石は、狹小な石室における被葬者遺体の扱いと空間利用の問題に、まさに一石を投じることになるかもしれない。

(5) A 5号墳

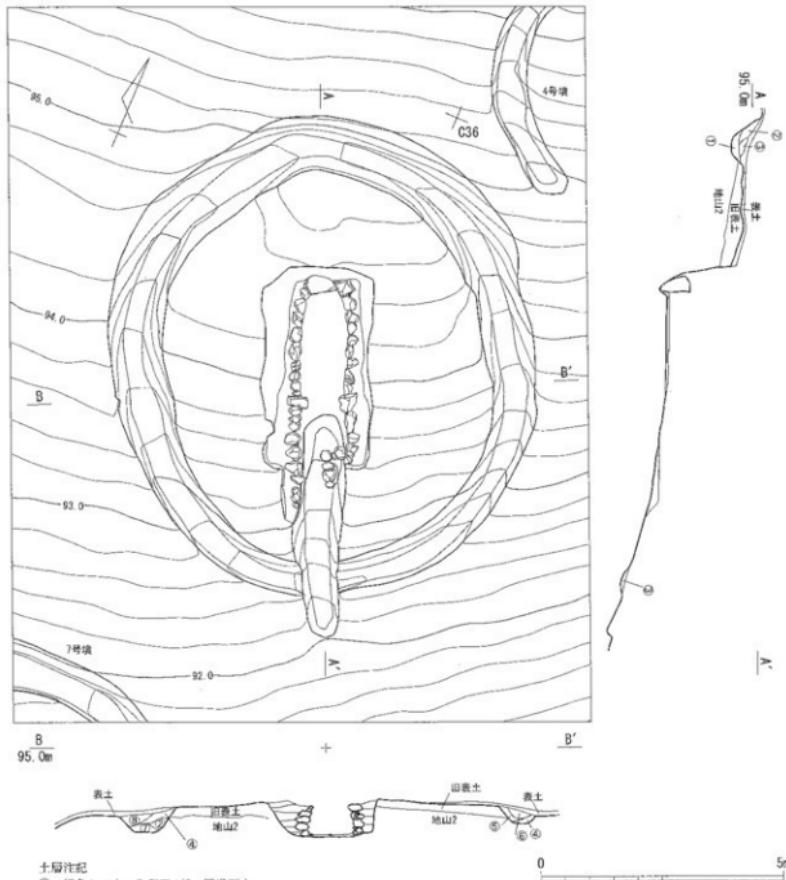
①墳丘・周溝（第34図、図版24）

墳丘盛土は流失している。周溝は完周し、これに開まれる範囲は東西6.6m、南北8.0mを測り、南北に長い椭円形プランを呈す。

②埋葬施設（第35～37・39図、図版24・25）

古墳の中央に単室系擬似両袖式横穴式石室が構築されており、南南東に向けて開口する。

玄室 中央部に最大幅を有し、次いで玄門側幅が大きく、奥壁で最も幅が狭くなる胴張り形の玄室プランを呈す。奥壁は大型の角砾1石を用いて鏡石としているが、墓坑の深さを考慮すれば、もう1石上に



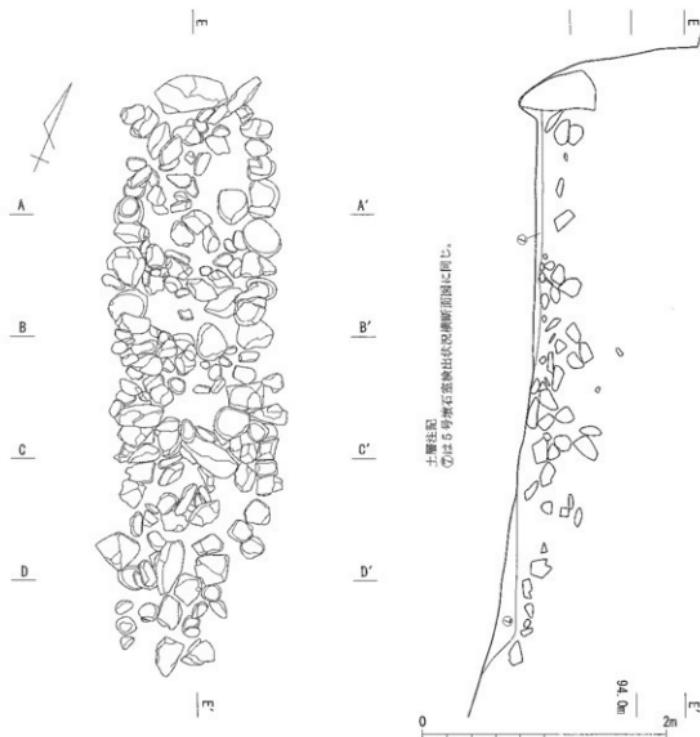
土層記述

- ① 黄色シルト 7.5YR4/6 周溝覆土
粘性ややあり、しまりなし。φ 5~10cmの隙を多量に含む。
- ② 褐色シルト 7.5YR4/6 周溝覆土
粘性ややあり、しまりなし。φ 3~5cmの隙を少し含む。
- ③ 明褐色シルト 7.5YR5/6 周溝覆土
粘性やや弱く、しまりなし。φ 3~5cmの隙を少し、炭化物を多く含む。
- ④ 赤褐色シルト 5YR4/8 周溝覆土
粘性ややあり、しまりなし。φ 3~5cmの隙を少し含む。
- ⑤ 明赤褐色シルト 5YR5/6 周溝覆土
粘性ややあり、しまりなし。φ 7~15cmの隙を多く含む。
- ⑥ 赤褐色シルト 5YR4/8 周溝覆土
粘性ややあり、しまりなし。隙をほとんど含まない。
- ⑦ 赤褐色シルト 5YR4/8 周溝覆土
粘性ややあり、しまりなし。φ 3cm前後の隙を多く含む。
- ⑧ 赤褐色シルト 5YR4/6 周溝覆土
粘性ややあり、しまりなし。φ 5cm前後の隙を多く含む。

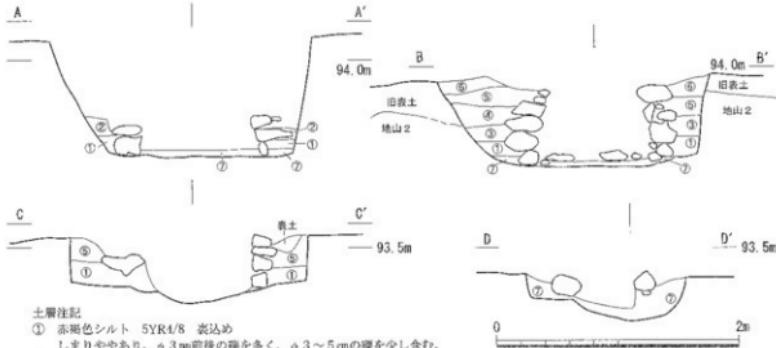
第34図 5号填塗丘図

大型礫が積載されていた可能性が高い。奥壁より2.16m前方に高さ50cm前後の角礫を立柱石として設置し、玄門を形成している。立柱石は左側壁より8cm、右側壁より11cm突出する。側壁には角礫と円礫の双方を小口積みしているが、角礫がやや卓越する。不完全ではあるが、目地通しの意図が窺われ、左側壁で最大4段、高さ0.63m、右側壁で最大5段、高さ0.66m残存している。側壁の持ち送り傾斜角度は一定しないが、左側壁では2段目から、右側壁では3段目から持ち送りが始まっている。

葬道 一見、特異なプランを有するようであるが、大屋敷古墳群に一般的な胴張り形プランを呈する葬道と判断される。左側壁では墓道から伸延する溝状の掘り込みに掘形床土を充填し、その上に角礫3石・円礫2石をL字形に配列している。立柱石より直列する葬道左側壁の最先端ではなく、前から2・3石目の内側にL字の一端が接していることと、L字形配石の上に石材を積載して壁を構築した様相が窺われないことから、例えば前庭として石室構築当初から施設されていたのではなく、追葬等に際して付設された配石と考えられる。葬道右側壁の基底石に目を転じると、立柱石前方5石目までは同一レベルの床面に設置されているが、6石目の中型角礫はこれらより約7cm低いレベルの床面に据えられている。そして、7石目からは次第に設置面のレベルが下降していく。また、6石目から前方の「基底石」の上に石材が積載されていた様相は窺われない。よって、右側壁立柱石前方6~10石目は左側壁のL字形配



第35図 A 5号室検出状況図



土壌注記

- ① 赤褐色シルト 5YR4/8 表込め
しまりややあり。φ 3mm前後の礫を多く、φ 3~5cmの礫を少し含む。
- ② 明赤褐色シルト 5YR5/6 表込め
しまりややあり。φ 3mm前後の礫を少し含む。
- ③ 棕色シルト 7.5YR4/6 表込め
ややしまりあり。φ 1~2cmの礫を少し含む。
- ④ 棕色シルト 2.5YR8/6 表込め
しまりややあり。φ 3~5cmの礫を少し、地山3をブロック状に多く含む。
- ⑤ 本褐色シルト 5YR4/8 表込め
しまりややあり。φ 3~4cmの礫を少し含む。
- ⑥ 赤褐色シルト 5YR4/8 表込め
しまりややあり。φ 2~5mmの礫を多く含む。
- ⑦ 明赤褐色シルト 5YR5/8 表込め・細形床土
粘性・しまりともなし。砂および灰化物を少し、φ 1~2cmの礫を多く含む。

第36図 A-5号墳石室検出状況横断面図

石と同様に、石室構築後に追加された施設と考えられる。以上より、羨道は墓坑内に収まり、羨道長は1.3mを測る。

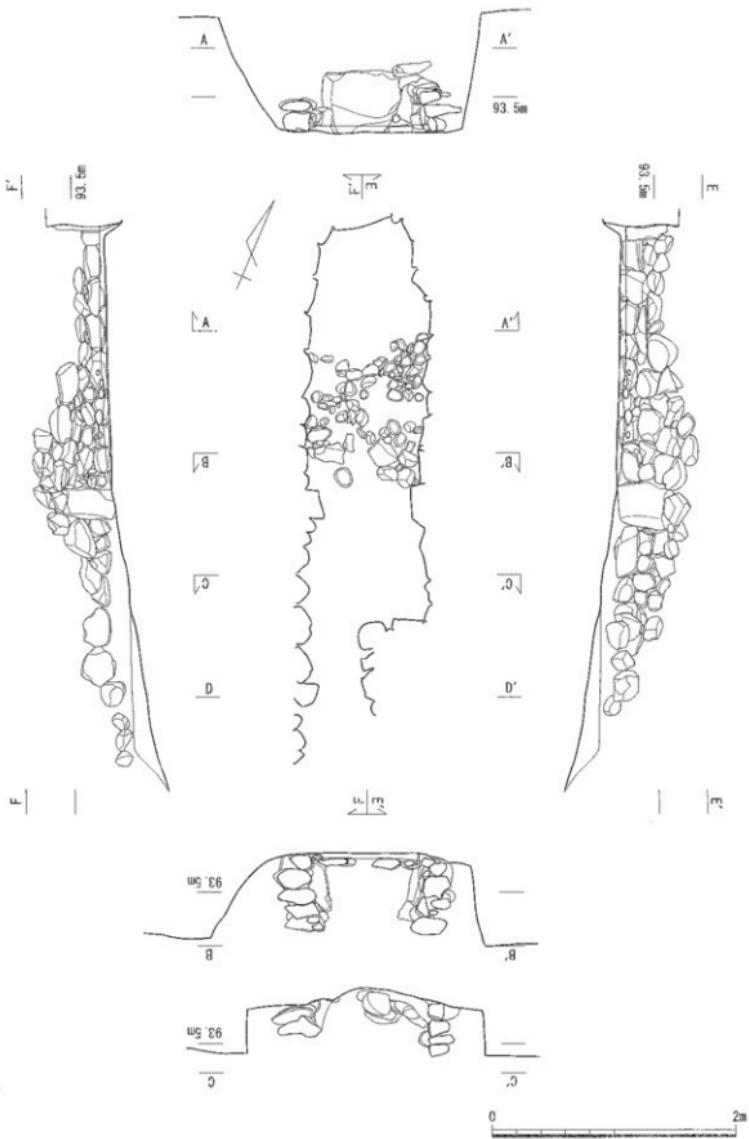
側壁は角礫主体に小口積みされており、左側壁では目地通りがやや不完全ながら認められるが、各段は立柱石を挟んだ玄室左側壁とは対応していない。この状況は右側壁でも同様であり、玄室と羨道の側壁構築は同時進行的に行なわれたのではなく、別工程であったと推測される。左側壁では最大4段、高さ0.56m、右側壁では最大3段、高さ0.5m残存している。相対的に残存状態の良い左側壁の状況を見る限り、羨道側壁の持ち送りは玄室ほど顕著ではなかったと考えられる。

敷石 玄室後半部は床面まで盜掘を受けており、敷石は失われている。玄室前半部においても、敷石は所々欠失しているが、奥側はφ10cm未満の角礫と円礫を用い、玄門に近付くほど使用石材は大きくなり、最大の石はφ26cmを測る。羨道には敷石は認められないが、盜掘で消滅したのではなく、当初より敷設されなかつたと判断される。

基底石 玄室両側壁の基底石は奥壁から立柱石まで角礫を基本的に平手置きし、整然とした胴張り形の曲線を描くように内側面を削えている。小口置きされている箇所もあるが、胴張り形曲線を保つために石材の長さを調整したものと見做し得る。

これに対し、羨道の基底石は角礫の小口置きが主体で、左側壁の立柱石に接する1石のみが長手置きされている。また、左側壁の前4石は小型の角礫を不規則に据えている。これは、上段を支えるに足る大きさの石材を何らかの事情で確保できなかつたため、小型の礫を横および斜め方向に配することで他の基底石1石分の幅と長さを補ったものと想定される。

基底石の状況からも、玄室と羨道は別々の工程で構築されたことが裏付けられる。さらに、羨道左側壁前半部が当初設計どおりの基底石設置を果たせなかつたと想定されることから、玄室の構築が羨道に



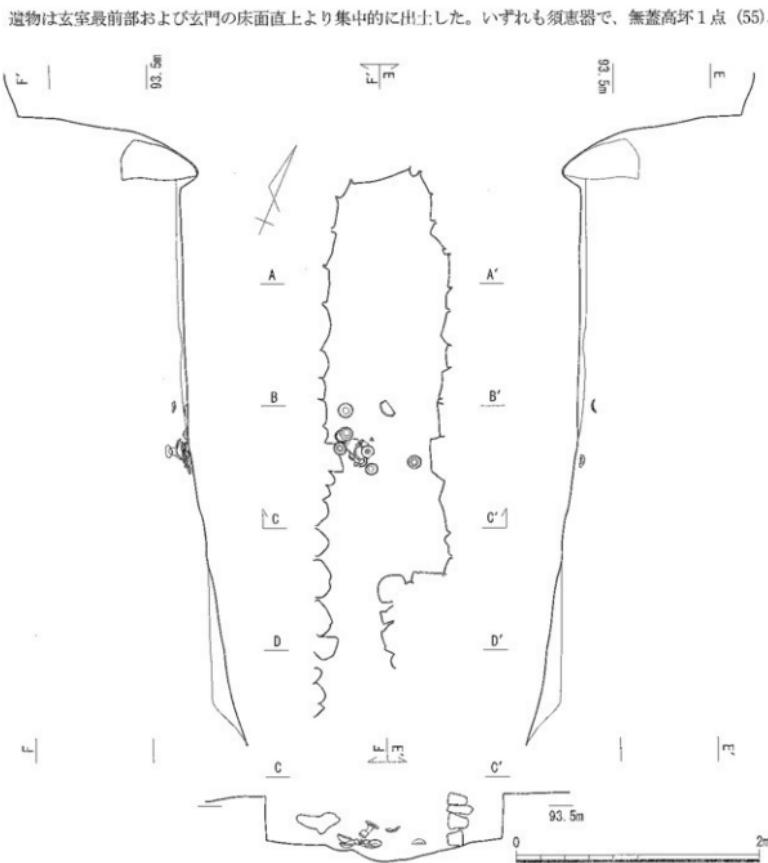
第37図 A5号墳石室実測図

先行したと判断される。

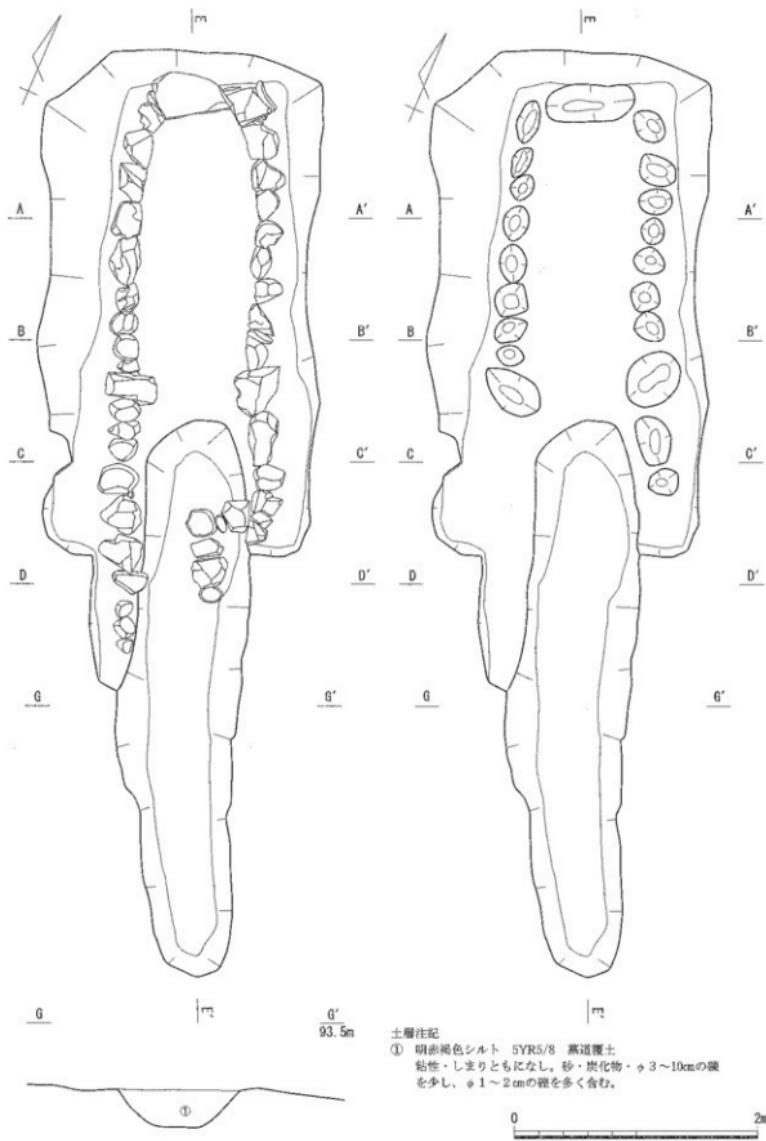
墓坑・墓道 墓坑は長方形プランを呈するが、右側壁の延長線上に5石から成る配石を追加したことにより、この配石のうちの最大の石の幅に合わせるように墓坑前壁の一部が拡張されている。また、奥壁石・立柱石をはじめ基底石の大部分に対して設置用の小土坑が掘削されているが、羨道左側壁前半部と羨道右側壁全部の基底石については、小土坑は掘削されていない。

墓坑と墓道は主軸を共有しており、墓道の溝状掘り込みは羨道最後部まで食い込んでいる。この溝状掘り込みは墓坑が部分的に南へ拡張された箇所まで埋め戻され、水平に近付いた新たな面上に前述の追加配石が施されている。土層注記において、溝状掘り込み（墓道）の埋め戻し土は玄室とその各壁背後に床込めされた掘形床土と同質となっているが、施工された経緯は全く異なっている。

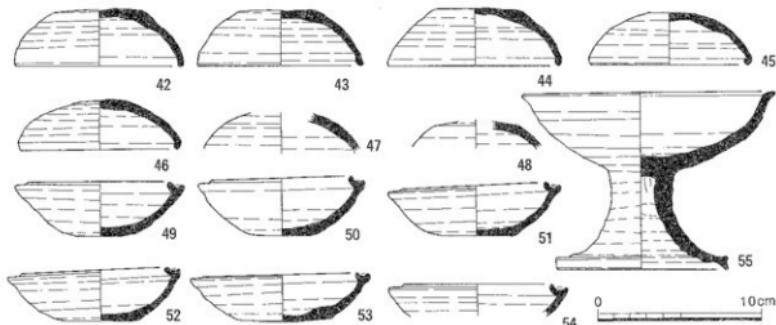
③遺物の出土状況（第38図、図版25）



第38図 A 5号填石室遺物出土状況図



第39図 A 5号墳基底石・墓坑実測図



第40図 A5号墳出土遺物実測図

坏身5点(49~53)、坏蓋5点(42~46)がほぼ完形の状態で検出された。坏蓋と坏身はそれぞれ同型式から成り、かつ同数存在することから、これら10点で5セットの蓋坏を構成していたと判断される。無蓋高坏55は倒立状態で出土した。多くは玄門の右立柱石に寄っているため、追葬に際して前葬者に伴う副葬品を片付けたと考えるのが自然であるが、玄室後半部は徹底的に盜掘されているため、これらの遺物も追葬終了(廃絶)時の原位置を保持していたとは限らず、追葬に伴う片付けと即断することはできない。

古墳を検出する過程で、周溝の外側においても數点の須恵器片が出土した。

④出土遺物(第40図、図版129)

須恵器 石室出土の須恵器(42~46・49~53・55)は全て遠江IV期後半に属し、恐らく葬送1回に伴う副葬品と考えられる。周溝外側で出土した坏蓋47・48および坏身54も遠江IV期後半に位置付けられる。

⑤小結

A5号墳は出土遺物を見る限り、遠江IV期後半に埋葬が行なわれたことが理解される。しかし、石室の開口部に追加施設された配石や玄門付近に片付けられた可能性のある一群の副葬品等を考慮すれば、少なくとも1回は追葬が行なわれた蓋然性が高い。残念ながら石室内は徹底的に盜掘されており、遠江IV期後半に比定される石室出土須恵器が初葬(古墳築造)に伴うものか追葬に伴うものか判然としない。追葬に伴うとすれば、さらにこれらを片付ける追葬が後続したと考えられるので、その場合、A5号墳では3回以上の埋葬が想定される。また、これらの須恵器が追葬に伴うのであれば、A5号墳の築造は遠江IV期後半を遡る可能性も考えられるが、ここでは築造時期を一応遠江IV期後半と仮定しておく。

(6) A6号墳

①墳丘・周溝(第41図、図版26)

墳丘盛土は完全に失われている。特に谷に向かう西~南西側の流出・擾乱が烈しく、周溝もこの部分では確認されなかつた。残存する周溝に囲まれる範囲は東西5.2m、南北8.0mを測り、南北に長い楕円形プランの円墳である。周溝の幅は北東部で最大となり、1.3mを測る。

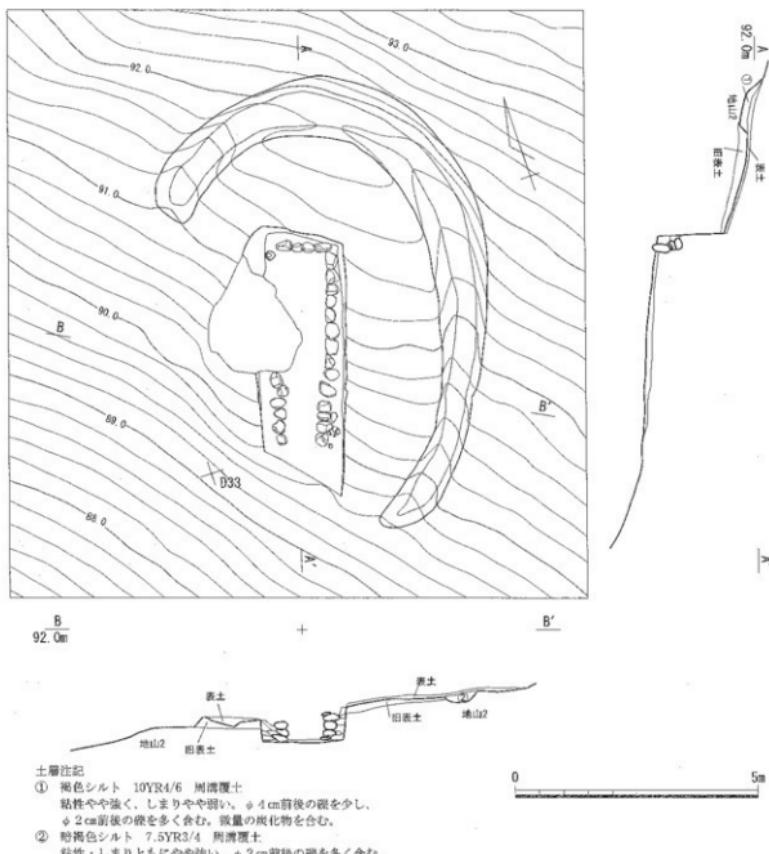
②埋葬施設(第42~45図、図版26~28)

古墳の中央に単室系擬似両袖式横穴式石室が構築されており、南南西に向けて開口する。墓坑右壁から玄室中央部床面に達する大規模な盜掘洞により、玄室右側壁は完全に破壊されている。

天井石 石室内に崩落した天井石が5石確認されている。長軸55~70cm、短軸35~50cmを測る大型の板状角砾を用いており、個数としては良好に残存すると言える。しかしながら、横穴式石室の天井石は通

常、長軸を石室の主軸に直交させて架構するが、当古墳の天井石は開口部から数えて2石目は長軸が鉛直方向に近い状態で、同3石目は長軸が石室の主軸にはほぼ平行して検出された。これはやはり自然崩落ではなく、当古墳を西側から襲った大規模な盗掘によりこれら2石は石室上端から外され、盜掠が完了するとそのまま石室内に投棄されたと想定される。他の3石は長軸が石室主軸との直交を保持していることから、自然崩落と考えられる。

石室開口部に最も近く崩落している天井石は立柱石の上方に架構されていたと推定される。図上操作ではあるが、上記の盗掘で外された天井石2石を本来架構されていたと思しき状態に置き直してみると、玄室の天井に、残存する天井石の平均2石分の空白が生じることが判明する。ゆえに、天井石は玄室天井部に本来7石架構され、うち2石は後世に盗出された疑いがある。なお、羨道に天井石が架構されていたかどうかは不明である。



第41図 A 6号墳墳丘図

玄室 左側壁は一直線を成し、右側壁も同様の状況であったと想定される。玄室は奥壁に最大幅を有し、玄門側幅が最も狭くなる長台形プランを呈す。奥壁は扁平でやや大型の円礫4石を縦に据えて基底石とし、その上に小型の円礫を小口積みしている。2～4段目は背後の墓坑後壁に向かって持ち送り気味となり、その上は逆に前方へ持ち送っている。奥壁は右側上方を中心に約1/3が崩落しているが、左側壁沿いに最大6段、高さ1.08m残存する。また、奥壁には目地通りが認められる。

立柱石は左側壁に高さ54cmの大型角礫を、右側壁に高さ44cmの大型円礫を用いている。側壁からの突出は左立柱石が0.16m、右立柱石が0.15mを測る。左側壁が良好に遺存しており、最大10段、高さ1.1m残存する。円礫を小口積みし、3段目までは礫が垂直になるように積載するが、4段目以上は内側へ持ち送り積みされている。また、3段目までは前下がりに傾斜する目地通りが認められるが、4段目以上は目地による積載の単位は看取できない。

羨道 羨道の幅は一定しており、長方形プランを呈す。玄室左側壁同様に、両側壁とも3段目までは壁面の垂直を意識して円礫を小口積みし、左側壁では4段目以上を内側へ持ち送っている。両側壁とともに3段目まで目地通りが認められ、側壁の3段目までが玄室と羨道に共通する積載作業の大きな単位であ



第42図 A 6号墳石室検出状況図

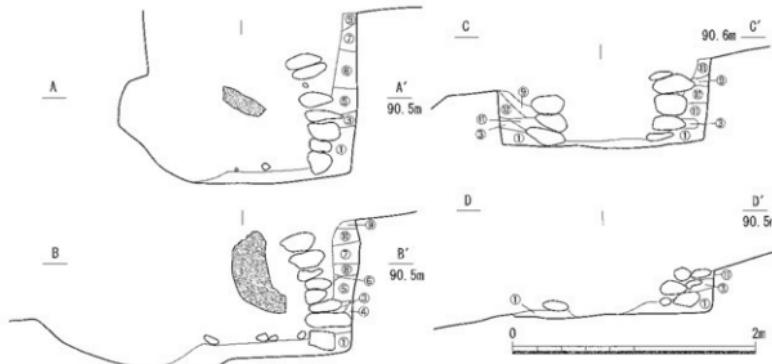
ったと考えられる。

敷石 盆掘により、玄室右半部の敷石は攪乱されているが、本来は玄室全面に敷設されていた蓋然性が高い。主に円礫を用いているが、角礫も少數ながら認められる。個々の大きさはφ 5～25cmと、ばらつきが大きい。羨道には当初より敷設されていなかったと推定される。

閉塞石 図化していないが、写真は残している（図版26-3、27-2・3）。羨道の立柱石前方約0.2mの箇所に部分的盛土を施し、その上に割損したものを含む円礫を小口置きしており、1段1列5石残存している。

基底石 基底石の設置工程として、まず奥壁4石を立て据え、その左端の石の奥壁面に小口の一辺を当てるように左側壁後端となる中型角礫を長手置きし、順次前方へ中型の角礫を長手置きして内側面が一直線となる左側壁の基底を形成する、という手順が想定される。恐らく右側壁の基底石設置も同様の工程を辿ったと考えられる。玄室右側壁の最前端の基底石は立柱石に接しているが、玄室左側壁のそれは立柱石から離れている。このことは、立柱石が基底石設置の指標とはならず、玄室側壁の基底を形成してから立柱石を据えた可能性を示唆している。羨道側壁の基底石は中型の円礫を小口置きしているが、玄室側壁の基底石に較べれば、雑然とした印象は否めない。

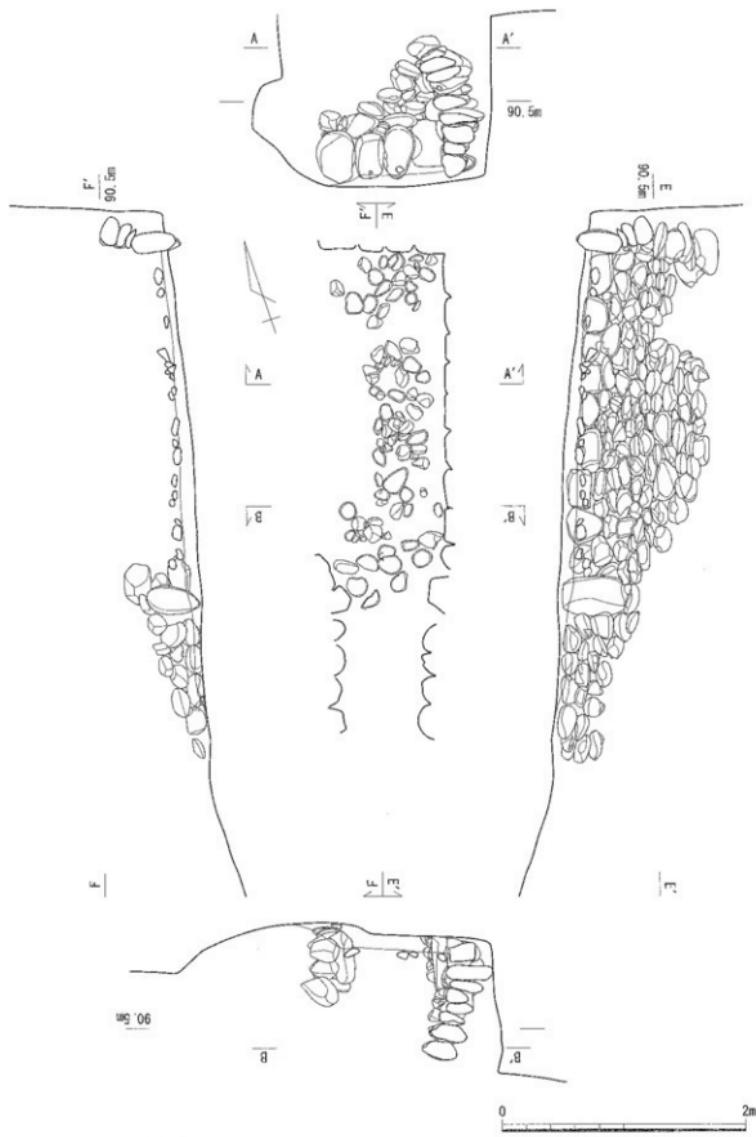
墓坑 玄室と同じく長台形プランを呈すが、前端部分は失われている。奥壁背後の掘形は現地表からの深さ1.44mを測る。奥壁の基底石のうち右側3石に対して設置用の小土坑が掘削されている。同様の小土坑が右側壁の最後端となる位置にも掘削されており、右側壁最後端の基底石も左側壁最後端の基底石と同様の置き方をされたとすれば、奥壁の基底石が現状の右側にもう1石据えられていた可能性がある。一方、立柱石に対応する小土坑は掘削されておらず、立柱石が基底石形成の指標でなかったことの傍証



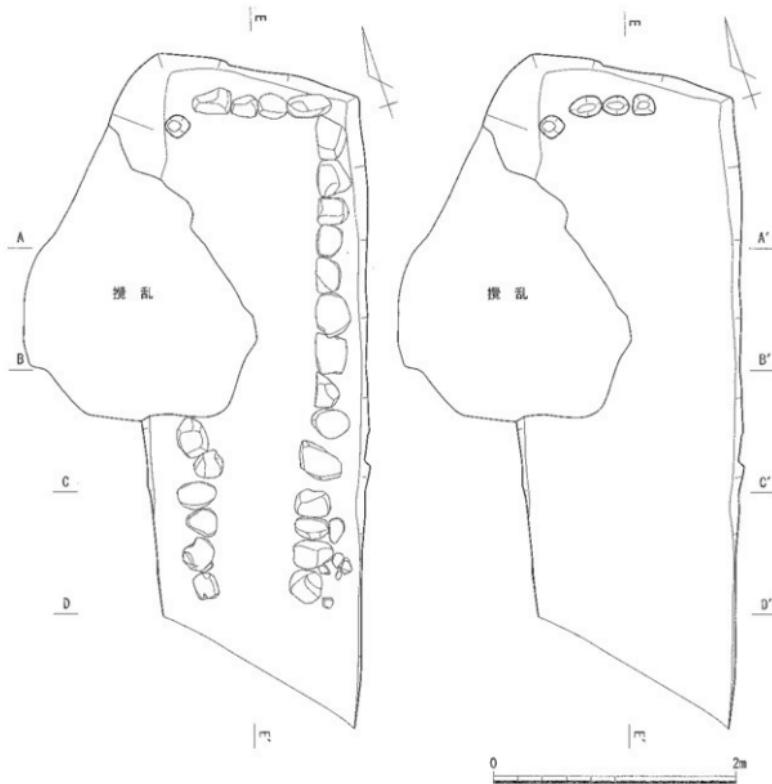
土層注記

- ① 褐色シルト 7.5YR4/3 裏込め・鉢床土
粘性やや弱く、しまり強い。φ 1cm前後の礫をやや多く含む。
- ② 黄褐色シルト・砂 10YR5/8 裏込め
粘性やや弱く、しまり非常に強い。φ 5cm前後の礫を少し含む。
- ③ 明黄褐色シルト・砂 10YR5/8 裏込め
粘性やや弱く、しまり強い。φ 1cm前後の礫を含む。
- ④ 明黄褐色シルト 10YR7/4 裏込め
粘性やや弱く、しまりやや強い。φ 5～20mmの礫を多く含む。
- ⑤ 明褐色シルト 7.5YR5/6 裏込め
粘性やや弱く、しまり強い。φ 5～10mmの礫を多く含む。
- ⑥ 青色シルト 7.5YR4/3 裏込め
粘性弱く、しまり強い。φ 1cm以下の礫を含む。
- ⑦ 暗赤褐色シルト 5YR3/3 裏込め
粘性やや弱く、しまり強い。φ 1cm以下の礫を僅かに含む。
- ⑧ 暗褐色シルト 7.5YR4/2 裏込め
粘性弱く、しまり強い。φ 5～20mmの礫を少し含む。
- ⑨ 暗褐色シルト 7.5YR3/4 裏込め
粘性やや弱く、しまり強い。φ 1～2cmの礫を若干含む。
- ⑩ 明褐色シルト 7.5YR5/6 裏込め
粘性弱く、しまり強い。φ 2～3cmの礫をやや多く含む。
- ⑪ 明褐色シルト 7.5YR5/6 裏込め
粘性やや弱く、しまり強い。φ 2mm前後の白色砂礫を含む。
- ⑫ 淡褐色シルト 7.5YR4/4 裏込め
粘性やや弱く、しまり強い。φ 1～2cmの礫を若干含む。
- ⑬ 赤褐色シルト 5YR4/8 裏込め
粘性やや弱く、しまり強い。φ 5～20mmの礫をやや多く含む。

第43図 A 6号墳石室接出状況横断面図

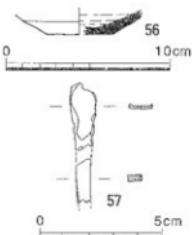


第44图 A 6号填石室实测图



第45図 A 6号墳基底石・墓坑実測図

と言える。墓道は確認されなかった。



第46図 A 6号墳出土遺物実測図

③前庭列石（第43図、図版26・28）

羨道両側壁の前端に接して、左右に伸びる列石が施設されている。主要な部分はD-D'断面に掛かり、左側壁の連続部分では小型の円礫を小口積みし、最大3段、高さ0.33m残存する。右側壁の連続部分では扁平な小型円礫1石のみ残存するが、本来は左側壁連続部分と同様の状況を呈していたと想定される。一見、C古墳群の調査で明らかにされた大屋敷C50号墳の外護列石を彷彿させるが、C50号墳の場合と異なり、墓坑の左右外側に進出して墳丘内を環状に巡らす墓坑振形内に收まり、裏込めさえも羨道と共有していることから、墳丘施設としての外護列石ではなく、石室に付属する施設と理解される。羨門の左右外側を前庭として莊嚴化を図ったとも考えられるが、ここでは複室系振似両袖式横穴式石室の「前庭」とは区別して「前

庭列石」と呼称する。

④遺物の出土状況

石室内は徹底的に盜掘され、僅かに土器片や鉄片が出土するも、原位置を保つものは皆無である。

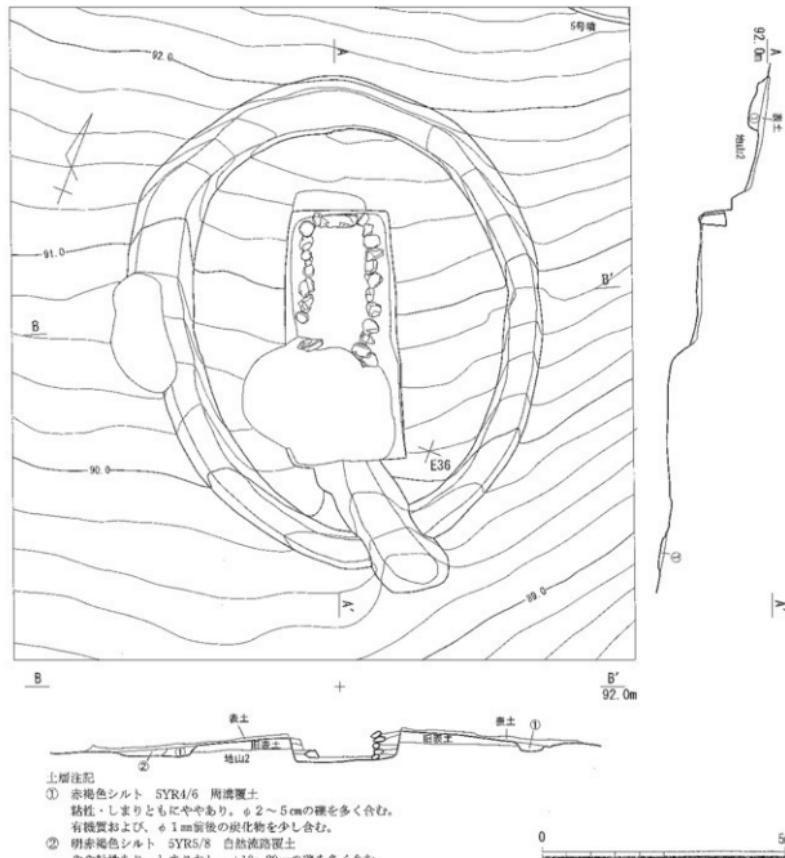
⑤出土遺物（第46図、図版129）

須恵器 56は石室出土の环身底部で、遠江IV期後半に比定される。

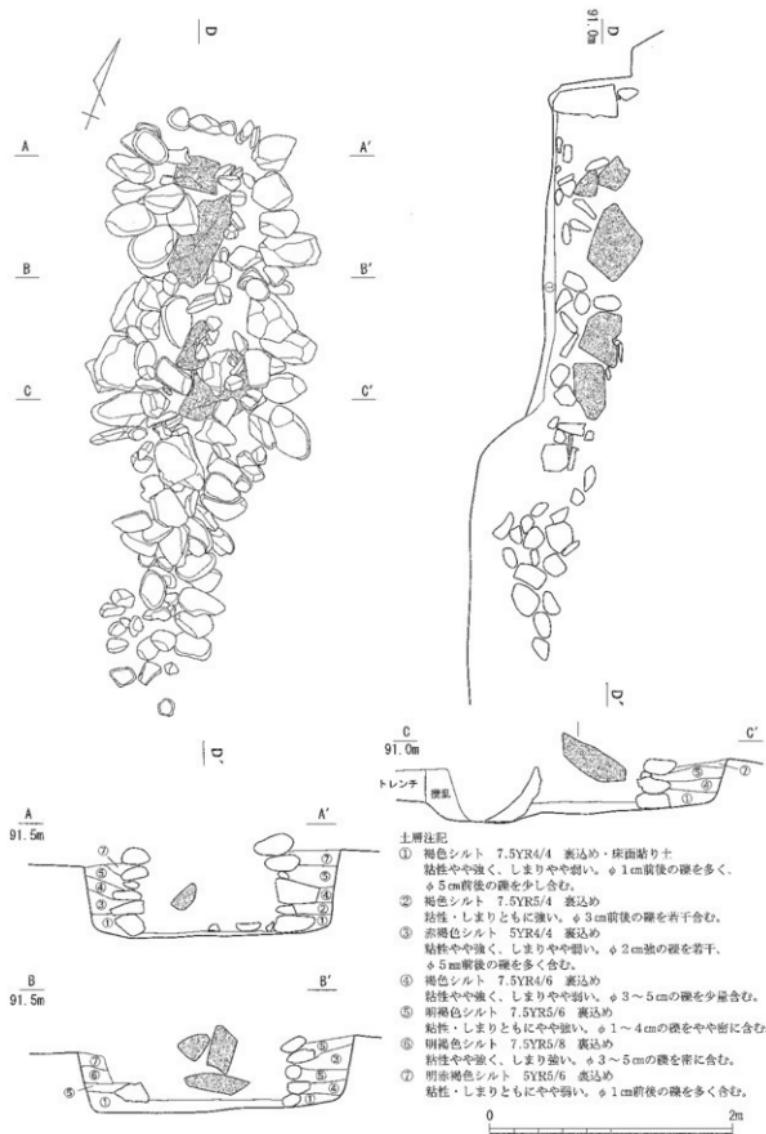
鉄製品 57は鉄鎌で、恐らく尖根式長頸鎌である。玄室後部より出土した。

⑥小結

僅かに残存する出土遺物からは、A 6号墳において遠江IV期後半に埋葬が行なわれた事実のみ指摘でき、追葬等に関しては全く不明である。遠江では稀少な構造である円礎積み奥壁（鈴木一2001）および前庭列石を採用したA 6号墳は、大屋敷A古墳群の中でも単独立地し、特異な存在と評価できる。



第47図 A 7号墳横丘図



第48図 A7号填石室検出状況図

[7] A 7号墳

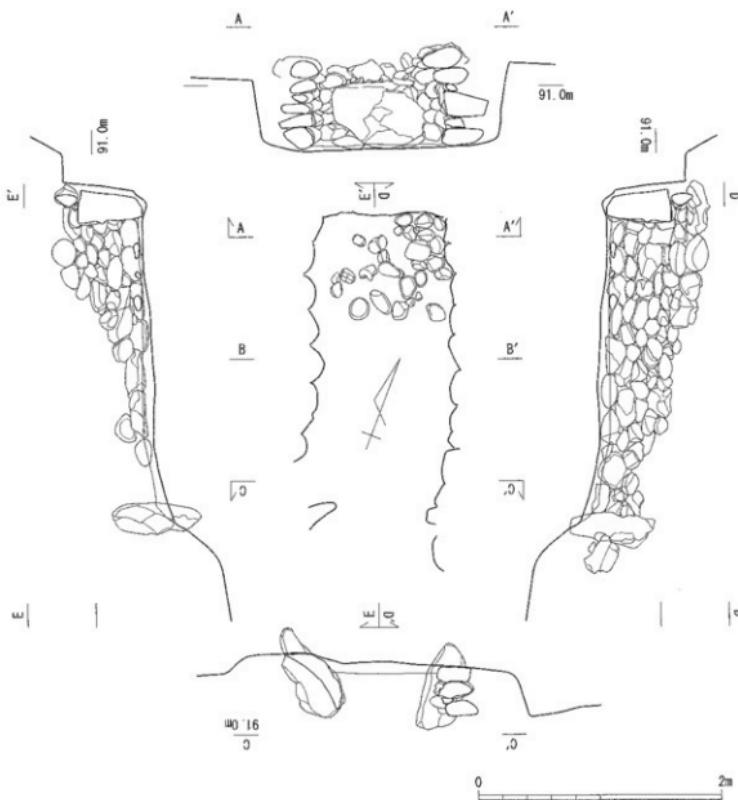
①墳丘・周溝（第47図、図版29）

A 5号墳より南約4mの尾根東側斜面に立地する。墳丘盛土は流失している。周溝は西側の一部が擾乱され、南側に下るに従い幅が狭くなっているが、全周確認された。周溝により囲まれる範囲は東西6.5m、南北8.2mを測り、南北に長い楕円形プランの円墳である。

②埋葬施設（第48~49・51・52図、図版29・30）

墳丘の中心線より僅かに西寄りに単室系擬似両袖式横穴式石室が構築されている。墓坑後壁上端が擾乱を受け、埋葬施設前半部が風倒木により破壊されている。開口方向は南南東である。

天井石 玄室後部から立柱石にかけて計5石の大型板状・柱状角礫が壁石材とともに崩落しているのが確認された。最大のものは長軸82cmを測り、玄室の天井幅は最大箇所でもこれ未満であったことが理解される。残存する天井石の幅の合計から考えて、これら5石の平均的寸法の天井石がもう1石あれば、



第49図 A 7号墳石室実測図

玄室の天井はほぼ隙間なく架構されると推定される。羨道に天井石が架構されていたかどうかは、定かではない。

玄室 玄室プランは長辺がやや不整な長方形である。奥壁は大型の板状角礫を立てて鏡石とし、さらにその左右に小型の角礫を垂直に小口積みし、鏡石の上端まで最大5段積載しており、幅広の奥壁を志向したことが窺われる。鏡石の上にも角礫が積載され、奥壁は最大7段、高さ0.78m残存する。

左側壁は角礫と円礫を併用して小口積みし、最大6段、高さ0.86m残存する。各段の目地は前方へ斜降しながらも良好に通っているが、立柱石の後2石目の基底石で途絶している。また、6段目は長径30cmを超える中型以上の角礫・円礫を積載している。右側壁も最大6段、高さ0.72m残存し、各段の目地通りは認められるが、左側壁よりもやや不整である。

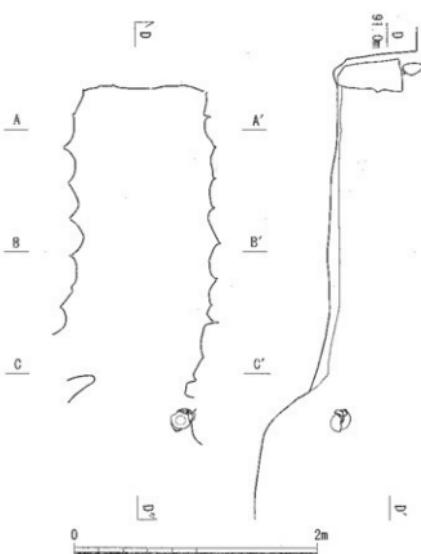
また、左側壁同様、6段目には他の段よりも大型の礫が用いられている。左右両側壁ともに4段目までは壁面が垂直になるように積載し、5段目以上は内側へ持ち送り積みしている。

立柱石の床面よりの高さは現状で左右ともに0.52mを測るが、風倒木のために傾いてしまっており、本来は左側0.54m、右側0.6mの高さであったと推定される。左立柱石は長軸74cm、右立柱石は長軸82cmの長大な角礫であり、墓坑掘形底面に20cm前後突き刺すように設置されている。比較的傾倒度の小さい左立柱石の側壁からの突出は8cmを測る。

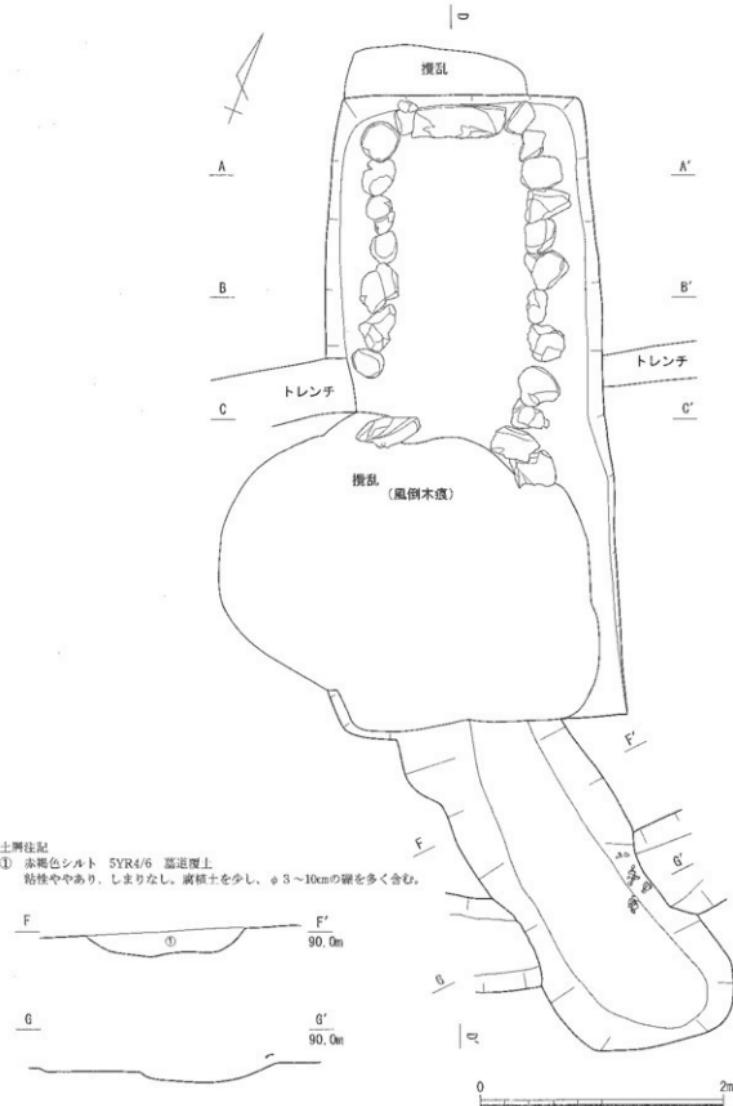
羨道 風倒木による破壊のため、ほとんど壊滅状態であるが、左側壁の基底石1石のみ残存する。中型の角礫を用いている。

敷石 玄室の奥側約1/3に残存する。 ϕ 5~15cmの角礫と、それより大きい ϕ 20cm前後の扁平な円礫を使用している。築造当初の敷石の敷設状況は定かではない。

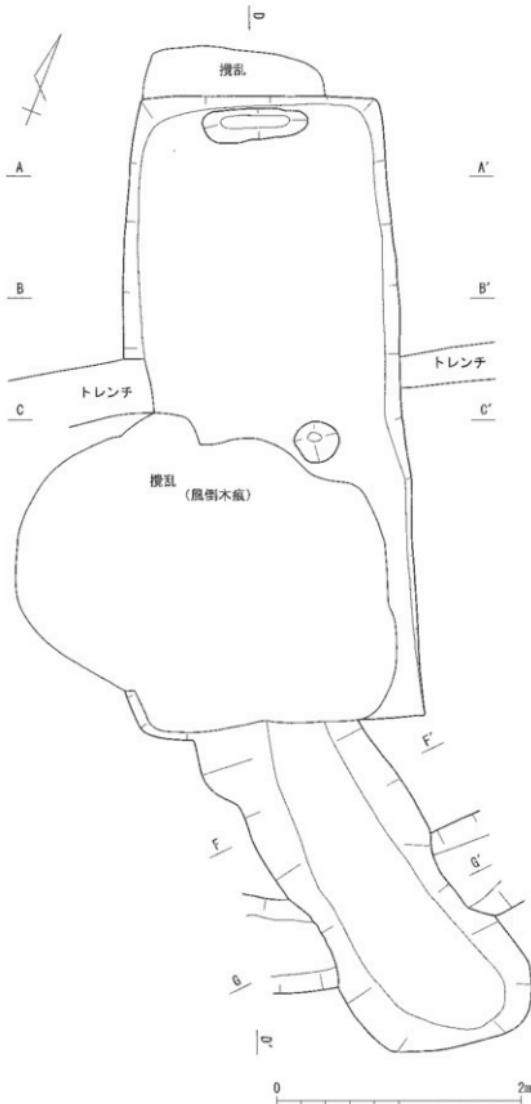
基底石 基底石には中型の角礫と円礫を用い、小口置きまたは長手置きしているが、角礫が卓越する。奥壁の基底石は鏡石と左右1石ずつの中型角礫3石から成り、両側壁最後部の石は奥壁の左右端に接するように配置されている。左側壁6段目最後部および右側壁5段目最後部の石が長手面を内側に向け、明らかに奥壁を左右の外側から挟み込むように積載されていることからも、両側壁最後部の基底石が単に一角を奥壁に接するのではなく、奥壁を両側から挟む構築法が意図された置き方であると解釈できる。また、立柱石から後2石目までは、そのさらに後方が整然と長方形プランを形成するのに対し、両側壁とも石室の主軸よりやや西に振れてしまっている。風倒木の影響も多少考慮しなければならないのかもしれないが、石室設計の指標としては、立柱石よりも奥壁が優先したと考えられる。このことは、前述したように、左側壁の立柱石より後2石目から前方には側壁の目地通りが認められないという事実からも首肯できる。



第50図 A 7号墳石室遺物出土状況図



第51図 A 7号墳基底石実測図・墓道遺物出土状況図



第52図 A7号墳墓坑実測図

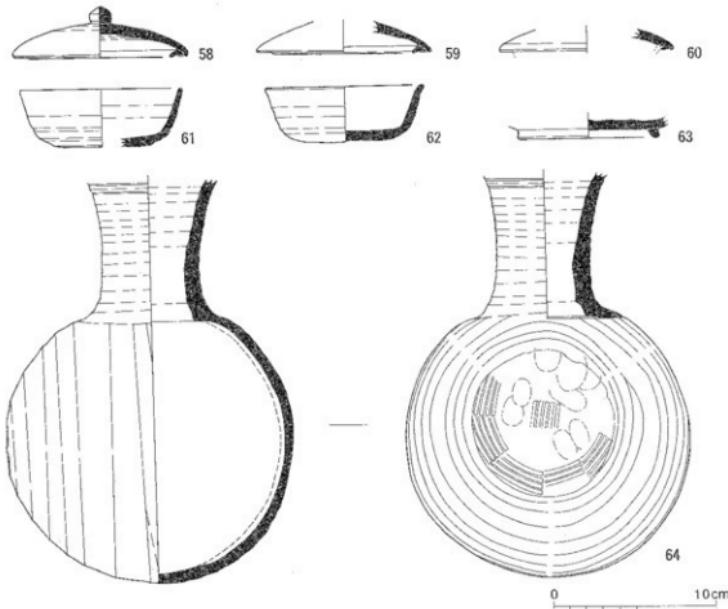
墓坑・墓道 墓坑は長方形プランを呈し、後壁では現地表面より1.0m掘り込まれている。奥壁の鏡石と左立柱石を立て据えるための小土坑が彫削されているが、右立柱石に対しても小土坑が存在した蓋然性は高い。

墓道の伸延方向は墓坑の主軸に対して東に大きく振れており、むしろ谷の等高線に直交している。
 ③遺物の出土状況(第50・51図、図版30)

墓道の左立柱石直南で須恵器フラスコ形瓶64が出土した。また、墓道の周溝との東側交点においても須恵器片が出土し、墳丘の外側にも須恵器片が散在していた。

④出土遺物(第53図、図版129・130)

須恵器 坏蓋58・59および坏身61・62は墓道出土で、遠江IV期後半に比定される。坏蓋60と坏身63は墳丘外出土で、63は返り付きの坏蓋とセットを成すと考えられ、遠江IV期末葉に比定される。フラスコ形瓶自体の下限は遠江IV期末葉であるが、64は同IV期後半に比定できるか。



第53図 A 7号墳出土遺物実測図

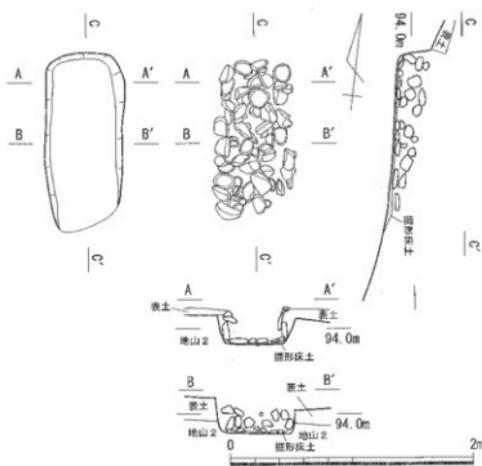
⑤小結

羨道および墓道より出土の遺物の年代観から、A 7号墳は遠江IV期後半に築造された可能性が高い。ほぼ同時期の築造で同じ單室系擬似両袖式横穴式石室を有する古墳でも、北隣のA 5号墳よりも石室の造りが安定し、かつ規模がやや大きいので、A 7号墳がA 5号墳よりも若干階層的に優位であると考えられる。

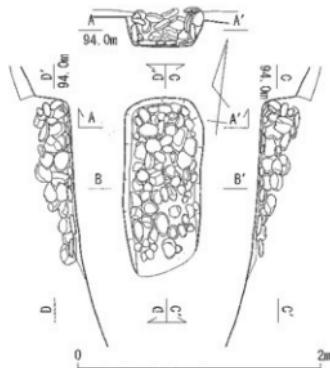
(8) A 8号墳

①墳丘・周溝

墳丘盛土・周溝とともに確認されておらず、埋葬施設のみ検出された。隣接するA 4・A 5号墳との距離を考慮すれば、A 8



第54図 A 8号墳石室検出状況図・墓坑実測図



第55図 A 8号横石室実測図



第56図 A 8号填出土遺物実測図

号墳には築造当初より周溝が掘削されなかつた可能性が高い。

②埋葬施設（第54・55図、図版31・32）

真南よりも若干南南東に向けて開口する無袖式横穴式石室が構築されている。

玄室 奥窄まり形を呈する玄室プランである。奥壁・側壁ともに敷石の上から構築されている。裏込めについては、土が僅少であったため、注記を果たせなかつた。壁材には全て小型の円礫が使用されている。奥壁は最下段を縱置きし、その上は持ち送り積みされている。最大3段、高さ0.28m残存する。積み方は不統一である。

側壁は基底石を長手置きし、その上は小口積みのようであるが、割損した材も目立ち、積み方に齊一性は見い出し難い。左側壁で最大3段、高さ0.3m残存し、右側壁で最大3段、高さ0.28m残存する。左右側壁ともに目地通りは看取できない。

敷石 敷石は玄室の全面に敷設され、残存状態は良好である。むしろ、墓坑の底面全面に敷設され、その上に石室が構築されているとの表現が妥当であろう。基本的にφ10cm以下の扁平な円礫が使用されているが、壁材とほぼ同様のφ20cm前後に達する円礫も用いられている。

基底石・墓坑 墓坑は長方形プランを呈し、後壁の現地表からの掘削深度は0.4mを測る。ほとんど墓坑壁に接するように、基底石が設置されている。つまり、墓坑の形状に合わせて石室プランが決定されているかのような様相を呈す。墓道は確認されなかつた。

③遺物の出土状況

第3表では須恵器壙蓋65の出土位置を「周溝外」と記載しているが、これはA 4号墳またはA 5号墳の周溝の外側で出土したことを意味する。つまり、これら近接2古墳いずれかよりの転落品とも考えられ、事実そうであれば、A 8号墳出土の遺物は皆無である。

④出土遺物（第56図）

須恵器 壙蓋65は体部上部で屈曲し、平坦な頂部を形作る。返りのある壙蓋なら遠江IV期末葉に比定される。

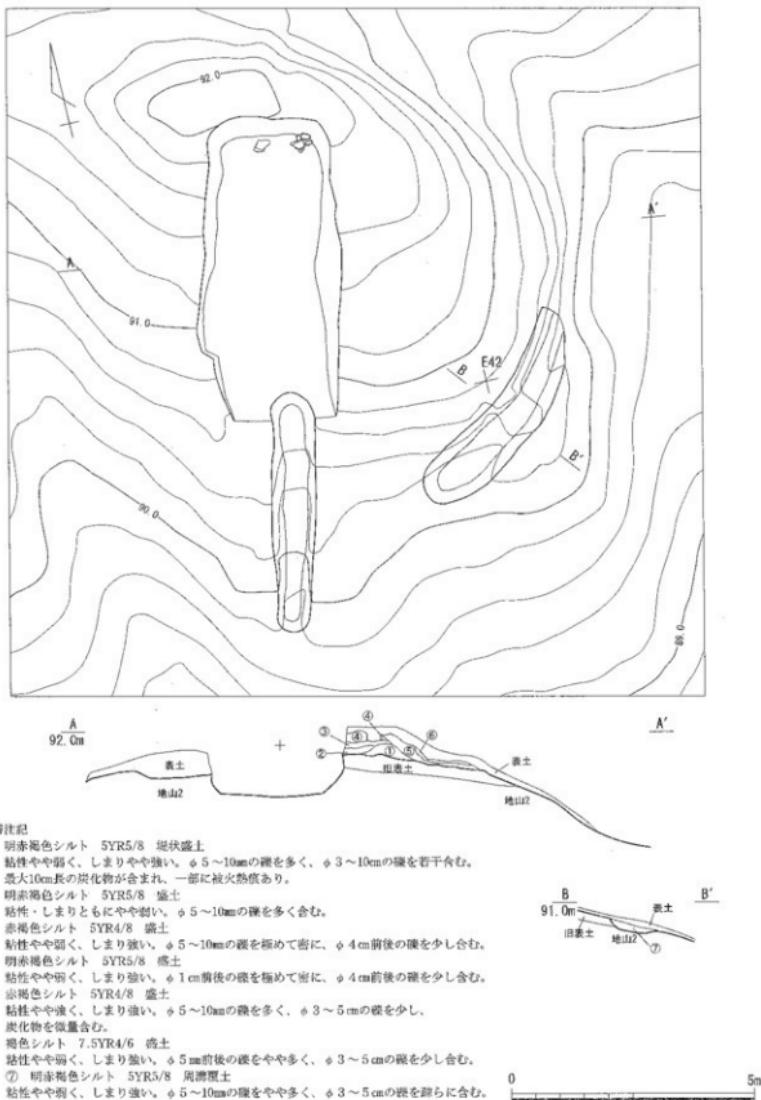
⑤小結

A 8号墳はA 4・A 5号墳より後出することは位置関係からもほぼ確実と考えられる。上記の出土須恵器がこれら3古墳のいずれよりの遺物であっても、A 8号墳の築造時期の上限は遠江IV期末葉に位置付けるのが無難である。敷石が良好に残存することから、盜掘により無遺物状態になったのではなく、もともと副葬品らしいものが納められなかつた可能性もある。それほどA 8号墳の階層性を低く評価せざるを得ないような埋葬施設の造りであると言える。

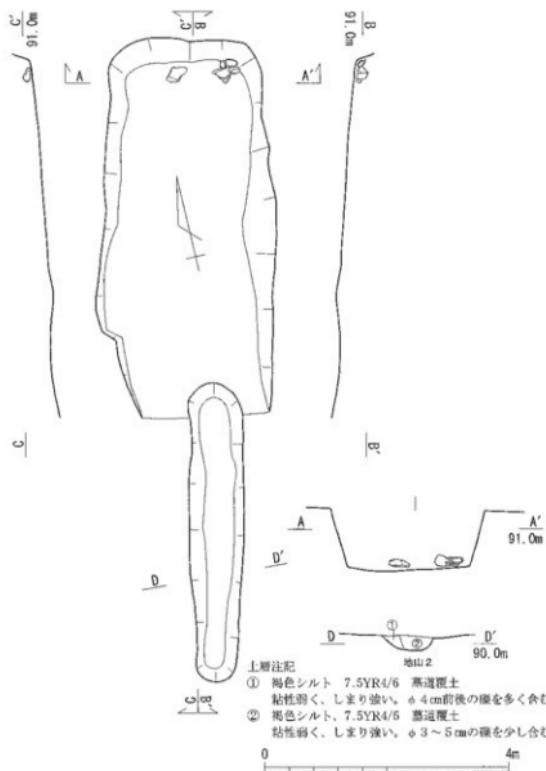
(9) A 9号墳

①墳丘・周溝（第57図、図版32・126）

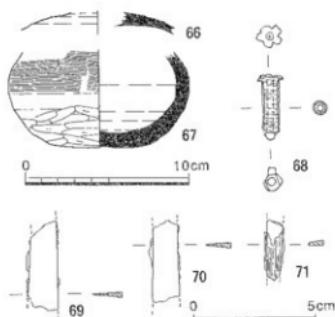
墳丘は古墳の北～東側に比較的良好に残存するが、西側では流失している。周溝は南東側で約1/8周分



第57図 A-9号填塗丘図



第58図 A 9号墳石室・墓坑実測図



第59図 A 9号墳出土土器・金属製品実測図

が残存するに過ぎないが、埋葬施設との距離等を勘案すれば、墳丘は本来東西10m以上、南北9m以上の円墳であったと考えられる。墳丘は旧表土直上に盛土され、最高0.5m残存する。

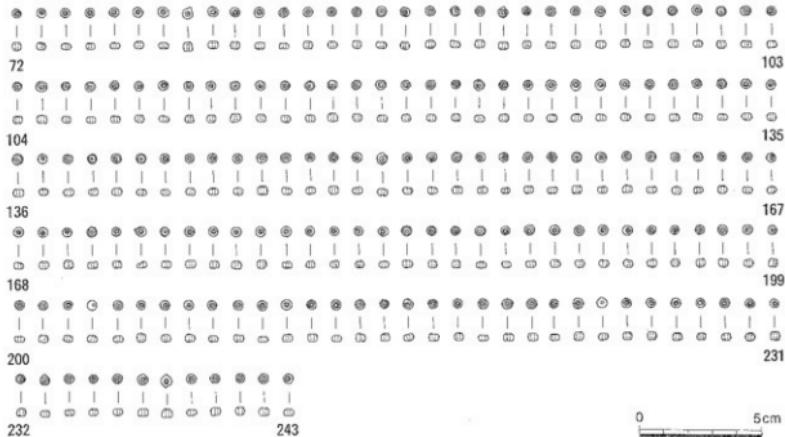
区画帯 盛土は6層に分かれるが、「堤状盛土」とした高さ0.25mの盛土は、古墳の中央部を環状に巡る様相が窺われ、「区画帯」と仮称し得る施設である。この区画帯の内側から盛土され、盛土が区画帯を凌駕したところでマウンドを整え、一次墳丘を形成している。次に区画帯の外側に幅広く盛土を施し、二次墳丘を構築して古墳を完成させたと考えられる。つまり、当古墳では二次墳丘が2層残存していることになる。

②埋葬施設（第58図、図版32）

古墳の中央部に真南より若干南南西寄りに開口する横穴式石室を構築しているが、残存状態が劣悪なため、石室形態は不詳である。

玄室・基底石 奥壁の基底石2石のみ残存している。鏡石の存在を想定すれば、墓坑後壁中央手前に残存する扁平な中型角礫は鏡石の下端を支える機能を有したと考えられる。墓坑北東コーナーに存在する基底石も中型角礫であり、奥壁の基底石とも、左側壁最後端の基底石とも捉えられる。背後に小型の円礫数石が遺存しているが、裏込めの一部と考えられる。

墓坑・墓道 墓坑は比較的整然とした長方形プランを呈するよう見えるが、右壁が前端より1.3mの箇所で屈曲し、横穴式石室の右片袖式のような形状となっている。後壁付近の現地表からの掘り込みは1.0mを測る。墓道は



第60図 A9号墳出土玉類実測図

主軸が墓坑主軸に平行し、墓坑主軸よりやや左寄りに掘削され、狭隘な小谷に向かって一直線に伸びている。

③遺物の出土状況

墳丘盛土は遺存しないが、墳丘内と思しき地点より須恵器壙蓋66が出土した。これに対し、須恵器甕67は墳丘盛土中より出土している。両頭金具1点(68)、刀子3点(69~71)、ガラス小玉172点(72~243)は墓坑覆土の簡作業によって検出されたため、出土状況の詳細は不明である。

④出土遺物（第59・60図、図版8・130）

須恵器 甕67は体部上半外面に横位のカキメを施し、体部下半～底部外面を手持ちの箝削りで仕上げている。口頸部と体部の注口が付く部位は欠失しているが、体部の形状から遠江III期後葉に比定される。
鉄製品 両頭金具68は芯棒の両頭部と筒金の花弁部の片側が欠損する以外は概ね良好に残存している。残存する花弁部は5弁で構成される。また、筒金には弓の木質が付着遺存している。刀子の茎71にも柄の木質が遺存している。

玉類 全てガラス製の小玉であり、色調も緑色で統一されている。

⑤小結

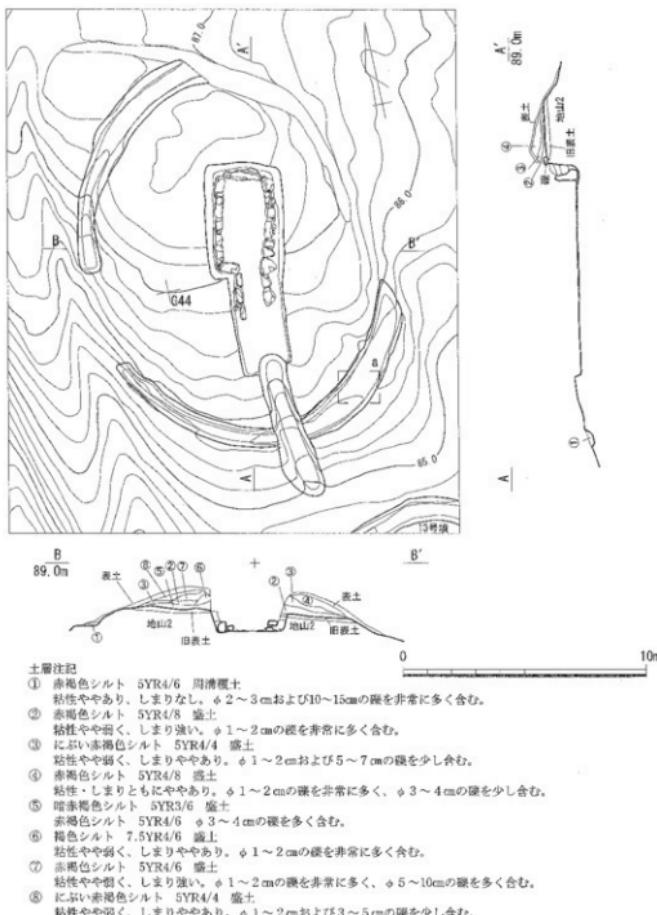
出土した須恵器の出土状況と年代観から、A9号墳の築造時期が遠江III期後葉であることはほぼ疑いないと考えられる。一方、追葬については全く不明である。石室については、墓坑のプランから右片袖式横穴式石室であるという推論を導くことは些か強引に過ぎるきらいがあるものの、1区東部に群在するとも言える他の右片袖式横穴式石室の存在を考慮すれば、A9号墳の埋葬施設も右片袖式横穴式石室である可能性は否定できない。石室は墓坑の規模から中規模以上と想定され、多数のガラス小玉と装飾付きの弓が副葬されていることから、A9号墳は大屋敷A古墳群において階層的上位に位置付けられる。このことは、遠江における後期古墳の埋葬施設として階層性が高いとされる右片袖式横穴式石室がA9号墳に構築されていた可能性を支持する要素である。

10) A10号墳

①墳丘・周溝（第61・62図、図版3・33・35）

A10号墳は1区東端に立地する。墳丘盛土は良好に遺存しており、旧表土直上からの高さは最大0.85mを測る。しかし、周溝の内側上端までは遺存していない。周溝は北西側と南側で残存し、これに開まれる範囲は東西11m、南北14.3mを測り、南北に長い椭円形プランの円墳である。

墳丘内配石 墓坑後壁上端の旧表土上に、長軸51cm、厚さ20cmを測る角礫1石が据えられている。当古墳は盜掘を受けているものの、大きさと検出状況から、この石が除去された天井石とは考え難い。一次墳丘構築に伴う何らかの施設の可能性があり、ここでは「墳丘内配石」と呼称しておく。



第61図 A10号墳墳丘図

②埋葬施設（第62～65図、図版33・35・126）

古墳の中央部に右片袖式横穴式石室が構築されている。主軸は真南より若干南南西に向いている。

玄室 中央部に最大幅を有し、奥壁幅が最小となる胴張り形の玄室プランを呈す。奥壁はチャートの大型板状角礫を立て据えて鏡石とし、その右側にも中型以上の角礫を2段以上積載して構成されている。鏡石より上段の石積みは恐らく失われており、現状の奥壁は高さ0.9mを測る。右片袖部の袖石は長軸80cm、幅42cm、高さ45cmの直方体状の大型チャート角礫1石から成り、右側小口面の一部を右側壁前端の基底石の小口面に接している。また、右片袖部の幅は0.7mを測る。

側壁は右側壁の後半部で最大3段、高さ0.86m、左側壁の前半部で最大2段、高さ0.55m残存する。基底石はいずれも大型角礫を長手置きし、2段目以上は中型～大型の角礫を小口積みしている。石材どうしが大きいため、側壁の間隙も大きく、そのため小型の円礫または角礫で隙間を充填している。持ち送りについては、右側壁は壁の直面を保つように基底石から各段の石を若干内側へ傾斜させている状況が看取できるが、左側壁では明瞭に見られない。また、目地通りは右側壁の後半部で認められるが、左側壁は残存状態が悪く、不明である。なお、側壁の石材は玄室・羨道ともにすべてチャートである。

羨道 玄室同様に大型の角礫で構成されているが、右側壁の前から2石目以外はより低平な角礫を平手積みしている。持ち送りの状況については不明である。現状では左側壁が短く、築造当初より左右の側壁長に差があったのか、或いは左側壁の前端に基底石がもう1石存在したのかは定かではない。床面貼り土および裏込め最下層には、ほぼ羨道から異なる土が新たに用いられている。

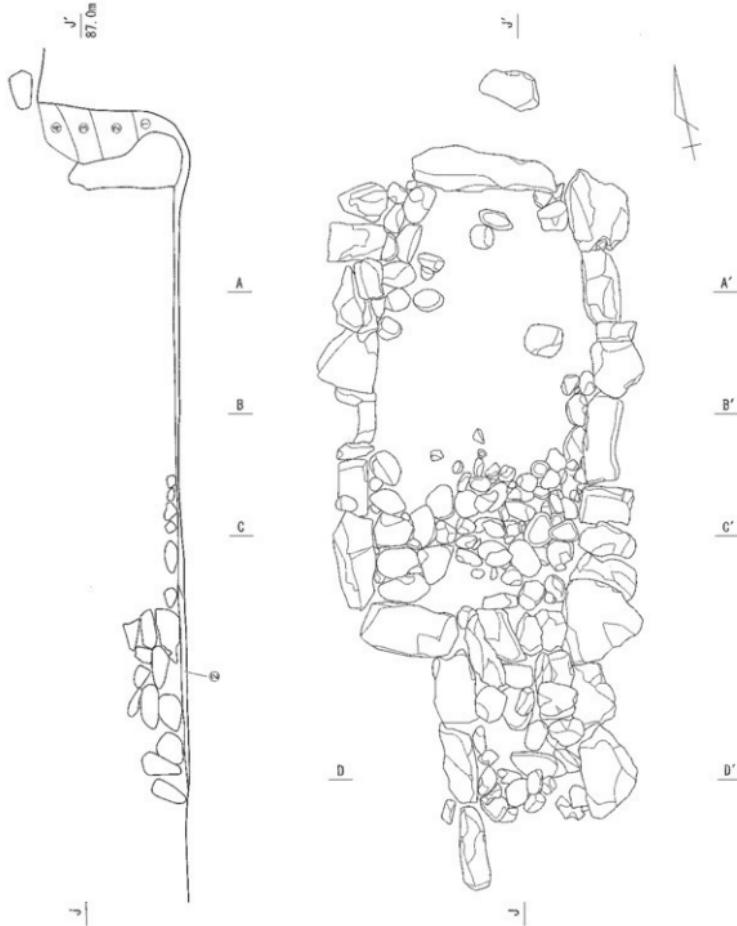
敷石 盜掘により、玄室中央～後部の敷石は攪乱されている。最大φ40cm以上に達するような、敷石としてはかなり大型の円礫主体に敷設されており、その間隙をφ10cm未満の円礫または角礫で充填している。羨道には敷石が敷設されなかったようである。

閉塞石 袖石の長手面に揃えるように、羨道の奥側幅一杯に閉塞石が積載されている。平均的大きさがφ35cm前後の円礫・角礫を小口積みし、中には長軸50cmを超える大型角礫も使用されている。最大3段、高さ0.48m、奥行き1.36m残存する。

基底石 基本的に大型の角礫を長手置きしている。奥壁を両側から挟み込むように玄室両側壁最後端の石が設置されている。玄室右側壁に較べて、同左側壁は胴張りの度合いが大きい。これは、玄室右側壁では比較的小型の角礫を小口置きして側壁の長さを調整した部分が小さいのに対し、同左側壁では大型角礫2石を小口置きして側壁の長さ調整を図ったことに関係すると考えられる。また、袖石に相対する左側壁の1石は袖石の長軸に劣らぬ幅を有し、前端は袖石の外側長手面に揃えられており、この2石で玄門を定めてから玄室と羨道の基底石設置に着手したと想定される。

墓坑・墓道 墓坑は石室の形状に沿うかのような右片袖形プランを呈し、短辺の長さの異なる長方形掘形を合わせたようになっている。旧地表からの掘り込みは後壁で1.3mを測る。玄室の基底石の大部分に對して設置用の小土坑が各塚連続状態で掘削されているが、石室構築の要となった玄門の2石に対する小土坑は存在しない。これは、2石が安定した形状を有し、小土坑の必要がなかったためとも考えられる。一方、小土坑に加えて、支石を下端に咬ませる基底石も目立つ。墓道は石室の主軸に対してやや東へ振れながらほぼ一直線に斜面を下っている。

実は、石室は玄室と羨道では主軸が異なり、墓坑も、右片袖状の屈曲部を境に後半部と前半部とでは主軸が異なる。そして、羨道・墓坑前半部・墓道は主軸を共有している。このことは、玄室の設計は基底石を設置した段階で確定したものの、丘陵の麓から続く墓道（参道）は古墳築造以前からすでに決まっていて、墓道の方向は何らかの規制のもとに変更不可能であったため、妥協の策として羨道とそれを擁する墓坑前半部の主軸を玄室ではなく墓道の主軸に合わせたという経緯を想定させる。従って、石室の設計において、羨道の基底石設置は玄室のそれより遅れたと推定される。また、墓道から羨道に至る

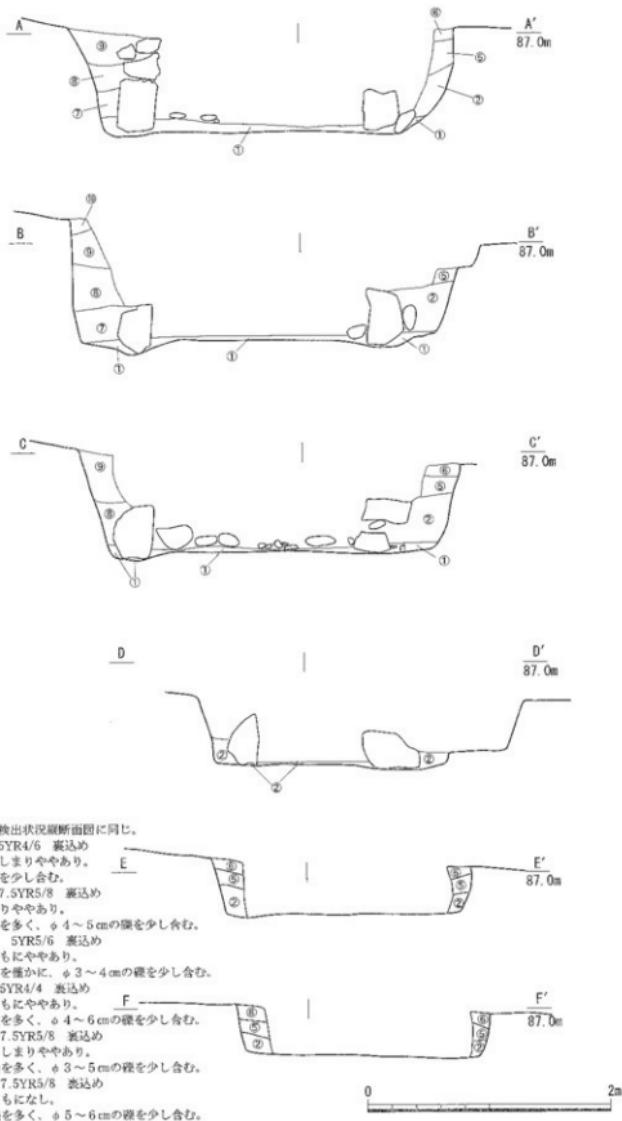


土層注記

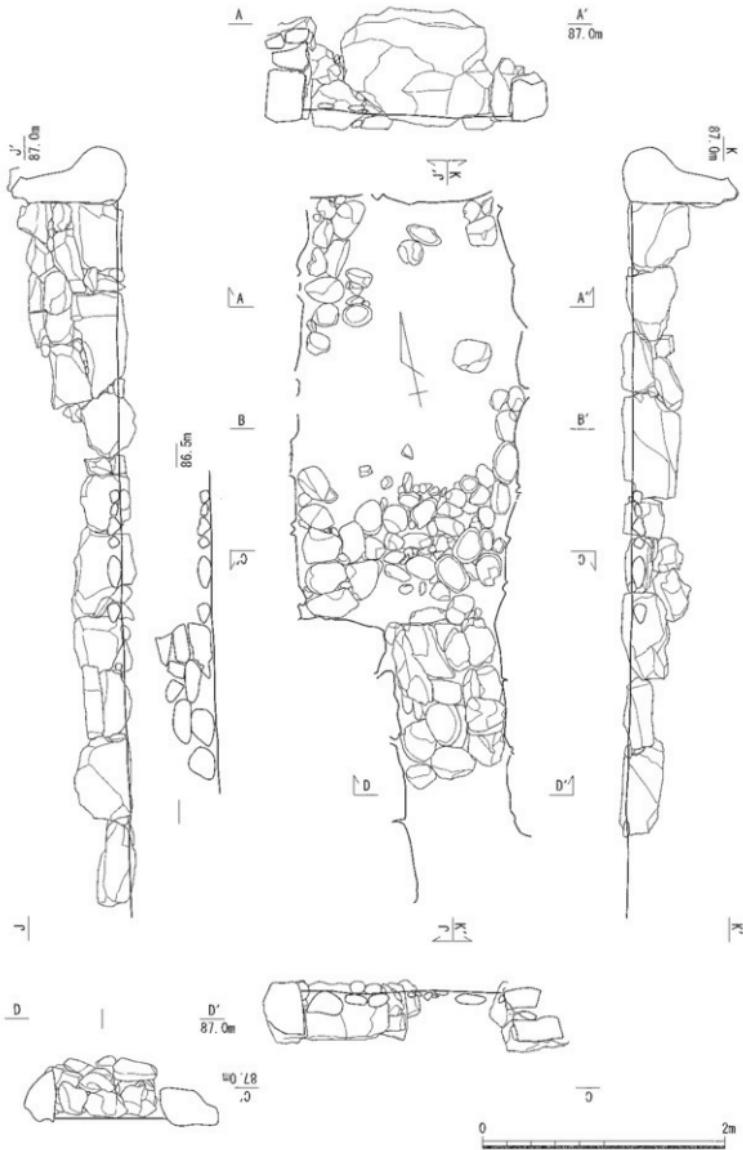
- ① 黄褐色シルト 10YK5/6 裏込め・床面貼り土
粘性ややあり、しまり強い。φ 3~4cmの礫を多く含む。
- ② 赤褐色シルト 5YR4/8 裏込め・床面貼り土
粘性やや弱く、しまり強い。φ 1~2cmの礫を多く、φ 5~10cmの礫を少し含む。
- ③ 赤褐色シルト 5YR4/8 裏込め
粘性やや弱く、しまりややあり。φ 1~4cmの礫を少し含む。
- ④ 明褐色シルト 7.5YRS/8 裏込め
粘性なく、しまりややあり。φ 1~2cmの礫を少し含む。



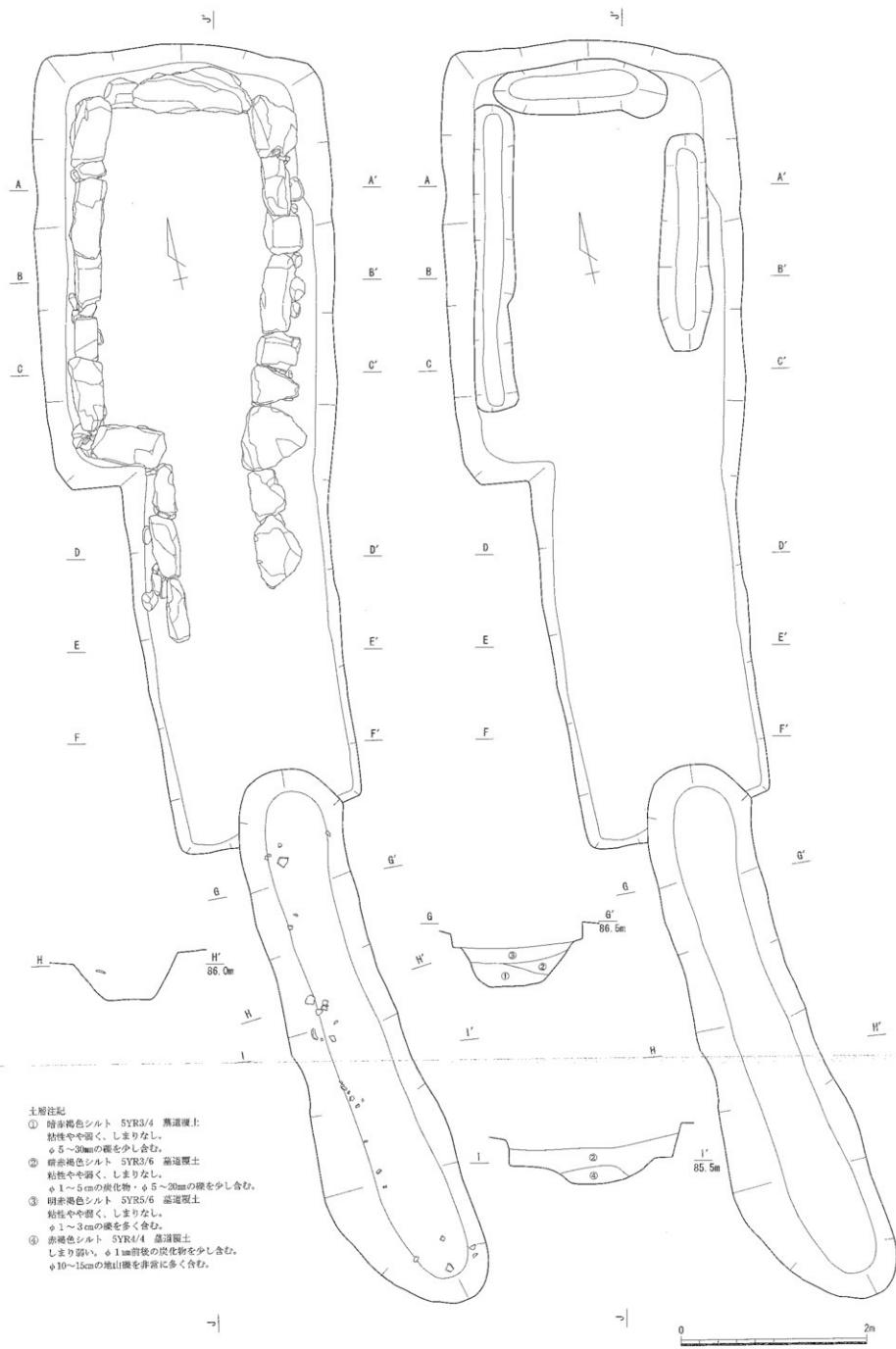
第62図 A10号墳石室検出状況図



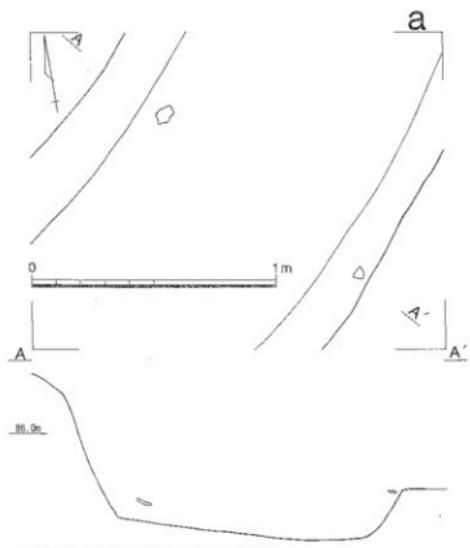
第63図 A 10号墳石室検出状況横断面図



第64図 A10号填石室・閉塞石実測図



第65図 A10号墳基底石・墓坑実測図



第66図 A10号墳周溝遺物出土状況図

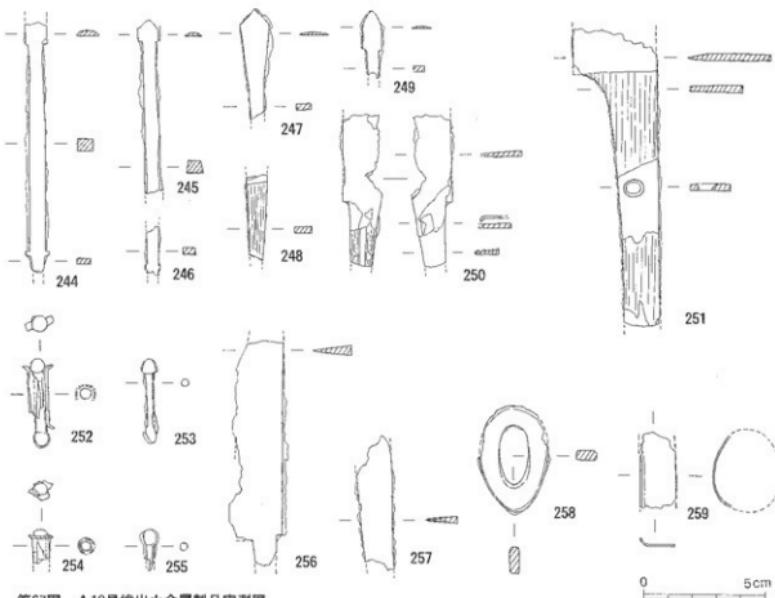
このような造りにより、石室の開口方向はほぼ真南となる。

③遺物の出土状況（第65・66図、図版34）

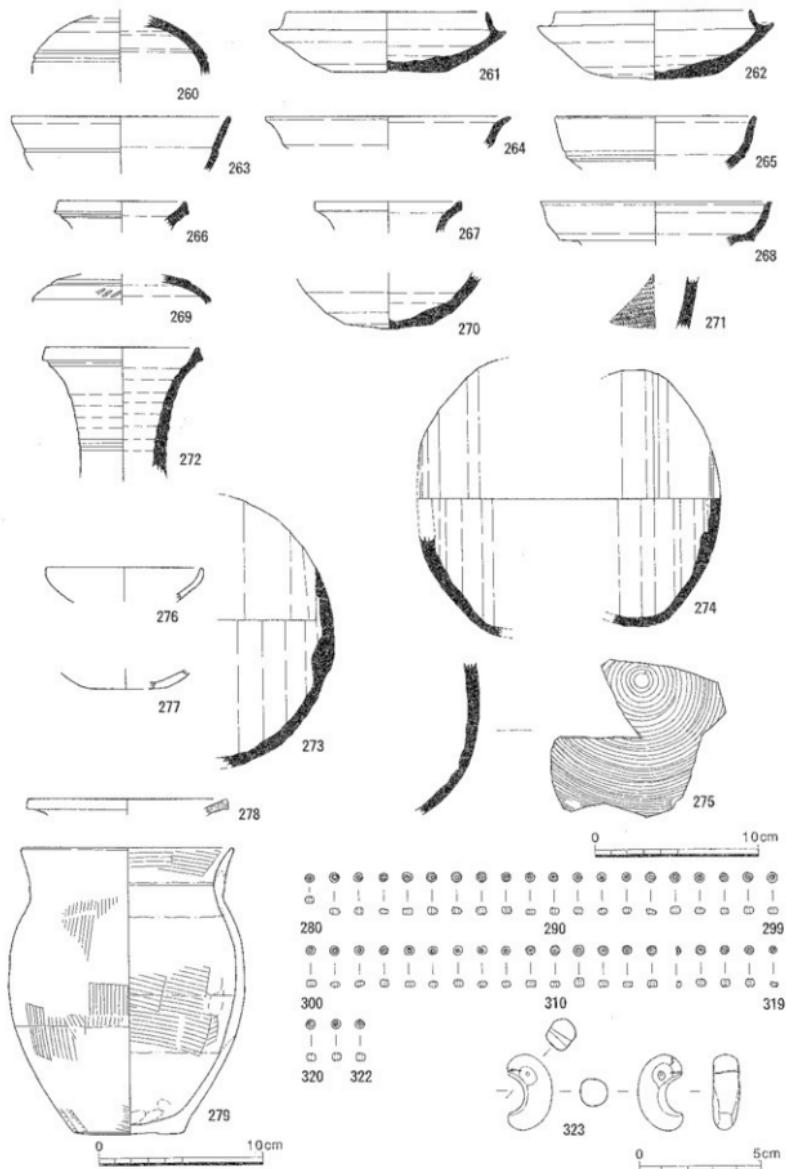
当古墳北西側の墳丘直上より土師器甕279が炭化物とともに出土した。出土地点に残存する墳丘は一次墳丘であるから、墳丘盛土過程における祭祀の痕跡と考えられる。

石室内では、右片袖部より須恵器坏身262が完形で出土し、玄門中央より勾玉323が出土した。これら2点以外の須恵器（260・261・264～266・268～270・272～275）、土師器（276・277）、灰釉陶器（278）、小玉（280～322）、鉄製品（244～259）は石室の搅乱土より出土した。

局溝の南東部で須恵器片が出土しているが、小片のため図化していない。



第67図 A10号墳出土金属製品実測図



第68図 A10号墳出土土器・玉類実測図

墓道でも須恵器片がやや多く出土したが、専ら細片であり、実測図掲載可能なものは2点（263・271）に過ぎない。

④出土遺物（第67・68図、図版9・130・131）

鉄製品 244～247・249は鉄鎌である。全て長頭鎌であり、244・245・249の鎌身は尖根柳葉式、247の鎌身は尖根であるが圭頭式となっている。刀子248・250は茎に柄の木質が付着残存する。刃部撫間の刀251の茎にも柄の木質が残存し、 $\phi 6\text{ mm}$ の目釘孔を穿つ。刀256は直角両闇である。257は刀子の身部片である。以上の刀・刀子の身部は全て平造りである。刀装具として258の切羽または鰐、259の鎗が出土している。252～255は両頭金具である。いずれも頭部が遺存するが、253・255は筒金を喪失している。252は筒金の花弁が3弁認められ、254の花弁部は4弁から成る。

須恵器 坏蓋260は口縁部直上に2条の沈線を有し、遠江III期末葉に比定される。坏身261・262は遠江III期中葉の所産である。無蓋高坏263～265は口縁部の形状が異なるが、同時期における形式上の差異であり、3点とも遠江III期後葉に比定される。墳丘より出土したとされる瓶類口縁部267は遠江III期末葉の所産か。巻口縁部268は遠江III期中葉に比定される。長頸壺肩部269は遠江III期後葉～末葉に比定される。フラスコ形瓶の口縁部と考えられる272は遠江III期末葉に比定される。フラスコ形瓶の体部273・274も遠江III期末葉の所産か。275は提瓶の体部であり、器種としての下限は遠江III期末葉である。

土師器 坏276・277は遠江III期末葉の所産と考えられる。小型の甕279は遠江III期の後半に位置付けられる。

灰釉陶器 278は瓶類の口縁部である。時期不詳であるが、近在する大屋敷1号窯が平安時代中期の灰釉陶器を焼造しており、278が同窯の製品であれば、灰釉陶器の終末段階に位置付けられる。

玉類 小玉は総数43点を数え、最も長さがあり色調が黒く不透明な311のみ蛇紋岩製であり、他の42点は紺または青色のガラス小玉である。323は蛇紋岩製の勾玉で、色調は緑掛かった灰白色を呈す。

⑤小結

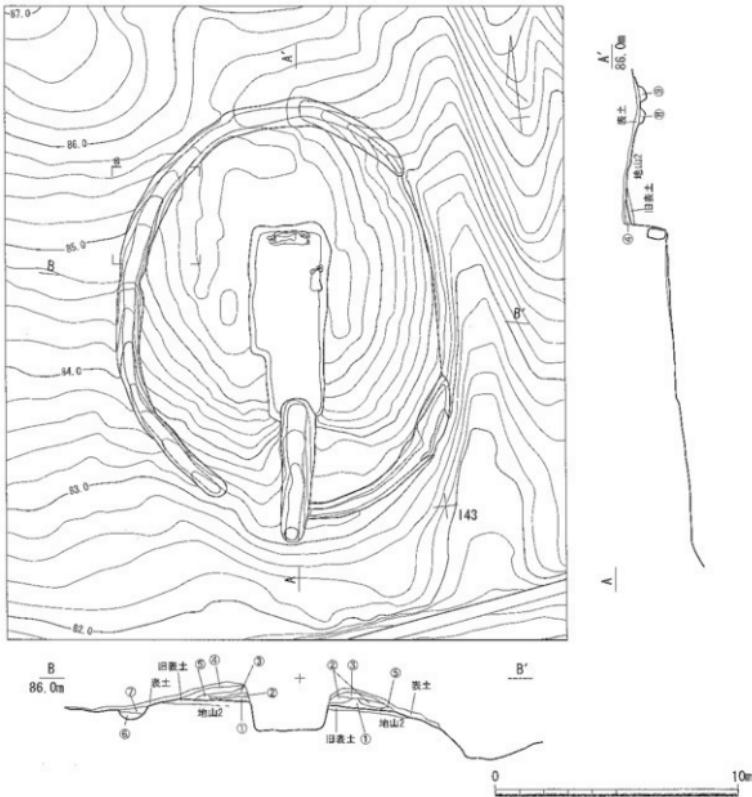
A10号墳は出土遺物より遠江III期中葉に築造され、追葬は同III期末葉に及んだと考えられる。閉塞石が良好に残存するにもかかわらず、天井石は1石も残っておらず、また、石室壁の残存状態も劣悪である。恐らく、開口部から侵入せず閉塞石はやり過ごし、石室構築を要した労働力と同等の集団で天井石を除去する大規模な盜掘が行なわれた蓋然性が高い。盜掠の対象は副葬品にとどまらず、石室石材そのものも持ち出されたと考えられる。上記の石室出土灰釉陶器が盜掘時期を示唆している可能性がある。

A10号墳は大屋敷A古墳群中最古の一群に属し、刀・飾り弓などの武器を中心に豊富な副葬品が納められていたと想定され、大型角礫を主に使用した右片袖式横穴式石室が構築されており、被葬者はA古墳群形成を主導した群内最高レベルの階層性を有する集団であると考えられる。全長で評価される石室規模こそ5.74mと中型程度であるが、玄室の規模は大型横穴式石室そのものである。墓坑前半部の長さに対して現状の羨道が短すぎる観もあり、まして羨道の方向を意識して羨道を構築したのであれば、羨道の石室側起点付近まで羨道が連続していても不合理ではない。石室石材さえも掠奪されている状況を考慮すれば、羨道が墓坑前半部を通徹してした可能性は否定できず、その場合、石室の全長は7mに達すると想定される。

(1) A11号墳

①墳丘・周溝（第69図、図版36・37）

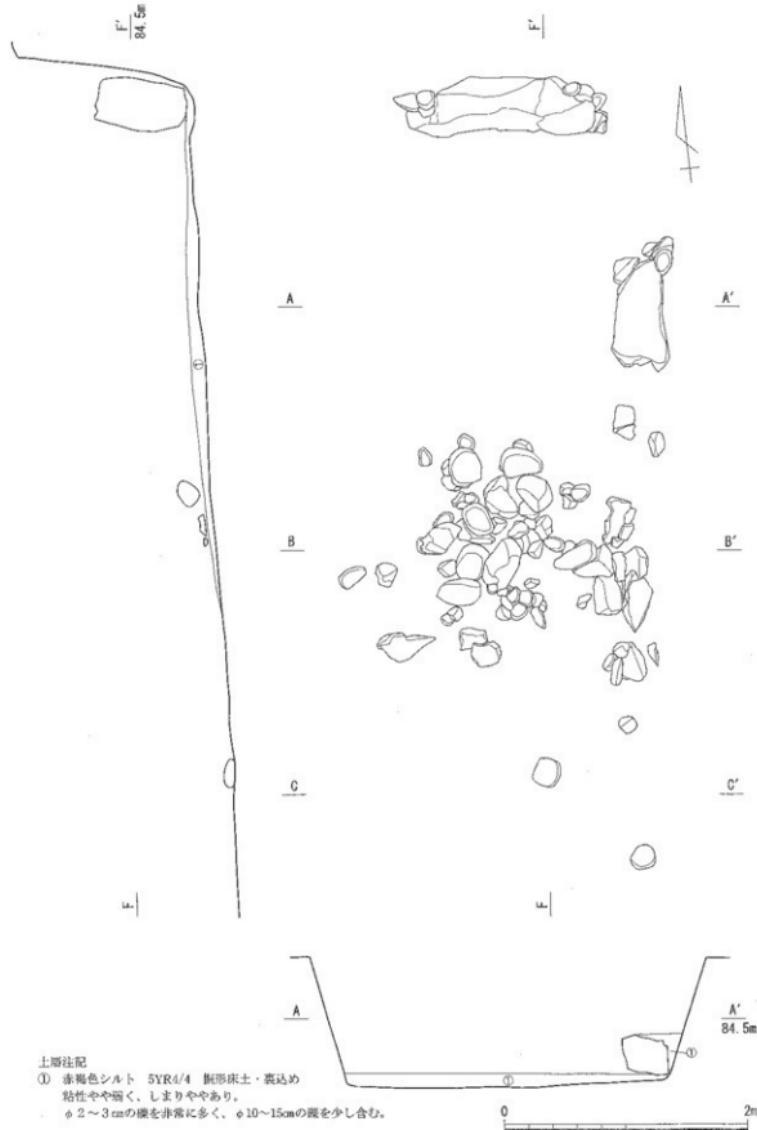
墳丘盛土は良好に遺存し、旧表土直上の高さは最大0.7mを測るが、周溝の内側上端までは残っていない。古墳のすぐ東の斜面を後世の自然流路が下刻して狭隘な谷を形成し、周溝の東側は流失しているが、全体的に残存状態は良好である。周溝により囲まれる範囲は東西12.5m、南北15.4mを測り、南北に長



上層注記

- ① 明赤褐色シルト 5YR5/8 盛土
粘性やや弱く、しまり非常に強い。 ϕ 3~10mmの礫を非常に多く、 ϕ 3~5cmの礫を少し含む。
- ② 棕褐色シルト 7.5YR4/6 盛土
粘性やや弱く、しまり強い。 ϕ 3~10mmの礫を非常に多く含む。有機質を含む。
- ③ 明赤褐色シルト 5YR5/8 盛土
粘性やや弱く、しまり強い。 ϕ 3~10mmの礫を多く、 ϕ 4~10cmの礫を少し含む。
- ④ 赤褐色シルト 5YR4/8 盛土
粘性やや弱く、しまり強い。 ϕ 3~10mmの礫を非常に多く、 ϕ 4~10cmの礫を少し含む。
- ⑤ 棕褐色シルト 7.5YR4/6 壊状盛土
粘性やや弱く、しまり強い。有機質を含み、 ϕ 1~2cmの礫を僅かに含む。
- ⑥ にわい赤褐色シルト 5YR4/4 周辺覆土
粘性やや弱く、しまり強い。 ϕ 5~10cmの礫を多く含む。
- ⑦ 棕褐色シルト 7.5YR4/4 周辺覆土
粘性やや弱く、しまりなし。 ϕ 5~20mmの礫を多く、 ϕ 15~20cmの礫を少し含む。
- ⑧ にわい赤褐色シルト 5YR4/4 周辺覆土
粘性やや弱く、しまりややあり。 ϕ 5~10mmの礫を多く、 ϕ 5~7cmの礫を少し含む。
- ⑨ 棕褐色シルト 7.5YR5/6 自然路盤土
粘性ややあり、しまりなし。 ϕ 3~5cmの礫を非常に多く含む。

第69図 A11号填境丘図



第70図 A11号石室検出状況図

い梢円形プランの円墳を呈す。

区画帯 A 9号墳同様の堤状盛土が古墳中心部を環状に完周し、高さ0.25mを測る。この区画帯の内側に盛られた3層の盛土が一次墳丘であり、特に墳丘西側で確認された区画帯の外側および上方に盛られた盛土が二次墳丘ということになる。

②埋葬施設（第70・71図、図版36・38）

古墳のほぼ中央に横穴式石室が構築されているが、破壊がひどく、石室形態は不詳である。墓坑および墓道の主軸から、真南より若干南南西寄りに向けて開口すると判断される。

玄室・基底石 奥壁の鏡石と左側壁の基底石1石の計2石が壁構築材として残存するに過ぎない。いずれもチャートである。奥壁の鏡石は幅162cmの大型板状角礫を直立させ、高さ1.05mを測る。左側壁の基底石1石は長軸93cmの大型角礫を平手置きし、高さ0.39mを測る。奥壁と左側壁は直交すると目され、恐らく側壁が奥壁を挟み込むように積載されていたと考えられる。

敷石 玄室前半部に相当すると推定される箇所にφ20cm未満の小型円礫から成る礫群が東西1.0m、南北1.2mの範囲に認められるが、墓坑床面には他に小型礫が認められないことから、この礫群が横穴式石室の敷石であるとは確言できない。後世の遭構の可能性もあるが、何とも言い難い。

墓坑・墓道 墓坑は右片袖形プランを呈す。全体に先細りとなり、主軸をほぼ墓坑と共有する墓道が前端に取り付く。墓坑後壁の旧地表よりの掘り込みは1.4mを測る。

③遺物の出土状況（第72図）

石室における遺物の出土状況は、須恵器が數片（327・338）確認された以外では、玉類66点（343～408）および刀子1点（409）が石室覆土の築作業により検出された。周溝北西部では須恵器（324・325・328～331・333～335）とともに志戸呂製品342が出土した。墓道においても須恵器片が数点（326・332・336・337）出土している。さらに墳丘盛土を解体・除去すると、旧表土直上より須恵器提瓶または横瓶の体部片（339～341）が出土した。

④出土遺物（第73図、図版9・131）

須恵器 壺蓋324・325は遠江III期後葉の長頸壺の口縁部に載っていたと考えられる。327は小型壺の口縁部であり、遠江III期後葉に比定される。328・329も壺の口縁部か。壺334は遠江III期後葉の所産と考えられる。提瓶340は退化して僅かに下方へ屈曲する突起となった把手を有し、遠江III期後葉に比定される。同じく墳丘直下の旧表土上で出土した横瓶339（提瓶の可能性もある）・341も同時期の所産と考えられる。

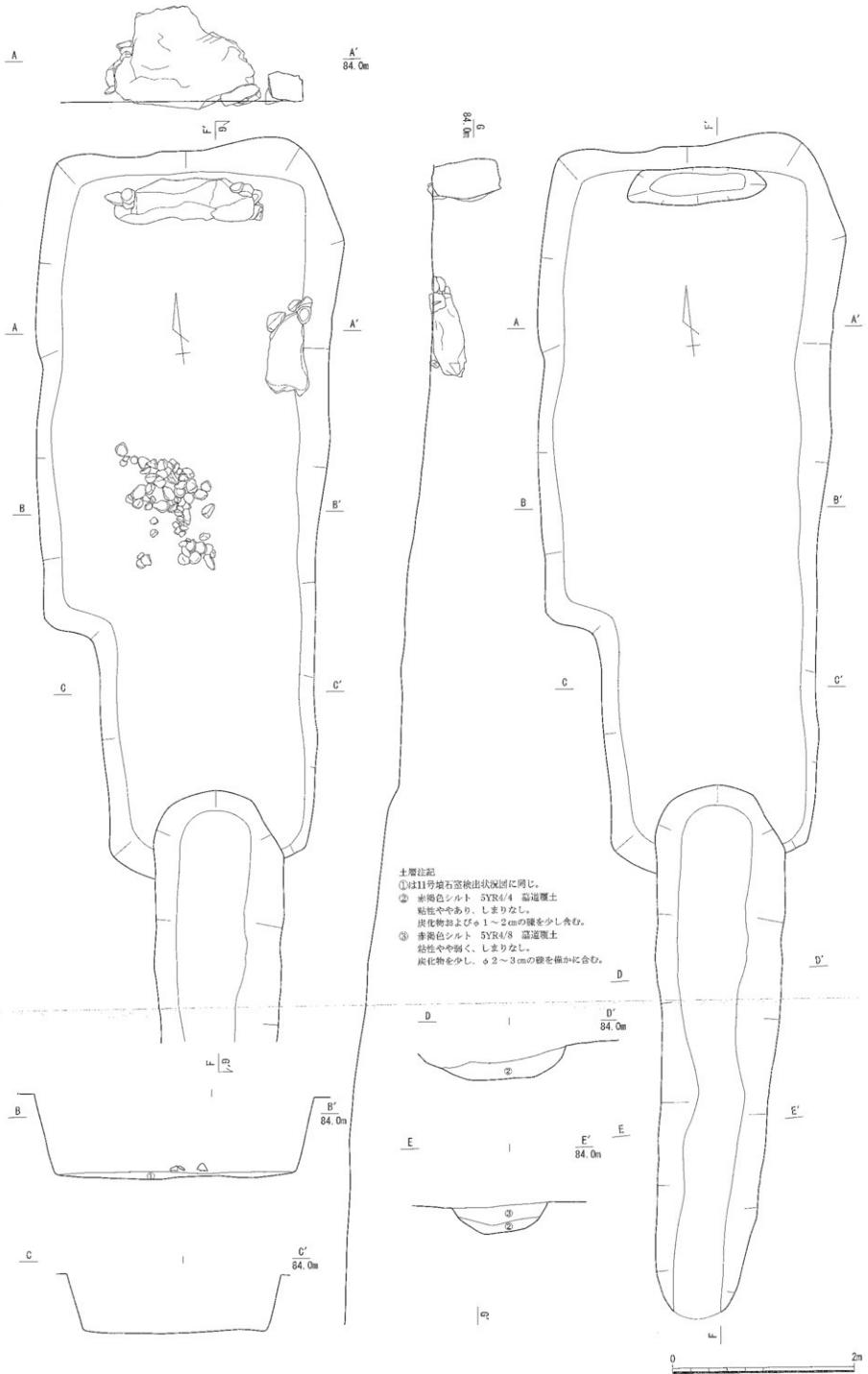
玉類 66点のうち348のみが蛇紋岩製で、黒色不透明である。他の65点はガラス製であるが、比較的大きな343・344・346・405は白玉と呼称し、他の製品をガラス小玉とする（註3）。基本的に濃い紺色であるが、346・347・369・399・401・402のように縁掛かって明るい色調となるものが存在する。

鉄製品 409は刀子の切先で、平造りである。

志戸呂製品 342は志戸呂の大型筒形容器の体部片である。内外面にウノフ釉を施釉し、外面に灰釉による太い描線が認められる。18世紀代の所産と推定される。

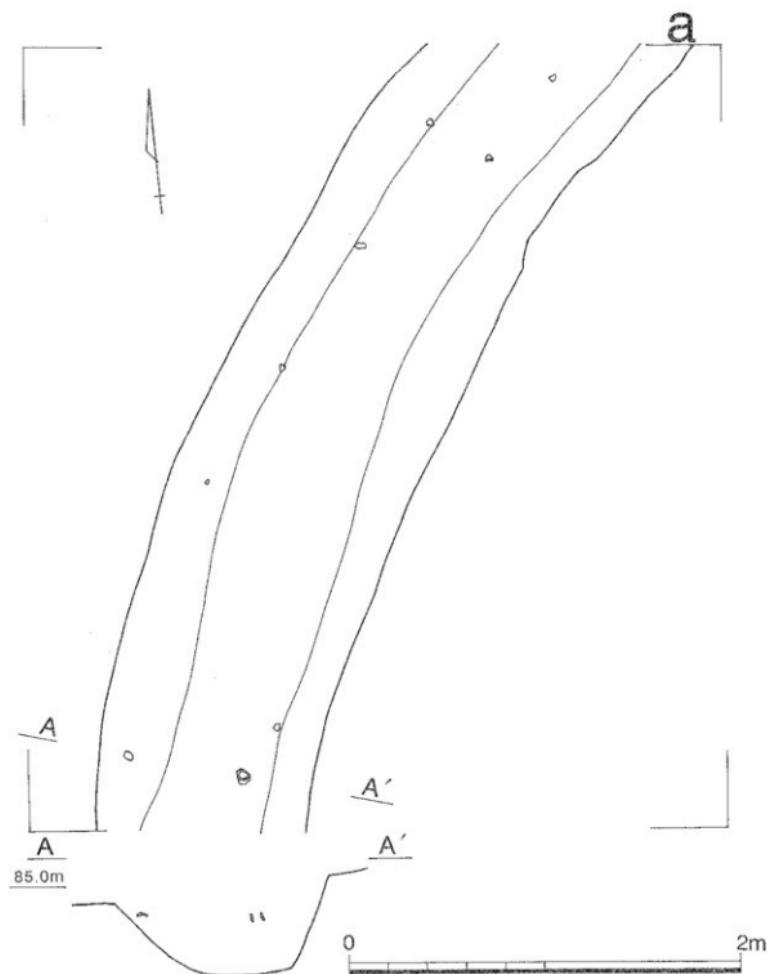
⑤小結

出土遺物から見れば、A11号墳は遠江III期後葉に築造された蓋然性が高いが、追葬の状況は不明である。石室はほとんど破壊されており、本来の形状を窺い知ることはできないが、右片袖式横穴式石室を埋葬施設とするA10号墳の墓坑が当古墳同様の右片袖形プランを呈することから、A11号墳にも右片袖式横穴式石室が構築されていた可能性が高い。残存する奥壁鏡石の規模から類推すれば、石室の規模は中型以上であったと考えられ、墓道の石室側起点付近に羨門があったとすれば、石室全長は6mを超えていたと想定し得る。

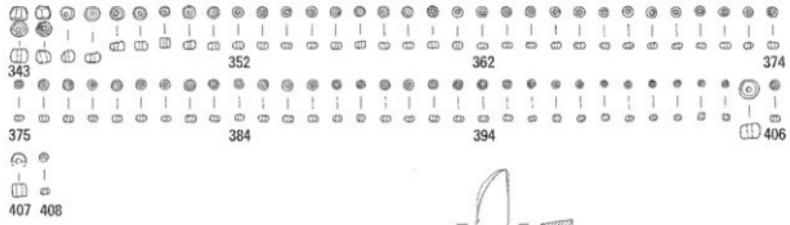
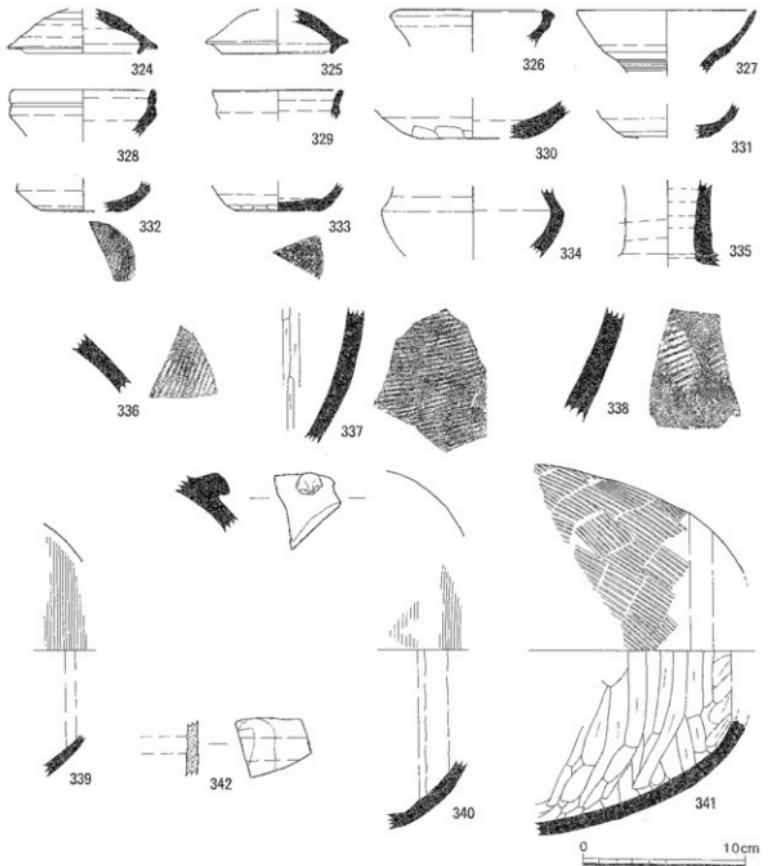


第71図 A11号填石室・墓坑実測図

A 9号墳と同じく堤状盛土による区画帯を墳丘盛土の作業工程の指標として施設し、また、A10号墳の墳丘直上の土師器甕を用いた祭祀の痕跡と近似した状況で盛土開始直前の須恵器供獻行為が認められるため、A 9～11号墳の被葬者集団が近縁な関係にあったと考えられるとともに、A11号墳の被葬者集団が墳丘の構築作業そのものを墳墓祭祀の一環として重要視していたことが窺われる。



第72図 A11号墳周溝遺物出土状況図

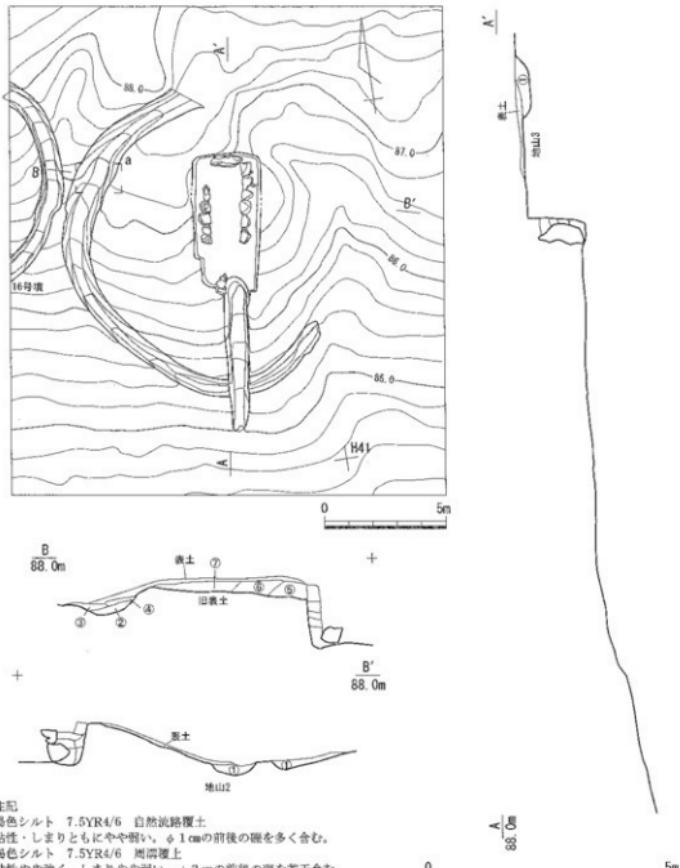


第73図 A11号墳出土遺物実測図

(2) A15号墳

① 墳丘・周溝（第74図、図版39）

墳丘盛土は古墳の西側で遺存しているが、北および東側では失われている。残存箇所では最高0.3mを測り、埋葬施設の存在する中央部から外側へ順次盛土されている。周溝も北および東側で約3/8周分が失われ、古墳廃絶後の自然流路に取って代わられているが、南側は良好に残存し、墓道と切り合っている。古墳全体としては、1区中央の南北谷の東側斜面の中途中で短小かつ微高な尾根状を呈する、立地条件と



土解説記

- ① 海色シルト 7.5YR4/6 自然流路覆土
粘性・しまりともにやや弱い。φ 1cmの前後の礫を多く含む。
- ② 海色シルト 7.5YR4/6 周溝覆土
粘性やや強く、しまりやや弱い。φ 3cmの前後の礫を若干含む。
- ③ 褐色シルト 7.5YR4/6 周溝覆土
粘性やや弱く、しまりやや強い。φ 4~7cmの礫を多く含む。
- ④ 明赤褐色シルト 7.5YR5/6 周溝覆土
粘性やや弱く、しまりやや強い。φ 4~7cmの礫を少し含む。
- ⑤ 刹赤褐色シルト 7.5YR4/6 盛土
粘性・しまりともにやや弱い。φ 5~10cmの礫を多く含む。
- ⑥ 明赤褐色シルト 5YR5/8 覆土
粘性・しまりともにやや弱い。φ 10cm前後の礫を少し含む。
- ⑦ 褐色シルト 7.5YR4/6 盛土
粘性・しまりともにやや弱い。φ 1cm前後の礫を少し含む。

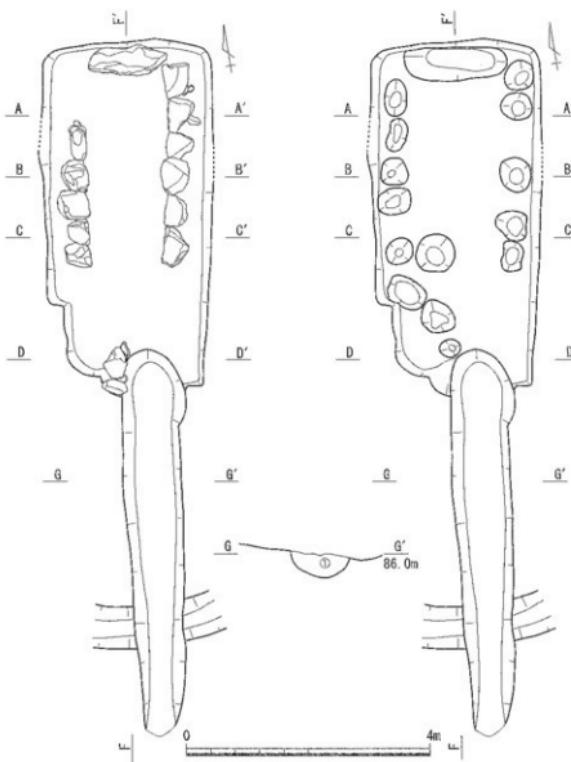
第74図 A15号墳墳丘図

しては良好な場所を選地している。

② 墓葬施設（第75・76図、図版39・40）

埋葬施設は古墳の中央よりやや北側に構築された右片袖式横穴式石室であるが、残存状態は決して良くない。真南よりも若干南南西に向けて開口する。石室内には床込めは認められない。

玄室 玄室プランは僅かに胴張り形を志向するように見えるが、一応長方形プランと考えておきたい。奥壁は大型の板状角礫1石を立てて鏡石とし、高さ0.96mを測る。右側壁は基底石のみ残存し、それも最後部の1石または2石が失われている。左側壁は2段目まで残存し、最高0.7mを測る。2段目は基底石よりも大型の角礫の長手面を内側に向けて横載されている。また、壁材どうしの間隙は小型の円礫または角礫で充填している。B-B'断面では、2段目を急激に持ち送っているように見えるが、これは石室の外側に立っていた樹木の根株に押された結果であり、本来はA-A'断面におけるように、或る程度の段階まで垂直的に立ち上がる側壁を志向していたと推測される。右片袖部の袖石は失われているが、現状の右側壁前端に接して設置されていたと想定される。

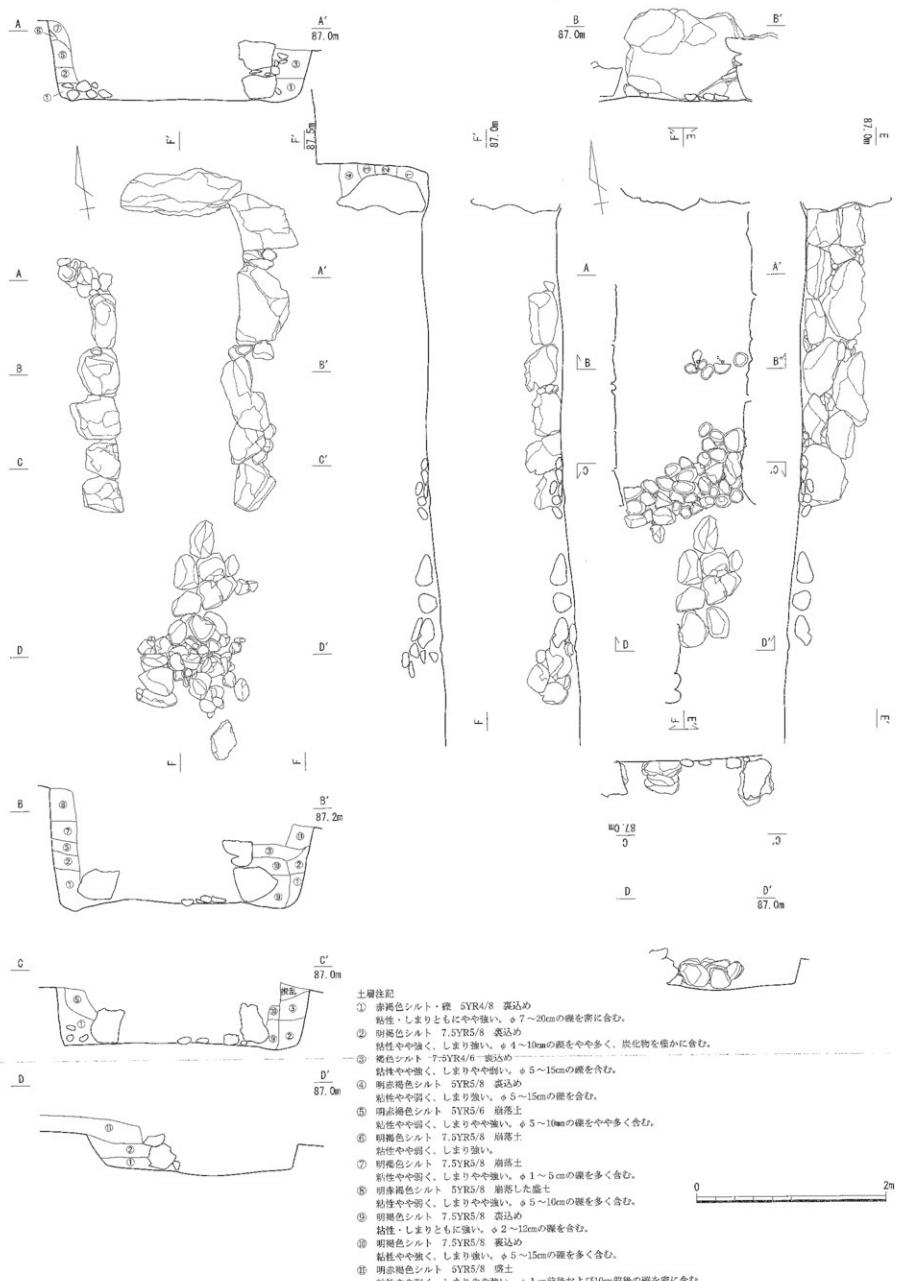


土層注記
① 明褐色シルト 7.5YR5/8 墓道覆土
粘性・しまりともにやや弱い。φ 5~10mmの礫を少量、炭化物を僅かに含む。

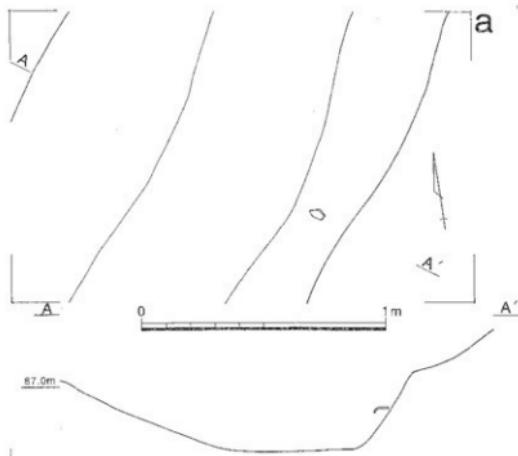
墓道 側壁を構成する石材は右側壁前半部に2段3石残存するに過ぎず、最高0.46mを測る。袖石が失われているため、墓道長は厳密に測定できないが、敷石と閉塞石の遺存状況から判断すれば2.14m以下と推定される。玄室よりも小型の角礫を使用し、小口積みしている。玄室と同じく、壁材の間隙を小型礫で充填している。

敷石 玄室の前端から1/5~1/4ほどの範囲に集中して残存するが、玄室中央部の左側壁寄りにも6石残っている。φ 15cm前後の扁平な円礫主体で敷設されているが、敷石としてはやや大型の角礫も少數用いられている。玄室の全面に敷設されていたかは定かではないが、墓道には当初より敷設されなかつたと考えられる。

閉塞石 中型の角礫と円礫を併用し、墓道後半部



第75図 A15号墳石室換出状況図・実測図・遺物出土状況図

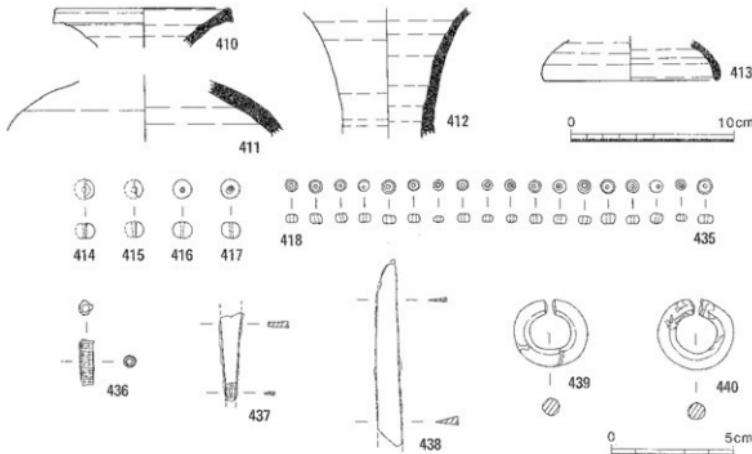


第77図 A15号填周溝遺物出土状況図

断面のすぐ南側にも小土坑が掘削されているが、埋め戻されて上に敷石が敷設されている。石室設計の段階で袖石の設置箇所を変更し、より玄室を大きく造ろうとした意図が窺われる。墓道の溝状掘り込みは羨道に食い込み、墓坑・石室の主軸に平行して一直線に伸びている。

③遺物の出土状況（第75・77図、図版39）

石室の床面直上より出土した遺物は僅かである。玄室中央部の左側壁寄りの敷石残存箇所においてガラス小玉3点（418～420）、耳環2点（439・440）が出土した。他のガラス玉15点（420～435）、土製丸



第78図 A15号填出土遺物実測図

から玄門までを小口置きで閉塞している。前後4列、基底1段のみ残存する。

基底石 玄室の基底石は長手面を内側に向けて設置されているが、羨道のそれは小口置きされている。両側壁の最後端が奥壁を挟むように配置されている。

墓坑・墓道 墓坑は長台形の右側側辺を屈曲させた右片袖形プランを呈す。後壁では地山を1.17m以上掘り込んでいる。奥壁の鏡石をはじめ、多くの基底石に対して設置用小土坑が掘削されており、袖石は墓坑右壁の屈曲部に接する小土坑に据えられたと想定される。玄室右側壁最前端の基底石の左隣、C-C'

玉4点(414~417)、須恵器1点(410)、両頭金具1点(436)、刀子2点(437・438)は玄室の覆土中途より出土した。周溝が最大幅となる北西部で須恵器片(411・412)が出土し、その外側直近からも須恵器片(413)が出土した。

④出土遺物(第78図、図版9・131)

須恵器 長頸壺口縁部410は遠江IV期前半に比定される。同頸部412も遠江IV期前半の所産であろう。环蓋413も同じく遠江IV期前半に比定される。

玉類 土製丸玉414~417のうち414・415は半分以上欠損している。ガラス玉には小玉418~434とやや大きい白玉435があり、基本的色調は紺色であるが、429・431は縁掛かっている。

金属製品 両頭金具436は芯棒の頭部と筒金の花弁部が両端とも欠損しているが、僅かに残る花弁部は4弁認められる。刀子437は身へ茎の一部が残存し、茎に柄の木質が付着残存している。刀子438は切先から身部が残り、437とともに平造りである。耳環439・440は銅芯に銀銅板を巻いているが、銀銅板の大部が剥落している。

⑤小結

A15号墳は出土遺物から見ればIV期前半に築造されたと言わざるを得ないが、次章で述べるように、実際の築造時期はさらに遅る可能性が高い。出土遺物が示す遠江IV期前半という時期は、追葬に関係していると考えられる。右片袖式横穴式石室を構築し、副葬品として飾り弓・耳環・玉類を有するが、石室の規模は中型であり、土製丸玉は精巧かつ稀少な物品とは言えず、当古墳がA古墳群内最高級の階層性を有するとは認め難い。

(13) A16号墳

①墳丘・周溝(第79図、図版41)

A15号墳に西接し、西側は谷となる狭小な微高尾根の先端に立地する。墳丘盛土は流失している。周溝は完周するが、A15号墳の周溝を避けて掘削されている。周溝に囲まれる範囲は東西7.4m、南北8.2mを測り、やや南北に長い梢円形プランの円墳である。

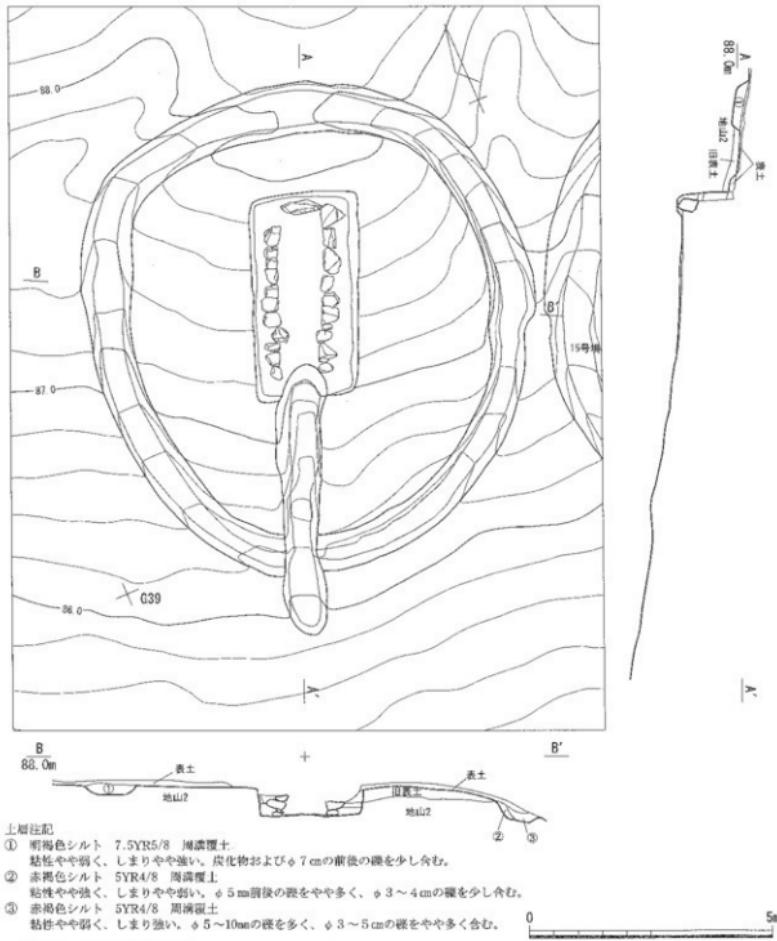
②埋葬施設(第80~82図、図版41・42)

古墳の中央やや北寄りに単室系擬似両袖式横穴式石室が構築されている。石室の上半部は全面的に崩落しているが、平面的には良好に残存し、南南西へ向けて開口する。

玄室 中央部で最大幅を有し、奥壁幅が最小となる胴張り形プランを呈す。奥壁は大型の板状角礫を長手置きし、鏡石をしているが、同様の礫をもう1石上に積載していた可能性が高い。現状では高さ0.47mを測る。側壁は左側壁で最大2段、高さ0.39m残存し、右側壁で最大4段、高さ0.61m残存する。両側壁とも角礫の長手面を内側に向けて平積みし、2段目から上を内側へ持ち送っており、2段目の礫は基底石よりも長大である。立柱石は右側壁で長軸78cmの大型柱状角礫を小土坑に設置し、床面からの高さは0.63mを測り、左立柱石も同様の置き方が取れるが、床面近くで折損している。側壁よりの突出は左立柱石で0.14m、右立柱石で0.1mを測る。

羨道 玄室が専ら角礫を使用しているのに対し、羨道はより小型の円礫主体に小口積みされている。左側壁では基底石のみ残存するが、右側壁では最大3段、高さ0.39m残存する。明瞭な持ち送り積みは認められない。玄門側から羨門まで幅が一定の長方形プランを呈するが、両側壁は前方へさらに統いていた可能性がある。

敷石 中央部を中心に、玄室の約1/2に残存する。 ϕ 10~20cmの扁平な円礫を主体に、 ϕ 10cm以下の角礫も若干用いている。玄室には本来全面的に敷設されていた可能性は高いが、羨道には当初より敷石は存在しなかったと考えられる。

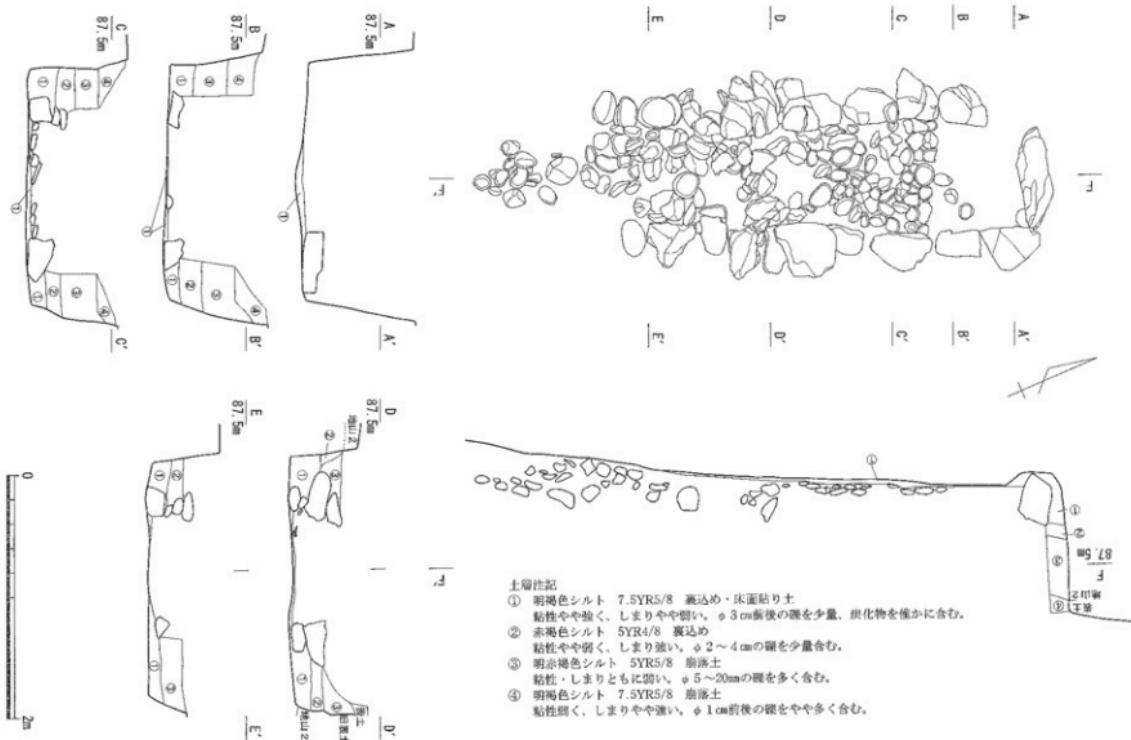


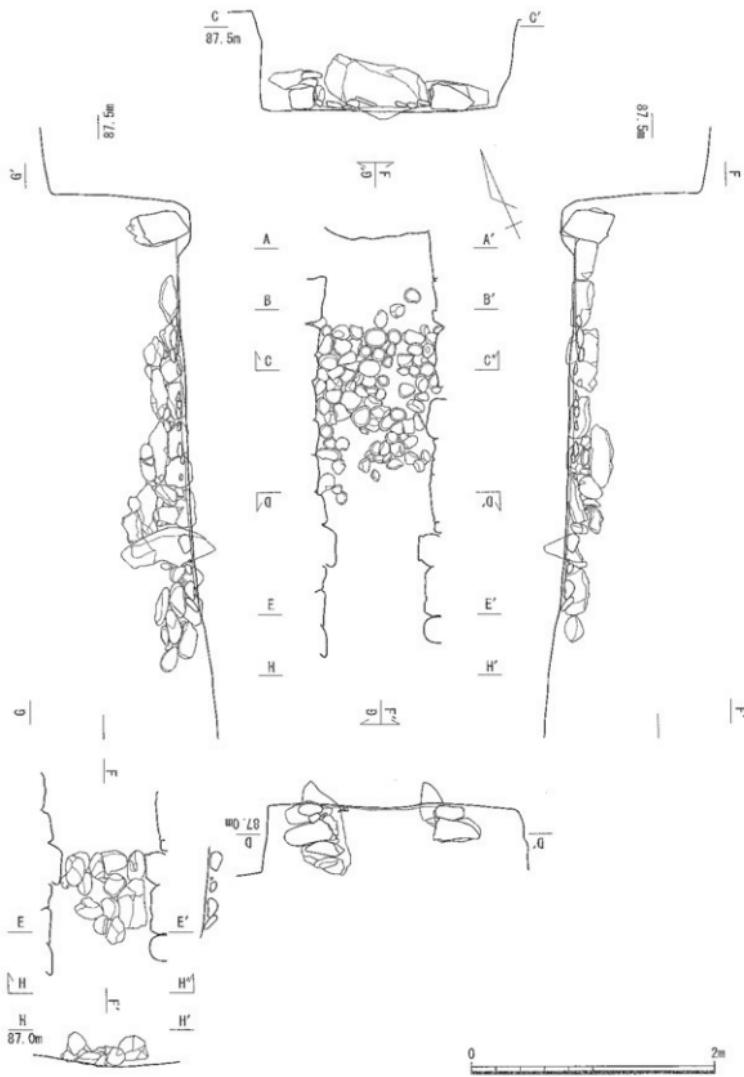
第79図 A 16号墳墳丘図

閉塞石 玄門から渓道後部にかけて閉塞石が残存しており、小型の円礫と小・中型の角礫を小口積みしている。最大2段、高さ0.24m残存する。

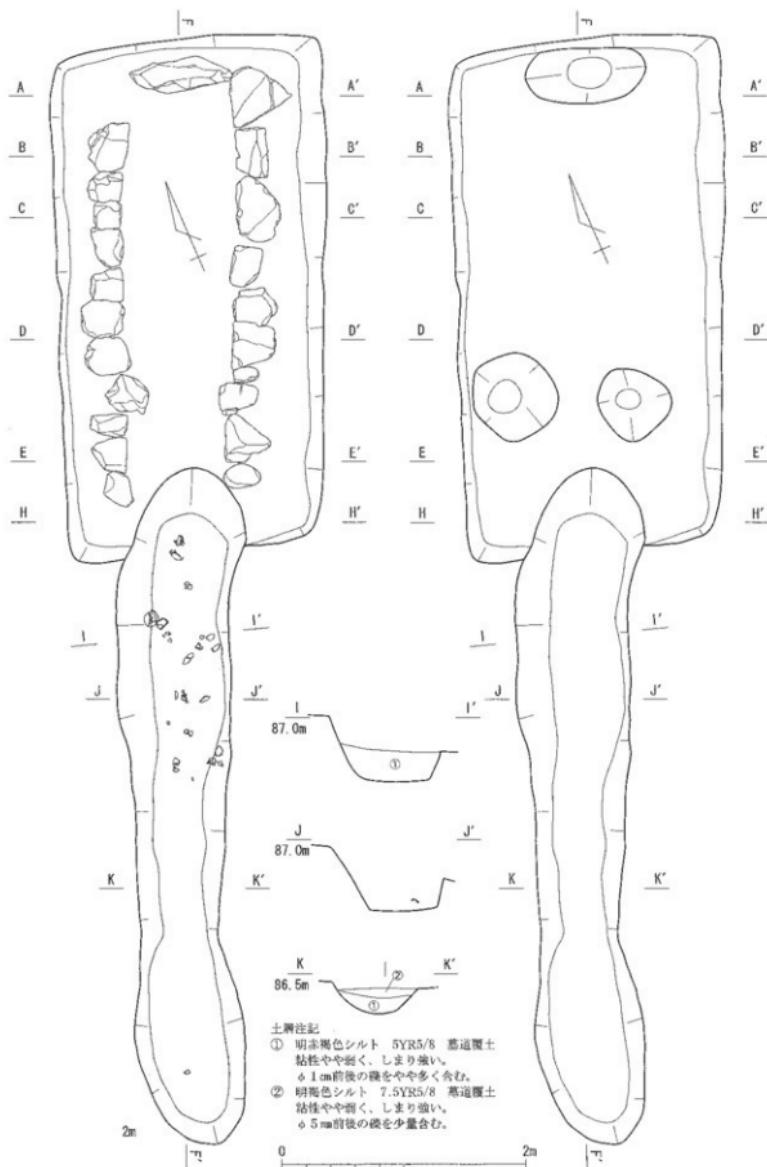
基底石 右側壁の最後端の1石は失われているが、両側壁が奥壁を挟むように設置されている。両側壁の基底石は最後端から4石目まで一旦胴張り形プランが終息するかのように見え、特に左側壁の後ろから4石目は5石目より内側へ突出してしまっている。また、左立柱石とその後2石目の大型基底石との間に小型の基底石が存在し、この箇所で石材の長さを調整している。さらに、右立柱石と玄室最前端の基底石は接していない。これらの状況より、基底石は奥壁側から設置され、玄室中央部辺りで計画

第80図 A 16号墳石室検出状況図





第81图 A16号填石室·闭塞石实测图



第82図 A16号墳基底石・墓坑実測図・墓道遺物出土状況図

どおりの設置に些か失敗し、玄室前半部で意図せざる調整を余儀なくされたと想定される。左側壁最前端の基底石のみ円礫となつておらず、後道側壁を構築する頃にはすでに壁材として良質の大型角礫が入手困難であったとも推測される。換言すれば、基底石設置による後道の設計は、玄室のそれよりさらに後出した可能性がある。

墓坑・墓道 墓坑は長方形プランを呈し、後壁の掘り込みは現地表から1.15mを測る。左側壁最後端の基底石に幅広の大型角礫を用いたためか、石室は墓坑内で若干右寄りに構築されている。基底石設置用小土坑は奥壁鏡石と左右立柱石に対して掘削されているが、両立柱石用の小土坑は必要以上に大き過ぎる観がある。墓道の溝状掘り込みは後道に食い込み、石室と主軸を共有しているが、先端約1.5mは若干真南に向かって彎曲する。

③遺物の出土状況（第82図）

玄室覆土中途より鉄鎌1点（461）が出土した以外には石室から遺物は確認されていない。周溝から埋葬施設に至る、墳丘盛土が流失した範囲において須恵器2点（448・458）、周溝の外側で須恵器1点（455）が出土した以外は、土器と鉄鎌が墓道に集中して出土している。盗掘時に石室から抜き出されたものと考えられる。

④出土遺物（第83図、図版131・132）

須恵器 返りの付く坏蓋441～443は遠江IV期未葉に比定される。頂部に摘みを有すると考えられるが、返りのない坏蓋444・446は遠江V期初頭に比定される。合子状の坏身447・448は遠江IV期後半に、楕形の坏身449・450は同IV期未葉に比定される。451は坏蓋の可能性もあり、そうであれば遠江IV期後半に比定される。452の坏身は口縁部が若干外反し、遠江IV期後半に比定される。高台の付く坏身454は遠江IV期未葉に比定される。455は台付長頸壺の底部であり、遠江IV期未葉と考えられる。笠456は遠江III期後葉の所産である。無蓋高坏部457は遠江IV期未葉に比定される。

土師器 坏459は器高が高く、口縁部が直線的に立ち上ることから遠江III期後葉に位置付けられる。

鉄製品 460～465はいずれも長頸鎌と考えられる。460・461は頭部～茎の破片で、461には茎闊が残存するが、460では欠損している。462～465は頭部片である。

⑤小結

A16号墳は出土遺物を見る限り、遠江III期後葉に築造され、同IV期後半・IV期未葉・V期初頭にわたる、少なくとも3回の追葬が行なわれたと解釈される。大屋敷A古墳群の單室系擬似両袖式横穴式石室としては平均的な規模であり、出土遺物も後期・終末期古墳に普遍的な副葬品ばかりである。また、東接するA15号墳の周溝を避けて築造されており、位置関係からもA15号墳より後出し、かつ階層的劣位であると評価できる。

II A17号墳

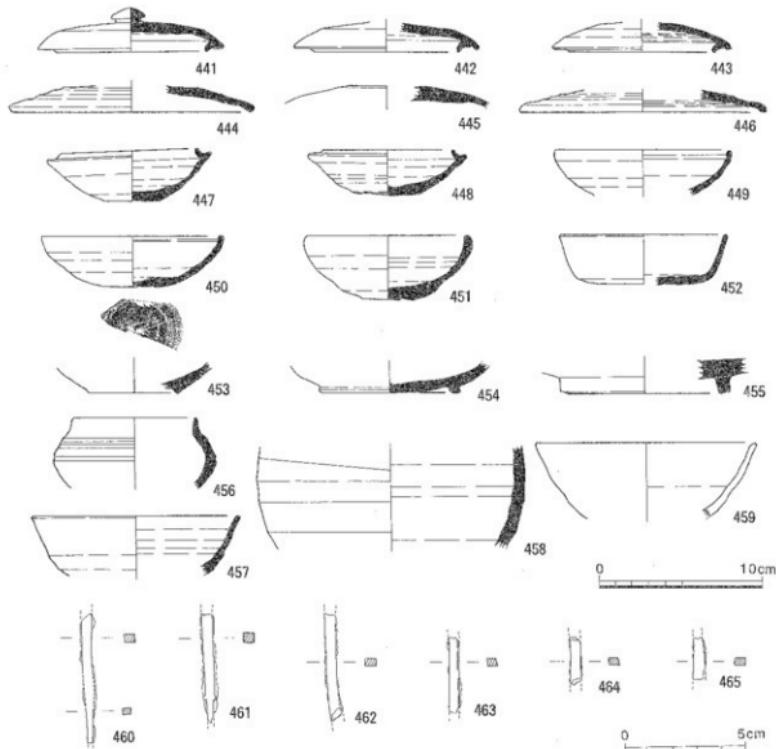
①墳丘・周溝（第84図、図版43）

墳丘盛土は古墳の中央より西側で高さ0.1m遺存している。周溝は完周状態で検出された。周溝に囲まれる範囲は東西10.1m、南北11.2mを測り、ほぼ円形プランを呈する円墳である。

②埋葬施設（第85～89図、図版43～46）

古墳の中央に南南西に向け開口する右片袖式横穴式石室が構築されている。大掛かりな盗掘に遭い、玄室後半部の側壁が失われている。

天井石 石室内に転落した石材のうち、天井石と思しき大型角礫が3石残存する。最大の1石は長軸70cm、幅64cm、厚さ44cmを測る。長軸が石室の主軸と直交した状態で検出された天井石ではなく、自然崩落ではないと判断される。

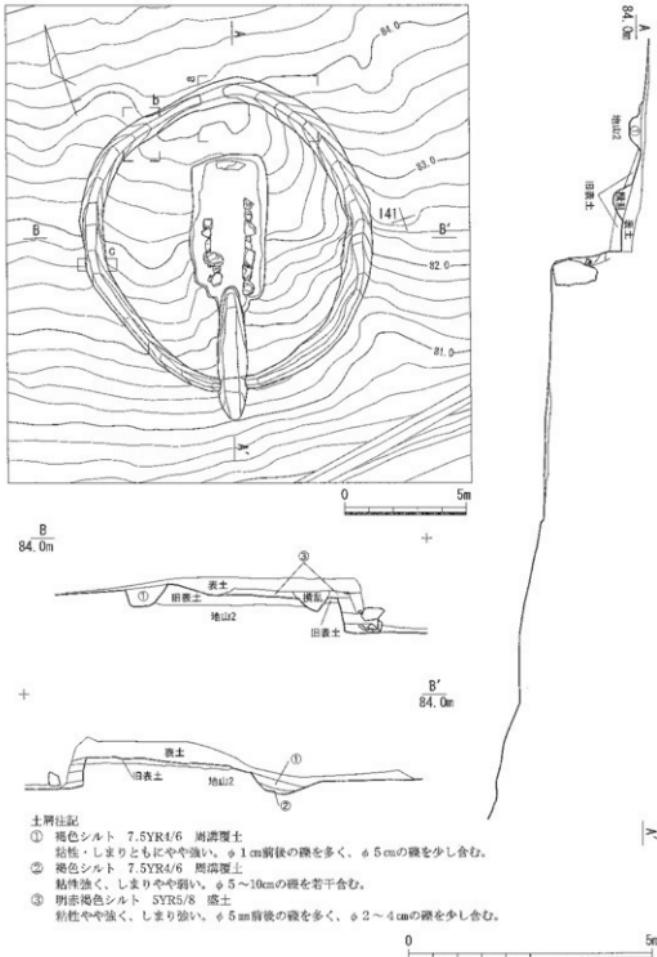


第83図 A16号墳出土遺物実測図

玄室 中央部に最大幅を有し、奥壁で最小幅となる胴張り形プランを呈すると考えられる。奥壁は大型の板状角礫を立てて鏡石とし、1石で高さ1.1mを測る。鏡石の右側にも中型程度の礫を積載していた可能性がないとも言えないが、その場合、玄室プランはむしろ長方形となる。しかし、右側壁は前から後ろへ石室主軸に向かう曲線状となっており、余程不整なプランでない限り、この曲線は鏡石の右端に当接すると推定される。従って、奥壁幅は鏡石の現状幅1.2m以上と述べるにとどめたい。

左側壁は2段目が1石しか残っておらず、この箇所の残存高は0.39mを測る。右側壁は最大3段、高さ0.72m残存する。恐らく基底石に最も大きな一群の角礫を用い、長手面を内側に向け、内側へ若干持ち送っている。また、右側壁には明瞭な目地通りが認められる。右側壁に直方体を呈する大型角礫を石室主軸に対して小口置きし、右片袖部の袖石としている。袖石の高さは0.66mを測り、玄室と羨道とを3段目まで隔てている。また、右片袖部の幅は0.45mを測る。

羨道 側壁は玄室と同様に角礫の長手面を内側に向け、最下段に最も大きな角礫を用いている。両側壁ともに最大2段残存し、残存高は左側壁で0.73m、右側壁で0.59mを測る。また、両側壁とも目地通りが看取されるが、玄室ほど整然としたものではない。持ち送り積みは、2段目までは認められない。

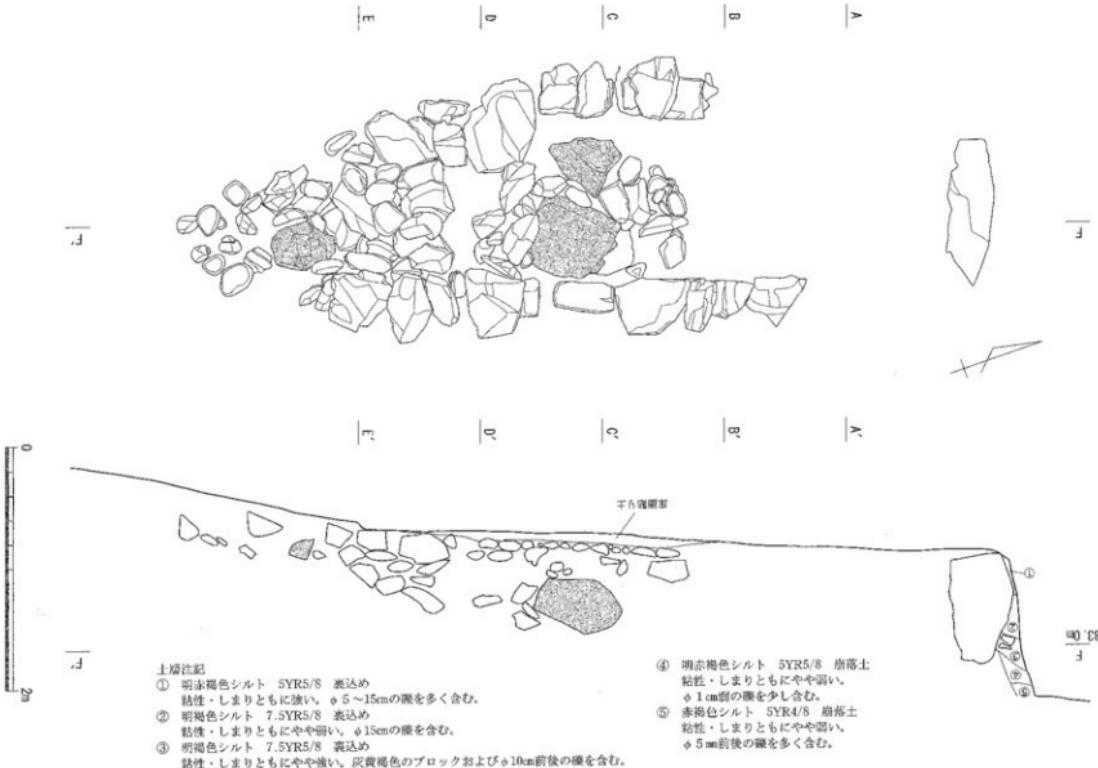


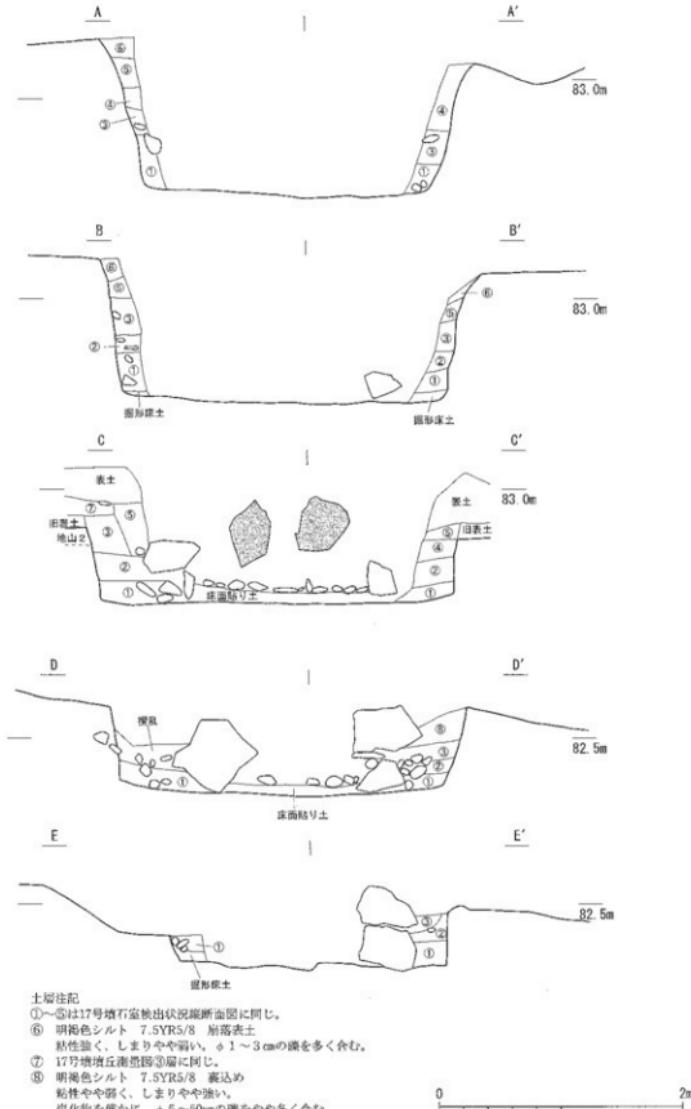
第84図 A17号墳埴丘

敷石 敷石は玄室前半部から羨道の玄門部にかけて良好に残存する。φ 15cm前後の扁平な円礫主体に敷設されているが、φ 20cm以上の角礫も少数使用されている。玄室後半部の敷設状況は不明であるが、羨道における現状の残存状況は築造当初と大差ないと考えられる。

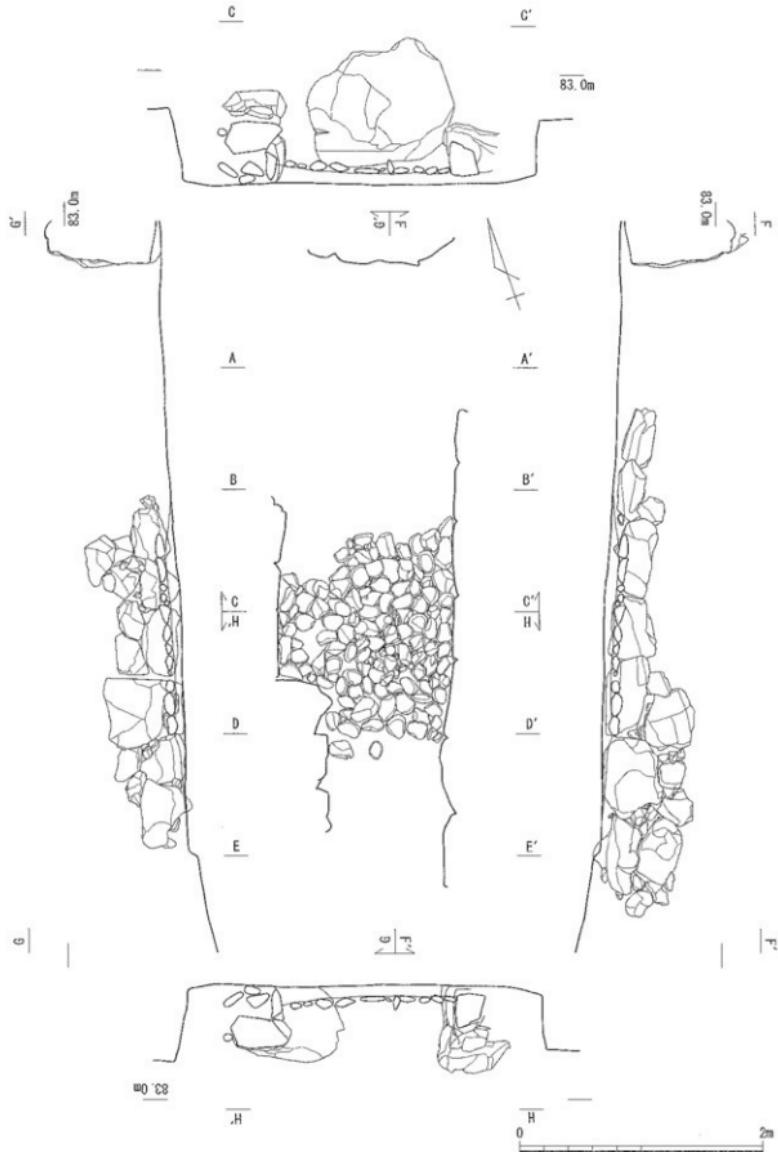
閉塞石 現存の敷石の前端に接するように羨道全体を閉塞している。第88図の閉塞石平面図では基底の1段のみ表現しているが、実際は4段目まで高さ0.66m残存し、遺存状態は非常に良好である。最下段に大型角礫4石を据えて基礎とし、その上に中・小型の角礫と円礫を小口積みしている。

第85図 A.17号坑石蓋露出状況図

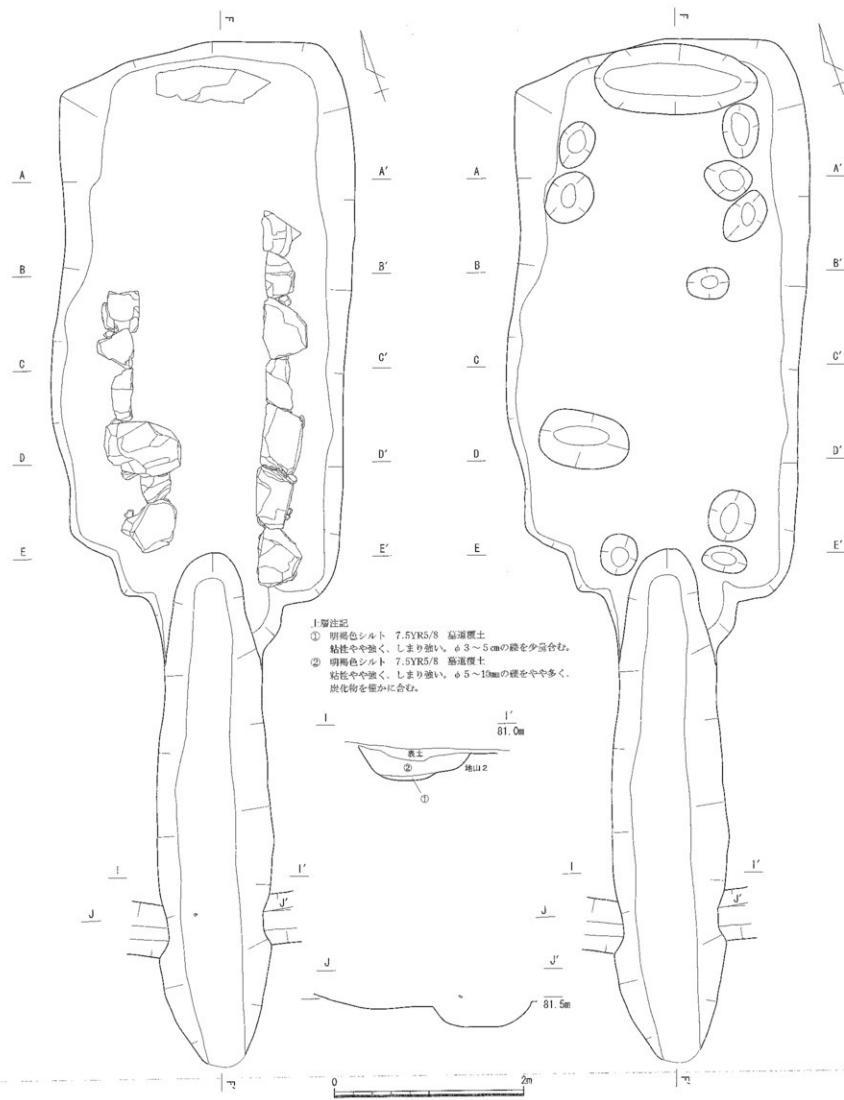




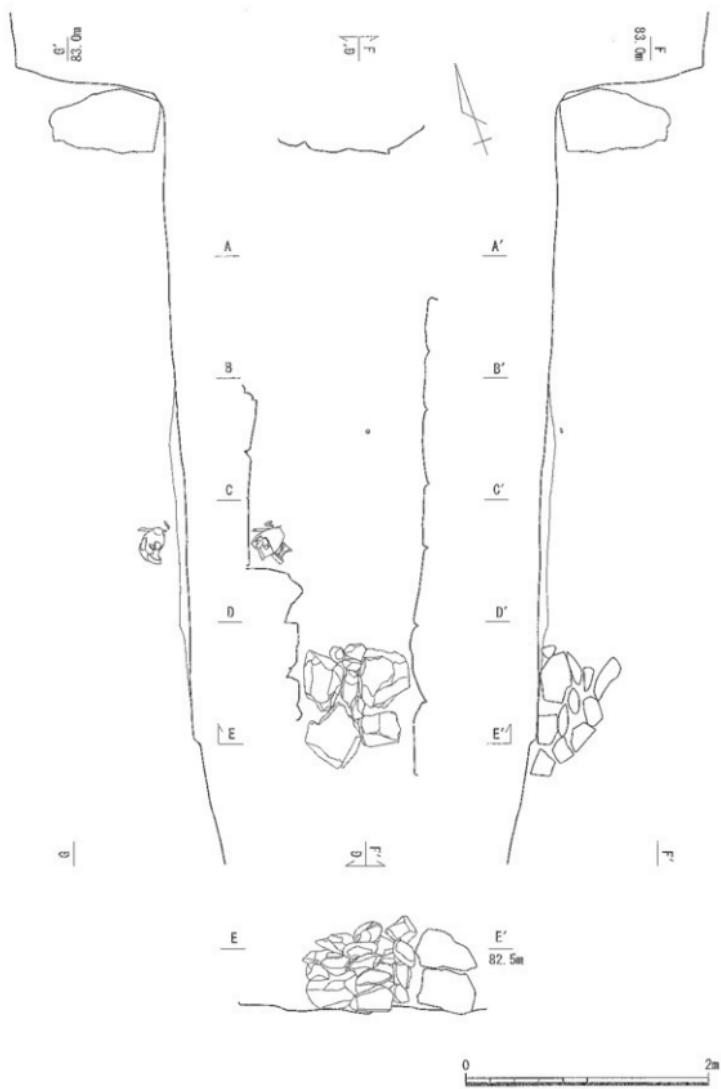
第86図 A17号墳石室検出状況横断面図



第87图 A17号填石室实测图



第89図 A17号填基底石・基坑測量図・墓道遺物出土状況図



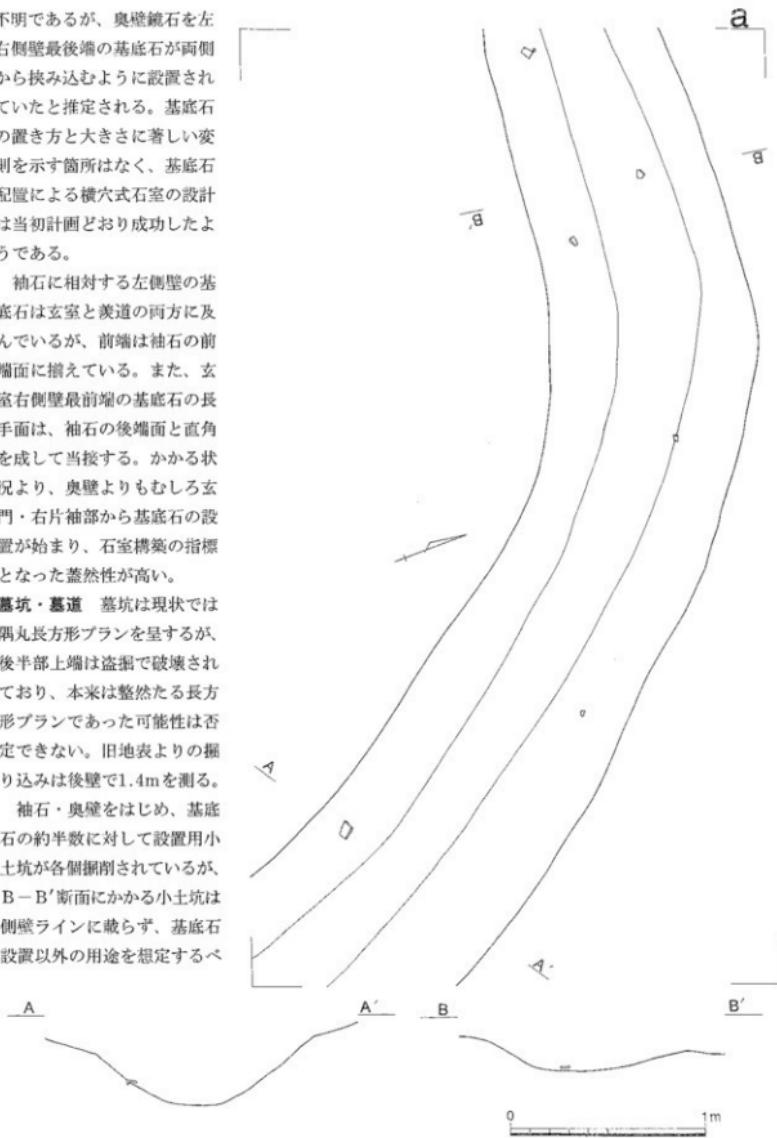
第88圖 A17號墳石室遺物出土狀況・閉塞石測量圖

基底石 玄室後半部の状況が不明であるが、奥壁鏡石を左右側壁最後端の基底石が両側から挟み込むように設置されていたと推定される。基底石の置き方と大きさに著しい変則を示す箇所はなく、基底石配置による横穴式石室の設計は当初計画どおり成功したようである。

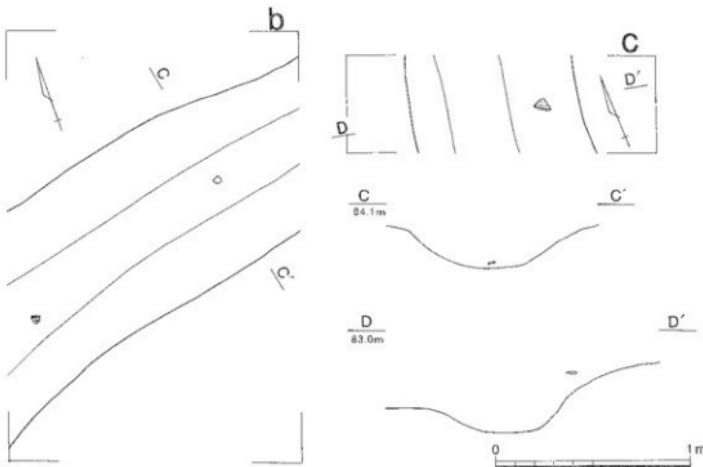
袖石に相対する左側壁の基底石は玄室と羨道の両方に及んでいるが、前端は袖石の前面に擣えている。また、玄室右側壁最前端の基底石の長手面は、袖石の後端面と直角を成して当接する。かかる状況より、奥壁よりもむしろ玄門・右片袖部から基底石の設置が始まり、石室構築の指標となった蓋然性が高い。

墓坑・墓道 墓坑は現状では隅丸長方形プランを呈するが、後半部上端は盜掘で破壊されており、本来は整然たる長方形プランであった可能性は否定できない。旧地表よりの掘り込みは後壁で1.4mを測る。

袖石・奥壁をはじめ、基底石の約半数に対して設置用小土坑が各個掘削されているが、B-B'断面にかかる小土坑は側壁ラインに載らず、基底石設置以外の用途を想定すべ



第90図 A17号墳周溝遺物出土状況図 その1



第91図 A17号墳周溝遺物出土状況図 その2

きかもしれない。また、羨道右側壁において現状最前端の基底石の前にもう1石分、小土坑が掘削されており、本来、羨道両側壁は長さが等しかったことが窺われる。

墓道は石室主軸の延長線上を一直線に伸延し、丘陵斜面の等高線にはば直交している。

③遺物の出土状況（第88～91図、図版44）

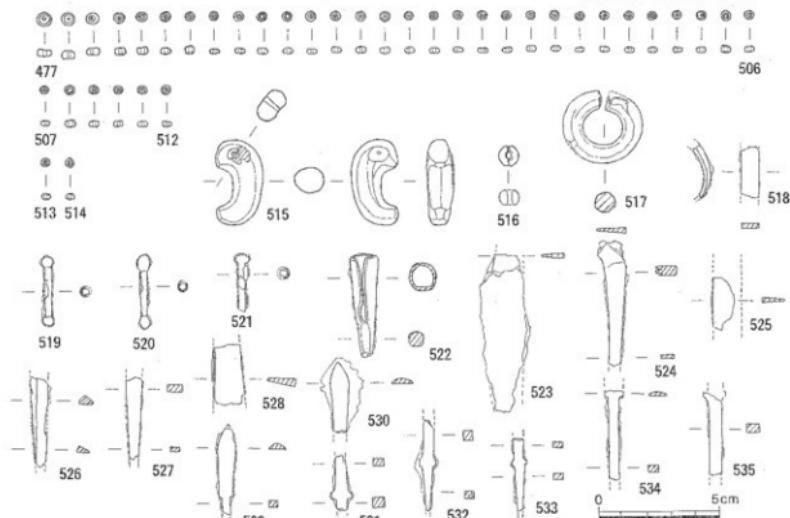
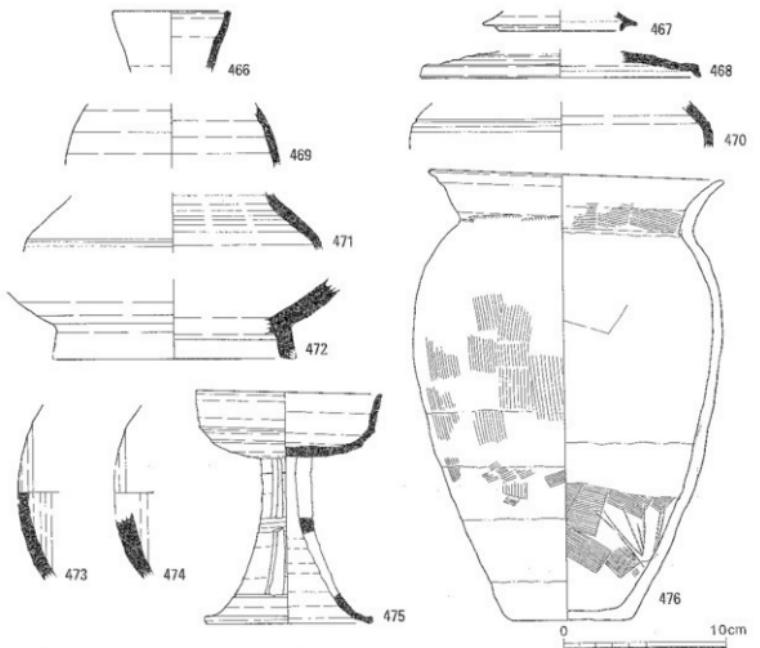
玄室右片袖部において、恐らく原位置を保持した状態で遺物がまとまって出土した。須恵器無蓋高杯475と土師器甕476が右片袖部のコーナーに向かって側壁にもたれ掛かるように置かれ、小刀1本（587・588）が476の右側で切先を下に向けて右側壁に立て掛けられていた。さらにこの小刀の切先周辺に円錐状鉄製品1点（522）、刀子1点（526）、および束になった鉄繩10本前後（541・542・544・547・552・556・569～571・573・575～577・580・581）が集中していた。石室内出土遺物で出土状況が明らかなものとしては、耳環517が玄室中央やや左側壁寄りの床面で、敷石の間隙より出土した。それ以外の石室出土遺物では、鉄鏃2片（578・579）が羨道の覆土より出土した以外は、玉類477～516、両頭金具519～521、刀523、鏃518、刀子524・525・527・528、および鉄繩片多数が玄室の特に北側（後半部）の覆土より出土している。

墓道より1点、図化不能な須恵器片が出土している。周溝の北部から西部にかけて須恵器片（466～469・471～473）が散在し、周溝に閉まれる墳丘跡地においても須恵器片（470・474）が出土した。

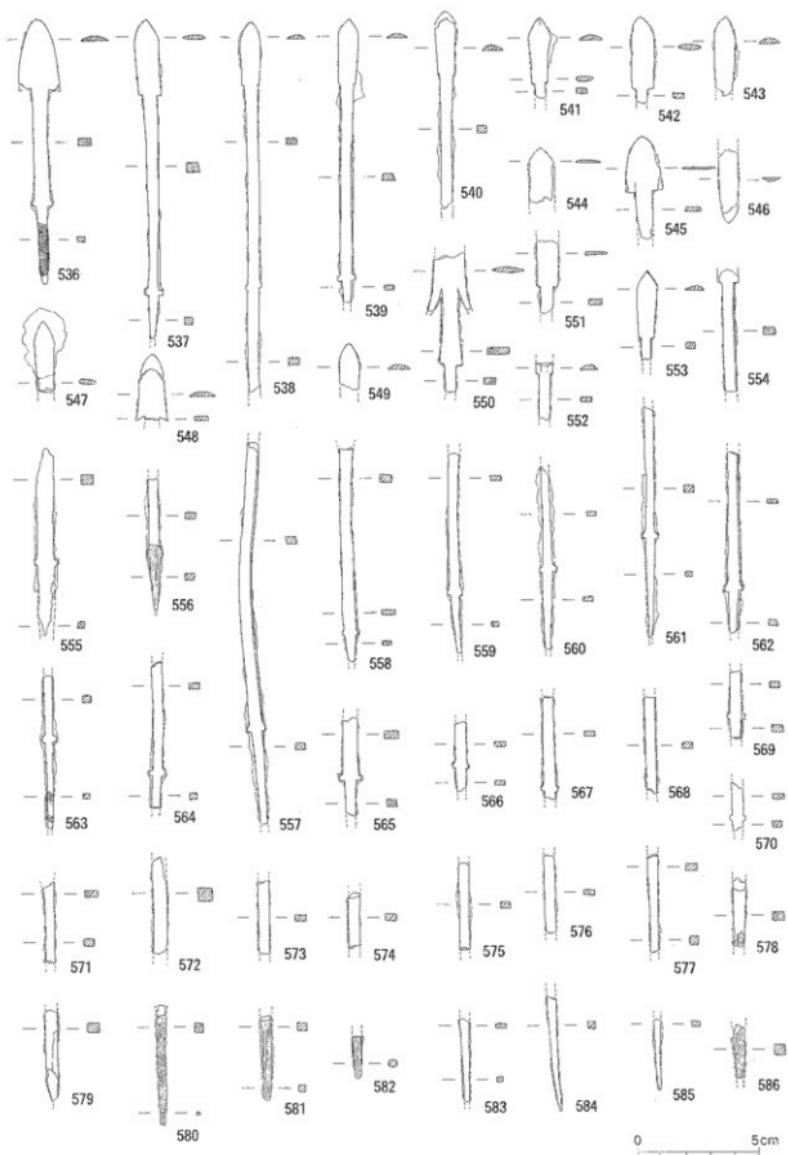
④出土遺物（第92～94図、図版9・17・132・133）

須恵器 467は壹蓋であれば遠江V期初頭の所産と推定される。壺蓋468は遠江V期前半に比定される。472は脚付長頸壺の底部であり、遠江V期初頭に比定され、466・469・471と同一個体の可能性があるが、467とセット関係にあるか否かは定かではない。473・474はプラスコ形瓶の体部小口面部であり、器種としての上限は遠江III期末葉である。475は長脚二段三方透孔無蓋高杯の完形品で、遠江III期末葉に比定される。土師器 甕476はほぼ完形で出土し、遠江III期末葉に一般的な形態である。

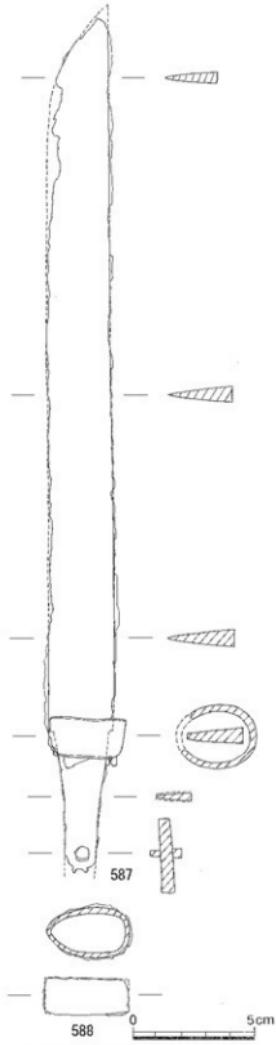
玉類 ガラス玉は38点出土した。うち477・478は白玉で、他の36点（479～514）は小玉である。色調は紺色を呈するものが大多数であるが、479・483は緑掛かっており、480～482は淡い青緑色を呈す。勾玉



第92図 A17号填出土器・玉類・金属製品実測図



第93図 A 17号墳出土鐵鏃実測図



第94図 A17号墳出土小刀実測図

515は瑪瑙製で、孔の一端付近が欠損している。土製丸玉516は黒色を呈す。

金属製品 耳環517は銅芯銀鉄張で、銀鉄板は主に外側が剥落している。522は鉄板の小片を円錐状に巻き、両端辺の接合は不完全である。弓弭金具のようでもあり、鑿または錐状工具の袋状基部にも見えるが、いずれの場合も矮小過ぎると考えられ、現時点では性格不明である。取り敢えず、「円錐状鉄製品」と仮称しておく。以上2点以外の金属製品は全て鉄製の武器または武器に伴う鉄製品である。

519～521は筒金の大部分を失った両頭金具である。521は芯棒頭部の一方を欠損するが、芯棒の方形断面は型式的に古い。

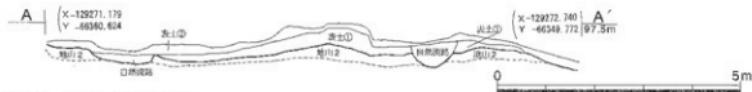
524は断面が長方形を呈し、刀子ではない可能性もあるが、525～528は刀子である。526の茎は片鎬造りとなっており、他の3点は平造りされている。

鉄錆のうち礎身形態が判別できるものの内訳は、短頸平根長三角形式 1 点 (536)、平根長三角形式 1 点 (545)、短頸平根脛抉柳葉式 1 点 (550)、尖根逆刺柳葉式 1 点 (548)、長頸尖根柳葉式 4 点 (537~540)、尖根柳葉式 14 点 (529・530・534・541~544・546・547・549・551~554) となっている。他の頭部・茎片 (531~533・535・555~586) は棘闘の茎闘を有する長頸錆と考えられる。付着残存する有機質については、茎に樹皮を巻き付けるもの (536・563・580) と茎に矢柄の木質が残るもの (556・558・578・581・582・586) がある。

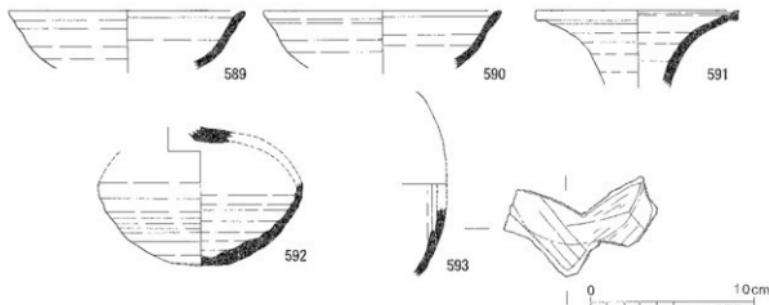
小刀587は今回調査最大の出土金属製品であり、残存長35cmを測る。切先の先端と茎の末端が欠損している。全体を平造りし、刀身は一直線である。身間に鎬が残存し、茎の目釘孔には長さ3cm、φ 5mmの目釘が残存している。鎬588は587の直近で出土し、形状から587の付属部品と推定される。

⑤小結

出土遺物より、A17号墳は遠江III期末葉に築造され、同V期初頭～前半に追葬が行なわれている。また、盜掘を受けていたが、幸運にも玄室前半部は荒掠を免れ、比較的豊富な副葬品と良質の石材を用いた右片袖式横穴式石室が保持されたことで階層性の高さが示された。また、A15号墳より後出しながら同古墳の墓道延長線を進むように占地していることから、同じ右片袖式横穴式石室を有する古墳でも、A17号墳がA15号墳より階層性が相対的に優位であると判定できる。



第95図 A18号墳東西断面図



第96図 A18号墳出土遺物実測図

(II) A18号墳

① 墳丘・周溝・埋葬施設（第95図、図版48）

1区の北側調査区外に立地する古墳であり、踏査により円墳であることが判明している。当古墳の調査着手当初、調査区北壁セクションにおいて観察される溝状の凹み2箇所をA18号墳の周溝と考えていたが、その後、調査区外に見える墳丘との不整合を勘案し、自然流路と認定した。従って、今回の調査区内にA18号墳に伴う追跡は存在しない。

② 出土遺物（第96図、図版134）

須恵器 A18号墳の南側調査区内の表土より、当古墳由来と考えられる須恵器が出土した。無蓋高杯部589・590は遠江IV期末葉に比定される。591は無蓋の長頸壺の口頸部であれば、遠江IV期末葉の所産と考えられる。平瓶体部592は遠江IV期後半に比定される。593はフラスコ形瓶ならば、器種としての下限は遠江IV期末葉に求められる。

③ 小結

A18号墳の築造時期は、今回の調査区内に流入した須恵器から遠江IV期後半に位置付けられる。追葬があったとすれば、遠江IV期末葉に少なくとも1回行なわれた可能性がある。また、本来石室内に納められる副葬品が墳丘からやや離れた表土層より出土した事実は、当古墳の残存状態が劣悪であることを示唆するかのようである。

(II) A19号墳

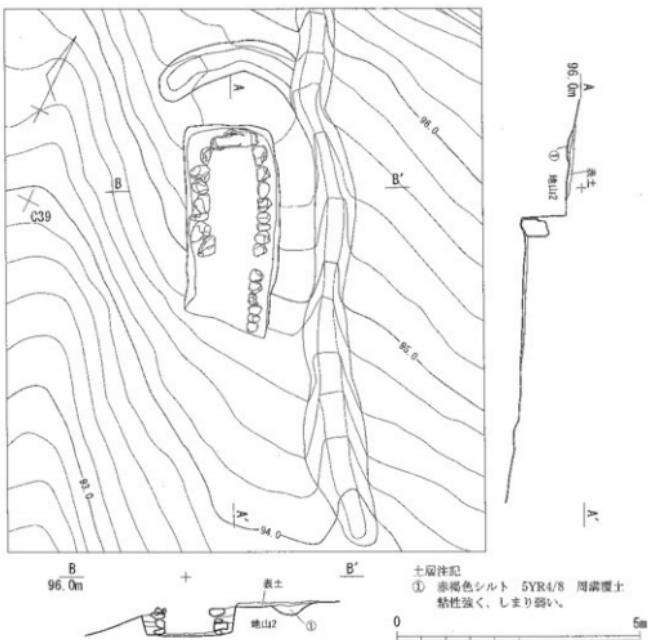
① 墳丘・周溝（第97図、図版47）

A18号墳の南側、1区中央最北部に位置する。古墳の西側は狭隘ながらも深い小谷が開削されており、東側では自然流路が周溝に合流している。墳丘盛土は遺存していない。周溝は西～南側で流失、或いは築造当初より掘削されていなかった可能性もあるが、北～東側で残存する部分から推定すれば、墳丘は東西4m以上、南北5.5m以上の南北に長い楕円形プランを呈する円墳と考えられる。

② 埋葬施設（第98・99・101図、図版47・48）

古墳の中央に单室系擬似両袖式横穴式石室が構築されている。小規模な墳丘における埋葬施設の占有率が高い。残存状態は比較的良好であるが、表道右側壁は完全に失われている。

天井石 石室内に転落していた石材のうち、大型角礫3石を天井石と判断した。最大のものは長軸69cm、短軸39cmを測る。残存する各天井石は、長軸が石室主軸との直交を概ね保持した状態で検出されているため、自然崩落した可能性が高い。



第97図 A19号填塗丘図

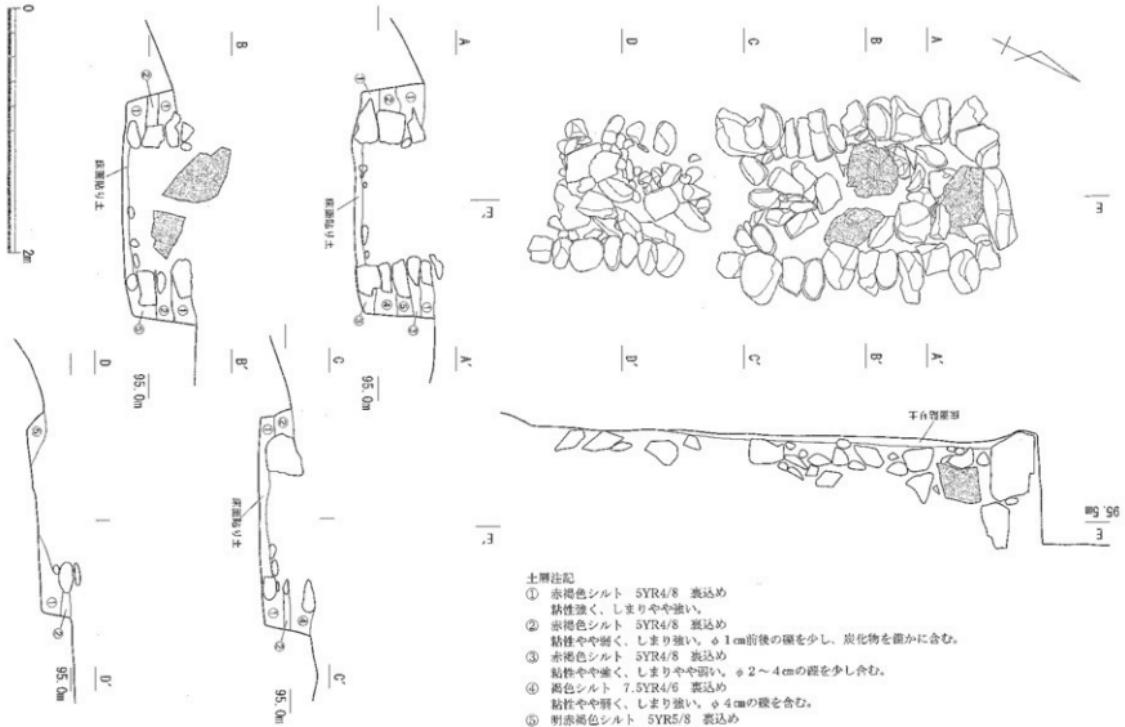
玄室 中央部に最大幅を有し、奥壁幅が最小となる胴張り形の玄室プランを呈す。奥壁は大型の角礫を基底に据え、その上に若干小振りの大型角礫を長手積みし、玄室内側へ持ち送っている。この2石で鏡石となっているが、鏡石の左右の基底にも中型の角礫を据え、その上には両側壁最後端との間隙を埋めるように、多数の小型角礫が小口積みされている。現状の奥壁の高さは0.95mを測る。

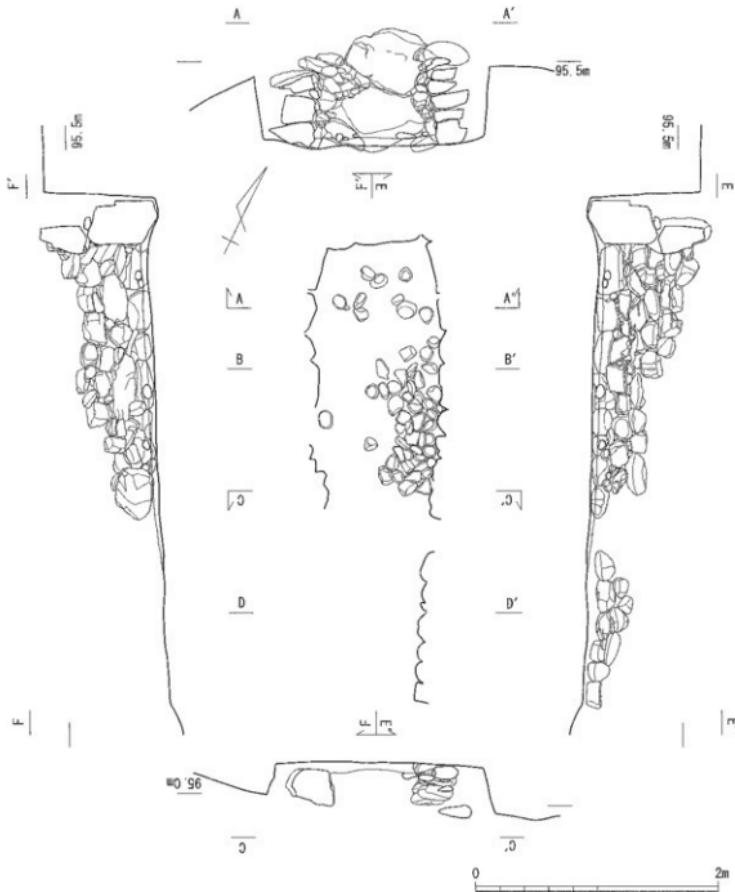
側壁は中型以上の礫を平手積みまたは小口積みし、角礫主体であるが、各段には円礫も少數使用されている。ほぼ水平を保つ目地通りが不貫徹ながら両側壁ともに認められ、左側壁は最大6段、高さ0.82m残存し、右側壁は最大4段、高さ0.7m残存する。石材どうしの間隙をφ10cm以下の小型角礫で充填しているが、特に左側壁で顕著に行なわれている。また、両側壁とも2段目から持ち送られている。残存する右側壁最前端の基底石は内側に0.1m突出しているが、これは石室西側に立っていた樹木の根株に背後から押し出されたためである。この石の前1石に、さらに左側壁の相対する箇所に玄門を構成する立柱石が立て据えられていたと想定されるが、恐らく盜掘により失われている。

羨道 左側壁のみ残存する。玄室とは異なり、円礫主体に平手積みまたは小口積みされている。最大2段、高さ0.3m残存する。残存する部分を見る限り、明確な持ち送りは看取されない。また、目地通りがあったとしても、玄室同様に不完全なものであったと考えられる。

敷石 石室主軸より左側の玄室前半部を中心、玄室床面の約1/4残存する。φ10数cmの円礫主体に敷設されているが、同程度の大きさの角礫も少數ながら使用されている。本来は玄室の床全面に敷設されていたと想定されるが、羨道には全く敷設されなかった蓋然性が高い。

第90図 A19号機石室発出状況図

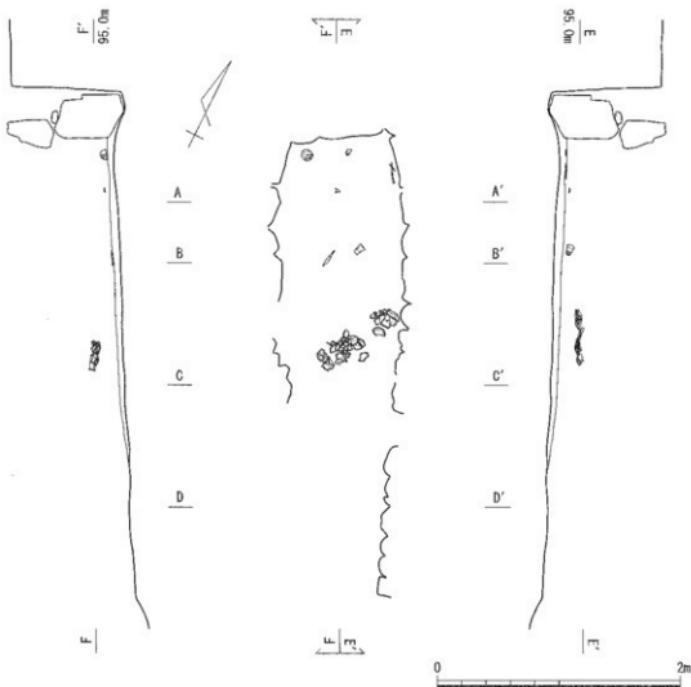




第99図 A19号墳石室実測図

基底石 側壁の基底石は中型の角礫の長手面を内側に向けて平手置きする箇所、中型円礫を平手置きする箇所、中型円礫・角礫を小口置きする箇所があり、置き方は不統一である。玄室左側壁は胴張り形の曲線が整えられているのに対し、同右側壁のラインは雑然としている。また、右側壁最後端の基底石は奥壁を右側から挟むように設置されているが、左側壁のそれは後端面を奥壁面に当接させている。總じて、基底石設置による玄室の設計は周到な計画に基づいたものではなく、些か場当たり的に行なわれたと推測される。

羨道左側壁の基底石の配列は直線的であるが、そのラインは前方が石室主軸に向かって振れている。



第100図 A19号墳石室遺物出土状況図

羨道右側壁の基底石も同様の配列状況であったとすれば、羨道は羨門幅を上底とする長台形プランを呈することになる。

墓坑 墓坑は長方形プランを呈し、後壁では地山を0.92m以上掘り込んでいる。奥壁の基底石に対して設置用の小土坑が掘削されているが、立柱石に対応する小土坑は掘削されていない。玄室左側壁前半部の基底石が連続して小口置きされている状況と併せて考えると、奥壁の構築が立柱石の設置に優先したと想定し得る。なお、墓道は確認されなかった。

③遺物の出土状況（第100図、図版48）

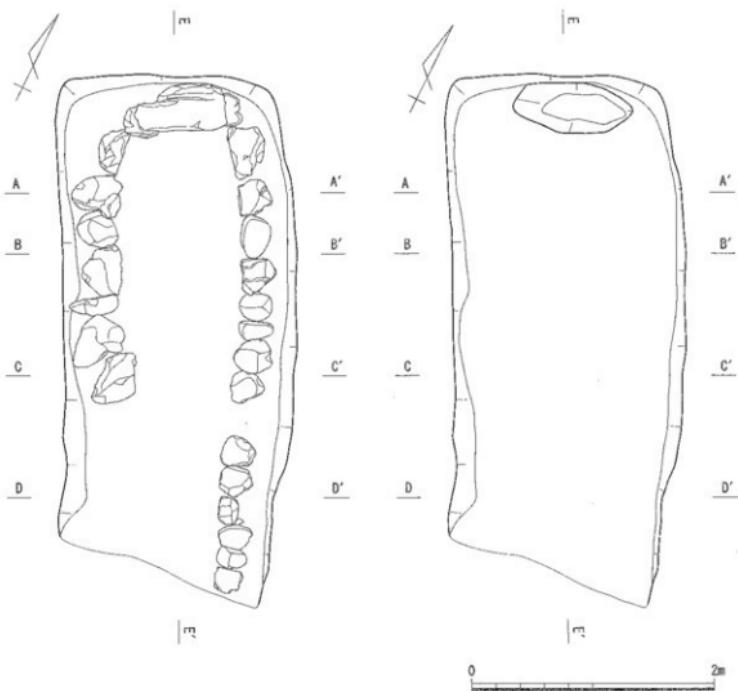
玄室の床面直上において須恵器（594・595）、土師器（596）、鉄製品（597～611）が出土しているが、多くは小片化している。また、盜掘を受けているため、古墳廃絶（追葬終了）時の原位置を保持して出土したものはほとんどないと考えられる。

④出土遺物（第102・103図、図版134）

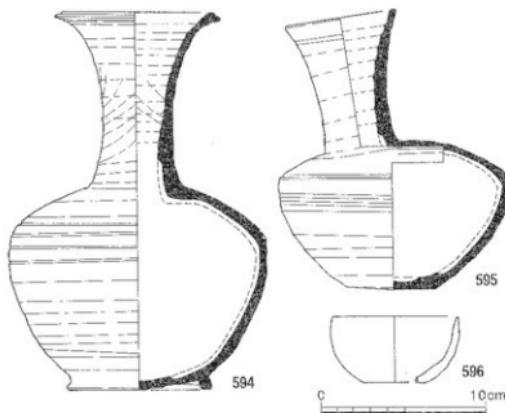
須恵器 台付長頸壺594は遠江V期初頭に比定される。平瓶595は遠江IV期末葉に比定される。

土師器 坯596は小型の楕形を呈し、須恵器の遠江IV期前半に並行すると考えられる。

鉄製品 597～600は鐵鏃である。597・598は両刃式の鏃身の先端が直線的に屈曲し、圭頭式のようにも



第101図 A19号埴基底石・墓坑実測図

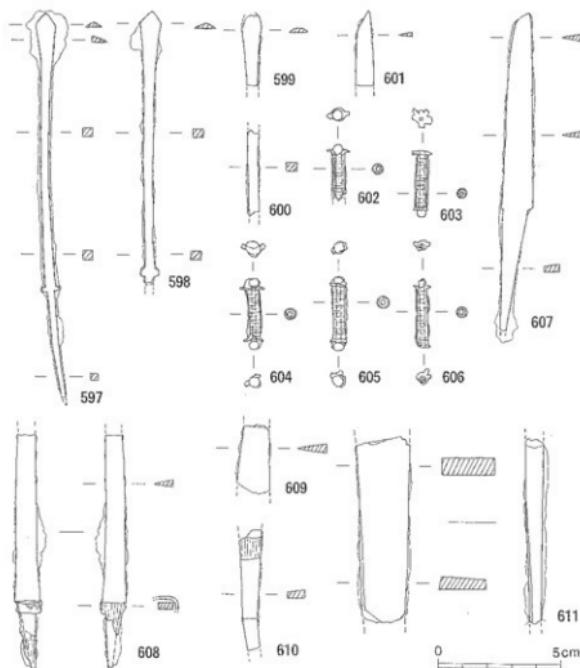


第102図 A19号埴出土土器実測図

見えるが、瓶身断面は片鎬造りであることから、長頸尖根鑿箭式と認定される。599も尖根鑿箭式であろう。

602~606は両頭金具である。いずれも弓本体の木質が付着残存しており、筒金の遺存状態は比較的良好である。花弁部が最も良く残る603の一端では6弁を数える。

601・607~610は刀子である。いずれの身も平造りであり、完形に近く遺存する607は両闊で、刃部側・棟側とともに撫閑である。608の闊部には鍔が遺



第103図 A19号墳出土金属製品実測図

存している。柄の木質は608と610の茎に付着残存している。

611は質感から古墳時代の所産とは考えられず、近世以降の楔であるとすれば、盜掘に使用された工具の可能性がある。

⑤小結

石室出土遺物から判断すれば、A19号墳は遠江IV期前半に築造され、同IV期末葉とV期初頭に追葬が行なわれたと考えられる。飾り弓を副葬し、階層性は決して低くないと評価し得るが、石室構築の不整然たる様相は、横穴式石室に理想的な石材の調達が困難であつたことを反映しているのかもしれない。

(II) A20号墳

①墳丘・周溝

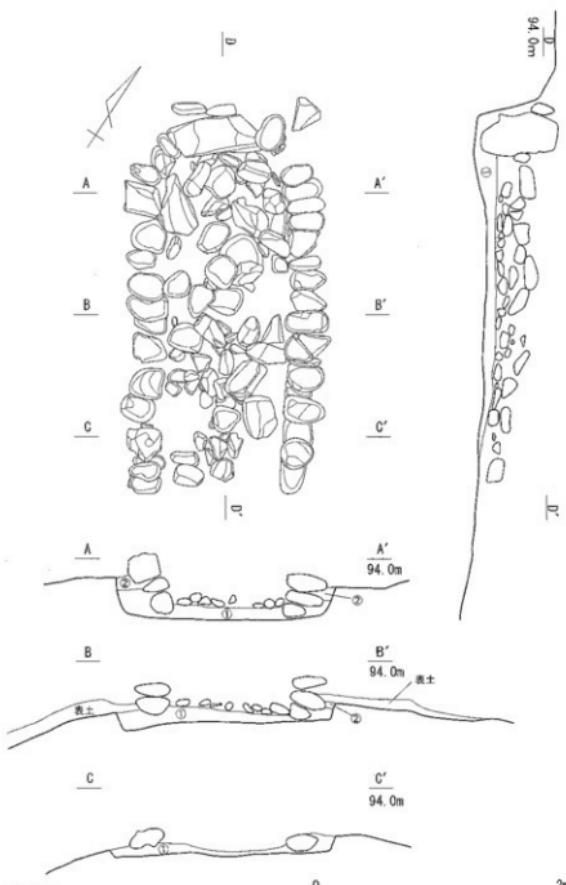
A19号墳の南東約10mに位置し、東側には小谷が南北に細く丘陵斜面を開析している。墳丘・周溝ともに確認されず、埋葬施設のみ遺存した古墳であるが、A8号墳の場合と異なり、当初より周溝が存在しなかつたとは考え難く、流失または削平されたと推定される。

②埋葬施設（第104・105・107図、図版49・50）

南南東に向かって開口する無袖式横穴式石室が構築されている。上半部は削平により失われていると考えられる。

玄室 開口部の玄門から後半部まで幅が一定し、奥壁で幅が狭くなる奥窄まり形の玄室プランを呈す。奥壁には大型の板状角礫を長手置きし、鏡石としているが、左下端部の空隙を補うために中型の角礫を咬ませるように基底石として据えている。現状では高さ0.52mを測るが、さらに上に石材が積載されていたと想定される。

側壁には専ら扁平な中型円礫を用い、基底石を手平置きし、2段目以上は小口積みしている。左側壁で最大3段、高さ0.47m残存し、右側壁で最大3段、高さ0.53m残存する。目地通りは右側壁で認められるが、左側壁では2段目の奥から4石目までがこれより前方の2段目と3段目に対応しており、目地



七層注記
 ① 暗赤褐色シルト SYR3/6 埋込み・掘削床土
 しまりやあり。約1cm前後の隙を僅かに含む。
 ② 赤褐色シルト 5YR4/8 埋込み
 しまりやあり。約1~3cmの隙を少し含む。

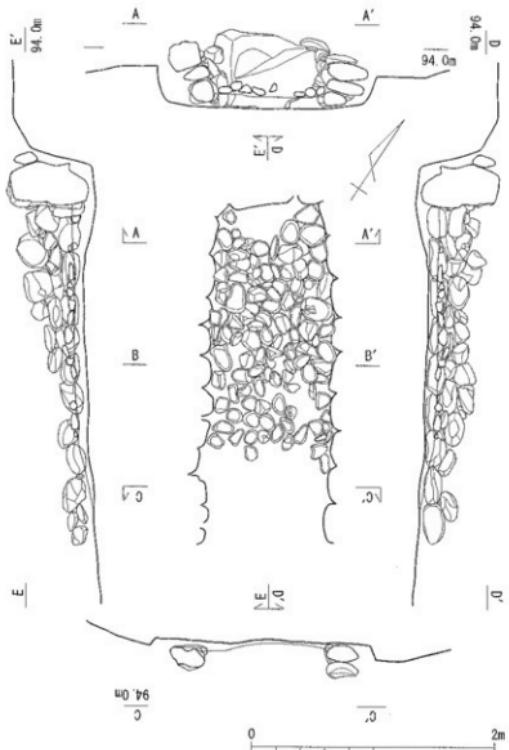
第104図 A20号横石室検出状況図

向けて整然とした奥窄まりラインを形成しているが、右側壁で長手面を内側に向けるのは奥より2・3石目のみであり、他の石は小口置きされている。しかも、右側壁の壁面ラインはやや不整と言ってよく、玄門から4石目は側壁から墓坑壁側に0.1m引込んでいる。よって、まず奥壁の基底石が据えられ、次に左側壁の基底石が配列された後、右側壁の基底石の設置に着手したが、壁面を構成するに足る長手面を有した石材が満足に集まらず、やむを得ず中途から小口置きに変更し、設置計画に狂いが生じたために右側壁ラインが左側壁ラインの線対称とはならなかつたと考えられる。

通りは不貫徹となつてゐる。側壁の持ち送りは残存する部分では認められず、少なくとも3段目までは側壁面を垂直に保とうとしているようである。

敷石 奥壁鏡石の手前の擾乱坑および玄門より後方0.6~0.7mまでの玄室床面を除いて、良好に残存している。φ10~26cmの扁平な円礫が主に使用されているが、角礫も若干用いられてゐる。また、奥に向かうほど大きな礫を敷設する傾向がある。玄門より後方0.6~0.7mまでは築造当初より敷石が敷設されなかつた可能性が高く、無袖式の玄室内を敷石の有無によって空間分割していたと考えられる。

基底石 左側壁の基底石は中型円礫の長手面を内側に



第105図 A20号横石室実測図

において、須恵器4個体(612・613・615・616)が据え置かれた状態で出土した。さらにその前方約0.5mの床面直上にて耳環3点(622~624)が出土した。また、玄室中央部の右側壁沿い床面直上において、須恵器平瓶1個体(614)および耳環1点(625)が出土した。大屋敷A古墳群の多くの古墳は徹底的に盜掘され、石室内で遺物が出土してもほとんどの場合、古墳廃絶時の原位置を保持していないことを考慮すれば、当古墳は石室上半部が破壊されているにもかかわらず、最後の追葬が終了した直後の状況が比較的良好に残存していると見做すことができる。そして、玄室の遺物2群は被葬者2体分の副葬品と捉えることが可能である。ただし、耳環が3点集中している状況は被葬者1体に伴うものとは考え難く、やはり玄室内は荒掠されているようである。なお、刀子3点(619~621)は玄室覆土中より出土した。

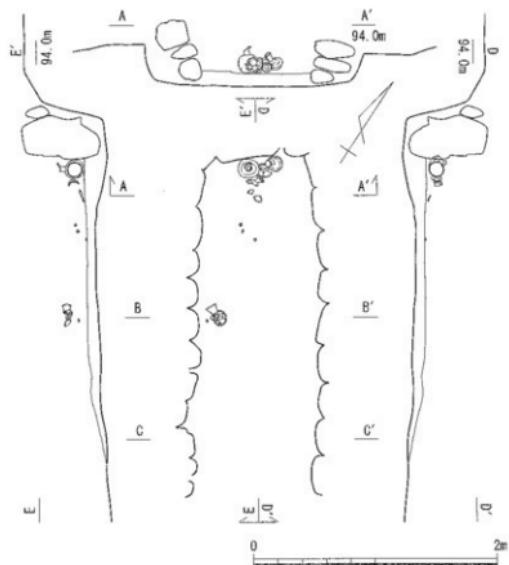
④出土遺物(第108・109図、図版9・134・135)

須恵器 フラスコ形瓶612は遠江IV期後半に比定される。平瓶613・614も遠江IV期後半の所産である。615と616は無蓋高杯としては坏部の見込みが広く、深さが大きいことから、むしろ脚付盤と呼称するほうが適切である。2点とも遠江IV期後半に比定される。617は玄室出土の長頸壺体部であり、肩部が張らずに

両側壁の最後端は奥壁基底石の前側角に接するにとどまり、奥壁を両側からしっかりと挟み込む形態にはなっていない。両側壁に奥壁を挟み込ませる意図がなかったことは、右側壁の最後端の基底石が小型角礫となっており、奥より2石目と奥壁との間隙を調整するために設置されたと考えられる。墓坑 長方形プランを呈し、後壁では地山を0.65m以上掘り込んでいる。現状の墓坑上端の形状と現表土の堆積状況からは、墓坑上部の大部分が削平されていることが理解される。奥壁の基底石に対して、設置用の小土坑が掘削されている。なお、墓道は検出されなかった。

③遺物の出土状況(第106図、図版49)

奥壁の直前の床面直上



第106図 A 20号墳石室遺物出土状況図

行なわれたと考えられるが、それぞれに附隨する副葬品には時期差が認められない。短期間のうちに葬送が2回実施されたと考えざるを得ないが、奥壁直前において出土した遺物群を初葬に伴う副葬品と捉えることが妥当であるならば、A 20号墳の築造時期は遼江IV期後半に比定される。また、石室構築に使用された石材の質や鉄錆さえも確認されていない状況などを勘案すれば、階層性の低い古墳と評価することができる。

(1) A 21号墳

① 墳丘・周溝（第110図、図版50）

1区中央部を南北に縦断する谷の西侧斜面の南部、A 22号墳の北北東に立地する。墳丘盛土は完全に失われているが、周溝は完周状態で検出された。周溝により囲まれる範囲は東西3.5m、南北4.8mを測り、南北に長い楕円形プランを呈する円墳である。

② 埋葬施設（第111～113図、図版50・51）

古墳の中央に無袖式横穴式石室が構築されている。残存状態は比較的良好で、南南東に向かって開口する。

天井石 当古墳調査当時の所見によると、「天井石らしいもの」が1石、玄門付近で検出されたことになっているが、図面・写真等に明示された記録がなく、詳細は不明である。

なだらかに下半部へ連続し、遼江IV期後半の所産である可能性がある。

土師器 坪618は小型の楕形を呈し、出土位置は不明であるが、玄室出土須恵器と大差ない時期の所産と考えられる。

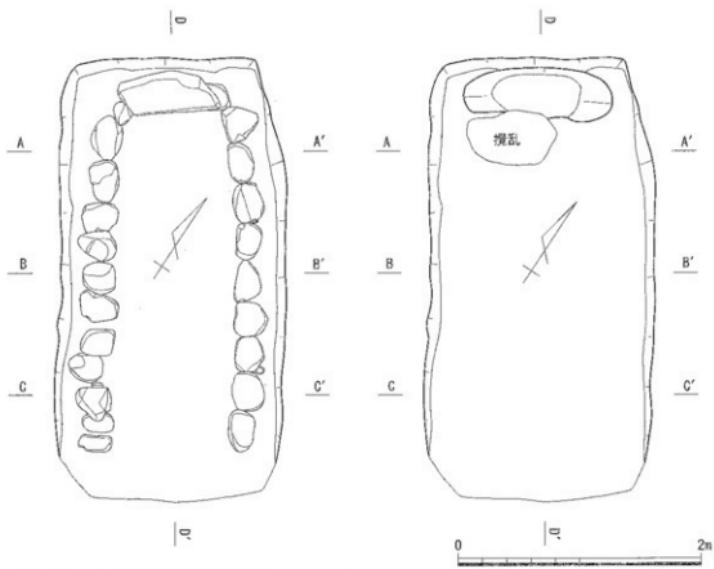
金属製品 刀子619～621はいずれも平造りの茎片である。

619には巻き付けられた樹皮が銹着遺存し、621には柄の木質が付着残存している。

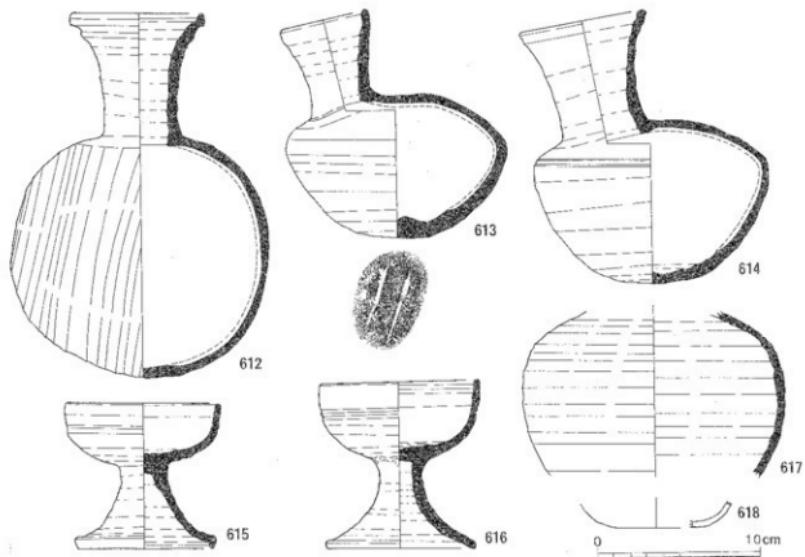
耳環622～625はいずれも銅芯に銀銅板を巻き、大きさから622・623と624・625の2対を成す。4点とも銀銅板は外側の剥落が著しい。

⑤ 小結

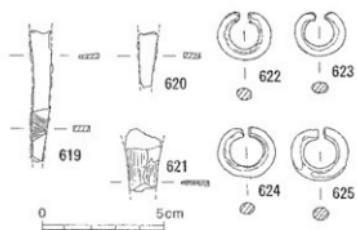
A 20号墳は遺物の出土状況を見る限り、被葬者は少なくとも2体安置されていた。換言すれば、最低1回は追葬が



第107圖 A20號墳基底石・墓坑實測圖



第108圖 A20號出土土器實測圖



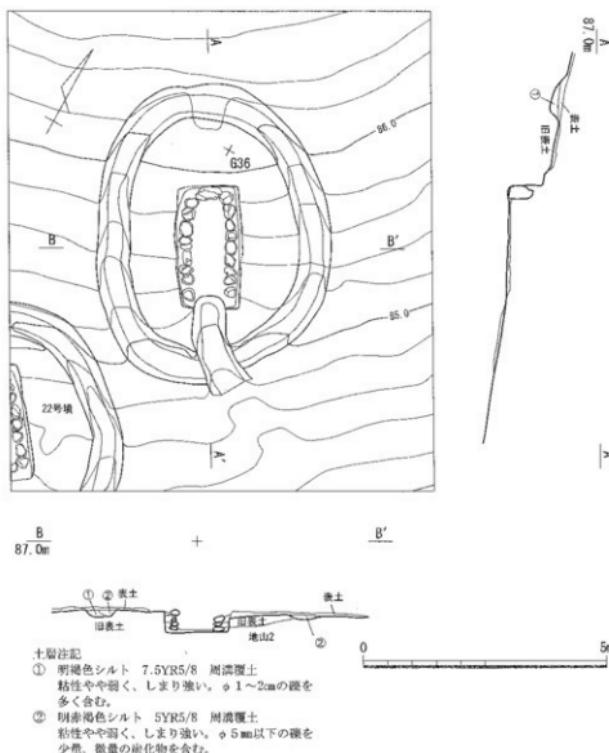
第109図 A20号墳出土金属製品実品図

玄室 中央部に最大幅を有し、奥壁幅が最も狭くなる胴張り形の玄室プランを呈す。奥壁は大型の板状角礫を立て据えて鏡石としている。鏡石の左右両側に奥壁を構成する石組みは存在しないが、鏡石の上に小型の角礫が1石残存しており、本来の奥壁は小型礫が鏡石の上に積載されて現状より高く造られていたことが窺われる。現状の奥壁は最大2段、高さ0.56mを測る。

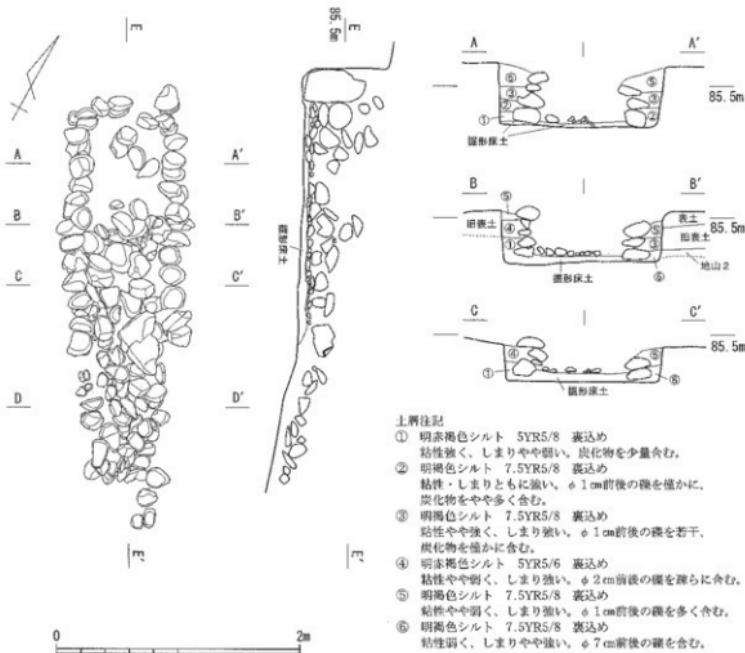
側壁の目地通りについては、左側壁で前方へやや斜め下がりとなる目地通りが看取されるが、右側壁では一貫した目地通りが認められず、些か雑然とした印象

を与える。両側壁とも中・小型の円礫主体に小口積みされており、左側壁は最大4段、高さ0.46m、右側壁は最大6段、高さ0.58m残存する。また、両側壁とも持ち送り積みされているが、持ち送りが始まる段および持ち送りの傾斜角度は場所によってばらつきがある。

敷石 左側壁沿いが失われている以外は玄室床面の7割以上で残存しており、本来は玄室床全面に敷設



第110図 A21号墳墳丘図



第111図 A21号墳石室検出状況図

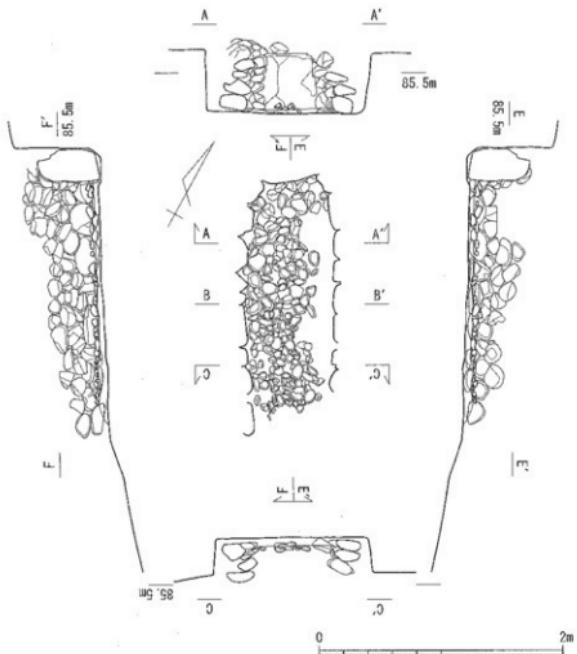
されていたと考えられる。円礫がやや卓越しているが、角礫も多数使用されている。 $\phi 5\text{ cm}$ に満たないものから $\phi 15\text{ cm}$ に達するものまで存在するが、奥に向かうほど大きな石を敷く傾向が看取される。

閉塞石 当古墳調査当時の所見によると、玄門において「閉塞石の基底石らしいもの」が2石検出されたことになっているが、図面・写真等に明示された記録がなく、詳細は不明である。

基底石 両側壁の基底石には、長手面を内側に向ける置き方と小口置きとの双方が採用されている。中型の円礫主体であるが、角礫も数石用いられている。また、各基底石の高さは特に右側壁においてまちまちであり、このことが右側壁の目地通りを妨げたと理解される。両側壁の前から3石目の一对の基底石は小口置きされ、側壁面より僅かに突出しているように見えるが、ここで玄室を前後に空間分割していたのではなく、単純に石材の長さを調整したことを示すに過ぎないと考えられる。基底石全体の設置状況としては、石室主軸で線対称を成し、整然たる胴張り形プランを形成していると言える。

墓坑・墓道 墓坑は長方形プランであるが、石室側壁に合わせるかのように中央部に最大幅を有する胴張り状となっており、墓坑掘削時からすでに胴張り形プランの無袖式横穴式石室の確固たる構築計画があったことが窺われる。後壁では旧地表より 0.7 m 掘り込まれている。また、奥壁の鏡石に対して設置用の小土坑が掘削されている。

墓道は墓坑前端より 0.6 m までは主軸を石室と共有しているが、そこから先は東へ屈曲し、立地する斜面の等高線に直交して伸びている。図では墓道が途絶するように表現されているが、実際には標高 84.8 m



第112図 A21号墳石室実測図

は遠江IV期前半以降に築造されたと推定しておきたい。また、使用された石材は決して良質とは言えないが、周到な計画に基づいて構築された無袖式横穴式石室であり、大屋敷A古墳群における階層性が最低レベルではない、或いは横穴式石室全般が退化傾向にある遠江V期初頭以降の築造ではないと考えられる。

(1) A22号墳

①墳丘・周溝（第114図、図版52）

A21号墳の南西に隣接し、1区中央部を縦断する谷の西側斜面をやや尾根寄りに登った箇所に立地する。墳丘盛土は流失しているが、周溝の遺存状態は比較的良好で、南東側を除いて全体の約3/4周が検出された。周溝により囲まれる範囲は東西3.9m、南北3.8m強を測り、ほぼ正円プランを呈する円墳である。

②埋葬施設（第115・116図、図版52・53）

古墳の中央に竪穴式横穴式石室が構築されており、北北西—南南東方向の主軸を有す。残存状態は比較的良好である。

石室 中央部に最大幅を有し、次いで前壁幅が大きく、奥壁幅が最も狭くなる胴張り形の石室プランを呈す。奥壁は中型ではあるが当石室最大の板状角礫を立て据えて鏡石とし、その上に小型の円礫が小口

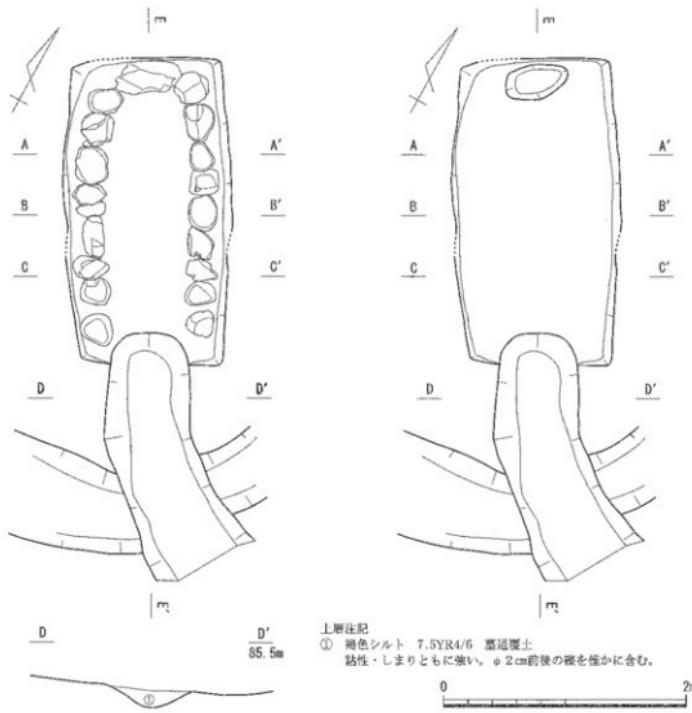
以下における微小な流路状地形に連続し、本来の墓道はより長く東側の谷の中心に向かつて伸延していたと推定される。

③出土遺物

当古墳において遺物は出土していない。

④小結

A21号墳の築造時期は出土遺物が見られないため不明である。隣接するA22号墳においても遺物が確認されておらず、築造時期に関して全く手掛かりがないようである。強いて言えば、位置的にA21・A22号墳に先行すると考えられるA24号墳が遠江IV期前半に築造された可能性があるため、推論を重ねることになるが、A21号墳



第113図 A21号墳基底石・墓坑実測図

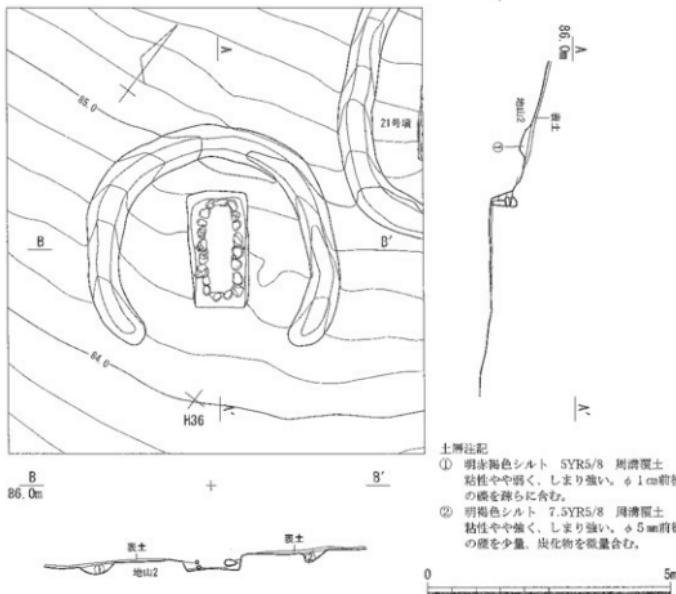
積みされ、若干石室内側に持ち送っている。鏡石を含めて最大3段、高さ0.55m残存する。

側壁には基本的に小型の円礫が使用され、小口積みされているが、変則的に中型の角礫も積載されている。両側壁ともに意図された目地通りは看取されない。奥壁に近いほど残存状態は良好であり、左側壁で最大5段、高さ0.46m、右側壁で最大5段、高さ0.43m残存する。また、側壁の持ち送りも奥壁に近いほど石室内側への傾斜角度が大きい。

奥壁に相対する前壁は基底石のみ残存し、現状の高さは0.15mを測る。前壁の基底石は小型～中型の扁平な円礫2石の長手面を内側に向けて設置されている。

間仕切石 石室前半部の床面に長径38cm、短径28cm、厚さ10cmの扁平な中型円礫が据えられている（第116図に網掛けで示した）。この1石により石室内部は後部：前部=3:1に分割され、間仕切石と認定することができる。

敷石 φ 6cm前後から側壁に使用されている円礫に近い大きさまでの、扁平な小型円礫を石室床面のほぼ全面に敷設している。石室中央部の長さ0.66mの範囲において、その前後の敷石よりも最大10cm高く敷石が敷設され、そのためにこの部分の床込め土を厚く盛っている。また、この敷石を高く敷設した部分の前端に上述の間仕切石の後端が接している。なお、石室中央部で高く敷設された敷石にその前後の



第114図 A22号墳埴丘図

敷石とは異質な疊が用いられているといった様相は見受けられない。

基底石 両側壁の基底石は石材として小型または中型の円礫と角礫を併用し、置き方としては基本的に長手面を石室内側に向いている。奥壁を両側壁の最後端の基底石が左右から挟み込むように設置されている。側壁では基底石どうしが当接しない箇所と逆に基底石どうしが重なり合う箇所とが見られ、当古墳の石室構築は基底石配置の段階から計画性が稀薄であったと言える。

左側壁最前端の基底石が長手面を石室内側に向けるでもなく小口置きされるでもない置き方となっているが、これは前壁の左側基底石と左側壁前2石目の基底石との間隙を充填するように設置されていると解釈することができる。この状況こそ、前壁が無袖式横穴式石室の閉塞石ではない根拠となっている。また、側壁からの視点で言えば、両側壁の最前端が前壁を左右から挟み込む形をとっていると捉えることができる。

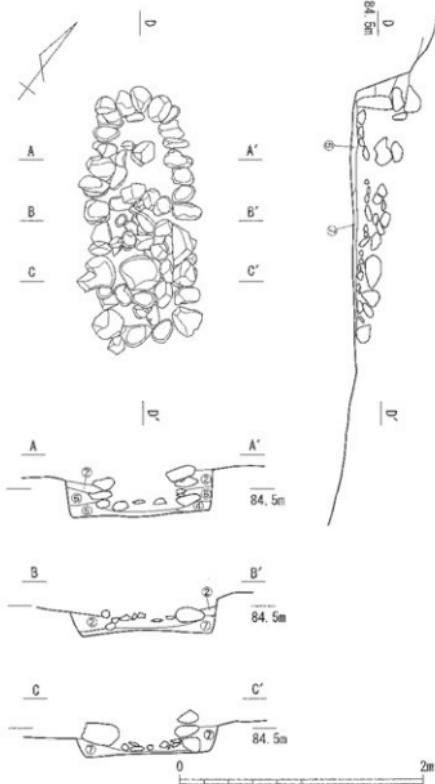
墓坑 現状では後辺が前辺よりも長い長台形の墓坑プランを呈す。後壁の現存する地山からの掘り込みは0.44mを測り、上端が奥壁の残存高よりも低くなっている。丘陵斜面に沿って大きく流失または削平されており、墓坑前壁が或る程度立ち上がっていたとすれば、本来は長方形の墓坑プランであったと想定される。なお、墓坑に墓道（前溝）は付設されていない。

③出土遺物

遺物は出土していない。

④小結

出土遺物がないため、A22号墳の築造時期は不明であるが、隣接するA21号墳で想定されたように、



土質注記

- ① 黄褐色シルト 7.5YR4/6 寒込め
粘性やや強く、しまり強い。φ 5mm前後の礫を僅かに含む。
- ② 明褐色シルト 7.5YR5/8 寒込め
粘性やや弱く、しまり強い。φ 5mm前後の礫を少し含む。
- ③ 別褐色シルト 7.5YR5/8 寒込め
粘性やや弱く、しまり強い。炭化物とφ 5mm前後の礫を僅かに含む。
- ④ 黄褐色シルト 10YR5/8 寒込め
粘性強く、しまりやや弱く。灰黄色粒子を繊らに含む。
- ⑤ 明褐色シルト 7.5YR5/8 寒込め・粗形床土
粘性・しまりともに強い。φ 2mm前後の礫を少し含む。
- ⑥ 明赤褐色シルト 5TR5/8 寒込め
粘性やや強く、しまり強い。φ 1cm前後の粗化礫を疎らに含む。
- ⑦ 明褐色シルト 7.5YR5/8 寒込め・細形床土
粘性やや強く、しまり強い。

第115図 A22号墳石室復元状況図

残存している可能性が高い。周溝により囲まれる範囲は東西7.2m、南北8.4m以上を測り、やや南北に長い梢円形プランを呈する円墳である。また、周溝北部より北約3mにA24号墳が位置する。

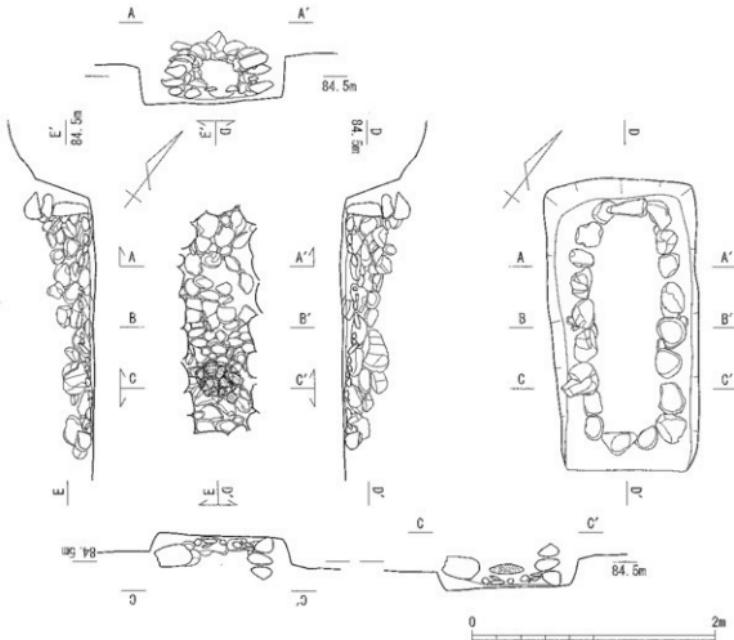
南東約10mに位置するA24号墳の築造に先行することはないと考えられるため、遠江IV期前半以降に比定される可能性がある。さらに堅穴系横穴式石室という、横穴式石室の新しい段階で派生した石室形態を採用していることから、A22号墳は無袖式横穴式石室を埋葬施設とするA21号墳より後とする蓋然性が高い。

A22号墳の埋葬施設は間仕切石により前後に2分割されている。さらに石室中央部で高く敷設された敷石の前後の段差も区画施設と解釈すれば、石室内は3つの空間に分割されていることになる。単次埋葬である堅穴系横穴式石室の内部が間仕切石と床面の段差によって最大3つの空間に分割される状況は、前述したA4号墳と酷似している。A22号墳の全長1.82mの堅穴系横穴式石室における空間3分割が厳格な規制を伴ったものであるとすれば、被葬者遺体をどのように安置したのかという問題をA4号墳と共有すると言えよう。

● A23号墳

①墳丘・周溝（第117図、図版54）

1区の古墳としては1区中央の南北谷の中心に最も近く、1区の最南端に位置し、谷の西側尾根末端に立地する。墳丘盛土は失われている。調査区外周の安全確保等の事情により、古墳の南端部分を調査することができなかつたため、第117図では周溝が南側で失われているように見えるが、実際は調査区外にも周溝が存在し、完周近く



第116図 A22号墳石室・基底石実測図

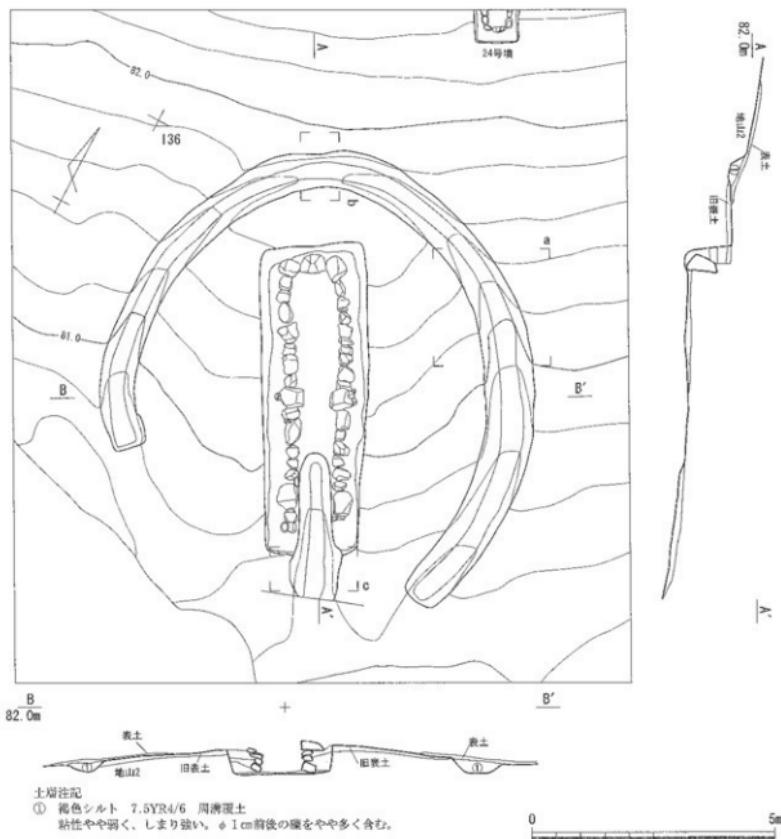
②埋葬施設（第118～121図、図版54・55）

古墳の中央に單室系擬似両袖式横穴式石室が構築されており、墳丘平面積に対して埋葬施設の占める比率がかなり大きい。石室は南南東に向かって開口する。残存状態は概ね良好である。

天井石 石室内に崩落した石材のうち、天井石と思しき大型板状角礫が計6石検出された。長径は最大のもので72cmを測る。6石のうち奥より4石は玄室の上端に架構されていたと考えられ、玄室の天井石は1石または2石が失われていると推定される。玄門から羨道後半部には2石残存しており、羨道にも天井石が架構されていたことが理解されるが、開口部である羨門まで架構されていたかどうかは定かではない。

玄室 奥壁の前方0.6mで最大幅を有し、奥壁幅が最小となる細長い胴張り形の玄室プランを呈す。奥壁は四角錐状の大型角礫を立てて鏡石としている。鏡石の上半部の左右に小型の角礫を積載し、奥壁上部の幅を補っている。奥壁の残存高は0.7mを測る。鏡石の奥壁面は石室内側へ若干傾斜しており、鏡石の上に積載されていた石材は恐らく持ち送り積みされていたと推定される。

側壁は中型以上の角礫を主体に小口積みまたは平手積みで積載され、両側壁とも2段目までは目地通りが看取られるが、特に左側壁では3段目に基底石よりも大型の角礫を積載し、その上は全く目地を意識しないかのようである。左側壁は最大6段、高さ0.85m残存し、右側壁は最大4段、高さ0.75m残存する。持ち送り積みは両側壁ともに3段目から始まっている。両側壁には大型角礫が立柱石として立て据えられ、左立柱石は高さ0.73m、右立柱石は高さ0.69mを測る。立柱石に接する玄室最前端の石には、

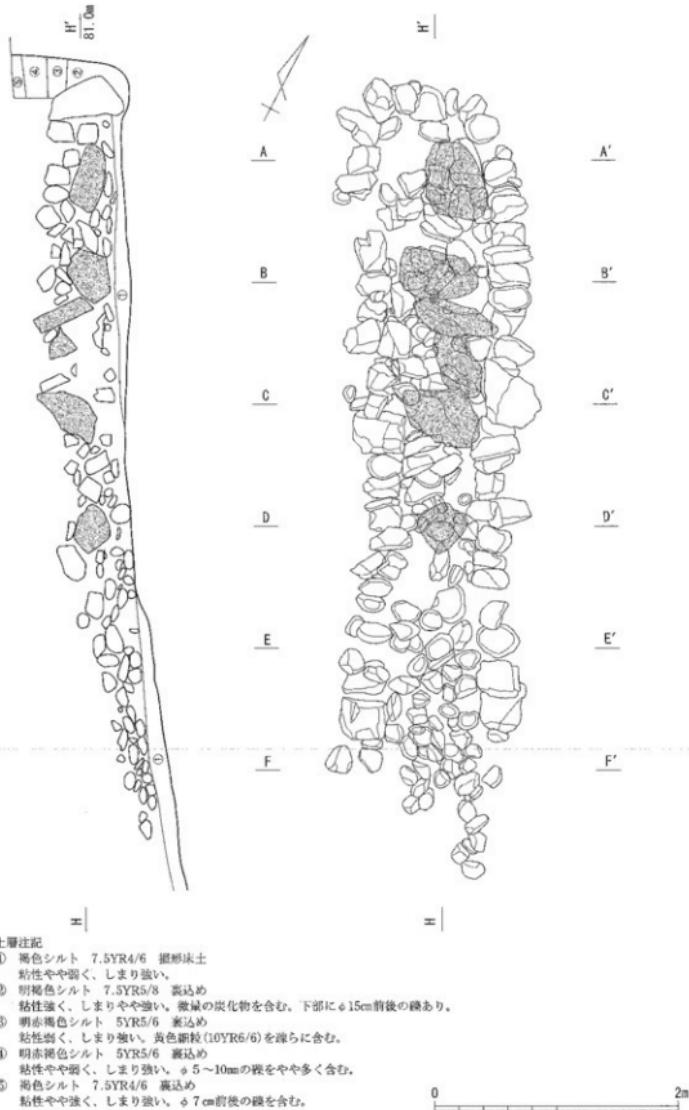


第117図 A23号墳埴丘図

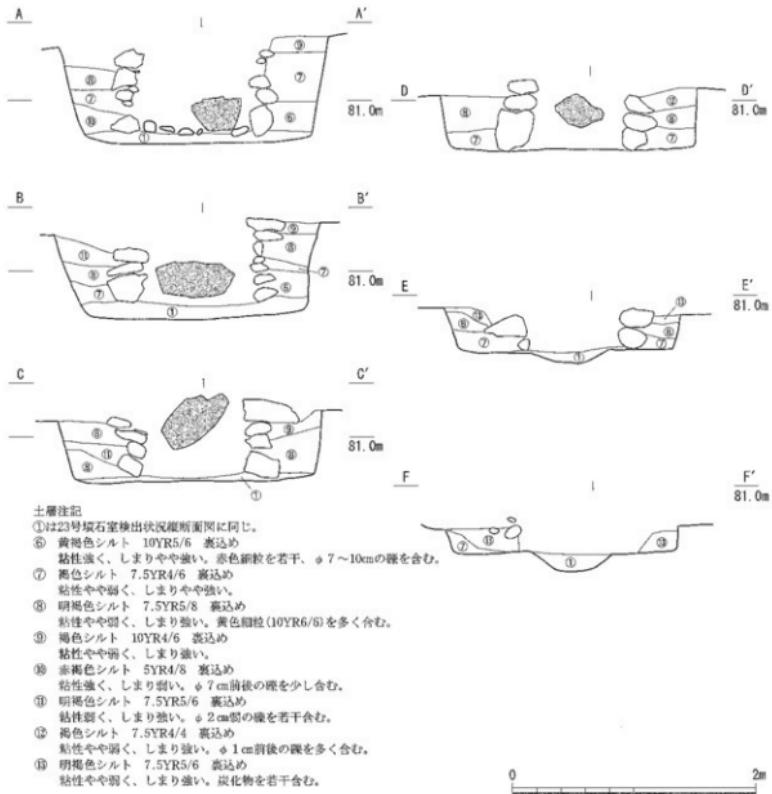
両側壁各段ともに比較的大きな角礫を積載している。立柱石の側壁からの突出は、左右ともに0.1mを測る。

羨道 玄室側と同様に、立柱石に接する両側壁各段の石には比較的大きな角礫を用いている。左側壁では立柱石に接する石を除いて2段目まで目地通りが認められるが、右側壁では明確な目地通りが見られない。これは、右側壁が小型の角礫を多用していることと関係すると考えられる。2段目以上は小口積みされており、左側壁は最大4段、高さ0.55m残存し、右側壁は最大4段、高さ0.63m残存する。持ち送り積みは玄室の側壁ほど顕著ではないが、右側壁の後部で2段目より明瞭に認められる。羨道の最大幅は立柱石の前端にあり、前方ほど幅が狭まり、羨門側幅が最小となる。

敷石 玄室後半部の右側壁および奥壁寄りに残存する。φ10~20cmの扁平な円礫が用いられているが、築造当初において、玄室床面全面に敷設されていたのかどうかは定かではない。



第118図 A23号墳石室検出状況図

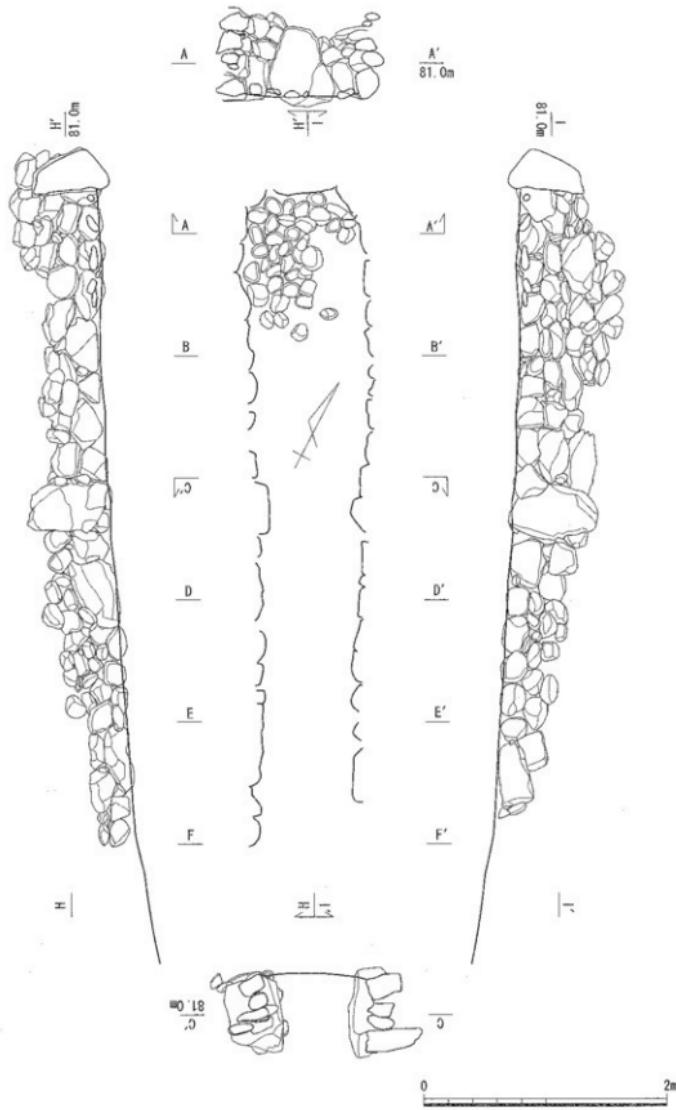


第119図 A23号墳石室検出状況横断面図

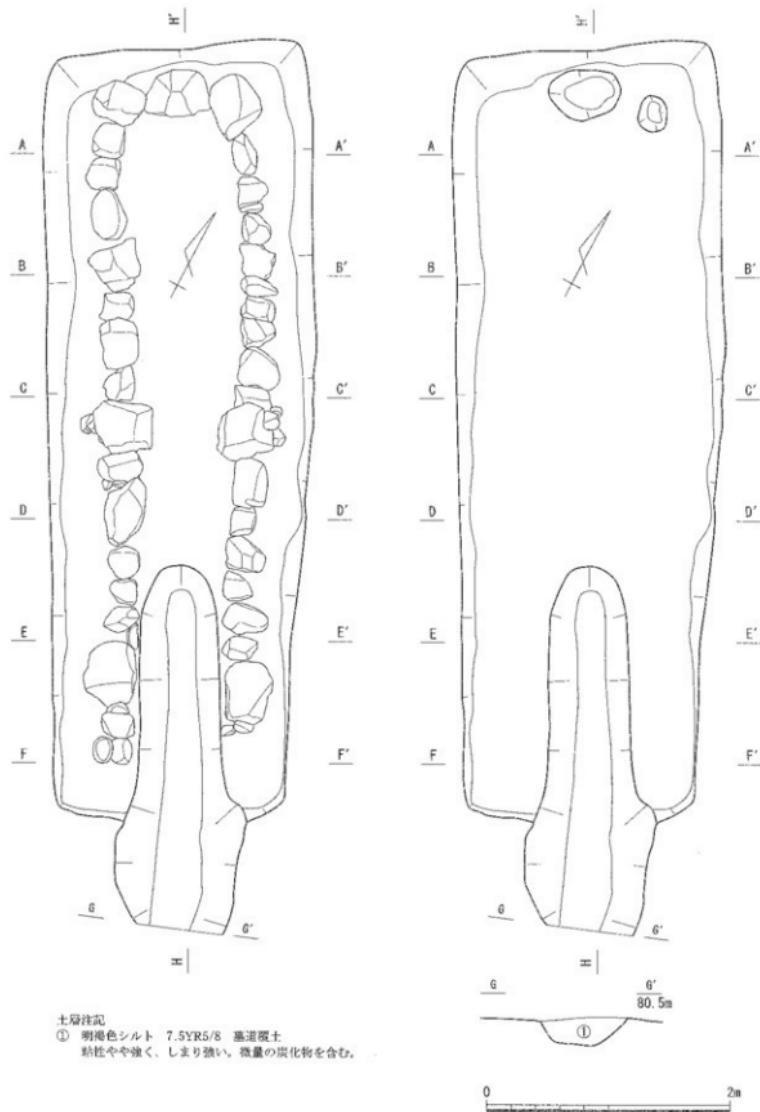
基底石 玄室・羨道とともに基底石には大型・中型の角礫が用いられているが、円礫も若干認められる。比較的小振りの基底石を小口置きすることが側壁の長さ調整のためであるとすれば、逆に石室最大級の基底石は石室設計の要石であり、構築の指標と捉えられる。A23号墳の場合、石室構築の指標となつた基底石は奥壁の鏡石とこれを左右から挟み込む玄室最後端の基底石一対、左右の立柱石、および羨道前端近くの大型基底石一対と考えられる。これらの要石がまず据えられ、それらの間に長手面を内側に向けて大型礫を1石設置するとその前後に中型礫を数石小口置きするという手順を繰り返して石室プラン全体を設計している。

墓坑・羨道 墓坑は後壁が前壁より長い長台形プランを呈し、後壁の旧地表からの掘り込みは0.9mを測る。奥壁の鏡石と玄室左側壁最後端の基底石に対して設置用の小土坑が掘削されている。上記の要石で小土坑が掘削されていないものは、基底石として安定した形状であったと言えるのかもしれない。

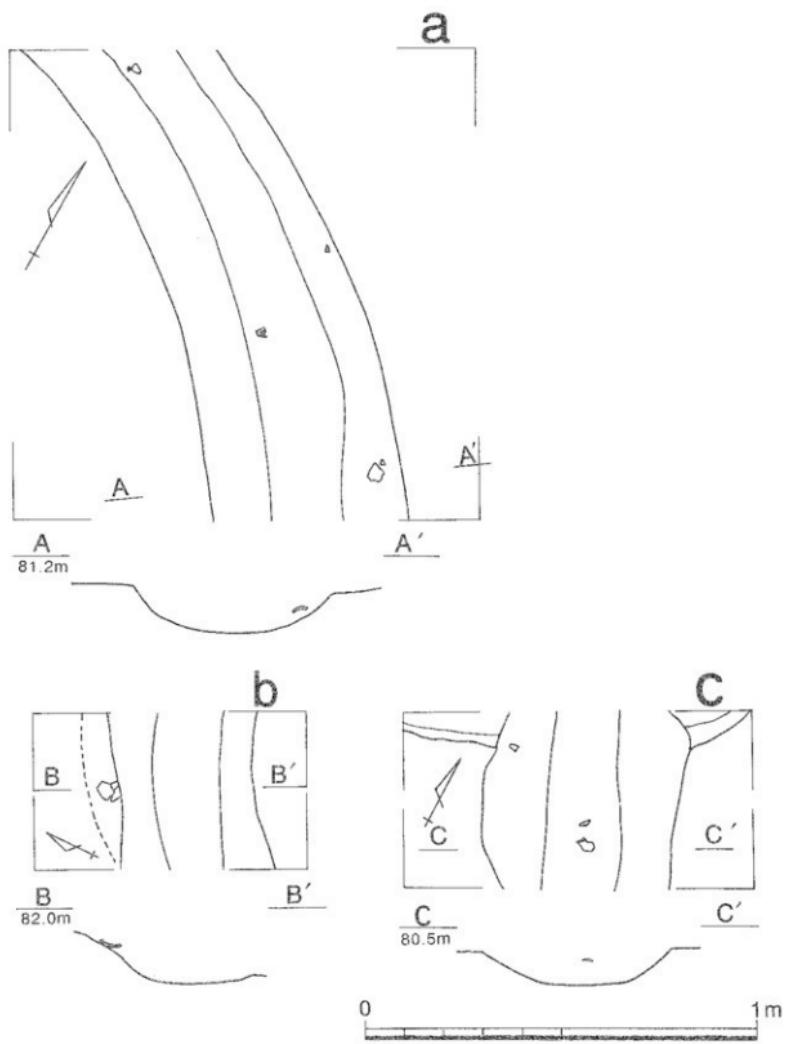
墓道は調査区外へ伸延していると推定されるが、検出された部分は石室と主軸を共有し、その溝状の



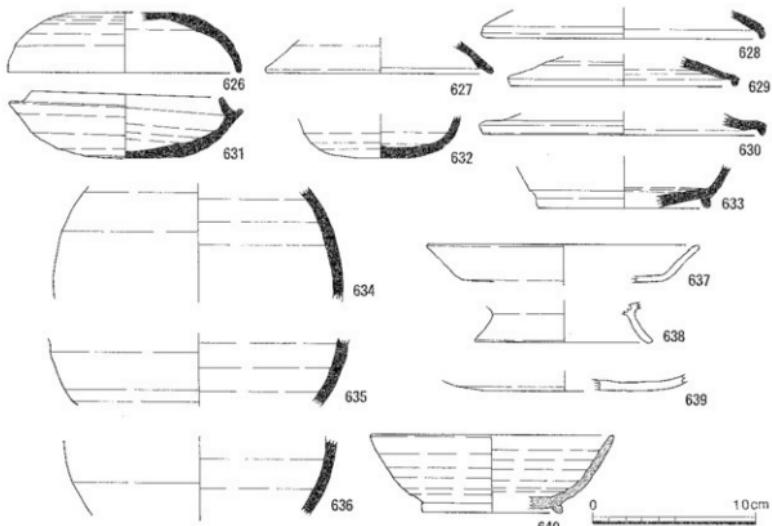
第120図 A23号墳石室実測図



第121図 A23号填基底石・墓坑実測図



第122図 A23号填周溝・墓道遺物出土状況図



第123図 A23号墳出土遺物実測図

掘り込みは羨道中央部まで食い込んでいる。

③遺物の出土状況（第122図）

周溝の北部および東部で須恵器（631・632・636）が出土した。周溝の外側近くにおいても当古墳に伴うと考えられる須恵器（629・630）が出土している。墓道内でも須恵器（627・628）と土師器（639）が出土している。石室内の遺物の出土状況は不明確ではあるが、土師器（637・638）が確認されている。A23号墳はその立地により、他の古墳からの遺物の流入は考え難いため、周溝に囲まれた墳丘跡地の表土層から出土した須恵器（626・633～635）と灰釉陶器（640）はやはり当古墳に伴うと判断される。

④出土遺物（第123図、図版135・136）

須恵器 坯蓋626は遠江Ⅲ期中葉に比定される。坯身631も同時期の所産である。返りの付く坯蓋627は遠江Ⅳ期末葉に比定され、返りがなく摘みを有すると考えられる坯蓋628は遠江Ⅴ期初頭、同629・630は遠江Ⅴ期前半に比定される。坯身632は口縁部に受部の立ち上がりがなければ、遠江Ⅳ期後半に比定できるかもしれない。坯身633は遠江Ⅴ期前半に比定される。

土師器 637は口縁部の立ち上がりが緩やかな皿または台付皿であり、638は台付皿の脚台部である。ともに遠江Ⅳ期末葉に位置付けられる。皿639は遠江Ⅳ期末葉～V期前半の範囲に収まると考えられる。

灰釉陶器 瓢640は口縁部が外反せず、高台は低く外に開く形態となっていることから、松井一明氏による宮口古窯跡群の灰釉陶器編年（松井1989）のIV期-2に比定され、11世紀後半の所産と考えられる。つまり、大屋敷1号窯の調査で明らかとなった、大屋敷1号窯焼造の灰釉陶器の年代と一致し、640は同窯の製品である可能性も否定できない。

⑤小結

A23号墳の築造時期は出土須恵器から遠江Ⅲ期中葉と考えられ、同V期前半までの長期間にわたって断続的ながらも追葬が行なわれたと推定される。大屋敷A古墳群中の他のより新しい単室系擬似両袖式

横穴式石室と異なり、玄室長に対して羨道長が卓越しており、全体に細長いプランと併せて、当古墳群における単室系擬似両袖式横穴式石室の初現形態を示す埋葬施設と評価することができる。同時期に築造された右片袖式横穴式石室には及ばないものの、当古墳群における階層性は高かったと想定される。

㉛ A24号墳

① 墳丘・周溝

A24号墳はA23号墳の周溝北側より約5m北に位置し、1区中央の南北谷の西側斜面に立地する。埋葬施設のみ検出された古墳で、墳丘・周溝はともに確認されていない。

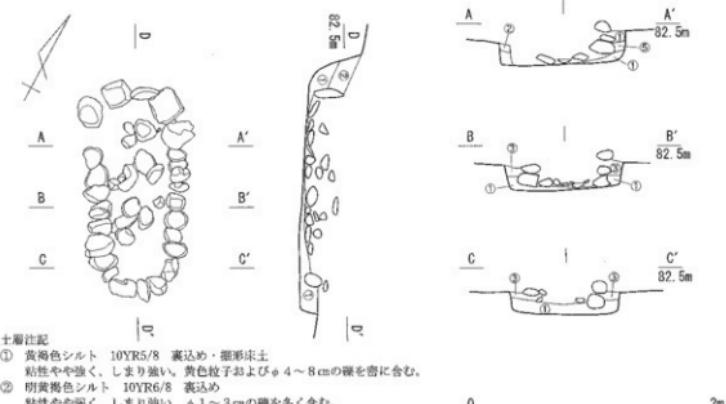
② 埋葬施設（第124～126図、図版56・57）

北北西～南南東方向の主軸を有する竪穴式小石室が構築されている。残存状態は比較的良好である。

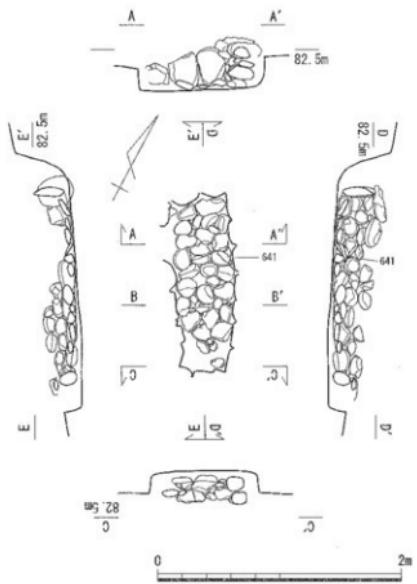
石室 奥壁の0.2m前方で最大幅を有し、前壁で最も幅が狭くなる長台形プランを呈す。奥壁には中型円礫2石を立て据え、右側1石の上端は欠損している。奥壁2石の上方の石材は恐らく失われており、残存高は0.32mを測る。側壁は基本的に小型の円礫を小口積みしているが、左側壁の4段目奥2石のみ中型の板状角礫を平手積みしている。現存しない4段目の他の石も同様の石材と積み方であったとすれば、側壁の積載は4段で終了していた可能性がある。左側壁は最大4段、高さ0.42m、右側壁は最大3段、高さ0.26m残存する。両側壁ともに目地通りが明瞭に看取されるが、内側へ持ち送る様相は認められない。前壁は2段、最高0.21m残存し、側壁同様に小型円礫を小口積みしているが、内側へ持ち送られていない。

敷石 敷石としてはやや大振りの扁平円礫を用い、石室床全面に敷設している。

基底石 側壁の基底石は2段目以上と異なり、中型に近い円礫の長手面を内側に向け、両側壁の最後端が奥壁を左右から挟み込むように設置されている。前壁の基底石は奥壁と同じく2石で構成され、小型円礫の長手面を内側に向け、左側は礫の小口を左側壁前端基底石の内側角に当接させ、右側は長手面の



第124図 A24号墳石室検出状況図



第125図 A24号墳石室実測図

室と見做すことができる。時期的にはA23号墳より後出し、単次埋葬が成人の伸展葬であったとすれば、被葬者は当時としても男女問わず低身長の部類であったと推定されるが、古墳造営主体としても階層性が低かったと考えざるを得ない。



第126図 A24号墳基底石・墓坑実測図

右半部は右側壁前端基底石の小口面に当接させている。

墓坑 隅丸長台形プランの墓坑プランを呈す。後壁は地山を0.45m以上掘り込んでいる。奥壁の右側1石に対して設置用の小土坑が掘削されている。なお、墓道（前溝）は設けられなかったようである。

③遺物の出土状況（第125図）

石室床面の左側壁沿いで須恵器片1点(641)が出土した。

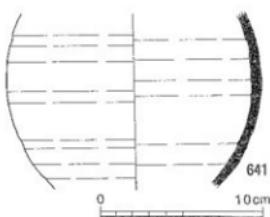
④出土遺物（第127図）

須恵器 641は脚付短頸壺の体部片であれば、遼江IV期前半に比定されようか。

⑤小結

A24号墳は、僅かな出土遺物より遼江IV期前半に築造された可能性を指摘し得る。

南接するA23号墳との位置関係から、A24号墳には当初より墳丘・周溝は施設されなかつたか、或いは施設されたとしても極めて小規模であったと考えられる。奥壁と前壁の構造は横穴式石室の系統を踏むものではなく、頭位側の幅が広くなる堅穴式小石



第127図 A24号墳出土遺物実測図

図 A25号墳

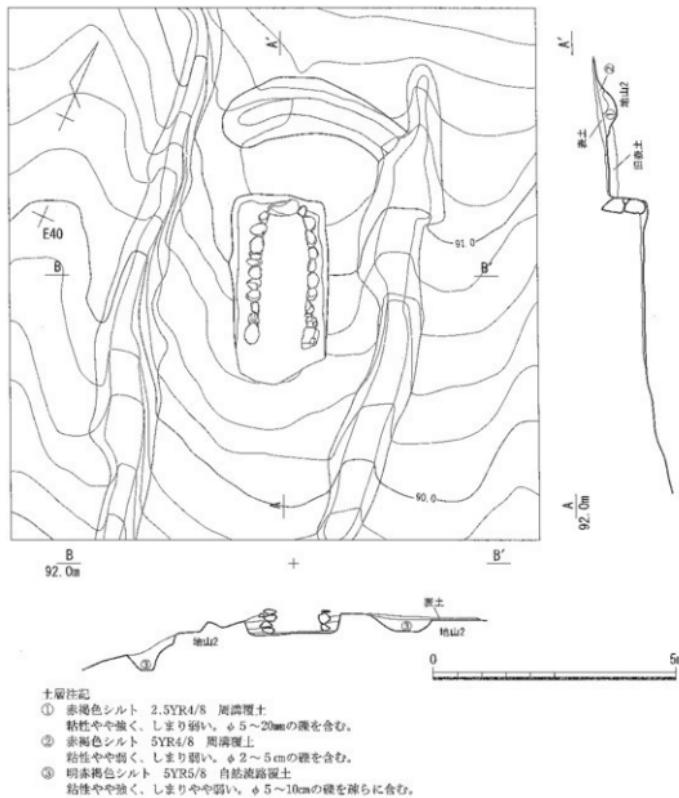
① 墳丘・周溝（第128図、図版57）

A20号墳の南約10mに位置し、A 9号墳とは南北に走る狭隘な小谷を挟んで西側に対峙する。墳丘盛土は流失している。古墳の東西両側を南北に走る自然流路により攪乱され、周溝は北側約1/6周分を残すのみである。本来の墳丘は南北6.5m以上と推定される。

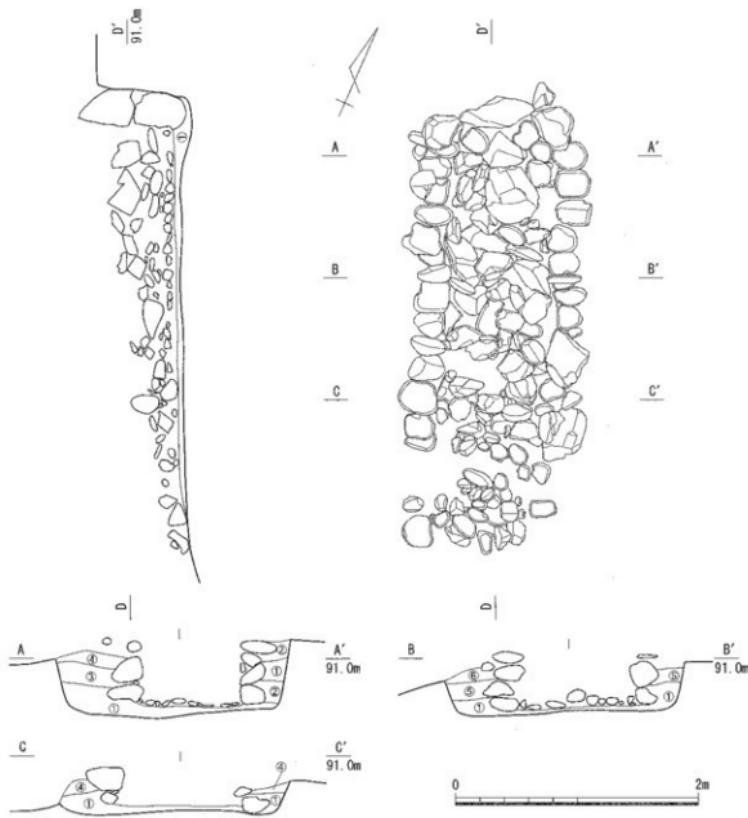
② 埋葬施設（第129・130・132図、図版58・59）

古墳の恐らく中央部に無袖式横穴式石室が構築されており、南南東に向けて開口している。墳丘が大きく破壊されていることを考慮すれば、埋葬施設の残存状態は良好と言える。

玄室 玄門から玄室後部まで幅が一定し、奥壁で最も幅が狭くなる奥窄まり形の玄室プランを呈す。奥壁は板状に近い大型角礫2石を長手積みし、鏡石としている。鏡石の上にも礫が積載されていたかどうかは不明であるが、鏡石は直立し、現状では奥壁に持ち送りは認められない。現状の高さは0.84mを測る。側壁は中型の円礫と角礫の長手面を内側に向けて積載されている箇所と、より小型の角礫・円礫を



第128図 A25号墳墳丘



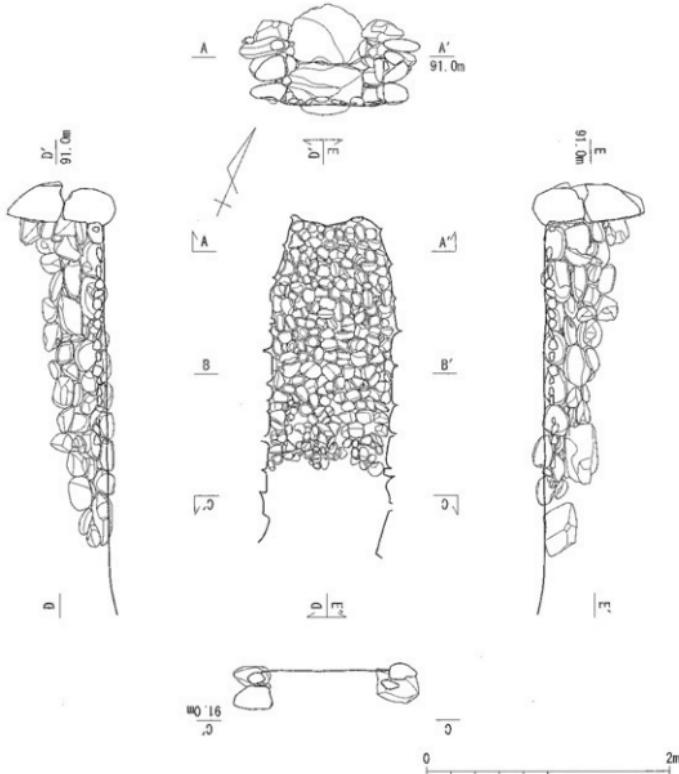
土層記号

- ① 赤褐色シルト 5YR4/8 振形灰土・表込め
しまりやあり。φ 2~3cmの礫を少し含む。
- ② にぶい赤褐色シルト 5YR4/4 表込め
しまりやあり。φ 5cm前後の礫を少し含む。
- ③ 明赤褐色シルト 5YR5/6 表込め
しまりややあり。炭化物を少し含む。
- ④ 明赤褐色シルト 5YR5/6 表込め
しまりなし。φ 1~3cmの礫を多く含む。
- ⑤ 赤褐色シルト 5YR4/6 表込め
しまりややあり。有機質およびφ 2~3cmの礫を少し含む。
- ⑥ 赤褐色シルト 5YR4/8 表込め
しまりややあり。有機質およびφ 15~20cmの礫を少し含む。

第129図 A25号墳石室検出状況図

小口積みする箇所とで構成されている。左側壁2段目前半部には、基底石より大きい角礫が積載されている。左側壁では目地通りが明瞭に認められるが、右側壁の目地通りは各段貫徹しない。左側壁は最大4段、高さ0.7m残存し、右側壁は最大5段、高さ0.69m残存する。側壁の大部分は持ち送り積みされているが、奥壁付近は側壁がほぼ直立している。これは、側壁の大部分が天井石の大きさ等の制約を受けて内側へ壁を持ち送らざるを得なかったのに対し、奥壁付近は基底からすでに幅が狭いため、天井に向かって両側壁間を狭める必要がなかったことを示している。

敷石 残存状態の良好な敷石が玄室の大部分に敷設されている。玄室前部約1/4には全く敷石が認められ

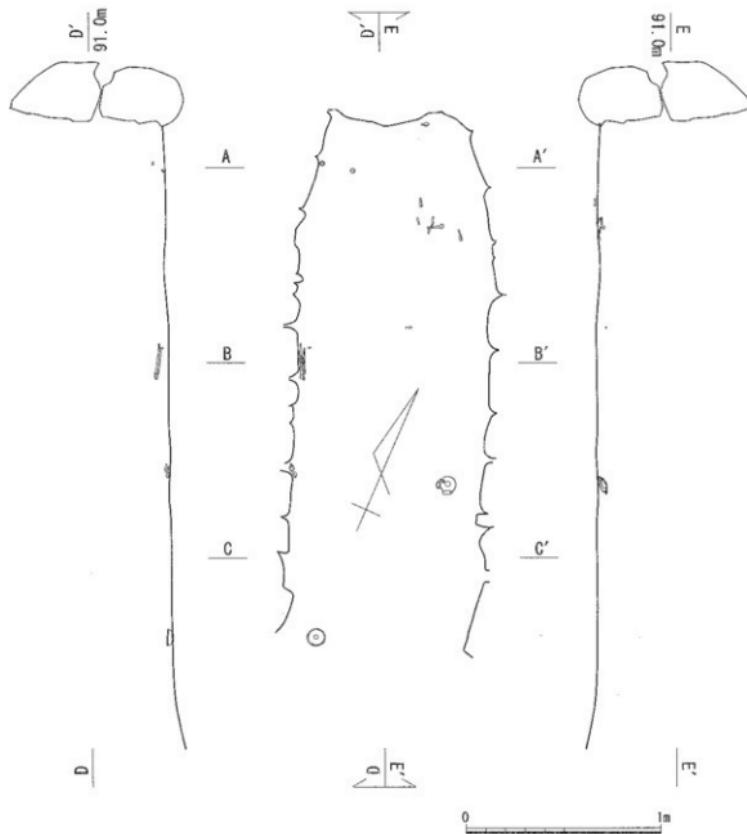


第130図 A25号墳石室実測図

ないが、この部分の床面には築造当初より敷石は敷設されていなかった可能性が高い。φ10cm前後の円礫主体に使用されている。

基底石 左側壁の基底石は中型円礫の長手面を内側に向けて整然と設置され、最前端の1石に大型に近い角礫を用いている。この最前端の直後2石および奥窄まり部分にはやや小振りの石を置いて石材の長さと側壁ラインの調整を行なっている。一方、右側壁の基底石も中型円礫主体に使用されているが、小口置きされているものが多い。奥壁基底石との接続も、右側壁最後端の基底石は仕上げの調整として設置されたとは考え難い置き方をされている。まず左側壁の基底石が配置され、それから右側壁の基底石を左側壁の長さと彎曲に合わせるように石材一つ一つを調整しながら配置した様相が窺われる。右側壁の最前端の基底石は対する左側壁最前端の1石に比肩する大きさの円礫であり、これら両側壁最前端の一対の基底石を以て玄門を強調していると考えられる。

墓坑 長方形の墓坑プランを呈す。後壁における旧地表よりの掘り込みは0.72mを測る。奥壁基底石に対して設置用の小土坑が掘削されている。なお、墓道は検出されなかった。



第131図 A25号墳石室遺物出土状況図

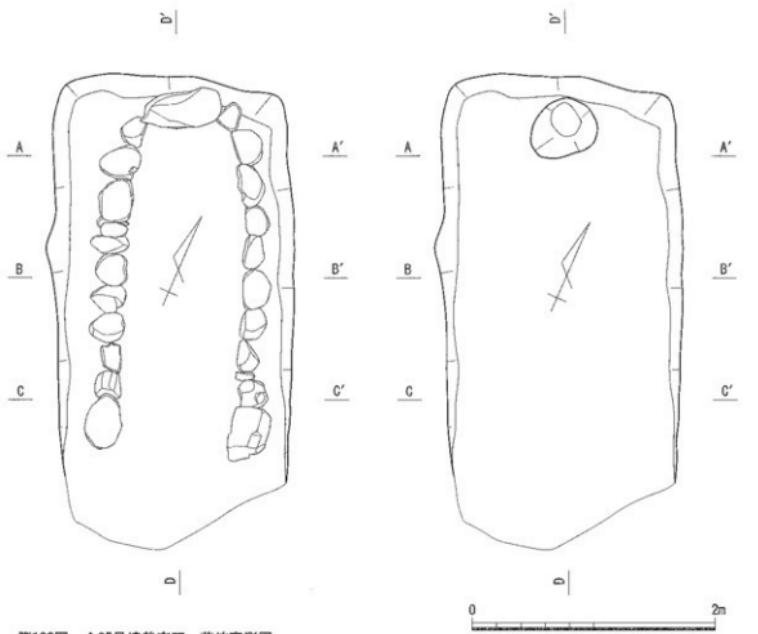
③遺物の出土状況（第131図、図版59）

玄室床面直上より比較的多くの遺物が出土した。須恵器壺蓋643は玄室前半部左側壁寄りで、同644は玄門右側壁寄りで出土した。玄室中央右側壁沿いでは刀子651・鉄鎌655～659が東に近い状態で確認された。耳環652・653は玄室最後部右側壁沿いで出土した。鉄鎌660～662および鉄釘665～667は玄室後部左側壁寄りでまとめて出土した。

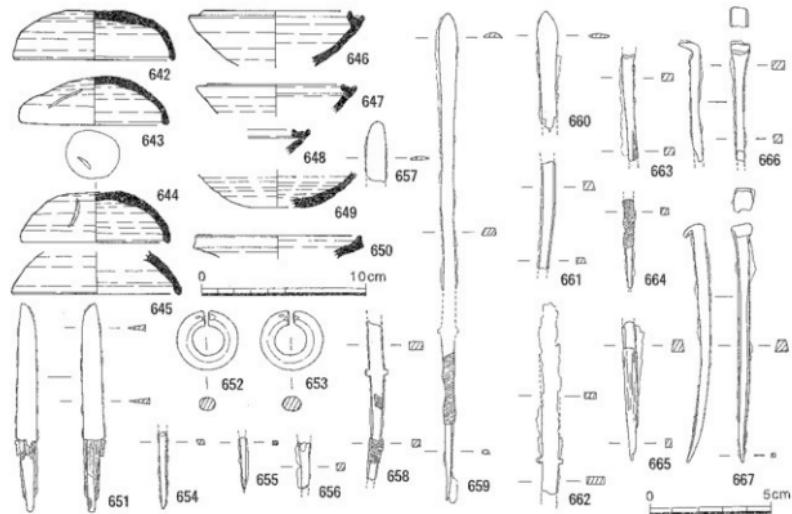
周溝内において須恵器が少量（642・647～650）出土した。周溝を破壊した東側の自然流路より須恵器片（645）が出土し、埴丘跡地と考えられる地点からも須恵器片が若干（646）出土した。

④出土遺物（第133図、図版9・136）

須恵器 壺蓋642・645は遠江IV期前半に比定され、同643・644は遠江IV期後半に比定される。また、644は外面頂部と体部外面に計2箇所箋記号を有す。壺身646は遠江IV期前半に、同647・648は遠江IV期後半



第132圖 A25號填基底石・基坑實測圖



第133圖 A25號填出土遺物實測圖

に比定される。瓶類口縁部650は遠江IV期前半の所産と考えられる。

金属製品 耳環652・653は銅芯金銅張で、金銅板の遺存状態は非常に良好である。出土状況からも、被葬者1体の装身具と考えられる。

651は両闇の刀子で、闇部に纏が遺存し、茎に柄の木質が付着残存する。身は平造りされている。

654～664は鉄鏃である。659は鎌身闇が明瞭に残存しないが、長頸尖根柳葉式と判断され、657・660も同様の形式と推定される。662をはじめ、他の頸部・茎片も長頸鏃と考えられる。また、658・659・664は茎に樹皮が巻き付けられており、663の茎には矢柄の木質が付着残存する。

665～667は鉄釘で、釘身の断面は方形を呈し、666・667の頭部は釘身に対して直角L字状に造られている。また、667は完形品で、665には木質が付着残存する。

⑤小結

出土遺物より、A25号墳は遠江IV期前半に築造され、同IV期後半に追葬が行なわれたと判断される。大屋敷A古墳群の無袖式横穴式石室としては平均規模以上であり、開口部に大振りの礫を据えて玄門を強調するなど、A25号墳の石室構造は最低レベルの階層性の持ち主が成し得るものではない。また、鉄釘が玄室内でまとめて出土しており、被葬者のうち少なくとも1人は木棺に安置されて葬送されたと解釈される。

四 A26号墳

①墳丘・周溝（第134図、図版60）

1区中央を南北に縱断する谷の東側斜面に立地する古墳のうち最も谷の中心近くに立地する。墳丘盛土は流失し、風倒木により古墳の西～南西側は大きく擾乱され、周溝はこの部分で検出されなかった。残存する周溝により囲まれる範囲は東西4.6m以上、南北5.1mを測り、ほぼ円形プランを呈する円墳と考えられる。

②埋葬施設（第135～137図、図版60・61）

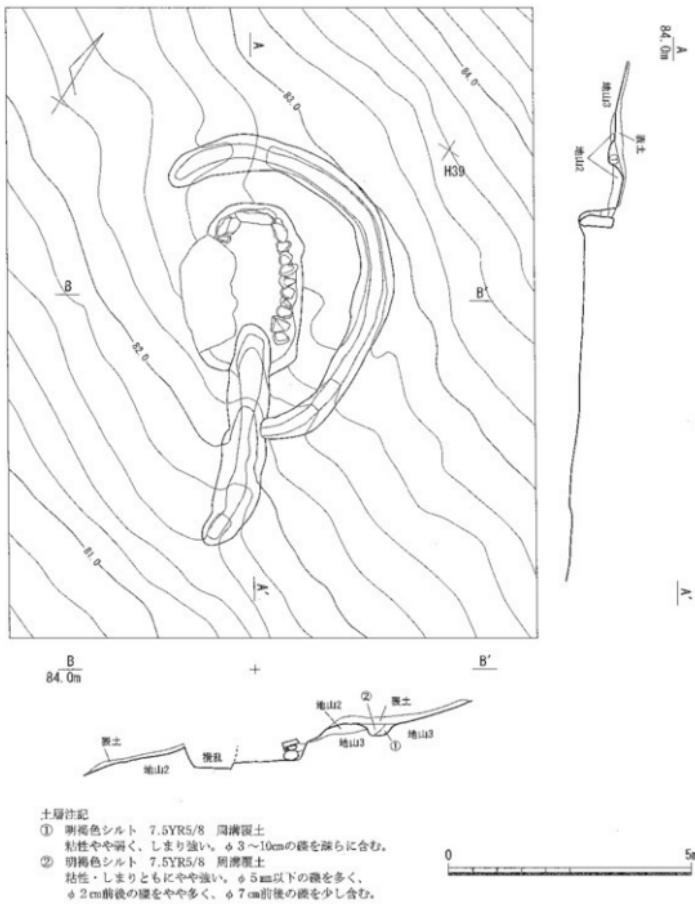
古墳の中央に単室系擬似両袖式横穴式石室が構築されている。南南東に向けて開口し、前述の風倒木により西～南西側が大きく破壊されている。

天井石 石室内に崩落した石材のうち、板状の大型角礫2石を天井石と捉えた。うち前方の1石は90cmを測る長軸を石室主軸に平行させた状態で被出されたが、風倒木により圧落されたと想定される。奥側の1石は天井石というよりもむしろ奥壁鏡石の2段目であった可能性がある。

玄室 中央部より若干前方で最大幅を有すると推定される胴張り形の玄室プランを呈す。奥壁は板状の大型角礫を立て据えて鏡石をしているが、上端が平坦面を成し、上記の「天井石」がここに積載されていた可能性がある。現状の奥壁は残存高0.6mを測る。

左側壁の残存状態は概ね良好である。最後端の基底石に最大の角礫を用い、他の部分には中・小型の円礫と角礫を併用している。比較的大振りで扁平な角礫は平手積みされ、小振りの礫は小口積みされている。最大5段、高さ0.77m残存する。右側壁は8割以上失われているが、中・小型の角礫と円礫を併用し、基本的に小口積みされたようである。最大4段、高さ0.6m残存する。両側壁とも3段目以上が内側へ顯著に持ち送られている。

羨道 左側壁は立柱石およびその前方1石のみ検出された。左立柱石には角礫が用いられているが現状で高さ0.31mと低く、恐らく上半部が折損していると推定される。側壁よりの突出は玄室側で8cm、羨道側で5cmを測る。右立柱石は長軸40cm以上の角礫を使用しているが、風倒木により内側へ転倒している。側壁の積載状況は玄室とほぼ同様である。



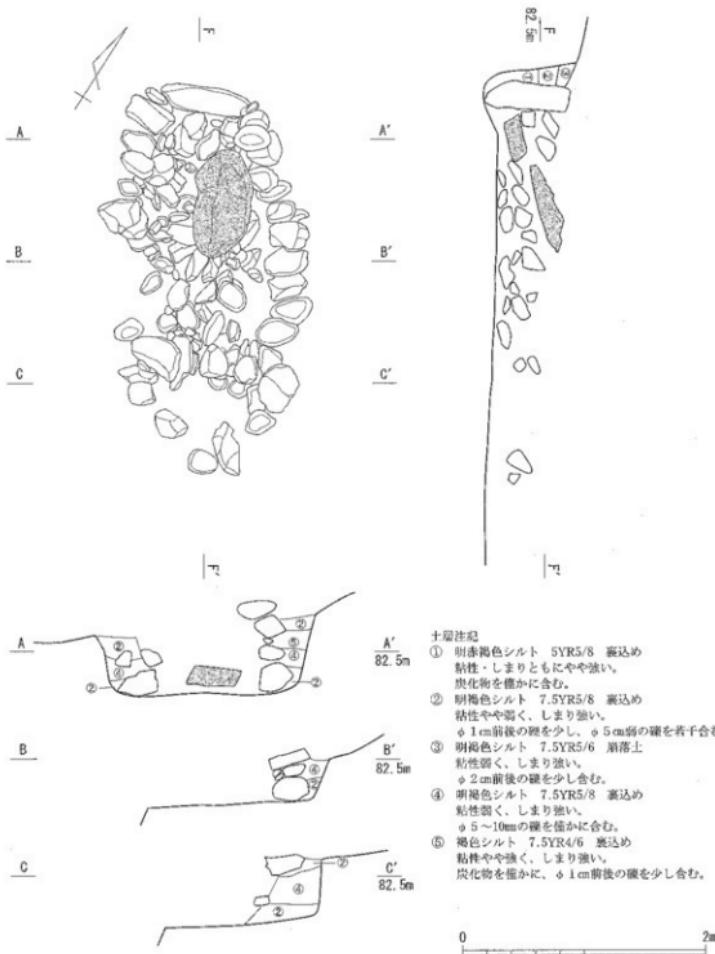
第134図 A26号墳埴丘図

基底石 両側壁の最後端の基底石には大型角礫が用いられ、奥壁を左右から挟み込むように長手面を内側に向けて設置されている。その他の基底石には中型の角礫と円礫が併用され、小口置きによって胴張り形の弧状側壁ラインを形成している。

墓坑・墓道 墓坑は隅丸長方形プランを呈し、予め胴張り形プランの玄室を意図した形となっている。後壁では地山を0.77m以上掘り込んでいる。奥壁基底石および左立柱石に対して設置用の小土坑が掘削されている。墓道は大部分が石室と主軸を共有するが、先端約1mは真南に向かって屈曲する。また、墓道の溝状掘り込みは墓道に達している。

③遺物の出土状況（第136・137図）

玄門から羨道にかけて土師器皿4点（685～688）および須恵器片少量が出土したが、攪乱されている状況から、追葬終了当時の原位置を保持するものはないと考えられる。墓道より須恵器（668・674・676・678・680・684）がやや多く出土した。周溝からも少量の須恵器（681）・土師器（689・690）が出土した。墳丘跡地の東部では多数の須恵器片（669～673・675・677・679・682・683）が集中していた。



第135図 A26号墳石室検出状況図

④出土遺物（第138図、図版136・137）

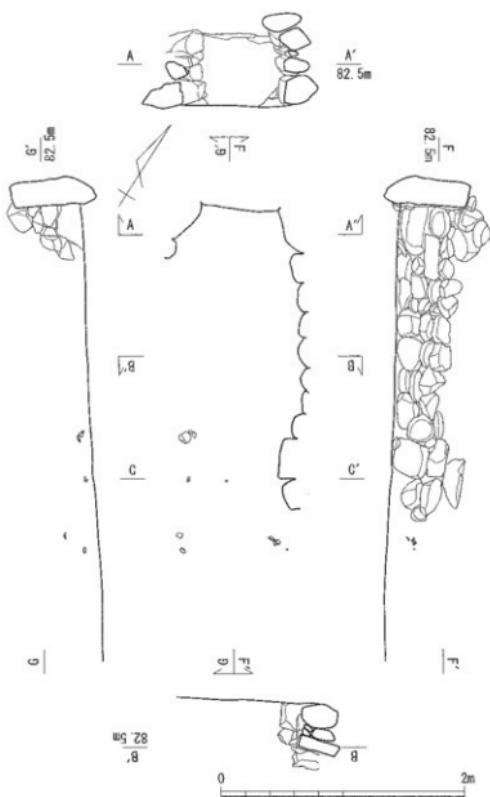
須恵器 668～671は壺蓋で、4点とも遠江V期前半に比定される。672～675は壺身で、672～674は遠江V期前半、675は同V期初頭～前半に比定される。676は無蓋・脚付の長頸壺の口縁部であれば、遠江IV期末葉に比定される。広口長頸壺678は遠江V期前半の所産である。瓶類679も鋭く屈曲する肩部を有し、遠江V期前半に比定される。680は有蓋・脚付の長頸壺であれば、器種としての下限は遠江V期初頭となる。大型の壺または壺の口縁部681は遠江V期前半に比定される。肩部683は681と同一個体の可能性がある。

土師器 685～688は皿であり、口縁部の立ち上がりと外反の度合いから遠江IV期末葉に併行すると判断される。また、686～688の内面は赤彩されている。壺口縁部690は遠江V期初頭に併行する。

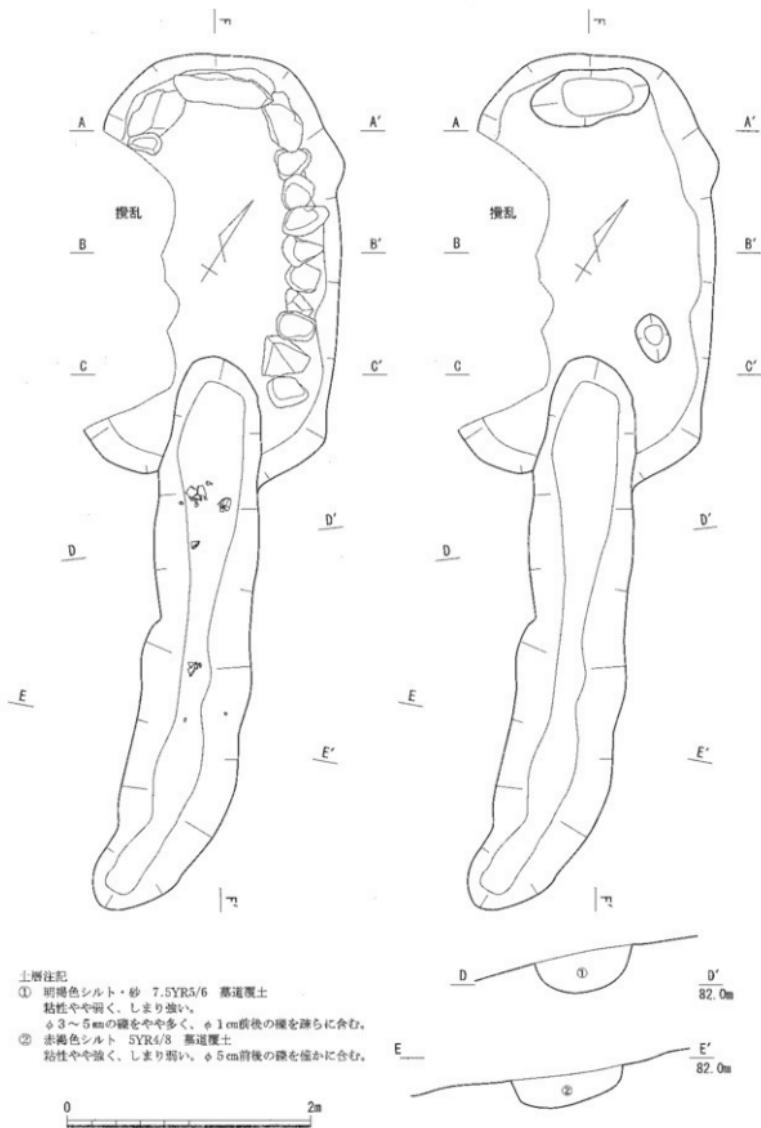
鉄製品 691は石室覆土中より出土した鉄釘である。頭部は釘身に対して直角L字状に造られており、釘身の下半部は欠失している。

⑤小結

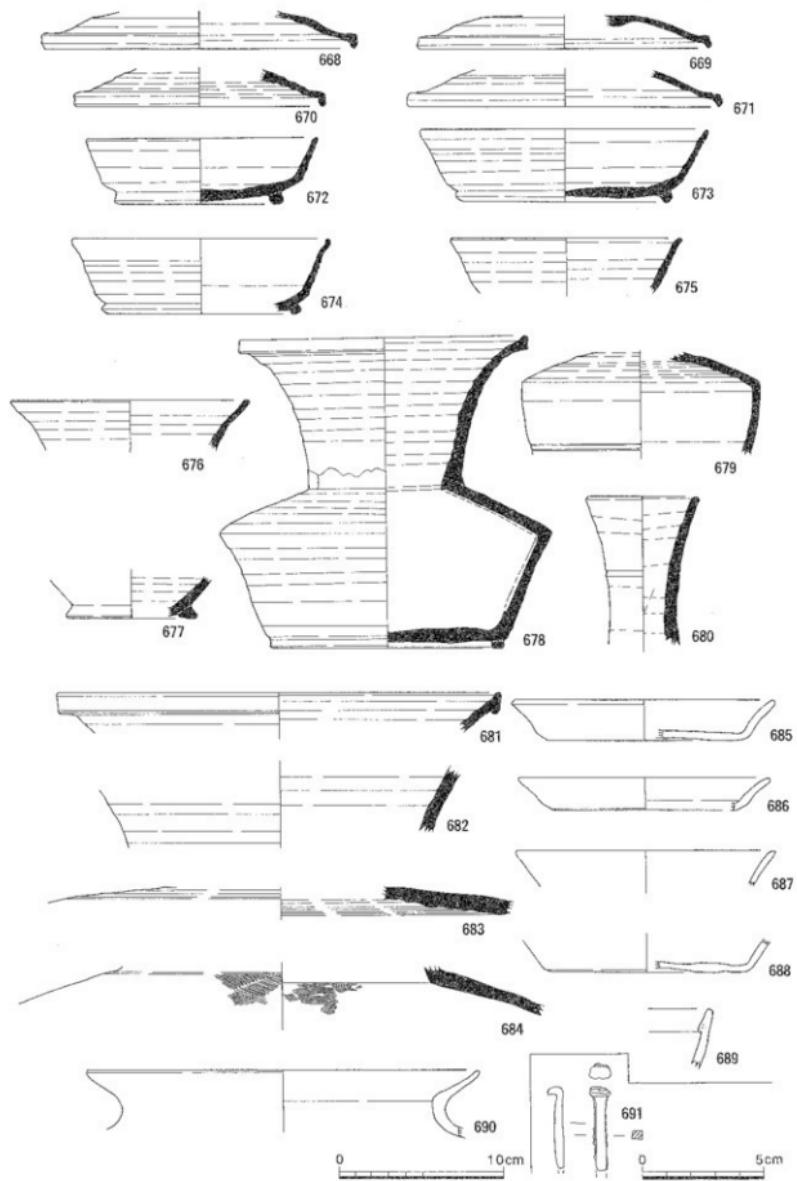
出土遺物より、A26号墳は遠江IV期末葉に築造され、同V期初頭～前半に追葬が行なわれたと考えられる。埋葬施設は、単室系擬似両袖式横穴式石室としては規模が小さく、玄室床面には築造当初より敷石さえ敷設されていなかったと想定されるため、A26号墳は近隣のA15・A16・A17号墳に較べて築造時期が数世代以上新しいうえに階層性は數段劣位であると評することができる。また、A26号墳より鉄釘が出土しており、木棺が被葬者遺体安置に用いられたことが窺われるが、少なくとも大屋敷A古墳群において、木棺の使用は階層性の高低をはかる指標にはなり得ないことを明確に示した事例であると言える。



第136図 A26号墳石室実測図・遺物出土状況図



第137図 A26号填基底石・墓坑実測図・墓道遺物出土状況図



第138图 A26号墓出土遗物实测图

3 古墳外の出土遺物（第139図、図版137）

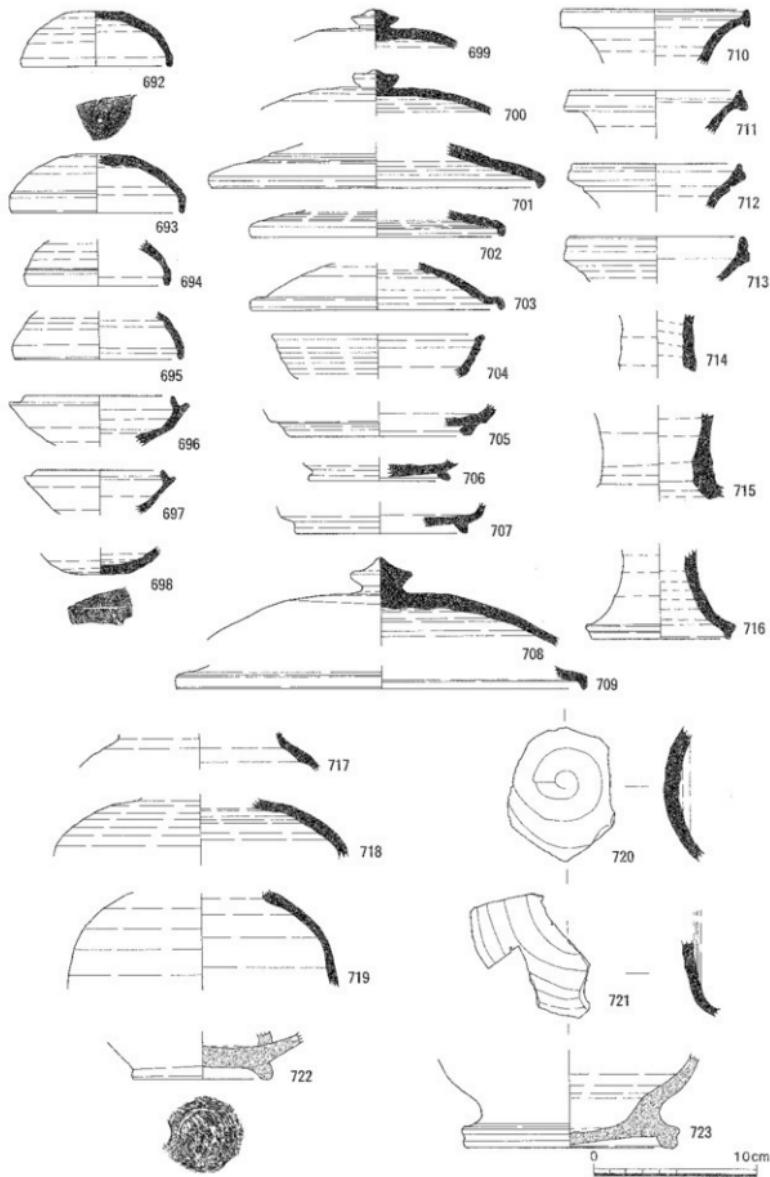
前項において言及した遺物は1区の古墳23基に何らかの形で伴い、各古墳の築造・埋葬の年代を判定する根拠となるもの、別の古墳から流入したもの、さらに後世の盗掘や開墾の際に混入したものが存在する。これら以外にも、重機または人力による表土除去の過程で出土した遺物（表面採集品として扱う）や、遺構面の精査過程において古墳とは離れた地点で出土した遺物がある。本項では種類別に各時期の1区古墳外出土遺物を報告するが、全て土器である。なお、第3表において出土位置の欄に表記されている「沢」とは、1区中央を縱断する谷を指している。

須恵器 692～695は合子状の坏蓋である。692・694は遠江IV期後半に比定され、693・695は同IV期前半に比定される。また、693は外面頂部に範記号を有す。696～698は合子状の坏身である。696・698は遠江IV期前半、697は同IV期後半に比定される。また、698の外面底部には範記号が施されている。699～703は外面頂部に摘みの付く坏蓋である。699・700は遠江IV期末葉～V期初頭、701～703は同V期初頭に比定される。704～707は摘み付きの坏蓋に対応する有台の坏身で、遠江IV期末葉～V期初頭に比定される。708・709は大型の坏蓋、もしくは盤の蓋である。ともに遠江V期初頭に比定される。

710・711は長頸壺の口縁部で、遠江V期前半に比定される。712・713も瓶類の口縁部であり、遠江III期末葉～IV期の所産と考えられる。714・715は長頸壺の頸部であるが、時期は特定できない。716は高坏の脚部で、遠江IV期末葉～V期前半の時期的範囲に認められる。717～719は瓶類の体部上半部で、遠江III期末葉～IV期の所産と考えられる。720は横瓶またはフラスコ形瓶の体部の小口面、721はフラスコ形瓶の体部の小口面である。ともに遠江III期末葉～IV期の時期的範囲に認められる。

山茶碗 722は碗の底部である。外底面に糸切り痕が残存し、高台の端面には粗穀の圧痕が認められる。内面には自然釉が付着し、重ね焼きで上に積載した製品の高台片が癒着残存する。高台の断面形等より前掲松井氏編年山茶碗I期-2に比定される。

瀬戸・美濃製品 723は瓶掛の体部下半～底部である。内面および外底面は露胎であるが、外面は全面に銅を混合した船釉である織部釉を施釉している。19世紀前半の所産と推定される。



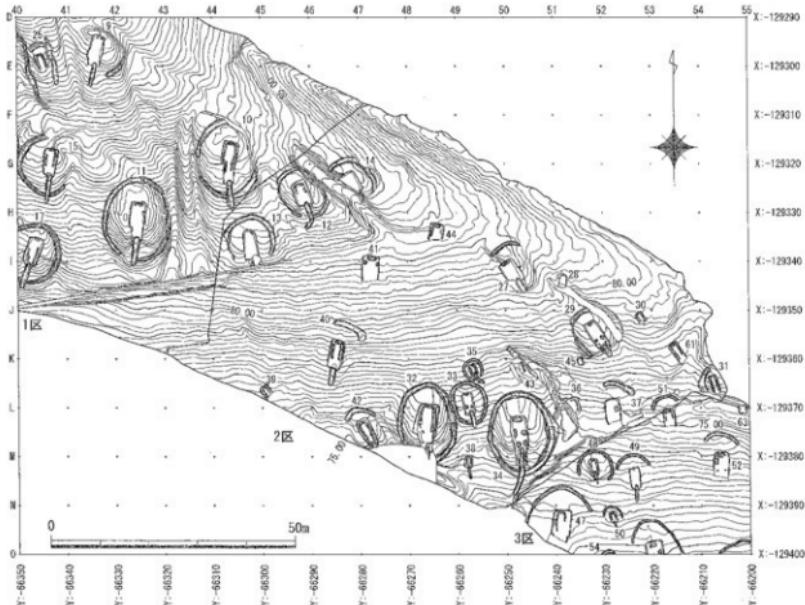
第139圖 1区遺構外出土・表面採集・古墳時代以降遺物実測図

第3節 2区の調査成果

1 2区の概要（第140図、図版4）

2区は平成16年度を中心に発掘調査が実施され、調査表面積は5,100m²、確認された古墳は23基を数える。このうち、埋葬施設のみが検出され、周溝が確認されなかった古墳が10基（A28・A30・A36・A38・A39・A41・A43・A44・A45・A61号墳）、一部が調査区外に連続し、全墳検出は果たせなかつた古墳が1基（A31号墳）存在する。本来は調査区全域を透徹する通し番号が古墳に付与されて然るべきところであるが、2区の各古墳の名称となった番号の錯綜した経緯は第1章第3節で述べたとおりである。また、古墳以外の性格不明遺構（SX）が2基、古墳とは恐らく無関係に存在する。

2区は基本的に南および南東へ下降する丘陵斜面となっているが、北部のF46グリッドからK54グリッドにかけて小尾根が西北西—東南東方向に走っている。この小尾根の北側斜面の調査区内には古墳は確認されていない。小尾根以南の丘陵斜面にも微小な起伏が認められる。2区西部のグリッド列45では南北に走る浅い谷が存在し、丘陵の麓に至っている。同様の浅谷は2区東部のグリッド行J以南、グリッド列49にも存在し、やはり丘陵の麓に至る。また、2区の古墳は後者の浅谷に向かって最も稠密に分布する。なお、2区と3区との境界は2区側が高い0.4~0.5mの段差となっているが、これは2区が旧天竜川の河岸段丘であったことを示している。



第140図 2区調査後地形測量図

2 古墳

[1] A12号墳

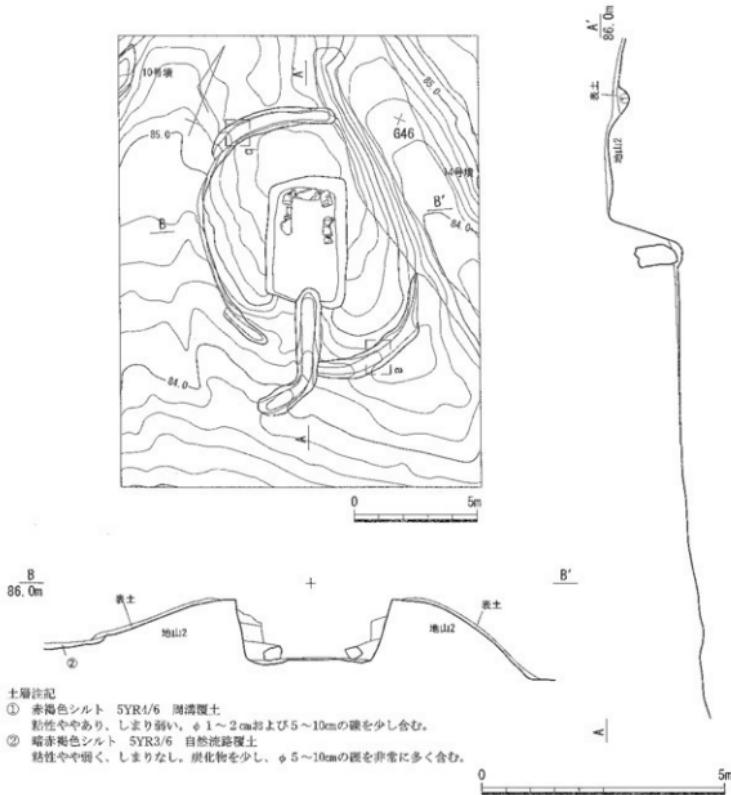
①墳丘・周溝（第141図）

A10号墳の東側、A13号墳とA14号墳との間に位置する。古墳の東側には深さ1mを超える自然流路が北西→南東方向に走り、周溝の北へ東側が流失している。西側も緩やかな小谷状地形を呈し、周溝の外側上下端が流失している。墳丘盛土は遺存していない。周溝により囲まれる範囲は東西8.4m以上、南北9.7mを測り、南北に長い楕円形プランの円墳を呈す。

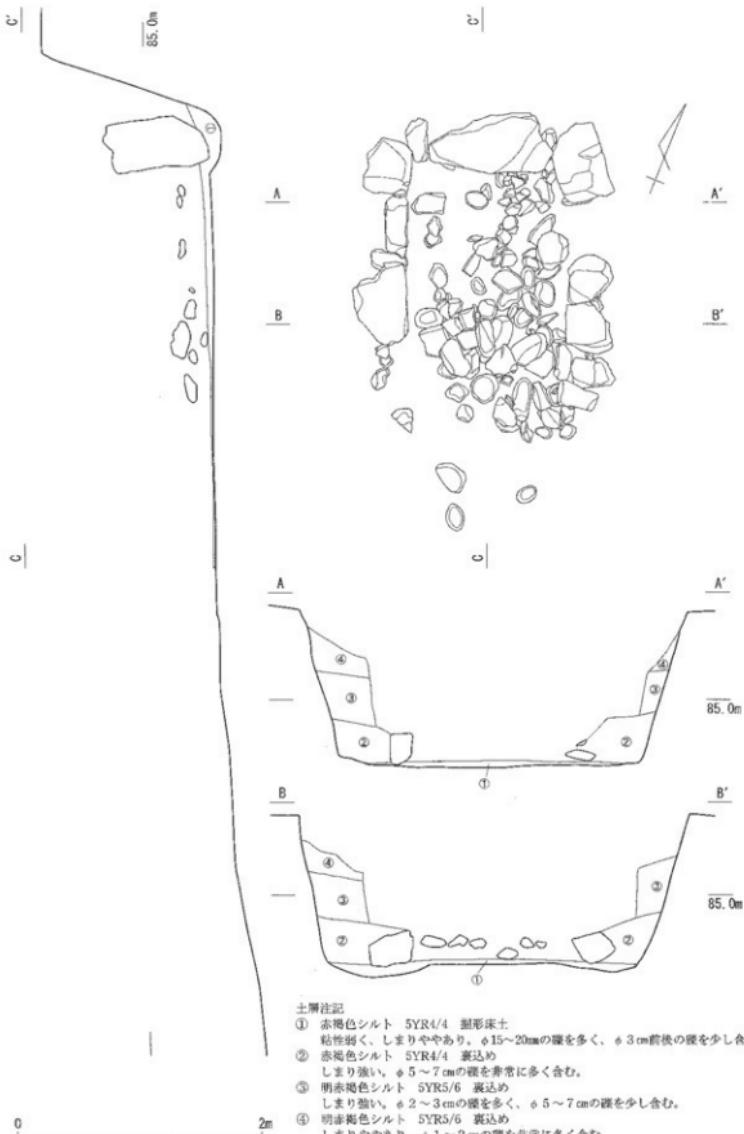
②埋葬施設（第142～144図、図版62・63）

古墳の中央に南南東に向けて開口する横穴式石室が構築されているが、残存状態は劣悪で、石室形態は不明である。

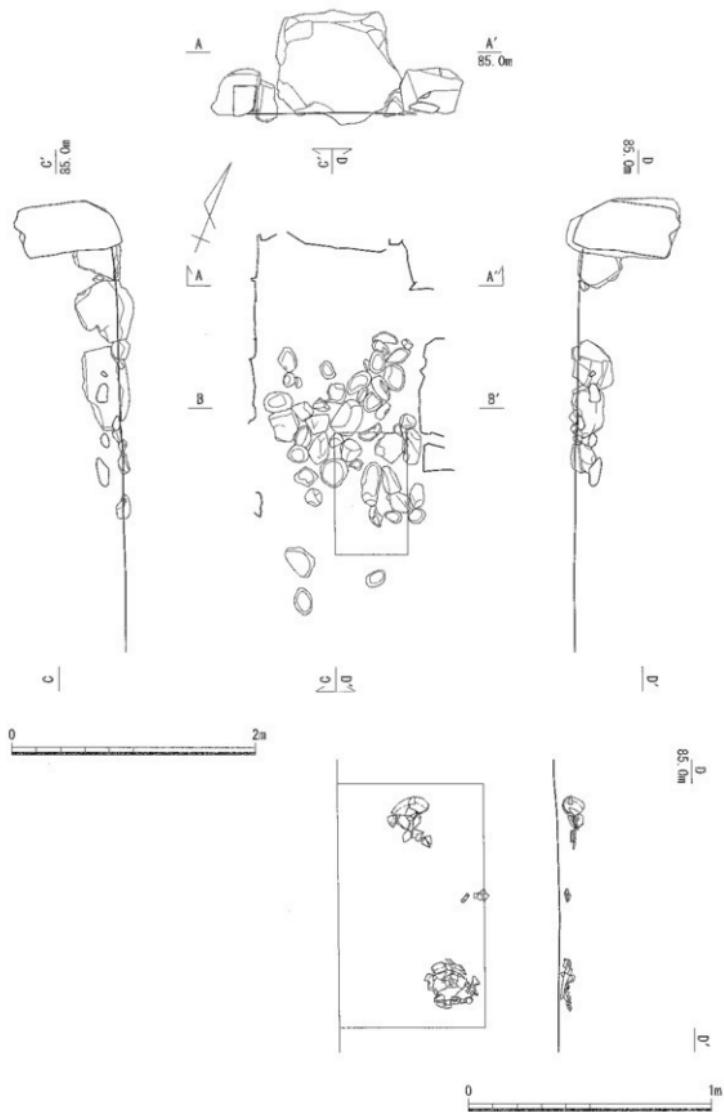
玄室 残存長は2.31mを測り、直線的な両側壁ラインから長方形の玄室プランである印象を受けるが、最後部の両側壁石材がハの字状に配置されていることから、玄室は奥窄まり形プランと判断される。



第141図 A12号墳墳丘図



第142図 A12号墳石室検出状況図

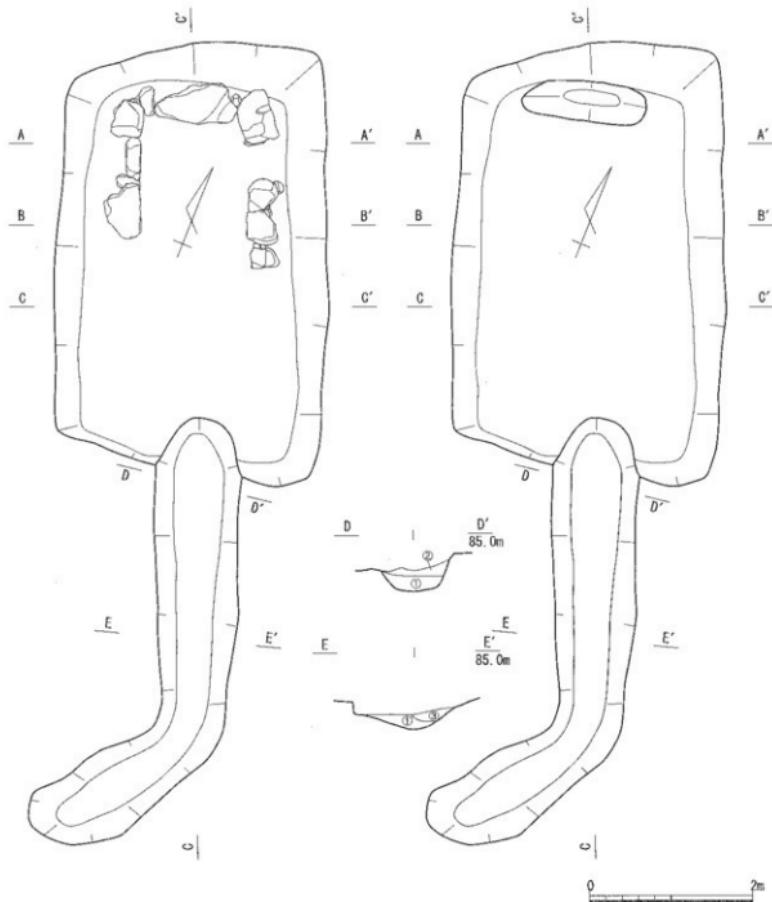


第143图 A12号填石室实测图·遗物出土状况图

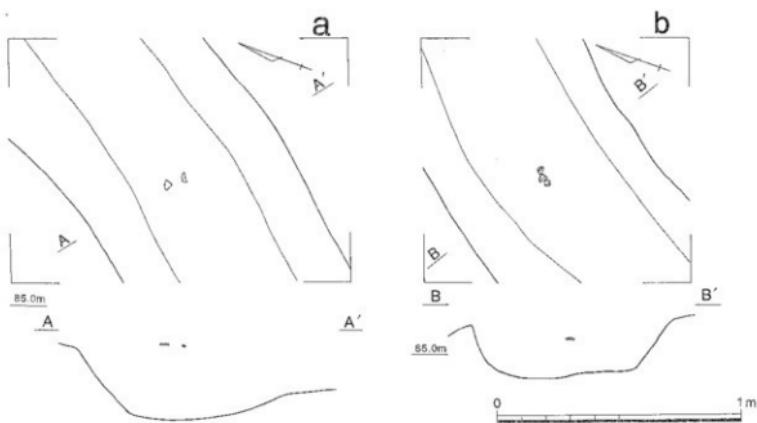
奥壁はチャートの大型板状角礫を立て据えて鏡石をしているが、墓坑の深さから推量すれば、本来は鏡石の上にも礫が積載されていた可能性は否定できない。奥壁の現存高は0.85mを測る。両側壁は基底石のみ残存し、残存高は左側壁で最大0.37m、右側壁で最大0.35mを測る。

敷石 奥壁より前方約0.7mまでは敷石が失われているが、本来は少なくとも玄室後半部の床面に敷設されていたと想定される。第143図では敷石が2面あるかのように断面図を表現しているが、より上層にあるように見える一群の敷石は擾乱された掘形床土の上部に浮いており、原位置をとどめるものではない疑いがある。主に円礫を用いているが、 $\phi 10\sim 30\text{cm}$ と、大きさにばらつきがある。

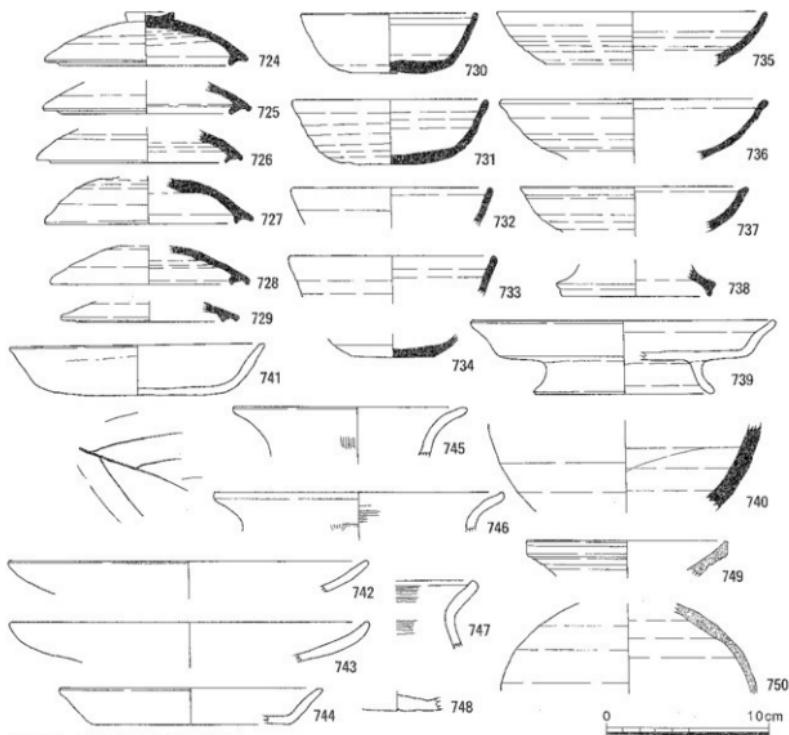
基底石 両側壁の基底石は要所に中～大型角礫の長手面を内側に向けて設置され、奥壁の鏡石と右側壁最



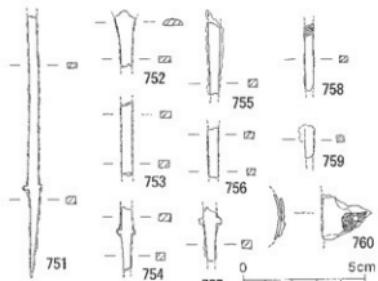
第144図 A12号墳基底石・墓坑実測図



第145図 A12号墳周溝遺物出土状況図



第146図 A12号墳出土土器実測図



第147図 A12号墳出土金属製品実測図

し、須恵器10点(724~728・730・731・735・738・740)、土師器3点(742・745・748)、灰釉陶器2点(749・750)が確認されている。周溝の北西部および南東部の一部で須恵器片(729・732)が出土し、墳丘跡地でも須恵器片(733・734・736・737)および土師器片(746・747)が出土した。

④出土遺物（第146・147図、図版11・138）

須恵器 壺蓋724~726は遠江IV期後半に、同727~729は遠江IV期末葉に比定される。壺身730は口縁部内面に沈線を有し、遠江IV期後半に比定される。壺身731~733は遠江IV期末葉に比定される。壺身底部734は遠江IV期の範疇で捉え得る。735~737は無蓋高壺の壺部である。735は遠江V期前半、736は同IV期末葉、737は同V期初頭に比定される。高壺脚部738は遠江IV期末葉に比定される。

土師器 台付皿739は遠江IV期末葉に比定される。741は壺または皿であり、内外面は赤彩され、外底面に木葉压痕が認められる。時期は遠江IV期末葉に比定される。皿742~744も同時期の所産である。また、744は内外面が赤彩されている。745~747は甕の口縁部、748は甕の底部であり、745は遠江IV期後半、746は同V期初頭、747は同IV期末葉に比定される。

灰釉陶器 749・750は瓶類で、外面を部分的にハケ塗り施釉している。前掲松井氏編年の宮口古窯跡群IV期の範疇で捉えられる。

鉄製品 751~759は鉄鎌である。751は長頸鎌であるが、他の頸部・茎片も恐らく長頸鎌であると推定される。752は鎌身から頸部にかけての破片で、鎌身闊が認められず、鎌身は先へ広がる様相を呈し、平根式の可能性もある。760は布状の鐵維が銹着し、鎌とも考えられるが、定かではない。

⑤小結

A12号墳は出土遺物より遠江IV期後半に築造され、同IV期末葉からV期前半にかけて世代的には間断なく追葬が行なわれたと考えられる。出土遺物に土師器が目立ち、特に遠江IV期末葉に集中しており、該期の葬送儀礼において土師器、特に赤彩品が重要な役割を担ったことが窺われる。石室は大いに破壊されているが、使用された石材は大型主体で、整然と配置・積載されていたと想定されることから、階層性は中程度以上ではなかったかと推測される。

(2) A13号墳

①墳丘・周溝（第148図、図版63）

A10号墳に南隣し、緩やかな小谷状地形を挟んで北東のA12号墳に対峙する。墳丘盛土は古墳南側を除いて最高0.22m遺存するが、周溝の内側上端までは残っていない。周溝は西側が自然流路に、南側が後世の地形改変により削平されているが、約3/4周分が検出された。周溝により囲まれる範囲は東西8.7m、

後端の基底石との間のように、壁の線形や長さを調整する箇所にはやや小振りの角礫を小口置きしている。
墓坑・墓道 墓坑は左壁が右壁よりも長く、短台形プランを呈す。後壁では1.4m以上地山を掘り込んでいる。奥壁の基底石2石に対し、設置用の小土坑が掘削されている。墓道は墓坑との接続部から前方約3mまでは石室と主軸を共有しているが、その先約2mは南西に向かって屈曲している。

③遺物の出土状況（第143・145図、図版62）

石室床面直上にて土師器3点(739・741・744)が出土した。また、石室内の覆土中より鉄製品10点(751~760)が検出されている。墓道では多くの遺物が出土

南北8.8mを測り、ほぼ正円プランの円墳を呈す。

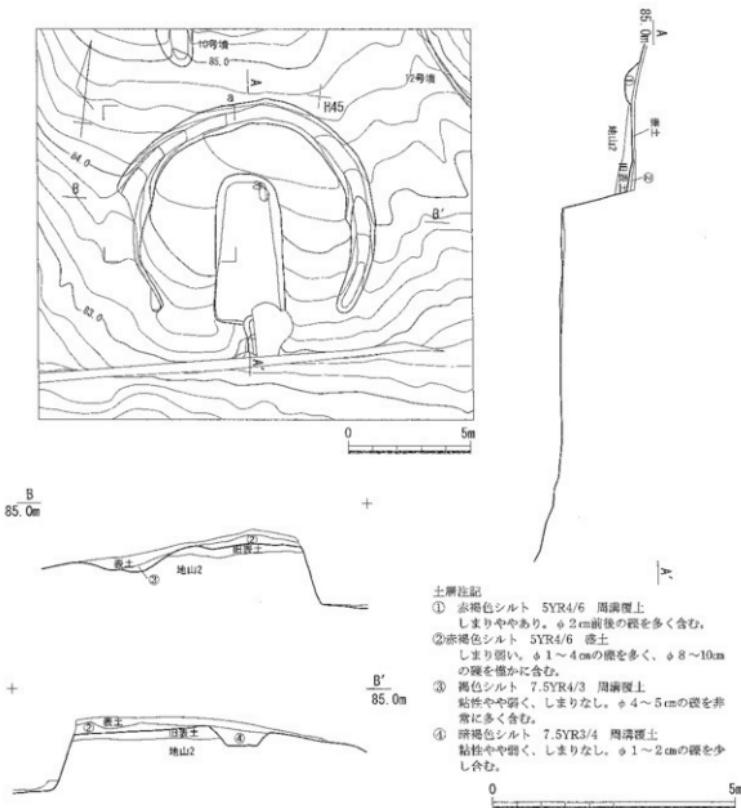
②埋葬施設（第149図、図版64・65）

古墳の中央に横穴式石室が構築されていたが、残存状態は劣悪を極め、石室形態は不明である。開口方向は真南に近いと目される。

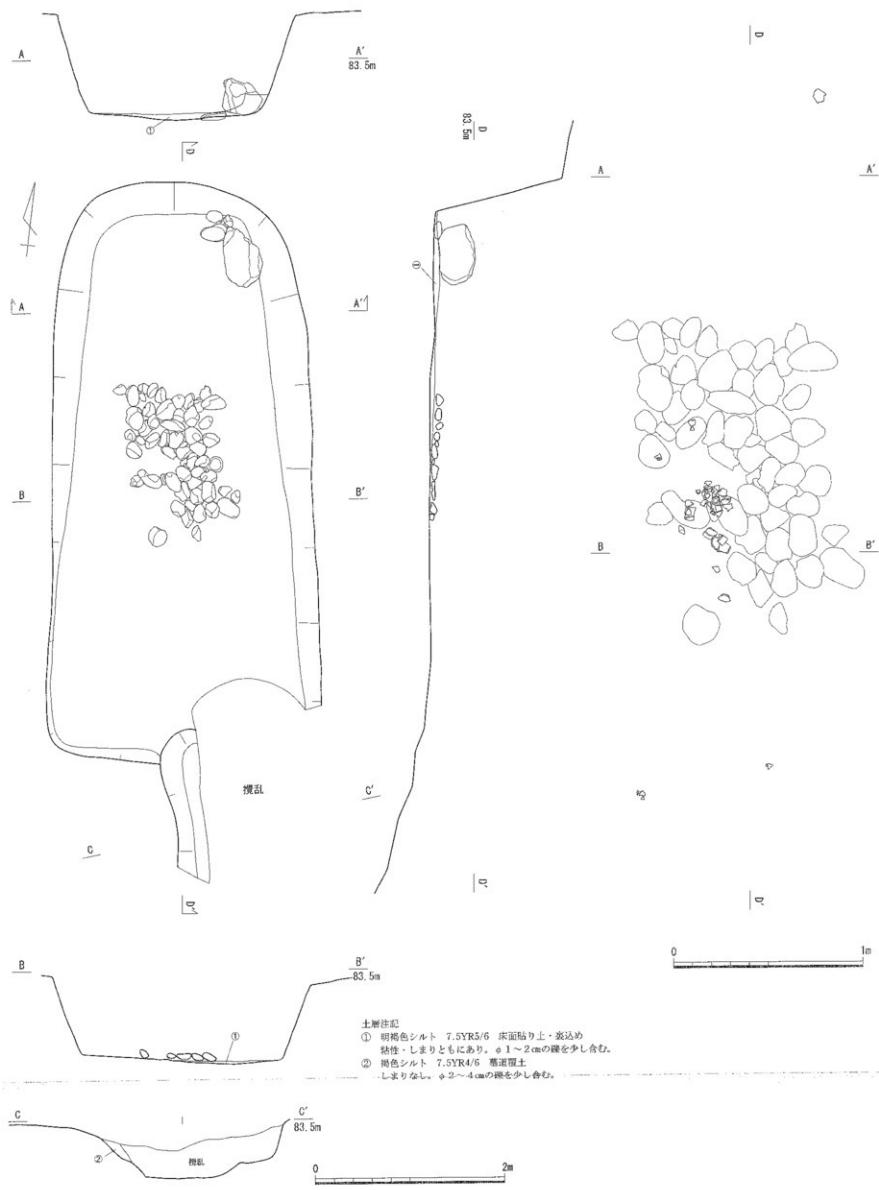
基底石 石室壁材のうち、左側壁最後端の基底石1石のみ残存する。大型角礫の長手面を内側に向け、恐らく奥壁を左から挟み込むように設置されていたと推定される。奥側に小型の円礫および角礫敷石が石室床面に嵌入しており、この石と奥壁基底石の支石とも考えられる。

敷石 墓坑中央の東西1.2m、南北1.75mの範囲に残存する。この範囲が石室のどの部位の床面であるかは不詳である。敷石としては比較的大振りの円礫を用い、φ30cm近いものもある。

墓坑・墓道 墳丘規模に対して長大と言える墓坑が施設されている。後壁が前壁より短く、前方へ広がる隅丸長台形の墓坑プランを呈す。後壁では旧地表より1.32m掘り込まれている。墓道は東側が擾乱さ



第148図 A13号墳埴丘図

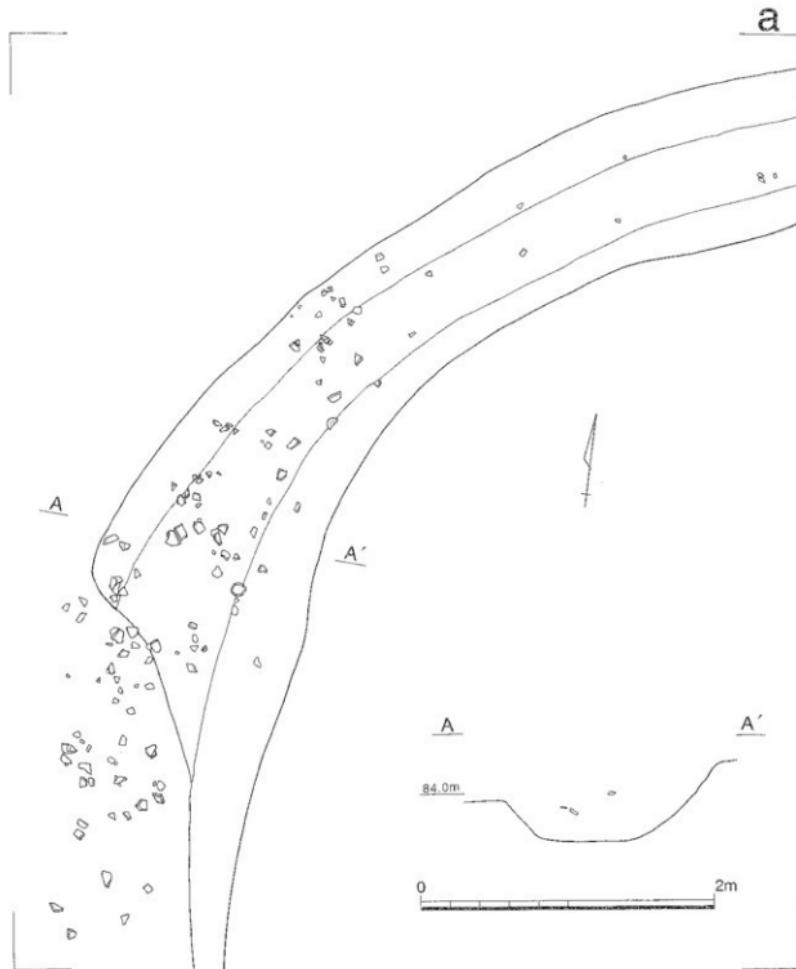


第149図 A13号石室実測図・遺物出土状況図

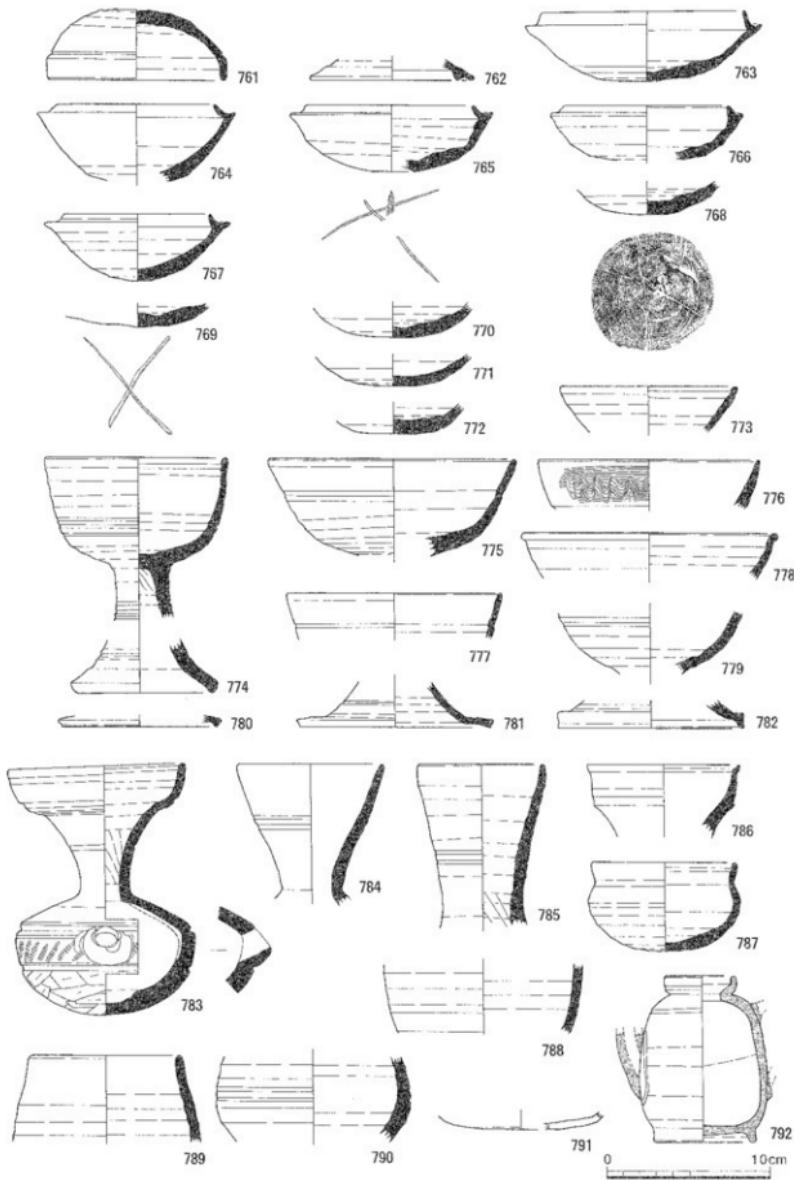
れており、主軸は墓坑のそれよりも若干東へ振れている。

③遺物の出土状況（第149・150図、図版64）

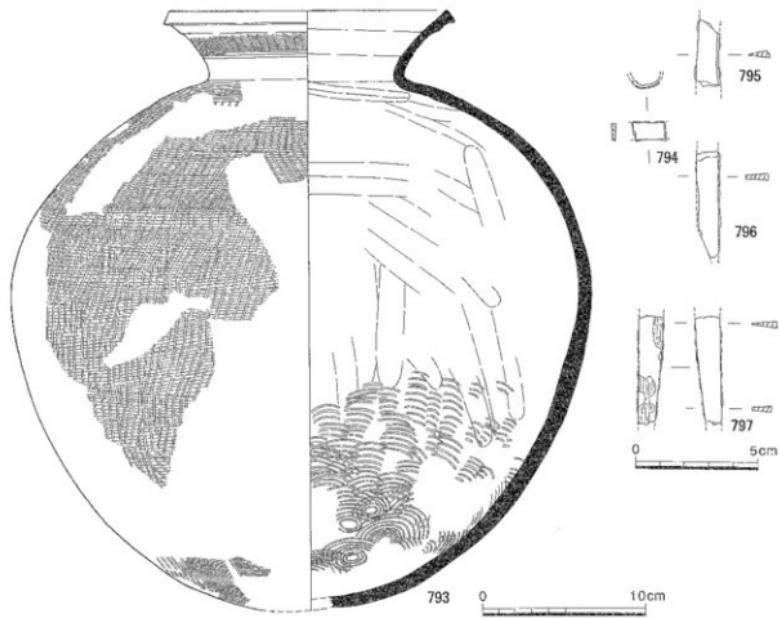
埋葬施設内では残存する敷石の直上で須恵器（761・764・774・776・778・786・787）が出土した。石室の覆土からは刀子片（794～797）が検出されている。墳丘直上においても須恵器（762・766・773・783）が出土し、特に783は完形品である。周溝の西部から北部にかけて、多數の須恵器（763・765・767～772・775・777・779・781・782・784・785・788～790）、土師器（791）の破片が出土したが、一部の須



第150図 A13号墳周溝遺物出土状況図



第151圖 A13號墓出土土器實測圖



第152図 A13号墳出土須恵器・金属製品実測図

恵器片はA10号墳から流入した可能性が高い。また、周溝覆土直上の表土より瀬戸・美濃製品792が出土した。

④出土遺物（第151・152図、図版11・138・139）

須恵器 壺蓋761は遠江III期末葉に、同762は遠江IV期前半に比定される。763～773は壊身である。763は遠江III期中葉、764～767は同III期末葉に比定され、768～772は合子状壊身の底部であれば同IV期前半に属する可能性がある。口縁部773も遠江IV期前半に比定されようか。また、765・768・769は外底面に十字状線刻の籠記号を有す。

774～779は無蓋高壺である。774は脚付盤と称してもよく、脚部に透孔はないが、長脚二段透孔高壺の脚部の形態に似ている。776は遠江III期後葉、775・777～779は同IV期前半に比定される。高壺脚部781は遠江III期後葉、同782は遠江IV期前半に比定される。

783・786は腹で、ともに遠江III期末葉に比定される。784・785は恐らく有蓋脚付長頸壺の口頭部であり、遠江III期後葉～末葉の所産と考えられる。短頸壺787は盤と称してもよく、遠江III期後葉に比定される。788～790は盤であり、789・790は遠江III期末葉に比定される。壺793は体部外面全面にカキ目を施し、頸部外面に梅描き波状文を割り付けており、遠江III期末葉～IV期前半に位置付けられる。

土師器 791は壺の底部であり、遠江IV期前半に併行すると考えられる。

瀬戸・美濃製品 792は油差壺である。注口および把手は折損している。外面は高台部分のみを露胎とし、その上方は全面的に鉄釉を施釉している。口縁部を中心に油脂の付着が少々認められるが、あまり使用されないうちに廃棄されたと想定される。18世紀第3～4四半期の所産と考えられる。

鉄製品 794は刀子の鍔である。795～797も刀子で、795は身部、796は茎、797は身～茎の破片である。3点とも平造りされており、797は刃側に微小な撫閑を有し、柄の木質が付着残存する。

⑤小結

石室出土遺物より、A13号墳は遠江III期後葉に築造され、同Ⅲ期末葉からIV期前半にかけて追葬が行なわれたと判断される。周溝出土遺物のうち、遠江III期後葉以前に比定される須恵器は恐らく北陸のA10号墳より流入し、A13号墳に伴わないと考えられる。石室形態は不明であるが、僅か1石残存する左側壁基底石の大きさを考慮すれば、中規模以上の横穴式石室が構築されていた蓋然性が高く、階層性は決して低くなかったと想定される。

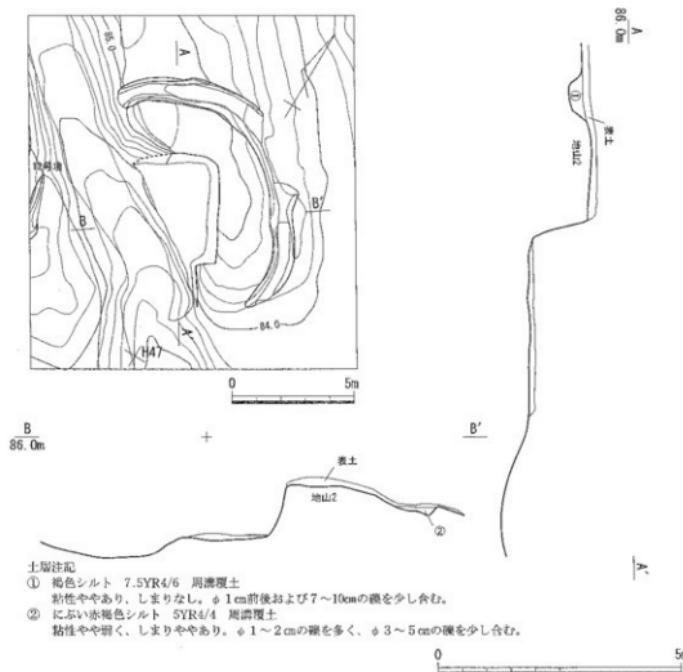
(3) A14号墳

①墳丘・周溝（第153図）

自然流路を挟んでA12号墳に東北東側で対峙し、また、この自然流路により古墳の西側約1/3を破壊されている。墳丘盛土は遺存していない。北～東側に残る周溝から本来の墳丘は東西7.5m以上、南北8.5m以上のやや南北に長い円墳を呈したと推定される。

②埋葬施設（第154・155図、國版65）

古墳の中央に横穴式石室が構築されていたと想定されるが、石室構造材が全く残存しておらず、石室



第153図 A14号墳墳丘図

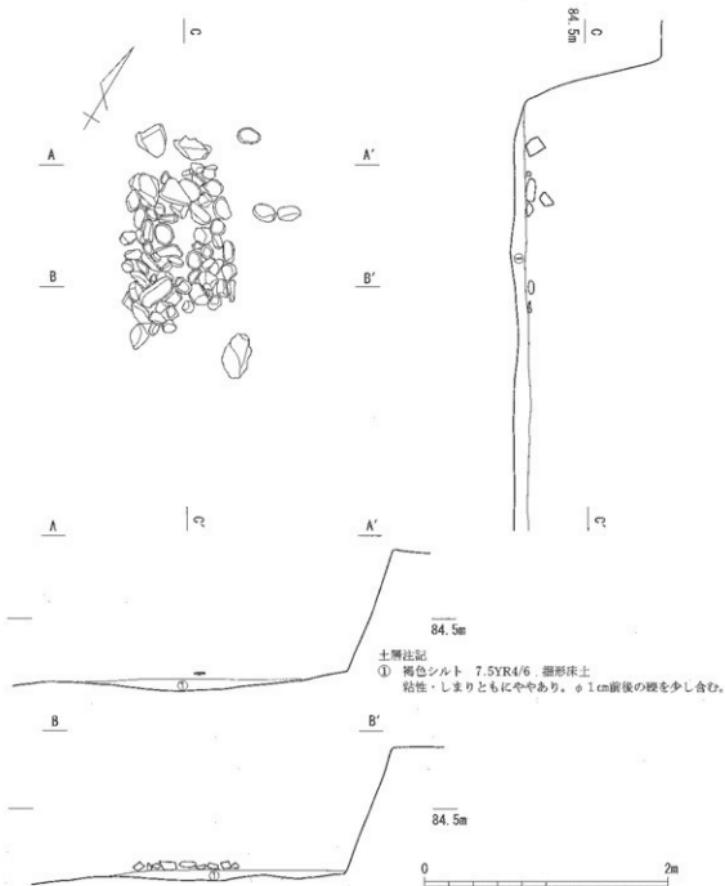
形態は不明である。

敷石 墓坑の後部中央に東西0.92m、南北1.44mの範囲で敷石が残存し、恐らく玄室奥側部分床面と推定される。円礫が用いられているが、大きさはφ 5~25cmと、ばらつきがある。

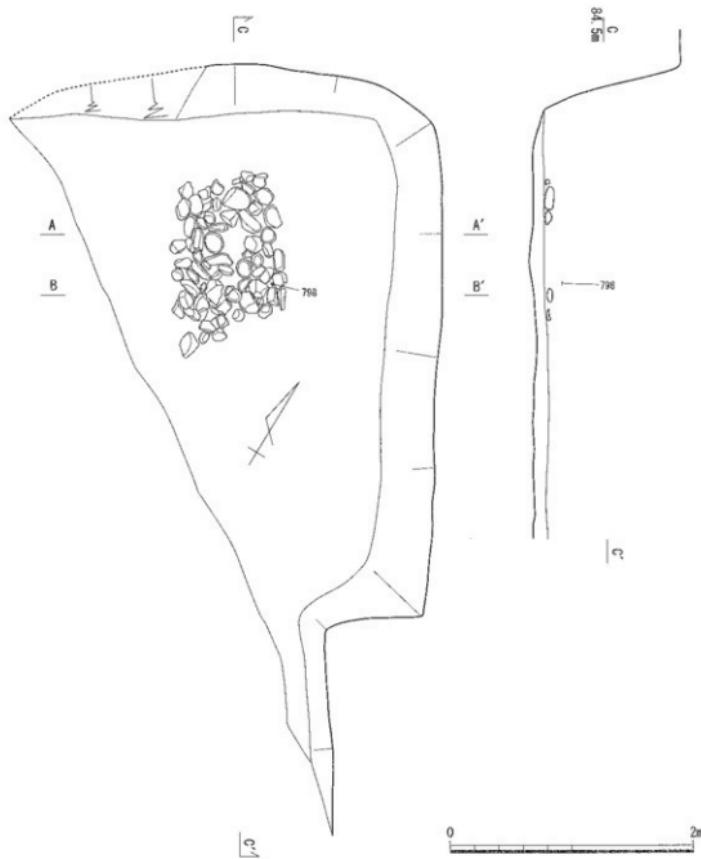
墓坑・墓道 墓坑は幅の広い長方形プランを呈し、後壁では地山を1.14m以上掘り込んでいる。墓坑の前辺に取り付く墓道は、墓坑内に滑状の掘り込みを食い込ませていない。

③遺物の出土状況（第155図、図版65）

敷石の間隙より金銅製足金物798が出土した。A14号墳唯一の出土物である。なお、当古墳西側の自然流路より須恵器の小片が出土しているが、A14号墳由来の遺物ではない可能性がある。



第154図 A14号墳石室検出状況図

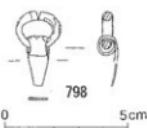


第155図 A14号墳石室実測図

④出土遺物（第156図、図版11）

金銅製品 798は金銅製の足金物で、別の表現をすれば装飾刀の吊金具である。金銅棒を丸めて作った環に金銅板を巻き付けている。東日本に多く分布する頭椎大刀の装具であれば、年代的上限は6世紀後葉（＝遠江III期中葉）、同下限は7世紀前半（＝遠江IV期前半）となる。

⑤小結



A14号墳は石室形態・築造時期ともに不明であるが、後者に關しては遠江III期末葉と仮定しておきたい。理由は第4章第1節で詳述する。墓坑の規模から推定される石室の規模は中型以下ではあるが、装飾刀の副葬は当古墳被葬者の階層性の高さを示している。

第156図 A14号墳出土遺物実測図

(4) A27号墳

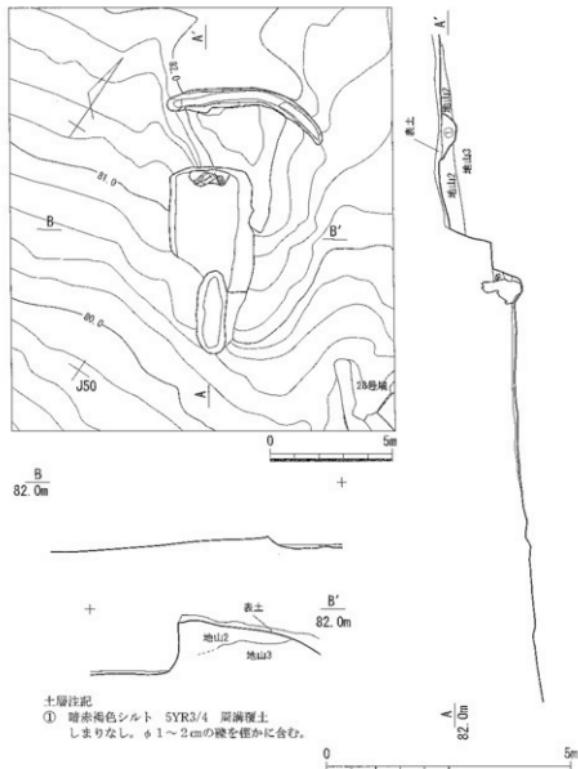
①墳丘・周溝（第157図）

2区北部を横断する小尾根上より若干南に斜面を下った箇所に立地する。墳丘盛土は流失している。周溝も北側約1/6周分が残存するに過ぎないが、周溝が囲む本来の墳丘は南北8m以上と推定される。

②埋葬施設（第158～160図、図版66）

古墳の中央と目される箇所に横穴式石室が構築されているが、擾乱が烈しく、石室形態は不明である。玄室 奥壁は大型角礫を長手置きして鏡石とし、高さ0.62mを測るが、墓坑の深さを勘案すれば、現状の鏡石のさらに上方へ石材が積載されていたと想定し得る。鏡石の左側に中型の角礫が1石据えられており、鏡石との接觸状況から左側壁最後端の基底石と考えられる。一方、鏡石の右側基底部に小型の円礫2石が認められており、鏡石の支石の役割を担っていると考えられる。左側壁最後端の基底石は奥壁から左前方へ開くように長手置きされており、強いて推し量れば、玄室プランは胴張り形または奥窄まり形であったと考えられる。

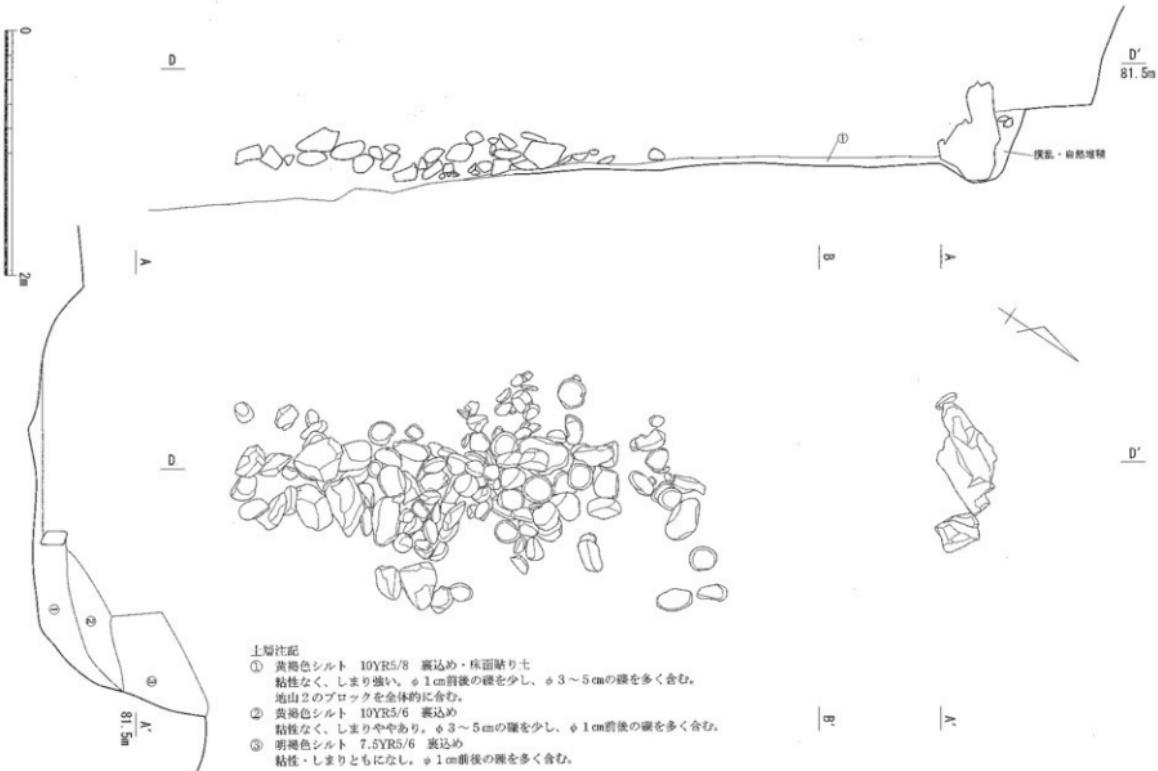
閉塞石 墓坑前端中央付近に閉塞石が良好な遺存状態で検出された。φ20cm前後の小型円礫とφ25～40cm

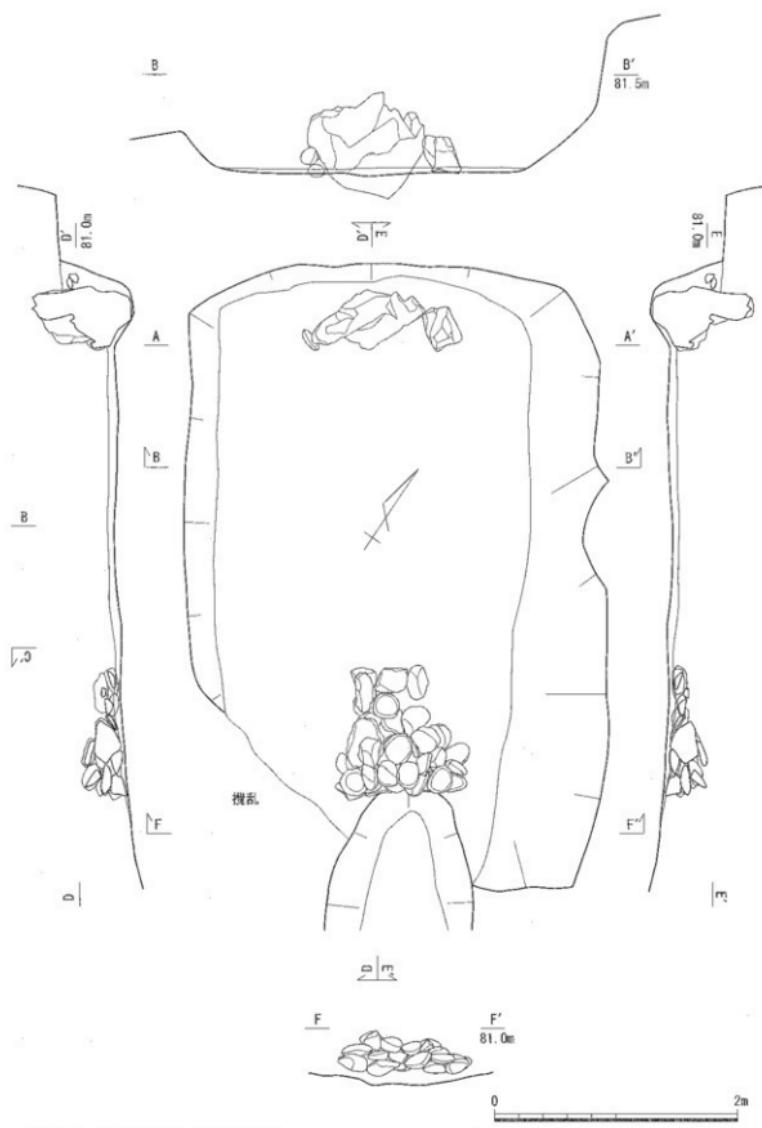


第157図 A27号墳墳丘図

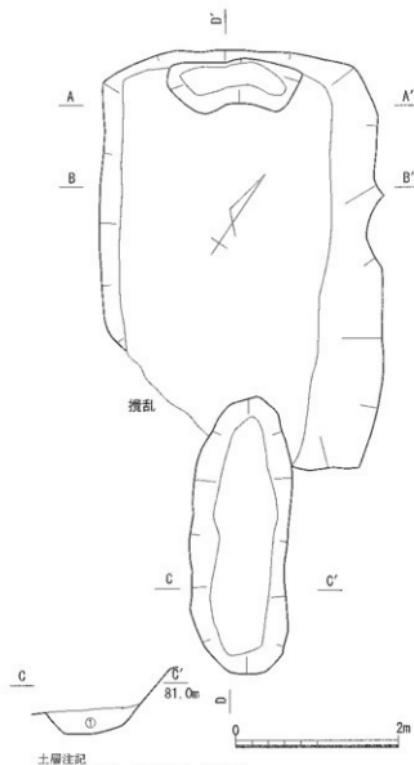
超の中・小型角礫を小口積みしている。最大3段、高さ0.36m残存する。この閉塞石が横穴式石室の開口部に前端を嵌めて積載されていると仮定すれば、石室の全長は約3.7mを測ることになるが、所詮想像上の寸法に過ぎない。

墓坑・墓道 墓坑は幅広の長方形プランを呈し、後壁の現地表よりの掘り込みは1.55mを測る。なお、後壁は2段階掘削されているよう見えるが、当該箇所は樹根による擾乱が烈しく、擾乱土除去後に二次的崩落を防ぐため、このような形に整えざるを得なかったのであり、古墳建築とは無関係の形状である。また、奥壁の鏡石に対して設置用の小土坑が掘削されている。



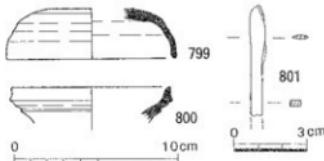


第159図 A27号墳石室・閉塞石実測図



第160図 A27号墳墓坑実測図

土層記述
① 褐色シルト 7.5YR4/4 新造覆土
粘性やや弱く、しまりなし。φ 15~20cmの縦を多く。
φ 2cm前後の根化物を非常に多く含む。



第161図 A27号墳出土遺物実測図

墓道は墓坑の前端中央に取り付き、溝状掘り込みが墓坑内に食い込んでいる。墓道の主軸は墓坑のそれよりも若干西へ振れている。

③ 遺物の出土状況

墓坑の石室内と思しき箇所より須恵器2片(799・800)と鐵鎌1点(801)が出土したが、床面直上ではないということ以外の出土状況に関する詳細は不明である。

④ 出土遺物（第161図、図版139）

須恵器 坯蓋799は遠江IV期前半に比定される。瓶類の口縁部800も同時期の所産であろう。

鉄製品 801は尖根式の鐵鎌で、恐らく長頭鎌と推定される。鎌身断面は両丸造りであり、鎌身闊を明確に形成しないものの、柳葉式の範疇で捉えられる。

⑤ 小結

出土遺物より、A27号墳は遠江IV期前半に築造されたと判断されるが、追葬等については不明である。推定される石室の規模としては中型またはそれ以下ではあるが、

僅かに残存する壁材は良質と言ってよく、

A27号墳の階層性は大屋敷A古墳群において中程度に位置付けられる。

(5) A28号墳

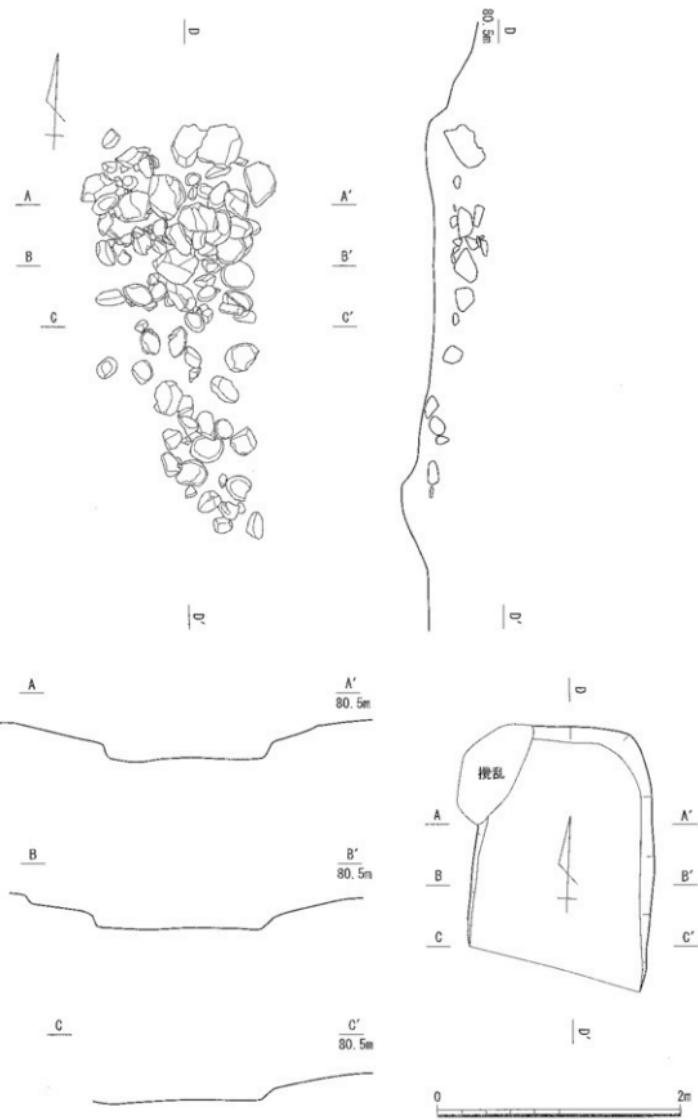
① 墓丘・周溝（図版67）

A27号墳の東方約10mに位置し、南側は小尾根に沿った自然流路に擾乱されている。墳丘盛土・周溝ともに確認されていない。

② 墓葬施設（第162図、図版67）

墓坑と崩落石材以外は何も残存していない。横穴式石室であったか否かさえ不明である。

墓坑 著しく擾乱されているが、隅丸長方形の墓坑プランを呈す。後壁の掘り込みは現状の地山から僅か0.17mを測り、墓坑はほとんど削平されている。主軸は真北に向いている。



第162図 A-28号填石室検出状況図・墓坑実測図

③出土遺物

遺物は出土していない。

④小結

A28号墳は古墳以外の遺構である疑いもないとは言えないが、主軸方位が意識されていることから古墳の埋葬施設と推定される。古墳であれば、2区北部に位置する各古墳より後出する可能性が高く、築造時期は遼江V期以降に求められるかもしれない。

⑥ A29号墳

① 墳丘・周溝（第163図）

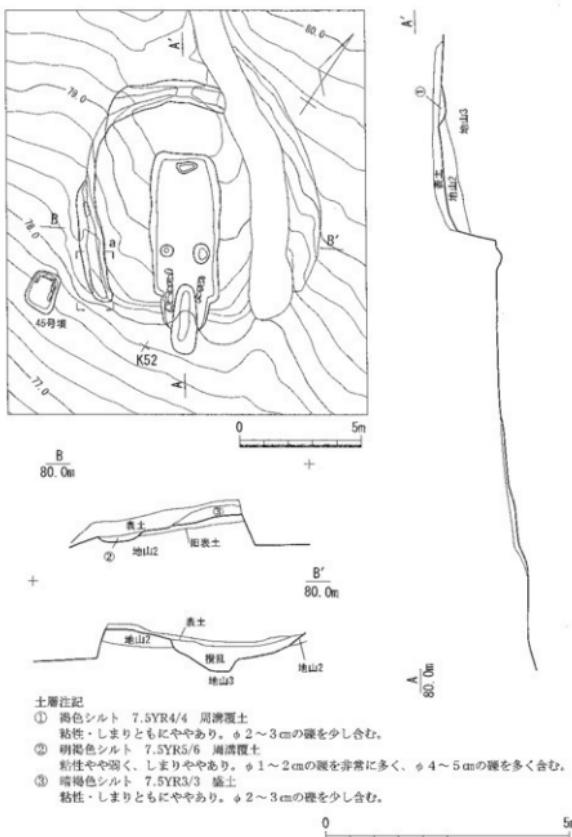
古墳の北東部をA28号墳の南側から続く自然流路に削平されているが、南西側では墳丘盛土が少々遺

存する。周溝は全体の約1/2が検出され、周溝に囲まれる範囲は東西7.5m以上、南北9.3m以上を測り、南北に長い橢円形プランの円墳を呈す。

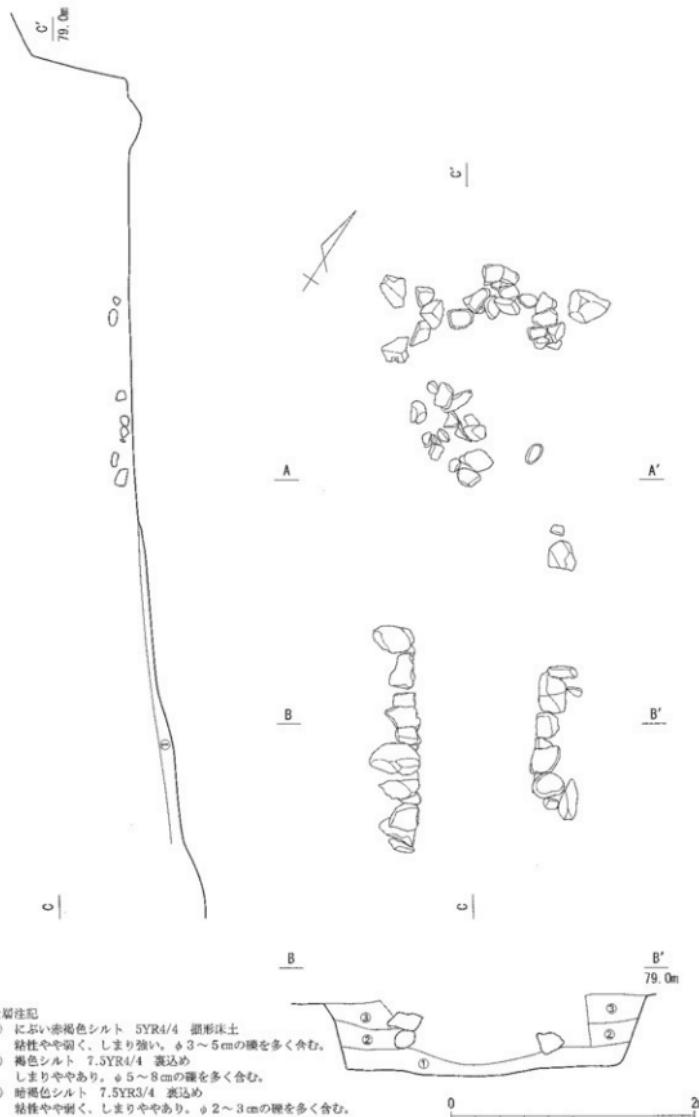
② 埋葬施設（第164～166図、図版67・68）

古墳の中央に南南東に向かって開口する横穴式石室が構築されており、單室系擬似両袖式である可能性が高い。残存状態は劣悪である。玄室 奥壁・側壁ともに残っていないが、奥壁の恐らく鏡石および玄門の左右立柱石に対して墓坑床面に設置用小土坑が掘削されている。これらの小土坑間の距離から、玄室長は3.2m以上であったと推定される。

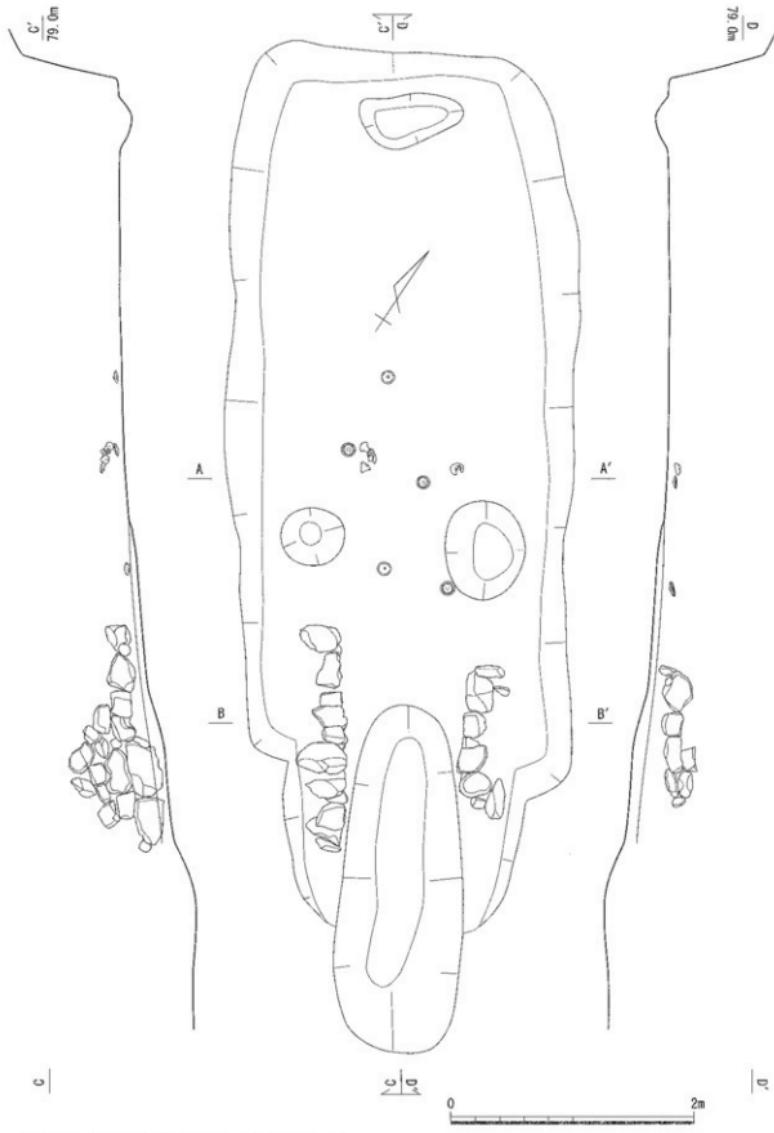
羨道 羨道の側壁は多少遺存している。両側壁とも2段目以上は基本的に角礫を小口積みしているが、円礫の小口積みや角礫の平手積



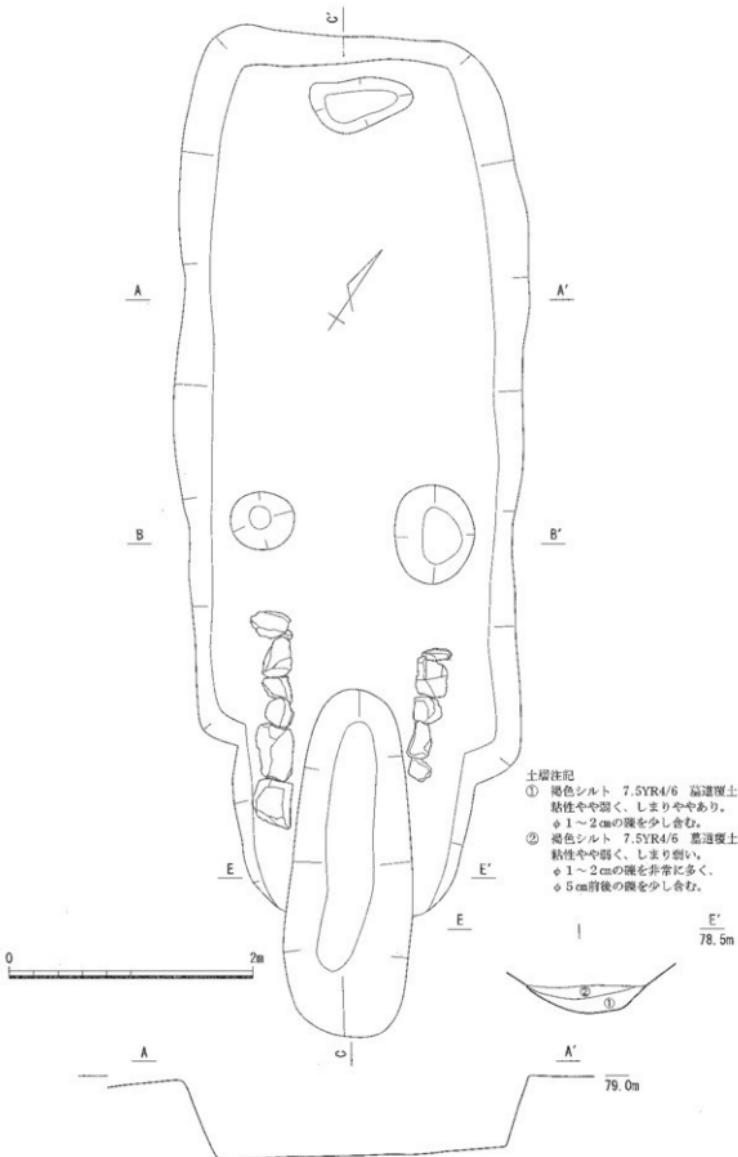
第163図 A29号墳墳丘図



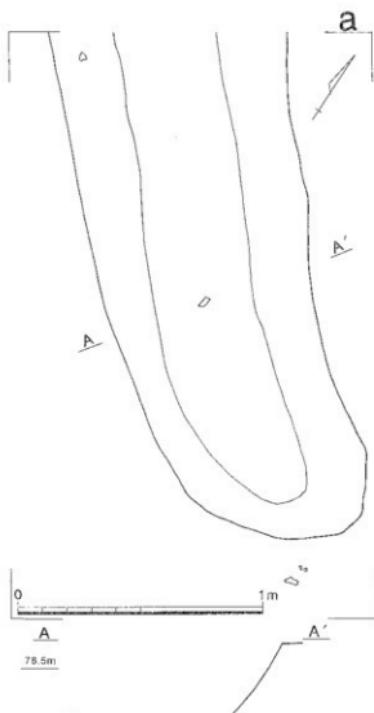
第164図 A29号填石室検出状況図



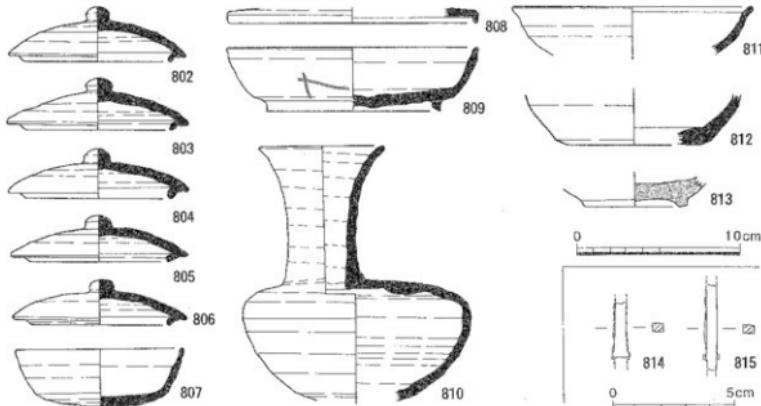
第165圖 A29號墳石室實測圖・遺物出土狀況圖



第166図 A29号墳基底石・墓坑実測図



第167図 A29号墳周溝遺物出土状況図



第168図 A29号墳出土遺物実測図

みも若干認められる。左側壁は最大2段、高さ0.27m残存し、右側壁は最大4段、高さ0.74m残存する。また、基底石から壁面を内側へ若干傾け、側壁を持ち送る意図が明瞭に看取される。羨道の主軸は、墓坑全体の主軸より若干南に振れている。立柱石設置用小土坑から右側壁の現状先端までの距離は2.6mを測り、羨道長の下限を示す。

基底石 羨道側壁に残存する基底石は角礫の長手面を内側に向ける置き方が基本であり、比較的小振りの角礫は小口置きされ、側壁の線形および長さの調整に用いられている。

墓坑・羨道 長方形プランの墓坑の左右壁前端近くを屈曲させて幅を狭め、羽子板形プランを呈す。墓坑は後壁で地山を0.8m以上掘り込んでいる。羨道の溝状掘り込みは墓坑の羽子板形プランの「柄」部を貫通し、羨道中央部に達しているが、墓坑に取り付く長さとしては短小となっている。

③遺物の出土状況（第165・167図、図版68）

玄室前半部から玄門にかけての床面直上より須恵器（802～807・810・811）が出土しているが、敷石が残存していないことから、古墳廃絶時の原位置を保持するものはほとんどないと考えられる。また、石室の覆土中より鐵鏃2片（814・815）が検出された。

周溝南西側先端付近より須恵器が数点出土したが、いずれも図化不能な小片である。墳丘直上と

墳丘跡地からも須恵器（808・809・812）および山茶碗（813）が出土した。

④出土遺物（第168図、図版139・140）

須恵器 坯蓋802～806、坯身807、平盤810および無害高坏坏部811は遠江IV期末葉に比定される。坯蓋808および坯身809は遠江V期初頭に比定される。809の体部外面には十字状竪記号が刻されている。

山茶碗 碗813は底部が厚く、高台端面に初期痕を有し、前掲松井氏編年の山茶碗III期に比定される。

鉄製品 鉄鎌814・815はともに茎闊が鍔闊となる頭部～茎片で、長頭鎌と考えられる。

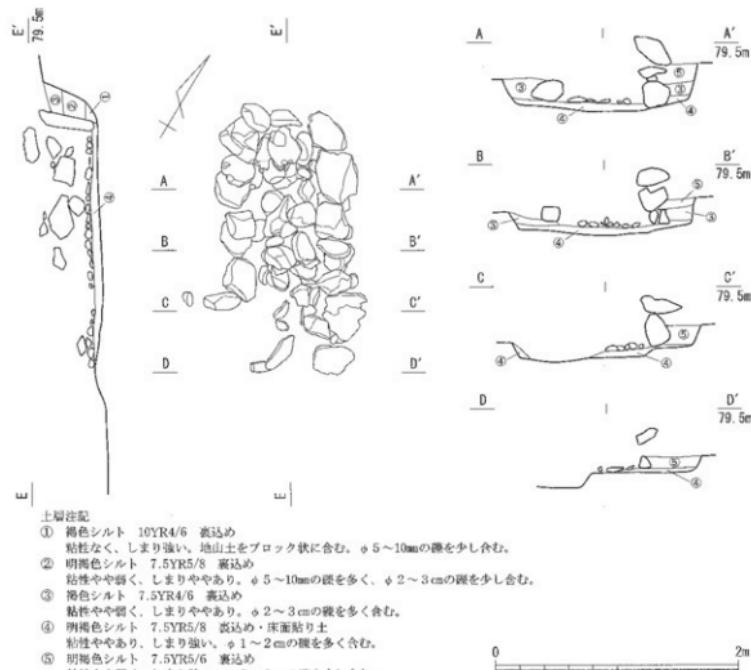
⑤小結

出土遺物より、A29号墳は遠江IV期末葉に築造され、同V期初頭に追葬が行なわれたと判断される。構築された擬似両袖式横穴式石室は全長5.8mを超えると推定され、新しい時期の古墳としては有力な部類であったと考えられる。また、立柱石設置用小土坑の存在から単室系と判断したが、群中に例があるように設置用小土坑を伴わない立柱石も想定可能であり、当古墳で想定した玄室はやや長大であることから、玄室・羨道・前庭からなる複室系擬似両袖式横穴式石室であった可能性も否定できない。

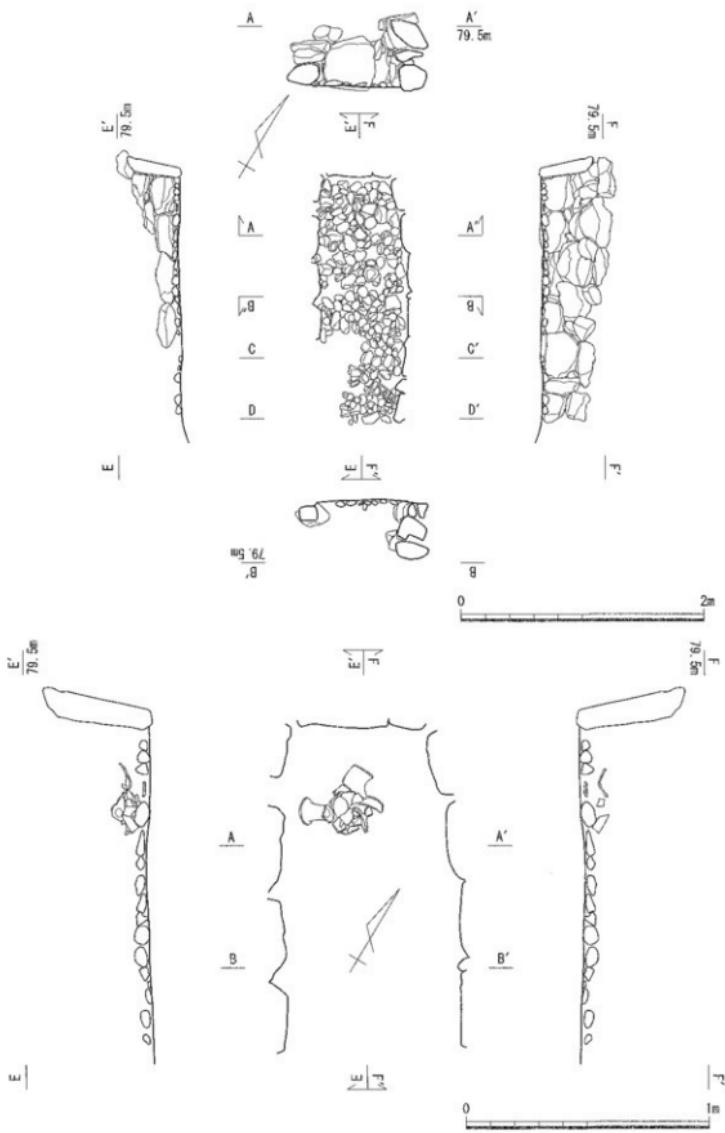
(7) A30号墳

①墳丘・周溝

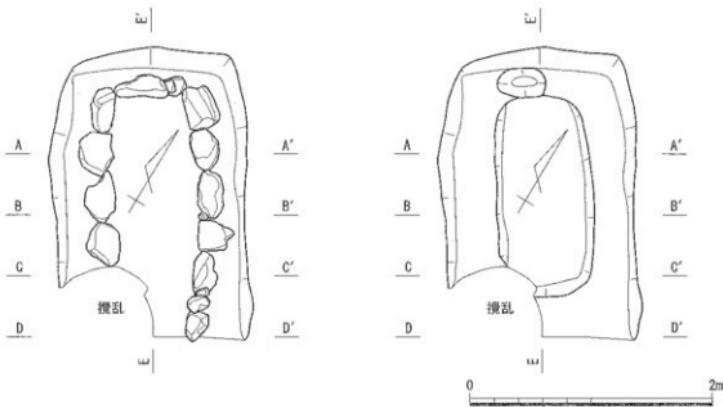
古墳は大きく削平されており、墳丘盛土・周溝とともに確認されなかった。



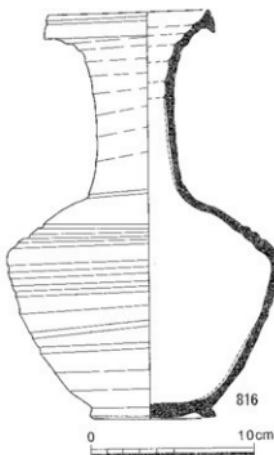
第169図 A30号墳石室検出状況図



第170图 A30号填石室实测图·遗物出土状况图



第171図 A30号墳基底石・墓坑実測図



第172図 A30号墳出土遺物実測図

②埋葬施設（第169～171図、図版69・70）

A30号墳は埋葬施設のみ確認され、南南東に向けて開口する無袖式横穴式石室が構築されている。上部構造が全て削平されたにもかかわらず、石室の残存状態はやや良好である。

玄室 中央部に最大幅を有する胴張り形の玄室プランを呈す。左側壁は先端の玄門まで残存するが、右側壁の前約1/3は失われている。奥壁には当石室最大の板状角礫を据え立てて鏡石としているが、鏡石の左側にも柱状の角礫を立て、2石で奥壁基底石を構成している。奥壁は現状で高さ0.42mを測るが、両側壁の残存状況を見れば、現状2石の上にも礫が積載されていた蓋然性が高い。

側壁には中型の角礫を主体的に用いているが、左側壁では長手積み・平手積み・小口積み・縦積みと、あらゆる積み方が見受けられる。当然ながら、目地通りは認められない。左側壁は最大4段、高さ0.6m残存し、右側壁は最大3段、高さ0.54m残存する。また、2段目から明確に持ち送り積みされている。

敷石 搾乱された右側壁寄りの床面を除き、玄室内に全面的に敷設されている。大部分がφ10cm前後或いはそれ未満の円礫を用いており、φ15cmを超える礫は僅かである。

基底石 側壁の基底石は奥壁ほど安定感のある角礫を使用しており、まず両側壁最後端の基底石で奥壁を左右から挟み込み、ハの字状に配置した後、順次中型角礫の長手面を内側に向けながら配列し、玄門付近を小型角礫で調整するという設置工程が窺われる。

墓坑 やや幅が広い長方形の墓坑プランを呈す。第171図では、墓坑が2段構造になっている、或いは墓坑中央に隅丸長方形の大土坑が掘削されているかのように見えるが、第169図の各横断面図に明らかなるよ

うに、墓坑掘形が中央でやや凹んでいるに過ぎないことが分かる。一方、奥壁の鏡石に対して設置用の小土坑が掘削されている。なお、墓道は検出されなかった。

③遺物の出土状況（第170図、図版69）

玄室最後部の床面直上より須恵器長頸壺1個体（816）が出土している。古墳廃絶時の原位置を概ね保持していたと考えられ、破碎されてはいたが、完形品に接合できた。

④出土遺物（第172図、図版140）

須恵器 台付長頸壺816は壺蓋を伴わない製品と考えられ、遠江V期前半に比定される。

⑤小結

石室出土遺物より、A30号墳は遠江V期前半に築造されたと判断される。最末期の古墳にしては計画性のある石室設計を行ない、石材も中型の角礫を揃えているため、階層性が比較的高い古墳とも言えるが、遺物に示される遠江V期前半という年代は実は追葬の時期であるかもしれない、その場合、築造時期は幾分遅く、階層性も相対的に低下することになる。

⑥ A31号墳

①墳丘・周溝（第173

図）

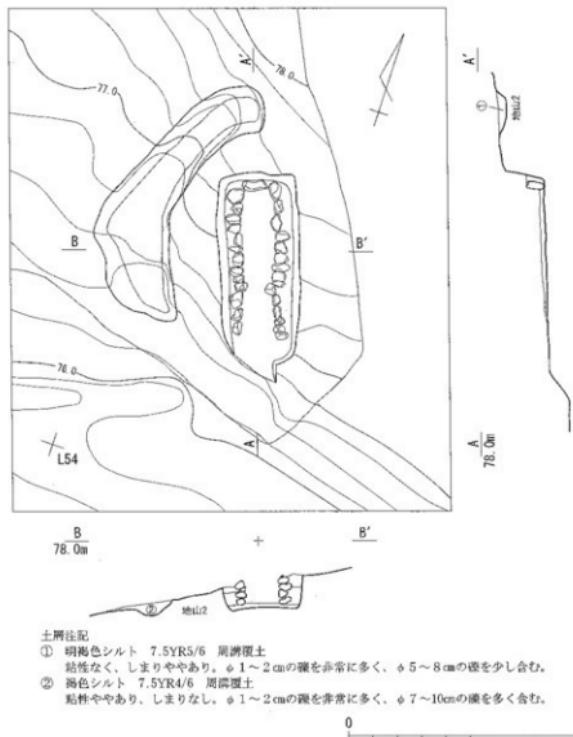
古墳の東側約1/4が調査区外に連続し、全墳検出できなかつた。さらに、古墳の南側が後世に造成された段差により削平され、本来の墳丘プランをとどめていないうが、約1/3周分検出された周溝の状況から、南北に長い橢円形プランを呈する円墳であったと考えられる。墳丘盛土は流失している。

②埋葬施設（第174～

176図、図版70～72）

古墳のほぼ中央に单室系擬似両袖式横穴式石室が構築されている。南南東に向けて開口し、残存状態は良好である。

天井石 玄室内に崩落した石材のうち、大



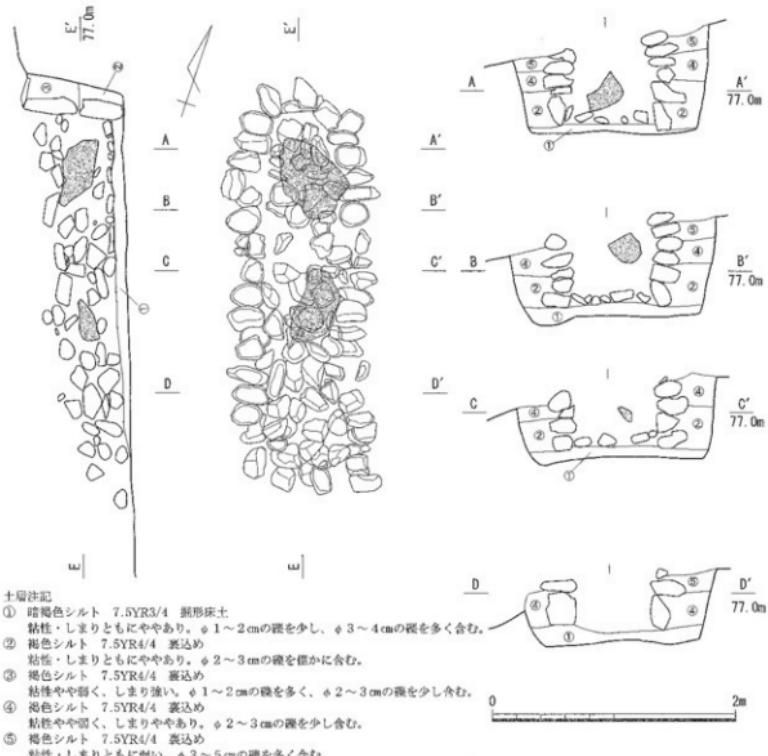
第173図 A31号墳墳丘図

型の板状角礫 2 石を天井石に認定した。2 石の長軸はそれぞれ 62cm、72cm を測り、石室主軸平行に近い状況で検出されている。当古墳削平に伴う人為的崩落と考えられ、架構が想定される他の天井石数石もその際に流失したと推測される。

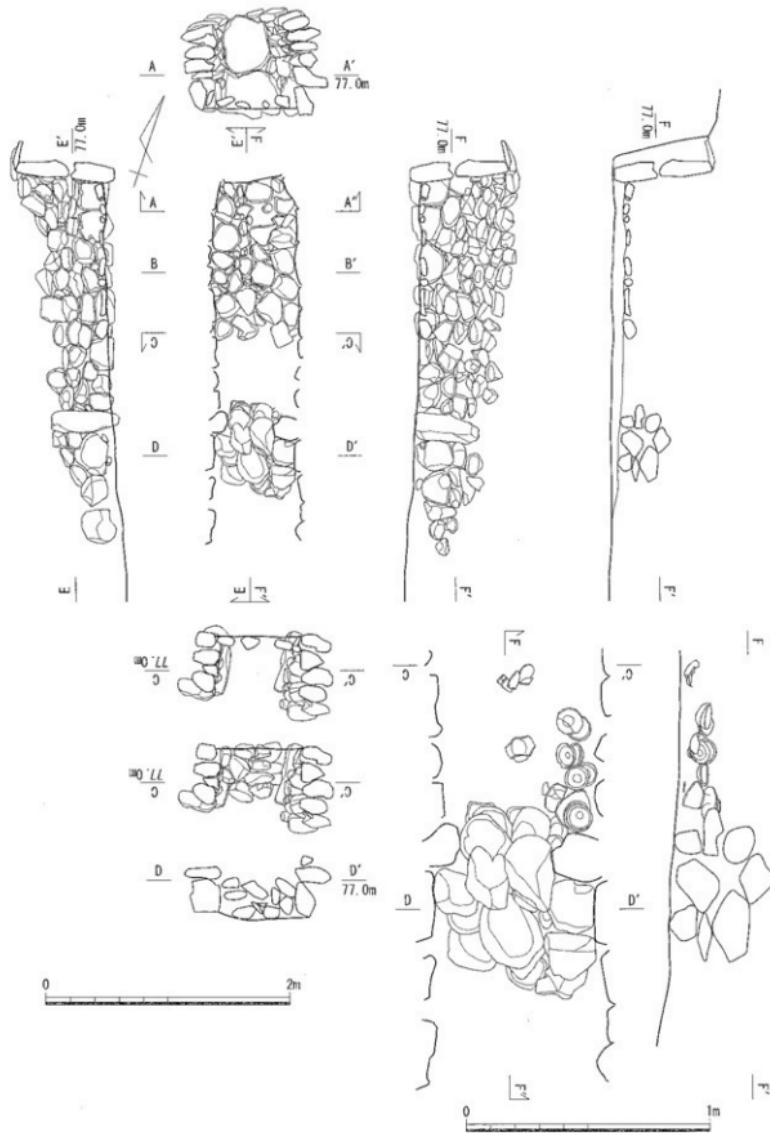
玄室 玄門から後部まで幅が一定し、奥壁幅のみ狭くなる奥窄まり形の玄室プランを呈す。奥壁は大型に近い板状角礫 2 石の長手面を内側に向けて積載し、鏡石としている。鏡石の上にも扁平な小型角礫が小口積みされており、現状の奥壁は高さ 0.83m を測る。玄門には大型の柱状角礫を立て据えて立柱石とし、左右立柱石ともに高さ 0.52m を測り、側壁からの突出は左立柱石 20cm、右立柱石 7cm を測る。

側壁には中・小型の円錐と角礫が小口積み主体で積載されているが、円錐が卓越している。両側壁ともに前方へ向かって斜め下がりとなる目地が通っており、左側壁は最大 6 段、高さ 0.83m 残存し、右側壁は最大 6 段、高さ 0.78m 残存する。また、両側壁ともに 2 段目から持ち送り積みが特に後半部で顕著に認められる。

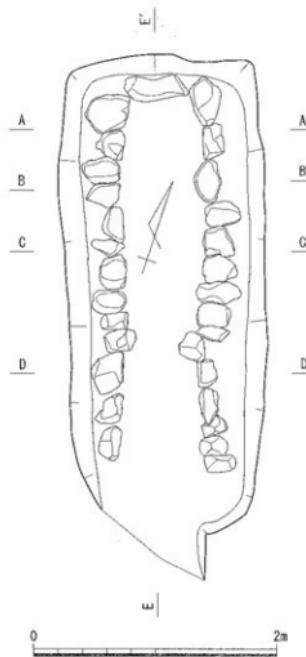
羨道 羨道側壁からの立柱石の突出は左立柱石 18cm、右立柱石 11cm を測る。左側壁にはほぼ水平な目地通りが認められるが、右側壁の目地通りは明確ではない。左側壁は最大 4 段、高さ 0.56m 残存し、右側



第174図 A31号墳石室検出状況図



第175図 A31号墳石室・閉塞石実測図・遺物出土状況図



第176図 A31号墳基底石実測図

壁は最大3段、高さ0.46m残存する。積載されている磚の構成は玄室と同様であり、小口積みされているが、持ち送り積みは看取されない。

敷石 玄室後約2/3の床面に敷設されている。 $\phi 20cm$ を超える、敷石としては大振りの扁平円礫主体に用いられているが、角礫も若干認められる。また、敷石どうしの間隙を $\phi 5cm$ 前後の円礫で充填している。

閉塞石 美道後半部から玄室最前部にかけて、閉塞石が良好に残存する。美道側は幅一杯に積載されているが、玄室側は立柱石間の幅のみの積載となっている。中型または中型に近い円礫主体に小口積みされ、最大4段、高さ0.48m残存する。

基底石 側壁の基底石は玄室・美道ともに中型の角礫または円礫を用い、長手面を内側に向かた置き方と小口置き方が拮抗している。玄室最後端の左右一対の側壁基底石は奥壁の左右小口面に一端を接し、ハの字状に前方へ広がるように設置され、これより前方の玄室側壁基底石は左右平行一直線に配置されている。これに対し、美道の両側壁基底石は全体がハの字状に配列され、美道幅は美道側幅が最大となっている。

墓坑・墓道 長方形プランの墓坑が後壁で地山を0.8m以上掘り込んで造られている。墓道の溝状掘り込みは墓坑内に食い込んでいない。

③遺物の出土状況（第175図、図版72）

閉塞石の玄室側付近の床面上直上、特に左側壁沿いにおいて須恵器壺蓋6点（817～822）、同壺身6点（823～828）、同無蓋高杯1点（834）がまとめて出土した。いずれもほぼ完形品であり、追葬に際して前葬者に伴う副葬品を片付けた状況と考えられる。また、閉塞石の直上より須恵器壺身1点（832）が出土している。他にも石室の覆土より須恵器4点（829～831・833）、土師器1点（835）、鉄製品1点（836）が検出されている。

④出土遺物（第177図、図版140～142）

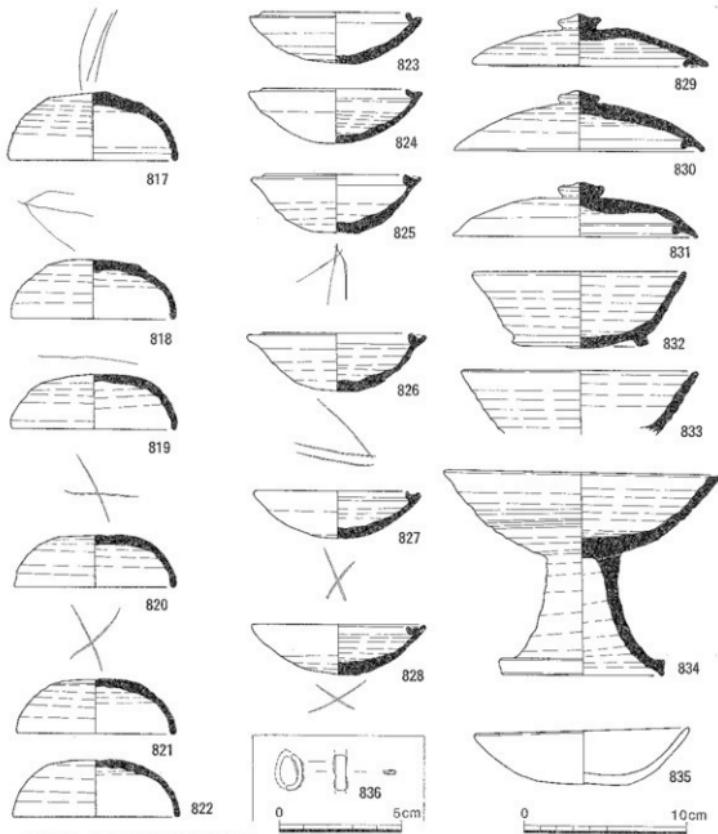
須恵器 壺蓋817～822および壺身823～828は遠江IV期後半に比定される。817・818の外表面頂部に3本線から成る籠記号が刻されており、825・826の外底面の筆記号と共に通しているため、これら4点で蓋壺2組を構成したと考えられる。同様のことは同じ「×」形籠記号を有する820・821・827・828にも当てはまり、やはり2組の蓋壺になると考えられる。壺蓋829～831、壺身832・833および無蓋高杯834は遠江IV期末葉に比定される。

土師器 835は壺であり、遠江IV期後半に併行する。

鉄製品 836は刀子の繩である。刀子本体は確認されなかった。

⑤小結

石室における遺物の出土状況より、A31号墳は遠江IV期後半に築造され、同IV期末葉に追葬が行なわれたと判断される。石室構築の様相は整然としており、大屋敷A古墳群における該期の単室系擬似両袖式横穴式石室としては中程度の階層に位置付けることができる。

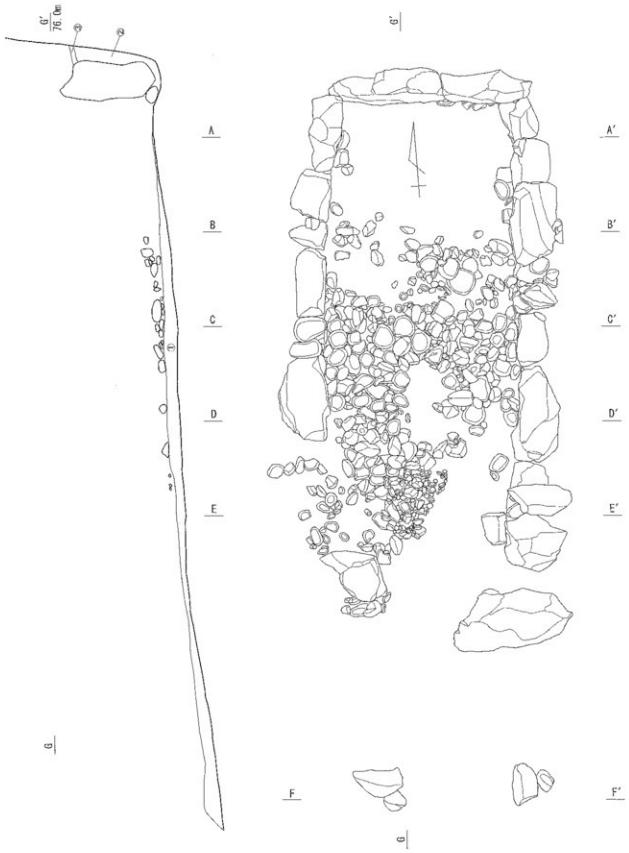


第177図 A31号墳出土遺物実測図

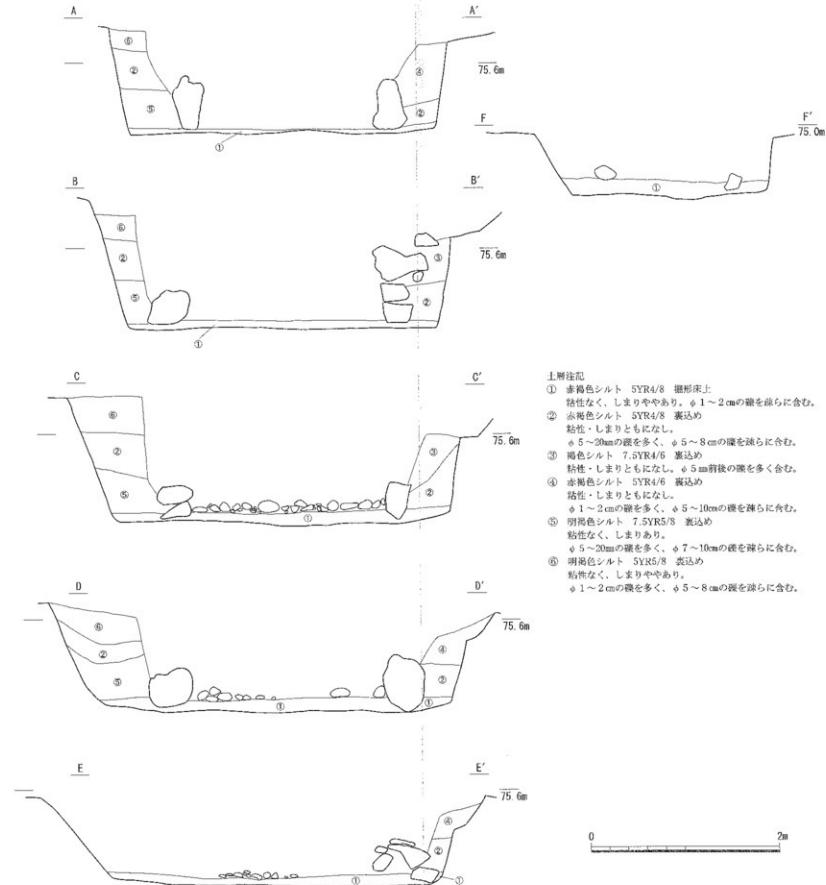
(9) A32号墳

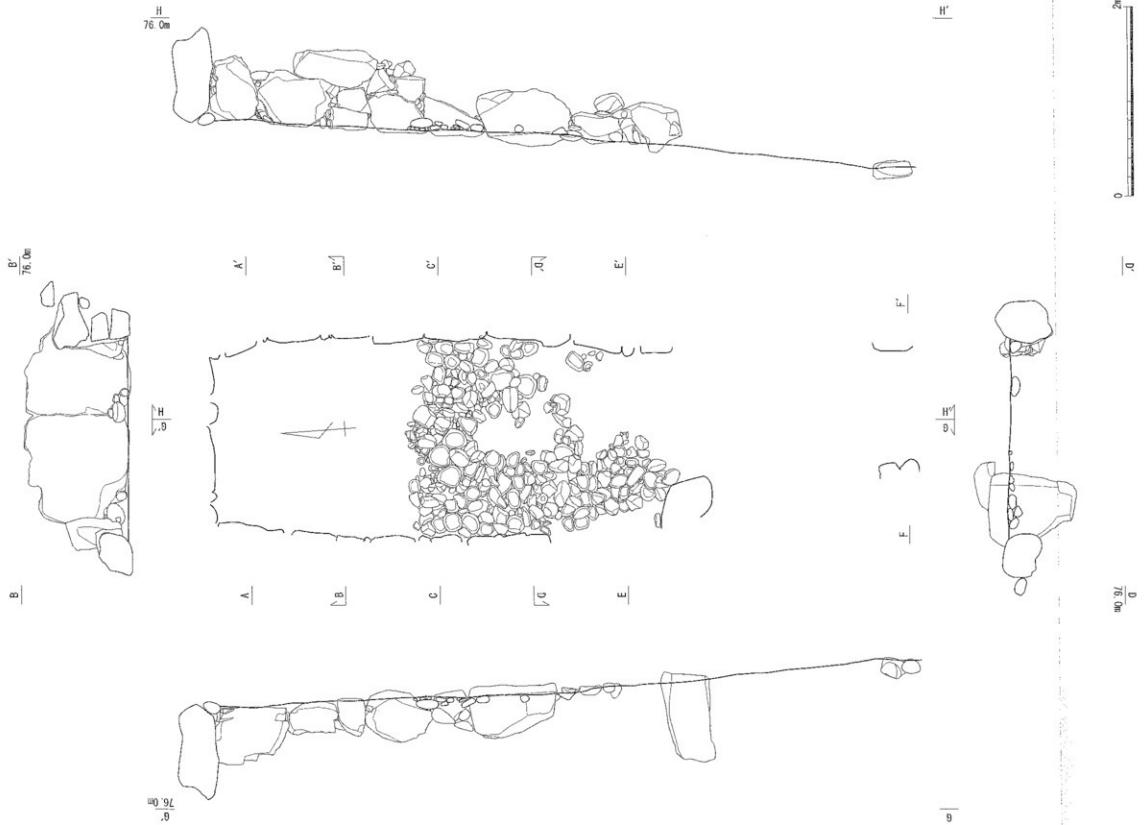
①墳丘・周溝（第178図、図版74）

2区東西中央の南辺付近に位置する円墳であり、墳丘は東西9.9m、南北14mの南北に長い椭円形プランを呈す。墳丘盛土は残存状態が劣悪な当古墳群においては非常に良好に遺存し、残存高は最大0.9mを測る。盛土下層は石室の裏込めに連続し、現状の盛土最上層は周溝の内側に達しているが、一次墳丘と二次墳丘とを画するような墳丘施設は明確に看取されない。墳丘の構築に先立ち、墓坑の東辺上端に段を造成しており、側壁石材を墓坑内へ積み降ろすための施設と考えられるとともに、墓坑内において石室左側壁の裏込めは右側壁のそれに較べて幅が狭いため、左側壁上部のより堅牢な補強を期し、裏込めより連続する墳丘盛土のうち平面的にはこの造段上端までを裏込め扱いしたとも想定し得る。つまり、この造段部分が盛土の仕様を分別する指標となつたと推定され、墓坑に付加された施設とは言え、墳丘施設と捉えてても差し支えないと考えられる。



第179図 A32号墳石室検出状況図





第180圖 A.32號石室測圖

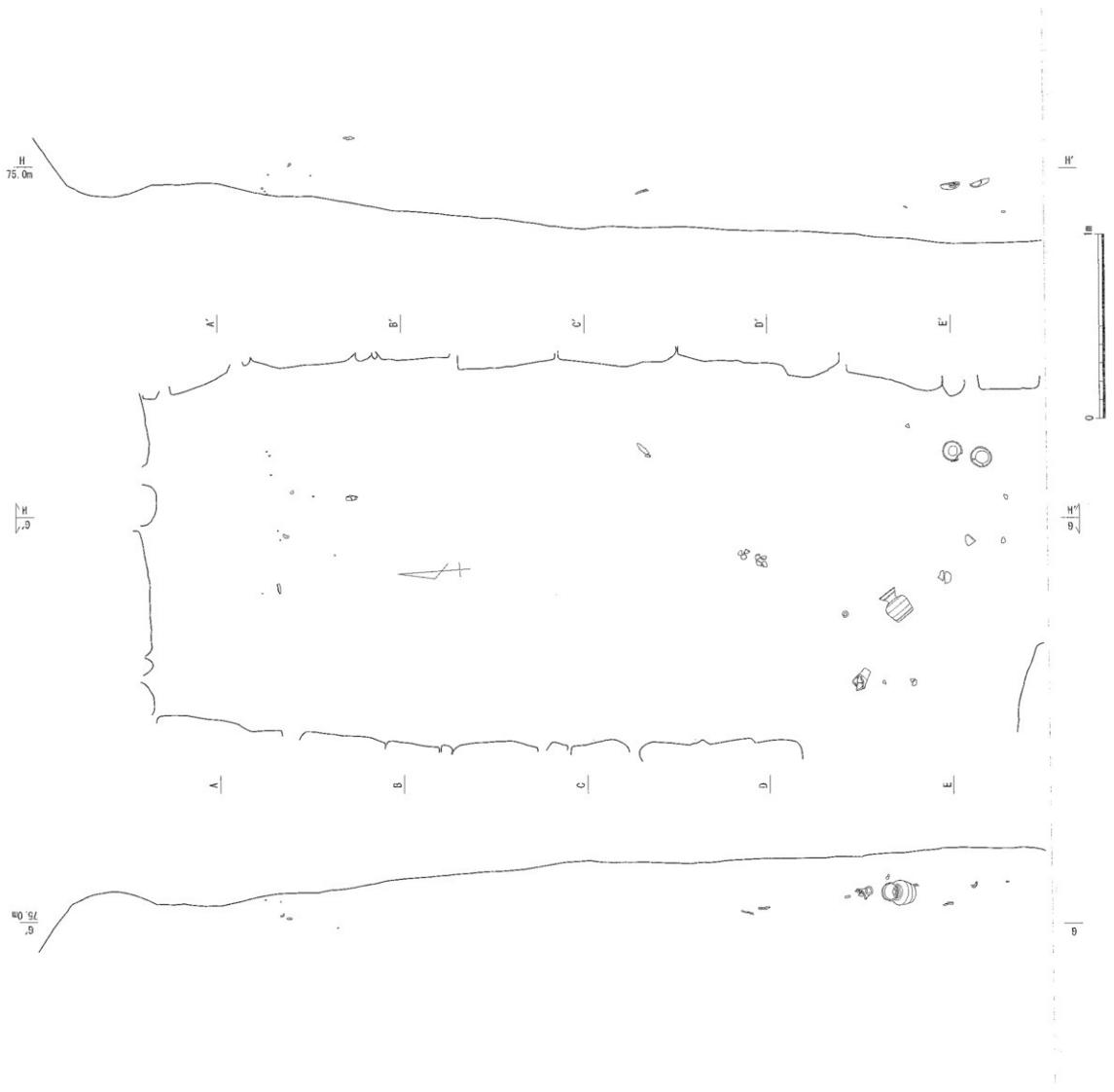
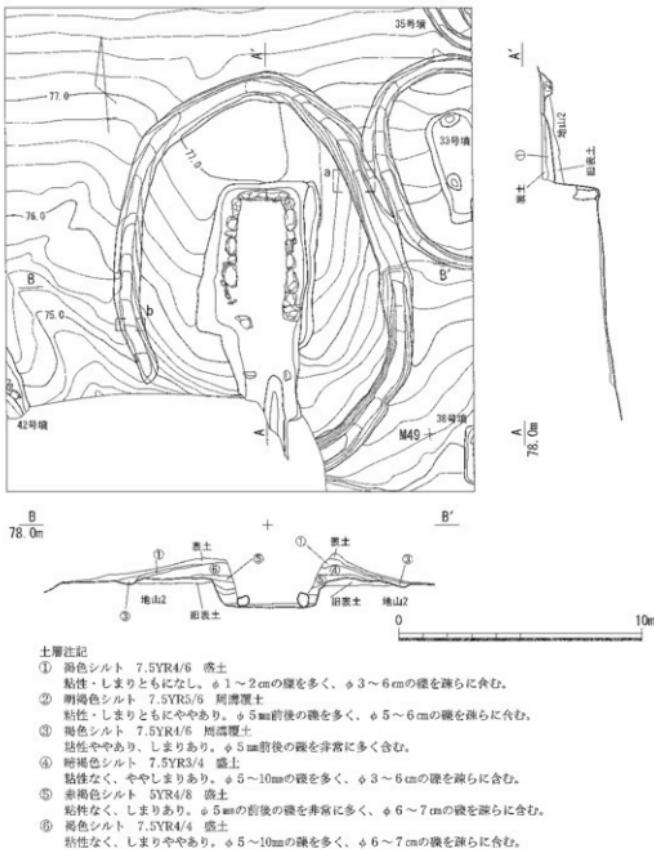


图181 A32号坑石制遗物出土状况图



第178図 A32号墳丘図

周溝は墳丘盛土現状最上層の根部分を切る形で掘削されており、南側を調査区外まで広がる大規模な櫛乱坑に削平されているが、他の大部分は良好に検出されている。また、東接するA33号墳の周溝にA32号墳の周溝北東部が切られ、両古墳の先後関係を明示している。

② 埋葬施設（第179・180・182図、図版73・74）

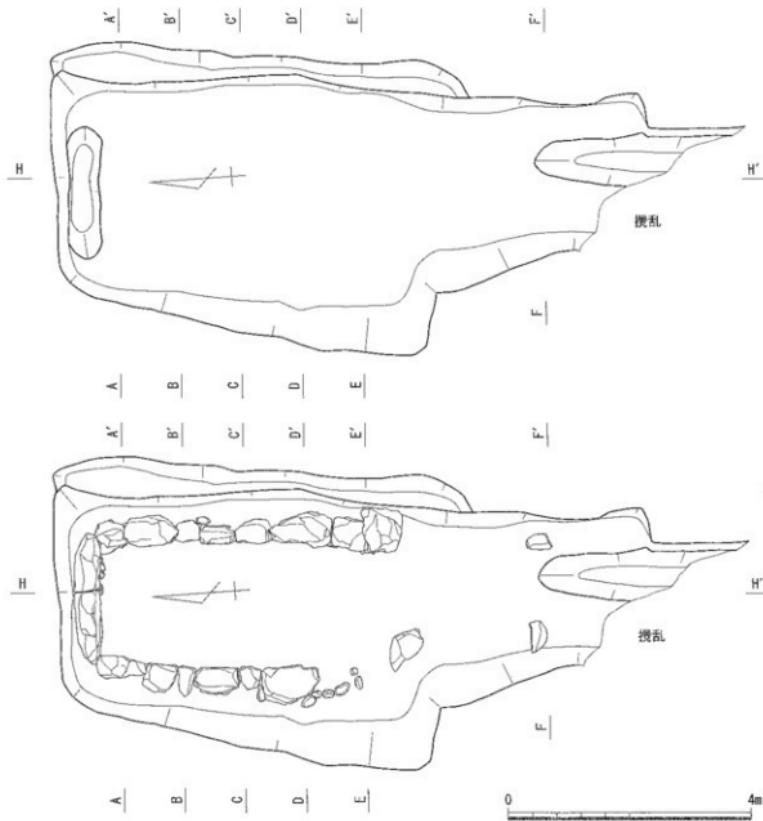
古墳の中央に2区唯一の右片袖式横穴式石室が構築されている。残存状態は悪くはなく、ほぼ真南に向けて開口する。

玄室 中央部に最大幅を有し、奥壁幅が最も狭くなる胴張り形の玄室プランを呈す。奥壁は長軸218cmを測る巨石と言ってよい大型板状角砾1石を長手置きし、鏡石としている。高さ1.11mを測り、石材としては相当良質のチャートであるが、不純物が混交したほぼ中央部分に水の作用による縦の亀裂が生じている。なお、築造当初における鏡石の上の石材積載状況は定かではない。

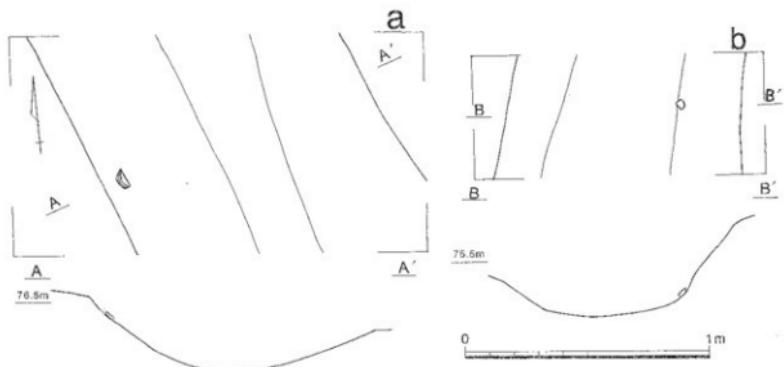
側壁にも大型主体に良質のチャート角礫が用いられ、基本的に長手面を内側に向けて持ち送り積みされている。左側壁は最大3段、高さ0.84m残存し、右側壁は基底1段のみ、最高0.61m残存する。玄室右側壁の先端に柱状の大型角礫を立て据え、右片袖部を構成する立柱石としている。高さ0.86mを測り、後接する右側壁基底石が失われているために正確な数値は得られないが、右側壁より約0.4m突出していたと推定される。換言すれば、右片袖幅の推定値が約0.4mとなる。

羨道 羨門を構成すると目される最前端の基底石一对が残存するに過ぎないが、立柱石の内側面と羨道右側壁最前端の壁面がやや前窄まりの一直線を形成し、立柱石が右片袖式横穴式石室の袖石であることを示している。一方、羨道左側壁のラインは石室全体の主軸に平行している。また、残存する羨道2石は中型の角礫であり、羨道の側壁は玄室よりも小型の石材を積載したことが想定される。

敷石 玄室前半部にφ3~28cmと、ばらつきが大きい円礫が敷設されている。玄室後半部にも敷設されていたと推定されるが、羨道床面には当初より敷石は存在しなかった可能性が高い。



第182図 A32号墳基底石・墓坑実測図



第183図 A32号墳周溝遺物出土状況図

基底石 玄室側壁の基底石のほとんどは大型角礫の長手面を内側に向けて設置されているが、右側壁では2箇所、相対的に小型の角礫を小口置きしており、長さ調整のためと考えられる。両側壁最後端の基底石は小口面を鏡石の内壁面に当接している。これは、大屋敷A古墳群の他の石室の多くが側壁最後端の2石で奥壁を左右から挟み込む形をとっていることと大きく異なる特徴である。羨道の基底石は左側壁が長手置き、右側壁が小口置きされており、左側壁よりも、袖部を有する右側壁が設計段階で細かい調整を必要としたことが窺われる。また、奥壁鏡石および数石の側壁基底石には小型の円礫が支石として用いられている。

墓坑・墓道 墓坑は右片袖形プランを呈し、後壁では旧地表面より1.9m掘り込まれている。墓坑の右片袖状屈曲部の位置は、石室の右片袖部に概ね対応している。前述のように、墓坑左壁上端には長さ6.8mにわたり比高差0.3~0.4mの段が造成されており、墓坑内への石材積み降ろしの便と盛土仕様分別の指標とを兼ねた施設と考えられる。また、奥壁鏡石に対して設置用土坑が掘削されている。墓道は南側の擾乱により大半が失われているが、墓道の構状掘り込みは段門に及ぶ。

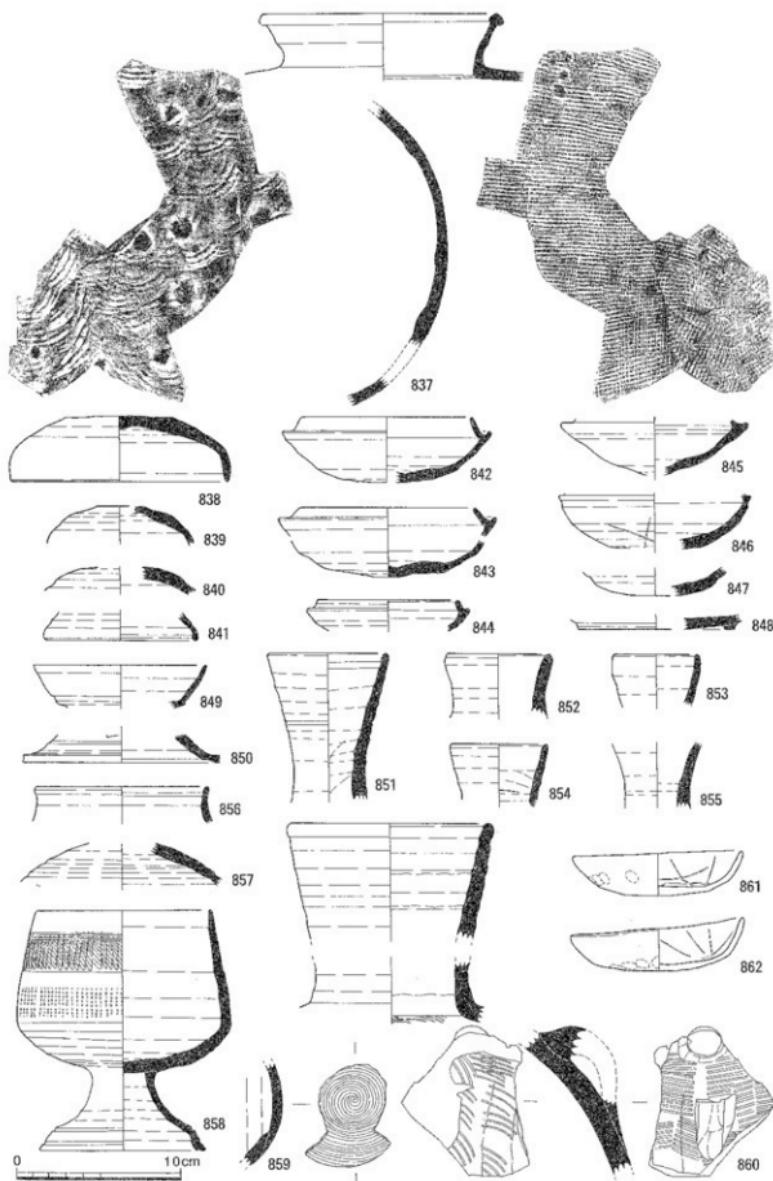
③中世の祭祀跡（図版8）

玄門から玄室前端の敷石が空白となっている範囲の床面に長径約0.7mの焼土面が存在する。焼土面には多量の炭化物が凝固しており、直近にカワラケ2点（861・862）が置かれていたことから、中世に当古墳の石室を再利用した祭祀の痕跡の可能性がある。

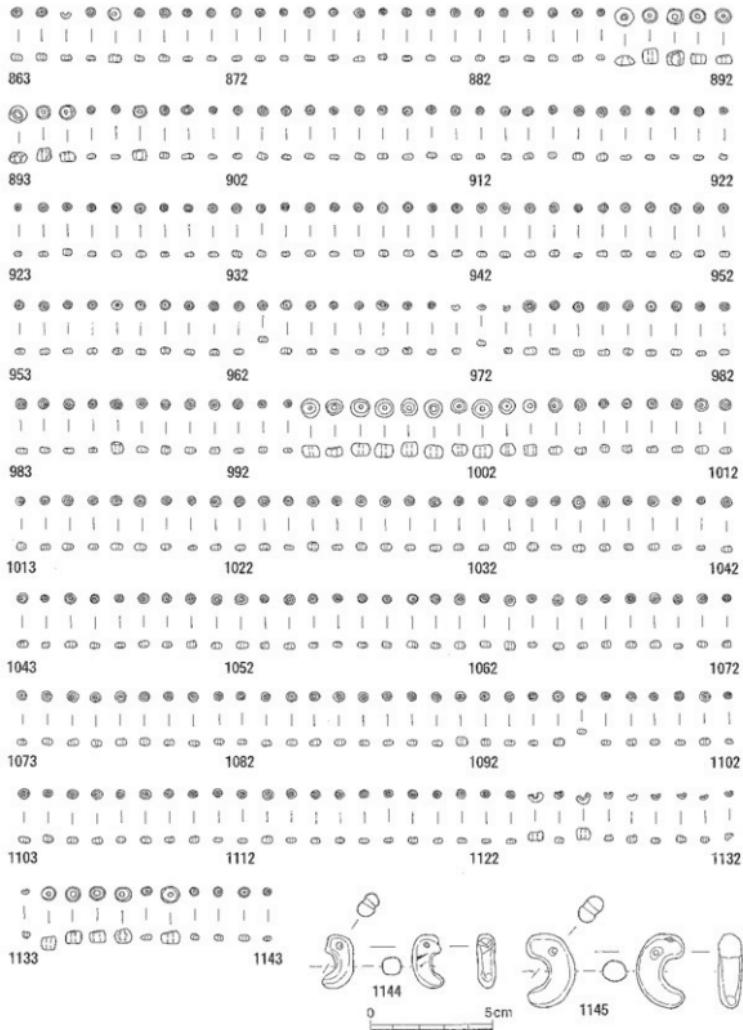
④遺物の出土状況（第181・183図、図版8・73）

石室において多数の遺物が出土したが、石室内は盜掘されており、古墳廃絶時の原位置をとどめるものはほとんど存在しないと考えられる。図化可能なものとして、玄室では須恵器6点（847・849~852・858）、カワラケ2点（861・862）、ガラス小玉または白玉281点（863~1143）、勾玉2点（1144・1145）、鉄製武器片17点（1146~1162）、耳環1点（1164）が出土した。また、奥壁の裏込めより耳環1163が出土し、石室構築過程における特異な祭祀的行為が想定される。羨道では須恵器2点（838・853）が図化可能な遺物として出土している。

墳丘盛土直上より比較的多数の須恵器片（839~846・854~857・859・860）が出土した。盜掘時に石室外へ放り出されたものか、墳丘上で行なわれた祭祀行為を示唆するものかは判然としない。周溝北東部のA33号墳の周溝と切り合う箇所においても須恵器片（837・848）が若干出土しているが、時期的に



第184图 A32号出土土器实测图

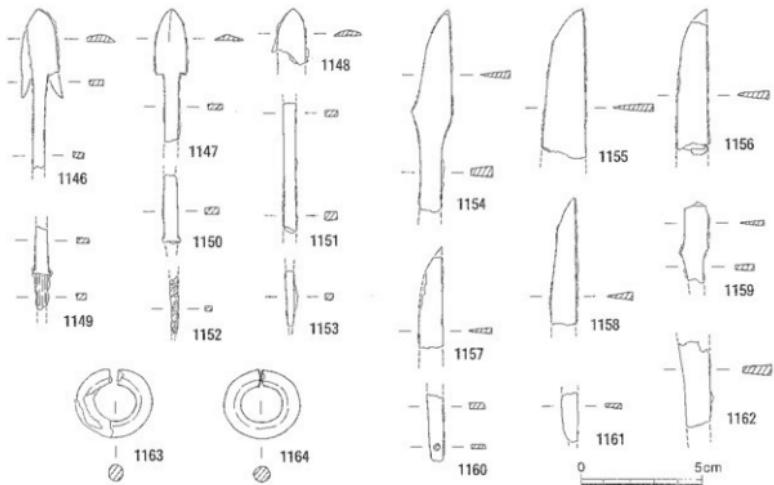


第185図 A32号墳出土玉類実測図

もA33号墳からの混入品と考えられる。周溝南西部でも僅かに須恵器片が出土しているが、図化不能の細片である。

⑤出土遺物（第184～186図、図版11・142・143）

須恵器 横瓶837は頭部が短く、口縁部の作りも簡略であることから遠江IV期末葉～V期初頭に位置付け



第186図 A32号墳出土金属製品実測図

られる。838～841は环蓋である。838は遠江Ⅲ期中葉、839～841は同Ⅳ期前半に比定される。842～848は环身である。842・843・847は遠江Ⅲ期後葉、846は同Ⅲ期末葉、844・845は同Ⅳ期前半、848は同Ⅳ期前半に比定される。また、846は体部外面に十字状範記号を有す。849は無蓋高环の环部、850は長方形透孔を有する高环脚部であり、とともに遠江Ⅲ期後葉に比定される。

851～855は瓶類の口頭部で、854は平瓶の口頭部と考えられる。5点とも遠江Ⅲ期後葉～Ⅳ期のうちの所産と推定される。856は短頸壺の口縁部であるが、壺と呼ぶことも可能であり、遠江Ⅲ期後葉に比定される。脚付壺858は無傷の完形品で、外面には体部上半に櫛描き波状文、同中央に櫛描き列点文を施している。時期は遠江Ⅲ期末葉に比定される。859は提瓶もしくはフラスコ形瓶であり、提瓶であれば器種としての下限は遠江Ⅲ期末葉となる。提瓶860は口縁部が外反しないため、時期は遠江Ⅲ期中葉に收められると考えられるが、把手は両端が体部に接合し、環状を呈すると考えられることから、同Ⅲ期前葉としてもおかしくない可能性がある。

土師質土器 カワラケ861・862は非クロ成形で、内面に暗文状のミガキ痕が認められ、色調は明るい。法量的には中型品に属し、松井一明氏による遠江のカワラケ編年（松井1993）に照合すれば、2点とも13世紀代に比定される。

玉類 ガラス863～1143のうち23点（888～895・995～1003・1124・1134～1137・1139）を直径から白玉に分類し、他は小玉とした。大部分が緑色系統の色調であるが、青緑色39点（863～870・889・892・897・899・900・916～918・947・974・975・977・982・1007・1008・1013・1017・1025・1045・1052・1063・1072・1078・1091・1092・1098・1107・1110・1128・1130・1132・1138）、水色6点（968・1035・1047・1070・1085・1104）、黄緑色2点（1053・1133）、緑色1点（1096）と、多様な色調を呈するものが存在する。勾玉1144は瑪瑙製である。勾玉1145の材質は瑪瑙系統（含水石英）の碧玉と考えられる。

金属製品 1146～1153は鉄鏹である。1146は鎌身を片丸造りした長頸平根脇抉柳葉式で、1147は鎌身片鏹造りの長頸尖根長三角形式である。1148は片丸造りの鎌身先端のみ残存し、尖根柳葉式と推定される。1149の茎には柄の木質が付着残存し、茎片1152には巻き付けられた樹皮が接着遺存している。

1154・1156～1159・1161・1162は刀子である。いずれも平造りであるが、1154と1159の身部は研ぎ減りが著しい。1155は小刀の先端部片であり、刀身は平造りされている。1160は刀子の茎とも考えられるが、基部近くに目釘孔状の穿孔が1箇所存在し、刀子とは断定できない。

耳環1163・1164は銅芯銀胴張で、大きさもほぼ等しいことから被葬者1体に伴う一対の装身具と通常は考えられるところであるが、1163は奥壁裏込め、1164は石室内より出土し、A32号墳に伴う経緯が全く異なることが想定され、それぞれ別の人物に属していた可能性が高い。

⑥小結

A32号墳は出土遺物より遠江Ⅲ期中葉に築造され、同IV期前半まで追葬が継続したと判断されるが、須恵器提瓶860の所属時期の捉え方によっては同Ⅲ期前葉にまで築造時期が遅るとは言えないまでも、同Ⅲ期中葉のうちでも古い要素を内包する可能性は捨象できない。いずれにせよ興覚寺後古墳の築造後、比較的短期間のうちに大屋敷A古墳群最古のA32号墳が築造されたと理解できる。また、巨大で良質な石材を用いた大型の右片袖式横穴式石室も、当古墳群において最高レベルの階層性を示すものである。

玄門における火を用いた祭祀の痕跡は、少なくとも13世紀まではA32号墳の墳丘および横穴式石室が地上で威容を誇っていたことを示唆していると考えられる。当時すでに「遺跡」であったA32号墳が大昔の墓と認識されていたかは定かではないが、何らかの聖域であるという伝承は中世前期において存在した蓋然性が高い。

⑩ A33号墳

①墳丘・周溝（第187図、図版75）

A32号墳とA34号墳との間に位置し、周溝は西側でA32号墳の周溝北東部を切っており、両者の先後関係は明確である。周溝は完周状態で検出され、周溝により囲まれる範囲は東西5.8m、南北7.7mを測り、南北に長い楕円形プランの円墳を呈す。墳丘盛土は古墳の東部および西部で良好に遺存し、残存高は最大0.34mを測る。西側では墳丘盛土の裾を切る形で周溝が掘削されている状況が看取される。

②埋葬施設（第188図）

古墳の中央に横穴式石室が構築されていた。墳丘・周溝の遺存状況とは対照的に残存状態は劣悪で、石室を構成した石材は全て失われている。石室形態を知る僅かな手掛かりは墓坑に残されており、想像を逞しくすれば單室系擬似両袖式横穴式石室の可能性が考えられる。

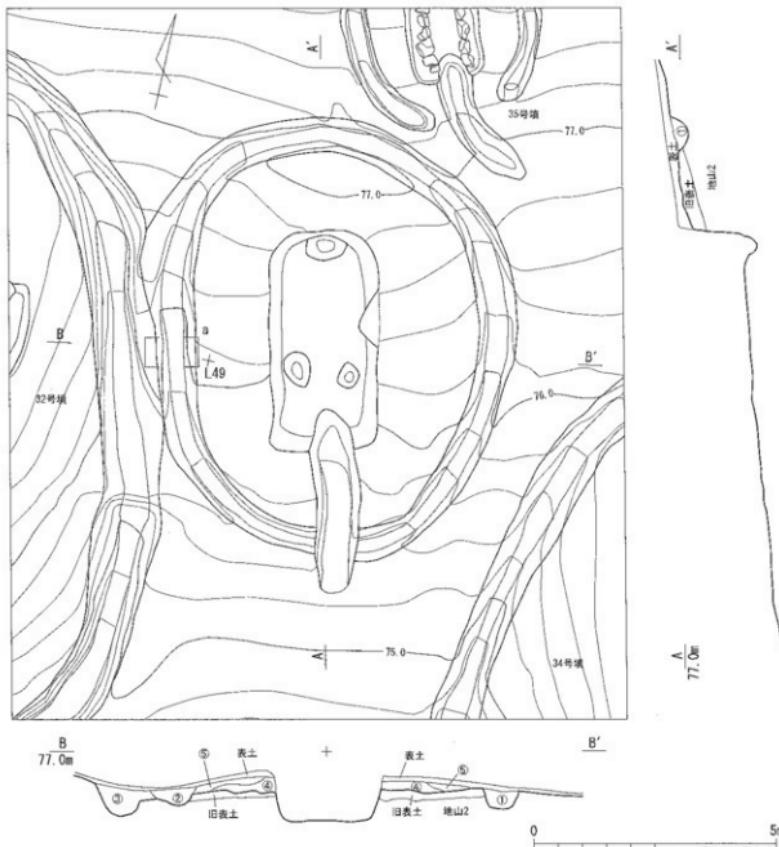
墓坑・墓道 墓坑は隅丸長方形プランを呈し、後壁では旧地表より1.03m掘り込まれている。後壁沿い中央部には奥壁基底石の設置用小土坑が掘削されており、前半部には玄室と狭道を画したと想定される立柱石の設置用小土坑が墓坑主軸を挟んで相対する。大屋敷A古墳群中の他の古墳の状況を鑑みれば、ほぼ真南に向かって開口する單室系擬似両袖式横穴式石室が構築されていた可能性がある。墓道の溝状掘り込みの北端は墓坑内に食い込んでおり、東へ弯曲する弧線を描きつつ、2区南東部の浅谷に向かつて伸びている。

③遺物の出土状況（第188・190図）

擾乱された石室内より須恵器が小片状態で出土し、5点（1165～1169）を図化することができた。右立柱石の設置用小土坑からも須恵器小片が出土し、石材さえも掠奪する大掛かりな盗掘の際に落ち込んだものと考えられる。また、石室内より黒曜石の細片が出土しており、縄文時代包含層でもある旧表土由来の遺物と目される。周溝西部のA32号墳と切り合う箇所においても須恵器片（1171）が出土し、周溝直近の外側からも須恵器片（1170）が確認された。

④出土遺物（第189図、図版143）

須恵器 坟身1165は遠江Ⅴ期初頭に比定される。1166も底部に高台が付く形式と推定され、遠江IV期末



第187図 A33号墳墳丘図
 土層記
 ① 極色シルト 7.5YR4/6 周溝覆土
 粘性やや弱く、しまりなし。φ 1~5 cmの礫を少し含む。
 ② にぶい赤褐色シルト 5YR4/4 周溝覆土
 粘性ややあり、しまりなし。φ 1 cm前後の礫を少し含む。
 ③ にぶい赤褐色シルト 5YR4/4 32号周溝覆土
 粘性ややあり、しまりなし。φ 7~15cmの礫を多く含む。

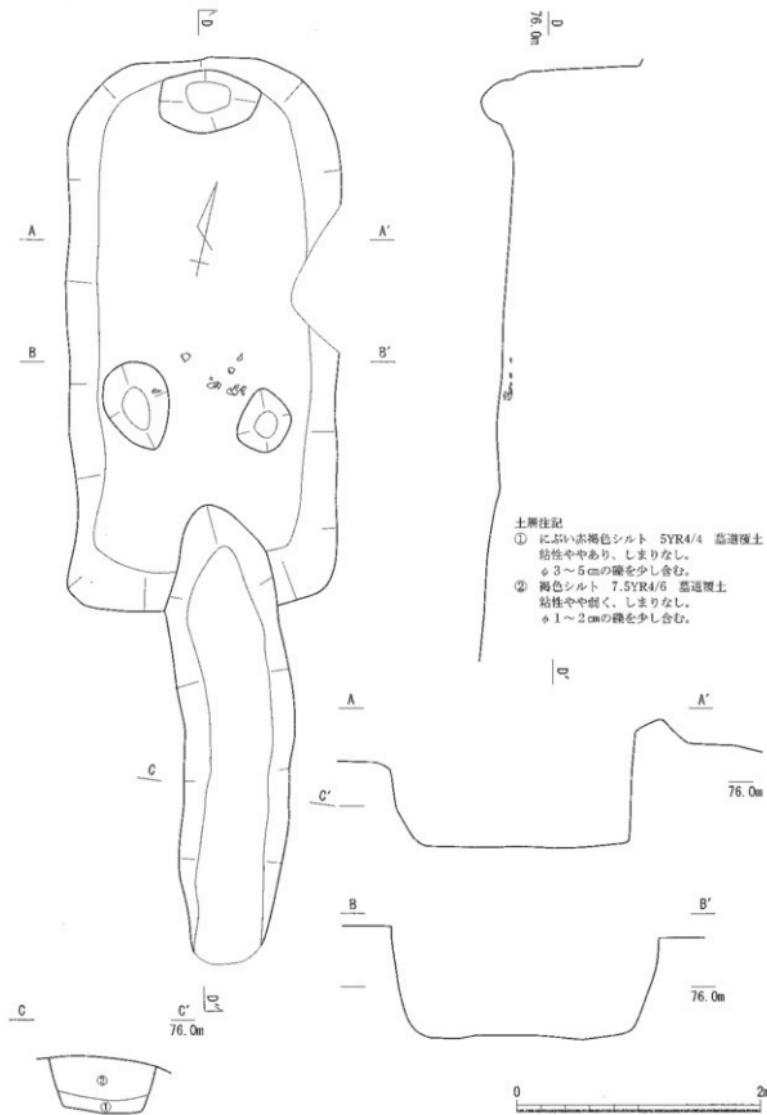
④ 極色シルト 7.5YR4/6 滲土
 粘性やや弱く、しまりややあり。φ 1~5 cmの礫を少し含む。
 ⑤ 明褐色シルト 7.5YR5/8 盛土
 粘性弱く、しまりややあり。φ 2~3 cmの礫を多く含む。

第187図 A33号墳墳丘図

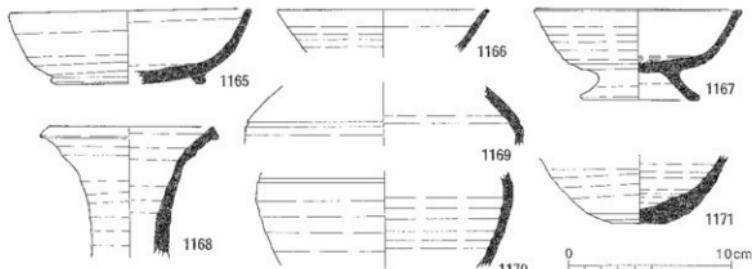
葉～V期初頭の所産と考えられる。1167は脚台坏であり、遠江IV期末葉に比定される。長頸壺の口頭部1168も遠江IV期末葉に比定される。長頸壺体部上半1169は肩部に沈線を1条施し、遠江IV期末葉の所産と考えられる。

⑤小結

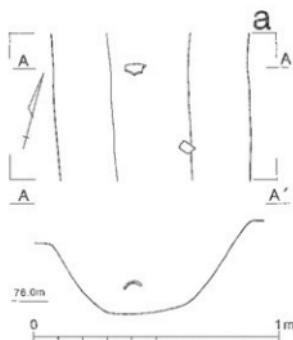
A33号墳は出土遺物より遠江IV期末葉に築造され、同V期初頭に追葬が行なわれたと判断される。構築が推定される単室系擬似両袖式横穴式石室は、同石室形態としては大屋敷A古墳群において中程度よ



第188図 A33号填墓坑実測図・遺物出土状況図



第189図 A33号墳出土遺物実測図



第190図 A33号墳周溝遺物出土状況図

りやや小規模であり、墳丘の規模もA32・A34号墳の狭間で空間的制約を受けたことを斟酌しても、やはり中程度以下である。よって、A33号墳の階層性は当古墳群においてどちらかと言えば劣位に位置付けられるが、階層性が群中最高峰レベルであるA32号墳の周溝を切っている。A33号墳はA32号墳における最後の追葬から数世代後に築造されており、この墳にはA32号墳は大屋敷A古墳群の造墓集団内における政治的・靈的権威を喪失し、文字どおり遺跡と化したために、周溝外側上端の僅かな部分とは言え、階層性が数段劣るA33号墳による損壊を許してしまったと考えられる。

一方、A33号墳の側から見れば、一見立地条件は不利なようであるが、墳丘規模を制約され隣接する古墳を損壊してまでも占地する価値のある場所であったと解釈できる。このことは第4章第1節で述べる支群・単位群の形成と関連する。

(II) A34号墳

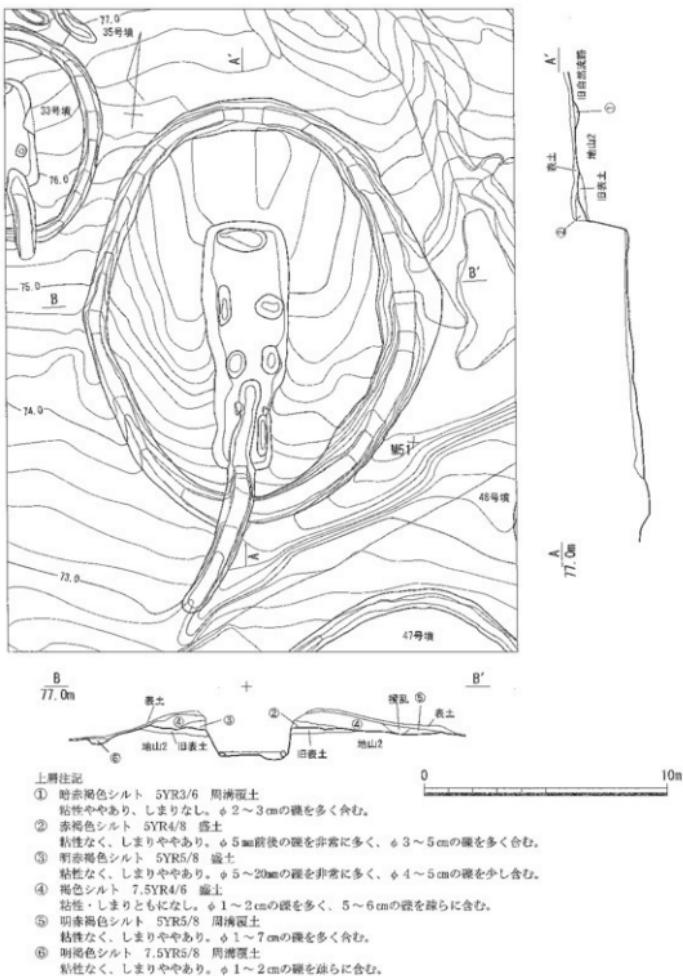
① 墳丘・周溝（第191図、図版75）

2区南東端に位置し、旧河岸段丘の縁辺沿いに立地する。墳丘盛土は良好に残存し、古墳中央部付近で残存高最大0.75mを測る。盛土最下層は墳丘の北西部約1/4（第191図③層）と残り約3/4（同②層）とでは異なる土を使用し、2層目は墳丘全体に均質な土（同④層）で盛土されている。周溝は東側の一部が擾乱を受けて見かけの幅が広がっているが、完層状態で検出された。周溝により囲まれる範囲は東西11.2m、南北15mを測り、南北に長い脊円形プランの円墳を呈す。

② 埋葬施設（第192～194図、図版76）

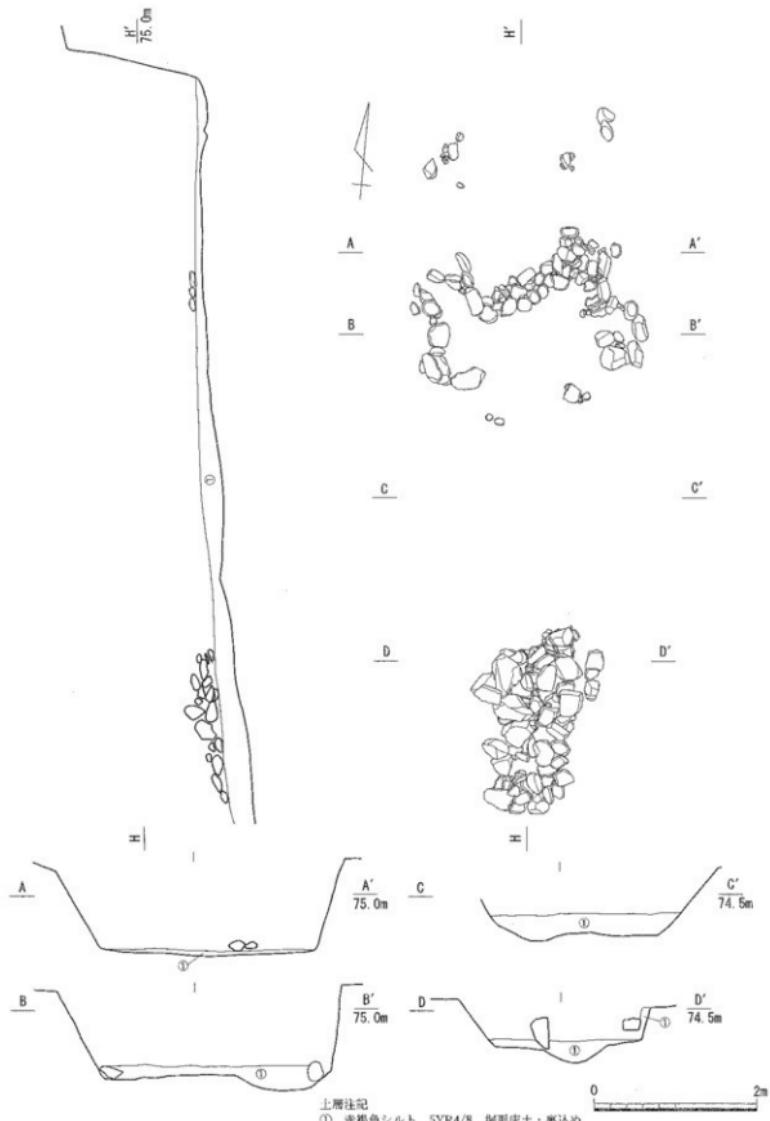
古墳のほぼ中央に横穴式石室が構築されていた。A33号墳同様に、墳丘・周溝の良好な遺存状態とは対照的に構築石材のほとんどが失われている。残存する墓坑の状況から、複室系擬似両袖式横穴式石室であった可能性を指摘し得る。以下のA34号墳の石室部位・施設に関する記載は複室系擬似両袖式横穴式石室であるという仮定に立脚した想定であることをお断りしておく。なお、石室の開口方向はほぼ真南である。

敷石 玄室前半部に平均φ15cm前後の扁平な円礫を用いた敷石が残存する。本来の敷設状況は不明と言わざるを得ない。

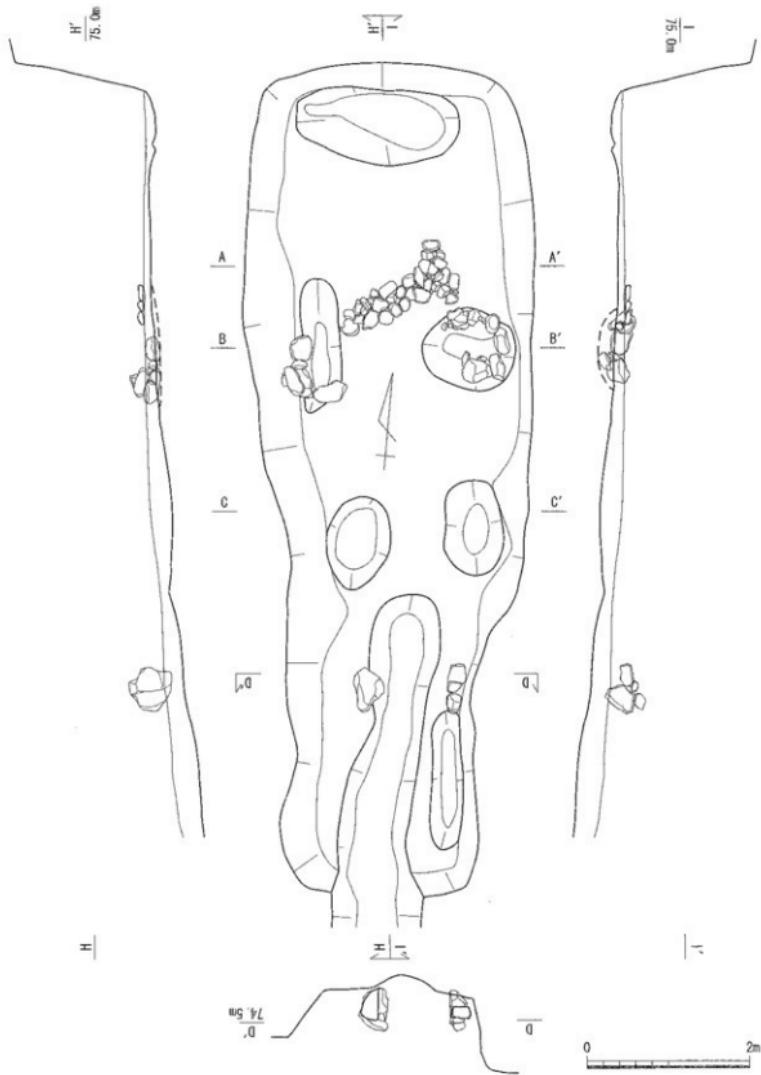


第191図 A34号墳墳丘図

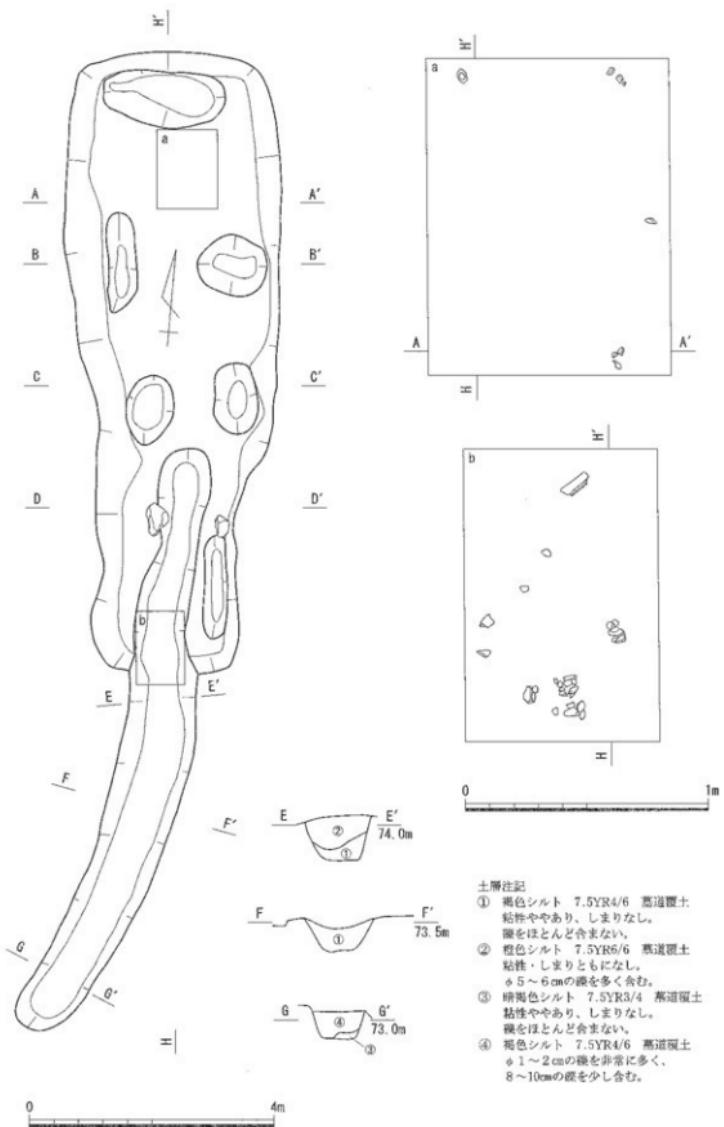
基底石 前庭左側壁に2石、同右側壁に1石残存し、当古墳石室構造材はこれら3石を残すのみである。前庭左側壁前2石目の基底石は中型角礫の長手面を内側に向けて設置されている。前庭左側壁最前端の基底石は長軸を立てて設置されており、立柱石と考えられ、高さ0.31mを測る。また、前庭左側壁2石の上には間隙充填用と考えられる小型角礫が残存する。前庭右側壁の基底石は大型角礫を使用しているが、最小面を下に向け、逆錐状に据えられている。高さは0.43mを測り、幅に対して高さはないものの、やはり立柱石と見做し得る。よって、前庭の入口には左右立柱石が門柱状に立て据えられていたことが



第192図 A34号坑石室検出状況図

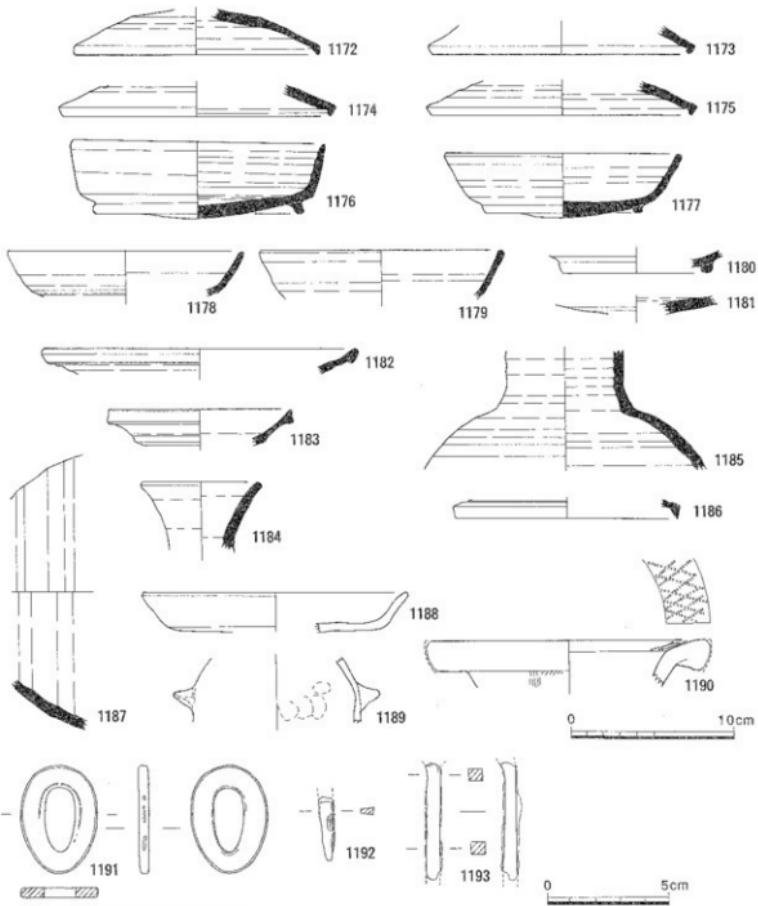


第193图 A34号填石室实测图



- 土層記述
- ① 黄褐色シルト 7.5YR4/6 厚道覆土
粘性ややあり、しまりなし。
礫をほとんど含まない。
 - ② 棕色シルト 7.5YR6/6 厚道覆土
粘性・しまりともになし。
φ 5 ~ 6 cmの礫を多く含む。
 - ③ 暗褐色シルト 7.5YR3/4 厚道覆土
粘性ややあり、しまりなし。
礫をほとんど含まない。
 - ④ 黄褐色シルト 7.5YR4/6 厚道覆土
φ 1 ~ 2 cmの礫を非常に多く、
8 ~ 10cmの礫を少し含む。

第194図 A34号墳墓坑実測図・遺物出土状況図



第195図 A34号墳出土遺物実測図

分かり、前庭は入口に最大幅を有す。

墓坑・墓道 全長10mを超える長大な羽子板形プランの墓坑が、後壁で旧地表より1.64m掘り込まれて施設されている。奥壁・玄門立柱石・羨門立柱石の、少なくとも5石に対して設置用の小土坑が掘削されており、うち玄門立柱石の小土坑には中・小型の円礫・角礫が環状に設置され、立柱石の支石と考えられる。これらの小土坑および前庭入口立柱石間の距離から石室各部位のおおよその寸法を窺い知ることができる。すなわち、玄室長は2.3m前後、羨道長は2.5m前後、前庭長は2.2m前後を測り、全長7m前後となる。前庭左立柱石の前方にも南北に長細い土坑が掘削されているが、A 6号墳の前庭列石のような施設の設置用小土坑であったのか否かは不明である。また、墓道は墓坑内の溝状掘り込みから墓坑

主軸に対してすでに西偏し、旧河岸段丘面から1段降りることもなく弧線を描きながら、南南西の浅谷に向かって伸延する。

③遺物の出土状況（第194図）

石室石材の残存状況から類推すれば、追葬終了時の原位置を保持する遺物は皆無と言ってよいと考えられる。玄室後部では須恵器片、土師器片（1189）、金銅製刀装具（1191）、鉄製品（1192・1193）が出土した。談道では須恵器1点（1184）、土師器1点（1188）に加えて混入品の弥生土器1点（1190）が確認された。埋葬施設で最も多くの遺物が出土したのは墓道の墓坑に取り付く箇所であり、図化し得た遺物は須恵器13点（1172～1183・1186）を数える。

埋葬施設以外では、周溝の外側直近において須恵器1点（1185）が出土している。また、墳丘盛土中より須恵器片（1187）が出土した。

④出土遺物（第195図、図版12・143）

須恵器 坯蓋1172～1175は遠江V期初頭に比定される。1176～1181は坏身であり、1176・1178・1179は遠江V期初頭、1177・1180は同V期前半に比定され、1181は時期不詳である。瓶類口縁部1182は遠江V期の所産か。瓶類1185は無蓋台付長頸壺であれば、遠江IV期末葉～V期初頭の範囲に認められる。フラスコ形瓶1187は、器種としての年代的下限は遠江IV期末葉となる。

土師器 盆1188は内外面を赤彩し、遠江IV期末葉に併行する。1189は手捏ね成形のミニチュア瓶であり、内外面の摩滅が著しい。

弥生土器 1190は装饰口縁壺の口縁部であり、口縁端部を下方へ折り曲げて肥厚させ、折り曲げ部分の外面に指頭圧痕が顯著に残存する。摩耗が烈しく、口縁端面の施文等は不明であるが、口縁部内面には櫛引き列点による斜格子文が施されている。菊川式古段階、すなわち弥生時代後期前葉の所産と考えられ、天竜川以東より搬入された可能性がある。

金属製品 1191は金銅製の切羽である。第195図において、側面図を挟んで左側平面図が刀の刃側、右側平面図が柄側と目される。刃側は内周縁より約2mmの距離を置いて約2/3周分、金鍍金が剥げており、鞘口の当接痕と推定される。柄側は内周縁より約1mmの距離を置いて約1/3周分、金鍍金が剥げており、鍔の当接痕と考えられる。外側面の金鍍金は僅かに残存し、銅地が剥き出しになっている。また、内側面には木質が付着残存する。

1192は刀子の茎片であり、柄の木質が付着残存している。

1193は鉄釘である。断面は方形を呈し、先端と頭部は失われている。玄室に木棺が納められていたことを示す遺物である。

⑤小結

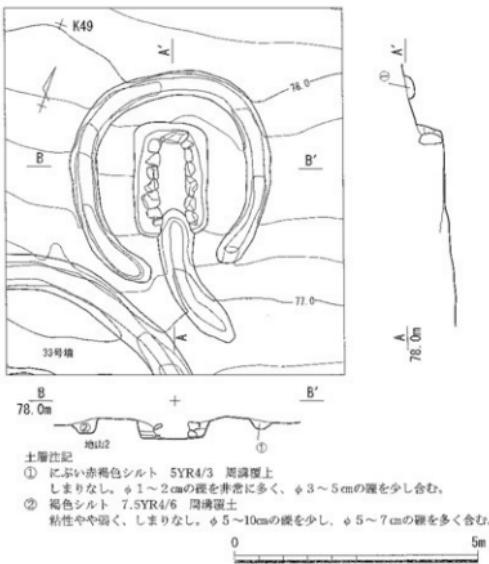
A34号墳は出土遺物より遠江IV期末葉に築造され、同V期前半まで追葬が行なわれたと判断される。A33号墳とほぼ同時期の築造となるが、A33号墳がA32号墳を損壊してもA34号墳の領域を侵すことには避けたような位置関係や古墳の規模を勘案すれば、A34号墳がA33号墳に若干先行すると考えられる。

6石の立柱石により3箇所の門構えを有する複室系擬似両袖式横穴式石室は、大屋敷A古墳群において遠江IV期以降に築造された石室に限れば群中最大規模であり、金銅製装飾の刀を副葬した点と併せて、その階層性は最高レベルに位置付けられる。

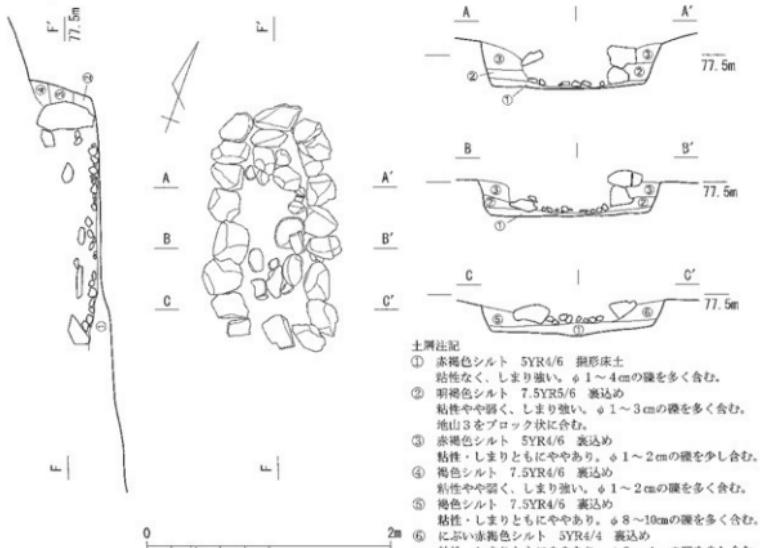
12 A35号墳

①墳丘・周溝（第196図、図版77）

A33号墳に北接する矮小な円墳である。墳丘盛土は遺存していない。周溝は南側を除いて完周に近い状態で検出された。周溝に囲まれる範囲は東西3.1m、南北3.5mを測り、概ね円形プランを呈す。



第196図 A35号墳填丘図



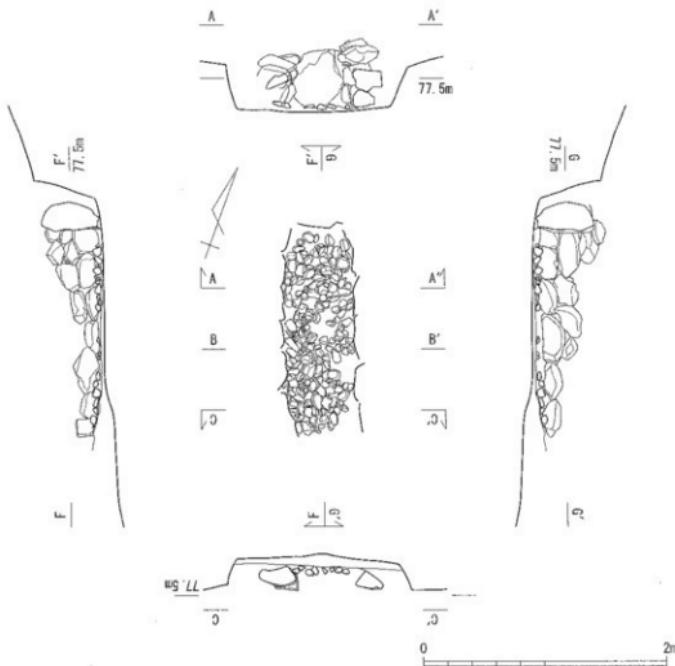
第197図 A35号墳石室検出状況図

②埋葬施設（第197~199図、図版77・78）

古墳の中央に南東に向けて開口する無袖式横穴式石室が構築されている。残存状態は比較的良好である。

玄室 玄門から玄室後部まで幅が一定し、奥壁幅のみ狭くなる奥窄まり形の玄室プランを呈す。石室の主軸に対し、左右両側壁は同程度に東へ振れた弧線を描き、玄室プラン全体がバナナ状に左へ彎曲している。

奥壁は大型の板状角砾を立て据えて鏡石とし、現高0.51mを測る。鏡石上方の本来の石材積載状況は不明であるが、左側壁の残存高は鏡石よりも高いため、少なくとも小型疊1段分の積載は想定される。



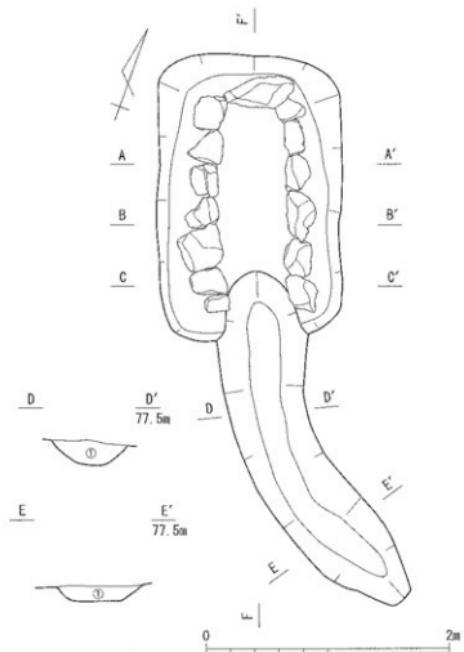
第198図 A35号墳石室実測図

両側壁は中型の角礫主体に長手面を石室内側に向けて積載されており、石材の大きさについては左右の側壁で差異は看取されないが、左側壁が右側壁よりも長手面が長くなる礫を使用している。左側壁は最大4段、高さ0.59m残存し、右側壁は最大3段、高さ0.46m残存する。残存する部分を見る限りでは、左右ともに側壁の目地通りが認められ、一応水平を志向していると見做し得る。また、両側壁の持ち込み積みは3段目から始まっている。

敷石 玄室床面のほぼ全面にφ10cm以下の円礫から成る敷石が敷設されている。敷石の下端レベルは奥壁・側壁の基底石のそれよりも低く、A 8号墳のように敷石の上から石室各壁を構築したわけではないものの、A 35号墳においては敷石の敷設が石室壁構築に先行した蓋然性が高い。

基底石 左右両側壁の最後端の基底石が奥壁鏡石を左右から挟み込み、前方への字状に開く形で設置されている。左側壁の基底石は中型角礫の長手面を内側に向ける置き方に統一されているが、右側壁では小口置きされる基底石もあり、石材の大きさは左側壁におけるよりもばらつきが顕著である。これは、左側壁の設計が右側壁に優先したことを示唆している。

墓坑・墓道 長方形プランの墓坑が地山を0.5m以上掘り込んで施設されている。墓道は玄門より若干奥まで溝状の掘り込みを食い込ませ、玄室のバナナ形彎曲から連続して東へ向かうカーブを描き、A 34号墳の後方へ伸延する様相を呈す。ところで、墓道の溝状掘り込みの北端部は玄室床面の敷石の直下に掘



土層性状

① にぶい赤褐色シルト 5YR4/3 菓透覆土
粘性土やあり、しまりなし。φ 1~2 cmの礫を少し、φ 5~10 cmの礫を多く含む。

第199図 A35号墳基底石実測図

(13) A36号墳

① 墳丘・周溝

A34号墳の周溝北東部より約6 m東に位置する。墳丘盛土は遺存しておらず、古墳の西側を北西から南東へ走る自然流路に削平されている。周溝も全く検出されなかった。

② 墓葬施設（第200・201図、図版78・79）

A36号墳では埋葬施設のみ確認されているが、それさえも西側の自然流路に大きく破壊されている。無袖式横穴式石室が構築されており、真南よりも若干南南東に向けて開口する。

玄室 中央部に最大幅を有し、奥壁幅もしくは開口部の玄門側幅が最小となる胴張り形の玄室プランを呈す。玄室後部の西から2石を奥壁の石材と考えたが、西から2石目のみを奥壁とするほうが胴張り形プランとして均整がとれているように見える。いずれにせよ、大振りの板状砾を鏡石として使用しない石室である。現状の奥壁は基底石のみ残存し、高さ0.22mを測る。

側壁は左側壁のみ残存し、小型の円砾および角砾を小口積みしている。最大2段、高さ0.32m残存する。現状では、持ち送り積みの様相は不明瞭である。

削されていることになるが、敷石の敷設に先立って墓坑・墓道が施設され、玄室プランを設計する際に溝状掘り込みの北端部分を埋め戻し、あらためて墓底面を整えてから敷石の敷設に着手したという経緯の想定で説明可能と考えられる。

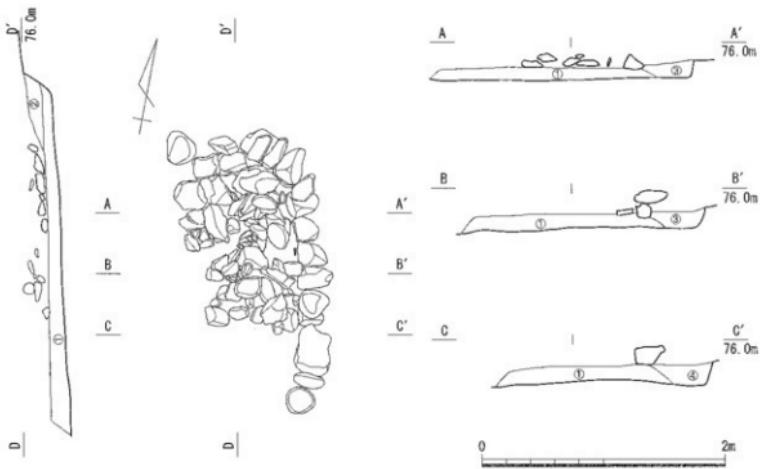
③ 出土遺物

遺物は出土していない。

④ 小結

出土遺物が皆無のため、A35号墳の築造時期は不明であるが、周溝および墓道がA33号墳の周溝を避ける形で掘削されている状況からA33号墳に後出すると考えられ、遠江IV期末葉以降に築造された可能性が高い。

部位ごとに見れば、石室の構築は必然としているようであるが、全体としてプランは弯曲し、しかも一旦掘削した墓道の溝状掘り込みを一部埋め戻して床面を造り直すなど、計画性に欠ける設計と評し得る。また、初葬が成人の伸展葬であったとすれば、石室の規模から追葬は不可能であり、単次埋葬であった可能性も捨象できない。



土質注記

- ① にぶい赤褐色シルト 5YR4/4 堀形床土
しまりややあり。φ 3~4cmの礫を多く含む。
- ② にぶい赤褐色シルト 5YR4/4 裏込め
粘性やや弱く、しまりややあり。φ 1~2cmおよびφ 7~12cmの礫を多く含む。
- ③ 褐色シルト 7.5YR4/6 裏込め
粘性やや弱く、しまり強い。φ 1~2cmの礫を多く含む。
- ④ 褐色シルト 7.5YR4/6 裏込め
粘性・しまりともにややあり。φ 1~2cmおよびφ 5cm前後の礫を少し含む。

第200図 A36号墳石室検出状況図

敷石 玄室後部に敷石が残存する。小型の板状角礫主体に敷設されており、平面的な法量は石室壁材のそれに匹敵する。これら大振りの敷石の左側周縁にはφ 20cm未満の小型円礫を敷設しており、左側壁の胴張り形ラインに沿うように敷石が隙間なく敷設されたための調整作業と考えられる。

基底石 残存する基底石のうち、東壁の西から2石目が最小となっている。その左側から奥壁を挟み込む左側壁最後端の1石には玄門より後3石目とともに当石室最大の角礫を用い、長手面を内側に向けて設置されている。他の基底石は小型～中型の円礫および角礫を小口置き、平手置き、長手置きし、石材選定と置き方の双方に統一性がない。

墓坑 幅の広い長方形プランの墓坑が、後壁で地山を0.23m以上掘り込んで施設されている。墓坑の掘形床面に厚く床土を込め、墓坑左壁沿いは基底石を設置する段階で裏込めとして床土が込められている。なお、墓道は確認されていない。

③ 遺物の出土状況

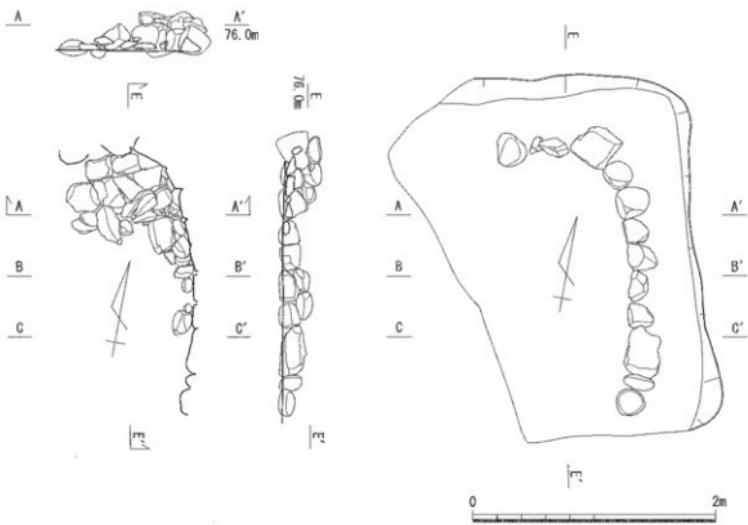
石室内で須恵器片が若干出土しているが、図化に耐え得るものはない。当古墳の墳丘跡地と思しき地点からも須恵器片(1194)が出土した。

④ 出土遺物(第202図)

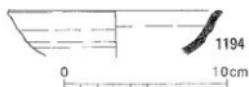
須恵器 1194は無蓋高杯の杯部であり、僅かに外反する口縁端部の形状から、遠江V期初頭の所産と考えられる。

⑤ 小結

僅かな出土遺物より、A36号墳の築造時期は遠江V期初頭と判断される。大屋敷A古墳群中の他の無



第201図 A36号墳石室・基底石実測図



第202図 A36号墳出土遺物実測図

袖式横穴式石室と較べても、奥壁における鏡石の不採用や統一性のない石材の使用と置き方などの要素は、やはりA36号墳の階層性の低さを示していると言わざるを得ない。2区南東部の浅谷に墓道・参道が収斂していく一群の古墳の中では最も外側に位置するという事実も、これを支持する要素と考えられる。

(1) A37号墳

①墳丘・周溝（第203図、図版79）

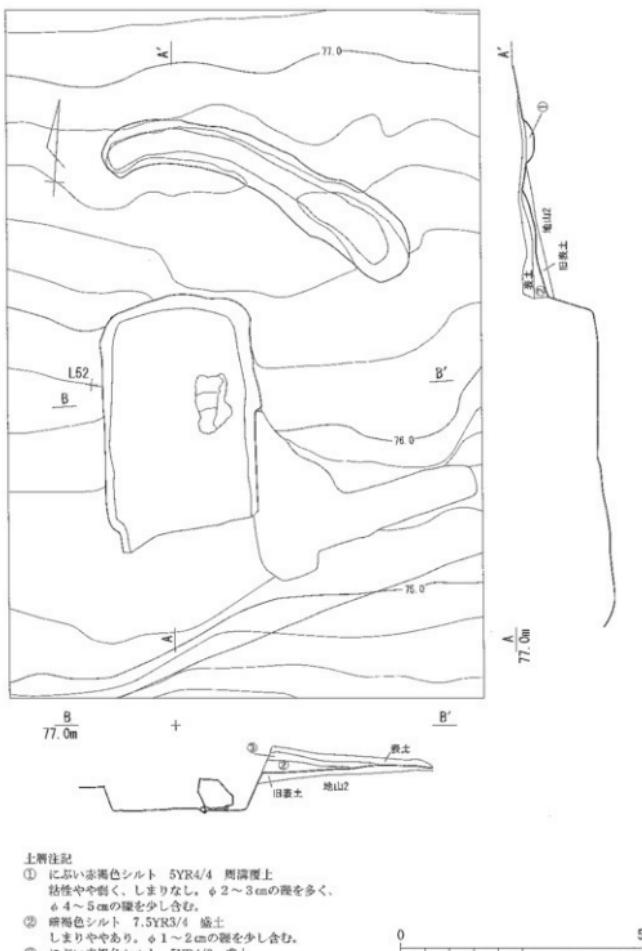
旧河岸段丘面の縁辺沿いに立地し、A36号墳と3区A51号墳との間に位置する。墳丘盛土は古墳の東および北側において遺存し、東側の残存高は最大0.4mを測るが、南および西側は流失している。周溝は北部から北東部にかけて約1/6周分検出された。本来の墳丘プランは不明であるが、南北は少なくとも7.5m以上を測ったと目される。

②埋葬施設（第205～206図、図版79・80）

古墳の中央と考えられる場所に横穴式石室が構築されているが、残存状態は劣悪で、石室形態は不明である。ほぼ真南に向かって開口し、全長は2.8m前後と推定される。

基底石 長軸120cm、短軸71cmを測る巨石とも称せられる大型柱状角礫1石が左側壁のほぼ中央に長手置きされており、当石室に唯一残存する構造材となっている。裏込めは流失しているが、原位置から動かされておらず、高さ0.65mを測る。

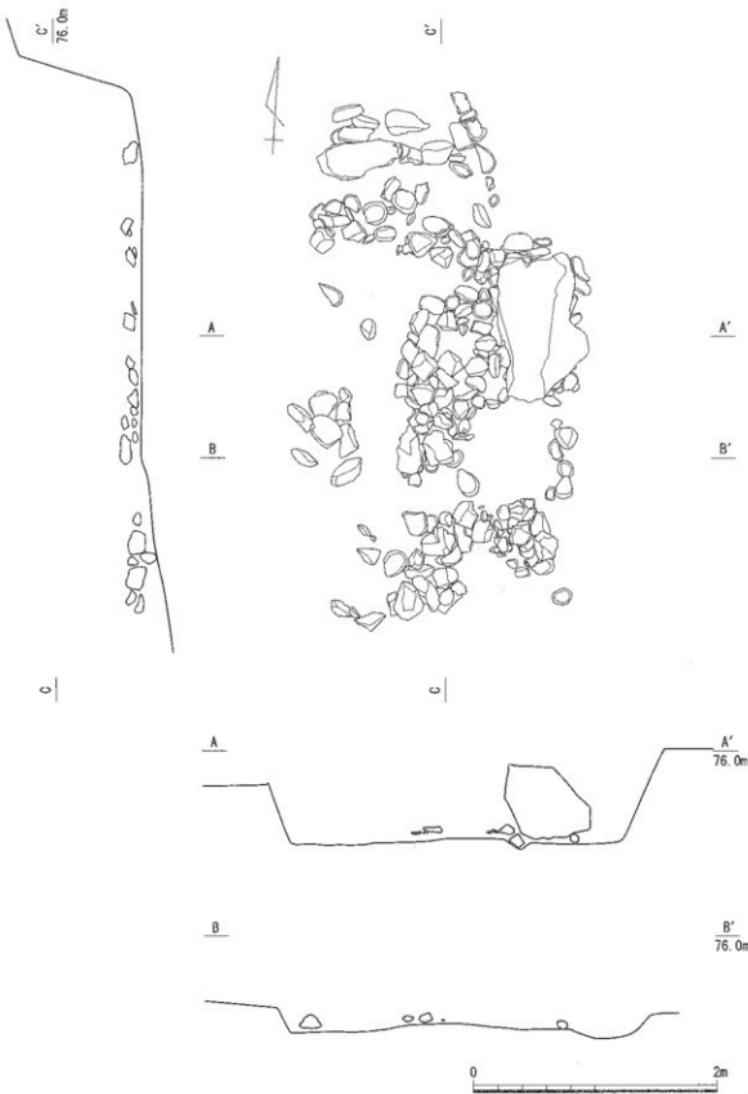
上記左側壁の基底石を含めて少なくとも4石の基底石に対して支石が配置されている。支石は小型から大型の角礫および円礫から成り、残存する左側壁基底石に対応する一群は、当基底石の下端ラインに重なるように長方形に組まれている。他の3群も基底石1石に対応する支石であるとすれば、当石室の



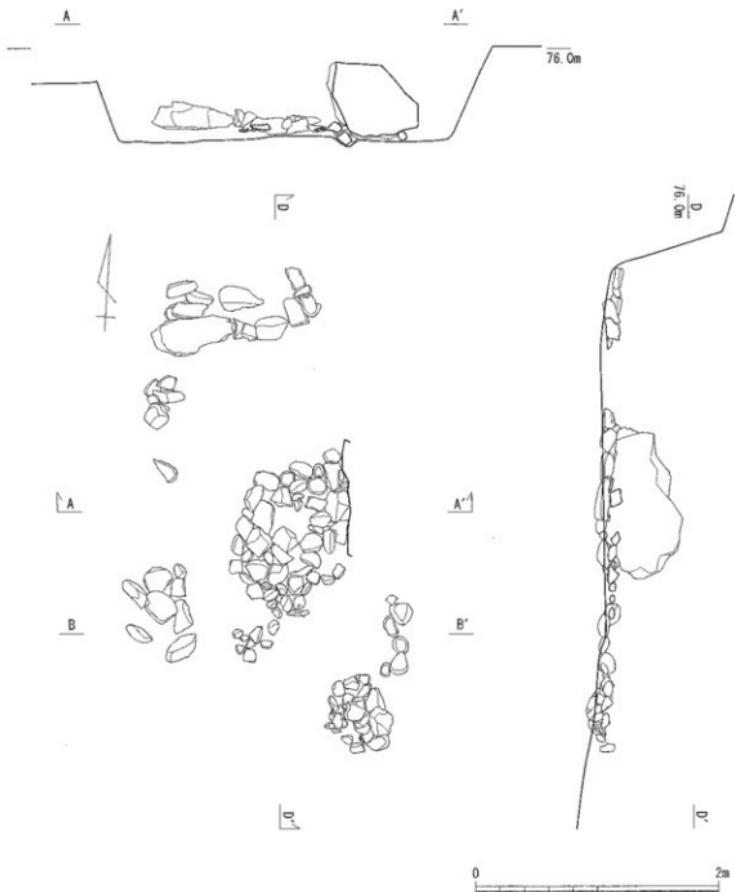
第203図 A37号墳堆丘図

奥壁・側壁の基底石には相当大型の角礫ばかりが使用されていたと想定される。

墓坑 墓坑は幅広の隅丸長方形プランを呈し、後壁では旧地表より0.9m掘り込まれている。基底石の支柱が強固に組まれていたために必要ななかったのか、基底石設置用の土坑は掘削されていない。また、墓道も確認されておらず、恐らく墓坑の南端部とともに流失または削平されたと考えられる。



第204图 A37号填石室検出状況図



第205図 A37号墳石室実測図

③開口部集石（第205・206図）

石室開口部の左側壁寄りと目される箇所に長軸0.63m、短軸0.55mの楕円形プランを呈する集石が存在する。角礫を虜集させており、φ 7~25cmと、大きさにばらつきが認められる。集石は上へ積載されるのではなく、墓坑内の浅い凹みに埋設されているような状況であり、中心部の厚さは0.22mを測る。少なくともA37号墳の敷石や基底石の支石ではないと考えられ、A37号墳とは時期的にも無関係の遺構であるならば、SXの略号を付して命名しなければならないが、何らかの古墳関連施設である可能性も否定できず、現状では何とも言い難い遺構である。

④遺物の出土状況

図化し得たものとしては石室内より須恵器12点(1195~1203・1205・1207・1208)、土師器1点(1209)、銅製品1点(1210)が出土した。また、墳丘直上より須恵器2点(1204・1206)が出土した。

⑤出土遺物(第207図、図版144)

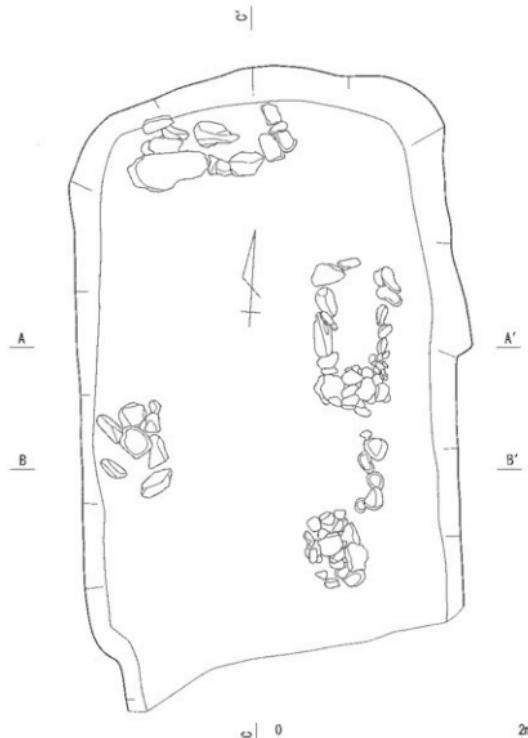
須恵器 坯蓋1195~1197および坯身1198~1203は遠江IV期後半に比定される。また、坯身1198・1200~1203はいずれも異なる範記号を底部に有す。高環脚部1204および瓶類1205~1207は遠江IV期後半~末葉に比定される。1206は肩部に櫛状工具の刺突による羽状列点文が施文されている。1208は広口壺の体部か。

土師器 皿1209は口縁部の立ち上がりは緩やかであるが外反せず、内彎気味に收められていることから、遠江IV期末葉でも同V期に近い時期に比定することができる。

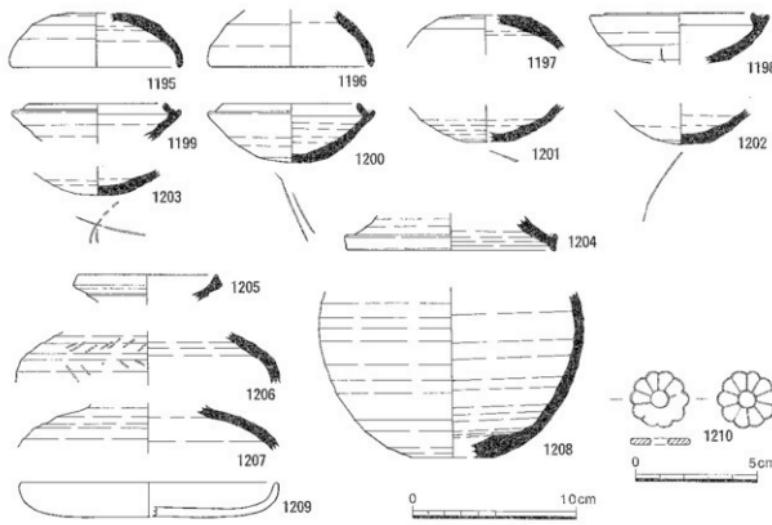
銅製品 1210は木棺の座金具の可能性があるが、通常は片面のみで事足りるはずの放射状線刻を両面に施している点が座金具としては不合理である。一応、「花弁形飾り金具」と称しておく。

⑥小結

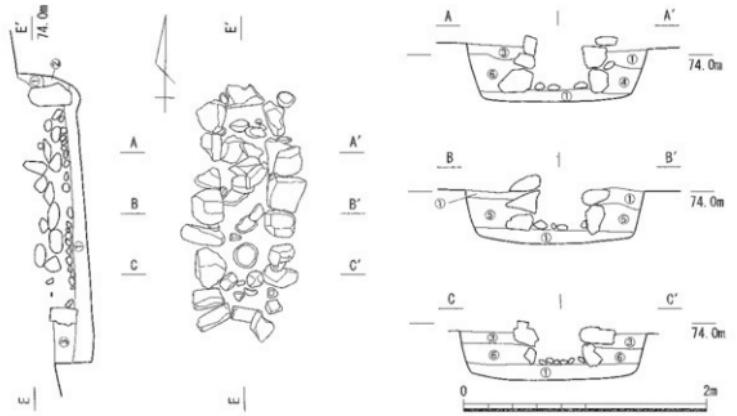
石室出土遺物より、A37号墳は遠江IV期後半に築造され、同IV期末葉に追葬が行なわれたと判断される。花弁形飾り金具1210が木棺に付属する金具であったとしても、この1点で当古墳の階層性の高低を判定することは困難である。むしろ、石室に使用された個々の石材の大きさと質から高い階層性が想定される。しかしながら、推定される石室全体の規模はどちらかと言えば小型に近く、この点においては決して階層性が高いとは言えない。また、当古墳に伴うのか否かさえ判然としない開口部集石など、A37号墳は謎の多い古墳と言える。



第206図 A37号墳基底石実測図



第207図 A37号出土遺物実測図



上層注記

- ① 褐色シルト 7.5YR4/6 插形床土・裏込め
粘性やや弱く、しまりややあり。φ 1~4cmの礫を少し含む。
- ② 赤褐色シルト 5YR4/8 裏込め
粘性・しまりともにややあり。礫をほとんど含まない。
- ③ 野色シルト 7.5YR4/4 裏込め
粘性なく、しまりややあり。φ 1~3cmの礫を少し含む。
- ④ にぶい赤褐色シルト 5YR4/4 裏込め
粘性なく、しまりややあり。φ 3~5cmの礫を多く含む。
- ⑤ にぶい赤褐色シルト 5YR4/3 裏込め
粘性やや弱く、しまりややあり。φ 1cm前後の礫を僅かに含む。
- ⑥ 黄色シルト 7.5YR4/4 裏込め
粘性なく、しまりややあり。φ 1~7cmの礫を少し含む。

第208図 A38号墳石室検出状況図

(ii) A38号墳

① 墳丘・周溝

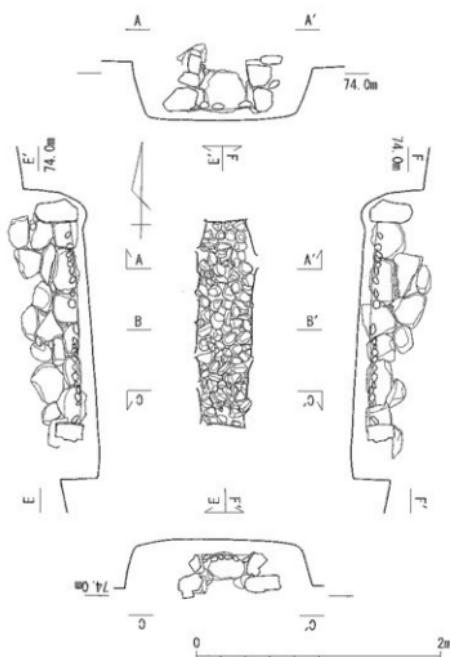
A38号墳はA32号墳とA34号墳との間に位置し、A33号墳より約10m南の浅谷中央付近に立地する。墳丘盛土・周溝ともに確認されておらず、墳丘盛土は流失した蓋然性が高いが、周溝は当初より存在しなかった可能性もある。

② 埋葬施設（第208～210図、図版81・82）

当古墳では埋葬施設のみ確認されており、堅穴系横穴式石室が構築されている。真南北方向の主軸を有し、残存状態は比較的良好である。

石室 奥壁が最小幅となる奥窄まり形の石室プランを呈するが、後部に最大幅を有し、そこから前壁に向かっても直線的に窄まっている。奥壁には当石室最大の中型板状角礫を立て据えて鏡石とし、高さ0.33mを測るが、左右両側壁の積載状況から類推すれば、鏡石の上にもさらに石材が積載されていたと考えられる。

側壁は中型の角礫主体に小口積みされており、明確な目地通りは看取されない。左側壁で最大3段、高さ0.49m残存し、右側壁で最大3段、高さ0.52m残存する。両側壁ともに2段目から持ち送り積みされている。前壁には板状の中型角礫を長手置きし、奥壁鏡石と対応している。この1石で高さ0.21mを測るが、奥壁鏡石同様に、上にも石材が多少積載されていたと考えられる。



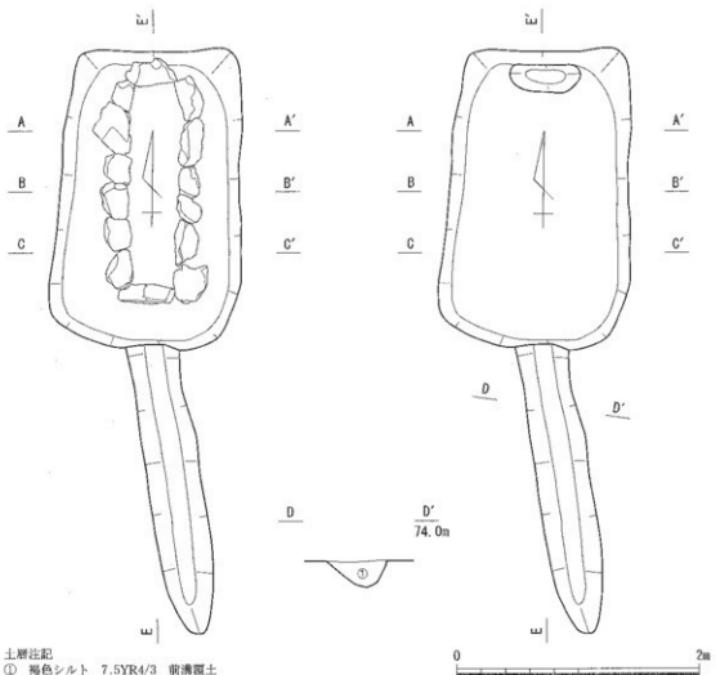
第209図 A38号墳石室実測図

敷石 石室床面の全面に敷石が敷設されている。φ5～15cmの円礫を用いている。

基底石 側壁の基底石は左右ともに中型角礫の長手面を内側に向けており、また、左右で同個数の礫が使用され、概ね整然とした様相を呈す。両側壁最後端の基底石一対は奥壁鏡石を左右から挟み込む形で設置されている。前壁石は左側小口面を左側壁最前端の基底石の長手面に当接し、内側長手面の右端部分を右側壁最前端の基底石の小口面に当接して、前壁ラインを石室の主軸に直交させている。

墓坑・前溝 墓坑は隅丸長方形プランを呈し、後壁で地山を0.5m以上掘り込んでいる。また、墓坑後壁沿いには奥壁鏡石に対応する設置用小土坑が掘削されている。

墓坑前端中央には墓道が敷設されているが、当石室は堅穴原理の埋葬施設であるため、墓道は多分に象徴的な施設と理解される。ゆえに「前溝」なる名称が適切と考えられる。



第210図 A38号墳基底石・墓坑実測図

前溝は墓坑・石室の主軸に対してやや東に傾れており、
2区南東部の浅谷を一直線に下降している。

③遺物の出土状況

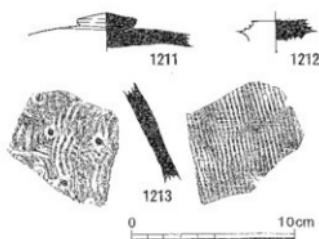
出土遺物は僅少であるが、墳丘直上より須恵器片2点(1211・1212)が出土している。また、左側壁の裏込めより須恵器壺片(1213)が出土した。

④出土遺物(第211図、図版144)

須恵器 壺蓋1211は摘み径が大きく、遠江V期前半に比
定される。1212は高環の体部・脚部の接合部片である。

⑤小結

僅かな出土遺物より、A38号墳は遠江V期前半に築造されたと判断される。基底石の配列や鏡石の使用、前溝の存在はA38号墳の竪穴系横穴式石室が横穴式石室から派生したことを如実に示している。石室の規模等は階層性の低さを示しているよう見えるが、2区最大の古墳であるA32・A34号墳の中間に占地し得たということは、存外階層性は低くなかったとも想定される。この問題については、A38号墳が当古墳群における最終末段階の古墳であることも考慮されなければならないと考えられる。



第211図 A38号墳出土遺物実測図

(10) A39号墳

① 墳丘・周溝

2区西部の調査区南辺に位置する。墳丘盛土・周溝ともに確認されなかった。

② 埋葬施設 (第212・213図、図版82・83)

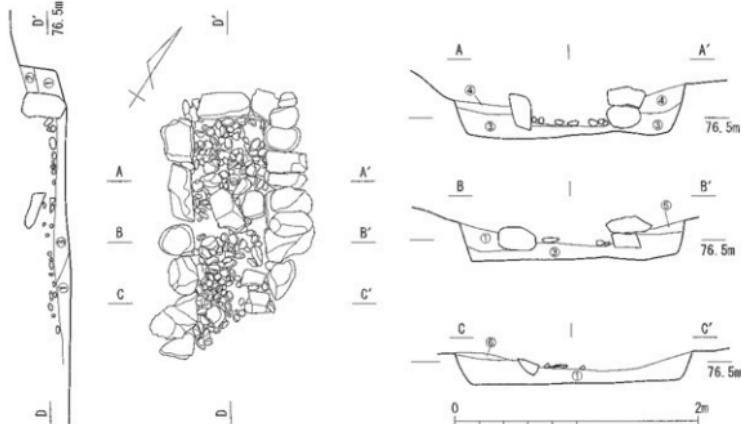
A39号墳は埋葬施設のみ確認された古墳であり、南南東に向けて開口する無袖式横穴式石室が構築されている。残存状態は劣悪ではない。

玄室 奥壁から開口部まで幅が一定となる長方形の玄室プランを呈す。奥壁には板状の中型角礫を長手置きして鏡石とし、その左右にも小型の角礫を小口積みして奥壁幅を確保している。左側壁の残存状況から類推すれば、現状の奥壁の上にも石材が積載されていたと想定される。現状の奥壁は高さ0.36mを測る。

側壁には中・小型の角礫または円礫が用いられ、右側壁は基底石のみ残存し、高さ0.26mを測る。左側壁の2段目以上は小口積みされており、最大3段、高さ0.46m残存する。左側壁の目地通りは不明瞭であるが、B-B'断面では明確な持ち送り積みが認められる。

敷石 玄室床面にφ数～十数cmの円礫から成る敷石が敷設されている。現状は空隙が目立つが、本来は玄室床面全面に敷き詰められていたと推測される。

基底石 両側壁の基底石の多くは中型の角礫または円礫の長手面を内側に向けて設置されるか、または長手置きされているが、小口置きされるものも少々認められる。両側壁最後端の基底石一対は、それぞれの小口面を奥壁面に当接して長方形プランの直角を形成しているように見えるが、よく見ると、奥壁鏡石の左右の小型角礫から成る奥壁基底石が、両側壁最後端の基底石と鏡石との間隙を充填するように設置されている。つまり、この直角コーナーは小振りの石材で調整した結果であって、似たような設置状況であっても、大型礫どうしが直接当接するA32号墳の玄室基底石とは根本的に異なる設計である。

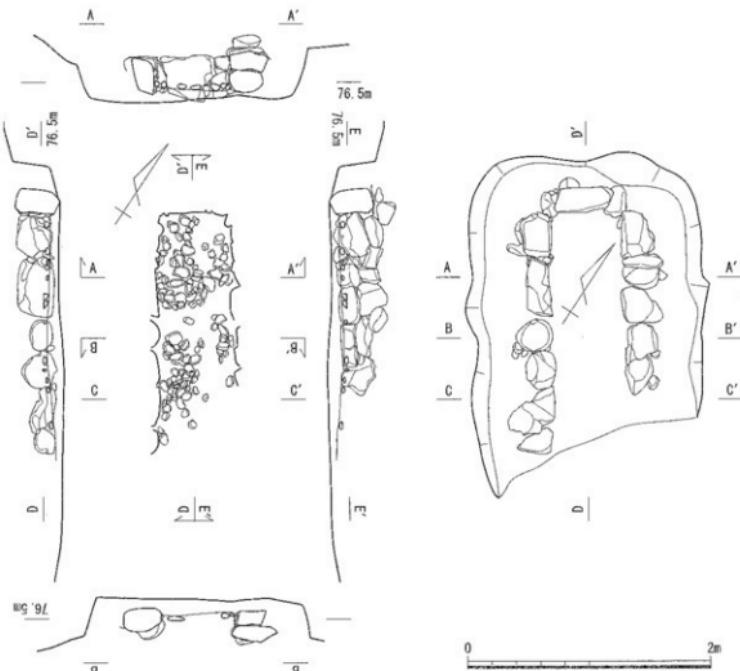


土層注記

- ① 赤褐色シルト 5YR4/4 摩擦粘土・裏込め
粘性・しまりとともにややあり。φ3～5cmの礫を多く、
約20cm前後の隙を少し含む。
- ② 褐色シルト 7.5YR4/6 裏込め
しまりややあり。φ1～2cmの礫を少し含む。
- ③ 褐色シルト 7.5YR4/6 摩擦粘土・裏込め
粘性・しまりとともにややあり。φ6～8cmの礫を多く含む。

- ④ にぶい赤褐色シルト 5YR4/4 裏込め
粘性ややあり。しまりなし。φ6～8cmの礫を少し含む。
- ⑤ 褐色シルト 7.5YR4/6 裏込め
粘性やや弱く、しまりなし。φ5～7cmの礫を多く含む。
- ⑥ 噴赤褐色シルト 5YR3/6 裏込め
しまりなし。φ2～3cmの礫を少し含む。

第212図 A39号墳石室検出状況図



第213図 A39号墳石室・基底石実測図

墓坑 前端部を喪失しているが、隅丸長方形の墓坑プランを呈す。後壁では地山を0.3m以上掘り込んでいる。墓道は確認されておらず、恐らく削平されてしまったと考えられる。

③遺物の出土状況（第214図）

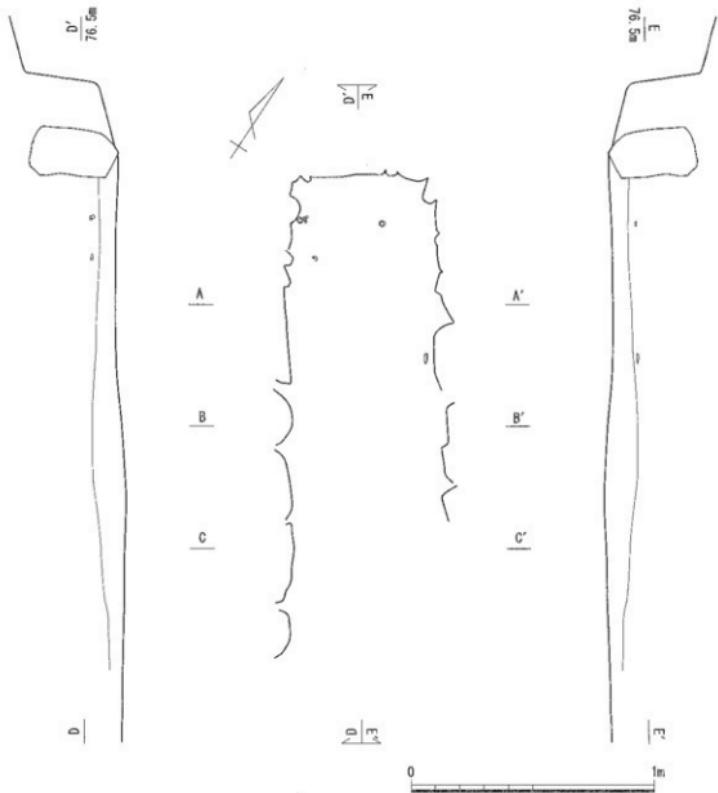
玄室後半部より刀子1点（1216）・耳環4点（1217～1220）、須恵器片（1215）が出土しているが、当古墳廃絶時の原位置をとどめるものではないと考えられる。また、墳丘跡地と思しき地点より須恵器片（1214）を確認している。

④出土遺物（第215図、図版12）

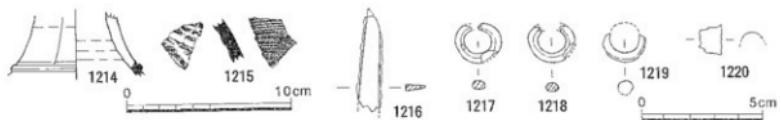
須恵器 1214は高坏の脚部下半部片であり、長方形二段透孔の下段の1孔が認められ、裾部とそれ以上の部位とを突帯により区画している。これらの特徴から、1214は遠江国中期末葉に比定される。1215は焼の小片である。

金属製品 1216は刀子の身部片であり、平造りされている。

耳環 1217・1218は銅の芯環に銀銅板を巻いており、芯環と銀銅板の一部が欠落している。1219・1220は耳環の銀銅板で、1219は芯環を完全に喪失し、1220は剥落した円筒状の銀銅板が土圧等の作用により変形したものである。1219と1220が本来別個体であるならば、1217～1220は2対を成し、被葬者2体分の装身具と推定される。



第214図 A39号墳石室遺物出土状況図



第215図 A39号墳出土遺物実測図

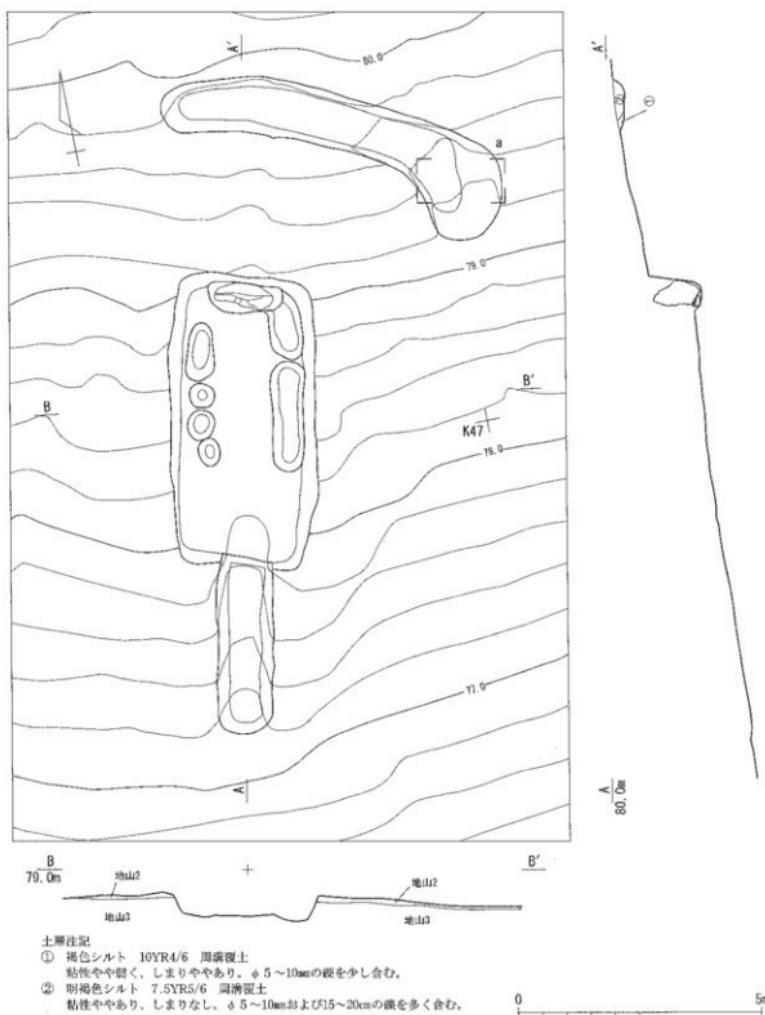
⑤小結

A39号墳は出土遺物より遠江III期末葉に築造されたと判断される。大屋敷A古墳群の無袖式横穴式石室としては長方形の玄室プランは特異であり、石室規模に比して大振りかつ良質の石材を揃えていることを併せて勘案すれば、A39号墳は当古墳群中の他の無袖式横穴式石室を擁する古墳よりも階層性が高いと評価できるのかもしれない。

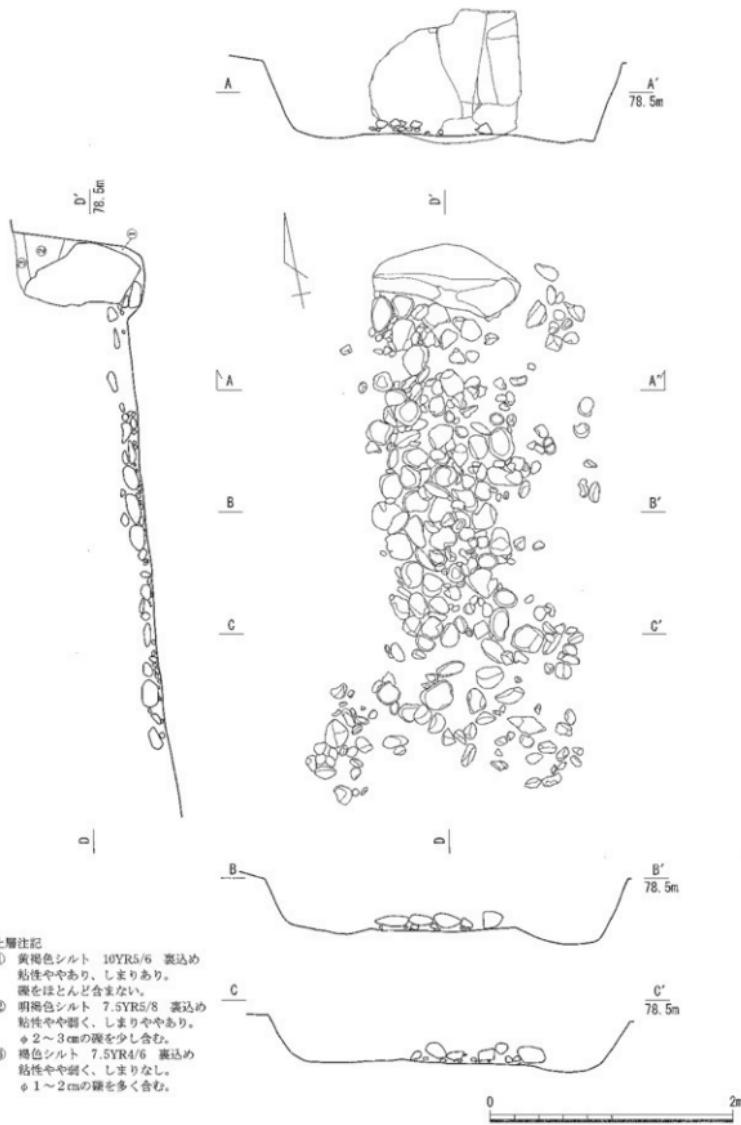
(1) A40号墳

① 墓丘・周溝（第216図、図版84）

2区西部の浅谷を挟んで、A39号墳の東北東約15mに位置する。墳丘盛土は流失している。周溝は古墳の北側で約1/6周分検出されたに過ぎず、本来の墳丘プランは不明であるが、少なくとも南北9m以上を測ったと推定される。



第216図 A40号墳墳丘図



第217図 A40号填石室検出状況図

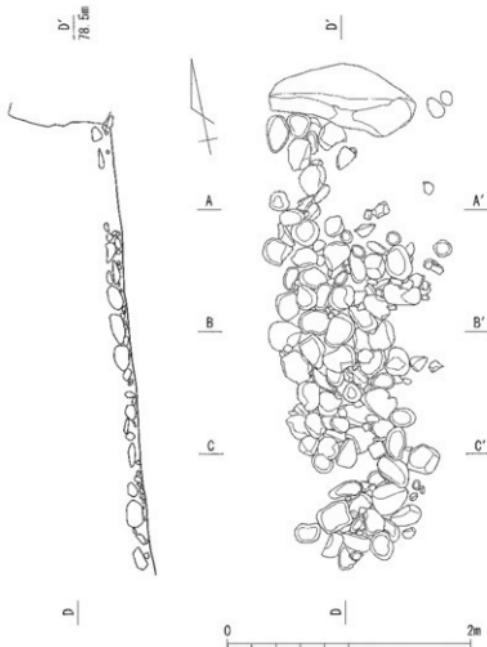
②埋葬施設（第217～219・221図、
図版83・84）

古墳の中央と推定される場所に、真南よりもやや南南西に向けて開口する横穴式石室が構築されている。残存状態が劣悪なため、石室形態は不明である。

玄室 石室の構造材としては、奥壁の鏡石1石が残るのみである。鏡石は長軸120cm、厚さ52cmの大型板状角礫を長手置きして設置され、高さ1.04mを測る。また、立て据える際に内側下端に小型円礫から成る支石を數石咬ませている。側壁の石材が全て失われているため、玄室のプランや規模、羨道の有無については不明である。

敷石 恐らく石室床面の大部分に敷石が敷設されている。 $\phi 20\sim 30\text{cm}$ 前後の、敷石としてはかなり大型の扁平円礫が用いられている。

床込め礫 上記の敷石を撤去すると、 $\phi 5\text{cm}$ 前後の円礫主体に



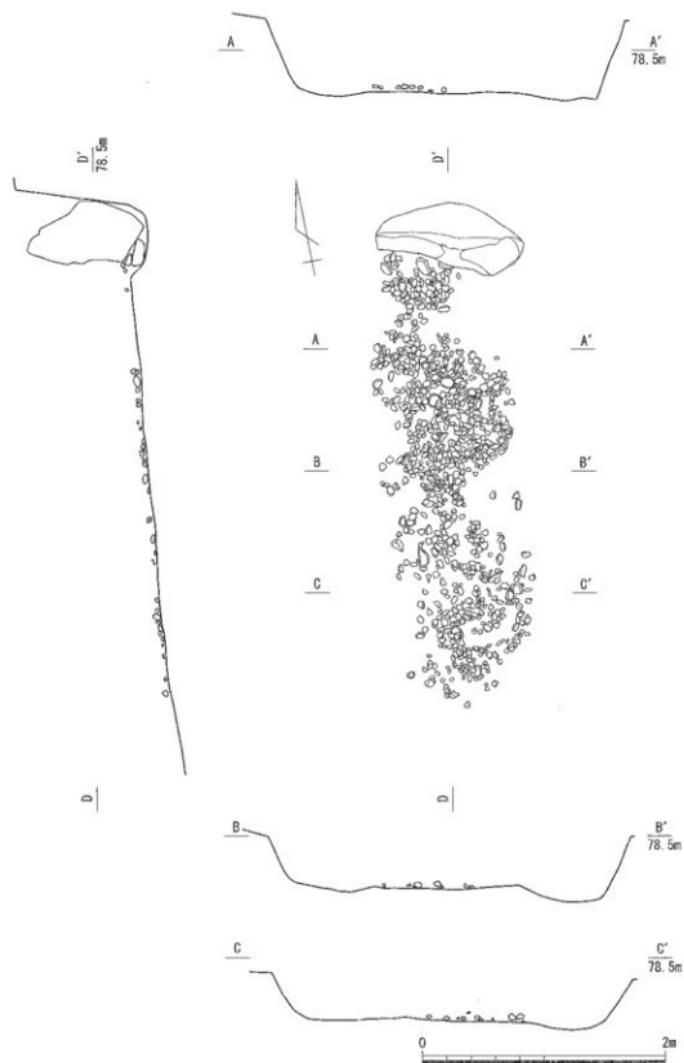
第218図 A 40号墳石室実測図

用いられた礫群が現れた。墓坑底面に敷き詰められた状況を呈し、その敷設範囲は敷石と概ね一致している。よって、この礫群を床面貼り土の代わりに施されたものと見做し、床込め礫と呼称する。当古墳の墓坑底面は北から南へ約9%の傾斜率で下がっているが、床込め礫上端面もほぼ同等の傾斜率を以て北から南へ下がっている。床面貼り土はいびつな墓坑底面に込められて石室床面の水平を調整する役割を担っているが、A 40号墳の床込め礫は床面貼り土の代替機能を果たしていないよう見える。

むしろ、床込め礫には床面貼り土とは異なる機能を想定すべきかもしれない。A 40号墳の北方には後世に形成されたものとは言え自然流路がいくつか走っており、古墳時代後期においても同様の景観が一時にせよ見られたことは十分類推できる。これに加えて、2区北部の狹小な谷や各古墳の墓道・参道が強雨時には小河川状となることも想像に難くなく、2区西部の浅谷直近の斜面に立地するA 40号墳に流水が集中することは十分予想される事態である。従って、A 40号墳の造営主体としては床面の水平よりも石室内の浸水対策を講じる必要に迫られ、排水施設としての床込め礫の導入に至ったと想定される。この上に敷石を敷設して石室床面を形成し、床込め礫は石室の言わば暗渠となる。敷石に大振りの扁平円礫を使用していることも、床込め礫との混交を防ぐためであり、さらに言えば、暗渠の蓋石としての役割も敷石に付帯されていたと解釈できなくもない。

墓坑・墓道 長方形プランを呈する墓坑が後壁で地山を0.95m以上掘り込んで施設されている。墓坑内には奥壁鏡石と両側壁の基底石に対応する設置用小土坑が掘削されており、左側壁の小土坑1基は恐ら

く基底石敷石に対応していたと推定される。また、奥壁鏡石の小土坑は左側壁の最後端に対応する小土坑を切っており、石室設計段階における試行錯誤の様子が窺われる。

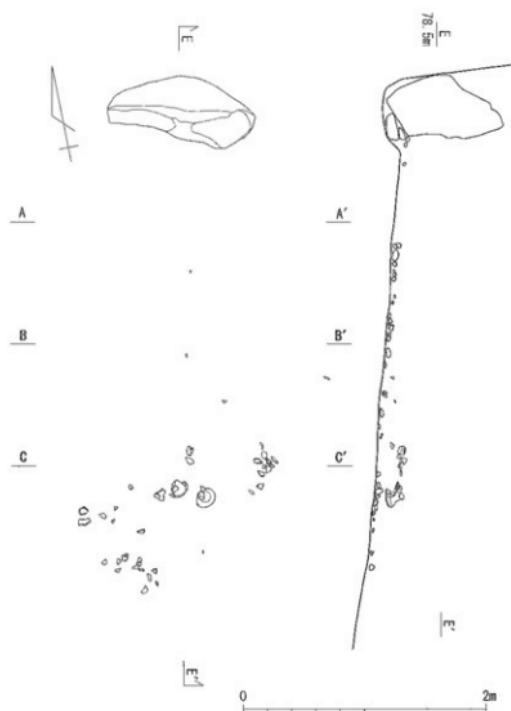


第219図 A40号填床込め縁検出状況図

墓道は墓坑の前端中央に付設されているが、溝状の掘り込みを墓坑内に食い込ませず、墓坑前端に南側に降りる段差を設けることにより、墓坑と墓道との境を明確にしている。また、墓道は比較的短いが、石室・墓坑と主軸を共有し、一直線に伸びている。

③遺物の出土状況（第220・222図）

奥壁より約2.5～3.8mの範囲に須恵器（1227・1229・1232～1234・1237）、土師器（1238）、鉄製武器（1239・1241・1243）と、比較的多数の遺物が出土したが、これらの遺物の出土範囲が石室のどの部位の床面かは定かではない。いずれにせよ、これらの遺物のうち当古墳廃絶時の原位置を保持していたものは皆無であると考えられる。また、石室覆土中より鉄製武器（1240・1242・1244）が出土した。



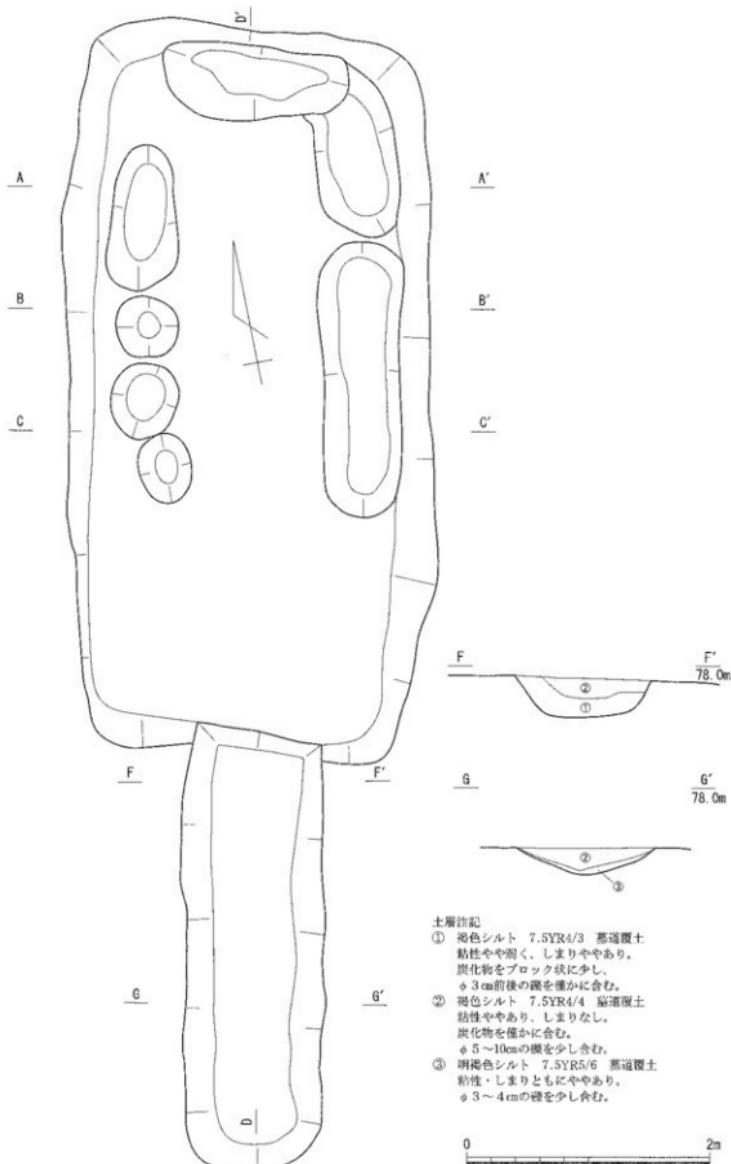
第220図 A40号墳石室遺物出土状況図

古墳北側に残存する周溝の東端付近においてもやや多くの須恵器片（1221～1226・1228・1230・1231）が出土した。また、墓道より須恵器片持ち器台1235と土師器細片が出土している。A40号墳の墳丘より若干離れていると推定される地点においても須恵器片少量（1236）が確認されている。

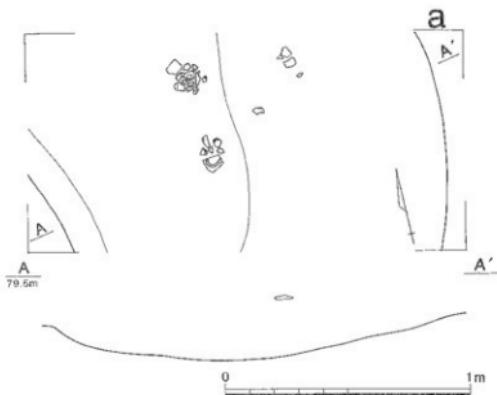
④出土遺物（第223・224図、図版12・144・145）

須恵器 1221～1225は壺蓋である。1221は遠江Ⅲ期後葉、1222は同Ⅲ期末葉、1223は同Ⅳ期前半、1224・1225は同Ⅲ期末葉～Ⅳ期前半に比定される。1224・1225は外面頂部に籠記号が刻されている。1226～1230は壺身である。1226は受け部立ち上がりの形状から遠江Ⅲ期中葉に比定されるが、実測の過程で復原径を實際より小さく測り出してしまった疑いがある。1227は遠江Ⅲ期中葉、1228は同Ⅲ期後葉、1229・1230は同Ⅳ期前半に比定される。1230の外底面には壺蓋1224と同じ2本線から成る籠記号が刻されており、合わせて1組の蓋壺を構成すると推定される。1231は壺であり、内萼する体部の先で口縁部がやや外反気味となる。時期は遠江Ⅲ期後葉に比定される。1232は無蓋高壺の壺部であり、遠江Ⅲ期末葉に比定される。

1233は壺の口頭部であり、口縁部の断面形は遠江における湖西窯製品席巻以前の形態を呈し、時期は遠江Ⅲ期中葉か、もしくは同Ⅲ期後葉に下る可能性がある。1234は横瓶の体部片であり、側端部に小口



第221図 A 40号墳墓坑実測図



第222図 A40号墳周溝遺物出土状況図

されている。時期は遠江III期中葉～後葉に比定される。1235・1236のいずれか一方が壺1233を搭載していた可能性がある。1237は長頸壺であり、器種としての下限は遠江III期後葉となる。

土師器 1238は高壺であり、遠江III期中葉の須恵器無蓋長脚二段透孔高壺の模倣品と考えられ、やはり同時期の所産と推定される。

鉄製品 1239・1240・1242は刀子である。1239の身は平造りされている。1240は撫闇の両闇を有す。1242の茎には巻き付けられた樹皮が誘着遺存する。1241は鉄錆の頭部～茎片である。茎闇は棘闇を呈し、長頸壺の可能性が高い。1240・1244は刀子の鍔であり、1244の内側には柄の木質が付着遺存する。

⑤小結

出土遺物より、A40号墳は遠江III期中葉に築造され、同IV期前半まで追葬が継続したと判断される。奥壁鏡石と両側壁の基底石設置用小土坑の配置から、石室全長は少なくとも3.75m以上であったと推定されるが、鏡石の大きさや墓坑の規模を勘案すれば、全長5mに達していた可能性も否定できない。2区西部において最初に造営された古墳であり、この領域において1区のA10号墳と盟主墳の地位を争い得るほどの階層性を有していた蓋然性が高い。

(18) A41号墳

①墳丘・周溝

A40号墳の北側周溝より北北東約10mに位置する。墳丘盛土・周溝ともに確認されなかった。

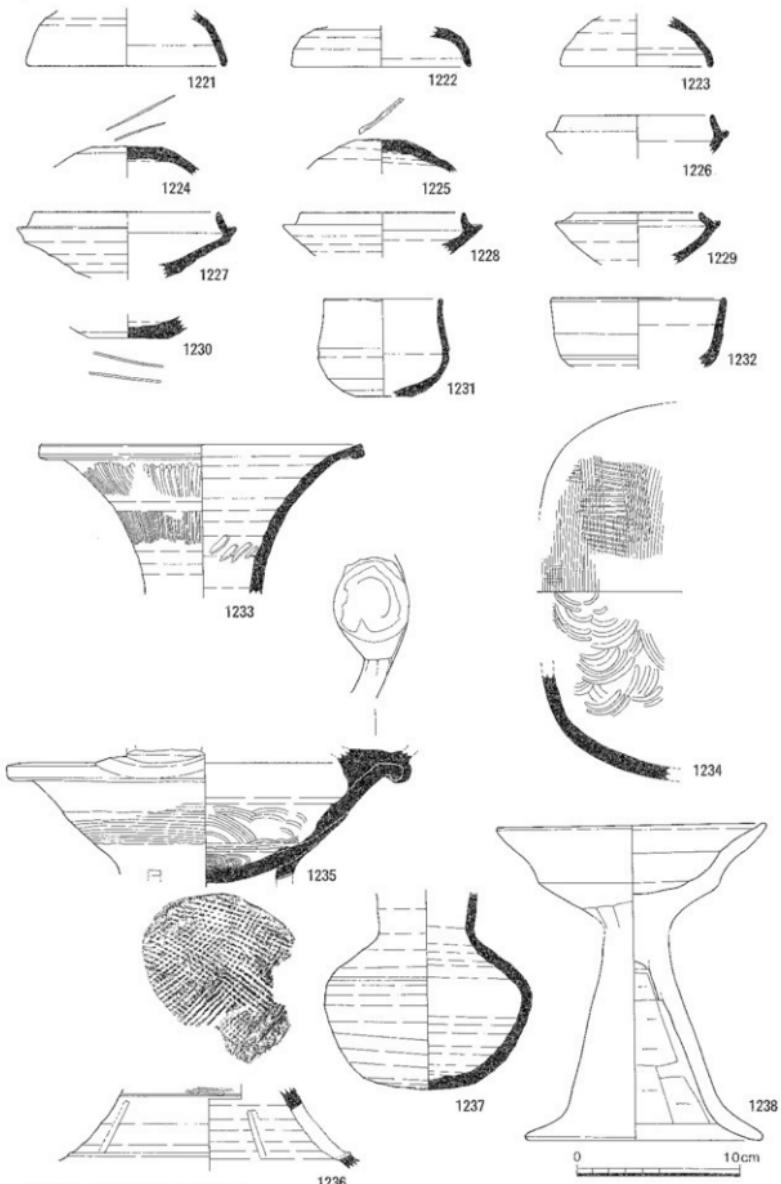
②埋葬施設（第225図、図版85）

A41号墳は埋葬施設のみ確認された古墳である。残存状態は極めて劣悪で、石室の構造材は皆無であり、ほぼ真南に向かって開口する横穴式石室であったという以外は想像さえ不可能である。

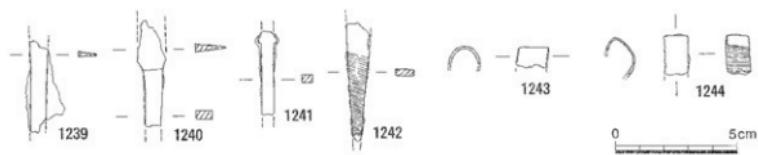
敷石 墓坑の中央部に石室の敷石が残存している。 $\phi 15\sim 20\text{cm}$ 前後の扁平な円盤主体に使用され、間隙を $\phi 6\text{cm}$ 前後の円盤で充填しているが、中には $\phi 45\text{cm}$ を測る、敷石としてはかなり大型の扁平円盤も用いられている。なお、掘形床土または床面貼り土は敷石が残存する範囲にのみ遺存し、石室（墓坑）内の大部分において流失している。

基底石支石 奥壁の基底石は失われているが、その支石は残存する。長軸40cm前後の角礫2石が奥壁基底石の設置用小土坑内右寄りにおいて直角を成して配置されている。大屋敷A古墳群中の他の古墳の基

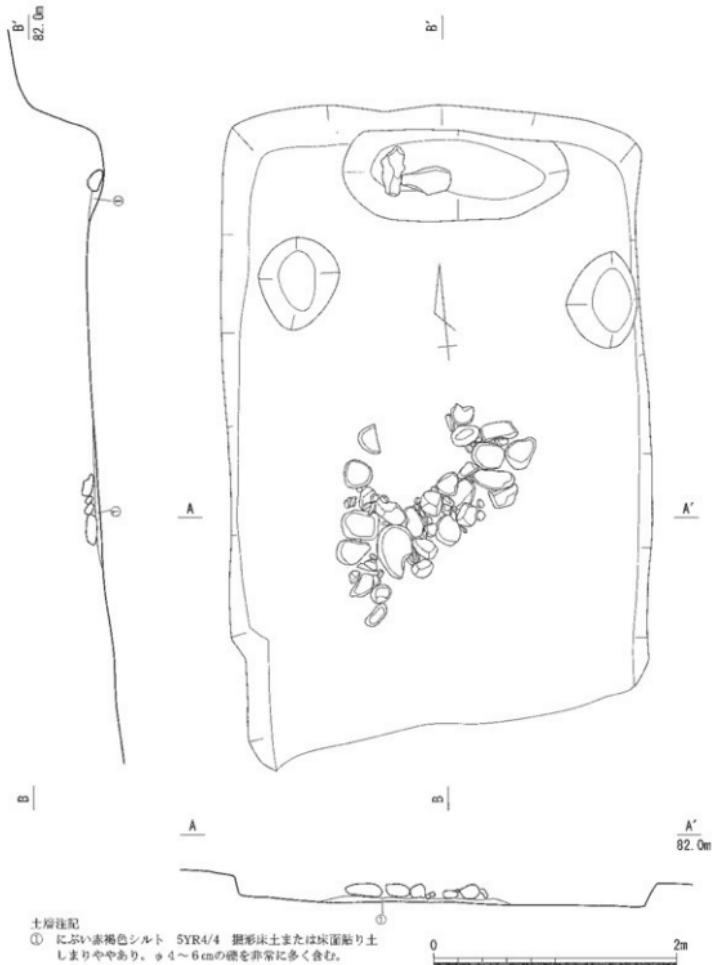
面を有し、ここから同心円状にカキ目を施している。時期は遠江III期後葉に比定される。1235は子持ち器台であるが、口縁部に付属する子部が欠損している。体部外表面中央にカキ目を施し、同内面下半部には当て具の同心円状痕を残している。脚部には長方形透孔が配されている。体部外底面の器表は剥落し、体部の第一次調整痕である格子状タタキ目が露出している。時期は遠江III期中葉に比定される。1236は器台の脚部片である。長方形二段透孔の下段の1孔が認められ、その上下は凹線文により区画



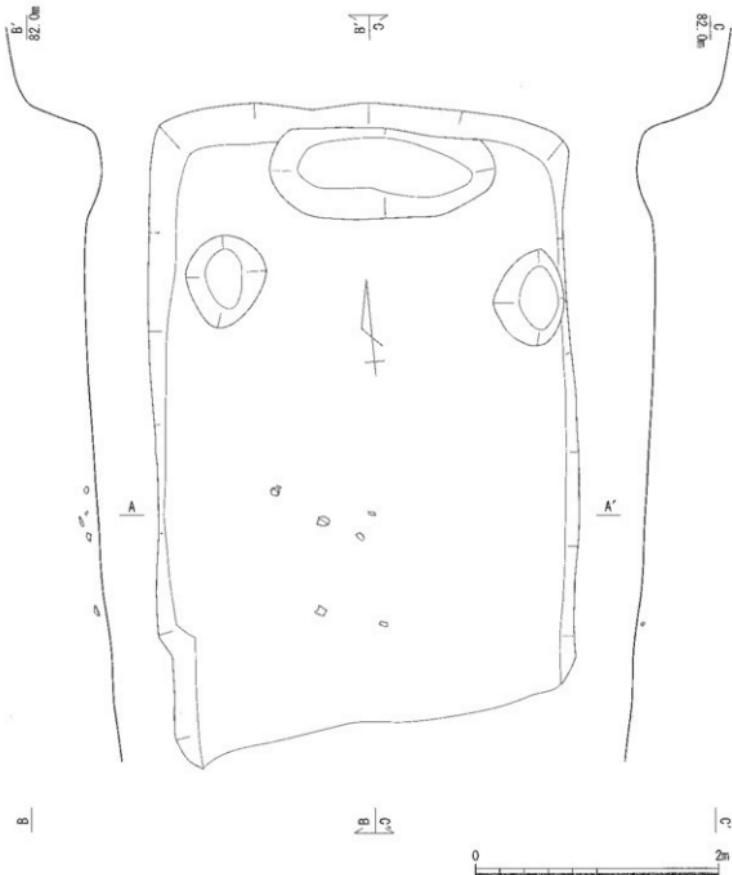
第223图 A40号填出土器实测图



第224図 A40号填出土金属製品実測図



第225図 A41号填石室実測図



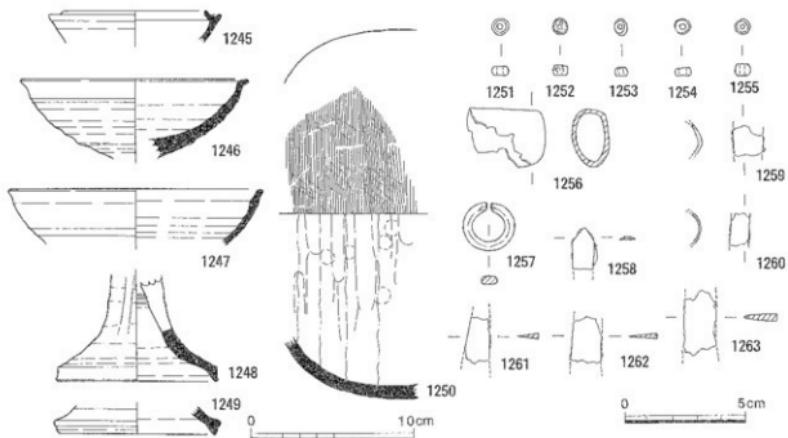
第226図 A41号墳石室遺物出土状況図

底石支石はより小型の円礫を用いるのが一般的であるため、当古墳の支石は相当大型の奥壁基底石、すなわち鏡石を支えていたと想定される。

墓坑 長方形プランを呈する墓坑が後壁で地山を0.5m以上掘り込んで施設されている。墓坑内には前述の奥壁基底石に対する設置用小土坑のほかに、左右両側壁の後端と目される基底石一对に対しても設置用小土坑が掘削されている。なお、墓道は確認されなかった。

③遺物の出土状況（第226図、図版85）

石室内に残存する敷石の直上より須恵器片（1245～1250）、耳環（1257）・鉄織（1258）・刀子（1262）などの金属製品が出土した。また、石室覆土の築作業によりガラス白玉5点（1251～1255）、鉄製品数10片（1256・1259～1263）が検出された。



第227図 A41号墳出土遺物実測図

④出土遺物（第227図、図版12・145）

須恵器 壺身1245は遠江IV期後半に比定される。1246・1247は無蓋高壺の壺部である。1246は遠江IV期前半、1247は同IV期後半に比定される。1248は長脚二段透孔高壺の脚部下半部であり、遠江III期末葉に比定される。横瓶の体部1250は残存部外面の全面に縦位のカキ目を施し、遠江IV期前半の所産とも考えられるが、定かではない。

玉類 1251～1255はガラス製の白玉である。1251・1253が青緑色、1252・1254・1255が紺系統の色調を呈す。

金属製品 1256は刀の鞘尻金具であり、使用された鉄板は厚さ2mmを測る。1258は鉄鎌の鎌身前半部片で、片丸造りされている。先端部の側縁が直線的過ぎるくらいはあるが、鎌身形態は尖根柳葉式と推定される。1259・1260は幅が狭く、環状の巡りが小さいことから刀子の鍔と考えられる。1261～1263は刀子の身部片であり、いずれも平造りされている。

1257は銅地金銅張の耳環で、完形品である。

⑤小結

A41号墳は出土遺物より遠江III期末葉に築造され、同IV期後半まで追葬が継続したと判断される。石室は残存する基底石支石と基底石設置用小土坑から類推すれば、決して規模は小さくなかったと考えられる。また、鞘尻金具の存在から刀（大刀または小刀）を副葬したことが明らかであり、A41号墳の階層性は存外高かったと想定される。

(1) A42号墳

①墳丘・周溝（第228図、図版86）

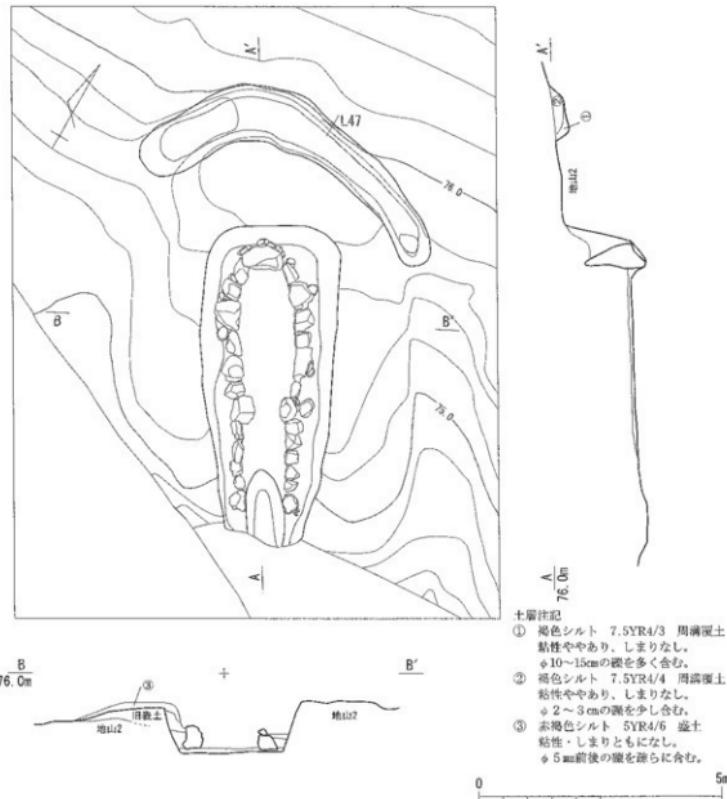
2区中央部南端に位置し、A32号墳に西接する。古墳の西・南東側には石室の裏込みに連続する一次墳丘の盛土が1層遺存するが、北～北東側の墳丘盛土は流失している。また、古墳の南側はA32号墳の南部をも削平した大規模な擾乱坑により削平されている。周溝は北～北東側で約1/4周分検出された。本来の墳丘規模・プランについては、南北が8.3m以上になること以外の情報は残されていない。

②埋葬施設（第229～232図、図版86～88）

古墳の中央と思しき場所に単室系擬似両袖式横穴式石室が構築されている。残存状態は概ね良好であり、南東に向けて開口する。

天井石 玄室後部に長軸135cm、幅68cm、厚さ31cmを測る大型板状角礫1石が転落しており、天井石と判断される。長軸を石室主軸に対して斜交した状態で検出されており、自然崩落か人為的除去の結果なのかは判別し難い。

玄室 中央部に最大幅を有し、奥壁幅が最も狭くなる胴張り形の玄室プランを呈す。奥壁には長軸128cmを測る大型板状角礫を立て据え、床面よりの高さ0.9mを測る鏡石をしている。鏡石は三角錐状を呈し、上に石材を積載することは容易ではないと考えられる。両側壁は基底石に大・中型の角礫を用い、2段目以上は中型角礫を平手積みまたは小口積みし、持ち送り積みが看取されるが、目地通りを捉えることはできない。左側壁は最大3段、高さ0.63m残存し、右側壁は最大3段、高さ0.59m残存する。



第228図 A42号墳墳丘図

玄室両側壁の先端に大型の柱状角礫を立て据えて立柱石としており、左立柱石は高さ0.6m、側壁よりの突出0.1mを測り、右立柱石は高さ0.76m、側壁よりの突出0.16mを測る。

羨道 羨道プランは長方形を呈し、左右立柱石間の玄門幅は最も狭い箇所で0.52mを測る。また、羨道側壁よりの立柱石の突出は右立柱石が0.12mを測るが、左立柱石は明瞭に突出していない。側壁には大型から小型まで様々な大きさの角礫を使用し、小口積み主体であるが、長手面を内側に向けるものや縦積みされるものも見られ、甚だ雑然とした積載状況を呈す。もとより、目地通りは看取されない。また、玄室同様に内側へ持ち送り積みされている。残存状態は玄室よりも良好で、左側壁は最大5段、高さ0.94m残存し、右側壁は最大5段、高さ1.0m残存する。

敷石 玄室後半部の床面にφ5~20cmの扁平円錐が敷設されている。玄室前半部は盃掘のために敷石が擾乱されているが、本来は玄室床全面に隙間なく敷き詰められていたと推定される。

閉塞石 羨道の大部分に積載された閉塞石が極めて良好に残存し、追葬終了時の原状を完全近く保持した状態で検出された。中・小型の角礫と円錐を併用し、最大6段、高さ0.93m残存する。積み方は石室主軸に対して小口積みするものも長手積みするものも見られ、統一性がない。

基底石 側壁の基底石は玄室・羨道とともに、長手面を内側に向けて設置されるものと小口置きされるものが拮抗している。玄室両側壁最後端の基底石一対が奥壁鏡石を左右から挟み込み、前方へへの字形に開くことによって玄室側壁の胴張り形ラインが始まっている。奥壁鏡石をはじめ、外側下端に小型円錐を咬ませ、支石をしている基底石が存在するが、A37号墳に見られるような計画的に配置された支石ではなく、基底石を据えた後、安定性の良くないものの下端に差し込まれたものと考えられる。

墓坑・羨道 前方に向かって幅が狭くなる隅丸長台形の墓坑プランを呈す。墓坑後壁では地山を1.36m以上掘り込んでいる。また、奥壁鏡石と右立柱石の2石に対して設置用小土坑が掘削されている。羨道は墓坑前端部とともに削平されているが、羨道の溝状掘り込みは羨道中央部付近にまで食い込み、末端部には閉塞石が積載されている。

③遺物の出土状況（第231図、図版87）

玄室前半部左側壁寄りの床面直上において刀子（1270）・鉄鎌（1271~1274）がまとまって出土したが、敷石が擾乱されている箇所であり、当古墳廃絶時の原位置をとどめるものではないと理解される。また、羨門手前の墓道の海状掘り込み内で須恵器片（1266・1268）が出土し、追葬時に石室内から搔き出された可能性と墓前祭祀の痕跡のいずれかが考えられる。また、当古墳の埴丘跡地と思しき地点より須恵器片（1264・1265）が出土し、北側周溝外側直近からも須恵器片（1269）が出土した。

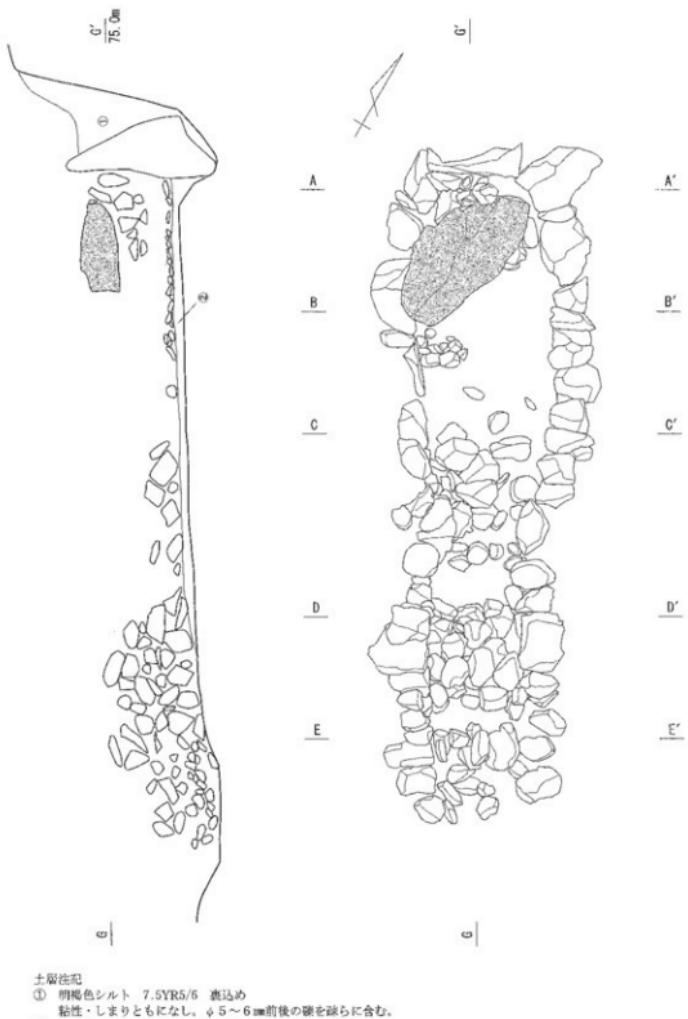
④出土遺物（第233図、図版145）

須恵器 坂蓋1264および坏身1265は遠江IV期後半に比定される。坏身1266・1267の外底面は安定した平坦面を呈し、遠江IV期末葉に比定される。フラスコ形瓶体部片1268は器種としての下限が遠江IV期末葉となる。1269は高盤の脚部上半部片であり、遠江IV期の範疇で捉えられる。中央の凹線文に区画された長方形二段透孔の上段2孔が認められ、2孔間に籠状工具で列槽円文が陰刻されている。

鉄製品 刀子1270は完形品に近く遺存し、身は平造りされ、刃側に撫間を有す。関部には柄の木質が付着残存する。1271~1274は長頸鎌であり、いずれも鎌身が欠損している。1271の茎には巻き付けられた樹皮が遺存する。

⑤小結

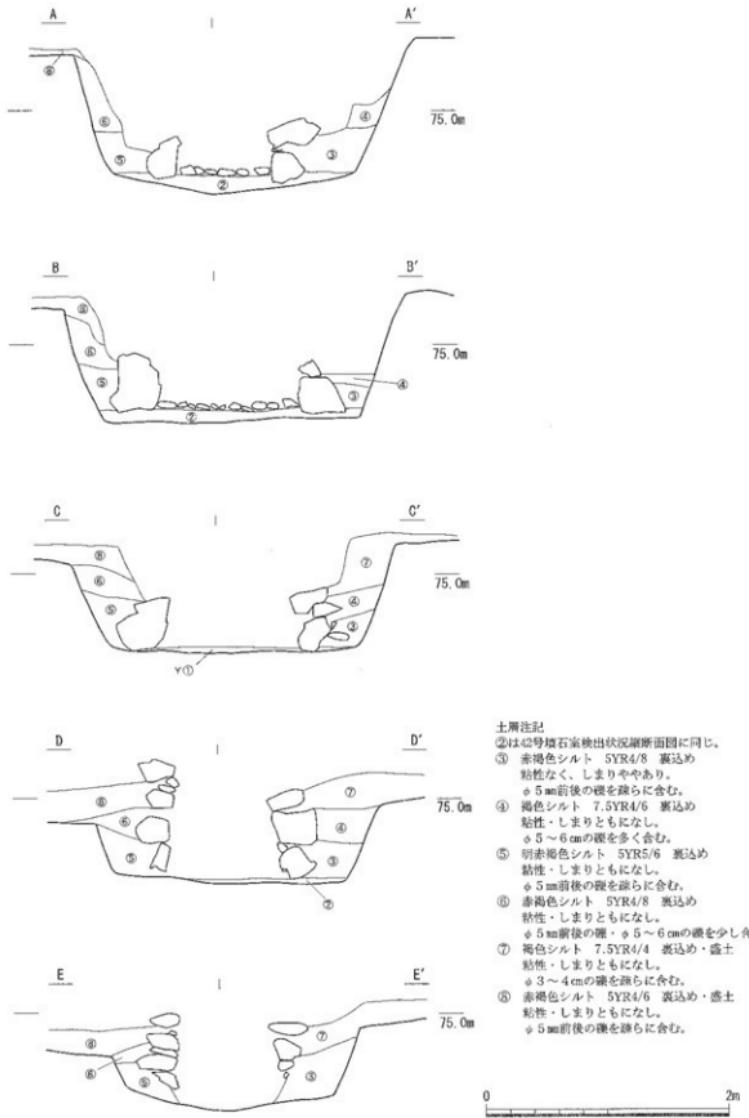
A42号墳は出土遺物より遠江IV期後半に築造され、同IV期末葉に追葬が行なわれたと判断される。A32号墳廃絶直後の時期に築造されたことになり、位置的にもA32号墳の存在を意識した古墳と考えられる。A42号墳の單室系擬似両袖式横穴式石室は大屋敷A古墳群の同形態石室のうちでは規模が大きいほうであり、当古墳群における階層性は中の上程度に位置付けられる。



- 土層注記
- ① 明褐色シルト 7.5YR5/5 粘込み
粘性・しまりともなし。φ 5~6 mm前後の礫を隙間に含む。
 - ② 濃褐色シルト 5YR4/8 圆形床土
粘性なく、しまりあり。φ 5 mm前後の礫を隙間に含む。

0 2m

第229図 A42号填石層検出状況図



第230図 A42号填石室検出状況横断面図

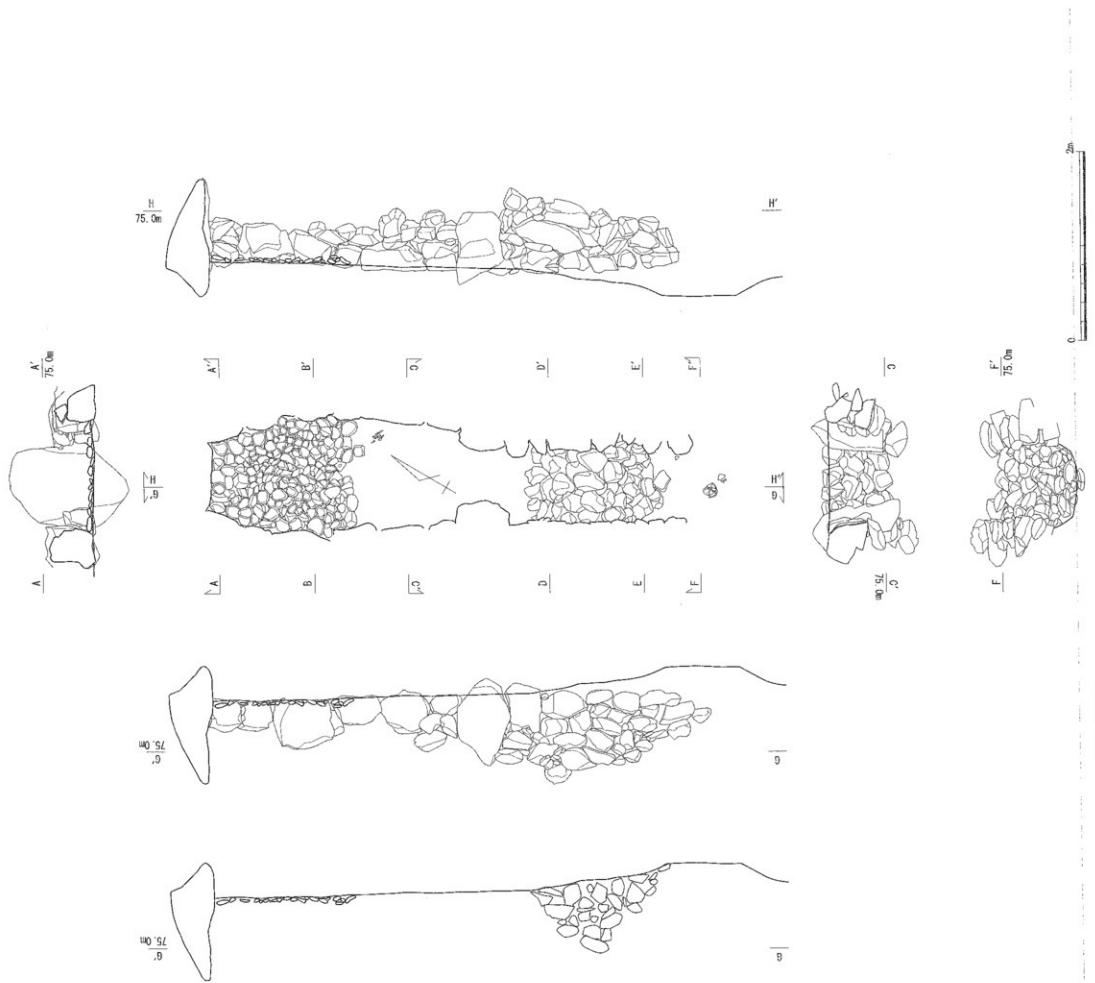
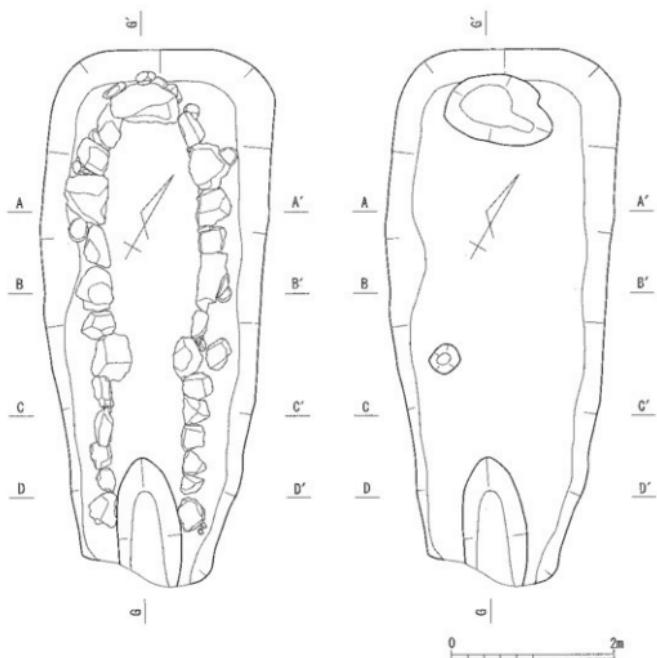
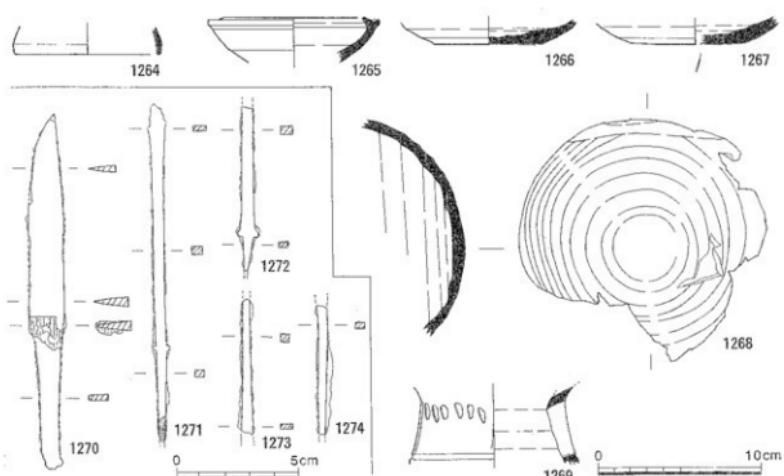


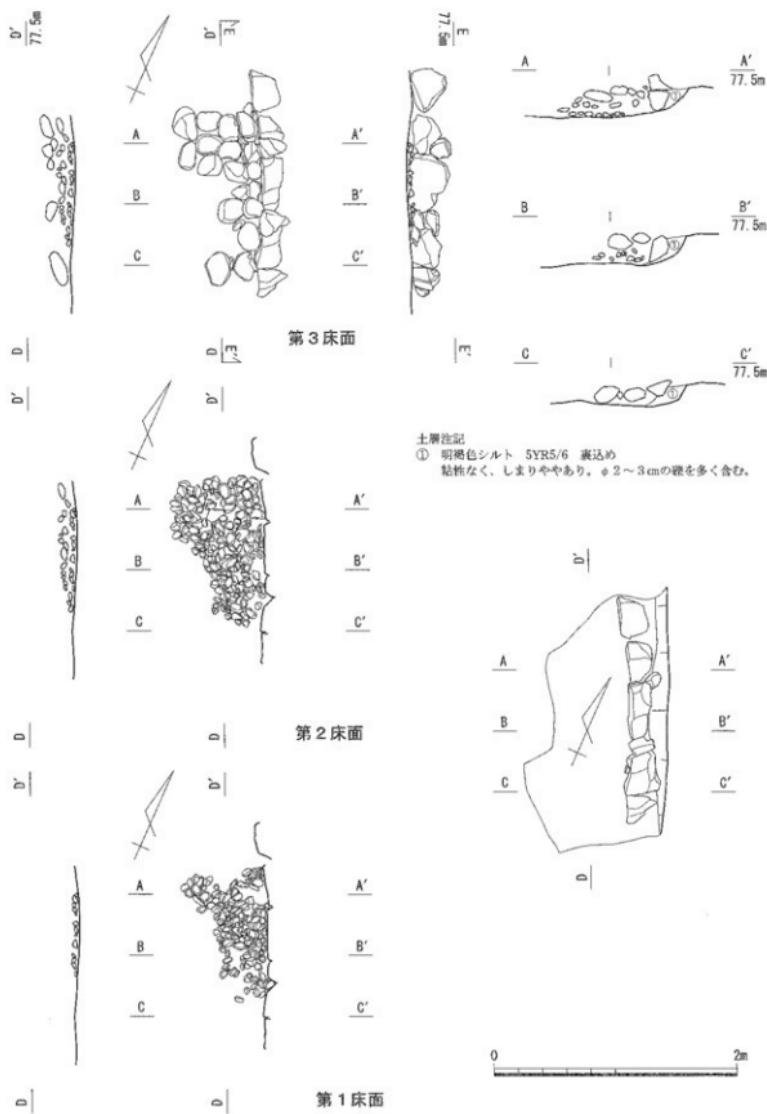
圖 231 圖 A42號堆石壘・防墻石築剖面・遺物出土狀況圖



第232圖 A42號填基底石・墓坑實測圖



第233圖 A42號填出土遺物實測圖



第234図 A43号填石室・基底石実測図

㉙ A43号墳

① 墳丘・周溝

A35号墳の東約10m、A34号墳の周溝北端の北約4mに位置する。

古墳の東西を自然流路により破壊されており、墳丘・周溝は全く確認されていない。

② 埋葬施設（第234図、図版88・89）

上記の流路と攪乱により、埋葬施設も著しく破壊されている。南南東に向けて開口する横穴式石室が構築されていたと推定されるが、石室形態は不明である。

石室 奥壁と右側壁は失われており、左側壁のみが最大2段、高さ0.33m残存する。基底石には中型の角礫が用いられ、2段目は小型の角礫を小口積みしている。また、持ち送り積みの傾向が看取される。

敷石 残存する石室床面の大部分に敷設された敷石を計3面検出した。最上面の敷石はφ20~30cmを測る大振りの扁平円礫で構成されており（第3床面）、中層の敷石にはφ5~15cmの扁平円礫が使用され（第2床面）、最下面の敷石にはφ5cm米溝を主体にφ10cmまでの円礫が用いられている（第1床面）。

各床面の時期を窺い知るための出土遺物は皆無である。単純に、第2・3床面で計2回の追葬が行なわれたのであれば、この横穴式石室は甚だ小規模、例えば全長が等身大ほどしかなく、同一床面に2体以上の被葬者安置が不可能であったため、追葬のたびに床面を更新する必要があったと説明するしかない。或いは、第1床面、もしくは第1・2床面が敷石ではなく、A40号墳において検出されたような床込み礫である可能性も否めない。A43号墳は結局流水の作用で壊滅してしまったが、築造当初より当古墳の造営主体も北西からの浸水に悩まされていたことは想像に難くなく、このような排水設備を施したという想定である。第3床面を構成する礫の形状と大きさがA40号墳の敷石と同様であるという事実も、この想定を支持する要素である。

基底石 残存する左側壁の基底石は中型角礫の長手面を内側に向けて設置されており、その配列状況は胴張り形プランの側辺のようにも見えるが、石室プランの詳細は不明である。

墓坑 墓坑は壊滅状態であるが、左壁で地山を0.24m以上掘り込んでいる。墓道は確認されなかった。

③ 遺物の出土状況

石室北側の攪乱より須恵器片1点（1275）が出土している。当古墳に本来伴うと考えられる唯一の遺物である。

④ 出土遺物（第235図）

須恵器 1275は平瓶の口頭部であれば、口縁部が直線的に開くことから遠江IV期末葉に比定される。

⑤ 小結

A43号墳は出土遺物より遠江IV期末葉に築造された蓋然性が高い。位置関係からも、A33・A34号墳に先行して築造された可能性は考え難い。同じく古墳どうしの位置関係より、墳丘が本来存在したとしても直径10mを超えるような規模は考えられず、階層性は高いほうではなかったと推測される。

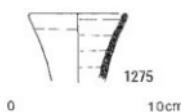
㉚ A44号墳

① 墳丘・周溝

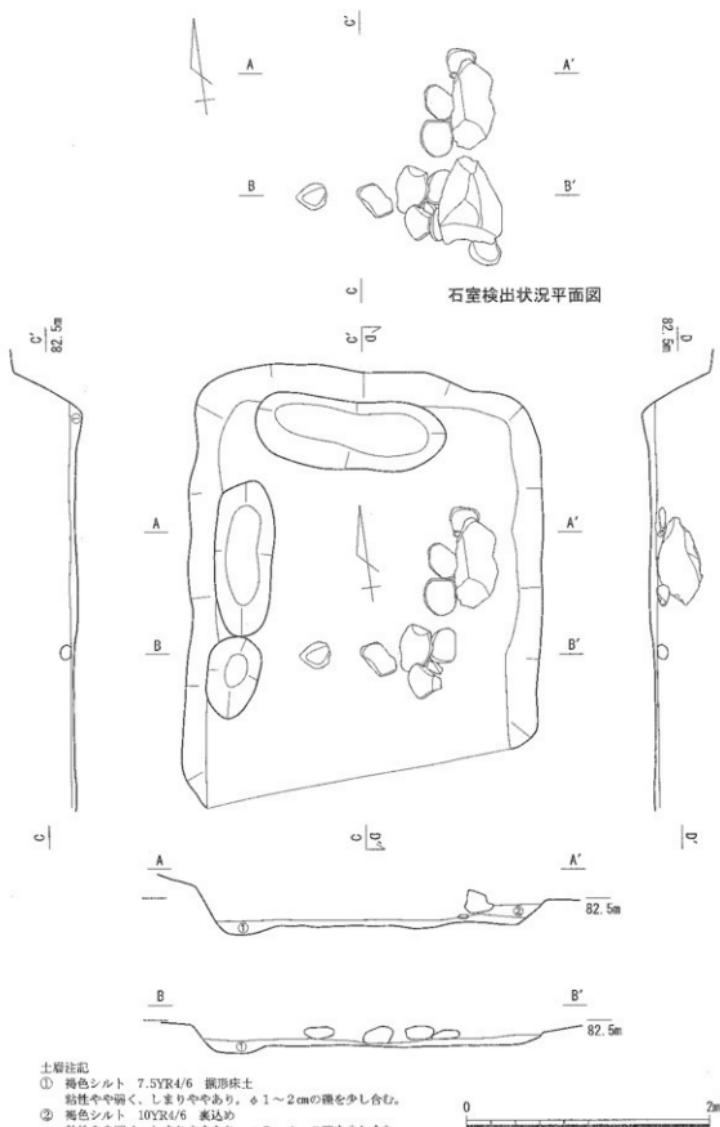
2区北部の小尾根南側斜面に立地し、A41号墳の東北東約12mに位置する。墳丘盛土・周溝とともに確認されなかつた。

② 埋葬施設（第236図、図版89）

A44号墳は埋葬施設のみ確認された古墳であるが、残存状態は極めて劣悪で、真南より若干南南西に向けて開口する横穴式石室であるということ以外は不明である。



第235図 A43号墳出土遺物実測図



第236図 A44号墳石室検出状況・実測図

敷石 玄室床面の一部に敷石が残存する。φ30cm前後～40cmの、敷石としては相当大型の扁平円礫が使用されている。

基底石 石室構造材としては、左側壁の基底石1石のみ残存する。長軸74cmの大型角礫を長手置きし、高さ0.36mを測る。北側下端には敷石と同様の扁平円礫1石が支石として咬まされている。

墓坑 後端部の形状から、墓坑は長方形プランと推定されるが、前半部が失われているため、詳細

は不明である。後壁では地山を0.52m以上掘り込んでおり、墓坑内には奥壁および右側壁基底石の計3石以上に対して設置用小土坑が掘削されている。これら的小土坑と上記の左側壁基底石の位置関係から、玄室幅は1.5m前後を測ったと推定される。なお、墓道は検出されなかった。

③遺物の出土状況

石室の覆土中より須恵器2点（1276・1278）、鉄製品1点（1278）が出土している。

④出土遺物（第237図、図版146）

須恵器 坯蓋1276は外面に段を有し、東海地方西部産と考えられ、復原径は小さいが、遠江Ⅲ期後葉に併行する。1277は長脚二段透孔高環脚部の下半部であり、遠江Ⅲ期後葉に比定される。

鉄製品 1278は鍔であり、推定される長径から刀子の部品と考えられる。

⑤小結

A44号墳は出土遺物より遠江Ⅲ期後葉に築造されたと判断される。残存する左側壁基底石は長大であり、推定される玄室幅は中型以上の横穴式石室に見られる法量であることから、A44号墳の横穴式石室の規模は中型または大型であったと想定される。A44号墳の階層性もまた、中程度以上に位置付けられる可能性が高い。

四 A45号墳

①墳丘・周溝

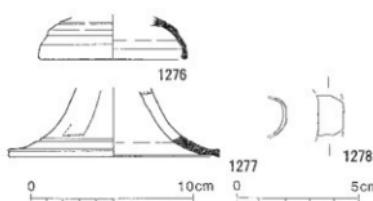
A29号墳の南西に隣接し、A36号墳の北約7mに位置する。墳丘盛土・周溝とともに確認されなかつたが、A29号墳の周溝の巡りを考慮すれば、A45号墳には周溝は当初より掘削されず、墳丘も極めて小規模なものであった蓋然性が高い。

②埋葬施設（第238図、図版90）

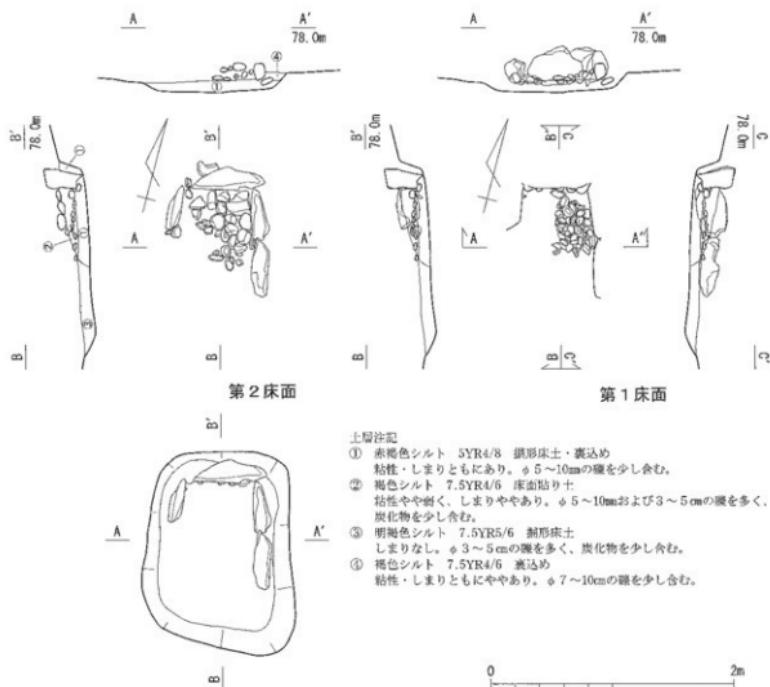
A45号墳は埋葬施設のみ確認された古墳であり、真南より少々南南東に向けて開口する小規模な横穴式石室が構築されている。石室形態は無袖式横穴式石室の可能性が考えられるが、確定には至らず、それほど残存状態は良くない。

玄室 奥壁には結晶片岩の大型板状角礫を長手置きして鏡石とし、高さ0.29mを測る。鏡石上方の本來の石材積載状況は不明である。左側壁は厚みの小さい中型板状角礫2石が長手置きされて残存し、基底石のみではあるが、残存高0.22mを測る。右側壁も同様の中型板状角礫1石が長手置きされ、右側壁最後端の基底石として残存し、高さ0.17mを測る。玄室プランは長方形を呈するように見えるが、両側壁の前端が失われているため、詳細は不明である。

敷石 玄室最後部の左側壁沿いを中心に敷石が上下2面残存する。下層の敷石はφ10cm以下の扁平円礫で敷設され（第1床面）、その上にやや厚く貼り土を施してφ10～20cmの扁平な円礫・角礫が敷かれている（第2床面）。第1床面が排水用の床込め礫でないことは、厚い貼り土の存在からも理解される。



第237図 A44号墳出土遺物実測図



第238圖 A45號墳石室：基底石塞測圖

基底石 左側壁最後端の基底石は鏡石の奥壁面に小口を当接させているが、右側壁最後端の基底石は鏡石を右から挟むわけでもなく、2石間に間隙が生じている。また、奥壁鏡石と右側壁基底石の下端には小型凹礫をそれぞれ数粒嵌ませ、玄石としている。

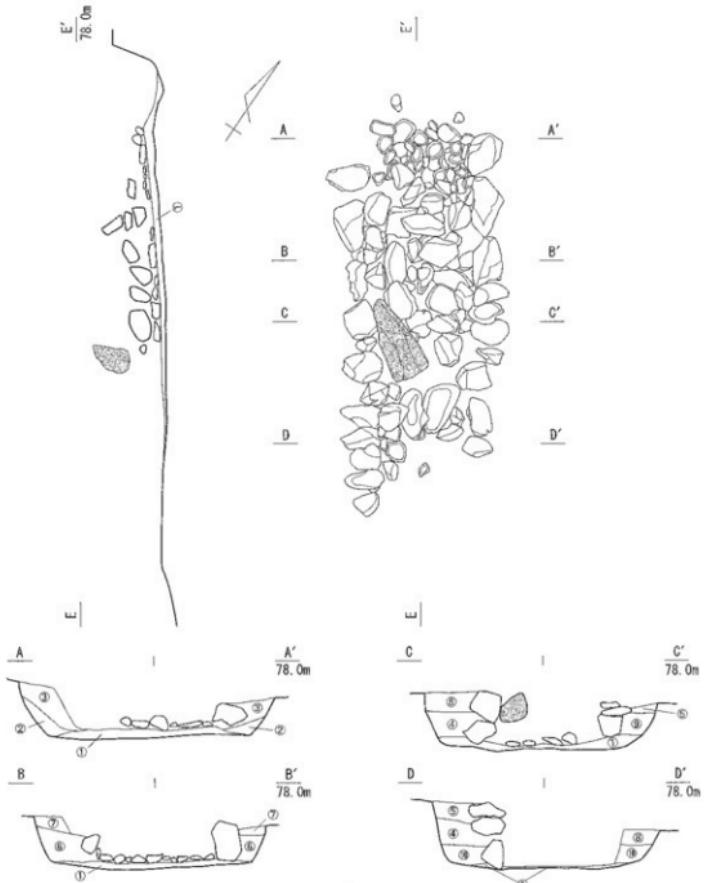
墓坑 墓坑は削平を受けているが、右壁が左壁よりも短い短台形プランを保持している。後壁では地山を0.18m以上掘り込み、残存する前壁上端まで厚く掘削床土を施している。墓坑の前端が明らかであるため、推定1号石室全長は1.4m以下とならざるを得ない。

③出土遺物

遺物は出土していない

①小结

出土遺物皆無のため、A45号墳の築造時期は不明であるが、A29号墳に接しながら、その兆域を侵さずに築造されていることから、A29号墳より後出すると考えられる。また、参道を共有すると考えられるA36号墳よりも北東に位置するため、A45号墳がA36号墳に先行するとは考え難い。よって、これら3古墳の相対的時期差を勘案し、A45号墳は遠江V期初頭以降に築造され、追葬も行なわれたと想定される。基底石の設置状況等より、規格性・計画性の稀薄な石室設計を行なったことが窺われ、階層性が低いとも推測できるが、むしろ横穴式石室の最末期形態を示していると考えるべきかもしれない。



上層注記

- ① 赤褐色シルト 5YR4/8 摃形床土
しまりややあり。礫をほとんど含まない。
- ② 赤褐色シルト 5YR4/8 裏込め
粘性やや弱く、しまりややあり。 ϕ 1~2cmの礫を僅かに含む。
- ③ にぶい赤褐色シルト 5YR4/3 裏込め
粘性弱く、しまり強い。 ϕ 1~2cmの礫を少し含む。
- ④ にぶい赤褐色シルト 5YR4/4 裏込め
粘性やや弱く、しまりややあり。 ϕ 1~2cmの礫を少し含む。
- ⑤ 明褐色シルト 5YR5/6 裏込め
粘性弱く、しまり強い。 ϕ 1~2cmの礫を少し含む。

- ⑥ 黄色シルト 7.5YR4/6 裏込め
粘性なく、しまりややあり。 ϕ 1~2cmの礫を少し、および有機質を含む。
- ⑦ 赤褐色シルト 5YR4/6 裏込め
粘性弱く、しまり強い。 ϕ 1~2cmの礫を多く含む。
- ⑧ 黄褐色シルト 7.5YR4/6 裏込め
粘性やや弱く、しまり強い。礫をほとんど含まない。
- ⑨ 赤褐色シルト 5YR4/6 裏込め
粘性やや弱く、しまりややあり。 ϕ 1~2cmの礫を少し含む。
- ⑩ 赤褐色シルト 5YR4/8 裏込め
粘性やや弱く、しまりややあり。礫をほとんど含まない。



第239図 A61号墳石室検出状況図

図 A61号墳

①墳丘・周溝

2区北東部の小尾根南斜面に立地し、A30号墳とA31号墳との間に位置する。墳丘盛土は流失しており、周溝も検出されなかった。

②埋葬施設（第239・240・242

図、図版91・92）

A61号墳は埋葬施設のみ確認された古墳であり、単室系擬似両袖式横穴式石室が構築されている。南南東に向けて開口し、残存状態はやや劣悪である。

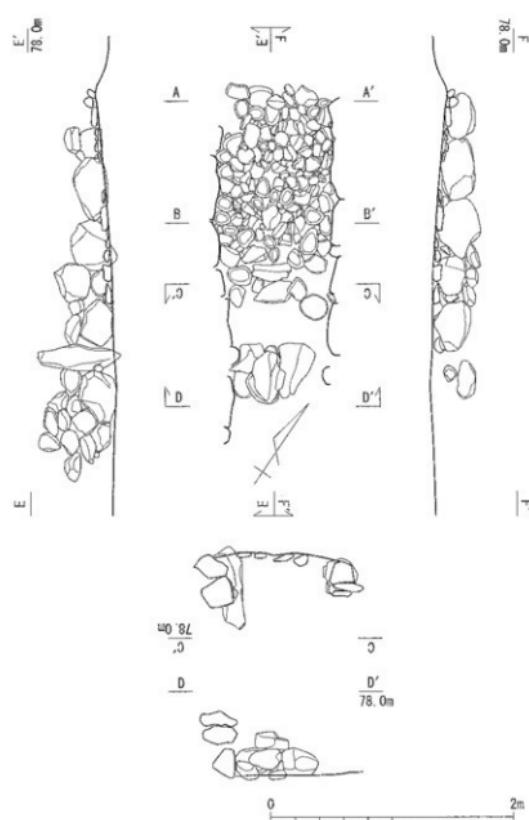
天井石 玄室前半部に長軸70cm、幅32cmを測る大型柱状角礫1石が転落しており、天井石と目される。長軸を石室主軸に斜交させ、右側壁に寄り掛かった状況で検出され、人為的擾乱の際に崩落したと推定される。

玄室 中央部に最大幅を有し、奥壁幅または玄門側幅が最も狭くなる胴張り形の玄室プランを呈す。奥壁には鏡石が据えられていた蓋然性が高いが、現在は失われており、後世に何らかの目的で抜き取られたと推定される。

側壁も残存状態が悪く、左側壁は最大2段、高さ0.36m残存し、右側壁は最大2段、高さ0.48m残存する。両側壁の基底石は中・大型の角礫を使用しているが、2段目は小型の角礫主体に小口積みされている。また、比較的顯著に持ち送り積みされていたと想定される。

玄室右側壁の前端に大型柱状角礫を立て据え、立柱石としている。高さ0.63m、側壁よりの突出は0.1mを測る。右立柱石に相対する左立柱石は失われており、奥壁同様に抜き取りに遭ったと推定される。

羨道 失われた左立柱石の前方の左側壁は2段2石しか残存しておらず、羨道左側壁は壊滅状態である。一方、羨道右側壁は比較的良好に残存し、最大4段、高さ0.59mを測る。右立柱石に接する基底石は中型でも大振りの角礫であるが、その他は小型角礫が用いられ、小口積みされている。玄室のように顯著な持ち送り積みは看取されず、目地通りも捉えることはできない。また、右立柱石の羨道側壁よりの突出は7cmを測る。



第240図 A61号墳石室・閉塞石実測図

敷石 玄門側を除く玄室床面の約4/5に敷石が敷設されている。多くはφ10~15cmの扁平円礫であるが、φ30cmを超える角礫も若干存在する。

閉塞石 玄門に閉塞石が積載されており、最大3段、高さ0.4m残存する。長軸40cmを超える、閉塞石としては相当大型の角礫を小口積みしている。また、閉塞石の左端部分は失われているが、恐らく左立柱石の抜き取りの際に崩落したと推定される。

基底石 大勢としては、基底石は長手面を内側に向けて設置されている。玄室側壁が玄門に向かって前窄まりを開始する箇所は、やや小型の角礫を小口置きしている。羨道は前半部が失われているが、基底石の状況から、羨道はハの字形に前方へ開く、または胴張り形プランのいずれか一方であったと考えられる。

墓坑 後壁で地山を0.38m以上掘り込んだ長方形プランの墓坑が施設されている。奥壁基底石、恐らく鏡石および左

右立柱石に対して設置用小土坑が鋤削されている。なお、墓道は確認されなかった。

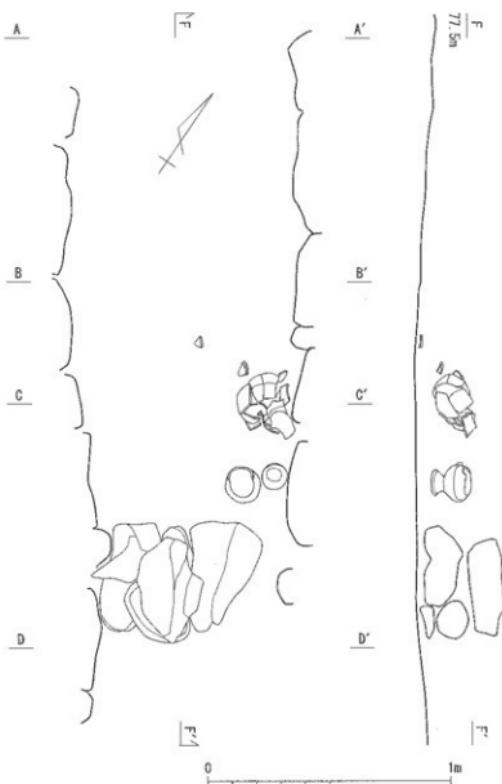
③遺物の出土状況（第241図、図版91）

玄室前半部左側壁沿いにおいて、須恵器フラスコ形瓶1280と土師器脚付盤1282およびその蓋1281が前後に並んで出土した。1280は破碎された状態で、1281は1282より外れて裏返った状態で確認されたが、1282は正立した状態で出土している。ほぼ追葬終了時の原位置を保持していると考えられ、少なくともこれらが配置された時、玄室床面の玄門側約1/5に敷石は敷設されていなかったと推定される。また、墳丘が存在したと思しき箇所より須恵器（1279）が出土した。

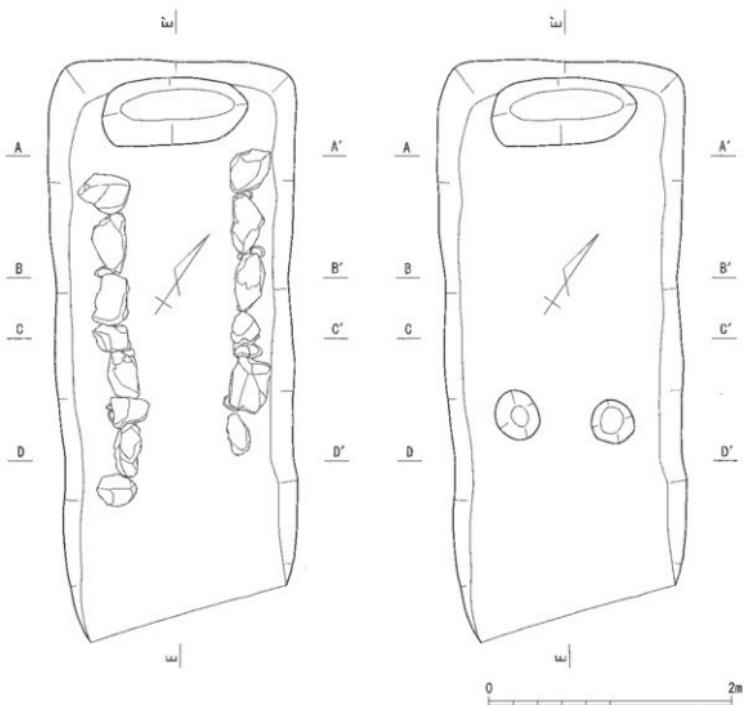
④出土遺物（第243図、図版12・146）

須恵器 1279は瓶類頸部で、時期不詳である。フラスコ形瓶1280はほぼ完形に接合され、器種としての下限は遠江IV期末葉であるが、口縁部の断面形は無蓋台付長頸壺では同V期に盛行する形態を呈す。

土師器 盆蓋1281は頂部に摘みを有し、内外面ともに横位の笠磨きが施され、器表全面が赤彩されている。脚付盤1282も器表全面に縦位および横位の笠磨きを施し、全体に摩滅しているが、1281同様に赤彩



第241図 A61号墳石室遺物出土状況図



第242図 A61号墳基底石・墓坑実測図

されていたと推定される。遼江IV期後半の須恵器脚付盤を模倣して製作されたと考えられ、やはり同時期に比定される。また、2点ともにはば完形品である。

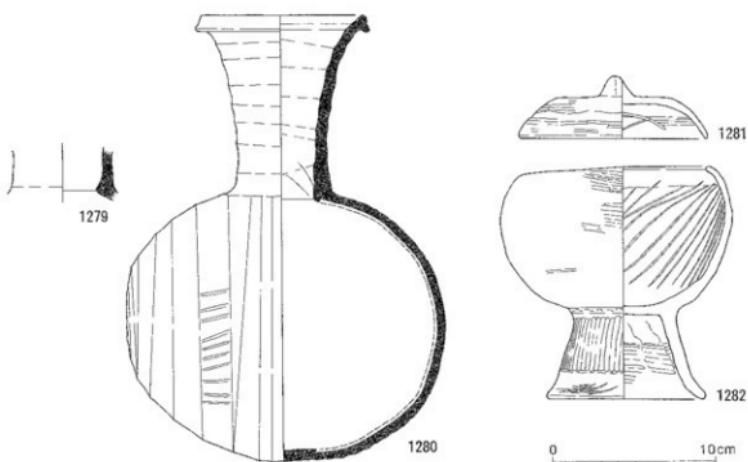
⑤小結

A61号墳は石室出土遺物より遼江IV期後半に築造されたと判断され、追葬があったとすれば、同IV期末葉に行なわれた可能性がある。単室系擬似両袖式横穴式石室としては中程度の石室規模であり、大屋敷A古墳群におけるA61号墳の階層性も中程度に位置付けられる。

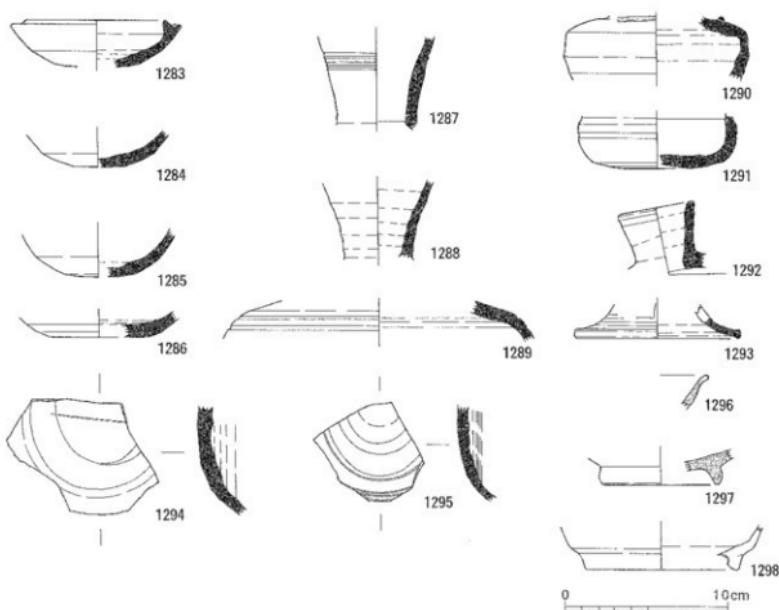
3 古墳外の出土遺物（第244図、図版146）

前項において報告した2区の古墳23基に何らかの形で伴う遺物以外にも、重機または人力による表土除去の過程で出土した遺物や、遺構面の精査過程において古墳とは離れた地点で出土した遺物がある。本項では種類別に各時期の2区古墳外出土遺物を報告するが、全て土器である。

須恵器 1283～1286は坏身である。1283は遼江IV期前半に比定され、1284・1285は遼江IV期後半の可能性があるが、1286は同IV期前半以前の形態と考えられる。1287は外面中央に沈線を有し、脚付長頸壺の頸部であれば、遼江IV期前半に比定される可能性がある。長頸壺体部上半1289は最大径が肩より下にあ



第243图 A61号填出土遗物实测图

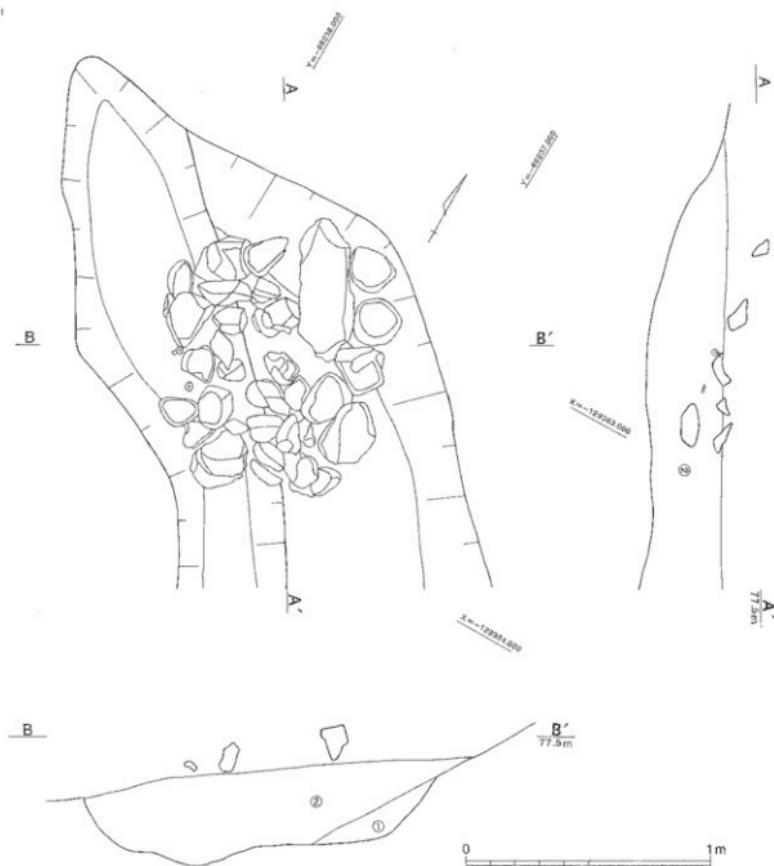


第244图 2区遗物外出土·表面采集遗物实测图

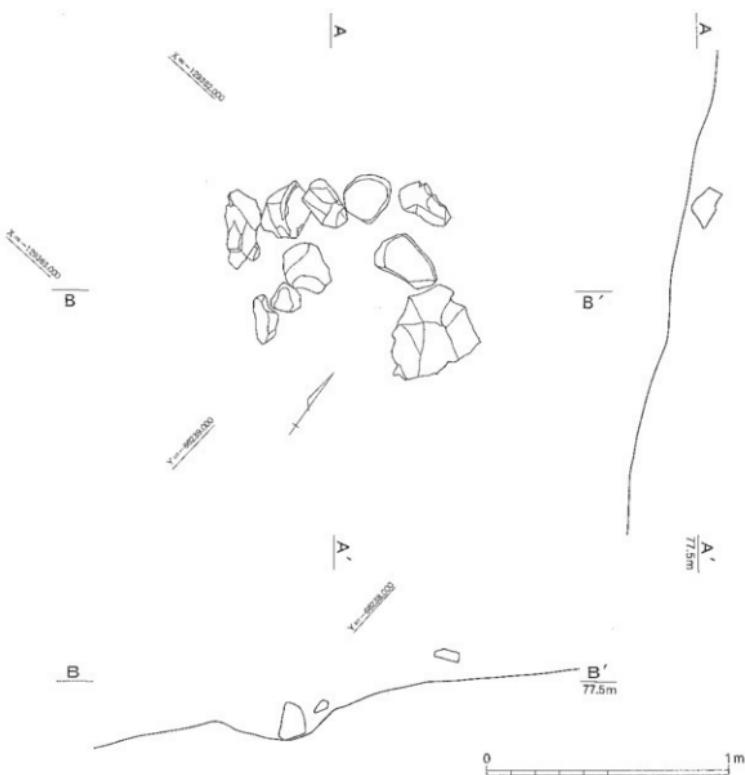
り、遠江IV期末葉～V期初頭に比定される。短頸壺1290は肩が張り、深く下降する体部を呈し、体部上半には丸棒状の突帯を有す。遠江III期末葉に比定される可能性がある。壺1291は体部が下彫れで、口縁部が外反する様相を呈し、遠江III期後葉に比定される。平瓶口頸部1291は縦に短く、遠江III期後葉以前の可能性がある。長脚二段透孔高坏脚部1293は遠江III期後葉に比定される。1294・1295はフラスコ形瓶の体部であれば、器種としての所属時期は遠江III期末葉～IV期末葉に認められる。

土師器 坯1298はロクロ成形で底部に高台を貼り付け、遠江V期前半の須恵器坏身の模倣品である。

灰釉陶器 碗口縁部1296は緩やかに外反し、前掲松井氏編年の宮口古窯跡群灰釉陶器III期-2に比定される。碗底部1297は断面が三角形状に近い三日月高台を有し、松井氏編年の宮口古窯跡群灰釉陶器III期-1に比定される。



第245図 SX01実測図



第246図 SX02実測図

4 古墳以外の遺構

K51グリッド北西部、A45号墳の西約3mに性格不明の集石遺構SX01・02が存在する。

(1) SX01 (第245図、図版92)

長軸2.5m以上、最大幅1.3m、深さ0.37mの溝状に近い土坑にややしまりのある明褐色土（①層）としまりのない暗褐色土（②層）を充填し、その上にφ10~60cmの円礫・角礫を埋集させ、約1m四方の集石としている。集石の疊間より渡来鉄3点が出土し、詳細は本章第5節で後述するが、当遺構が中世墳墓であれば、六道鏡の可能性が考えられる。

(2) SX02 (第246図、図版92)

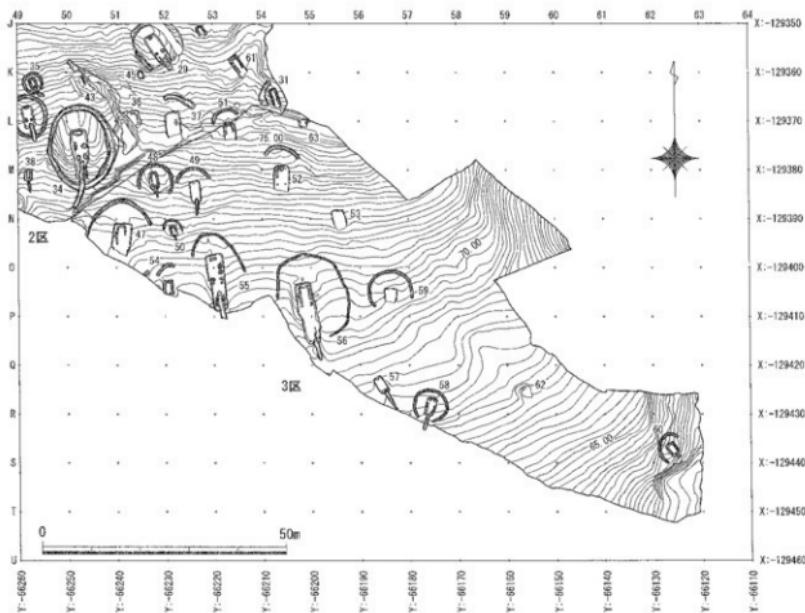
SX01の直北に位置する集石遺構であるが、SX01と異なり、土坑状の下部構造を伴わない。長軸1m、短軸0.8mの方形プランを呈する集石を構成する礫はφ20~40cmの円礫・角礫であるが、現状は甚だ疊らである。また、礫間より遺物は確認されなかった。

第4節 3区の調査成果

1 3区の概要（第247・248図、図版5・14）

3区は平成17年度を中心に発掘調査が実施され、調査表面積は5,500m²、確認された古墳は16基を数える。このうち、埋葬施設のみが検出され、周溝が確認されなかつた古墳が3基（A53・A57・A62号墳）、一部または大部分が調査区外に連続し、全墳検出は果たせなかつた古墳が4基（A47・A54・A55・A63号墳）存在する。3区の古墳のうち、墳丘・石室の規模が大きい、または情報量の比較的多い古墳は当区北西部の調査区南辺付近に集中しており、調査区外南側に連続する古墳も見られるため、この領域の調査区南壁を精査し、総延長約65mにわたって土層断面を記録した（第248図）。これにより、大屋敷A古墳群は3区外南側にも比較的良好に残存している可能性が高まった。

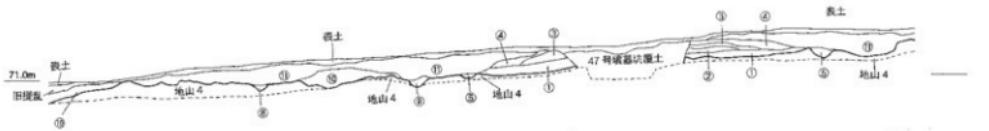
3区は大屋敷A古墳群の立地する丘陵の舌部に相当し、2区東端から南東に向かって傾斜下降する段丘状地形を呈す。この段丘状地形は河床の地形でもあり、3区の北約100mの地点に連続し、ここに当古墳群の石室に使用された石材が豊富に存在する。また、3区の河床地形は当区が天竜川の旧流路であったことを示唆しており、その年代は第3間水期（約13～8万年前）と推定される。現在の地形としては、今回の調査区は1区から東方ほど急峻さを減じ、3つの調査区のうち3区が最も緩やかで起伏の少ない斜面となっている。



第247図 3区調査後地形測量図

X-129409.442
Y -61219.132

X-129390.424
Y -66249.100

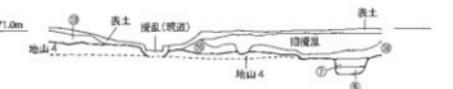


土層注記

- ① 暗赤褐色シルト 5YR3/4 47号填埋堆土
粘性・しまりともなし。φ 5~10mmの礫を多く含む。
- ② 明赤褐色シルト 5YR5/6 47号填埋堆成土
粘性・しまりともなし。φ 5~30mmの礫を隙間に含む。
- ③ 橙暗赤褐色シルト 5YR2/4 47号填埋堆盛土
粘性・しまりともなし。φ 3~5 cmの礫を隙間に含む。
- ④ 暗褐色シルト 5YR4/6 47号填埋堆土
粘性・しまりともなし。φ 1~2 cmの礫を隙間に含む。
- ⑤ 暗赤褐色シルト 5YR3/4 47号填埋堆覆土
粘性・しまりともなし。φ 5~30mmの礫を隙間に含む。
- ⑥ 55号填埋堆量図②層に同じ。
- ⑦ 55号填埋堆量図③層に同じ。
- ⑧ 暗赤褐色シルト 5YR3/4 54号填埋堆覆土
粘性・しまりともなし。φ 5~20mmの礫を隙間に含む。
- ⑨ にぶい赤褐色シルト 5YR4/4 54号填埋堆土
粘性・しまりともなし。φ 5~10mmの礫を隙間に含む。
- ⑩ 明赤褐色シルト 5YR5/6 流入土
粘性なく、しまり強い。φ 5~20mmの礫を隙間に含む。
- ⑪ 明褐色シルト 7.5YR5/6 流入土
粘性なく、しまり強い。φ 5~20mmの礫を多く含む。

X-129406.175
Y -66208.956

X-129409.442
Y -66219.132



X-129420.003
Y -66199.393

X-129406.317
Y -66208.546



第248図 3区北西部調査区南壁セクション図

2 古墳

(1) A47号墳

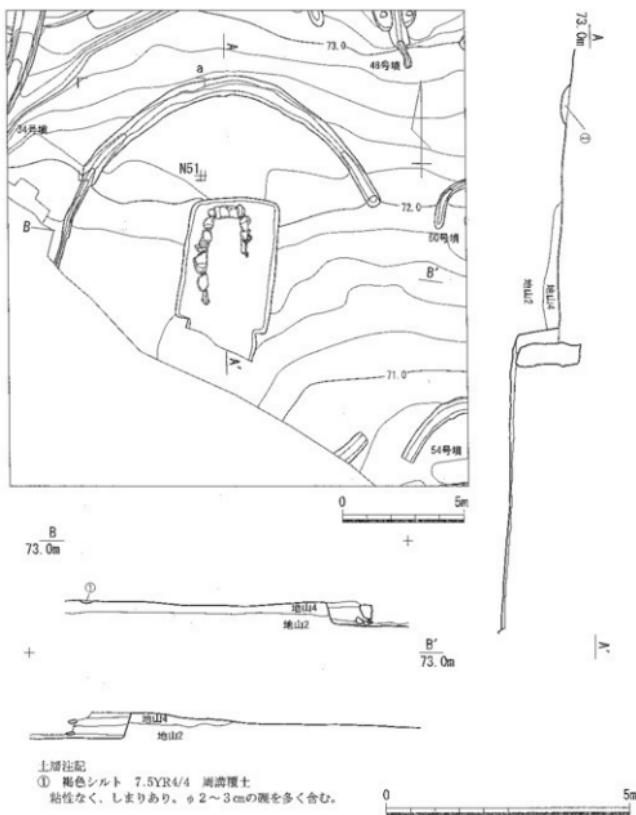
① 墳丘・周溝（第248・249図、図版7）

3区西端に位置し、2区A34号墳の南南東に旧河岸段丘の段差を挟んで対峙している。また、古墳の南部は調査区外南側に連続する。墳丘盛土は調査区内に遺存していたが、重機による表土除去の過程で削平してしまった。周溝も本来は調査区内に掛かる部分は全て検出し得たはずであるが、東側の大部分を今回調査で使用した重機により喪失している。その代わり、ではないが、調査区南辺の壁面セクションにA47号墳の墳丘・周溝が現れ、良好に残存していることが明らかになった。墳丘盛土は4層から成り、残存高0.9mを測る。周溝により囲まれる範囲は東西13m、南北15m以上を測り、南北に長い楕円形プランの円墳を呈す。

② 埋葬施設（第250～252・254・255図、図版93～95）

古墳の中央に横穴式石室が構築されており、開口部は恐らく調査区外に存在する。当古墳群では長大な石室と言えるにもかかわらず、前半部分の残存状態が劣悪なため、石室形態は不明である。現状の石室は真南北方向に主軸を有す。

天井石 玄室後半部に長軸135cmを測る大型柱状角礫1石が、石室主軸に対してやや直交に近い角度で斜交した状態で転落しており、天井石と目される。



第249図 A47号墳墳丘図

玄室 玄室長および羨道の有無は不明であるが、中央部に最大幅を有する胴張り形の玄室プランを呈す。奥壁は巨石とも称し得る大型板状角礫を縦置きし、高さ1.43mの鏡石としている。鏡石の基底部左右には小型角礫が多数積載され、さらにこれらの小型角礫を両側壁最後端の壁材が鏡石との間に挟み込み、尖底の鏡石を支えている。

左側壁は最大2段、高さ0.62m残存し、2段目に現状最大の大型角礫を使用しており、その他の構造材とともに長手積みされている。右側壁も大型角礫主体に長手積みされ、最大3段、高さ0.83m残存する。両側壁とも構造材の間隙を小型角礫で充填し、基底石から持ち送り積みが始まっている。残存する部分を見る限り、両側壁に整然たる目地通りは認められない。

敷石 残存状態は良好とは言えないが、φ5~25cmの円礫・角礫から成る敷石が敷設された範囲は甚だ長大であり、調査区外に広がる様相を呈している。この敷石が残存する範囲を全て玄室の床面と捉えるか、擬似両袖式横穴式石室の羨道にも敷石が敷設されたと見做すか、判断の分かれるところである。

基底石 基本的に大型角礫を長手置きして基底石としているが、右側壁最大の基底石の直後2石は中型角礫が小口置きされており、この箇所で石材の長さを調整したことが窺われる。両側壁最後端の基底石一对は奥壁を左右より支える必要から、奥壁の側面に長手面全面を当接している。

墓坑 羽子板形プランを呈する墓坑が後壁で地山を0.93m以上掘り込んで施設されている。この墓坑内の右寄りに石室が構築されているが、真南北方向の石室主軸に対し、墓坑の主軸が8°10'東偏していることが注目される。単純に墓坑・石室のいずれかの設計ミスと捉える向きもあろうが、より合理的な説明も可能と考えられ、このことは第4章第1節で後述する。

墓坑には奥壁鏡石と右側壁の基底石2石の計3石に対応する設置用小土坑が掘削されているが、いずれも設置された石に対して規模が小さい。また、墓坑の前部は調査区外に連続するため、墓坑前端に付設する墓道は確認されていない。

③遺物の出土状況（第253・256図、図版95）

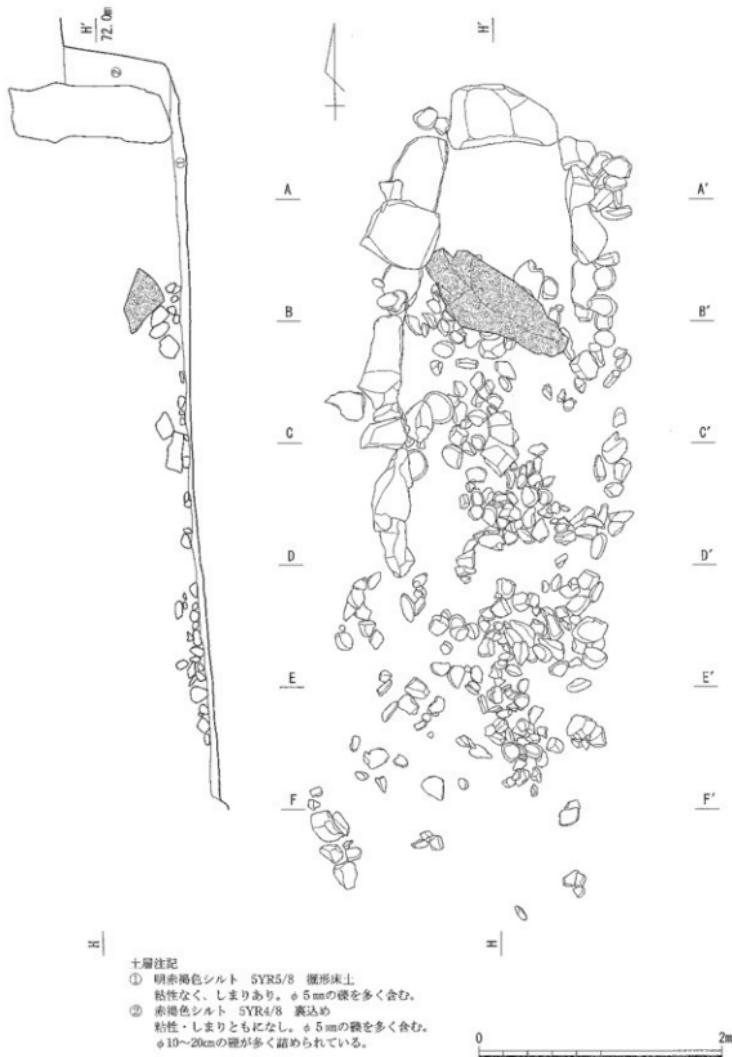
玄室後半部に転落していた天井石の直下より耳環1点（1349）が出土した。石室内では玄室前半部または羨道の可能性がある部位の床面より多数の須恵器（1299・1300・1302・1303・1306・1307・1311・1314～1326・1337・1340・1341）が出土し、敷石同様に調査区外へ広がる様相を示している。また、山茶碗1点（1345）も一群の須恵器に混入した状態で出土し、13世紀には盜掘その他の目的で石室が侵入または破壊され、ほとんどの遺物は追葬終了時の原位置をとどめていないと考えられる。なお、石室覆土の築作業により鉄製品数片（1346～1348）が検出された。

周溝では北西部に多数の須恵器（1301・1304・1305・1308～1310・1312・1313・1327～1335・1338・1339・1343・1344）が集中して出土した。多くは覆土の中途で確認されている。墳丘盛土直上からも須恵器（1342）が出土し、墓坑右壁の擾乱においても須恵器（1332・1336）が確認された。

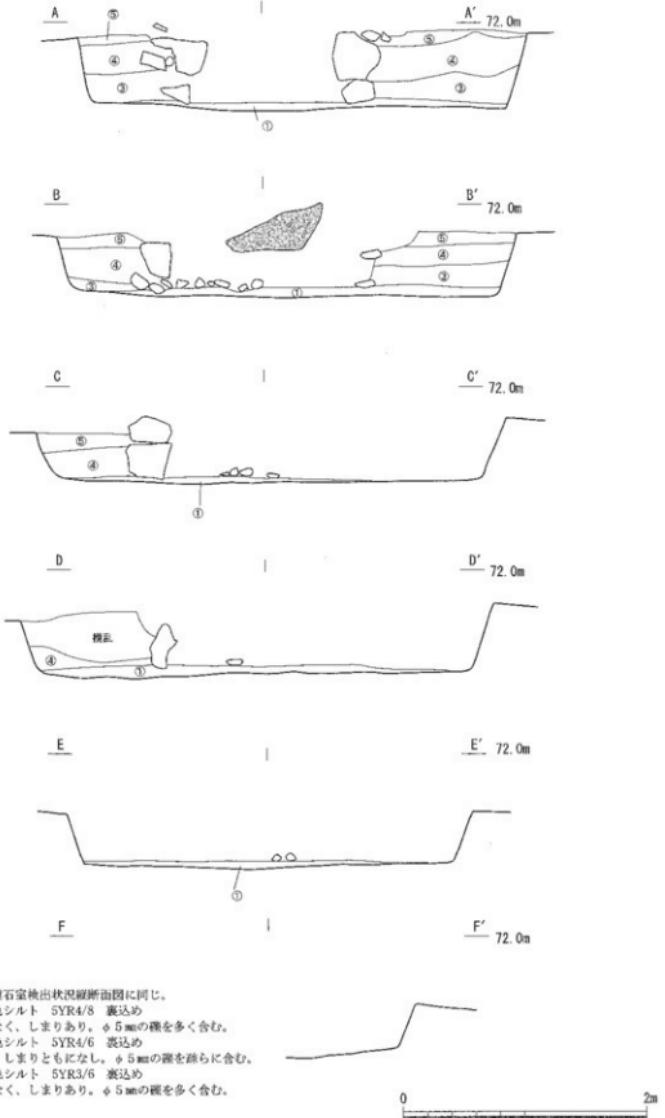
④出土遺物（第257・258図、図版13・147・148）

須恵器 1299～1303は坏蓋である。1299・1300は完形品で、口径に対して器高が大きく、体部外面中央に凹線文が施されており、遠江III期末葉に比定される。1301・1303は遠江IV期後半に比定される。1302は摘み径が比較的大きく、口縁部付近に返りがあるタイプなら遠江IV期末葉、返りを持たないタイプなら同V期初頭に比定される。坏身1304・1305は遠江IV期前半に比定される。1306～1313は短頸壺である。1306・1308・1309・1310は肩部に沈線を施す肩折れ形態で、口縁部はやや外反し、遠江V期初頭に比定される。1307・1311・1312は肩折れとはならず、口縁部も垂直に立ち上がることから、遠江IV期末葉に比定される。1313は体部上半に浮文を貼り付けているが、時期は特定し難い。

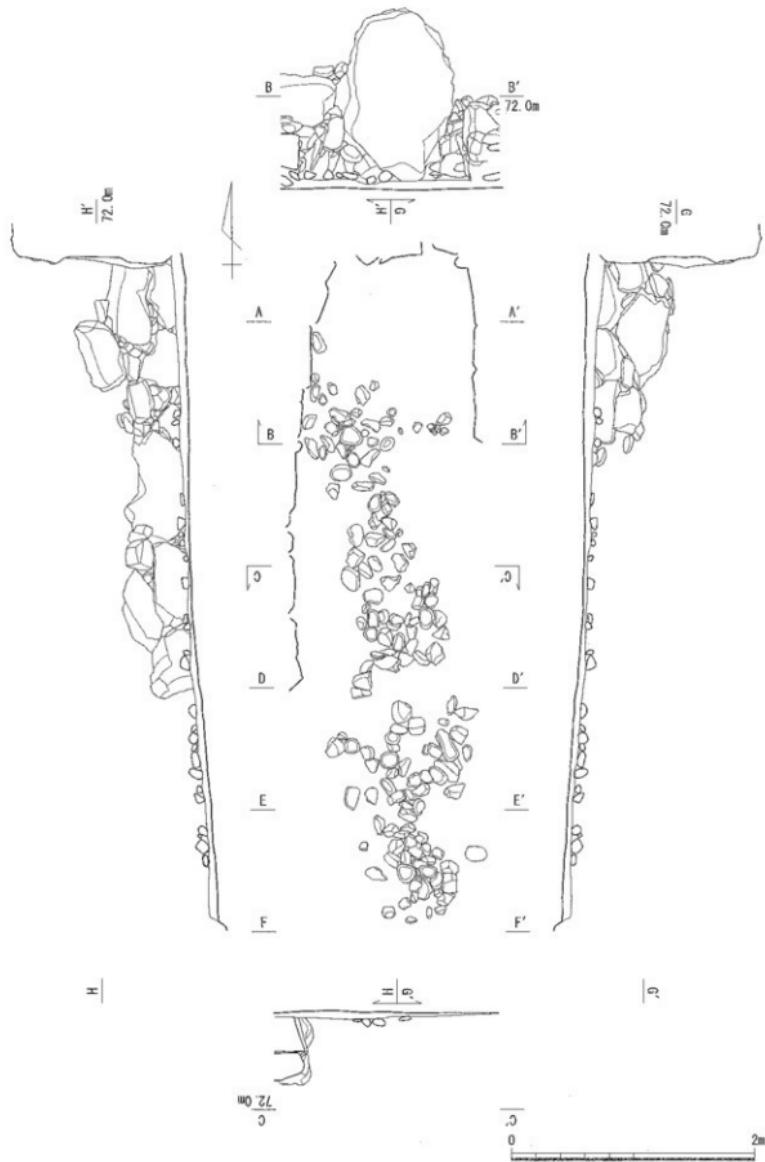
1314～1317は無蓋高坏の坏部であり、1318～1321は恐らく無蓋高坏の脚部である。また、1322～1326は完形品の、或いは完形に復原し得た無蓋高坏である。1314は見込みが小さく、遠江IV期前半に属する可



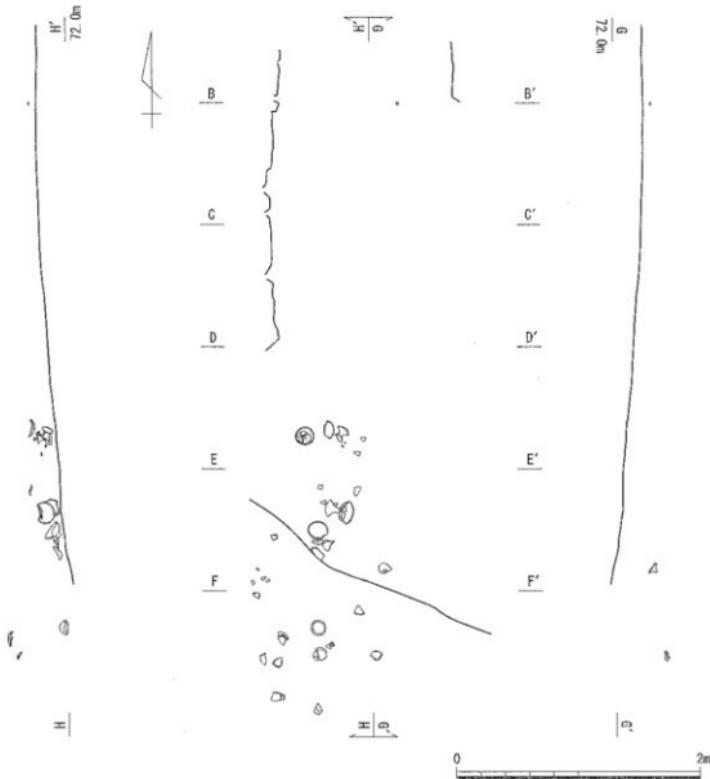
第250図 A47号填石室検出状況図



第251図 A47号填石室検出状況横断面図



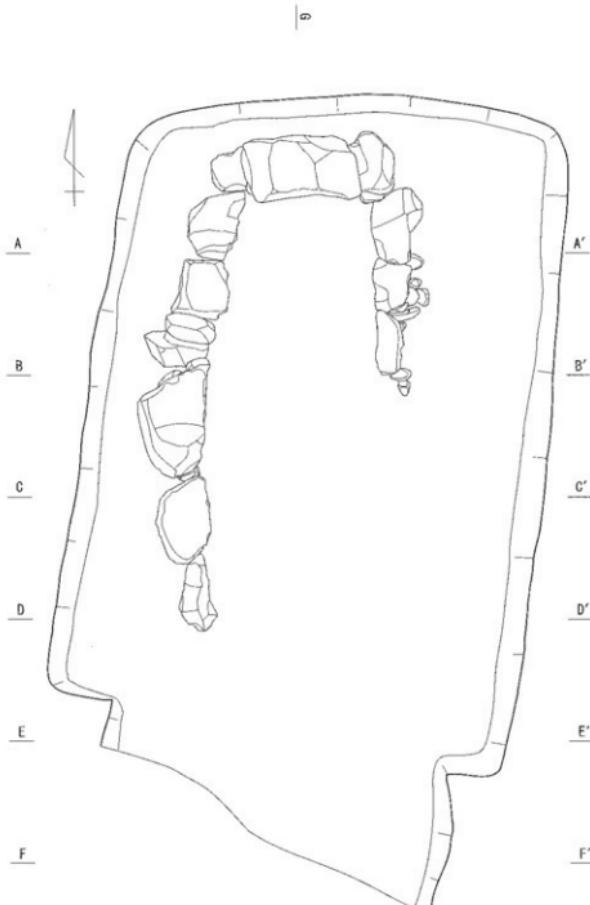
第252図 A47号填石室実測図



第253図 A47号墳石室遺物出土状況図

能性がある。1315も遠江IV期前半に比定できるか。1316の坏部は深く、遠江IV期末葉～V期初頭に比定される。1317は遠江V期前半に比定される。1319は遠江III期末葉の可能性があり、1318・1320・1321は遠江IV期後半～末葉に認められる。1324の脚部には透孔はないが、沈線により上下2段に区画され、遠江III期末葉に比定される。1326は遠江IV期前半に比定される。1322は遠江IV期後半の所産か。1323は遠江IV期末葉に比定されるが、脚部内外面に直角工具により長方形透孔の痕跡器官のような三方の凹みが施されている。1325の脚部には長方形二段透孔が穿たれているが、高坏の長方形透孔としては幅が広く、このような幅広の長方形二段透孔は遠江IV期末葉の高盤にも施されている。また、1325の坏部の口縁部は内彎し、1325は坏部と透孔の特徴から遠江IV期末葉に比定される。

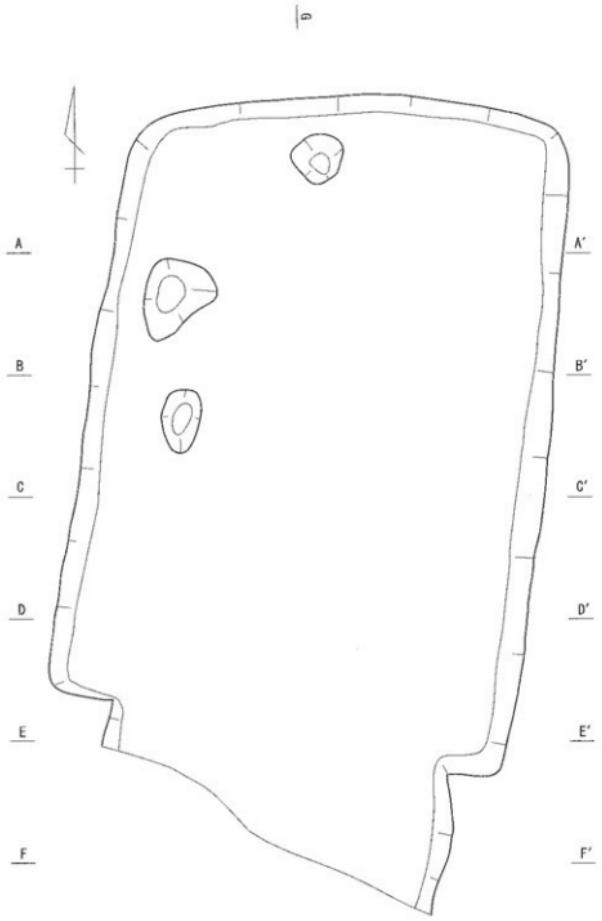
1327～1331は壺蓋であり、1329～1331は頂部から放射状に櫛搔き列点文が施文されている。1327～1330は遠江IV期前半に、1331は同IV期後半に比定される。1332は口縁部断面が三角形を呈し、口縁部直下に突帯状の段を有する大型平瓶の口頭部であり、遠江IV期前半に比定される可能性がある。瓶類口頭部1333は遠江IV期前半～後半の範囲に認められる。1334は平瓶の口頭部ならば遠江IV期末葉に比定されるか。



◎



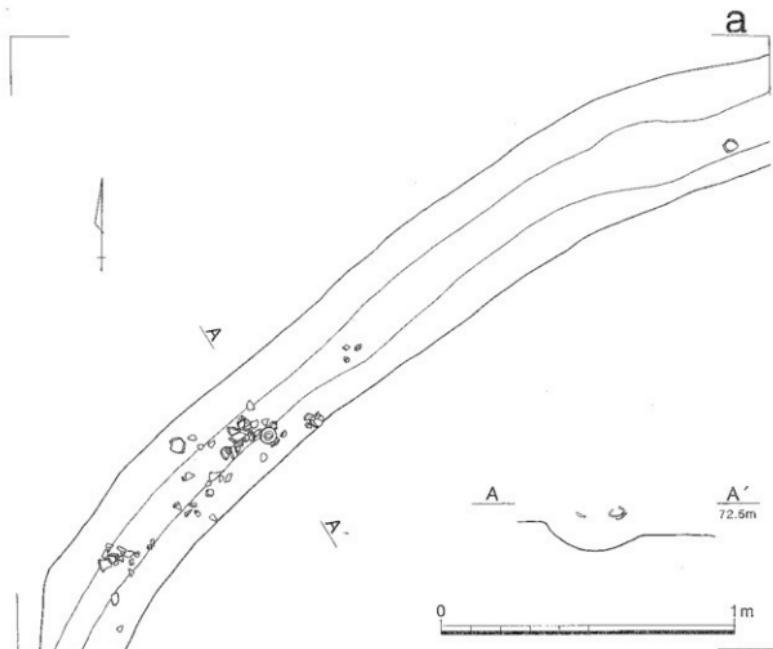
第254圖 A47號墳基底石測圖



| 9



第255圖 A47號墓坑實測圖



第256図 A47号墳周辺遺物出土状況図

平瓶1336は口径に対し頸部が長くなく、遠江III期末葉に比定される。平瓶体部1337は遠江IV期前半の所産である。1343・1344は脚付長頸壺であり、遠江IV期前半に比定される。

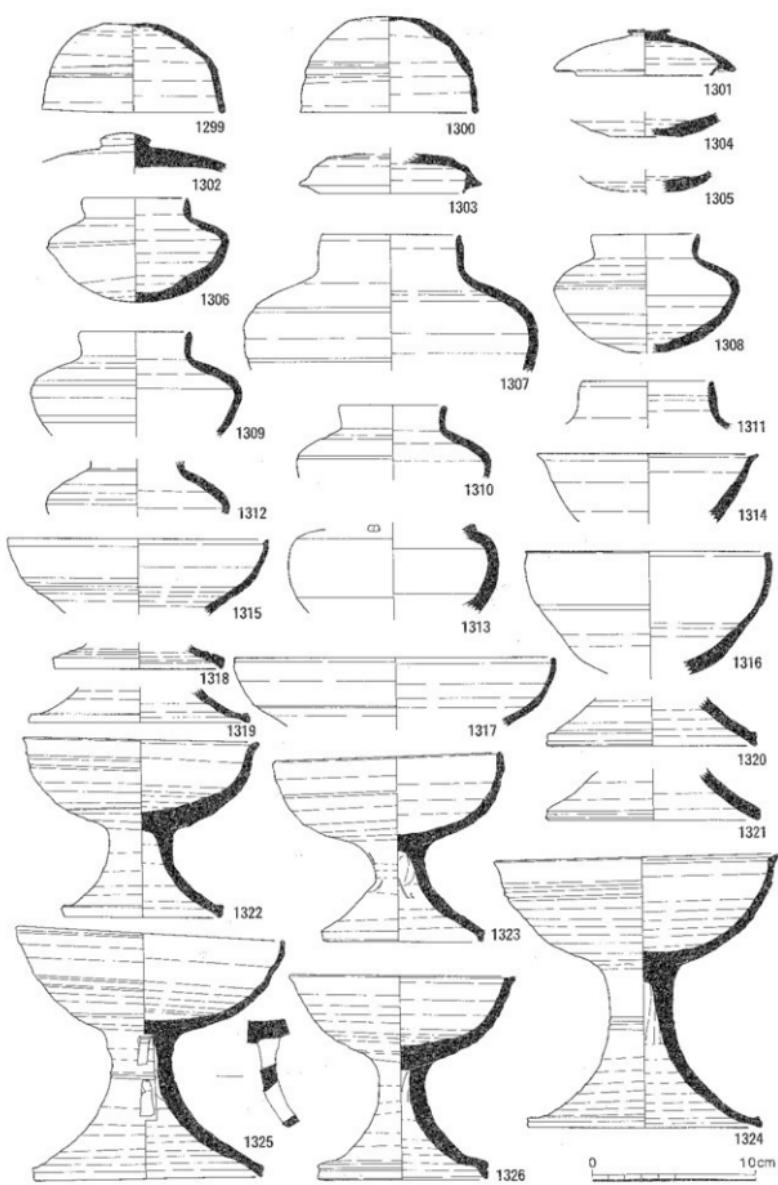
山茶碗 瓢1345は外反しない口縁部、低い器高、粗雑に貼り付けられた矮小な高台等の属性より、前掲松井氏編年の山茶碗III期-1に比定され、13世紀前半の所産と考えられる。

金属製品 1346は恐らく長頸罐の頸部片である。刀子の茎片1347は、損壊した前方が開いてしまっている。瓢1348は幅の法量から刀子の部品と考えられ、内面に柄の木質が付着残存する。

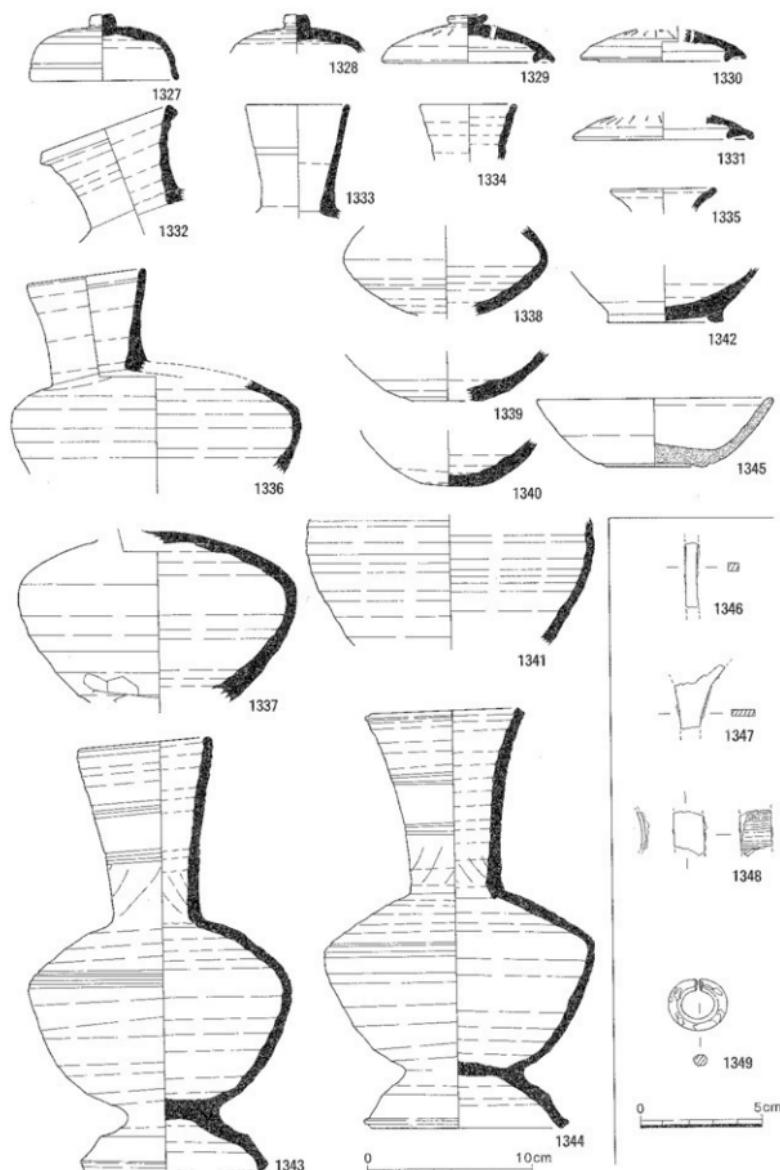
耳環1349は銅芯銀銅張製で、銀鍍金の剥落が目立つ以外は完形である。

⑤小結

A47号墳は出土遺物より遠江III期末葉に築造され、大屋敷古墳群全体として廃絶していく同V期前半までの長期間にわたり追葬が継続したと判断される。石室および個々の石材の規模から階層性はA古墳群内で上位に位置付けられるが、墓坑と石室の主軸が大きく異なることからも、当古墳群において廟を唱え得るほどの地位にはなかったと想定される。このことは、埋葬施設の設計ミスという技術力の低さを評価しての階層的位置付けではない。それは、A47号墳単独の問題ではなく、周辺各古墳との社会的関係において論じられるべき問題であると考えられ、第4章第1節であらためて考察したい。



第257図 A47号墳出土土器実測図 その1



第258図 A47号墳出土土器実測図 その2・金属製品実測図

(2) A48号墳

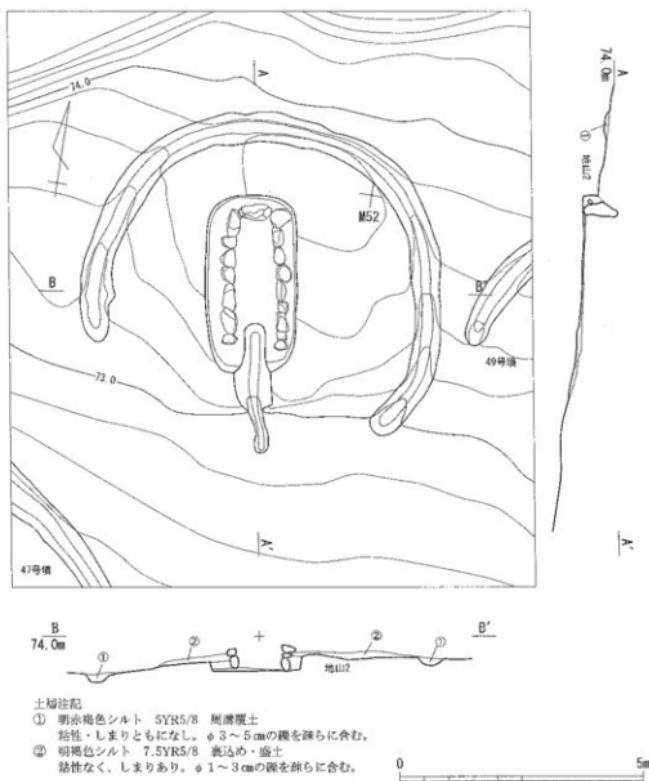
①墳丘・周溝（第259図、図版96）

A47号墳の北側周溝より北東約5m、2区A37号墳の南南西約7mに位置し、A49号墳に西接する。また、2区A34号墳の東南東に旧河岸段丘の段差を挟んで対峙している。墳丘は大きく削平されてはいるものの、石室の裏込めより連続する墳丘盛土が1層、古墳の南部に遺存する。その最大残存高は0.16mを測り、上端レベルは残存する石室側壁よりのそれよりも低い。周溝は全体の約5/8が検出され、南～南西側は恐らく失われている。周溝により囲まれる範囲は東西6.3m、南北5.7mを測り、当古墳群では例外的に東西に若干長い円形プランの円墳を呈す。

②埋葬施設（第260～263図、図版96～98）

古墳の中央より僅かに西寄りに無袖式横穴式石室が構築されている。真南より若干南南東に向けて開口し、残存状態は概ね良好である。

玄室 玄門付近から後半部まで幅が一定し、奥壁幅が最小となる奥窄まり形の玄室プランを呈す。奥壁



第259図 A48号墳墳丘図

には黒色チャートの大型板状角礫を立て据えて高さ0.68mの鏡石としているが、石材としては良質ではない。鏡石の上端にも崩落石材が検出されていることから、鏡石の上方にも石材が積載され、奥壁は現状よりも高かつたと想定される。

側壁の石材はチャートまたは砂岩の中・小型円礫主体で、右側壁には大型角礫も用いられている。また、左右両側壁に花崗岩が2石ずつ使用されている。両側壁ともに2段目以上を小口積みして内側へ持ち送っており、左側壁は最大4段、高さ0.51m残存し、右側壁は最大3段、高さ0.59m残存する。左側壁では少しは目地通りが意識されているように見えるが、右側壁には目地通りの志向が全く認められない。

敷石 奥壁より前方約3/5の玄室床面に敷石が敷設されており、築造当時の状況をほとんど保持していると考えられる。石材としては砂岩主体であるが、花崗岩も少々用いられている。φ20~30cm前後の、敷石としては大振りの扁平円礫がまず敷設され、その間隙をφ10cm

- 土層記
 ① 褐色シルト 7.5YR4/6 摩擦床土
 粘性なく、しまりややあり。
 φ5mmの礫を多く含む。
 ② 赤褐色シルト 5YR4/8 裏込め
 粘性・しまりともにややあり。
 φ5mmの礫を混じに含む。
 ③ 褐色シルト 7.5YR4/6 裏込め
 粘性なく、しまりややあり。
 φ5mmの礫を疏らに含む。
 ④ 4号埴埴丘測量標②層と同じ。

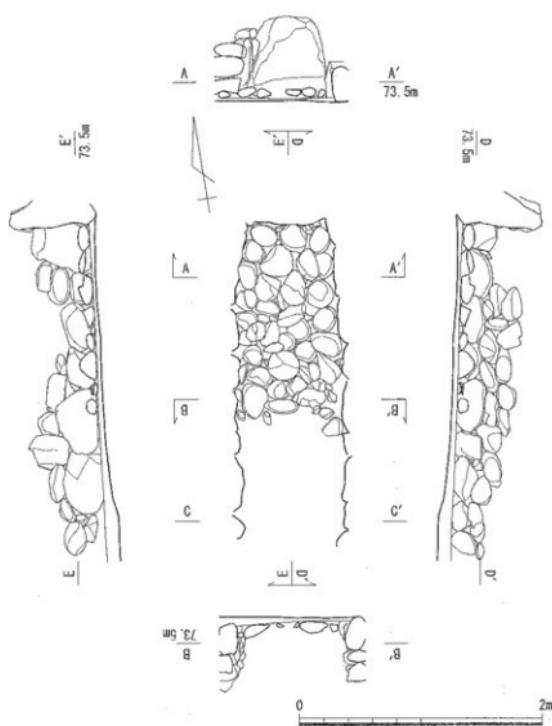
第260図 A48号墳石室検出状況図

未満の円礫・割損円礫で充填している。中には相当の厚みを有し、扁平円礫とは呼称し難いものも認められる。

閉塞石 玄門の直後より後方約3割の玄室床面を閉塞石が占拠しており、上部は埴丘・埋葬施設上半部

とともに削平されているが、横からの攪乱は受けていない。つまり、最終追葬終了後に開口部から侵入された形跡はなく、閉塞石の残存状態は良好と言つてよい。良好に残存していたがゆえに、調査当初は閉塞石のうち玄門に最も近い部分を堅穴系横穴式石室の前壁と誤認しそうなることもあった。側壁に積載されている石材と同様の小型円礫を小口積みし、最大4段、高さ0.48m残存する。

基底石 基底石には主として大・中型の角礫・円礫が長手置き、または長手面を内側に向けて設置されているが、側壁・石材の長さ調整のために小口置きされているものもある。この中で、奥壁鏡石を挟み込む左側壁最後端の基底石は中型でも大型に近い円礫であり、要



第261図 A48号墳石室実測図

石的な存在であるはずにもかかわらず、小口置きされている。石室プラン全体としては均整のとれた奥窄まり形であるが、その設計は計画性が乏しかったことを示す1石である。なお、左右側壁の現状最前端は対しておらず、右側壁の前方に本来もう1石の基底石が存在し、左側壁の現状最前端の基底石とともに玄門を形成していたと想定される。

墓坑・墓道 圓丸長方形プランを呈する墓坑が施設されており、後壁は高さ0.3m残存する。奥壁鏡石に対して設置用小土坑が掘削されている。墓道は溝状掘り込みを墓坑内に食い込ませ、玄門後方にまで達している。また、墓坑前方中途より墓坑・石室の主軸から逸脱し、やや東に振れて3区西部の渓谷に向かって伸延する。墓道は前端より0.9mが極端に細くなっているが、これはこの箇所の削平が当古墳の他の部分より甚だしく、本来の墓道の下端付近しか遺存していないかったためである。従って、本来の墓道の掘り込みは現状より長かったと想定される。

③遺物の出土状況（第262図、図版98）

遺物は専ら石室内で出土した。玄室最後部左側壁沿いの床面直上において、鉄鏃・刀子といった鉄製武器（1358・1360・1368～1370）が幾分まとまって確認されている。また、玄室中央部かつ閉塞石北側の床面直上では、須恵器（1350～1357）が集中して出土しているが、最終追葬終了時の原位置を保持し

ていないと考えられる。なお、石室覆土の築造作業により、鉄鏹片（1359・1361～1367）が検出された。

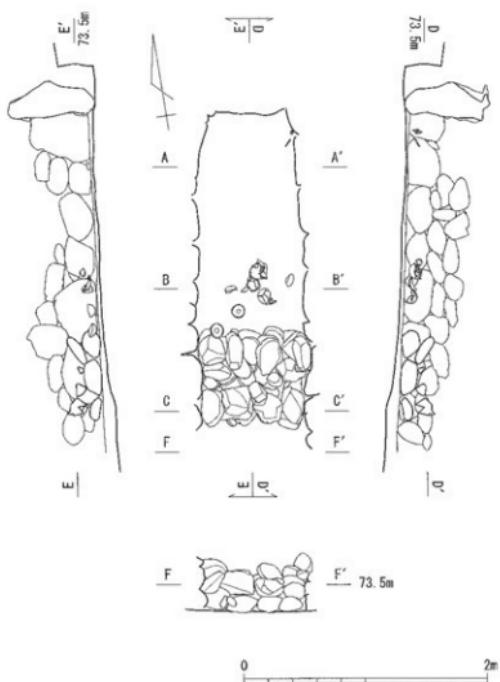
恐らく、玄室後部床面に副葬されていたであろう主立った遺物は、閉塞石と玄室中央部の須恵器群が良好に残存していたことから、玄門・閉塞石を結果的にやり過ごして玄室後部のみを狙った盗掘者（団）に掠奪されたと推定される。これはA48号墳以外にも大屋敷A古墳群では多く見られる状況であり、中・近世において当古墳群の多くの古墳が開口部を地中に埋没させていた一方で、玄室の天井石は地上に露出していたことを想定させる。さらに、盗掘者が古墳との辺りに最も高価な副葬品が所在するかを熟知しており、大型躰から成る天井石を撤去するに足る人数と手段を持ち合わせた熟練集団であったことをも示唆している。当古墳群においては、数基の例外を除く埋葬施設における葬送儀礼は横穴原理であるが、幾星霜を経た後の盗掘は甚だ強引な豊穴原理であったと言うことができる。

④出土遺物（第264図、図版149・150）

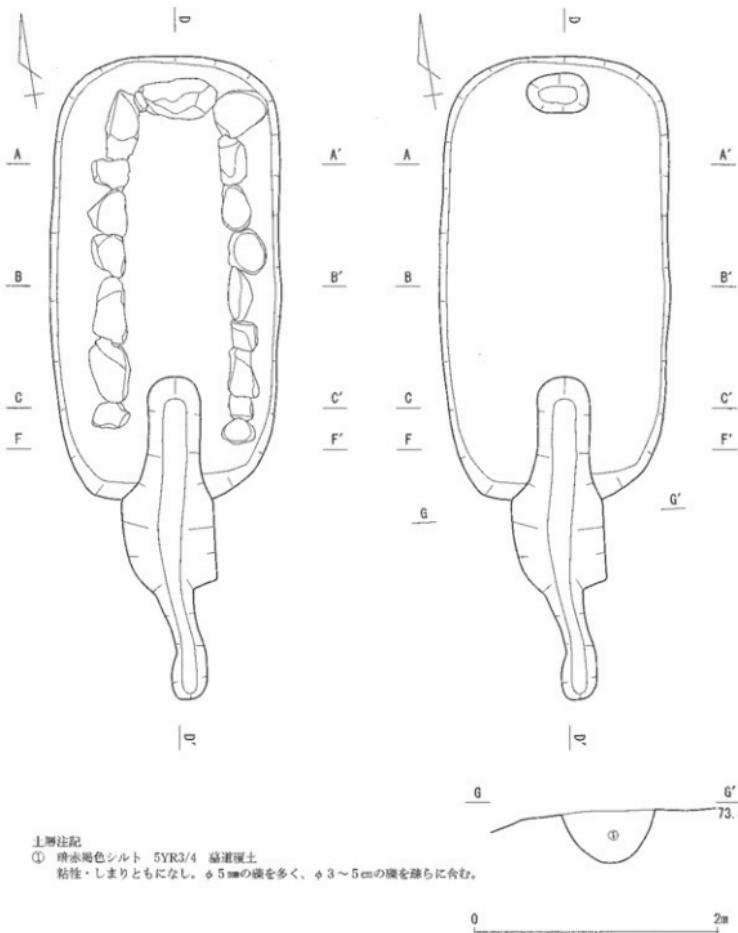
須恵器 1350～1354は壺蓋である。1350～1353は遼江IV期前半に比定される。また、1351・1352は1本線刻、1353は松葉状の2本線刻から成る範記号を外面頂部に有す。1354は器高に対して口径が小さく、外面の体部・口縁部を段とも称すべき稜線で区画している。このような属性は東海地方西部産の須恵器壺蓋の特徴であり、彼地よりの搬入品と考えられる。また、1354の平坦な頂部には肉太の1本線刻から成る範記号が刻されている。壺身1355・1356は遼江IV期前半に比定される。1355の外底面には筋錐状に配された2本線刻、1356の外底面には碁盤目状に配された6本線刻から成る範記号が刻されている。平瓶1357は遼江IV期前半に比定される。

壺蓋1354は出土状況からも他の須恵器と同じく、遼江IV期前半に併行すると考えられる。また、壺蓋・壺身で範記号が合致するものもなく、現存7点のうち蓋壺としてのセット関係にあるものはなかった可能性があり、このことも玄室後部が盗掘されたことを暗示する要素となっている。

鉄製品 1358～1367は鉄鏹である。鏹身形態の判別できるもの（1358～1362・1366）は全て尖根柳葉式である。また、茎間の残存するもの（1358・1360・1363・1365・1367）は全て棘脚である。よって、1358～



第262図 A48号墳石室遺物出土状況・閉塞石実測図

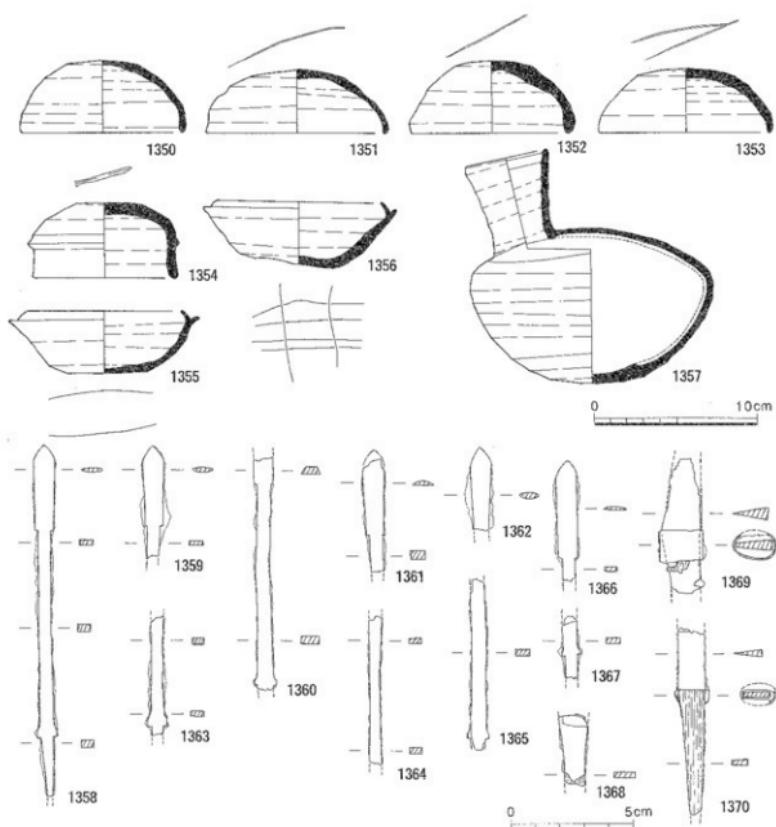


第263図 A48号墳基底石・墓坑実測図

1367はいずれも長頭尖根柳葉式であった蓋然性が高い。鎌身断面形については、1358・1359・1362が両丸造り、1360が片切刃造り、1361・1366が片丸造りとなっている。1368～1370は刀子である。3点とも茎に柄の木質が付着遺存し、1369の関部には縫が残存する。また、1369・1370の関は不明瞭であるが、刃側のみの撫関であり、2点とも身は平造りされている。

⑤小結

A48号墳は石室出土遺物より遠江IV期前半に築造されたと判断されるが、追葬の有無は不明である。無袖式横穴式石室としては決して規模は小さいほうではないが、使用されている石材の質の低さや計画



第264図 A48号墳出土遺物実測図

性・規格性に乏しい積載状況のために、大屋敷A古墳群におけるA48号墳の階層性を劣位に位置付けざるを得ない。

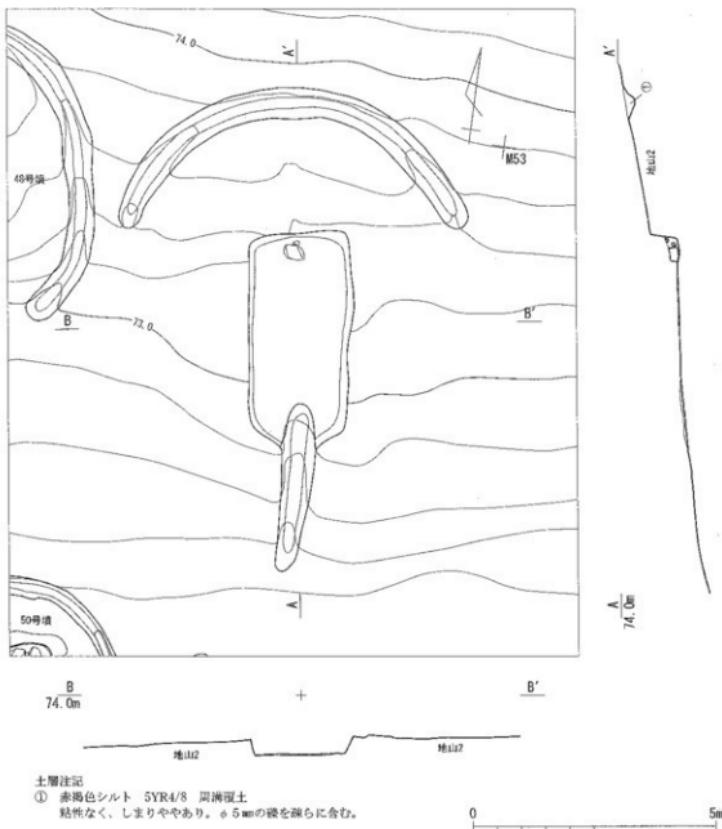
(3) A49号墳

①墳丘・周溝（第265図、図版100）

A48号墳に東接し、A55号墳の周溝北端より北約6mに位置する。墳丘盛土は流失している。周溝は北側約1/3周分が検出されたに過ぎず、周溝に囲まれる墳丘の推定範囲も南北が6.8m以上となること以外はプランも含めて不明であるが、西側の巡りの延長はA48号墳の周溝東部を回避している。

②埋葬施設（第266～268図、図版99・100）

古墳の中央に横穴式石室が構築されている。残存状態が非常に劣悪なため、石室形態は不明であるが、真南より若干南南東に向けて開口していたようである。



第265図 A49号墳墳丘図

基底石 石室の構造材としては、変状チャートの中型板状角礫1石が奥壁の基底石として残存するのみである。奥壁はこの1石の左右（少なくとも左側）にも基底石が配されて構成されていたと想定され、鏡石が存在したとすれば、この1石の上に積載されていた可能性が考えられるが、想像の域を出るものではない。また、この基底石の背後に中型円礫1石が存在するが、裏込めの一部か、或いは基底石の支石か判然としない。より小型の円礫が少なくとも1石、この基底石の支石の機能を担っている。

敷石・床込め礫 奥壁沿いから墓坑の前端付近まで大小の礫が敷設されており、側壁が完全に失われた埋葬施設において石室の全長を推定する唯一の手掛かりとなっている。攪乱が烈しく、築造当時の原位置を保持する石を抽出することが難しかったが、大勢としては、 $\phi 10\text{cm}$ 以下の小型円礫・角礫の上に $\phi 25\sim 40\text{cm}$ の扁平角礫を載せて敷いている。また、後述する閉塞石の直下にも $\phi 10\text{cm}$ 以下の礫が敷設されている。大屋敷A古墳群中の諸事例に照らせば、敷石の直上に閉塞石を積載することはあり得ないため、

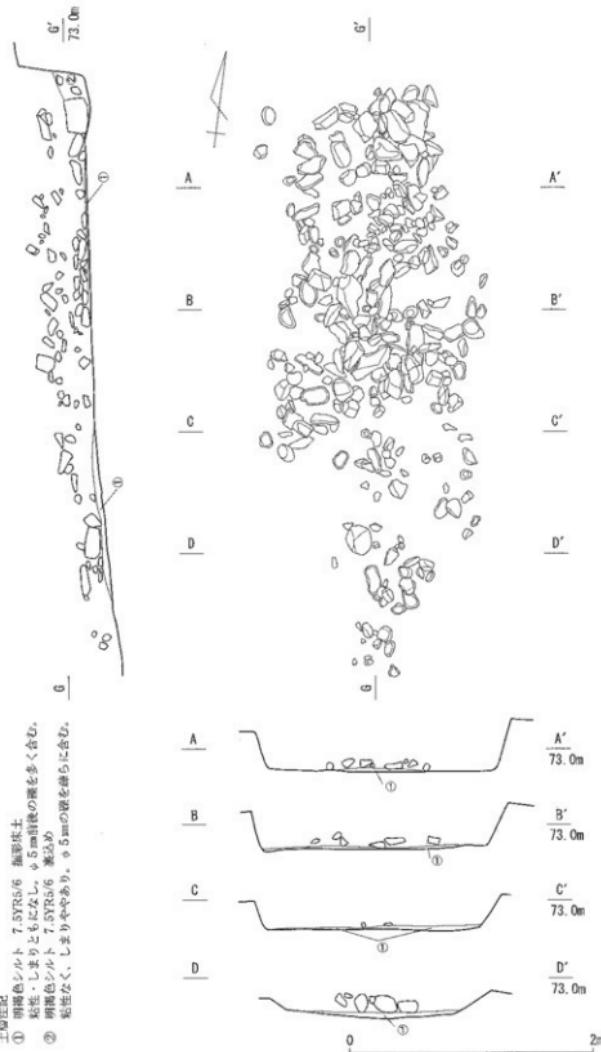
A 49号墳の閉塞石直下の小砾群は敷石ではなく、2区A 40号墳に見られるような床込め礫と考えられる。すると、閉塞石の直下および付近に存在しない大振りの扁平角礫に、A 49号墳の敷石が限定される。

閉塞石 墓坑前端付近に閉塞石が積載されており、基底の1段のみ残存する。長軸30cm前後の円礫・角礫が小口置きされている。

墓坑・墓道 長方形プランの墓坑が後壁で地山を0.55m以上掘り込んで施設されている。奥壁基底石に対応する設置用小土坑が掘削されており、現存の基底石に加えてその左側に少なくとも1石、計2石以上の基底石がこの小土坑に据えられていたと

上層注記
① 明治色シルト 7.5YR5/6 無砂灰土。
粘性・半粘性・半砂質粘土。少しある。少しある。
② 明治色シルト 7.5YR5/6 灰色
粘性・半粘性・半砂質粘土。少しある。
③ 明治色シルト 7.5YR5/6 灰色
粘性・半粘性・半砂質粘土。少しある。

第266図 A 49号墳石室検出状況図



想定される。墓道の溝状掘り込みは墓坑前端に食い込んでいるが、この食い込み部分は石室を構築する際に中途まで埋め戻され、その上に床込め礫が敷設され、追葬時には閉塞石が積載されている。墓道は

墓坑の主軸より若干西偏し、真南に向かって伸延する。

③遺物の出土状況（第269図、図版99）

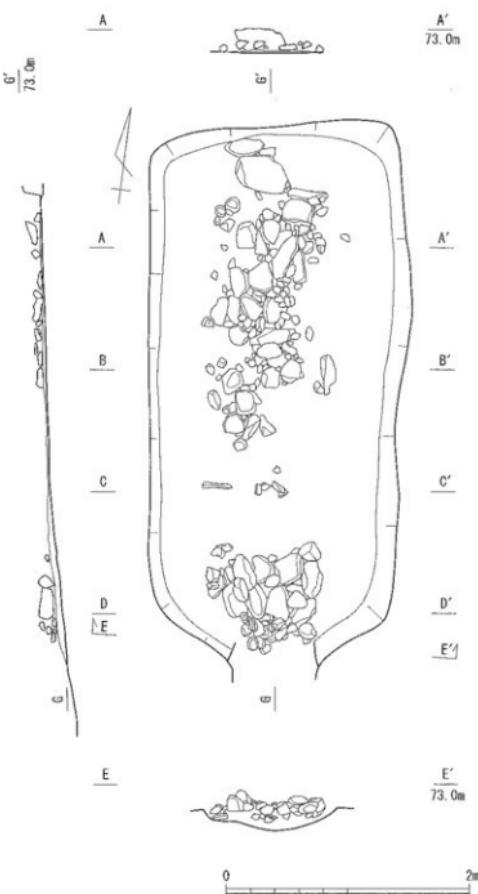
墓坑の石室内と思しき床面直上に須恵器（1371・1372・1374～1381）が散乱した状況で出土した。側壁の基底石が設置されていたと考えられる箇所の床面直上よりも須恵器片が出土していることから、これらの須恵器のうち追葬終了時の原位置を保つものは皆無に等しいと理解される。

墓坑内に食い込んだ部分を含む墓道においても須恵器（1373）および土師器（1382）が出土したが、やはり追葬終了時の原位置を保持するものではなく、盗掘時に石室内より搔き出されたものと推定される。

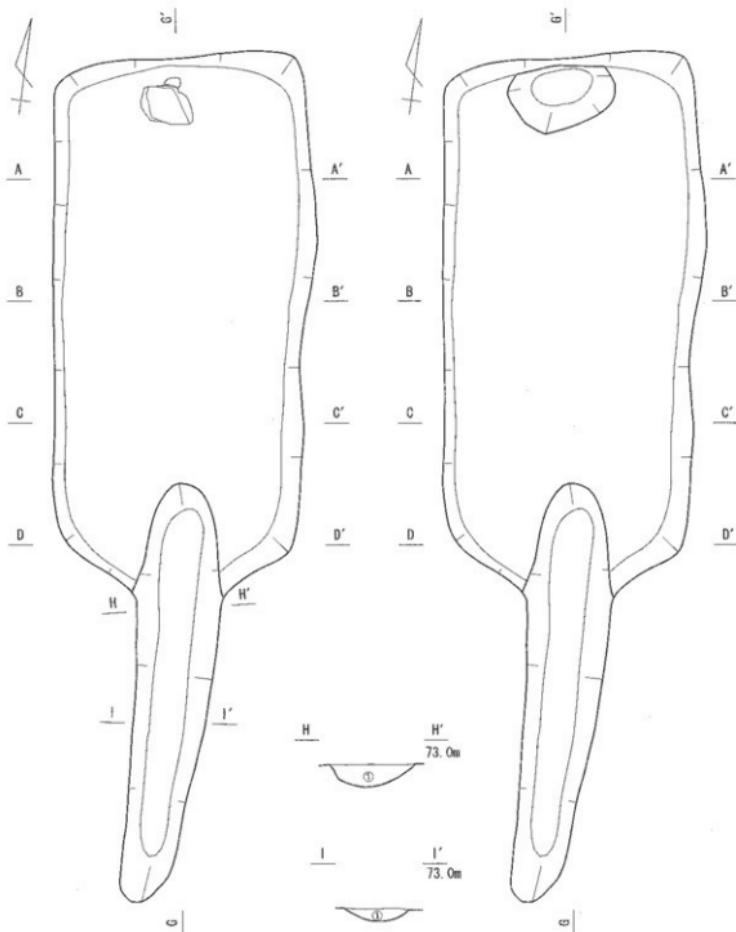
④出土遺物（第270図、図版150・151）

須恵器 1371～1373は坏蓋であり、遠江IV期後半に比定される。1371・1372は外面頂部に1本線刻から成る範記号が刻されている。また、1373は完形品である。1374～1378は坏身であり、遠江IV期後半に比定される。1375は外面底部に1本線刻から成る範記号が刻されており、坏蓋1371・1372のいずれか一方と蓋坏としてのセット関係を成す蓋然性が高い。また、1374・1375は完形品である。1379・1380は脚付盤の盤部である。外面体部中央の沈線は省略され、完極まで小型化した末期形態を呈し、遠江IV期後半に比定される。1381は無蓋高坏の坏部である。外反しない口縁部は遠江V期初頭以降に広く見られるが、脚部との接合部の直径が該期のものとしては小さく、同IV期末葉に位置付けられる可能性がある。

土師器 坏1382は外面が摩耗しているが、内面に横位のハケ目が施されている。遠江IV期後半に併行すると考えられる。



第267図 A 49号墳石室・閉塞石実測図



土層注記

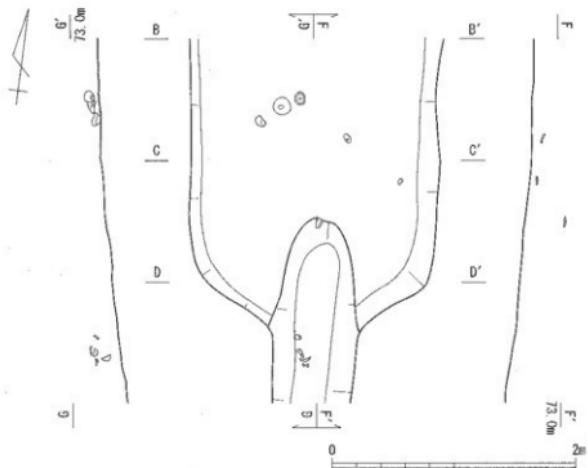
① 明褐色シルト 7.5YR3/4 高造覆土
粘性ややあり、しまりなし。φ 3~4cmの礫を薄らに含む。



第268図 A49号墳基底石・墓坑実測図

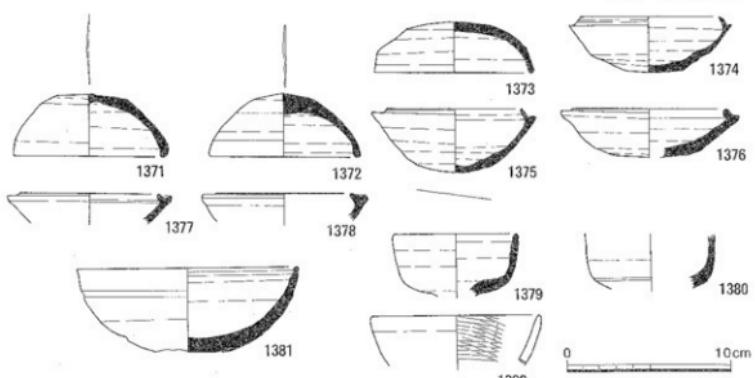
⑤小結

A49号墳は出土遺物より遠江IV期後半に築造され、同IV期末葉に追葬が行なわれたと判断される。A48号墳に後続し、同古墳の兆域を侵さぬよう配慮しながら造営されているようであるが、推定される横穴式石室の規模からは、A49号墳がA48号墳よりも相対的に階層性が高い可能性が考えられる。



第269図 A49号墳石室遺物出土状況図

石室内の排水施設として床込め礫が導入されていることは、7世紀後半の3区においてA49号墳の立地する場所に強雨時の流水が最も集中していたことを暗示するようである。この場所より東方に立地する余地が十分あつたにもかかわらず、敢えて浸水の危険性が高い場所を選定したところに、当古墳造営主体の社会的動向を読み取ることができそうである。

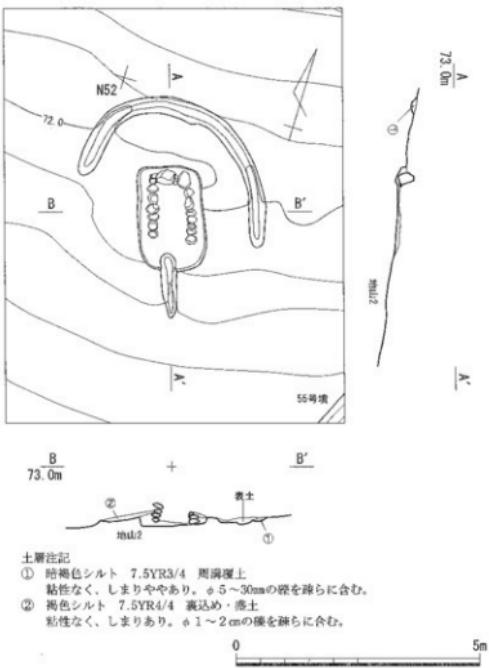


第270図 A49号墳出土遺物実測図

(4) A50号墳

①墳丘・周溝（第271図、図版100）

A47・A48・A49・A54・A55号墳の5基によって取り囲まれた領域のほぼ中央に位置する。墳丘盛土は古墳の西側に石室の褒め込みより連続する一次墳丘が1層遺存し、残存高0.1mを測る。周溝は北西～東側の約1/2周分が検出され、周溝により囲まれる範囲は東西・南北ともに3.2m以上の円形プランを呈する円墳と推定される。



第271図 A50号墳埴丘図

ないならば、極めて粗雑な積載状況と言わざるを得ない。

敷石 玄室床面のほぼ全面にφ3~10cm未満の円礫主体に敷石が敷設されているが、角礫も若干使用されている。

基底石 両側壁の基底石も左側壁最後端の1石を除いて小型円礫を使用し、長手面を石室内側に向けて設置されているものもあるが、小口置きされるものが主体となっている。また、現状の右側壁は左側壁よりも基底石1石分短く、前端の基底石1石が失われていると推定される。左側壁最後端の基底石は奥壁鏡石に次ぐ大きさにもかかわらず、この石で鏡石を挟み込むことができなかったため、鏡石との間にもう1石基底石を設置している。一方、右側壁最後端の基底石は前後の空間的余裕がないためか、基底石では最も小振りの円礫を長手置きし、その長手面を鏡石の右側面に当接させている。明らかに計画性を欠いた設計であり、整然たる石室構築への意欲が疑われるような状況である。

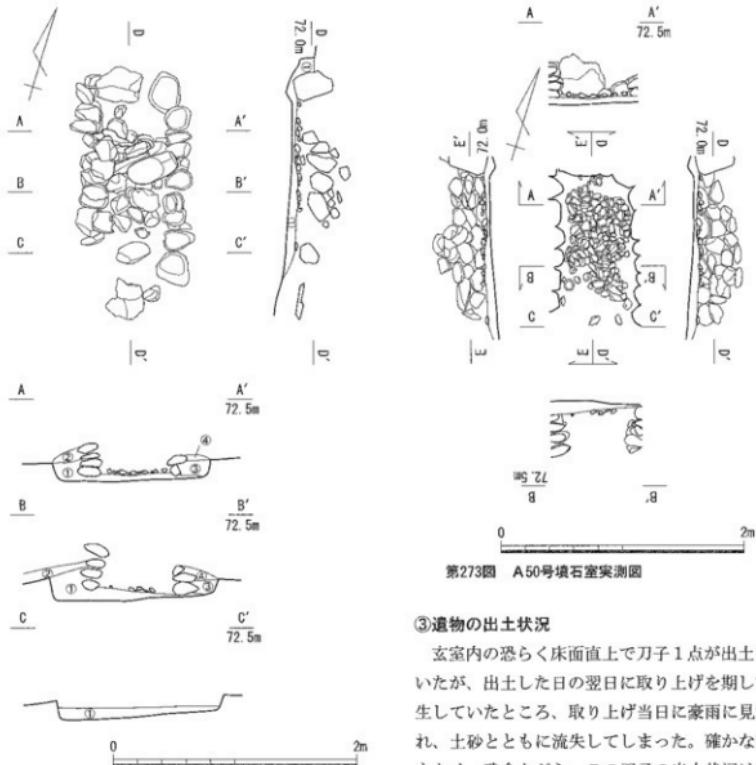
墓坑・墓道 圓丸長方形プランを呈する墓坑が後壁で地山を0.12m以上掘り込んで施設されている。また、奥壁鏡石に対応する設置用小土坑が掘削されている。墓道は墓坑前端の中央よりやや右寄りに付設されているが、奥壁鏡石の中心線を主軸として南南東へ一直線に伸びている。換言すれば、墓道から石室に至る時、正面の鏡石と対応するようになっている。墓道の溝状掘り込みは墓坑内に食い込んでいるが、石室には及んでいない。

②埋葬施設（第272~274図、図版101・102）

古墳のほぼ中央に無袖式横穴式石室が構築されている。南南東に向けて開口し、小規模ではあるが、残存状態は比較的良好である。

玄室 玄門から後半部まで幅が一定し、奥壁幅が最小となる奥窄まり形の玄室プランを呈す。奥壁は中型の板状角礫を長手置きし、鏡石としているが、鏡石の中心は石室の主軸から右へ0.1m寄っている。鏡石上方の石材の積載状況は不明であるが、現状の奥壁は高さ0.36mを測る。

両側壁は小型の円礫を小口積みし、石室内側へ顯著に持ち送っている。左側壁は最大5段、高さ0.35m残存し、右側壁は最大4段、高さ0.43m残存する。両側壁ともに目地通りは看取されない。また、右側壁の3段目以上は内側へ向かって撓曲しており、自然の外圧によるもので



土層注記
 ① 暗褐色シルト 7.5YR4/6 摃取床土・裏込め
 黏性なく、しまりあり。微を含まない。
 ② 50号墳丘剖面図②幅に同じ。
 ③ 暗褐色シルト 7.5YR3/4 裏込め
 黏性ややなく、しまりなし。φ 5 mmの礫を疊らに含む。
 ④ 暗褐色シルト 7.5YR4/4 表込め
 黏性なく、しまりややあり。φ 5 mmの礫を疊らに含む。

第272図 A50号墳石室検出状況図

⑤小結

A50号墳は築造・埋葬時期を特定し得る遺物が存在しないため、築造時期は不明であるが、当古墳の周囲に位置するA47・A48・A49・A54・A55号墳のいずれよりも後出すると考えられ、遠江IV期後半以降に築造された可能性がある。現状の無袖式横穴式石室が前部を大きく喪失しているとしても、墓坑の規模は明らかであるため、石室全長は最大1.6mを超えることはないと考えられる。石室の規模と構築技術の拙劣さから、A50号墳の埋葬施設は階層性が低いことはもとより、横穴式石室としても末期に近い蓋然性が高い。

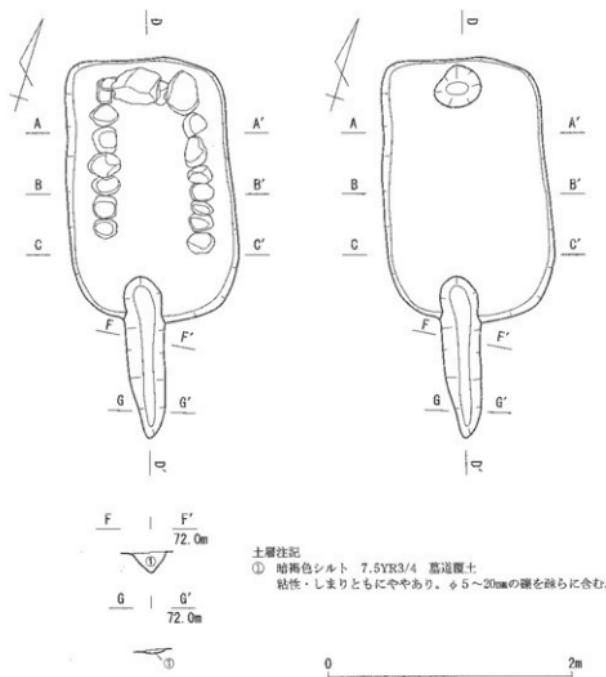
第273図 A50号墳石室実測図

③遺物の出土状況

玄室内の恐らく床面直上で刀子1点が出土していたが、出土した日の翌日に取り上げを期して養生していたところ、取り上げ当日に豪雨に見舞われ、土砂とともに流失してしまった。確かな記録もなく、残念ながら、この刀子の出土状況は不詳である。

④出土遺物

鉄製品 上記の刀子1点を確保することに失敗し、その形状や残存状態に言及することができない。これ以外にA50号墳よりの出土遺物はなく、現状では無遺物となっている。



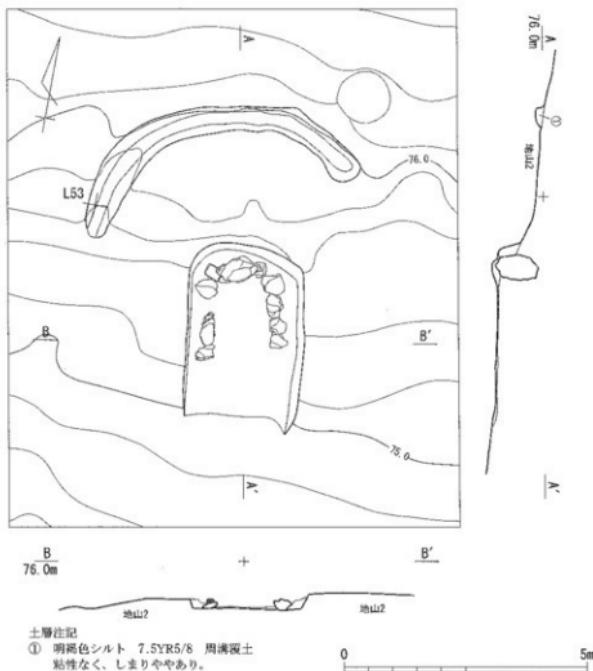
第274図 A50号墳基底石・墓坑実測図

(5) A51号墳

①墳丘・周溝（第275図）

2区東部と3区北部との境界線上に位置し、南西方面から続く旧天竜川の河岸段丘の段差が終焉する地点に立地する。周辺各古墳との位置関係では、2区A31号墳の西南西約10m、同A37号墳の東約10m、A49号墳の北東約10m、A52号墳の周溝北部より北西約7mに所在する。

墳丘盛土は完全に流失している。周溝は北側の約1/4周分が検出されたに過ぎないため、周溝に囲まれる範囲から本来の墳丘の平面的規模およびプランを推し量ることは困難であるが、少なくとも南北は6.3m以上を測ったと推定される。現存する周溝は2区側に位置し、3区側に存在する埋葬施設よりも若干盛り上がった場所に掘削されているように見えるが、これは3区側が後後に削平を受けたのではなく、前述の旧河岸段丘のあからさまな段差は終息するものの、その痕跡として南北に極短距離の急勾配斜面が東北東-西南西方向に連続しており、この急勾配斜面の上端と下端を跨ぐ形でA51号墳が築造されているため、現況はこのような外観を呈しているのである。当古墳の造営主体としては、南側から古墳を仰ぎ見た場合、古墳の中央より後方が短い急斜面に立地すれば、墳丘が実際の盛土高よりも高く見えるという計算をはたらかせたのかもしれない。



第275図 A51号墳埴丘図

は奥壁で幅が最も狭くなる胴張り形プランを呈す。奥壁には大型の板状角礫を立て据えて鏡石としているが、奥壁面に三叉状の亀裂が生じ、右側基底部は割れて崩落しかかっている。これは、表土除去・古墳検出時に重機の爪先で鏡石を引っ掛けてしまったことによるが、鏡石が傾いたり原位置から外れたりすることは辛うじて免れた。現況の奥壁は高さ0.86mを測る。また、鏡石上方の石材積載状況は不明である。

両側壁は頗る残存状態が悪く、基底石を部分的に残すに過ぎない。持ち送り積み等の積載状況は不明であるが、最大高は左側壁で0.28m、右側壁で0.31mを測る。

敷石 奥壁より前方約0.8mまでを除く床面に敷石が残存している。敷石の残存範囲は両側壁よりも前方に及んでおり、この残存範囲を以て石室の全長が2.8m以上を測るという推定が成立する。 $\phi 15\sim 28cm$ の扁平な円礫・角礫を敷設し、その間隙を $\phi 5\sim 10cm$ 以下の円礫・角礫で充填している。築造当初は玄室床面全面に敷設されていたようであるが、奥壁より前方約0.8mまでは開墾により敷石が攪乱され、石室内に礫が散乱していた。

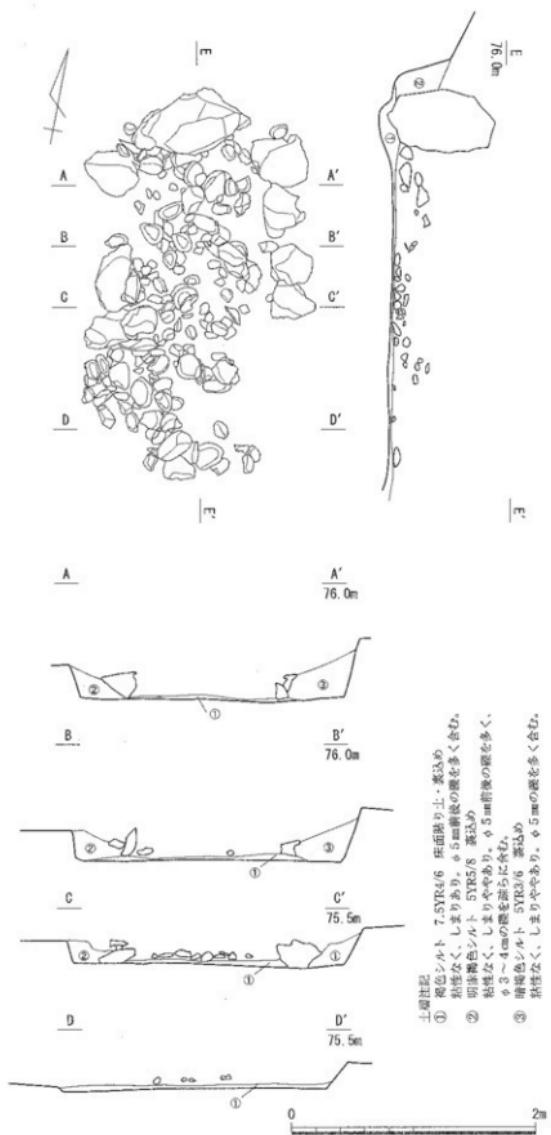
基底石 当石室に残存する構造材は全て基底石である。両側壁の基底石は大型または中型の角礫から成り、基本的に長手面を石室内側に向けて設置されている。左右両側壁最後端の基底石は現存する部分では最も小振りの中型角礫を小口置きしているが、石室設計前の計画では、両側壁最後端の基底石としてA-A'断面に掛かる大型角礫一対が予定されていたと考えられる。ところが、この2石で鏡石の左右側

②埋葬施設（第276～278図、図版102・103）

古墳の中央と思しき場所に横穴式石室が構築されている。南南東よりもやや真南に向けて開口するが、残存状態は劣悪であり、特に前半部の開墾による削平が著しいため、石室の形態および正確な規模は不明である。

玄室 石室形態として考えられるものは無袖式と単室系擬似両袖式であり、後者であれば、埋葬施設の前半部に羨道を想定しなければならないが、ここでは横穴式石室の現存部分を一応玄室として扱うこととする。

玄室は中央部に最大幅を有し、現状で

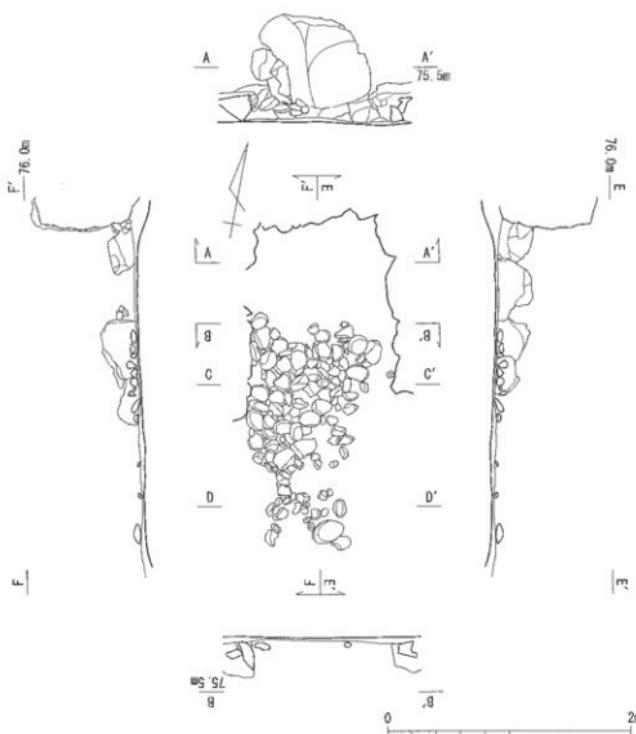


第276図 A51号墳石室検出状況図

面に到達できなかつたため、現状の小振りの基底石一対で不足した長さを補つた、という経緯が想定される。このことは、奥壁鏡石の次に両側壁最後端の基底石を設置したのではなく、むしろ両側壁の基底石は前方より順次設置されたことを示唆している。そして、両側壁最後端に至つて計画に狂いが生じ、最も見映えにこだわるべき箇所において調整を余儀なくされたのである。

現時点で設定している石室の主軸（E-E'ライン）に対して、左右両側壁は非対称に設計され、左側壁が右側壁よりも相対的に胴張り具合が顕著であるように見える。これもまた石室設計の失敗と見做すよりもむしろ、奥壁面がE-E'ラインに直交していないことを考慮すれば、石室の主軸は当ラインよりもさらに西偏し、玄室プランはやはり線対称を呈すと考えることも可能である。

墓坑 圓丸長方形プランを呈する墓坑が、後壁で地山を0.46m以上掘り込んで施設されている。最後端中央には奥壁鏡石に対応する設置用小土坑が掘削されている。また、墓坑の主軸は現時点で設定している石室の主軸よ



第277図 A51号墳石室実測図

からは須恵器片も若干（1384）出土している。墳丘跡地直上の表土からも須恵器片（1383・1386）が出土した。いずれにしても開墾により攪乱され、古墳廃絶時の原位置を保持するものはない。

④出土遺物（第279図、図版151）

須恵器 1383はフラスコ形瓶の体部小口面である。瓶類頸部1384は外面に沈線が施される部分の直径が6 cmを超えており、長頸壺ならば遠江IV期後半に比定される。1385・1386は平瓶の可能性がある。

鉄製品 1387・1388は長頸鐵の破片であり、1387は棘闘の茎闘を有す。

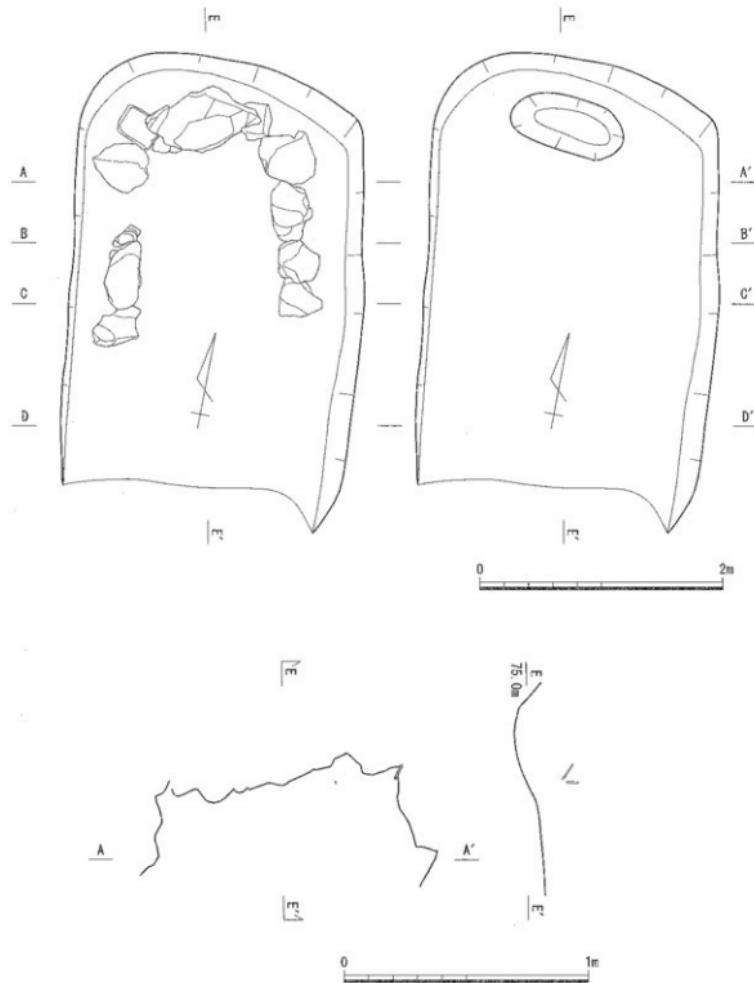
⑤小結

僅かな出土遺物より、A51号墳は遠江IV期後半に築造されたと判断される。A50号墳ほどではないにしても、造営主体の石室構築技術は拙劣と言わざるを得ず、恐らく大屋敷A古墳群における階層性も中程度以下と想定される。両側壁基底石の配置が前述のように前方から行なわれたとすれば、設置の指標となった要石は奥壁鏡石の他にも側壁の前方にあったと推定され、他の古墳の類似例では、それは立柱石であることが多い。ゆえに、A51号墳の埋葬施設は単室系擬似兩袖式横穴式石室である可能性も決して低くはないが、石室と墓坑の主軸が一致しない限り、現状では全長が3 mを超える規模の石室は望めず、単室系擬似兩袖式横穴式石室よりも無袖式横穴式石室の可能性が高いと考えられる。

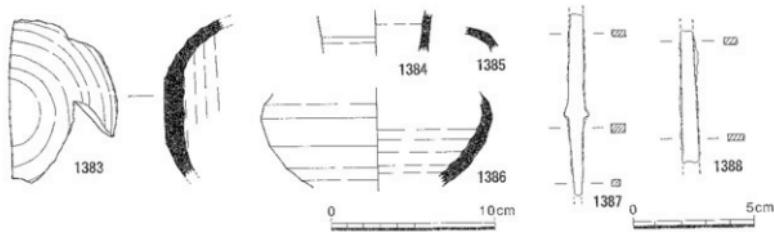
りも若干東偏し、ほぼ真南北方向となつていて。前述のように、本来の石室主軸が現時点の設定よりも西偏しているとすれば、墓坑と石室の主軸のすればさらに瞭然となる。

③遺物の出土状況（第278図）

石室裏込めより須恵器片1点（1385）が検出されている。玄室奥壁左端の覆土中途において鉄鐵2点（1387・1388）が出土した。玄室の覆土中



第278図 A51号墳石室遺物出土状況図・基底石・墓坑実測図



第279図 A51号墳出土遺物実測図

(6) A52号墳

①墳丘・周溝 (第280図、図版104)

A49号墳の

東約10m、A

52号墳の南東

約7mに位置

する。墳丘盛

土は流失して

いる。周溝は

北側約1/4周

分が検出され

たに過ぎず、

周溝により囲

まれる範囲か

ら本来の墳丘

の平面的規模

およびプラン

を推し量るこ

とは困難であ

るが、少なく

とも南北は

8.8m以上を

測ったと推定

される。

②埋葬施設

(第281~283

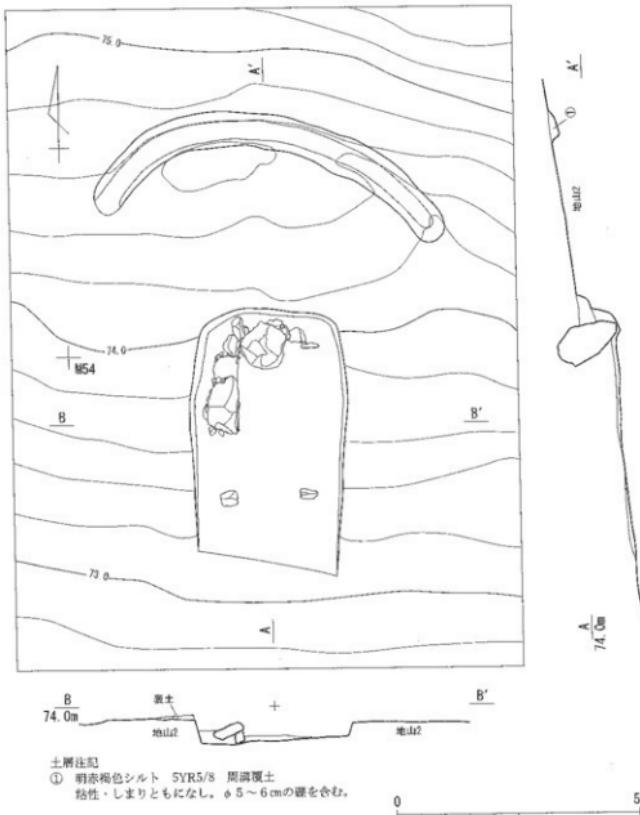
図、図版103・

104)

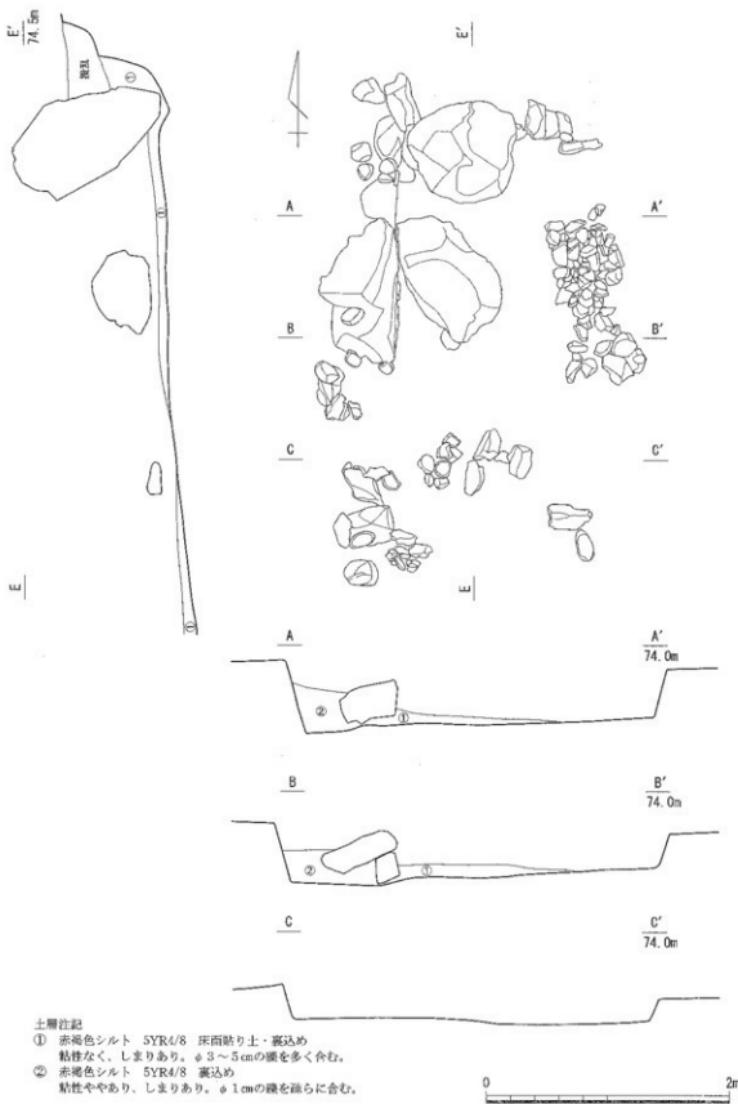
古墳の中央

と思しき場所

に横穴式石室



第280図 A52号墳墳丘図



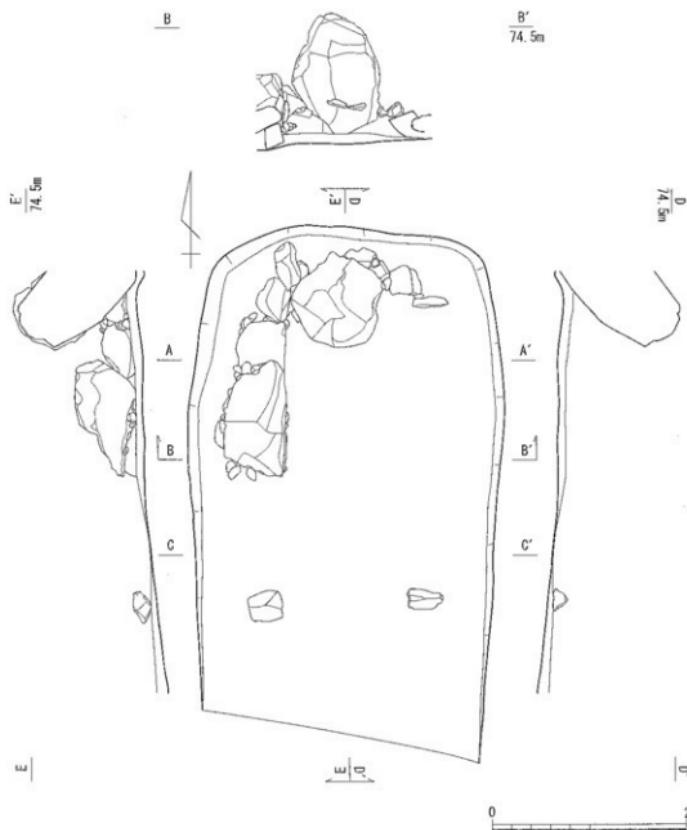
第281図 A52号墳石室換出状況図

が構築されている。真南に向けて開口するが、残存状態は劣悪であり、石室形態は不明である。

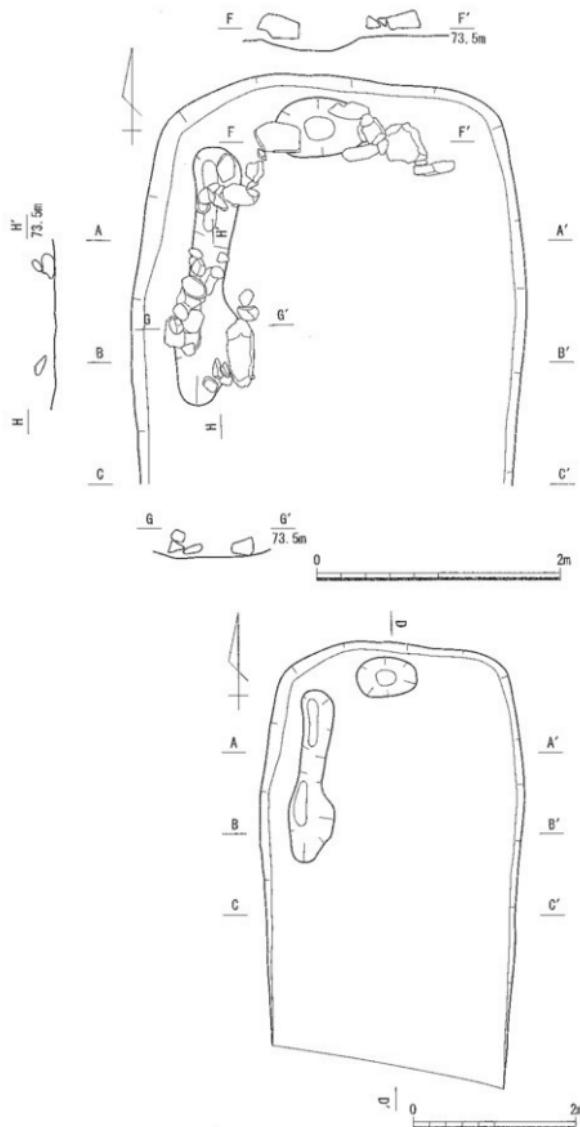
玄室 石室は後半部を中心には残存しており、便宜上玄室と呼称する。玄室プランは残存する構造材どうしを結ぶラインから長方形と考えられるが、胴張り形の可能性も捨てできない。奥壁は巨石とも称せられる大型柱状角礫を立て据え、鏡石としているが、内側へ大きく傾いている。これはA51号墳の場合と同様に表土除去時に重機の爪先を引っ掛けてしまったためであり、現高は1.24mを測る。

両側壁とともに基底石の一部を残すに過ぎず、持ち送り積みや石材の積み方に関する一切の情報が失われている。左側壁は最高0.28m、右側壁は最高0.5m残存する。

基底石 右側壁の基底石は大型角礫を長手置き、または長手面を内側に向けて設置している部分が目立つが、僅かに残存する左側壁とともに中型以下の角礫を小口置きする箇所と拮抗している。両側壁最後端の基底石は奥壁鏡石の左右に長手面を当接させている。



第282図 A52号墳石室実測図



第283図 A52号墳基底石・墓坑実測図

基底石支石 奥壁鏡石
および右側壁の大型基底石2石の計3石に対し、支石が配置されている。中型角礫と小型円礫を環状に組み合わせて中空の台とし、その上に基底石1石を搭載している。

墓坑 滝丸長方形プランを呈する墓坑が、後壁で地山を0.7m以上掘り込んで施設されている。基底石支石を配置するための土坑が、前述の基底石3石に対応して掘削されている。墓坑の前端は削平されており、墓道の状況も不明である。

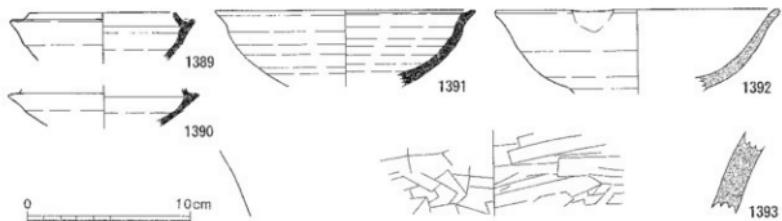
③遺物の出土状況

石室の覆土より須恵器片(1389~1391)、灰釉陶器片(1393)、山茶碗(1392)が出土した。図化不能であるが、鉄製品の小片も石室覆土中より数点出土している。

④出土遺物(第284図、図版151)

須恵器 1389・1390は坏身であり、1391は無蓋高坏の坏部である。3点とも遠江IV期前半に比定される。

灰釉陶器 1393は恐らく壺の体部片であり、内外面に板ナデを施している。時期は不詳である。



第284図 A52号墳出土遺物実測図

山茶碗 1392は輪花碗であり、法量と口縁部の形状から前掲松井氏編年の輪花碗C類に相当し、山茶碗I期-1に比定される。

⑤小結

A52号墳は出土遺物より遼江IV期前半に築造され、12世紀前半までに何らかの目的で人が石室内に度々立ち入ったと判断される。構築された横穴式石室については不明な点が多いが、計画的に配置された支石の上に大型の基底石を搭載している状況からは、本来の石室規模は中型以上であった可能性も否定できない。階層性も比較的高かったのではないかと考えられる。

(7) A53号墳

①墳丘・周溝

A52号墳の南東約11m、A56号墳の周溝北部より北東へ約10mに位置する。墳丘盛土・周溝ともに確認されていない。古墳の南側約半分が現代のゴミ捨て穴により大きく搅乱されており、全体として損壊の烈しい古墳である。

②埋葬施設（第285～287図、図版105）

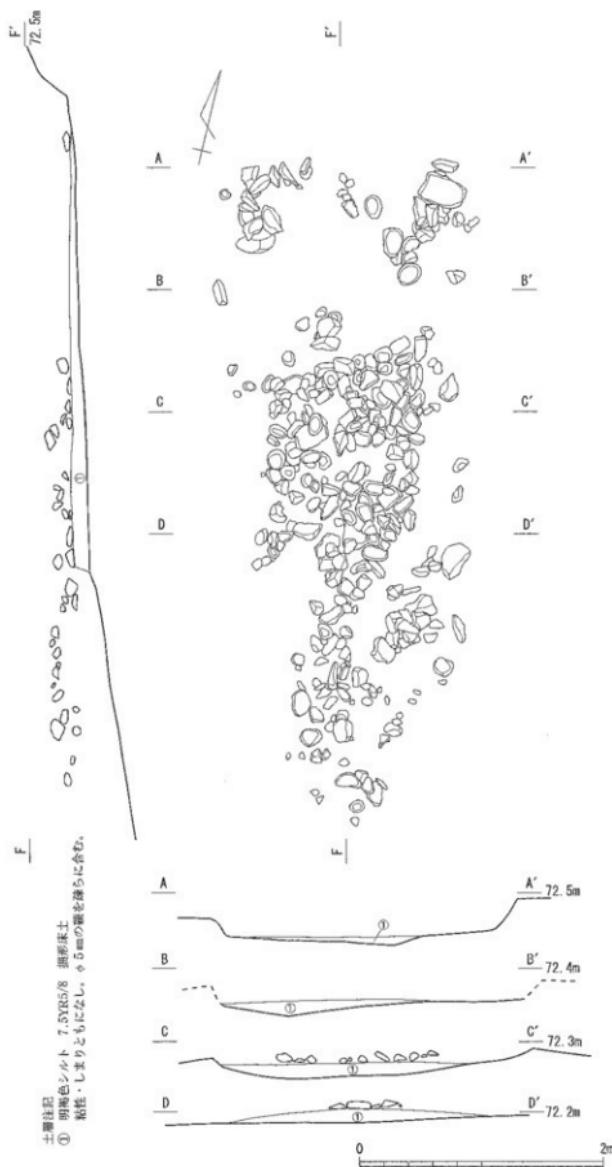
A53号墳は埋葬施設のみ確認された古墳であるが、それさえも残存状態は極めて劣悪である。南南東に向けて開口する横穴式石室が構築されているが、石室形態は不明である。

玄室 石室の構造材はほとんど失われているが、石室の奥壁に相当する箇所が確定しているため、石室の残存部分を便宜上玄室と呼称する。玄室の最後部に低平な中型角礫2石と小型角礫2石が据えられており、奥壁の一部と推定される。或いは、左端の中型角礫1石が左側壁最後端の基底石であるという推定も可能である。視点を少し変えてみると、これらの4石がA52号墳において見られるような基底石の支石を構成していた可能性も考えられる。その場合、相当大型の奥壁基底石、恐らく鏡石を想定しなければならない。

側壁は左右ともに完全に消滅しているため、玄室プランは不明である。

敷石 玄室床面にφ5～33cmの扁平な円礫・角礫から成る敷石が敷設されている。玄室後半部では左側壁寄りと思しき箇所に4石が残存するのみであるが、同前半部では比較的良好に残存し、現存の墓坑前端まで広がっている。この敷石の敷設範囲により、少なくとも3.67m以上という石室全長の推定値が得られる。

墓坑 削平・搅乱により墓坑のプランは原形をとどめていないが、後壁の左右両端は角がしっかりと張っており、本来は比較的整然とした長方形プランを呈していた可能性がある。左壁の最後端付近が現状では最も深く掘り込まれており、この箇所における墓坑壁は高さ0.27mを測る。なお、墓道は確認されなかった。

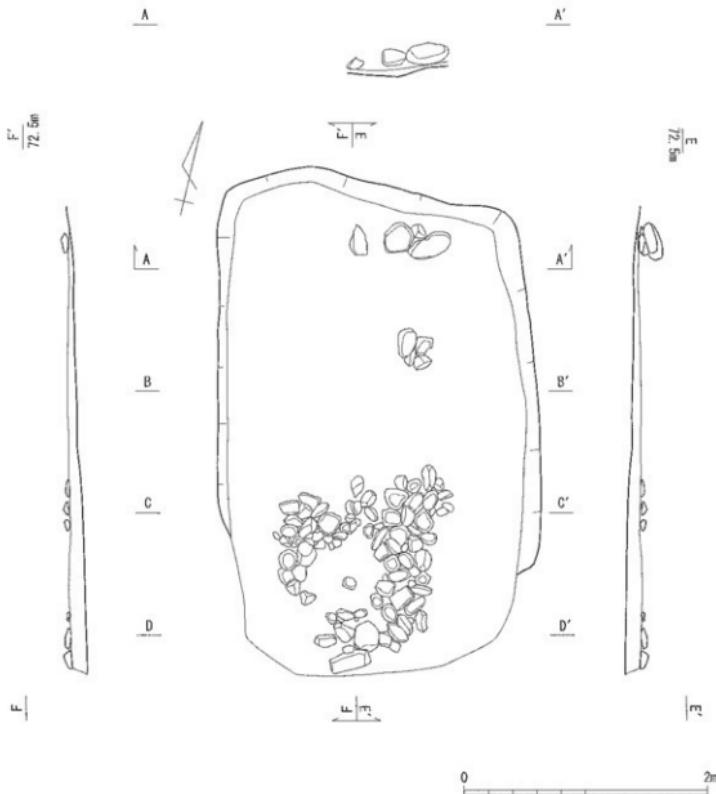


第285図 A53号墳石室検出状況図

③遺物の出土状況（図版105）

石室が壊滅状態である一方で、遺物は比較的大く出土している。玄室前半部の煮石が残存する床面直上および当該箇所の覆土中途より須恵器（1394・1396・1398～1400・1402・1404～1406）、土師器（1407）、鉄製品（1410～1422）が確認されている。

墓坑前方の搅乱坑からも少なからず須恵器（1395・1397・1401・1403）、土師器（1408・1409）が出土し、この箇所も本来埋葬施設の一部であったことを示しているのかもしれない。また、古墳北東部の埴丘跡地と思しき箇所より須恵器片が出土しているが、図化に耐え得るものではない。

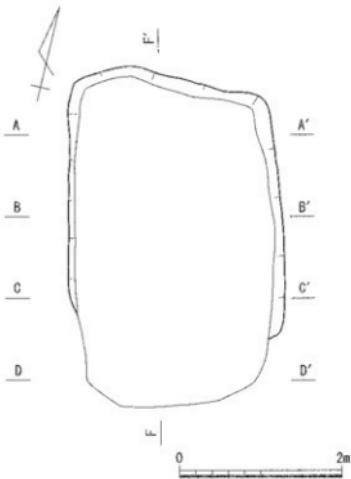


第286図 A53号墳石室実測図

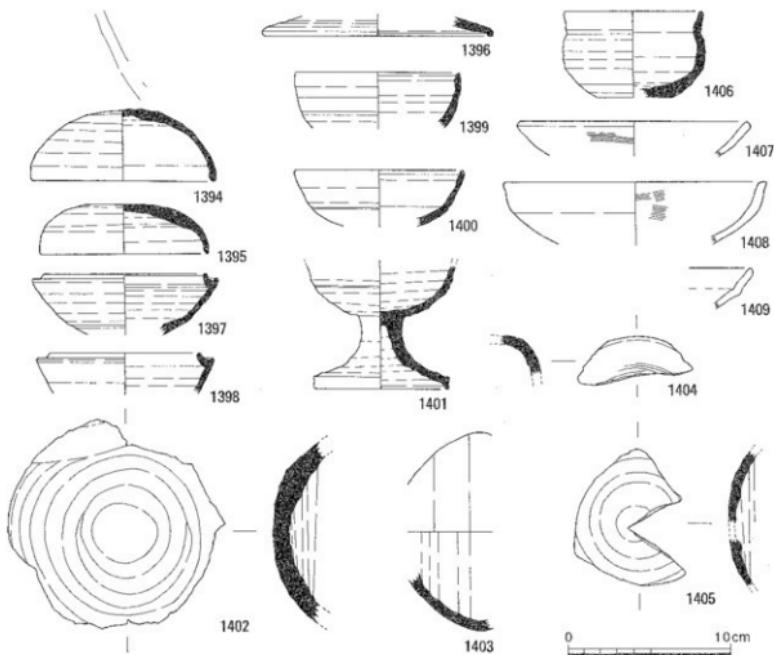
④出土遺物（第288・289図、図版151・152）

須恵器 1394～1396は壺蓋であり、1394・1395は遠江IV期後半、1396は同V期初頭に比定される。1394の外面頂部には2本線刻から成る筆記号が刻されている。壺身1397・1398は遠江IV期後半に比定される。1399～1401は無蓋高壺であるが、1399は半球形壺部の無蓋高壺と脚付壺との中間的形態を呈し、遠江IV期前半に比定される。1400・1401は遠江IV期後半に比定される。1402～1405は回転体としての主軸が水平となる体部片であり、いずれも時期不詳であるが、1404は外面にカキ目状の条線を残し、横瓶または提瓶の可能性がある。1406は短頸壺であり、遠江IV期前半に比定される。

土器飾 1407～1409は壺である。1407は外面にハケ目が施され、遠江IV期前半に併行する。1408は内面にハケ目を有し、内外面は赤彩されている。時期は遠江IV期末葉に比定される。1409は腰折れ形態を呈し、遠江V期初頭に併行する。



第287図 A53号墳墓坑実測図

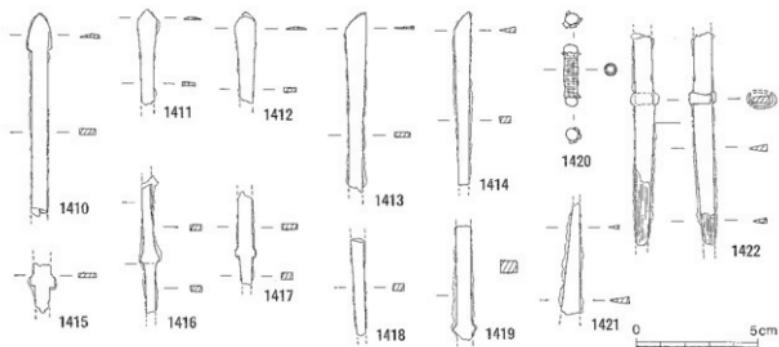


第288図 A53号墳出土土器実測図

鉄製品 1410～1419は鉄鎌である。鎌身形態の判別できる1410～1414はいずれも長頭尖根式である。1410の鎌身は三角形式で、片丸造りされている。1411・1412は柳葉式であるが、鎌身闊を形成せず、鎌身断面は片丸造りとなっている。1413・1414は片刃鎌式であるが、鎌身闊を形成せず、鎌身は平造りされている。他の頭部・茎片も長頭鎌の一部と想定される。

1420は両頭金具である。花弁は最大4弁残存しているが、本来は6弁であったと推定される。また、筒金の外面全体に弓弦の木質が付着遺存する。

1421・1422は刀子である。1421の身は切先に向かって著しく先細りとなり、研ぎ減りの結果と考えられる。1422は関部に鍾が残存するため、関の形状を観察することが困難である。茎も含めて全体に平造りされており、茎の後部には柄の木質が付着遺存する。



第289図 A53号墳出土金属製品実測図

⑤小結

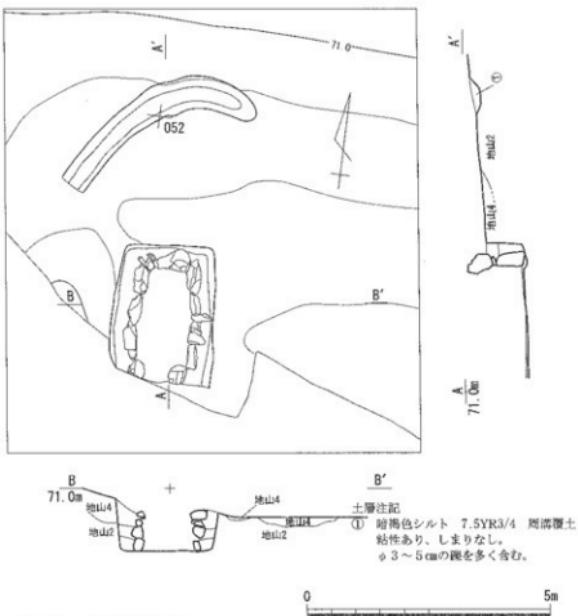
A53号墳は出土遺物より遠江IV期前半に築造され、同V期初頭まで追葬が継続したと判断される。埋葬施設から当古墳群における階層性を論じることはほとんど不可能であるが、飾り弓と多様な鐵身體態の鉄鏃を副葬しており、被葬者の社会的階層性と軍事的役割を示唆するものと考えられる。

(8) A54号墳

①墳丘・周溝（第248・290図、図版106・108）

A47号墳とA55号墳との中間に位置し、古墳南半部は調査区外南側に所在する。墳丘盛土は調査区内に遺存せず、調査区南壁セクションにA54号墳の墳丘盛土が認められないことから、調査区外においても大半は流失している可能性が高い。

周溝も北西～北側で約1/4周分が検出されたに過ぎず、墳丘プランの判定は困難であるが、本来の墳丘は東西5.8m以上、南北5.7m以上を測ったと推定される。

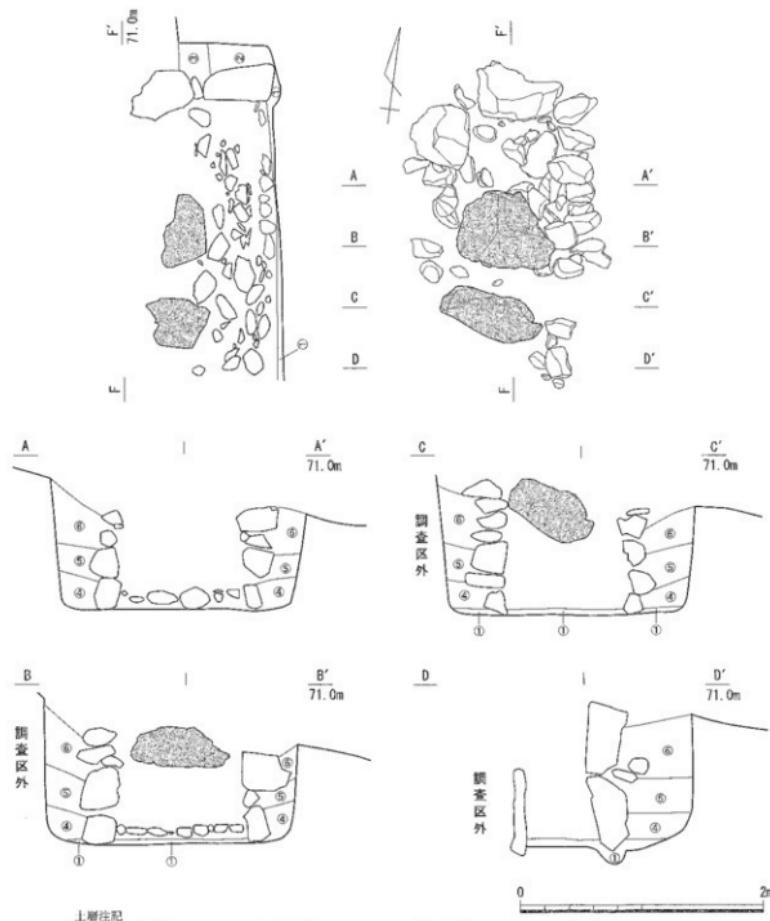


第290図 A54号墳墳丘図

②埋葬施設（第291・292・294図、図版106～108）

古墳の中央と思しき場所に擬似両袖式横穴式石室が構築されている。石室の南半部は調査区外に存在するため、単室系・複室系のいずれかは不明であるが、少なくとも玄室の残存状態は良好である。

天井石 玄室内に転落した石材のうち、最上位で検出された大型板状・柱状角礫2石は天井石と認識される。長軸の方向等の検出状況より、自然崩落したものと考えられる。



土壤記

- ① にふい赤褐色シルト 5YR4/4 滲水床土
粘性ややあり、しまりなし。礫を含まない。
- ② 褐色シルト 7.5YR4/6 裏込め
粘性・しまりとともにややあり、礫を含まない。
- ③ 赤褐色シルト 5YR4/8 裏込め
粘性ややあり、しまりあり。φ 1～2cmの礫を含む。

- ④ 黒褐色シルト 7.5YR3/4 裏込め
粘性・しまりとともにややある。礫を含まない。
- ⑤ 褐色シルト 7.5YR4/6 裏込め
粘性なく、しまりあり、礫を含まない。
- ⑥ 明褐色シルト 7.5YR5/6 裏込め
粘性なく、しまりあり。φ 5mmの礫を薄らに含む。

第291図 A54号墳石室検出状況図

玄室 中央部で最大幅を有し、奥壁幅が最小となる胴張り形の玄室プランを呈す。また、玄室の主軸は真南北方向となっている。奥壁は2段構成の鏡石となっており、上段に輝緑岩の、下段に斑欄岩の大型板状角礫を長手積みし、上下段の隙間を小口積みした小型角礫で充填している。また、奥壁としては内側へ持ち送り積みされており、鏡石のさらに上の石材積載状況は不明であるが、現高1.12mを測る。なお、現在の天竜川にこれほど大型の輝緑岩・斑欄岩は存在しない。

両側壁はチャートの大・中型角礫主体に、角が取れた程度の丸みを帯びる砂岩の中・小型円礫も併用している。両側壁ともに基底から3段目までは大・中型礫を長手積みし、4段目以上は中・小型礫を小口積みしており、持ち送り積みは明瞭であるが、目地通りは不貫徹である。左側壁は最大5段、高さ0.96m残存し、右側壁は最大6段、高さ1.18m残存する。

玄室両側壁の最前端に立柱石を設置し、玄門を形成している。左立柱石は大型柱状角礫2石を縱積みし、奥壁同様の2段構成となっており、高さ1.17m、側壁よりの突出は0.24mを測る。右立柱石は大型柱状角礫1石を立て据え、高さ0.63m、側壁よりの突出は0.18mを測るが、左立柱石同様に、本来は大型柱状角礫をもう1石積載していた蓋然性が高い。また、左右立柱石は玄室両側壁の持ち送り角度とほぼ同程度に内側へ傾斜している。

羨道 左右立柱石の前端が調査区外に位置するため、羨道は調査区内に現れた立柱石が形成する玄門部分が検出されたにとまる。

敷石 玄門側の約1/5を除く玄室床面に敷石が良好に残存している。 ϕ 20~35cmの、敷石としては大型の扁平円礫が敷設され、その隙間を ϕ 10cm以下の円礫・角礫で充填している。これら大振りの扁平円礫は都田川流域で採取される斑欄岩で、現在は「黒御影」と俗称されているが、当古墳の敷石として用いられているものは風化して赤茶けている。敷石はほぼ原状を保持していると考えられ、玄門側約1/5の玄室床面には当初より敷石は敷設されていなかったと推定される。

閉塞石 玄門に中・小型の円礫が「積載」されている状況が調査区南壁セクションにおいて確認されているが、石室の崩落石材の可能性も考えられ、閉塞石か否かの結論は将来の発掘調査に委ねられている。閉塞石であれば、少なくとも4段は残存していることになる。

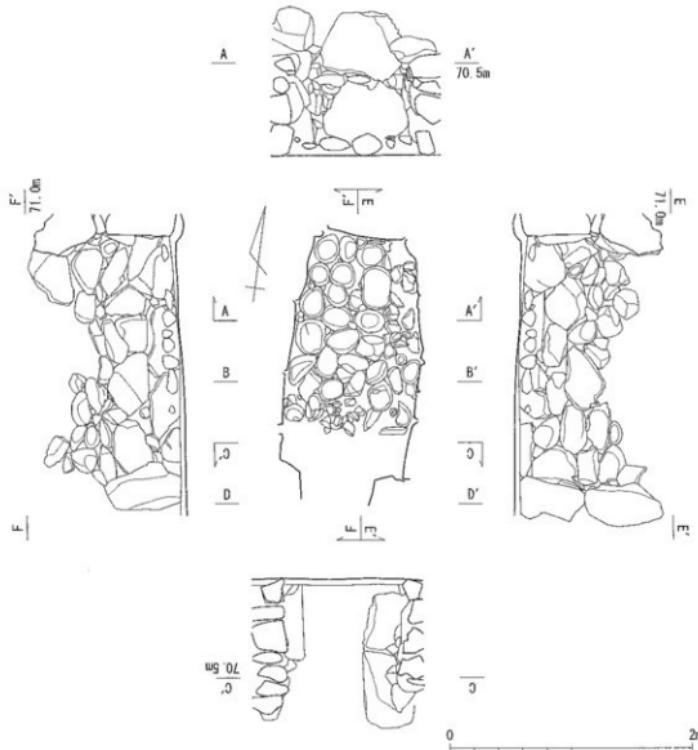
基底石 両側壁の基底石は基本的にチャートの大型角礫を長手置きし、左側壁中央部・前半部および右側壁最後端の計3箇所で中型角礫を小口置きすることにより、側壁の長さを調整している。石室の設計としては規格性が高いと評価できる。

墓坑 前半部は調査区外に位置し、全体の形状は不詳であるが、長方形の墓坑プランを呈する可能性が高い。墓坑は玄室右側壁中央部の後背に相当する箇所が現状では最も深く、地山を1.17m以上掘り込んでいる。また、奥壁下段の鏡石、右側壁最後部の基底石、左右立柱石に対応して設置用小土坑が掘削されている。当然ながら、墓道は確認されていない。

③遺物の出土状況（第293図、図版107）

遺物は専ら石室内より出土している。玄室前半部の中央寄りおよび右側壁寄りの床面直上において須恵器（1423・1424）が出土しているが、副葬時の原位置を保持している可能性は低い。玄室の擬似左袖部床面直上において完形品の須恵器平瓶1425が出土しているが、出土当初は敷石の間に埋もれたような状況を呈していた。つまり、遺物の副葬が敷石の敷設に先行しているかのように見えたのであるが、実際にそのようなことは考え難いため、精査を続行すると、やはり1425周辺の小型礫は崩落石材であることが判明した。1425自体は副葬時の原位置を保持している可能性が高い。

玄門の右立柱石沿いにおいてカワラケ2点（1427・1428）が重なった状態で出土した。また、玄室の覆土中より完形品の灰釉陶器1点（1426）が出土している。前述の天井石が自然崩落と考えられる限り、天井石を除去しての盗掘は想定できず、後世における玄室への立ち入りは開口部から羨道を経由し玄門



第292図 A54号墳石室実測図

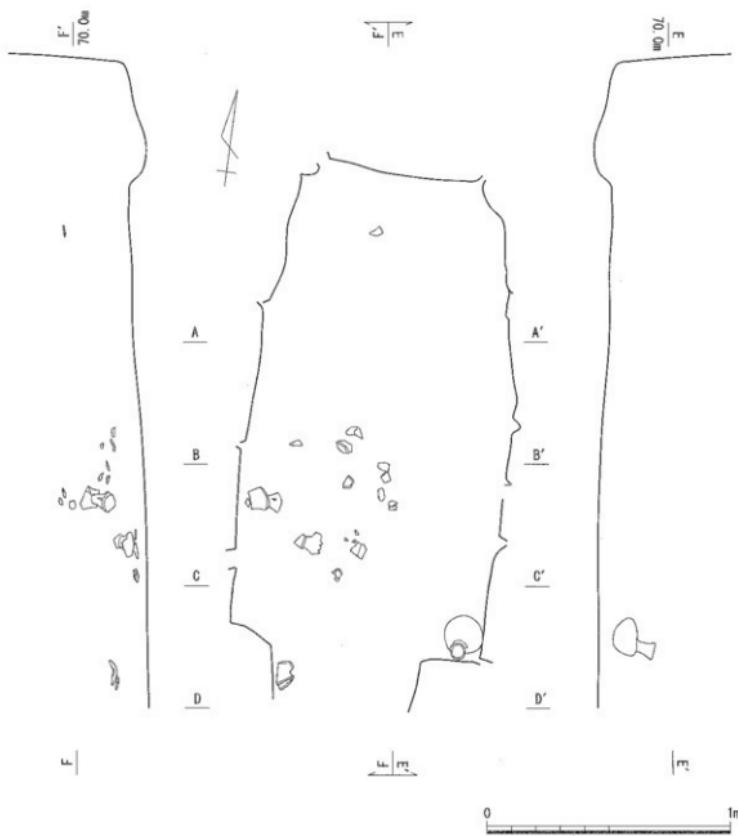
に至る方法以外に考えられない。このことこそ、前述の閉塞石が実は崩落石材の埋積ではないかと疑われる所以である。

④出土遺物（第295図、図版152）

須恵器 1423・1424は無蓋高杯である。2点とも遠江IV期末葉に比定されるが、1423の脚部は沈線により上・中・下の3段に区画され、中段に相対する2つの長細い三角形透孔を穿孔している。平瓶1425は肩が明瞭に屈折しているが、体部は直径に対し高さがあり、遠江IV期末葉に比定される。また、2条の沈線により区画された体部下半にはハケ状工具によりカキ目が施され、頸部には継位の2条線刻から成る箋記号が刻されている。

灰釉陶器 碗1426は見込みが浅く、口縁部が外反せず、やや高い三角形高台を有し、前掲松井氏編年の灰釉陶器IV期-1に比定される。

土師質土器 カワラケ1427はロクロ成形であり、口縁部が直線的に広がり、全体に低平な皿状を呈す。松井一明氏による前掲のカワラケ總年では、天竜川西岸地域の15世紀後半～16世紀前半に比定される中型品に類例がある。1428も1427と同型式のカワラケと考えられる。

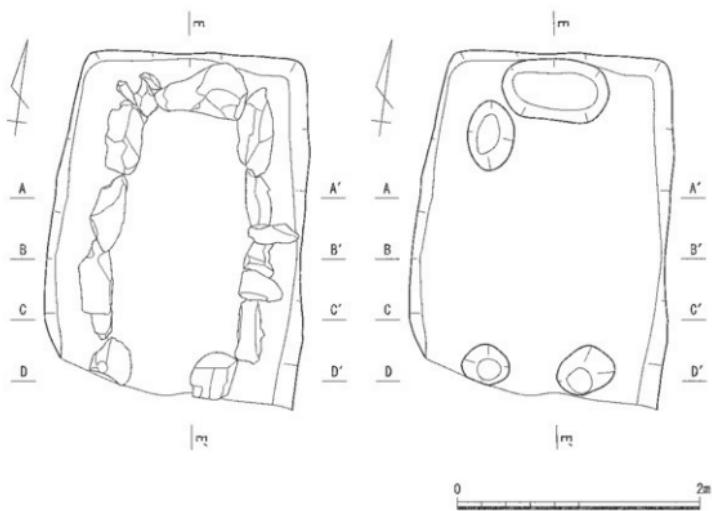


第293図 A54号墳石室遺物出土状況図

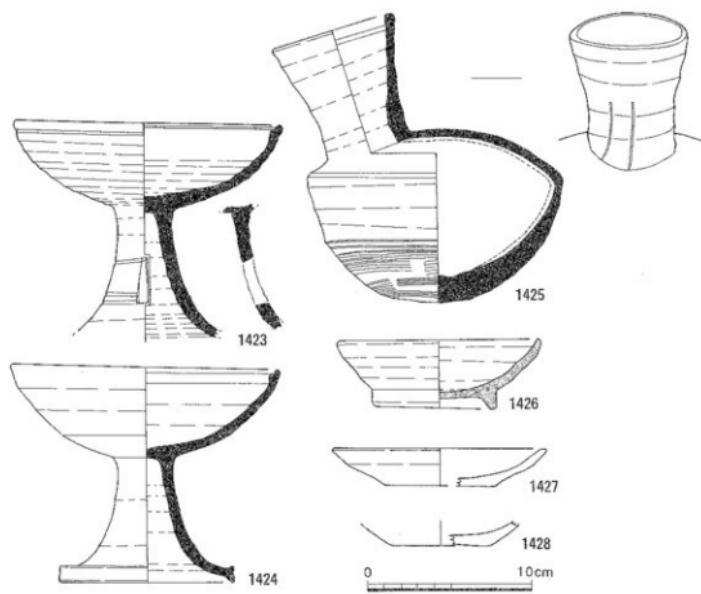
⑤小結

A54号墳は石室出土遺物より遼江IV期末葉に築造され、10世紀後半と15世紀後半～16世紀前半の少なくとも2回にわたって人が石室内に立ち入ったと判断される。古代末期～中世における石室侵入の目的として、石室・遺物の残存状態からは荒々しい盗掘の状況は窺われず、例えば2区A32号墳に見られるような石室を再利用した祭祀行為の可能性が考えられる。

玄室の規模は決して大きいほうではないが、大型かつ良質の石材を入手し、計画どおりの石室設計を行なうことができた点は、当古墳造営主体の階層性の高さを示している。室構造の単複については、玄室の規模は大屋敷A古墳群における單室系擬似両袖式横穴式石室の平均を超えるものではないが、東隣するA55号墳は複室系擬似両袖式横穴式石室を有し、A54号墳はA55号墳の廃絶直後に築造されているため、小規模ながらも複室系擬似両袖式である可能性も現時点では否定できない。



第294圖 A54號填基底石・墓坑実測図

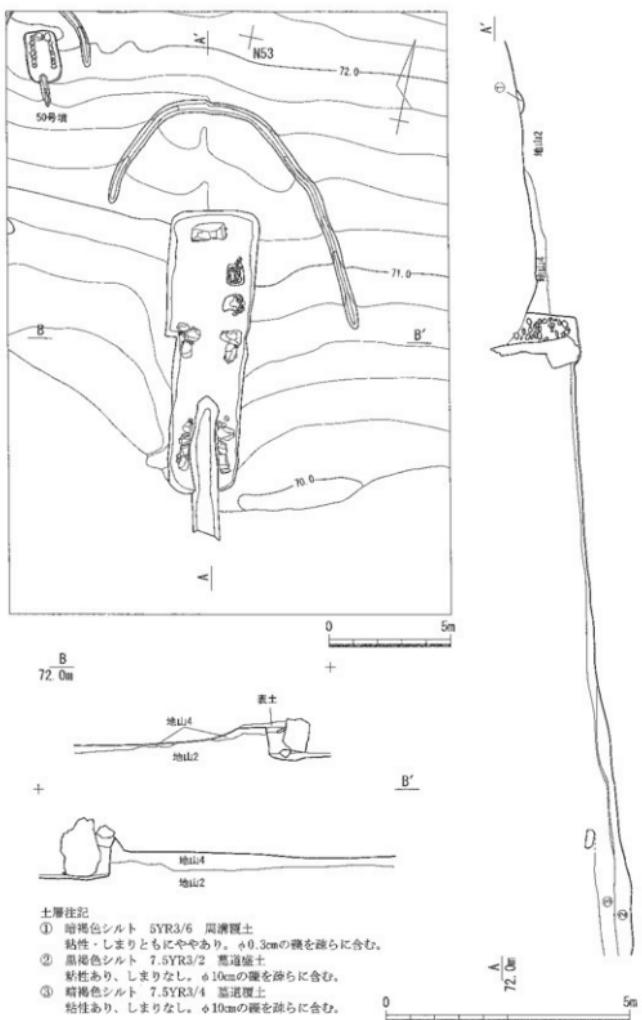


第295圖 A54號填出土遺物実測図

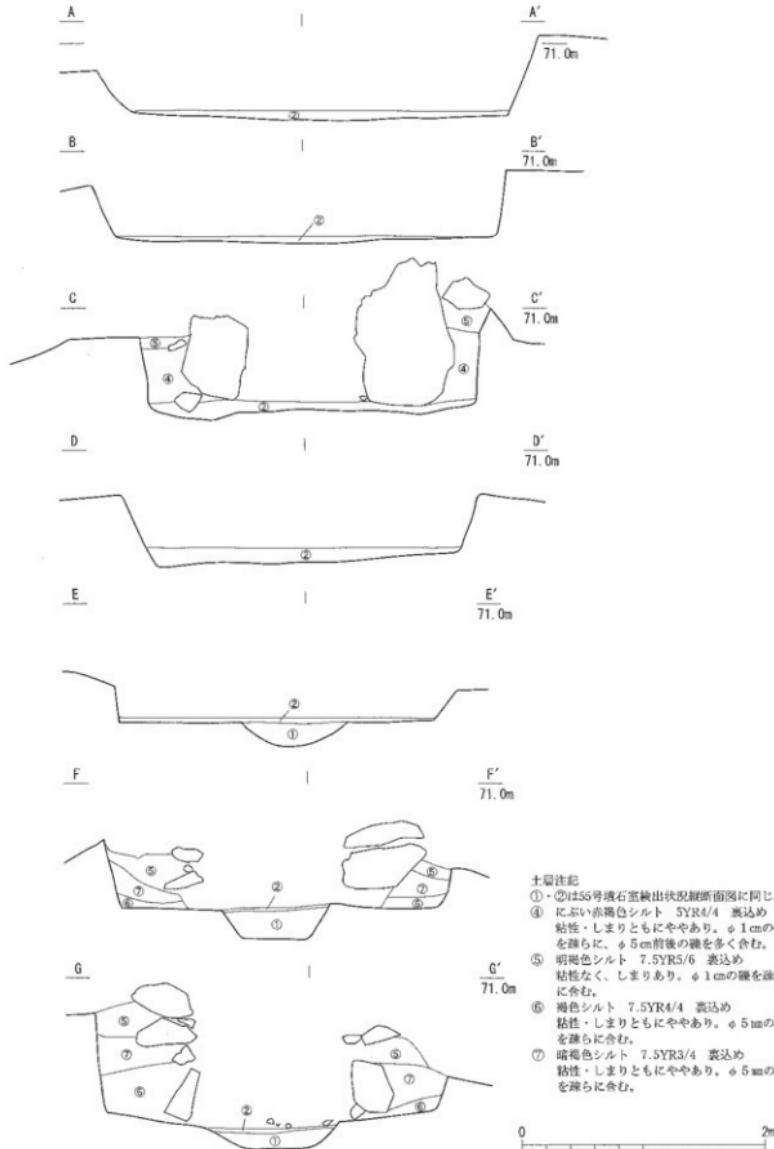
(9) A55号坝

①墳丘・周溝（第248・296図）

A50号墳の南東に隣接し、A54号墳に東接する。また、A56号墳に西接し、古墳の南端部は調査区外南側に連続している。調査区内において墳丘盛土は遺存しておらず、調査区南壁セクションの状況から、調査区外においても墳丘盛土が流失している蓋然性が高い。周溝は北西～東側で約3/8が検出され

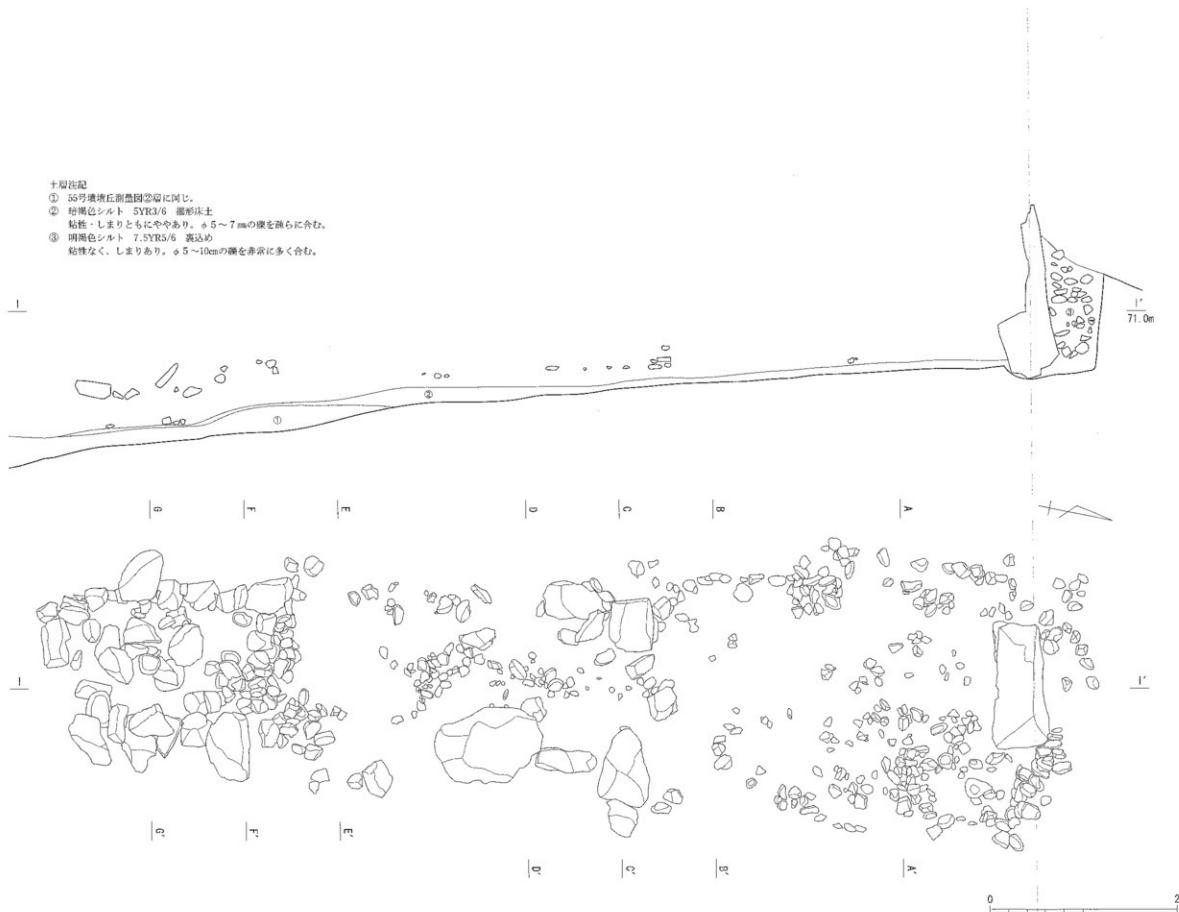


第296図 A55号墳埴丘図



第298図 A55号填石室検出状況横断面図

土質記載
 ① 55号墳堆丘測量図空欄に同じ。
 ② 桜岡色シルト SYR3/6 厚約1m
 粘性、しまりともにややあり。±5~7mmの礫を強らに含む。
 ③ 明高色シルト 7.SYR5/6 表込め
 粘性なく、しまりあり。±5~10cmの礫を非常に多く含む。



第287図 A55号墳石室換出状況図

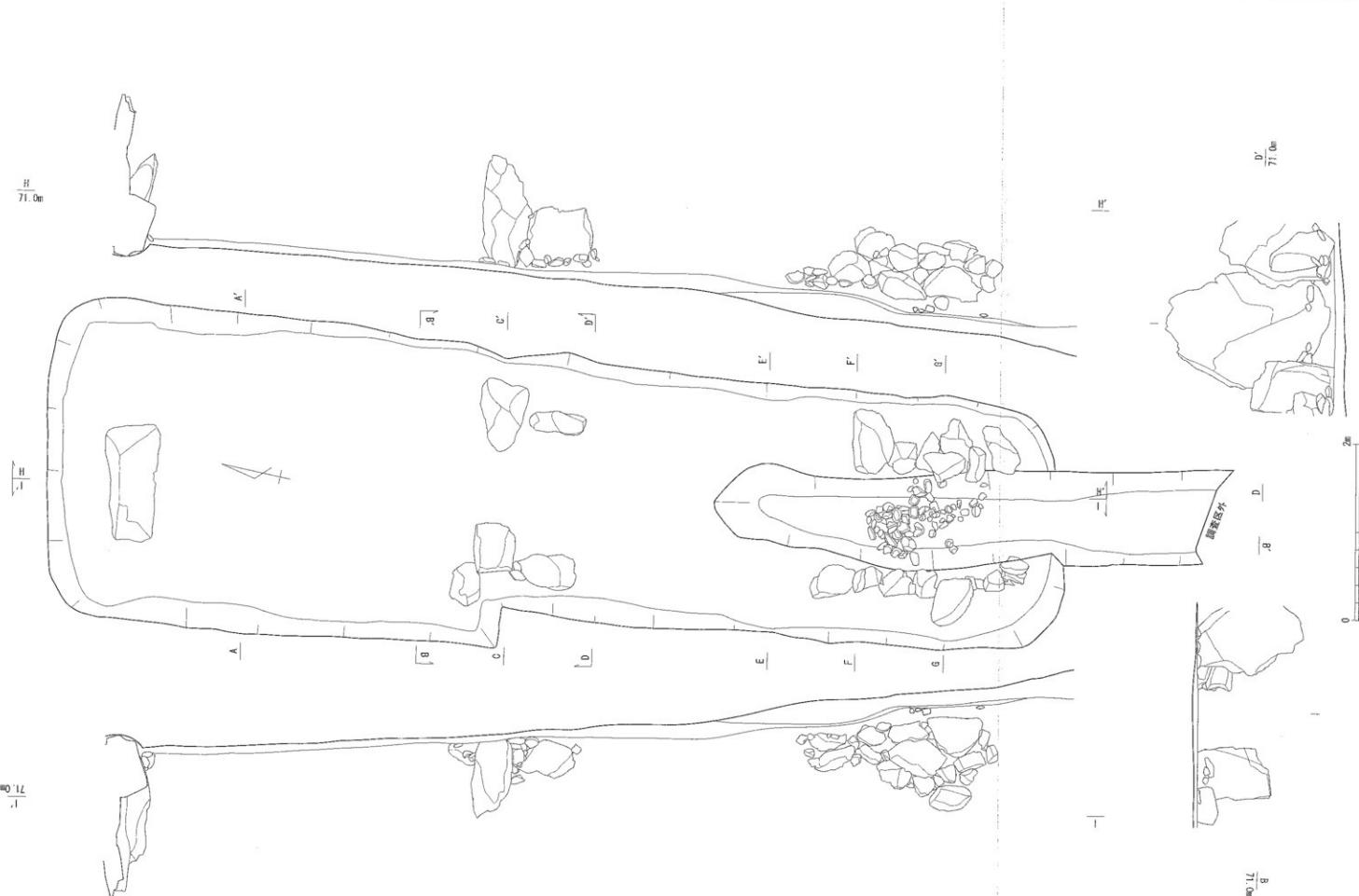


图295图 A55号块石室实测图

底石、そして左右の玄門立柱石の計4石に過ぎない。奥壁鏡石は巨石と称してよく、長軸180cmを測るチャートの板状角礫を立て据え、床面からの高さは1.65mを測る。鏡石は不純物が多く混入しているために青味掛かっており、剥落しやすくなっている。また、鏡石の裏込めには多数の小型礫が用いられている。最も多く込められている礫は天竜川系の花崗岩であり、その硬さで裏込めの強度を高めたと考えられる。次に多いのは砂岩の円礫で、大屋敷A古墳群の地山に包含されている石である。これ以外にも閃綠岩や礫岩が裏込め礫として使用されており、いずれも天竜川水系の石材である。

玄室の側壁は壊滅状態である。僅か1石残る右側壁最前端の基底石は小口置きされたチャートの大型角礫であり、高さ0.25mを測る。玄門立柱石もまたチャートの大型柱状角礫であり、右立柱石は泥を多く含んで青味掛かった色調を呈し、高さ0.87m、側壁からの突出は0.43mを測る。他方、左立柱石はチャートとして純度が高いために白色を呈し、高さ1.24mを測る。左右立柱石の裏込めにも礫が多数使用されており、花崗岩主体に砂岩、泥岩、所謂「青石」(緑色片岩)、「赤石」(赤石山脈に多い火山灰混じりの堆積岩)、石英化したチャートの円礫、石墨片岩、片麻岩、凝灰岩と、多種多様な石材の小型礫が込められている。

羨道 羨道の側壁も壊滅状態である。僅かに、玄門立柱石に当接する両側壁最後端の基底石一対が残存するに過ぎない。2石ともチャートの大型角礫を長手置きし、左側壁は現高0.66m、右側壁は現高0.44mを測る。また、羨道側における立柱石の突出は、左立柱石が0.24m、右立柱石が0.4mを測る。羨道プランは、残存する左右基底石の内側長手面がともに石室主軸に平行することから、長方形を呈したと推定される。

前庭 前庭側壁の残存状態は比較的良好である。最下段には大・中型のチャート角礫を小口置きまたは長手面を内側に向けて設置し、2段目以上も同様のチャート角礫を基本的に小口積みしている。両側壁ともに目地通りは看取されないが、左側壁は最大3段、高さ0.7m残存し、右側壁は最大4段、高さ1.07m残存する。また、両側壁ともに明瞭な持ち送り積みは認められない。玄室奥壁から羨道までの床面は若干傾斜しつつも南北が水平に近付くように掘形床土が込められているが、前庭に至ってやや急傾斜し、羨道床面前端より0.26m下がっている。

敷石 前庭床面の約1/3に敷石が残存する。径5~18cmの円礫・角礫が用いられているが、羨道より伸延する溝状掘り込みの直上に敷設されている。玄室・羨道においてはもとより、前庭の床面も全面に敷石が敷設されていたかは、定かではない。

閉塞石 前庭の最後端、羨道の直前に閉塞石が積載されている。φ10cm未満~30cmの円礫が雑然と積載され、最大4段、高さ0.5m残存する。

基底石 前庭側壁の基底石は入口に向かって広がるハの字形に配置されており、換言すれば、ハの字形の奥側起点を以て前庭最後端と捉えることができる。また、前庭側壁の基底石下端の間隙には小型の円礫がいくつか設置されているが、都田川水系で採取された花崗岩と考えられ、この種の石は現在、佐久間ダム周辺で多く見られる。その硬度から、基底石の支石的な役割を担っていると考えられる。

基底石支石 より明確な基底石支石が、玄室および羨道で計画的に配置されている。奥壁鏡石、玄室左側壁基底石2石、玄門左右立柱石、羨道左側壁最後端基底石の計6石に対応して、中・小型の円礫・角礫を環状に配し、その上に各基底石を搭載している。石材としては裏込め礫同様に花崗岩主体であるが、玄室左側壁の基底石に対応する支石には一見「青石」と粉らわしい輝綠岩の小礫が認められる。

墓坑 長大な右片袖形プランを呈する墓坑が、後壁で地山を1m以上掘り込んで施設されている。右壁の右片袖形の屈曲部は、玄門右立柱石に対応して形成されている。後壁より前方0.8mまでは、より前方の墓坑底面より0.2m前後高いテラス状となっている。奥壁鏡石、玄室左右側壁基底石各2石、玄門左右立柱石の計7石に対応して設置用小土坑が掘削されている。上記の基底石支石はこれらの小土坑に充填

されている。また、小土坑の配置状況により、玄室プランが胴張り形に特定される。

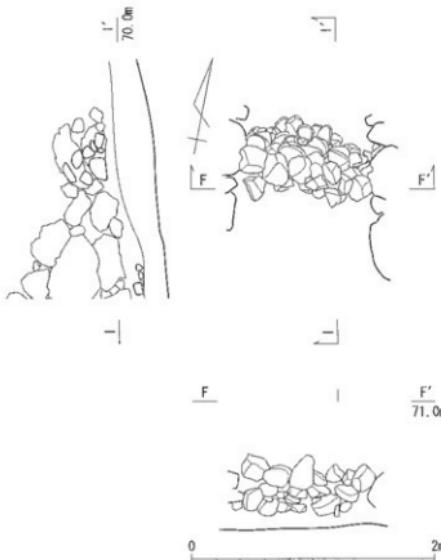
墓道 墓坑の前端に墓道が付設され、石室主軸より僅かに東偏しつつ南南東に向かい、調査区外へ伸びている。墓道の溝状掘り込みは墓坑内に約4m食い込み、北端は羨道中央付近に達している。墓道は墓坑外で検出された部分は一様に深さの約半分まで埋め戻され、墓坑内に食い込む部分は同じ土により上端まで埋め戻されている。そして、後者（燕道盛土）の直上には墓坑前端まで掘形床土が施され、さらにその上に前述の前庭敷石が敷設されている。

通常、石室の構築に先立って墓坑・墓道が掘削される。A55号墳の場合、当初は羨門を以て石室の開口部とする計画が存在し、それに従って墓道の溝状掘り込みを墓坑内奥まで食いませたが、より長大な石室を構築する気運が高まり、当初の開口部からハの字形に聞く前庭という形で石室を追加延長する設計変更が為され、前庭構築の支障となる溝状掘り込みを埋め戻したという経緯が想定される。墓坑内において墓道より伸延する溝状掘り込みが埋め戻され、あらためて石室床面が設定される状況はA49号墳でも見受けられる。また、複室構造の石室であるにもかかわらず、羨門立柱石を配さないことも、前庭の構築が当初計画になかったためと考えられる。

③遺物の出土状況（第301図、図版112）

石室内を中心とし、多量の遺物が出土した。玄室床面直上よりガラス小玉9点（1499～1507）、鉄製武器3点（1628・1630・1632）、須恵器小片若干が出土している。最も多く出土したのは羨道であり、須恵器43点以上（1429～1435・1437・1438・1445～1451・1453～1458・1460・1462～1466・1468・1469・1471・1475～1477・1479・1480・1482～1487）、土師器1点（1488）、カワラケ5点（1490・1493～1496）、繩文土器1点（1497）、ガラス小玉12点（1508～1519）、鉄製武器6点（1618・1624・1629・1631・1633・1634）が床面直上より出土しているが、右側壁が存在したと思しき箇所からも出土していることから、追葬終了時の原位置を保持するものはまずないと考えられる。閉塞石の隙間より刀子1点（1621）が出土している。前庭床面直上では須恵器11点（1441～1444・1461・1470・1472～1474・1478・1481）、土師器1点（1489）、カワラケ1点（1492）が確認されている。また、石室の覆土中より須恵器1点（1439）、カワラケ1点（1491）、玉類94点（1520～1613）、鉄製武器10点（1615～1617・1619・1620・1622・1623・1625～1627）が出土している。

墓道において須恵器4点（1436・1440・1459・1467）が出土した。前庭左側攪乱よりも須恵器1点（1452）が出土している。また、A55号墳の十字トレンチ北側の地山直上において繩文土器1点（1498）が出土している。なお、羨道より錢貨1点（1752）、石室覆土より石器3点（1744・1746・1748）が出土してい



第300図 A55号墳閉塞石実測図

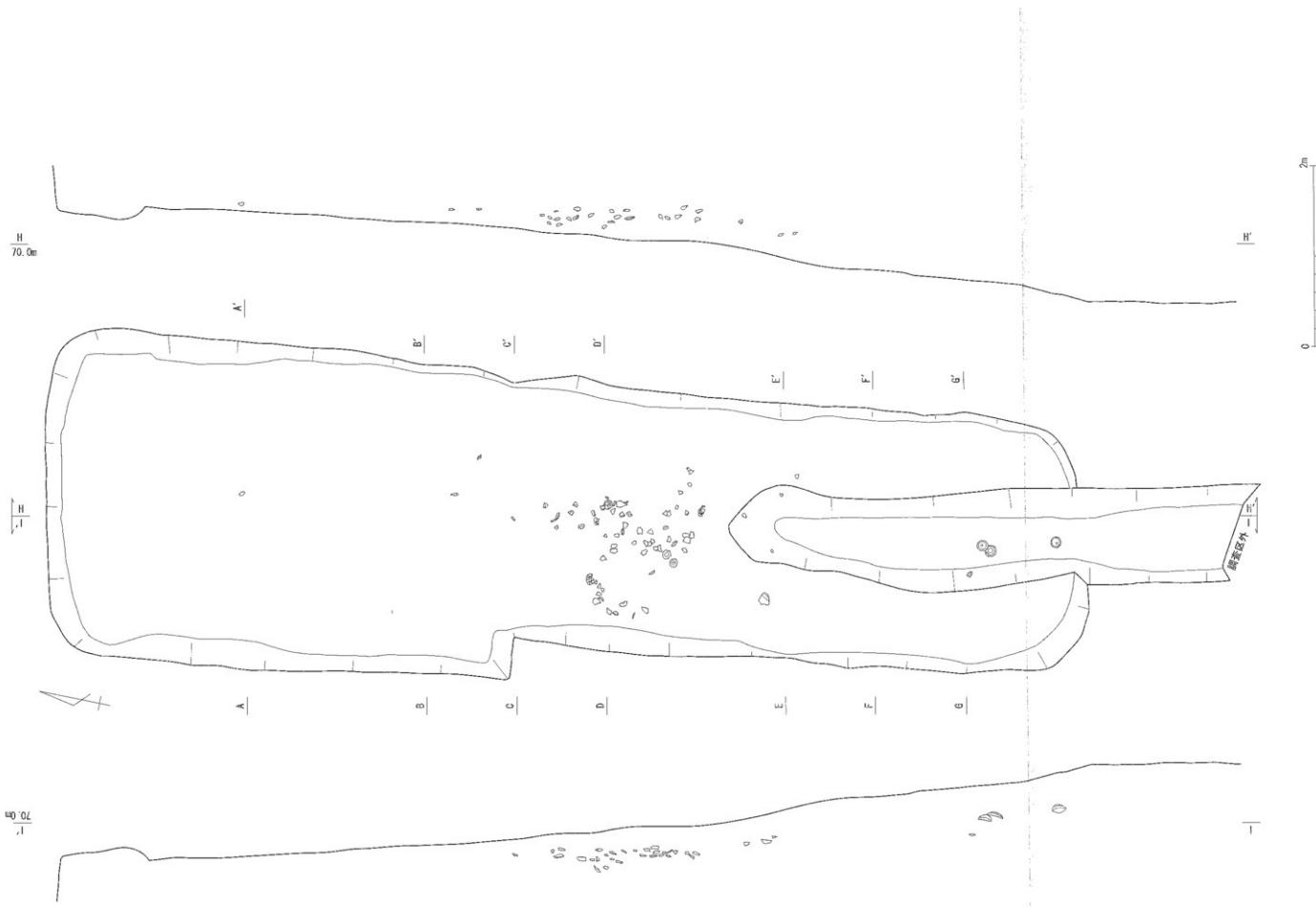
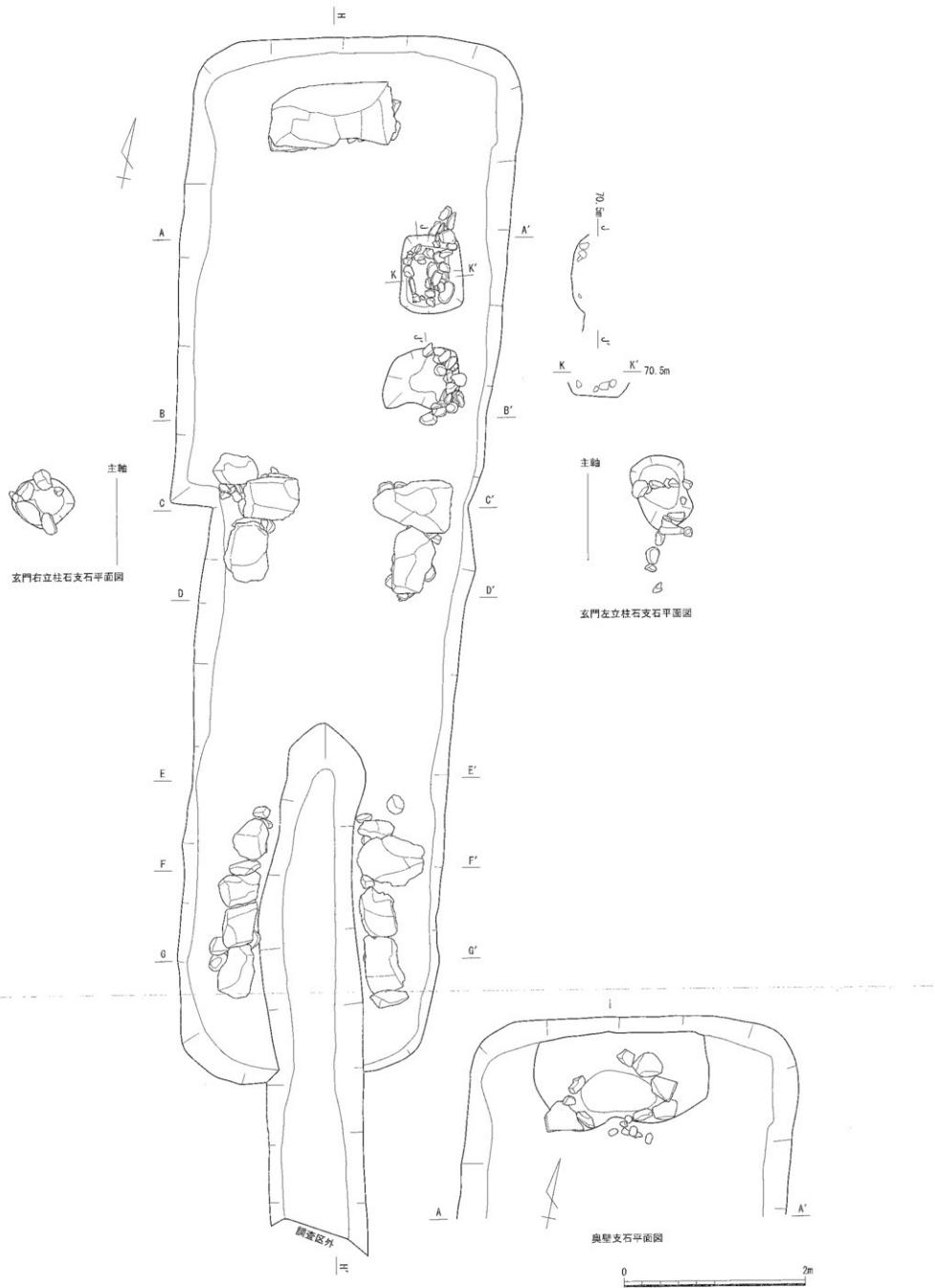
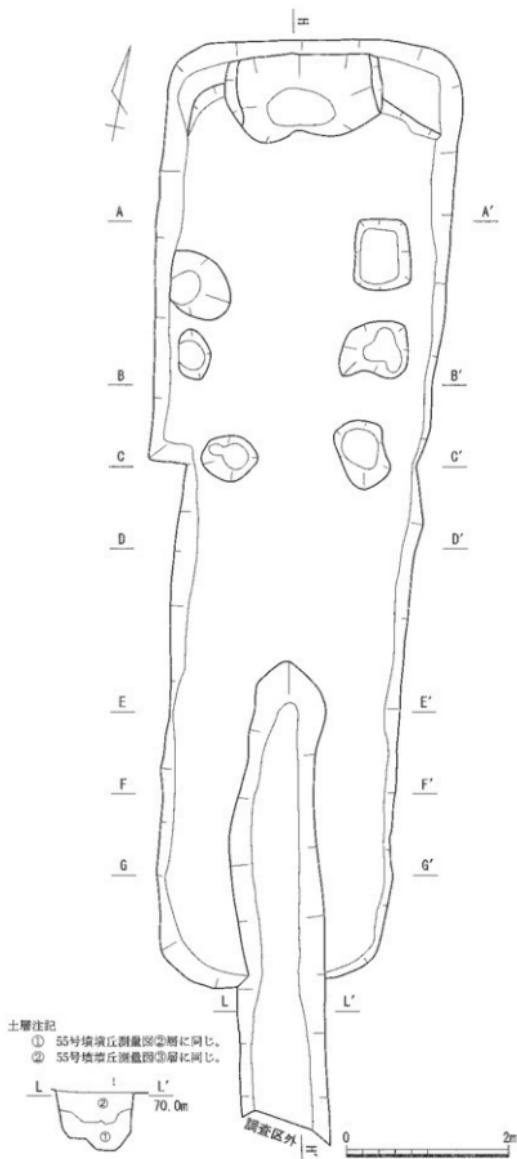


图301 A35号墓石室随葬出土状况图



第302圖 A55號墳基底石測量圖



第303図 A 55号墳墓坑実測図

るが、これらの古墳と無関係の遺物については、本章第5節でまとめて後述する。

④出土遺物（第304～306図、図版13・153～156）

須恵器 1429～1444は坏蓋である。1429～1431は外面に縫を有し、口縁部とそれ以上とを明瞭に区画しており、東海地方西部産と考えられ、遠江Ⅲ期末葉に併行する。1434は遠江Ⅲ期末葉、1432・1433は同IV期前半に比定される。1435は体部中央附近に縫を有し、東海地方西部産と考えられ、遠江Ⅳ期前半に併行する。また、外面頂部に十文字状の範記号が刻されている。1437は遠江Ⅳ期後半に比定され、外面に横位のミガキを施す。1438は乳頭状の摘みを有し、遠江Ⅳ期前半に比定される。1439～1444は遠江Ⅳ期後半に比定される。1445～1460は坏身である。1445～1448は外底面に十文字状の範記号を有し、4点のうちいずれかが1435と蓋坏としてのセット関係にあると想定され、遠江Ⅳ期前半に併行する東海地方西部産と考えられる。1449～1451は遠江Ⅲ期末葉、1452・1453は同IV期前半、1454～1458は同IV期後半に比定される。また、1457の底部外面には1条線刻の範記号が刻されている。1459・1460は口縁端部がやや外反し、遠江Ⅳ期後半に比定される。

1461は短頸壺であるが、全体に垂みが著しい。遠江Ⅲ期末葉に比定され、外面底部に

はやや肉太の1条線刻の箋記号が刻されている。壺口縁部1462は遠江Ⅲ期末葉に比定される。壺1463は体部の肩が張り、この箇所で体部は最大径を測るが、口頸部は体部高よりも大きいため、遠江Ⅲ期末葉に比定される。

1464～1471は無蓋高壺である。1464・1465は遠江Ⅲ期後葉に比定される可能性がある。1466は沈線2条で区画された壺部外面の中央部に波状文が施文され、遠江Ⅲ期後葉に比定される。1469は遠江Ⅲ期後葉、1467は同Ⅲ期末葉、1468・1470は同Ⅳ期後半に比定される。1471の脚部は中央に沈線2条を配し、長脚二段の痕跡をとどめ、据部は遠江Ⅳ期前半に盛行する形状であるが、同Ⅲ期末葉に遡る可能性もある。1472・1473は高壺脚部下半であり、1473は遠江Ⅲ期後葉～末葉、1472は同Ⅳ期後半に比定される。高盤1474の器種としての時期的上限は遠江Ⅳ期後半となる。

1475は広口長頸壺の口頸部であれば、器種としての時期的下限は遠江Ⅲ期後葉となる。1476は有蓋脚付長頸壺の口頸部であり、遠江Ⅲ期後葉に比定される。1477は脚付長頸壺の体部下半であり、体部外面中央に櫛描き列点文が施文され、遠江Ⅲ期末葉に比定される。1478は長頸壺としては末期的形態を呈し、遠江Ⅲ期後葉に比定される。壺蓋1479は乳頭状の摘みを有し、瓶類口頸部1480は口縁端部が若干外反気味であり、両者がセット関係にあるとすれば、2点とも遠江Ⅳ期前半に比定される。広口壺1481は口頸部が長く、遠江Ⅲ期後葉を上限とする。平瓶1482は体部外面下半を手持ち箋削りで仕上げ、外底面には十文字状の箋記号が刻され、遠江Ⅳ期前半に比定される。平瓶1484も同時期の所産である。フラスコ形瓶部1483は遠江Ⅲ期末葉～Ⅳ期の範疇で捉えられる。

1487の器種同定は容易ではないが、大型品に装飾部位として取り付く瓶類口頸部形の「子」部と考えられる。基部には焼成前穿孔が1箇所施されている。その「親」は子持ち器台である蓋然性が高く、時期的下限は遠江Ⅲ期後葉となる。

土師器 1488・1489は壺であり、ともに遠江Ⅳ期前半に併行する。1489は内面をハケ調整している。

土師質土器 1490は高台が取り付くか、下方へ突出する厚い底部となるかは判然としないが、ロクロ成形されている。色調はカワラケに近似するが、遠江において該当する型式が見当たらず、器種・時期ともに不明である。1491～1496はカワラケである。1491～1493は非ロクロ成形、1494～1496はロクロ成形されており、前掲松井氏編年に照らせば、1491・1492は西遠江地域の13世紀における中型品、1493・1495・1496は同地域同時期の小型品、1494は同地域15世紀後半～16世紀前半の中型品に比定される。

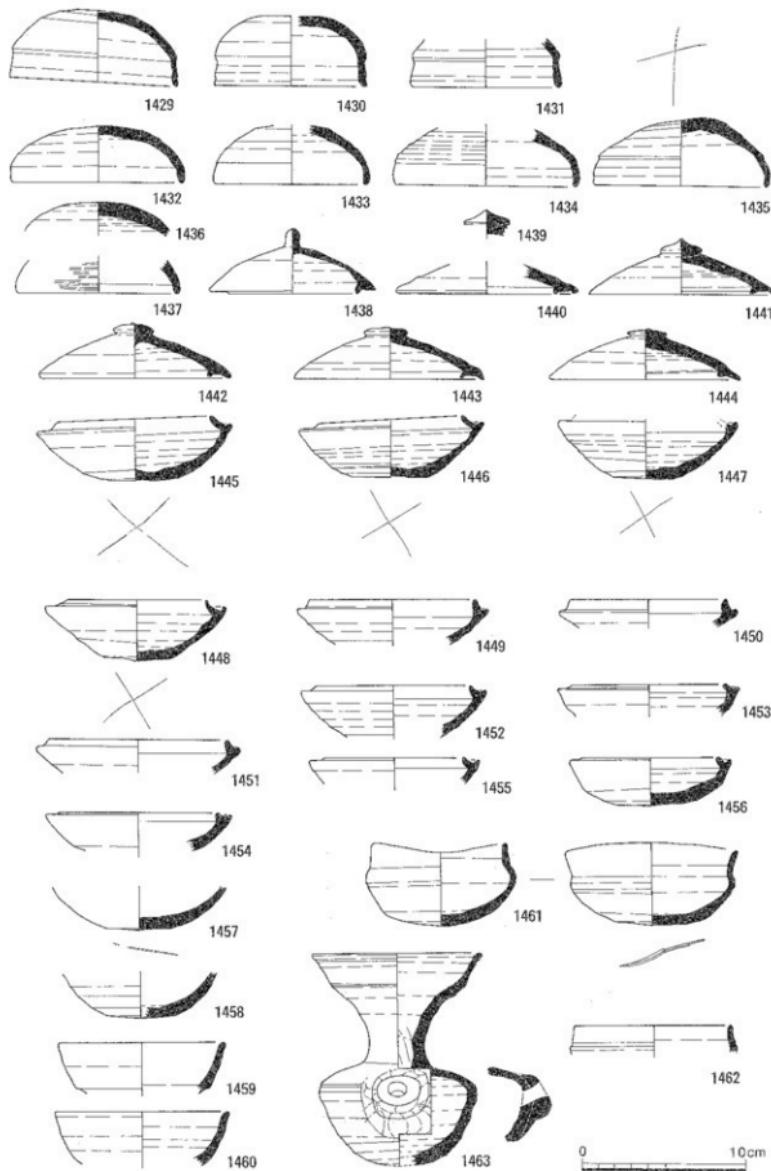
縄文土器 1498は浅鉢の口縁部の装飾部分であり、縄文時代中期前半の所産と推定される。1497は外面に縄文を施す体部片であるが、時期不詳である。

玉類 1499～1519・1522～1609はガラス小玉、1520・1521はガラス臼玉、1613はガラス管玉である。これらガラスはほとんど組系系統の色調であるが、1520のみ青緑色を呈す。1610は水晶製切子玉で、約2/5が欠損している。1611・1612は蛇紋岩製の丸玉である。

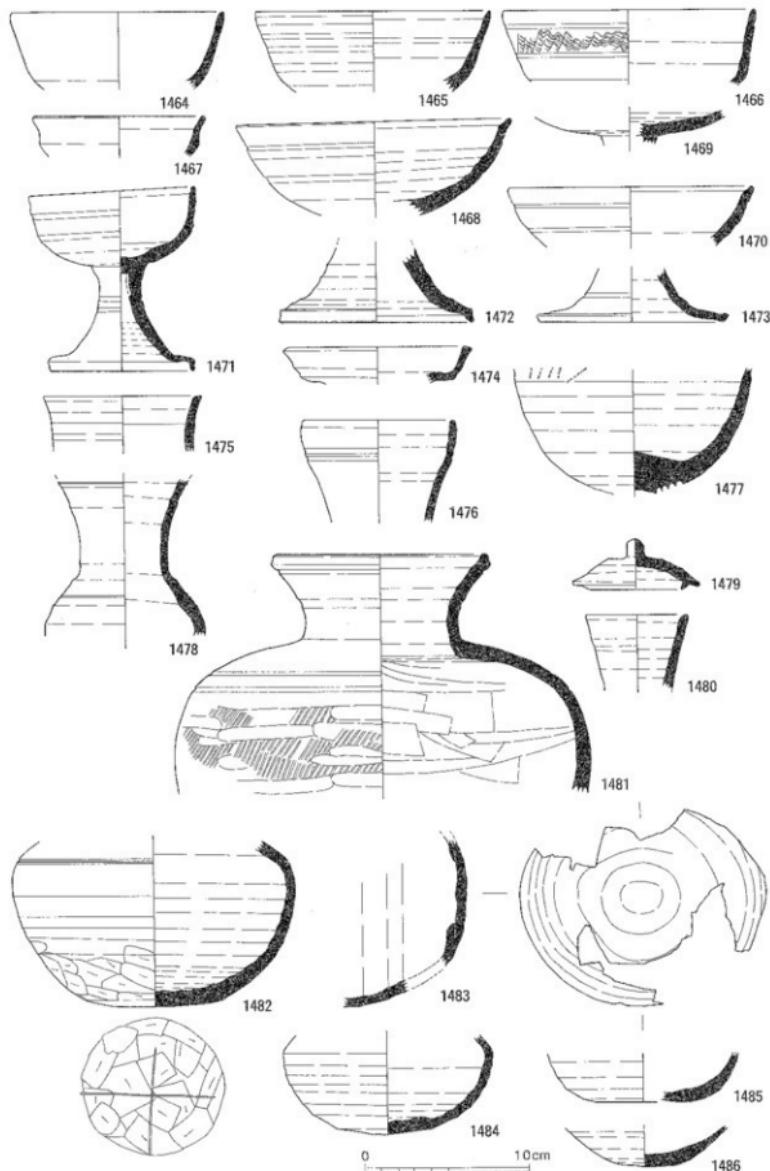
鉄製品 1614～1619・1629～1631は鉄鎌である。鎌身體態の判別できる1614・1615・1630はいずれも尖根柳葉式であり、1614は鎌闇を形成しないが、1615・1630は撫闇の鎌闇を有す。また、1614・1615の鎌身體断面は片丸造りであるが、1630の鎌身は両丸造りされている。1616・1617・1619・1629の茎闇は鍊闇であり、いずれも長頭鎌と判断される。また、茎片1618には木質が付着残存する。

1620～1623・1628・1632・1633は刀子である。いずれも身は平造りされている。1620は身の研ぎ減りが著しく、闇部に鏝が一部残存し、刃側のみにある闇の形態は不明瞭であるが、直角闇と推定される。1628の開部にも鏝が一部残存するが、直角両闇と推定される。また、1621・1632の茎には柄の木質が付着残存する。

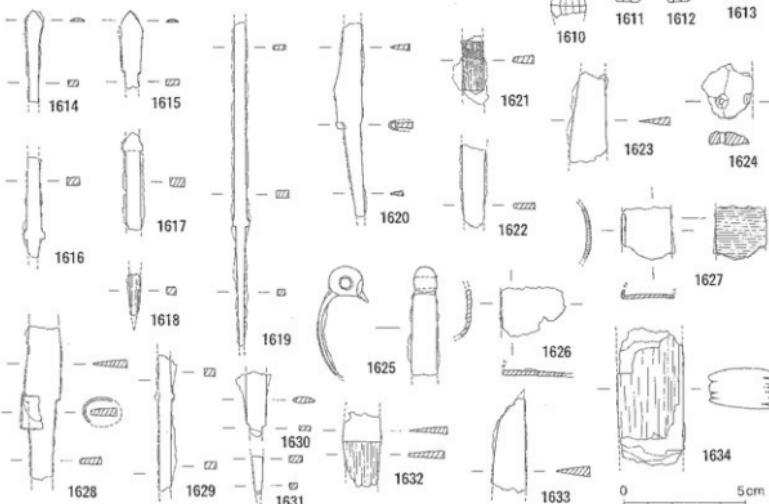
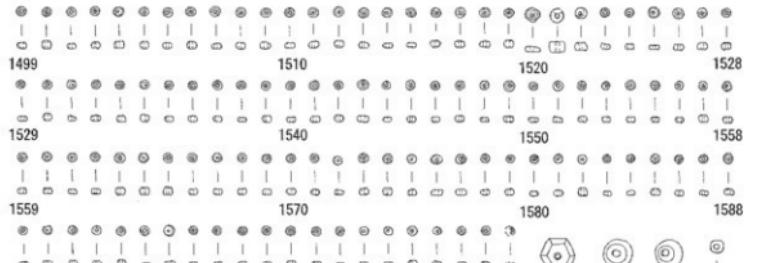
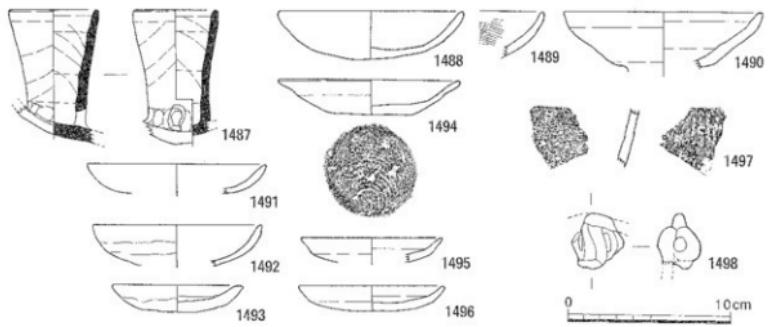
1624は目釘孔状に穿孔されており、刀の茎片とも考えられるが、詳細は不明である。1625は大刀の吊金具であり、黒漆塗鞘の装具の可能性がある。1626・1627は幅と断面の巡りから刀の鏝と判断され、1627



第304図 A55号墳出土土器実測図 その1



第305図 A55号墳出土土器実測図 その2



第306図 A55号出土土器実測図 その3・玉類・金属製品実測図

の内側には柄の木質が付着残存する。1634は木質が厚く付着残存し、鉄部分の観察はほとんど不可能であるが、刀の茎片と判断される。

⑤小結

A55号墳は出土遺物より遠江III期後葉に築造され、同IV期後半まで追葬が継続したと判断される。石室形態は複室系擬似両袖式横穴式石室であるが、墓坑は右片袖形プランとなっており、当古墳に先行して築造された1区A10号墳、2区A32号墳、および可能性ではあるが、東隣するA56号墳の右片袖式横穴式石室に影響されなかつたとは考え難い。A55号墳の全長9.6mを測る石室は大屋敷古墳群全体でも第2の規模を誇り、当古墳群形成の契機となった興覚寺後古墳の石室規模さえも上回るもの、石室形態の階層性はやはり右片袖式横穴式石室が最高であることを明示する好例と言える。

それでも、A55号墳が大屋敷A古墳群において最高レベルの階層性を有することは揃るぎなく、恐らく当初計画になかった前庭を追加構築したこと、小規模石室であれば計画性の欠如が階層性の低さに直結したであろうが、A55号墳の場合、石室を追加延長するに足る良質の石材を豊富に入手できる実力を造営主体が有していたと解釈される。A55号墳では、これらの石材さえも掠奪する盗掘が中・近世に幾度も繰り返されたようであるが、残存する遺物より大刀や装飾付大型須恵器の副葬が明らかであり、さらに貴重な副葬品が玄室内に納められていたと想定される。

⑩ A56号墳

① 墳丘・周溝（第307図、図版113）

3区のほぼ中央に位置し、A55号墳に東隣する。古墳の南西部は調査区南辺に接しているか、もしくは若干調査区外に連続する。墳丘盛土は遺存していない。周溝は西～南西側を除く約7/10周分が検出されたが、墳丘規模に較べて幅狭で浅く、削平により下端近くのみが残存していることが分かる。周溝に囲まれる範囲は東西14m、南北17.2m以上を測り、南北に長い橢円形プランの円墳を呈す。

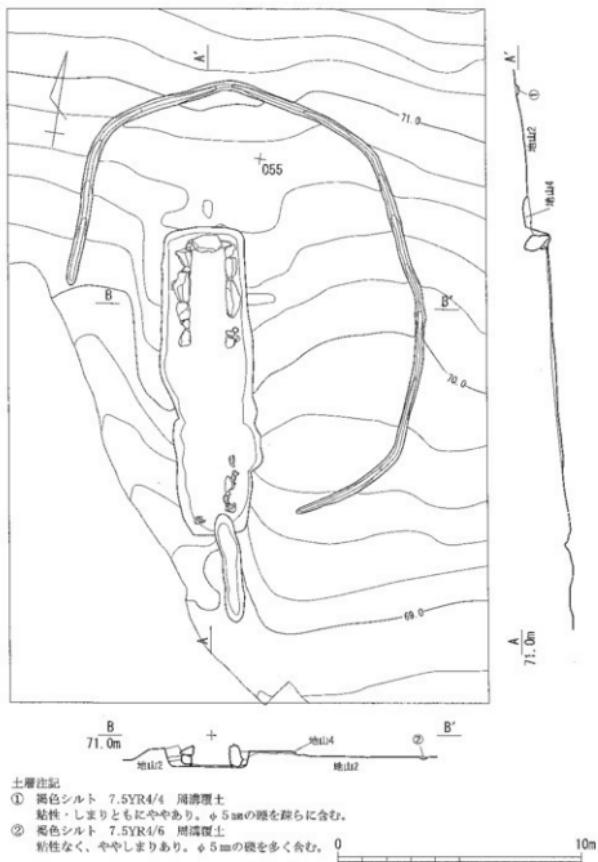
② 墓葬施設（第308～310・312図、図版6・113～116）

古墳の中央よりやや西寄りに長大な横穴式石室が構築されている。徹底的な盜掘により残存状態は劣悪で、石室形態は不明であるが、石室の残存部分は南北に分離しており、奥壁を擁する北側部分を玄室、開口部を含む南側部分を羨道と、便宜上呼称する。開口方向は真南より若干南南東に振れている。

天井石 玄室内に転落した石材のうち、長軸1mを超える大型角礫2石が検出されている。天井石の可能性が想起されるが、当石室の壁材は相当大型の角礫を使用しているため、これらが崩落した壁材である可能性も否定できない。いずれにせよ、天井石の大部分は盜掠されてしまったと考えられ、2石が天井石であれば、これも自然崩落したものではない可能性が高い。

玄室 後端付近まで幅が一定し、奥壁幅がやや狭くなる奥窄まり形の玄室プランを呈す。奥壁にはチャートの大型角礫を立て据えて鏡石としているが、玄室内側へ著しく傾倒している。これは、後世の擾乱や重機の接触等による発掘調査時の失敗によるものではなく、墓坑後壁の直前に掘形床土を高く盛土し、その前面に中型角礫4石が石室主軸に直交して配列され、奥壁ラインを形成するとともに支石として菱形縦断面の鏡石を前から支えているのであり、結果として現状2段の奥壁が面として連続直立している。つまり、鏡石の傾倒は築造当初より意図された状況であったと言える。鏡石はチャートとして非常に純度が高く、純白に近い色調を呈す。約2億年前に生成し、その後全く変質しておらず、極めて良質の石材である。なお、鏡石上方の石材積載状況は不明である。

左側壁は基底石のみ残存し、いずれも白色チャートの大型・中型角礫である。特に最後端より3石目の基底石は長軸153cmを測る巨石とも称すべき石材が用いられ、高さ0.9mを測る。右側壁は最大2段、高さ0.94m残存する。基底石には左側壁同様の大型角礫が用いられ、2段目は相対的に小型の角礫の長



第307図 A56号墳填丘図

室両側壁より小さい大型・中型の白色チャート角礫を用い、基本的に長手面を内側に向けて設置されている。また、構造材の間隙を小型の円礫・角礫で充填しているが、裏込め礫と考えたほうがよさそうな箇所に位置するものもある。

右側壁には基底の1石が残存するのみであるが、中型でも最小級の白色チャート角礫を平手置きし、羨門を形成している。現高値が0.12mを測り、側壁構造材というよりもむしろ基底石支石のような役割を担ったとも考えられるが、その羨道内側面は玄室右側壁面の延長線より石室主軸へ0.45m寄っている。

敷石 現状の玄室床面に最大径40cmに達する。敷石としては大振りの扁平角礫とφ 5~20cm前後の扁平円礫が大きく擾乱されつつも敷設されているが、本来は玄室床全面に敷石が存在したと想定される。石材としては、扁平角礫はチャート、扁平円礫は花崗岩または粒子の細かい砂岩である。なお、羨門右側

手面を内側に向けて、或いは小口積みで積載され、内側へ持ち送られている。また、2段目以上が前方へ傾斜下降する目地通りが想定される。石材は白色チャート主体であるが、最後端より2石の基底石および2段目現状最後端の1石の計3石は泥を多く含む黒色チャートであり、青黒い色調を呈す。両側壁とともに構造材の間隙を小型の角礫・円礫で充填している。

羨道 現存する羨道左側壁最後端と玄室左側壁現状最前端との間に南北4.3mの空白が存在し、玄門等の状況は不明であるが、玄室・羨道の左側壁面は一直線上に配されている。羨道左側壁は羨門より基底石が4石残存するのみであり、現状で最高0.28mを測る。石材としては玄

壁沿いにも扁平な小型円礫・角礫が配されているが、敷石の可能性があると述べるにとどめられる。

墓底石 玄室側壁の基底石は大型角礫の長手置きが主体であるが、奥窄まり部分に小口置きされた左側壁最後端の基底石による石材の長さ調整が認められる。鏡石の支石を兼ねた奥壁基底石4石は長手置きされ、左右両端各1石の奥壁面に両側壁最後端の基底石が当接している。このような奥壁と両側壁の当接状況は、2区A32号墳の右片袖式横穴式石室においても看取される。

墓坑・墓道 右片袖形プランを呈する長大な墓坑が後壁で地山を0.9m以上掘り込んで施設されている。右片袖状部分は撫形に見えるが、これは石室羨道の後半部（または中央部）の左右後背と同様に墓坑壁が擾乱されているためであり、本來は他の右片袖形プランの墓坑と同様に、直角に屈曲していたと想定される。なお、この部分が石室の袖石に対応していたかどうかは定かではない。また、奥壁鏡石と玄室両側壁基底石に対応して6基の設置用小土坑が掘削されている。墓坑の前端には墓坑の規模に比して短小な墓道が付設されているが、上部は全面的に擾乱されている。墓道の溝状掘り込みは墓坑内に食い込むものの、羨道には及んでいない。

③遺物の出土状況（第311図、図版116）

石室内を中心に比較的多くの遺物が出土しているが、大部分は追葬終了時の原位置を保持していないと考えられる。玄室または羨道後部より須恵器片多数（1637・1639・1647・1648・1650・1652・1653・1655・1656・1658～1663・1666～1669・1672）、灰釉陶器片（1673）、山茶碗片（1675）、鉄製品片多数（1677～1700）、耳環4点（1701～1704）が出土した。玄室敷石の直下においても耳環1点（1701）と須恵器片数片が出土しており、現存する敷石が追葬時に敷設されたことを示している。また、墓道において須恵器片（1644）が散見され、墓道直上およびその周辺の擾乱からも蓋坏や壘を主体に多量の須恵器小片が出土したが、図化に耐え得るもののは極めて少ない。

④出土遺物（第313・314図、図版13・156・157）

須恵器 1635～1638は坏蓋である。1635～1637は遠江IV期後半、1638は同IV期後半～末葉に比定される。また、1635は外面頂部に1条線刻の簾記号を有す。1639～1646は坏身である。1640・1641は遠江III期中葉、1642は同III期後葉、1639は同III期末葉、1643は同IV期前半、1644は同IV期後半に比定され、1645・1646は同IV期前半に比定される可能性がある。1647～1653は無蓋高杯である。1651は遠江III期後葉、1650・1652は同III期末葉、1649は同IV期前半、1647・1648・1653は同IV期末葉に比定される。1654・1655は幅広の長方形透孔が穿孔され、遠江III期後葉～末葉の脚付壺の脚部の可能性がある。

平瓶1657は遠江III期中葉～後葉に比定される。1658・1659は脚付短頸壺の蓋であれば、遠江III期末葉頃の所産と考えられる。1664は長頸壺であれば、遠江IV期後半に比定される。1665・1666は遠江IV期に収まる広口壺の可能性がある。1667～1671は壺である。1668は小型壺の口縁部であり、遠江III期末葉に比定される。1669は遠江IV期前半、1670・1671は同IV期後半、1667は同IV期末葉に比定される。

灰釉陶器 1673は深輪であり、前掲松井氏編による灰釉陶器IV期に比定される。

山茶碗 1674・1675は碗であり、前掲松井氏編年に照らせば、1674は山茶碗II期、1675は同III期-1に比定される。

繩文土器 1676は浅鉢の口縁部ならば繩文時代中期前半に比定される可能性があるが、判然としない。
金属製品 1677～1685は鉄鎌である。1677は短頭平根腸抉三角形式であり、鎌身は片丸造りされ、茎関は棘関となっている。1678・1679・1684・1685も棘関の茎関を形成するが、1677の存在のため、長頭鎌か短頭鎌かは判別できない。また、1678の茎には巻き付けられた樹皮が錆着遺存する。1687～1689は両頭金具である。3点とも芯棒と筒金は概ね良好に残存するが、花弁部は完全に失われている。

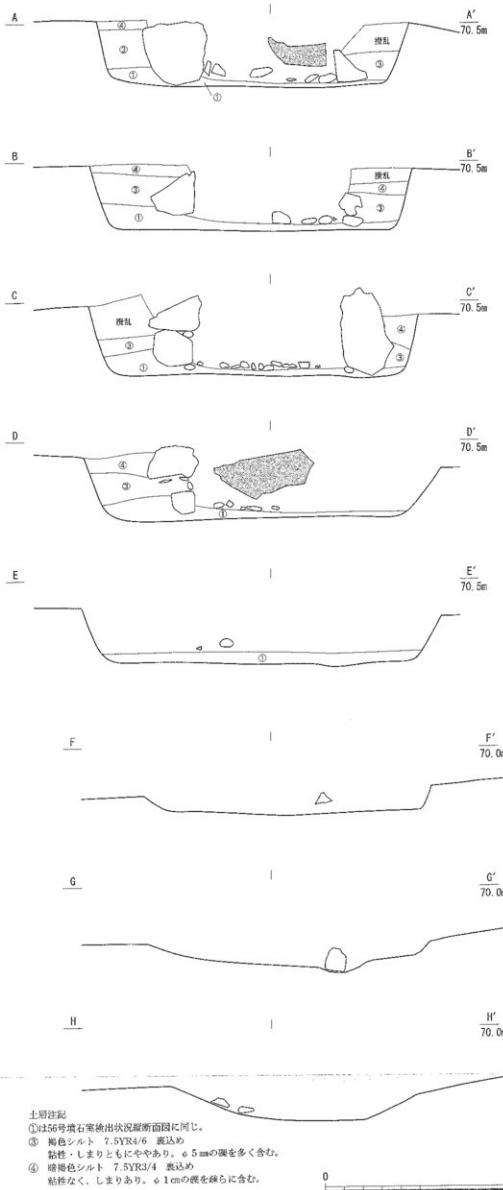
1686・1690～1692は刀子である。1686・1690・1692は刃側のみに闇を有し、1690～1692の身は平造りされている。1693～1696は刀子の鍔である。1696は何らかの圧力により展開してしまっている。

土質注記

- ① 明赤褐色シルト SYR5/8 摩擦地土
粘性なく、しまりやあり。φ 5 mmの礫を多く含む。
- ② 明赤褐色シルト SYR5/8 表込め
粘性なく、しまりあり。φ 1 cmの礫を多く含む。



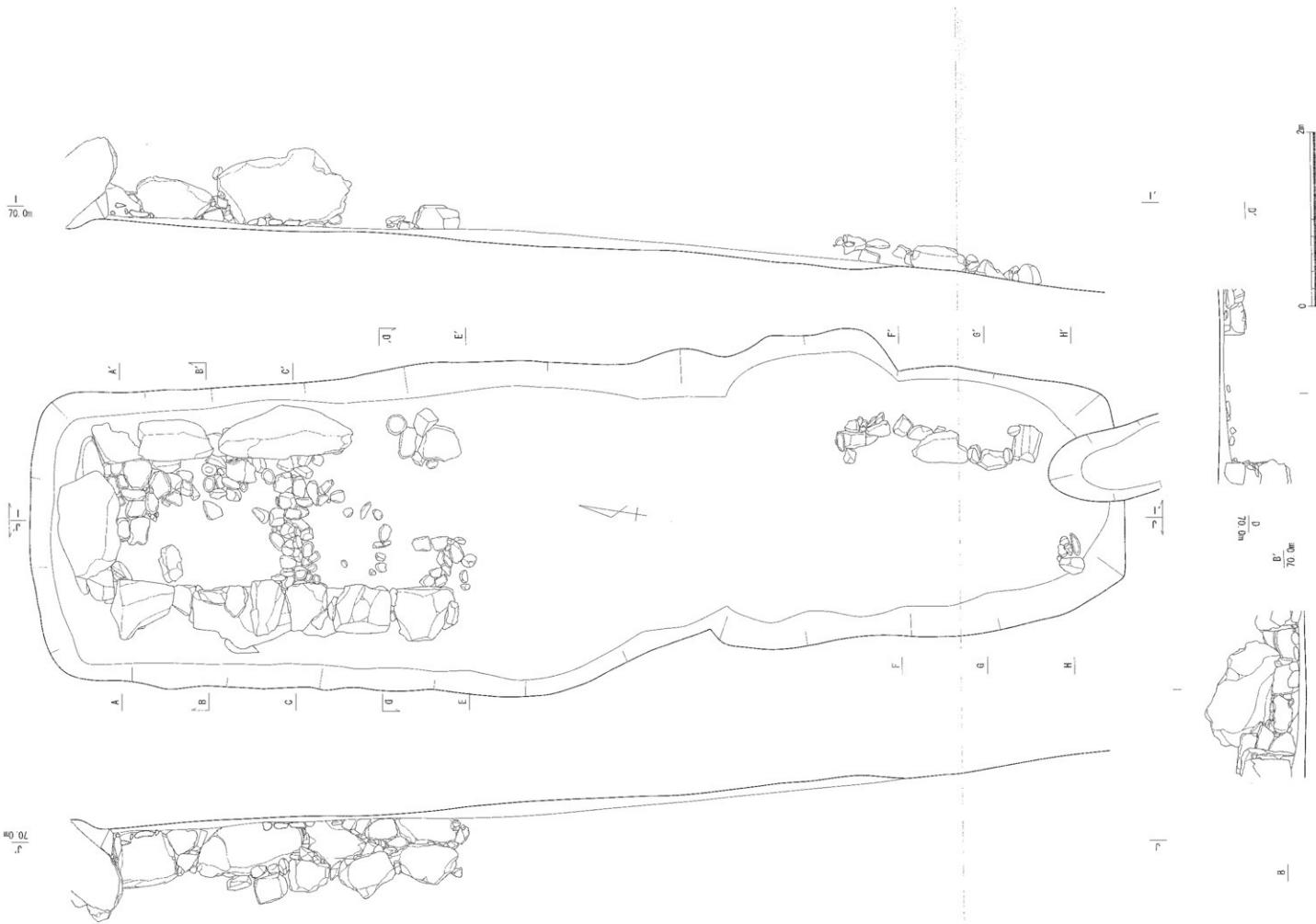
第308図 A56号填石室検出状況図



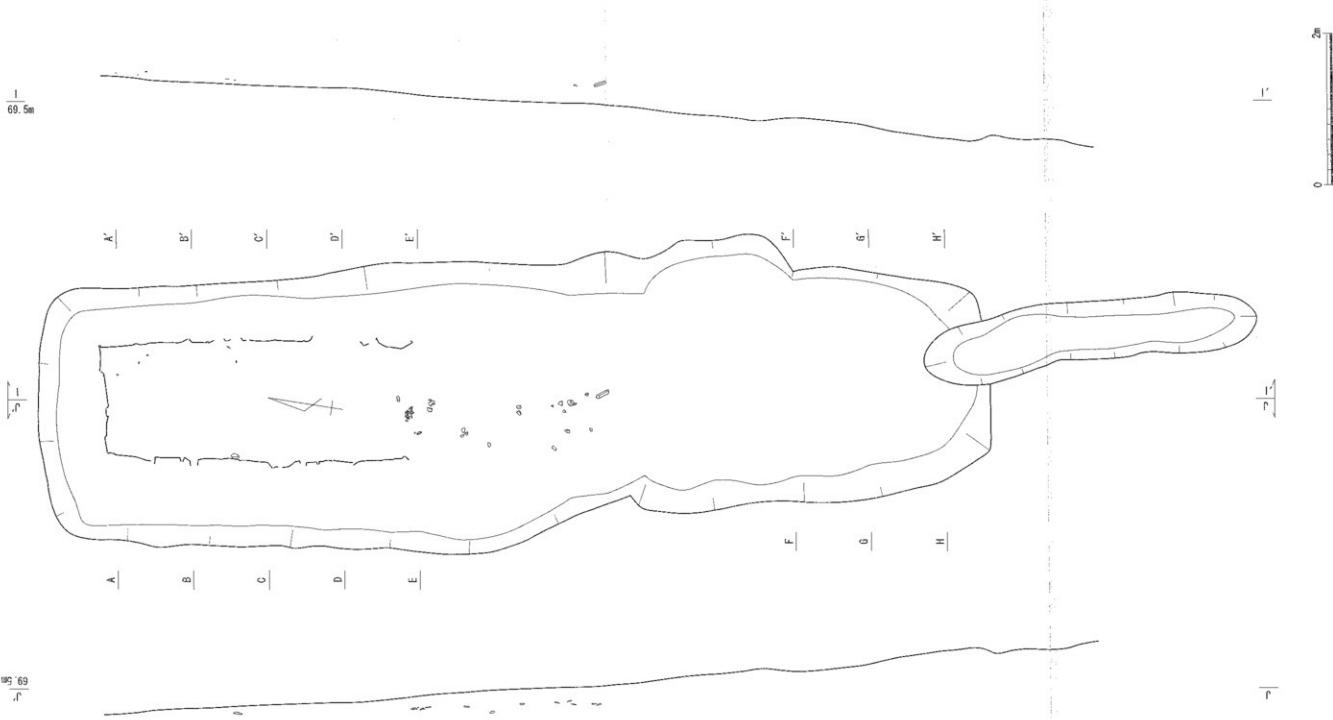
第309図 A56号石室検出状況横断面図

土質注記
①は56号石室検出状況横断面図同じ。

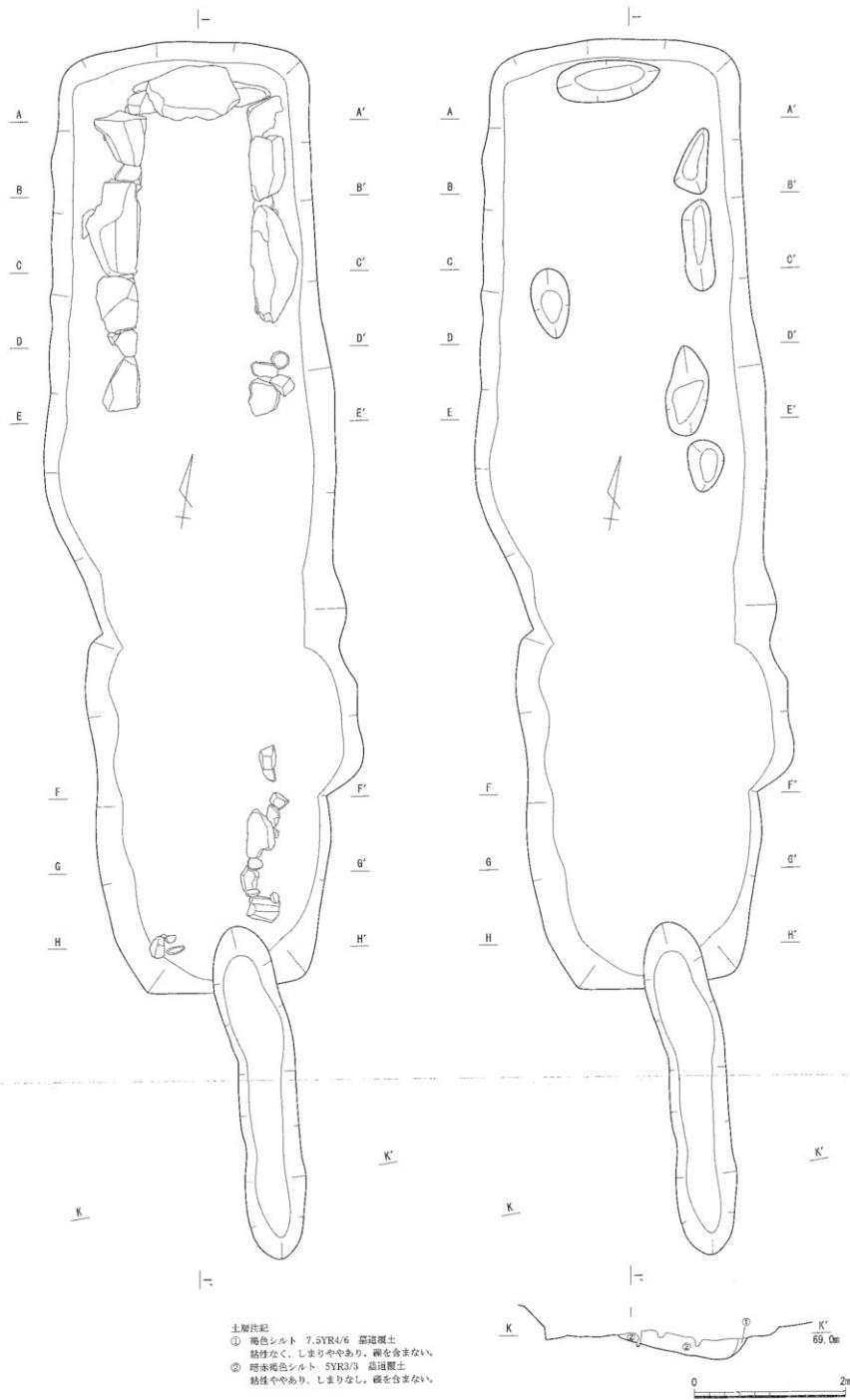
② 海色シルト 7.5YR4/6 複込め
粘性、しまりともにややあり。ø 5mmの礫を多く含む。
③ 暗褐色シルト 7.5YR3/4 表込め
粘性なく、しまりあり。ø 1cmの礫を縦横に含む。



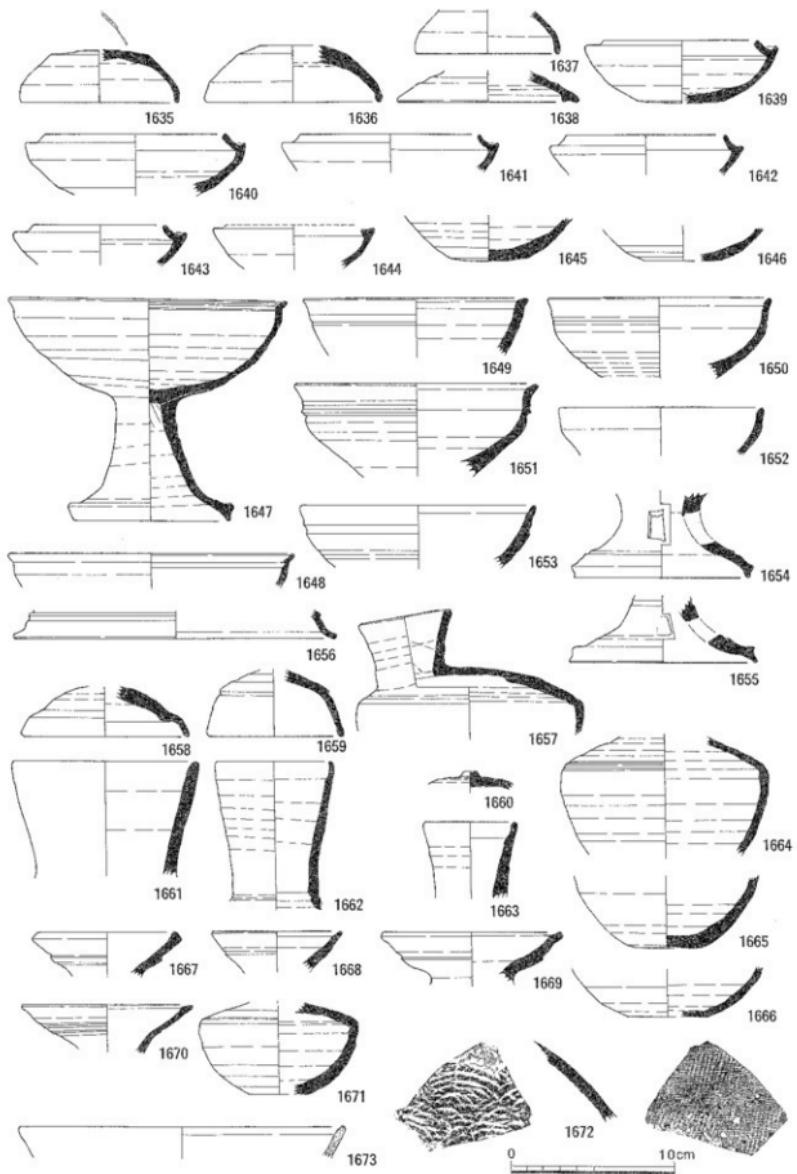
第310圖 A.55號化石窩測圖



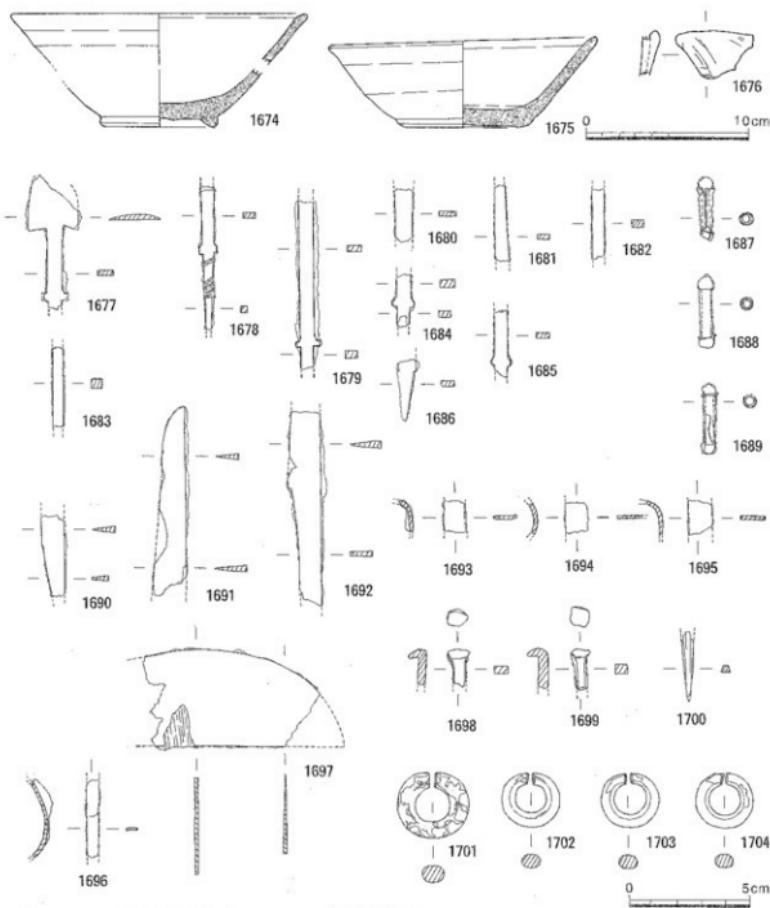
第311圖 A56號墓石室遺物出土狀況圖



第312図 A56号墳基石・墓坑実測図



第313図 A56号填出土器実測図 その1



第314図 A56号墳出土土器実測図 その2・金属製品実測図

1697は平安時代以降の鎌の可能性があり、直角に装着された柄の木質が付着残存する。時期的には、山茶碗1674・1675のいずれかに併行すると考えられる。

1698～1700は鉄釘である。1698・1699はL字形を呈する頭部を有し、断面は長方形を呈す。先端部1700の断面は台形を呈す。

1701は良好に遺存する銀銅板の中に環状の地金が存在せず、中空となっている。恐らく木芯に銀銅板を巻いた耳環であり、木芯は腐朽して銀銅板のみが遺存したと考えられる。1702～1704は銅芯銀銅張の耳環で、残存状態は良好である。

⑤小結

A56号墳は出土遺物より遠江Ⅲ期中葉に築造され、同Ⅳ期末葉まで追葬が継続したと判断される。石室形態は諸状況を勘案すれば右片袖式横穴式石室である蓋然性が高く、石室全長が11.2mを測る事実を併せると、A56号墳の階層性は大屋敷A古墳群で頂点に位置付けられるばかりか、浜北北麓古墳群においても廟を唱えることができ、さらに遠江全域で1・2位を争う石室規模を有す。このように恐らく後世においても目立つ古墳であったために遅くとも11世紀以降、繰り返し盜掘が行なわれ、挙げ句の果てに石室石材まで抜き取られてA56号墳は壊滅したと想定される。

長期間にわたる埋葬の中でも少なくとも1体は木棺に安置されていたことが鉄釘の出土より窺われる。また、両頭金具に示される飾り弓や群中の他の古墳には見られない平根三角形式短頭獣の副葬は、被葬者の生前における公的職掌を象徴していると考えられる。

① A57号墳

① 墳丘・周溝

A56号墳の南東約15mに位置し、今回の調査区で最も緩やかな斜面上に立地する。墳丘盛土・周溝はともに確認されなかった。

② 埋葬施設（第315・316図、図版117）

A57号墳は埋葬施設のみ確認された古墳であるが、残存状態は非常に劣悪で、南南東に向けて開口する横穴式石室であること以外は不明である。

玄室 石室の構造材としては、奥壁の鏡石1石が残存するのみである。鏡石は褐色に変色した粗悪なチャートの大型角礫を立て据えており、高さ0.82mを測る。

墓坑・墓道 暗丸長方形プランを呈する墓坑が後壁で地山を0.49m以上掘り込んで施設されている。奥壁鏡石と、開口部と目される箇所一対の基底石計3石に対して設置用小土坑が掘削されている。これらの小土坑により、石室の全長は2.9m前後と推定される。墓坑の規模に較べて長い墓道が付設掘削されており、墓坑と主軸を共有しつつ、一直線に南南東へ伸延している。また、墓道の溝状掘り込みは墓坑内に食い込み、石室開口部に達している。

③ 遺物の出土状況（第316図）

墓坑内に須恵器片（1705～1707）が散乱した状態で出土している。また、石室覆土の鋲作業により鉄製品数片（1708）が検出された。

④ 出土遺物（第317図、図版157）

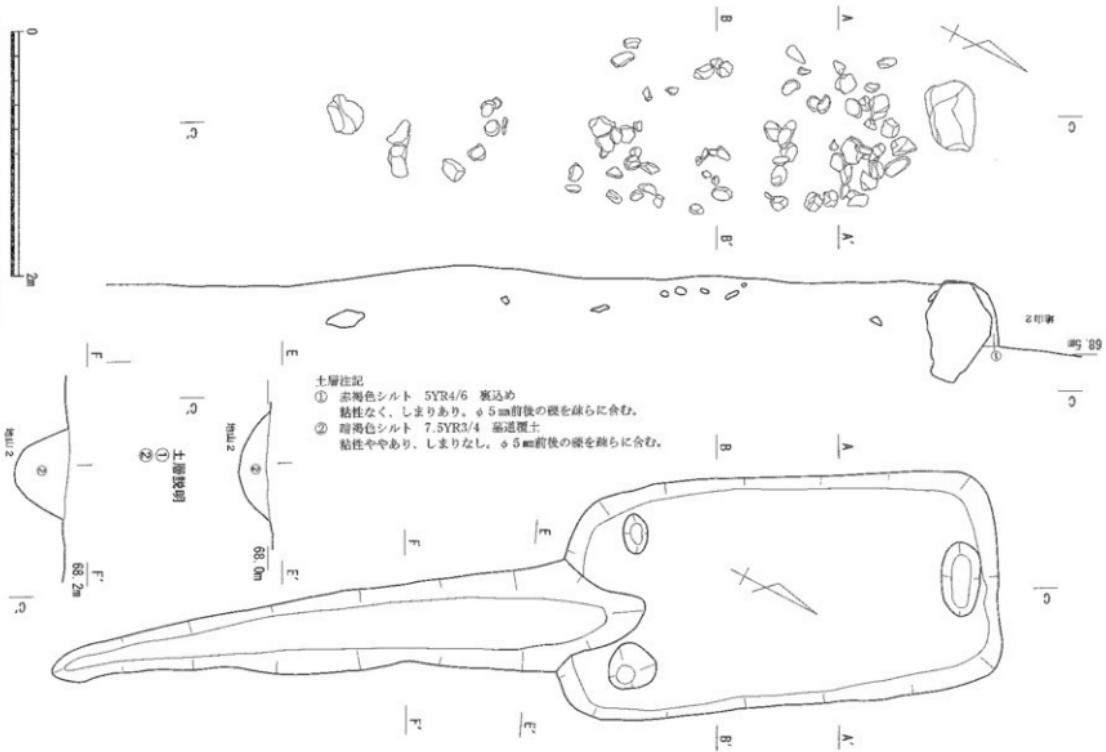
須恵器 坂蓋1705は遠江Ⅳ期末葉に比定される。1706は無蓋脚付長頸壺の口頸部であれば、遠江Ⅳ期末葉に比定される。長頸壺体部1707は遠江V期初頭に比定される。

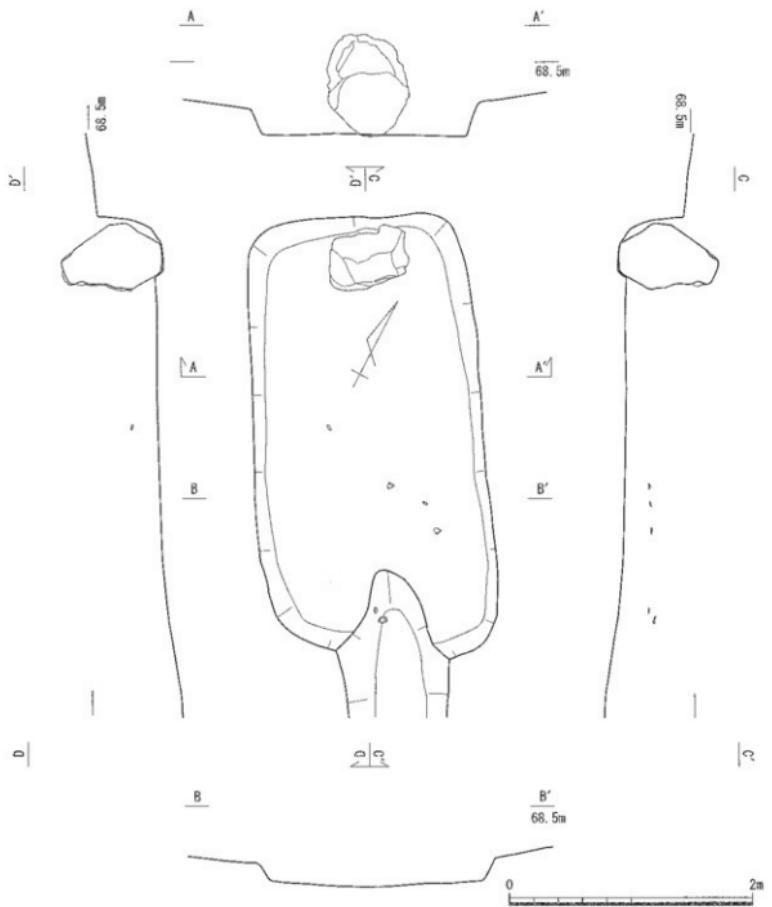
鉄製品 1708は刀子の茎片であり、柄の木質が付着残存する。

⑤小結

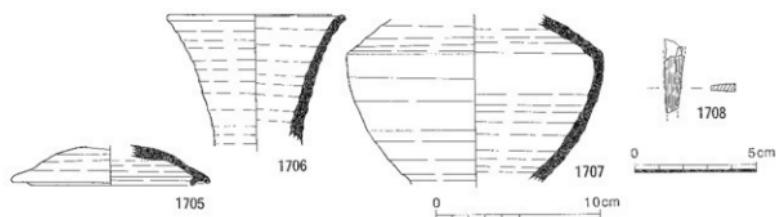
A57号墳は出土遺物より遠江Ⅳ期末葉に築造され、同V期初頭に追葬が行なわれたと判断される。石室形態としては無袖式横穴式石室または单室系擬似両袖式横穴式石室の可能性が残されているが、石室全長は3mに満たないと推定され、どちらかと言えば前者の可能性が高い。唯一残存する石材は古墳造営主体が石室内で通常最も良質のものを設置する奥壁鏡石であるが、それさえも粗悪であることから、大屋敷A古墳群中では階層性の低い古墳と評価できる。

第315図 A. 57号墳石室検出状況図・墓坑実測図





第316圖 A57號填石室實測圖・遺物出土狀況圖



第317圖 A57號填出土遺物實測圖

(II) A58号墳

①墳丘・周溝（第318図、図版118）

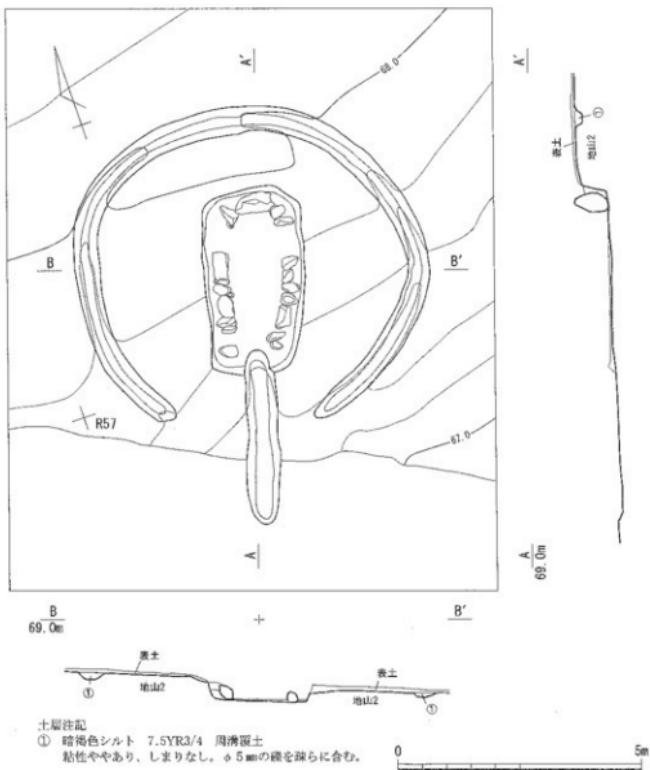
A57号墳の東南東に隣接し、緩斜面に立地する。墳丘盛土は流失している。周溝は南側を除いて完周に近い状態で検出された。周溝に囲まれる範囲は東西6.3m、南北5.7m以上を測り、東西に若干長い円形プランの円墳を呈す。

②埋葬施設（第319・320・322図、図版118～120）

古墳の中央に無袖式横穴式石室が構築されている。残存状態は決して良くないが、南南西に向けて開口する。

玄室 中央部に最大幅を有し、奥壁幅が最小となる胴張り形の玄室プランを呈す。奥壁には大型の板状角礫を長手置きし、鏡石としている。鏡石は高さ0.7mを測るが、上方の石材積載状況は不明である。

左側壁は基底1段目に中・小型の角礫・円礫を長手置きまたは小口置きし、それ以上は小型円礫を小口積みしており、最大2段、高さ0.28mを測る。右側壁も左側壁と同様の積載状況であり、最大2段、高さ0.4mを測る。両側壁ともに後半部の南北0.6m前後が失われているが、これは後世の攪乱が古墳を



第318図 A58号墳墳丘図

東西に横断しているためである。また、現状では左側壁が右側壁よりも短くなっているが、これは3区の確認調査で掘削したトレンチが墓坑前端部を石室主軸に斜交して設定されていることによる。

つまり、左側壁の前端部を発掘調査によって破壊してしまった疑いがある。なお、左右両側壁ともに持ち送り積みは明瞭に看取されない。

敷石 玄室の中央部床面を中心には敷石が残存する。

φ4~23cmの円礫主体に敷設されているが、同大の角礫も少數ながら用いられている。本来は玄室床面のほぼ全面に敷石が敷設されていたと推定される。

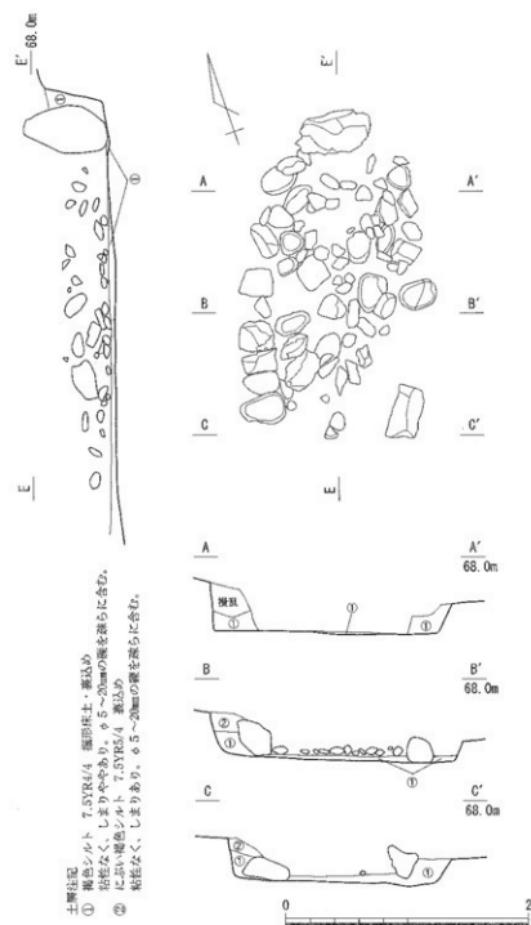
基底石 左右両側壁の基底石のうち、長手置きされているものは左側壁の1石と右側壁の2石の計3石に過ぎず、側壁基底石は基本的に中・小型角礫・円礫が小口置きされている。また、両側壁最後端の基底石は左右から奥壁鏡石を挟み込むように設置されている。擾乱

等で石材が失われているわけではない箇所においても、隣り合う基底石どうしが接しないなど、整然とした石室設計とは言い難い觀がある。

墓坑・墓道 圓丸長方形プランを呈する墓坑が後壁で地山を0.5m以上掘り込んで施設されている。墓坑の後端中央付近には、奥壁鏡石に対応する設置用小土坑が掘削されている。墓道は墓坑前壁中央より若干東寄りに付設され、主軸を石室と共有しつつ、南南西へ伸延する。

③遺物の出土状況（第321図、図版119）

玄室前半部の床面直上より須恵器4点（1710~1713）が出土したが、古墳廃絶時の原位置を保持して



第319図 A58号填石室検出状況図

いないと考えられる。また、玄室後半部の擾乱土より須恵器坏蓋1点(1709)が出土している。

④出土遺物(第323図、図版157)

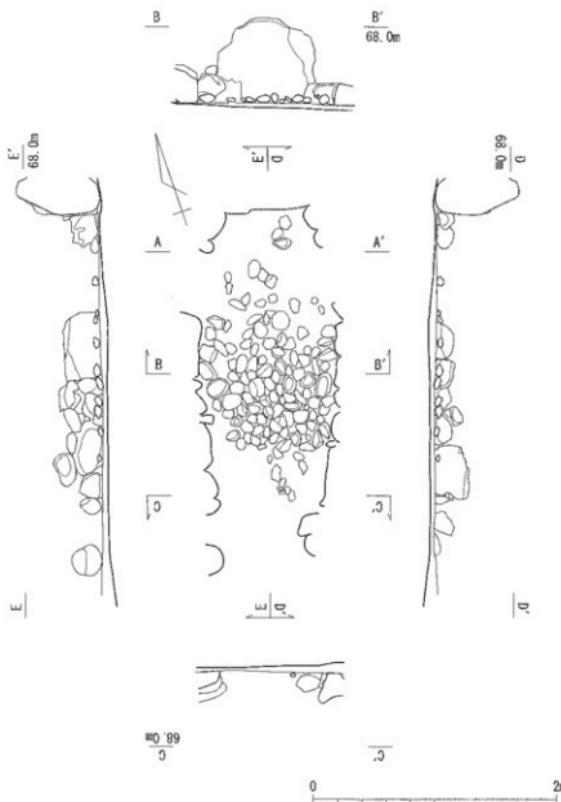
須恵器 坏蓋1709は沈線と屈曲により外面を口縁部と体部に区画し、外面の色調は暗く、湖西古窯跡群の製品ではないと判断される。東海地方西部産と考えられ、時期は遠江III期末葉に併行する。坏身1710は遠江IV期末葉に比定される。

1711は乳頭状の摘みと外面口縁部直上に沈線を有する壺蓋であり、1712とセット関係を成す。1712は脚付短頸壺であり、肩部直下には凹線によって区画帯が設けられ、その中に筆書きの斜行文を割り付けている。1711・1712は遠江III期末葉に比定される。平瓶1713は肩

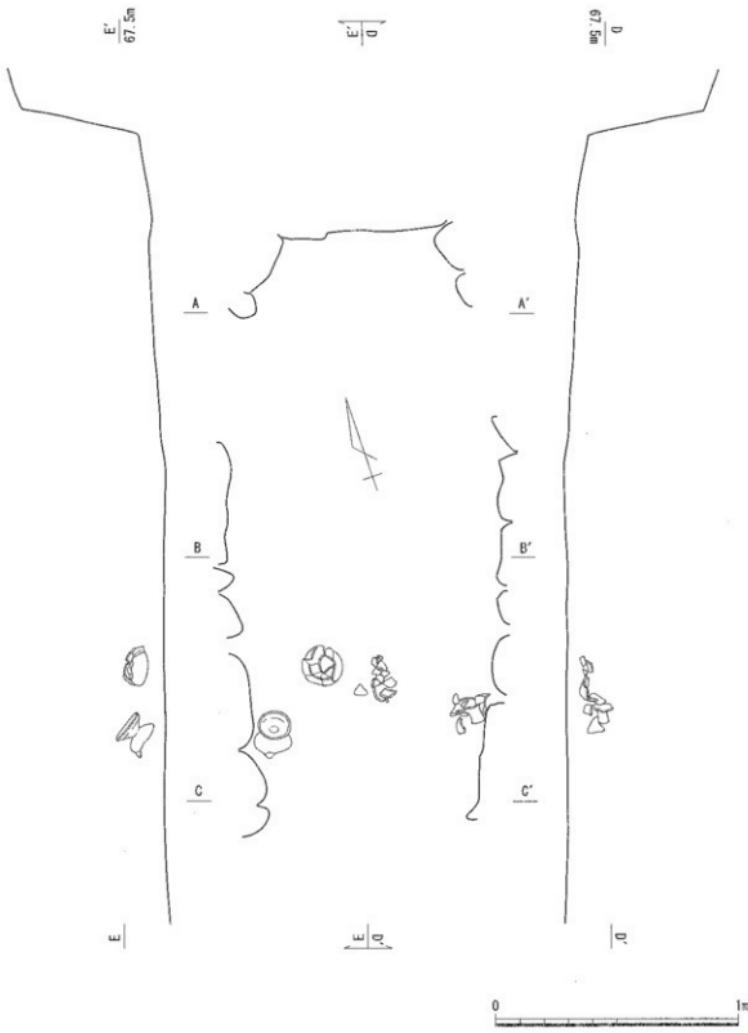
部に凹線1条を有し、頸部中央付近にも凹線が施されているが、後者は始点と終点が段違いとなっている。また、底部外面には4条線刻から成る十字状の筆記号が刻されている。時期は遠江IV期後半に比定される。

⑤小結

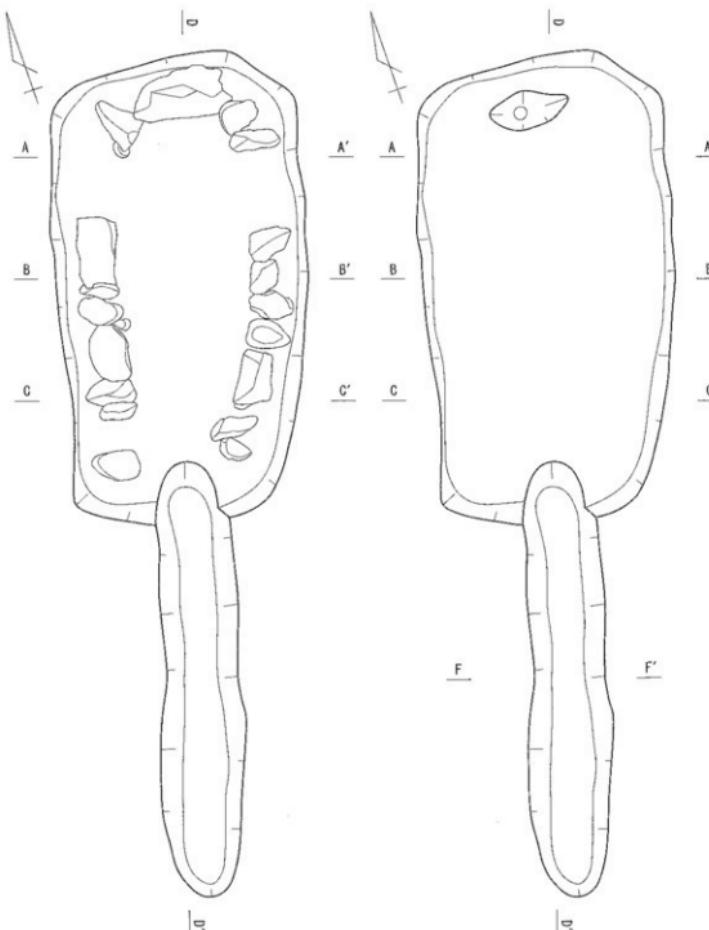
A58号墳は出土遺物より遠江III期末葉に築造され、同IV期後半～末葉に追葬が行なわれたと判断され、石室規模については長期間にわたり墓として使用されたことが窺われる。石室の規模、設計の規格性、および構造材の質から、当古墳の階層性はA57号墳などと同レベルの低さに想定される。副葬品では、主な須恵器は完形品に近く、良好に残存する一方で、鉄製品が一片も検出されなかつたこともA58号墳の低階層性の傍証になると考えられる。



第320図 A58号墳石室実測図

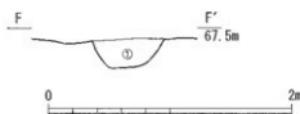


第321圖 A58號石室遺物出土狀況圖

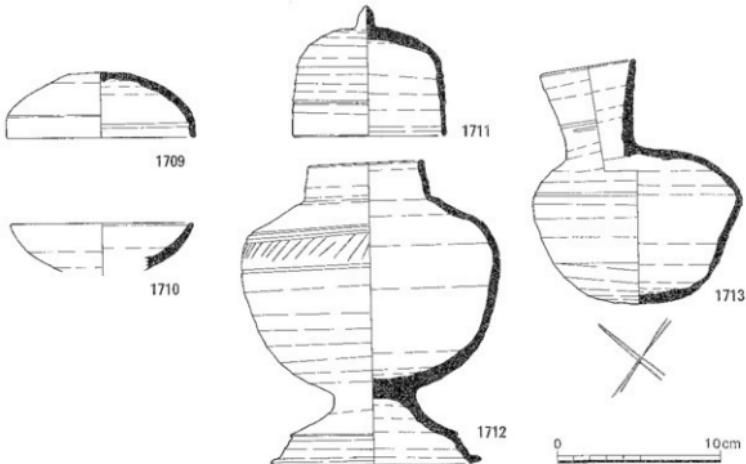


土壤注記

① 黒褐色シルト 7.5YR3/2 墓道覆土
粘性あり、しまりなし。φ 2~3 cmの隙を疎らに含む。



第322図 A 58号墳基底石・墓坑実測図



第323図 A58号墳出土遺物実測図

(3) A59号墳

①墳丘・周溝（第324図、図版120）

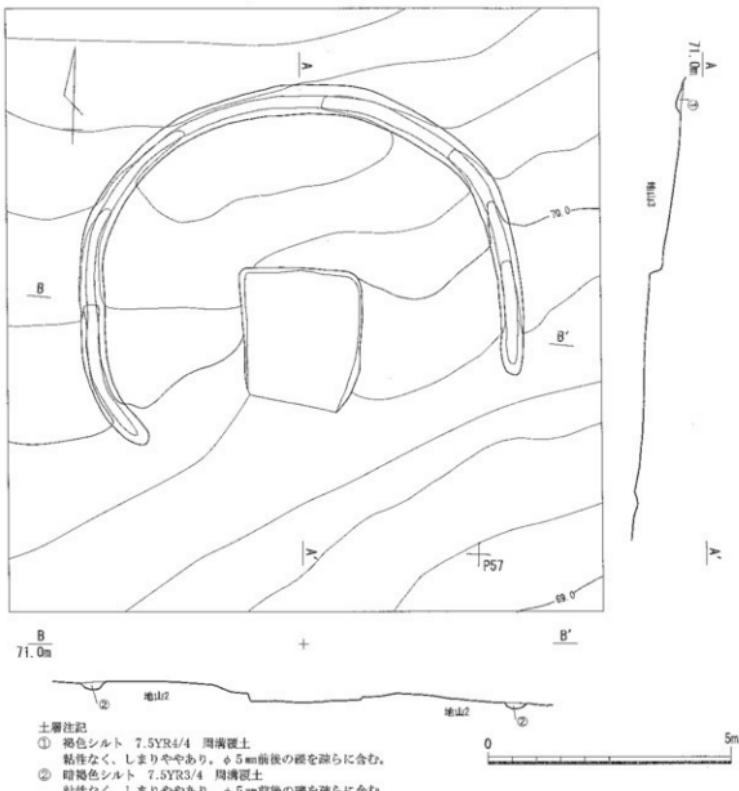
A56号墳とは同古墳の周溝東部より約4m離れて東隣し、A53号墳の南南東約12mに位置する。また、A57号墳の北約15mの緩斜面に立地する。墳丘盛土は近・現代の耕作により失われている。これに対して周溝の残存状態は比較的良好であり、南へ南東側を除く約5/8周分が検出されている。周溝により開まれる範囲は東西8.1m、南北6.3m以上を測り、東西にやや長い椭円形プランの円墳を呈する可能性が高い。

②埋葬施設（第325・326図、図版120）

古墳の中央よりやや南寄りと思しき場所に横穴式石室が構築されているが、耕作による擾乱が著しく、残存状態は極めて劣悪である。開口方位はほぼ真南と考えられるが、構造材の痕跡さえ乏しく、石室形態は不明である。

敷石 墓坑の前半部に大きく2箇所の敷石の残存が認められる。φ15~30cmの扁平な円礫・角礫主体に敷設され、その間隙をφ10cm以下の円礫・角礫で充填している。石室検出状況では墓坑の最後部においても小型の円礫・角礫が多数確認されることから、本来は玄室床面の奥壁沿いから前方の大部分に敷石が敷設されていたと想定される。また、墓坑内の最も右側で検出された長軸33cmの中型角礫は想定される右側壁の位置に存在するため、敷石というよりもむしろ右側壁基底石の支石の一部である可能性が高い。

基底石支石 墓坑後壁沿いの左右2箇所にφ5~26cmの小型円礫・角礫から成る環状の配石が残存し、基底石の支石と考えられる。これら2箇所の配石が奥壁基底石の支石であるとすれば、奥壁の最下段には少なくとも3石が設置されていたことになる。或いは、これら2箇所とともに、またはいずれか一方が側壁最後端の基底石に対応している可能性も考えられるが、いずれにしても微妙な位置を占めており、判然としない。少なくとも、これらの支石が敷石である可能性は位置的にもあり得ないと考えられる。

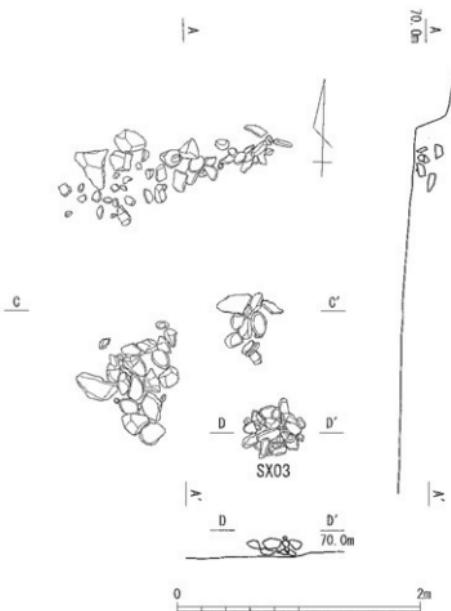


第324図 A59号墳埴丘図

墓坑 現状の墓坑は長台形プランを呈し、後壁で地山が0.25m以上掘り込まれているが、本来はより南北に長い墓坑であったと想定される。近・現代の耕作により大きく破壊されているが、掘形床土は墓坑底面の全面に遺存しており、基底石の設置用小土坑などは掘削されていないことが看取される。墓道はもとより確認されなかった。

③SX03（第325図、図版120）

現状墓坑の南東コーナーに性格不明の集石遺構SX03が存在する。石室床面の敷石とは使用されている砾の大きさおよび形状が異なるため、古墳築造時には存在しなかった別の遺構と判断した。東西0.5m、南北0.46mの円形プランを呈し、φ 2～20cmの扁平にならない円礫・角礫を蠍集させ、最大4段、厚さ0.17m残存する。土坑等の下部構造を伴わず、礫間よりの出土遺物も確認されなかった。2区のSX01・SX02との類似が想起されるが、これら2基の集石遺構よりもかなり規模が小さい。SX03の存在する箇所は横穴式石室の左側壁またはその裏込めに相当し、A59号墳が廃絶して盗掘により壊滅、もしくは自然



第325図 A59号墳石室・SX03検出状況図

器片（1730）、土師器片（1731）、および鉄製品片（1732・1733）が築作業により検出されている。また、墳丘跡地直上の表土より須恵器坏身1片（1716）が出土しているが、西隣するA56号墳からの流れ込みによるものと考えられる。

⑤出土遺物（第327図、図版158）

須恵器 1714・1715は坏蓋であり、遠江IV期前半に比定される。1716～1722は坏身である。1716は遠江III期中葉に比定される。1717～1719は遠江IV期前半に比定され、1718は外底面に2条線刻から成る十字状の箋記号が刻されている。1720も1718と同様の箋記号を外底面に有し、時期も同じく遠江IV期前半に比定される。1721・1722は遠江IV期末葉に比定される。

1723・1724は無蓋高杯の坏部であり、形態は異なるが、ともに遠江IV期前半に比定される。1725・1726は高杯の脚部であり、遠江IV期後半に比定される可能性がある。

1727は平瓶、瓶中大型品の口頸部とも考えられるが定かではない。外面には頸部中央と思しき箋所に凹線2条を施し、内面口縁部にも2条の凹線を施文している。1728は罐の口縁部であり、遠江IV期後半に比定される。1729はフラスコ形瓶の体部であり、器種としての下限は遠江IV期末葉となる。

土師器 1731は小型の鉢である。外面は摩滅して粘土紐接合痕が露出しており、内面は下半部を横位のハケ目、上半部を縱位のハケ目と横ナデで調整している。全体的に粗製であるが、遠江IV期末葉に併行する。

灰釉陶器 1730は碗の口縁部である。口径は復原不可能であるが、外面はハケ塗り施釉されており、口縁端部は短く外反している。時期は前掲松井氏編年の灰釉陶器III期-1に比定される。

崩壊してからSX03が施設されたことを示唆している。その施設時期は不明であるが、SX01で考えられたように、中世墳墓の可能性が考えられる。その場合も、崩壊したA59号墳を或る程度聖域として意識した祭祀行為・葬送儀礼が行なわれたのか、或いは、当古墳とは全く無関係に施設されたのかは、推測の域さえ超えている。

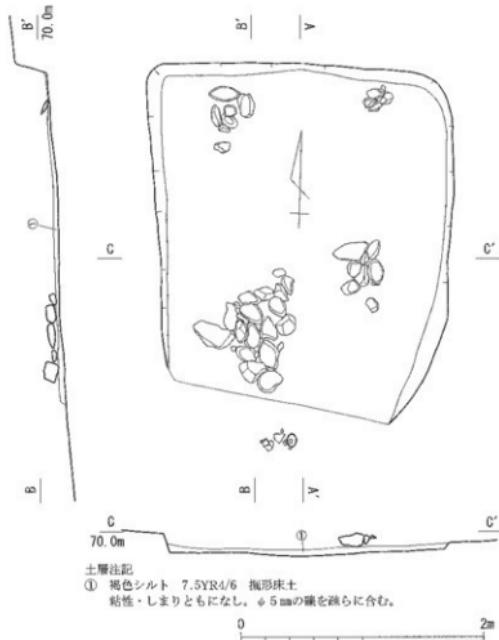
④遺物の出土状況（第326図、図版120）

墓坑の前方、掘形床土の残存が終焉するさらに約0.3m南の地山直上において、須恵器4点（1718・1720・1727・1729）がまとまって出土した。掘形床土が削平された箋所での出土であることから、これらの須恵器は当古墳廃絶時の原位置から大きく離れていると推定される。石室（墓坑）の覆土からは、須恵器片（1714・1715・1717・1719・1721～1726・1728）、灰釉陶

鉄製品 1732・1733は鉄錆であり、それぞれの破片どうしは接合できないが、長頸錆と推定される。1732の残存する最先端は錆身に近い部位であるが、錆身體態を特定することは至らない。また、1732の茎には巻き付けられた樹皮が錆着遺存する。

⑥小結

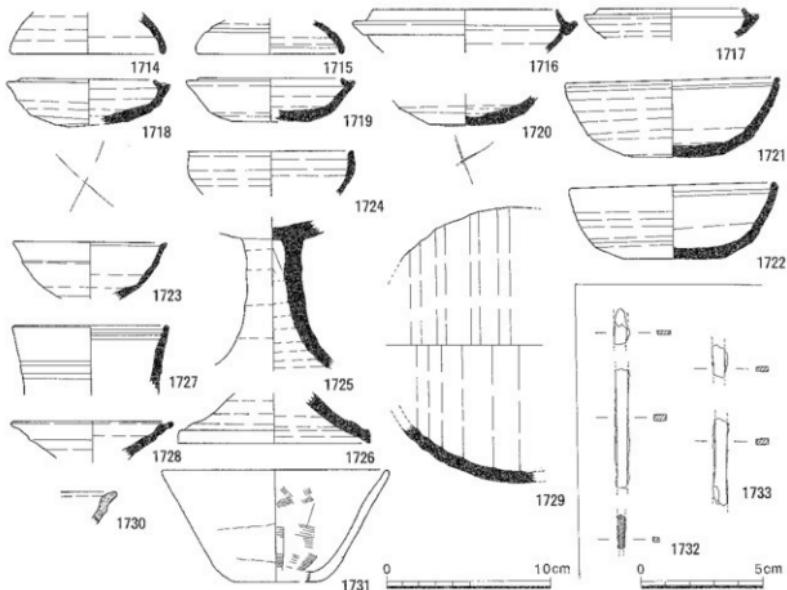
A59号墳は出土遺物より遠江IV期前半に築造され、同IV期末葉まで追葬が継続したと判断される。石室は形態・規模とともに全く不明であり、壟滅状態にしては一定量の遺物が出土しているが、大部分の遺物は失われていると推定される。従って、当古墳の階層性等に言及することはほとんど不可能である。ただし、基底石の設置に当たって支石を配していることから大型の石材を使用していた蓋然性が高く、この点においてはA59号



第326図 A59号墳石室実測図・遺物出土状況図

墳の階層性が低いとは決め付け難い。むしろ、大型かつ良質の石材を横穴式石室の構造材に使用していたからこそ、A59号墳は歴史的に見て比較的早い時期に石材を狙った盜掠に遭って、無残に壟滅してしまったという解釈も成立立つ。

A59号墳の墓坑内に形成された集石遺構SX03もまた、施設時期・性格ともに不明であるが、灰釉陶器碗1730が何らかの形でSX03に有機的に関連している可能性は否定できない。仮に、1730がSX03の施設時期を示唆しているとすれば、それは10世紀前半頃に比定される。当遺構が中世墳墓であるという見解も、その根拠は薄弱であり、2区において古墳と無関係に存在するSX01・02とは区別して考える必要があるのかもしれない。SX03とA59号墳との関連を積極的に見い出そうとするならば、上記の石室石材盜掠は他所から侵入した反社会的集団によるものではなく、宮口地区的地元の人々による神事を伴った石材抜き取りと考えられる。すなわち、左側壁の石材を墓坑外へ移動させた後、基底石が設置されていた箇所に礫を寄せ集め、或いは積み上げて地靈・死靈を慰宥する地鎮祭祀が催された可能性が想定される。



第327図 A59号墳出土遺物実測図

[4] A60号墳

①墳丘・周溝（第328図、図版121）

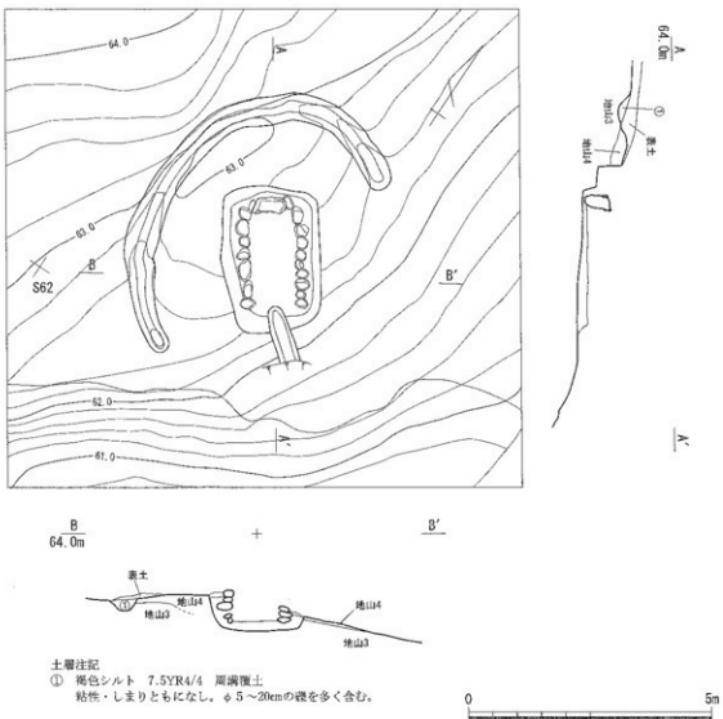
2区北部から続く小尾根の南東端に立地する。大屋敷A古墳群の最東端に位置する古墳であり、最寄りのA62号墳からも東南東へ約25m離れている。墳丘盛土は流失している。周溝は西～北側の約半周分が検出され、周溝に囲まれる範囲は東西4.5m以上、南北4.4m以上を測り、ほぼ正円プランの円墳を呈す。また、古墳の南側は近・現代に大きく削平され、比高差約1.2mの断崖状態となっている。

②埋葬施設（第329～332図、図版121～123）

古墳の中央に無袖式横穴式石室が構築されている。残存状態は比較的良好であり、南南東よりも若干南東に向けて開口する。

天井石 玄室内に転落していた石材のうち、大型の板状角礫3石を天井石と認定した。後方の2石は長軸を石室主軸にほぼ直交させた状態で検出されたが、前方の1石の長軸は石室主軸に平行し、天井面は水平に対して直交した状態で検出された。よって、玄室後半部の天井石は自然崩落したが、前半部の天井石は盗掘または開墾の際に除去されたと想定される。

玄室 中央部に最大幅を有し、奥壁幅が最小となる胴張り形の玄室プランを呈すが、胴張りの程度は小さい。奥壁には純度が低く、風化した質の悪いチャートの大型板状角礫を長手置きし、鏡石としている。鏡石の左右にも中型の円礫を1石ずつ小口置きし、3石で奥壁の基底石を形成しており、左側の奥壁基底石の上には同様の中型円礫が1石小口積みされている。他方、鏡石と右側の奥壁基底石の上方における石材積載状況は不明である。

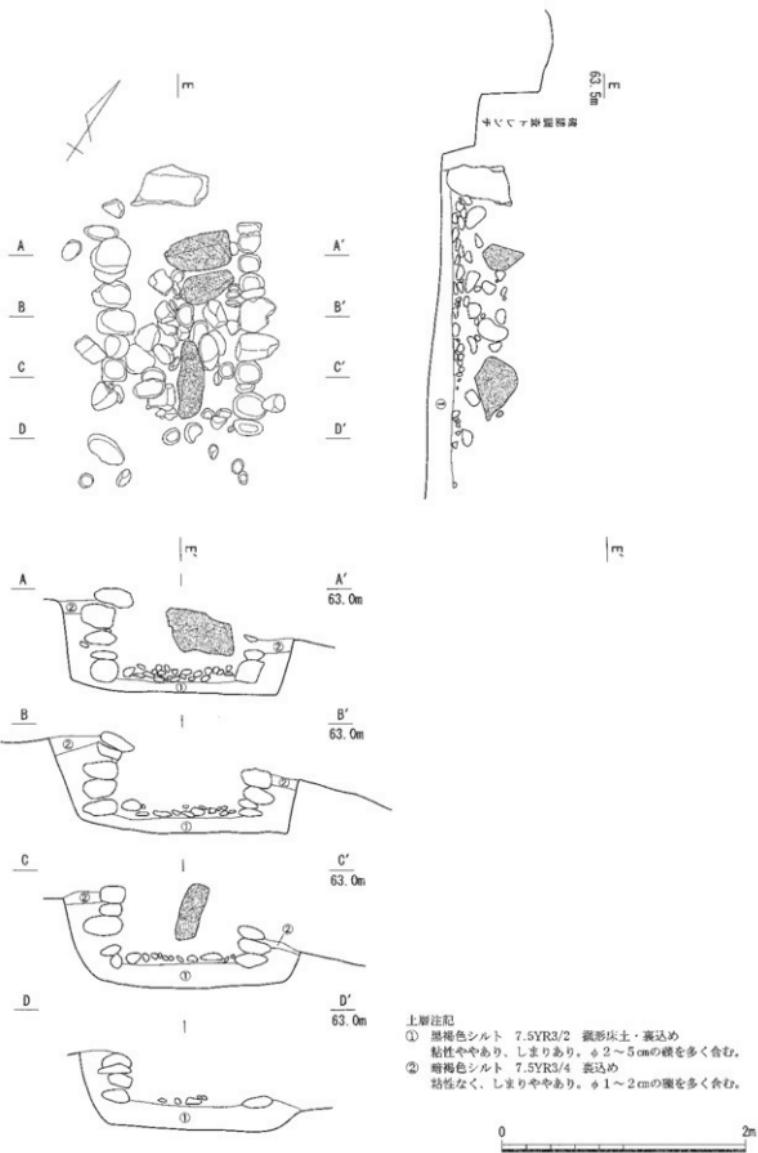


第328図 A60号墳埴丘図

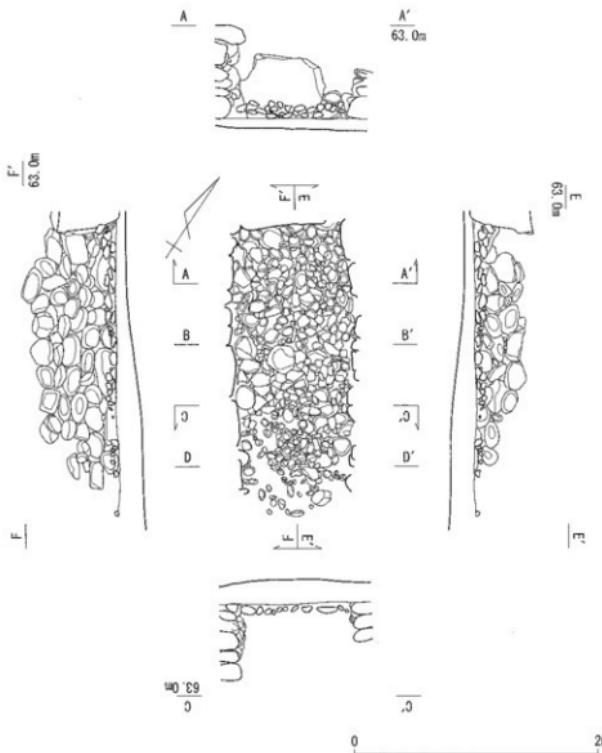
左右両側壁のほとんどは中・小型円礫を小口積みして構築されており、円礫は砂岩と花崗岩が主体的であるが、凝灰岩の可能性があるものも若干存在する。左側壁は最大4段、高さ0.42m残存し、右側壁は最大6段、高さ0.77m残存する。両側壁ともに目地通りが看取され、3段目以上は前方に向かって傾斜下降している。また、右側壁は5段目以上が内側へ急激に持ち送り積みされており、恐らく左側壁も同様の状況であったと想定される。

敷石 敷石は上下2面検出されており、追葬時に新たに敷石を敷設することで玄室床面を更新したことが理解される。2面とも残存状態は非常に良好であり、下層の敷石（第1床面）はφ 6~22cmの扁平円礫を使用し、玄室の奥壁沿いより前方約3/5の床面に敷設されている。上層の敷石（第2床面）はφ 2~10cm未満の必ずしも扁平ではない円礫を主体に、最大φ 24cmの扁平円礫も用いられている。その敷設範囲は玄室床全面からさらに玄門の前方に広がり、墓道の溝状掘り込みの墓坑内に食い込んだ部分を掘形床土で埋め立てて、その上にも敷設されている。

第1・2床面間にはまとまった土が込められた様相ではなく、第1床面の上に直接第2床面を敷設したことが窺われる。上下2面とも使用石材は側壁と同じ砂岩と花崗岩であり、これらと同様の円礫は当古墳周辺の地山表面に多数露出している。また、第1床面を構成する礫が第2床面のそれよりも相対的に



第329図 A60号填石室検出状況図



第330図 A60号墳石室実測図(第2床面)

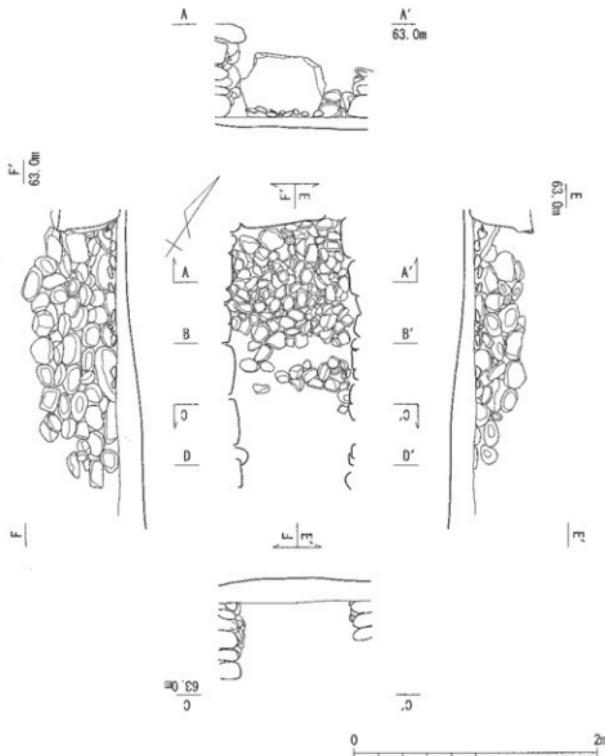
大振りであることからも、第1床面が排水用の床込め砾でないことは明白である。

基底石 左右両側壁の基底石は中・小型円礫の小口置きが主体を占め、要所で中型円礫が長手面を内側に向けて設置されている。両側壁最後端の基底石は奥壁の左右基底石の前面外側に点的に当接し、左右から奥壁を強く挟み込むような設置状況ではない。

墓坑・墓道 囲丸長方形プランを呈する墓坑が後壁で現地表より約0.8m掘り込まれて施設されている。墓坑の後壁沿いやや右寄りには奥壁鏡石に対応する設置用小土坑が掘削されている。墓坑前辺中央に墓道が付設され、石室・墓坑の主軸より東に振れつつ、南東へ一直線に伸延するが、当古墳南側の削平により前途を断たれている。墓道の溝状掘り込みは墓坑内に食い込み、玄門に達しているが、墓坑底面に厚く込められた掘形床土に埋め戻され、その直上に前述の第2床面の敷石が敷設されている。

③遺物の出土状況

床2面が良好に残存するにもかかわらず、玄室内より遺物は確認されなかった。その代わり、墳丘跡地の北部において須恵器2点(1734・1735)、土師器1点(1736)が出土している。



第331図 A60号墳石室実測図(第1床面)

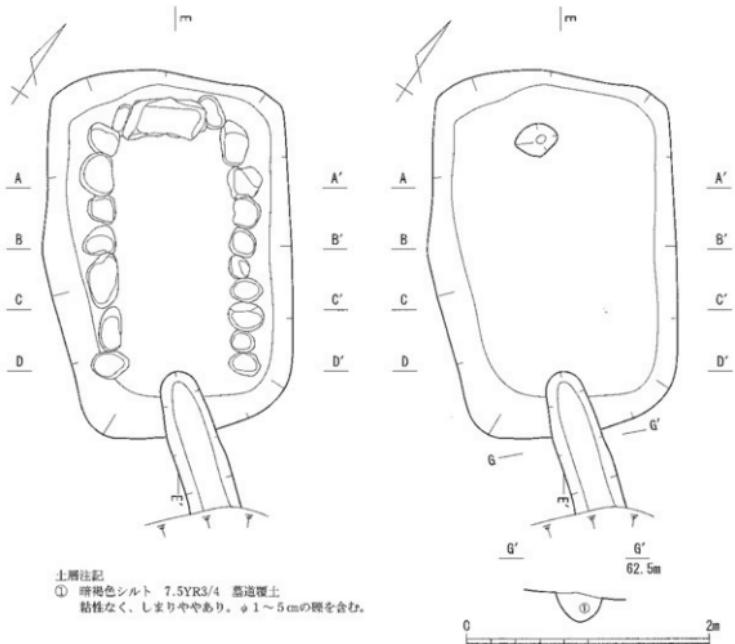
④出土遺物（第333図、図版158）

須恵器 1734は長脚二段透孔高坏の脚部下段部分であり、長方形透孔が縱に長く、脚部下段の区画の上下端まで伸びていることから、遠江Ⅲ期後葉に比定される。1735は瓶類の頸部片であり、所属時期は遠江Ⅲ期後葉以降と考えられる。

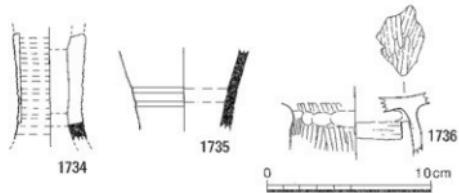
土師器 1736は高盤の体部・脚部の接合部片である。脚部外面は縦ハケで一次調整し、縦位の箒磨きと指押さえで仕上げており、同内面は指ナデの後横位の箒磨きを施している。体部の内底面にも丁寧に箒磨きが施されている。また、脚部外面および体部内外面は全面的に赤彩されている。所属時期は遠江Ⅲ期末葉～IV期前半に併行すると考えられる。

⑤小結

A60号墳は出土遺物と敷石敷設状況より遠江Ⅲ期後葉に築造され、長く見て同IV期前半までに追葬が最低1回は行なわれたと判断される。大屋敷A古墳群の最東端に位置するA60号墳の発見により、今回調査前の当古墳群の「周知の埋蔵文化財包蔵地範囲」は東へ約50m拡大した。石材は周辺の地山から採



第332図 A60号墳基底石・墓坑実測図



第333図 A60号墳出土遺物実測図

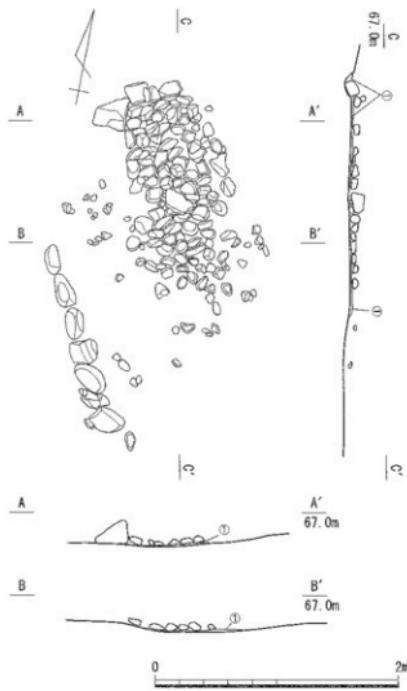
墳築造の背景には複雑な事情があったらしく、単純に当古墳の階層性の高低を論じることは躊躇される。

(15) A62号墳

① 墳丘・周溝

A58号墳の東約16m、A60号墳の西北西約25mに位置し、3区の北東辺を走る小尾根の南西側直近の浅谷中央部に立地する。近代以降の開墾・耕作により大きく削平されており、墳丘盛土・周溝ともに遺存していない。

掘しており、当古墳の特異な立地は石材調達の簡便さを選択した結果のようにも見えるが、他にも複数の条件がA60号墳の造営主体をしてこの場所を選定せしめたと想定される。一見、当古墳は孤立して存在するようであるが、大屋敷A古墳群中の他の古墳と全く無関係に築造されたとは考えられず、このことは第4章第1節で後述する。いずれにせよ、A60号



土層注記
① 明褐色シルト 7.SYR5/6 床面貼り土・裏込め
粘性なく、しまりややあり。φ 5mmの礫を多く含む。

第334図 A62号墳石室検出状況図

度は直角とはならず、やや開いて鈍角を呈す。よって、当石室が横穴式石室であるならば、洞張り形または奥窄まり形の玄室プランを呈していた可能性がある。なお、左右両側壁とも後背の裏込めは全く遺存していない。

敷石 石室構造材の残存状況に較べて、敷石は比較的良好に残存している。 $\phi 10\sim15\text{cm}$ 前後の円礫と $\phi 5\text{cm}$ 以下の円礫が混在しているが、後者が前者の間隙を充填しているといった状況は看取されない。奥壁から現存の墓坑前端部近まで敷設されているが、東西方向も含めて、本来の敷設状況に対してどの程度残存しているのかは検討さえつかない。ただし、この敷石の残存する範囲により、石室全長が1.3m以上、奥壁幅が少なくとも0.69mを測るという情報が得られる。また、敷石直下の床面貼り土は僅少であるが、これは床面貼り土の大部分が流失したのではなく、浅谷中央部とは言え、もともと高低差の小さい緩斜面が小規模なテラス状を呈する箇所に当古墳が立地するため、A60号墳のように多量の床込めを以て床面の水平を調整する必要がなく、従って、現状の床面貼り土は築造当時の状況に近いと考えられる。

墓坑 圓丸長方形プランを呈すと考えられる墓坑が施設されているが、辛うじて下端ラインが確認され

②埋葬施設（第334~336図、図版124）

A62号墳は埋葬施設のみ確認された古墳であるが、近代以降の開墾・耕作による損壊が烈しく、残存状態は極めて劣悪であり、横穴式石室か否かさえ判然としない。構築された石室の主軸は北北西-南南東よりもやや真南北方向に近い。なお、埋葬施設の南~南西側には $\phi 20\text{cm}$ 以上30cm未満の小型円礫7石を北北西-南南東方向に長手置きした石列が存在するが、これは近代の農業用水利設備（暗渠か）の一部であり、A62号墳とは無縁かつ当古墳を破壊して施設されている。

石室 石室の構造材は奥壁に相当する基底石2石および右側壁最後端の基底石1石の計3石が残存するに過ぎず、石室形態は全く不明である。奥壁の2石は低平な小型角礫を平手置きし、現高0.11mを測る。後背に若干ながら裏込めが遺存しているため、石室の構造材と判別されるに至った。奥壁の基底石は左側にもう1~数石設置されていたと想定される。

右側壁最後端の基底石は中型角礫の長手面を石室内側に向けて設置され、高さ0.21mを測る。長手面の最後端部を奥壁最右端の基底石の外側小口面に当接させており、右側壁が奥壁を右から挟み込む形となっている。また、右側壁面と奥壁面が成す平面角

たに過ぎず、掘り込みの深さは計測不可能である。墓坑の後壁沿い中央より少し西寄りに前述の奥壁基底石2石に対して設置用小土坑が掘削されている。通常、設置用小土坑は大型礫の基底石に対して掘削され、当古墳に残存する奥壁基底石には相応しくない施設であることから、これら2石の上に大型機、すなわち鏡石が積載されていた可能性が考えられる。すると、小土坑内に半ば以上入り込んでいる上記2石は基底石というよりもむしろ鏡石の支石と称するほうが妥当かもしれない。

③遺物の出土状況（第336図、図版124）

石室後半部左側壁寄りと目される箇所の敷石直上より須恵器数片が出土しているが、それ以上に現存する墓坑の前方の地山直上より多くの須恵器片（1737～1740）が出土した。この箇所には敷石が残存せず、これらの遺物の出土地点が石室の前半部であったのか、後世の破壊の際に遺物が石室外へ掻き出された結果に過ぎないのかは定かではない。一応、これらの遺物は当古墳発掘調査時には石室出土扱いとなっている。

発掘調査時において、広くA62号墳の石室と捉えた箇所から生じた排土を築作業に掛けたところ、刀子の破片（1741）が検出された。また、須恵器片に混在して土師器またはカワラケが出土したという調査所見が残されているが、小片のため散逸してしまったのか、詳細は不明である。

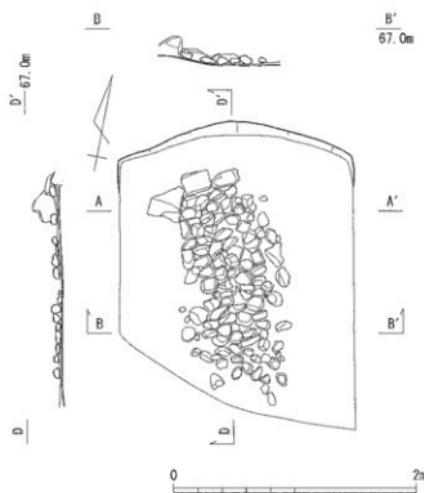
④出土遺物（第337図、図版158・159）

須恵器 1737は合子状の坏身であり、1738・1739は対応する坏蓋が返りと擴みを有する楕形の坏身であるが、3点とも遠江IV期前半に比定される。平瓶1740は、明瞭に肩が折れる体部は通常の平瓶の大きさであるが、口頸部は太いうえに断面三角形の突帯を2条有し、大型平瓶の形状を呈す。所属時期は遠江V期初頭に比定される。

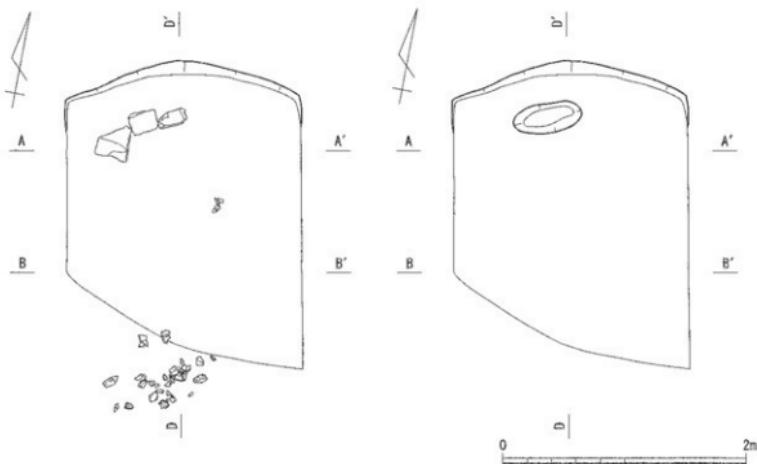
鉄製品 1741は刀子の身部片であり、平造りされている。

⑤小結

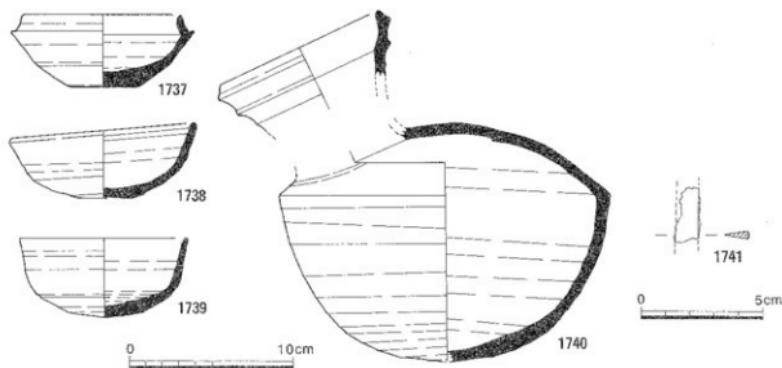
A62号墳は出土遺物より遠江IV期前半に築造され、同V期初頭に追葬が行なわれたと判断される。追葬が行なわれたということは、堅穴式小石室や堅穴系横穴式石室といった単次埋葬の石室ではあり得ず、やはり南に向けて開口する横穴式石室であった蓋然性が高い。A62号墳の階層性については、残念ながら議論するに足る情報が不足しているため、ここでは言及しないこととする。



第335図 A62号墳石室実測図



第336図 A62号墳基底石・墓坑実測図・遺物出土状況図



第337図 A62号墳出土遺物実測図

(16) A63号墳

①墳丘・周溝

2区A31号墳の南東約5m、A52号墳の周溝北部より北東約5mに位置する。古墳の大部分は調査区外北側の中部電力鉄塔の離隔地帯に存在するため、今回の調査区内では埋葬施設の一部が検出されたにとどまり、墳丘盛土・周溝の遺存状況は不明である。

②埋葬施設（第338・339図、図版125）

A63号墳は横穴式石室の開口部付近のみが検出され、この部分の残存状態から類推すれば、調査区外にも良好に残存する可能性が高い。石室形態は不詳であるが、ほぼ真南に向けて開口している。

石室 両側壁は大型から小型までの角礫主体に長手積みまたは平手積みされているが、円礫も若干認められる。左側壁は最大2段、高さ0.42m残存し、右側壁は最大3段、高さ0.5m残存する。検出された石室長が短いため、目地通りの有無は不詳である。また、左右両側壁は明確な持ち送り積みが看取されず、これは大屋敷A古墳群中の他の古墳では羨道によく見られる積載状況である。

敷石 開口部まで敷石が残存し、恐らく石室床面の全面に敷石が敷設されていると推定される。 $\phi 20\sim30$ cmを測る、敷石としては大振りの扁平円礫主体に敷設されている。

基底石 両側壁併せて4石の基底石が検出されたが、うち3石は長手置き、または長手面を石室内側に向けて設置されている。

墓坑 検出された部分を見る限り、前窄まりの墓坑プランを呈す。前端は流失しており、羨道等の状況は不明である。

③遺物の出土状況

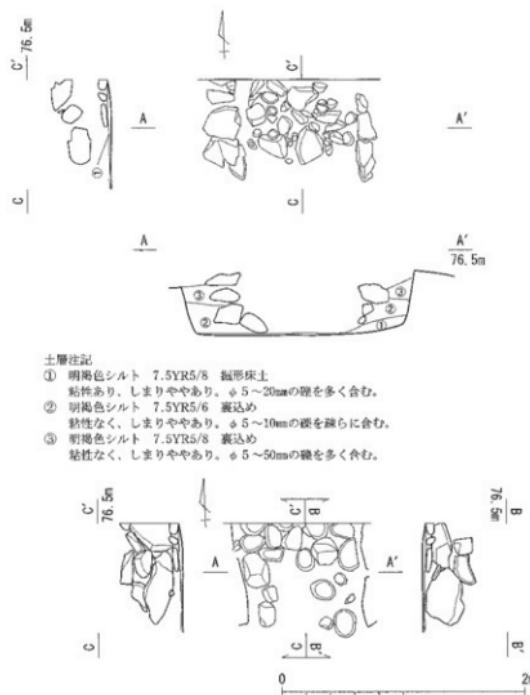
墳丘西部と目される箇所より須恵器片が出土したという調査所見が残されているが、詳細は不明である。

④出土遺物

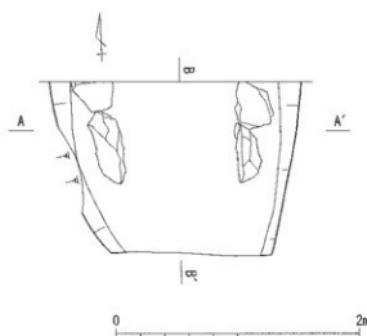
遺物の出土は確認されていない。

⑤小結

A63号墳の築造時期は目下不明であるが、位置的にはA51・A52号墳よりも浅谷の奥に所在し、これら2墳よりも後出すると考えられ、遼江IV期後半以降に造営された可能性がある。全ては将来の調査に委ねられるが、検出された部分は擬似兩袖式横穴式石室の羨道または前庭である蓋然性が高く、当古墳の埋葬施設は少なくとも無袖式横穴式石室ではないと考えられる。その規模も中程度以上と想定される。



第338図 A63号墳石室検出状況・石室実測図



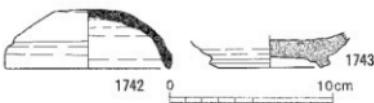
第339図 A63号墳基底石実測図

3 古墳外の出土遺物（第340図、図版159）

前項において報告した3区の古墳16基に何らかの形で伴う遺物以外にも、重機または人力による表土除去の過程で出土した遺物や、調査開始前の現地表に露出・散布していたものを採集した遺物がある。本項では種類別に3区古墳外出土遺物を報告するが、いずれも土器である。

須恵器 1742は壺蓋であり、体部外面中央付近には沈線1条が強く引かれている。時期は遠江IV期前半に比定される。

山茶碗 1743は碗の底部であり、分厚い底部に断面長方形の低平な高台が貼り付けられ、高台の端面には粉被圧痕がやや多く付いている。前掘松井氏編年による山茶碗II期に比定され、12世紀後半代の所産と考えられる。



第340図 3区造構外出土・表面採集遺物実測図

第5節 古墳時代以外の主な出土遺物

本節では図面掲載の都合上、第2～4節において敢えて言及しなかった1～3区出土の石器および銭貨を報告する。出土位置については、古墳の埋葬施設等の部位において出土したもの、古墳以外の造構出土のもの、表土出土または表面採集品がある。

1 石器（第341図、図版13）

1744は3区A55号墳の石室内より出土した完形品の黒曜石製ナイフ形石器である。側縁は丁寧にプランディングされているが、摩耗が烈しい。大屋敷遺跡の年代的上限を旧石器時代後期に遡らせる遺物である。

1745～1747は凹基式の黒曜石製石鏃であり、縄文時代早期以降の所産と考えられる。1745は1区A17号墳の玄室より、1746はA55号墳の石室より出土し、1747は2区の表面採集品である。また、1745は完形品であるが、1746・1747は片翼が欠損している。1748はシルト岩製の有茎石鏃であるが、茎は欠損している。縄文時代早期以降の所産と考えられる。

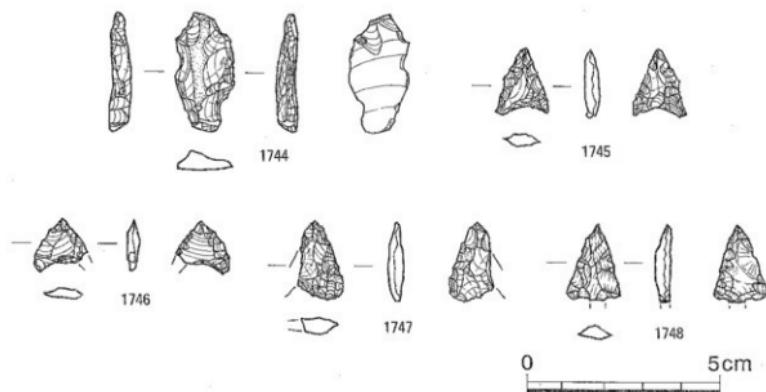
1744～1747の黒曜石は長野県産と考えられ、少なくとも静岡県内で採掘された石材ではない。

2 銭貨（第342図、図版159）

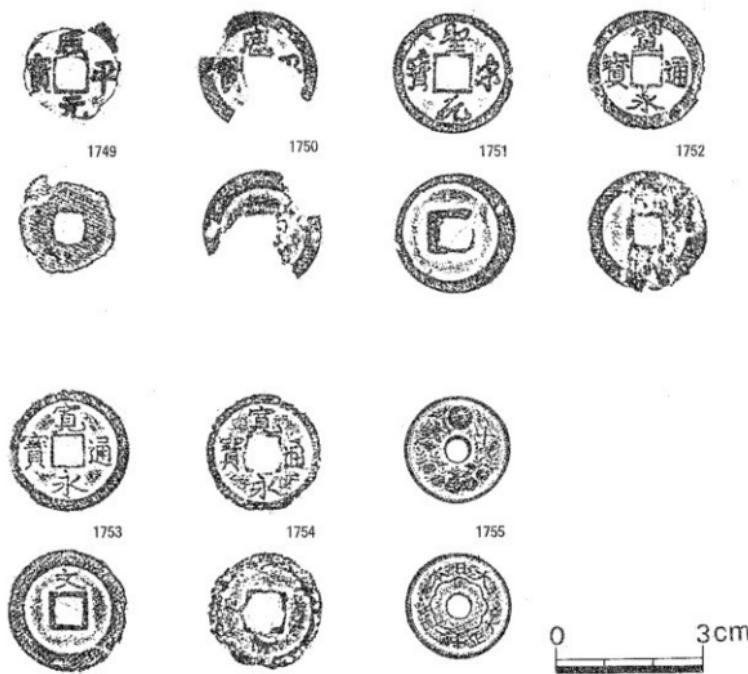
1749～1751は2区SX01出土の北宋銭である。1749・1750は初鋤998年の咸平元寶であるが、遺存状態は劣悪である。1751はほぼ完形品の聖宋元寶であり、初鋤年は1101年である。

1752～1754は寛永通寶である。1752は「寛」字の12画目と13画目の頭が相接し、「寶」字の「貝」部5～7画目が「ス」の字形となっており、寛永13年（1636年）～万治2年（1659年）に鑄造された、いわゆる古寛永である。A55号墳の羨道より出土した。2区で表面採集された1753は「文」の背文字を有し、寛文8年（1668年）～天和3年（1683年）に鑄造された、いわゆる文銭である。1754は「寛」字の12画目と13画目の頭が離れ、「寶」字の「貝」部6・7画目が「ハ」の字形となっており、元禄10年（1697年）以降に鑄造された、いわゆる新寛永である。2区13号墳の石室より出土した。

1755は大正12年（1923年）に鑄造された十銭硬貨である。3区A60号墳付近で出土した。以上の中世・近世・近代の銭貨は、それぞれの時代において人々が古墳、或いは古墳群の立地するような聖域と何らかの形で関わった証拠品である。特にA13号墳やA55号墳といった、大型横穴式石室を擁する古墳で出土していることは、後世においてもこれらの古墳が目立つ存在であったことを示している。



第341図 大屋敷A古墳群出土石器実測図



第342図 大屋敷A古墳群出土銭貨拓影図

第3表 大屋敷A古墳群出土土器観察表

出土番号	鉢類番号	流派名	出土位置	種類	縦横	口径	器高	最大径	底径	胎土	施紋	内面色調	外面色調	内面調整	外面調整	残存部位	備考	
1	16	1号墳	周溝	須直器	环腹		(1.20)	(6.80)		密	良好	灰白	灰	N 6/	摩滅	摩滅	底部	
2	16	1号墳	表土	須直器	环腹	(9.00)	3.05		(3.30)	密	良好	灰白	灰白	7.5Y 8/2	ナデ	回転ナデ	口縁部	
3	16	1号墳	周溝外	須直器	环腹	11.40	(1.90)			密	良好	灰白	灰白	5Y 7/1	7.5Y 7/1	回転ナデ	口縁部	
4	16	1号墳	周溝	須直器	环腹		(1.65)	3.1		密	良好	灰白	灰白	2.5Y 8/2	2.5Y 8/2	摩滅	摩滅	捨み
5	16	1号墳	周溝	須直器	环身	(8.20)	2.90		(4.10)	密	良好	削青灰	青灰	5B 7/1	5B 5/1	回転ナデ	回転直削り	底部～体部
6	16	1号墳	周溝	須直器	环身	(8.50)	3.25		(3.20)	密	良好	灰白	灰白	5Y 8/1	5Y 7/1	回転ナデ	回転直削り	全体
7	16	1号墳	周溝	須直器	环身	8.80	(1.75)			密	良好	灰白	灰白	N 7/	N 7/	回転ナデ	回転ナデ	口縁部
8	16	1号墳	周溝	須直器	底		(10.70)	9.5		密	良好	灰白	灰白	5Y 7/1	5Y 7/1	回転ナデ	回転直削り	口径～欠損
9	16	1号墳	表土	須直器	环腹		(4.90)		(6.00)	密	良好	灰白	灰白	N 7/	N 7/	回転ナデ	回転直削り	口縁部～体部
10	16	1号墳	周溝	須直器	無蓋高环	(14.10)	(4.90)			密	良好	灰白	灰白	2.5Y 8/2	2.5Y 8/2	回転ナデ	回転直削り	体部自然崩
11	23	2号墳	石室	須直器	环腹	8.20	3.25	8.50		密	良好	灰	灰	N 6/	N 6/	回転ナデ	回転ナデ	完形品
12	23	2号墳	石室	須直器	环腹	8.80	3.40	9.00		密	良好	灰白	灰白	5Y 7/1	5Y 7/1	ナデ	回転ナデ	完形品
13	23	2号墳	石室	須直器	环腹	8.50	3.40	8.80		密	良好	灰	灰	5Y 6/1	5Y 6/1	ナデ	回転ナデ	完形品
14	23	2号墳	石室	須直器	环腹	9.20	3.60	9.30		密	良好	灰	灰	5Y 6/1	5Y 6/1	回転ナデ	回転ナデ	ほぼ完形品
15	23	2号墳	石室	須直器	环腹	8.30	3.20	8.60		密	良好	灰	灰	5Y 6/1	5Y 6/1	ナデ	回転ナデ	回転直削り
16	23	2号墳	玄室内	須直器	环腹	(9.40)	(1.90)	(9.80)		密	良好	灰	灰	N 6/	5Y 6/1	回転ナデ	回転ナデ	口縁部
17	23	2号墳	石室	須直器	环身	7.70	3.60	9.60	3.60	密	良好	灰	灰	N 5/1	N 5/1	回転ナデ	回転直削り	完形品
18	23	2号墳	石室	須直器	环身	7.40	3.20	9.30	3.60	密	良好	灰	灰	5Y 6/1	5Y 6/1	回転ナデ	回転直削り	完形品
19	23	2号墳	石室	須直器	环身	6.90	3.20	8.20	3.20	密	良好	削青灰	削青灰	2.5Y 6/1	2.5Y 6/1	回転ナデ	回転直削り	完形品
20	23	2号墳	石室	須直器	环身	7.30	3.30	8.90	3.00	密	良好	灰	灰	N 6/	5Y 6/1	ナデ	回転ナデ	回転直削り
21	23	2号墳	石室	須直器	环身	7.00	3.10	8.90	3.00	密	良好	灰	灰	5Y 6/1	5Y 6/1	回転ナデ	回転直削り	完形品
22	23	2号墳	石室	須直器	环身	7.30	2.90	8.80	3.20	密	良好	灰白	灰白	5Y 7/1	5Y 7/1	回転ナデ	回転直削り	残存
23	23	2号墳	石室	須直器	平腹	5.60	14.10		12.9	密	良好	灰白	灰白	2.5Y 7/1	2.5Y 7/1	回転ナデ	回転直削り	完形品
24	23	2号墳	石室	須直器	平腹	5.70	17.00		15.6	密	良好	灰白	灰白	5Y 7/1	5Y 7/1	回転ナデ	回転直削り	完形品
35	29	3号墳	周溝	須直器	环身	(8.40)	(1.60)	(9.60)		密	良好	灰	灰	N 6/	N 6/	回転ナデ	回転ナデ	口縁部
36	29	3号墳	周溝	須直器	环身	(7.40)	3.30	(9.60)	(3.20)	密	良好	灰	灰	N 6/	5Y 6/1	回転ナデ	回転直削り	口縫部～体部
37	29	3号墳	周溝	須直器	环身	8.70	2.90	10.30	4.50	密	良好	灰	灰	N 5/	N 5/	回転ナデ	回転直削り	完形品
38	29	3号墳	周溝	須直器	环身	(10.40)	3.10	(10.90)	5.00	密	良好	灰白	灰白	5Y 7/1	5Y 7/1	回転ナデ	ナデ	底部
39	29	3号墳	周溝	須直器	無蓋高环	(15.40)	(5.30)			密	良好	灰黄	灰黄	5Y 7/1	2.5Y 7/2	回転ナデ	回転直削り	坏部
40	29	3号墳	周溝	須直器	环腹	8.60	3.00	8.60		密	良好	灰	灰	2.5Y 6/1	2.5Y 6/1	回転ナデ	回転直削り	ほぼ完形品
41	29	3号墳	周溝	須直器	环腹	(16.00)	3.80	(16.20)		密	やや不良	灰黄	灰白	2.5Y 8/2	N 5/	回転ナデ	回転直削り	やや軟質
42	40	5号墳	石室	須直器	环腹	10.20	3.50	10.30		密	良好	灰	灰	N 6/	N 6/	回転ナデ	回転直削り	完形品
43	40	5号墳	石室	須直器	环腹	10.00	3.40	10.20		密	良好	灰白	灰白	2.5Y 6/1	5Y 6/1	回転ナデ	回転ナデ	完形品
44	40	5号墳	石室	須直器	环腹	10.50	3.50	10.70		密	やや不良	灰白	灰白	2.5Y 7/2	5Y 7/1	回転ナデ	回転直削り	やや軟質
45	40	5号墳	石室	須直器	环腹	9.50	3.20	9.95		密	良好	灰	灰	5Y 6/1	N 5/	回転ナデ	回転ナデ	完形品

遺物番号	品目番号	遺物名	出土位置	種類	口径	留高	最大径	底径	地成	内面色調	外面色調	内面調査	外輪調整	残存部位	備考	
46	49	5号壙	石室	須恵器	环盡	9.60	3.10	10.00	密	良好 2.5Y 6/1	灰 N 5/	回転ナダ	回転翼削り 後ナダ 回転ナダ	完品		
47	49	5号壙	周溝外	須恵器	环盡				密	良好 10Y 6/1	灰 10Y 5/1	回転ナダ	回転翼削り 回転ナダ	体部～ 天井部		
48	49	5号壙	周溝外	須恵器	环盡				密	良好 2.5Y 7/1	青灰 2.5Y 6/1	回転ナダ	回転翼削り 回転ナダ	体部～ 天井部		
49	49	5号壙	石室	須恵器	环身	8.70	3.35	10.40	2.80	密 良好	灰 7.5Y 6/1	灰 N 4/	回転ナダ	回転翼削り ナダ	完品	
50	49	5号壙	石室	須恵器	环身	8.60	3.60	10.20	4.30	密 良好	灰 5Y 6/1	灰 10YR 6/2	回転ナダ	回転ナダ	完品	
51	49	5号壙	石室	須恵器	环身	8.80	3.30	10.70	4.20	密 良好	灰 5.5Y 5/1	灰 N 5/	回転ナダ	回転翼削り 回転ナダ	ほぼ 完品	
52	49	5号壙	石室	須恵器	环身	9.00	3.30	10.60	4.40	密 良好	灰 N 6/	灰 N 6/	回転ナダ	回転翼削り	完品	
53	49	5号壙	石室	須恵器	环身	9.40	3.00	11.10	6.00	密 良好	灰 N 6/	灰 N 6/	回転ナダ	回転翼削り	完品	
54	49	5号壙	周溝外	須恵器	环身	(9.60)	(2.00)	(10.00)		密 良好	灰 N 6/	灰 7.5Y 6/1	回転ナダ	口盤部		
55	49	5号壙	石室	須恵器	高环	15.30	10.90		10.40	密 良好	灰白 N 7/	灰 5.5Y 5/1 脚部、灰白 5Y 7/1	回転ナダ	回転翼削り 後ナダ	脚部	
56	46	6号壙	石室	須恵器	环身	(1.50)			(4.00)	密 良好	灰 N 5/	灰 N 6/	回転ナダ	回転翼削り ナダ	底部～ 柱下部	
58	53	7号壙	墓道	須恵器	环盡	(8.70)	3.15		袖み 1.4	密 良好	灰白 N 8/	灰 N 6/	回転ナダ	回転ナダ	口縁部	
59	53	7号壙	墓道	須恵器	环盡	(8.60)	(1.95)			密 良好	灰白 N 8/	灰白 2.5Y 8/2	回転ナダ	回転ナダ	口縁部	自然釉
60	53	7号壙	坑丘外	須恵器	环盡	(1.30)	(10.80)			密 良好	灰白 N 8/	灰 N 6/	回転ナダ	回転ナダ	全体	
61	53	7号壙	墓道	須恵器	环身	(9.80)	3.55		(6.00)	密 良好	灰白 5Y 7/1	灰 10YR 7/2	回転ナダ	回転ナダ 窓ナダ	全体	
62	53	7号壙	墓道	須恵器	环身	(9.60)	3.40		(6.00)	密 良好	灰白 10YR 7/1	灰白 2.5Y 7/1	回転ナダ	回転翼削り	体部	
63	53	7号壙	墳丘外	須恵器	环身	(1.20)			(8.40)	密 良好	灰白 2.5Y 7/1	灰白 2.5Y 7/1	回転ナダ	回転翼削り	貼り付け合	
64	53	7号壙	送迎	須恵器	フラスコ形瓶	(24.65)	体部	17.4		密 良好	灰白 SY 7/1	灰白 SY 7/1	回転ナダ	回転ナダ 回転翼削り 後ナダ	ほぼ 完形品	自然釉
65	56	8号壙	周溝外	須恵器	环盡	(1.65)	体部	4.0		密 良好	灰白 5Y 8/2	灰白 2.5Y 7/2	回転ナダ	回転翼削り 回転ナダ	体部	
66	59	9号壙	墳丘外	須恵器	环盡	(1.40)	体部	9.4		密 良好	灰白 2.5Y 8/2	灰白 2.5Y 6/1	回転ナダ	回転翼削り 回転ナダ	体部	
67	59	9号壙	埴丘	須恵器	埴	(5.85)	体部	(11.0)		密 良好	暗褐 7.5YR 3/1	灰白褐 10YR 5/2	回転ナダ	ハケメ 回転ナダ 手持もの削り	底部～ 体側	
68	68	10号壙	石室	須恵器	环盡	(3.70)	体部	(10.3)		密 良好	灰 7.5Y 5/1	灰 5Y 6/1	回転ナダ	回転翼削り 回転ナダ	体部	沈底2条
69	68	10号壙	石室	須恵器	环身	(12.20)	3.70	(14.50)	7.20	密 良好	灰 5Y 7/1	灰 5Y 7/1	回転ナダ	回転翼削り	全体	
70	68	10号壙	右片被	須恵器	环身	12.00	4.30	14.40		やや 密	灰白 2.5Y 8/1	灰白 2.5Y 8/1	回転ナダ	回転翼削り	完品	放置
73	68	10号壙	墓道	須恵器	無環高环	(13.40)	(3.40)			密 良好	灰 2.5Y 7/2	灰 2.5Y 5/1	回転ナダ	回転ナダ	口盤部	
74	68	10号壙	石室	須恵器	無蓋高环	(14.80)	(1.90)			密 良好	灰白 5Y 7/1	灰 2.5Y 7/2	回転ナダ	回転ナダ	口盤部 内面	自然釉
75	68	10号壙	石室	須恵器	無蓋高环	(12.20)	(3.30)			密 良好	灰 5Y 6/1	灰 5Y 6/1	回転ナダ	回転ナダ	口盤部 内面	
76	68	10号壙	石室	須恵器	無蓋器	(7.60)	(1.75)			密 良好	从口 5Y 7/1	灰白 5Y 7/1	回転ナダ	回転ナダ	口盤部	自然釉
77	68	10号壙	埴丘	須恵器	埴	(9.00)	(1.90)			密 良好	灰白 2.5Y 8/1	灰 2.5Y 8/1	回転ナダ	回転ナダ	口盤部	
78	68	10号壙	石室	須恵器	埴	(14.20)	(2.70)			密 良好	灰 5Y 6/1	灰 N 4/	回転ナダ	回転ナダ	口盤部 内面	
79	68	10号壙	石室	須恵器	長颈瓶	(1.90)	(9.00)			密 良好	黄 2.5Y 6/1	灰 2.5Y 7/2	ナダ	回転ナダ	肩部	沈底2条
80	68	10号壙	石室	須恵器	瓶	(3.50)				密 良好	灰白 10YR 7/1	灰白 10YR 7/1	回転ナダ	回転翼削り	底部	
81	68	10号壙	墓道	須恵器	要片					密 良好	灰 5Y 6/1	灰 5Y 6/2	ナダ	横方向タケキ 後方タケキ	体部	
82	68	10号壙	石室	須恵器	フラスコ形瓶	(9.20)				密 良好	灰白 2.5Y 1/1	灰白 5Y 7/1	回転ナダ	回転ナダ	口盤部	自然釉
83	68	10号壙	石室	須恵器	フラスコ形瓶					密 良好	灰白 2.5Y 7/1	灰白 5Y 7/1	回転ナダ	回転ナダ ナダ	体部	自然釉

植物 番号	学名	出土地 位置	種類	特徴	口径	頭高	最大径	種類	胎土	焼成	内面色調	外面部色	内面調整	外面部調整	焼成 部位	備考
274	68 10号壇	石室	須恵器 形瓶					密 良好	灰白 2.5Y 7/1	灰白 2.5Y 7/1	回転ナデ ナデ	回転ナデ 回転窓削り	底部	沈縫 自然釉		
275	68 10号壇	石室	須恵器 楕瓶					密 良好	灰 N 5/	灰 2.5Y 6/1	ナデ	ナデ	ナデ	体部	自然釉	
276	68 10号壇	石室	土師器 杯	(9.40) (2.10)				密 良好	淡黄褐 10YR 8/3	淡黄褐 10YR 8/3	ナデ	ナデ	口輪部 円周			
277	68 10号壇	石室	土師器 杯		(1.20)			密 良好	2.5YK 3/3	10YR 8/2				底部		
278	68 10号壇	石室	灰陶 陶瓶	(12.20) (1.00)				密 良好	灰 2.5Y 8/2	2.5Y 6/1	回転ナデ	回転ナデ	口縁部 内腹			
279	68 10号壇	埴丘	土師器 甕	(12.80) 17.55	体部 (14.35)	6.60	やや 粗	不良	にがい 7.YR 7/4	にがい 7.YR 7/4	擦ハケ目 ナデ	擦ハケ目 ナデ	口輪部 体部底部	長い 軟質		
324	73 11号壇	周溝	須恵器 壺	(6.90) (2.75)				密 良好	灰白 2.5Y 7/1	灰白 2.5Y 7/1	回転ナデ	回転削り 回転ナデ	体部			
325	73 11号壇	周溝	須恵器 壺	(6.70) (2.70)				密 良好	灰白 5Y 8/1	オーブン 5Y 6/3	回転ナデ	回転ナデ	口縁部 自然釉			
326	73 11号壇	墓道	須恵器 壺	(8.80) (2.25)				密 良好	灰白 N 7/	灰黄 2.5Y 7/2	回転ナデ	回転ナデ	口縁部	自然釉		
327	73 11号壇	石室	須恵器 甕	(11.00) (3.90)				密 良好	灰白 2.5Y 7/1	灰 N 6/	回転ナデ	回転ナデ 回転削き 直腹文	口縁部			
328	73 11号壇	周溝	須恵器 壺	(8.60) (2.90)				密 良好	N 6/	N 5/	回転ナデ	回転ナデ	口縁部	沈縫1条		
329	73 11号壇	周溝	須恵器 壺	(7.80) (1.80)				密 良好	青灰 SB 6/1	灰 N 6/	回転ナデ	回転ナデ	口縁部			
330	73 11号壇	周溝	須恵器 壺		(2.30)			(6.20)	密 良好	灰白 5Y 7/1	灰白 5Y 7/1	回転ナデ	窓ナデ	底部		
331	73 11号壇	周溝	須恵器 壺身		(2.10)			体部 (8.8)	密 良好	灰 N 6/	灰 N 6/	回転ナデ	回転ナデ 回転窓削り	体部		
332	73 11号壇	墓道	須恵器 壺		(1.85)			(4.90)	密 良好	灰白 N 7/	灰 N 6/	回転ナデ	回転削り 合掌	底部		
333	73 11号壇	周溝	須恵器 壺		(1.75)			(4.60)	密 良好	灰 N 6/	灰 N 6/	回転ナデ	回転ナデ 窓割り	底部	側面压痕	
334	73 11号壇	周溝	須恵器 壺		(4.30)			体部 (11.1)	密 良好	灰白 N 7/	灰 N 6/	回転ナデ	回転ナデ 回転窓削り	体部 ～背部		
335	73 11号壇	周溝	須恵器 壺		(5.20)				密 良好	N 7/	N 7/	回転ナデ	回転ナデ	頭部		
336	73 11号壇	墓道	須恵器 甕		(3.50)				密 良好	灰 N 6/	灰 N 6/	ナデ	タキナ カニ目 織柄の細網模様			
337	73 11号壇	墓道	須恵器 甕		(8.30)				密 良好	青灰 2.5Y 6/1	灰灰 2.5Y 6/2	蹴丸窓 前割	タタキ			
338	73 11号壇	石室	須恵器 甕		(7.00)				密 良好	青灰 2.5Y 5/1	灰 N 5/	ナデ	タタキ	下半部		
339	73 11号壇	埴丘	須恵器 壺						密 良好	灰 N 5/	灰白 5Y 7/1	回転ナデ 後ナデ	ハケ目	体部		
340	73 11号壇	埴丘	須恵器 壺						密 良好	灰 N 5/	灰 5Y 6/1	回転ナデ	ハケ目削落	手縫 体縫	自然釉	
341	73 11号壇	洪波	須恵器 壺						密 良好	灰白 N 7/	灰白 N 7/	ナデ	回転ナデ 窓割り	タタキ目	自然釉	
342	73 11号壇	周溝	志戸呂 大型 筒形容器		(2.50)				密 良好	10YR 8/1 黄斑場	灰白 2.5Y 7/1 黄斑場	回転ナデ	回転ナデ		ウノフ緋 +反釉	
410	78 15号壇	石室	須恵器 長颈甕	(10.50)	(2.40)				密 良好	灰 2.5Y 6/2	灰白 2.5Y 7/1	回転ナデ	回転ナデ	口縁部		
411	78 15号壇	周溝	須恵器 長颈甕		(3.50)				密 良好	灰 5Y 6/1	淡黄 2.5Y 7/3	回転ナデ	回転ナデ	肩部		
412	78 15号壇	周溝	須恵器 長颈甕		(8.00)				密 良好	灰 2.5Y 7/3	灰 5Y 5/1 淡黄 5Y 5/1	回転ナデ ナデ	回転ナデ	張部		
413	78 15号壇	周溝外	須恵器 壺蓋	(10.60)	(2.50)				密 良好	灰黄 2.5Y 6/2	にがい黄 2.5Y 6/3	回転ナデ	回転ナデ	口縁部		
441	83 16号壇	墓道	須恵器 壺蓋	9.20	2.65				密 良好	灰口 2.5Y 7/1	灰白 2.5Y 8/2	回転ナデ	回転ナデ 回転窓削り	底部 完形品	自然釉	
442	83 16号壇	墓道	須恵器 壺蓋	8.80	(1.80)				密 良好	灰白 N 7/	灰白 N 7/	回転ナデ	回転窓削り	全体		
443	83 16号壇	墓道	須恵器 壺蓋	(8.90)	(1.80)				密 良好	灰白 N 7/	灰白 N 7/	回転ナデ	回転窓削り	全体		
444	83 15号壇	墓道	須恵器 壺蓋	(15.10)	(1.70)				密 良好	灰白 5Y 8/1	灰白 5Y 8/1	摩拭	摩拭	口縁部		
445	83 16号壇	墓道 東外	須恵器 壺蓋		(1.35)				密 良好	灰白 2.5Y 8/2	灰白 2.5Y 8/2	摩拭	摩拭	体部		

遺物 番号	種類 番号	遺物名	出土 位置	種類	器種	口径	器高	最大幅	底径	胎土	焼成	内面色調	外面色調	内面調査	外面部調査	残存 部位	備考
446	83	16号埴	墓道	須恵器	环盃	(14.80)	(1.35)			糊	良好	灰白 5Y 8/1	灰白 5Y 8/1	回転ナデ	回転蓋刷り	11部	
447	83	16号埴	墓道	須恵器	环身	(8.30)	3.15		3.40	密	良好	灰 N 6/	灰 N 6/	回転ナデ	回転ナデ	底部	植物模様压痕
448	83	16号埴	埴丘	須恵器	环身	7.90	2.80		3.90	密	良好	灰 N 6/	灰 N 6/	回転ナデ	回転ナデ	全体	
449	83	16号埴	墓道	須恵器	环身	(10.70)	(2.80)			密	良好	灰白 N 7/	灰 N 6/	回転ナデ	回転ナデ	口縁部	
450	83	16号埴	墓道	須恵器	环身	(11.00)	3.15		(3.60)	密	魚好	灰白 10Y 6/1	灰 N 6/	回転ナデ	回転ナデ	全体	蓋配号
451	83	16号埴	墓道	須恵器	环身	9.80	3.90		3.30	密	良好	灰白 N 7/	灰 N 5/	回転ナデ	回転ナデ	全体	
452	83	16号埴	墓道	須恵器	环身	(10.10)	3.05		(8.10)	密	良好	灰白 N 8/	灰白 N 8/	回転ナデ	回転ナデ	全体	
453	83	16号埴	墓道	須恵器	环身		(1.90)		5.50	密	良好	灰白 2.5Y 6/1	灰白 2.5Y 8/1	摩滅	摩滅	底部	
454	83	16号埴	埴丘	須恵器	环身		(1.95)		(8.20)	密	良好	灰白 N 6/	灰 N 5/	回転ナデ	回転ナデ	全体	
455	83	16号埴	埴丘外	須恵器	合付多頭盃		(2.10)		9.30	密	良好	灰白 5Y 7/1	灰白 5Y 7/1	ナデ	回転ナデ	回転ナデ	底部
456	83	16号埴	墓道	須恵器	盃	(7.40)	(4.35)			密	良好	灰白 10YR 7/2	灰白 2.5Y 8/2	回転ナデ	回転ナデ	体部	沈縫3条
457	83	16号埴	墓道	須恵器	無蓋高环	(12.50)	(3.65)			密	良好	灰白 N 8/	灰白 N 7/	回転ナデ	回転ナデ	口縁部	
458	83	16号埴	埴丘	須恵器	壺	(6.50)		(15.6)		密	良好	灰白 2.5Y 8/1	灰白 2.5Y 7/3	回転ナデ	回転蓋刷り	体部	自然釉
459	83	16号埴	墓道	上師器	坪	(13.50)	(4.65)			密	良好	灰白 2.5Y 8/2	灰白 2.5Y 8/2	摩滅	摩滅	口縁部～体部	
460	92	17号埴	周溝	須恵器	瓶瓶	(7.20)	(3.80)			密	良好	灰白 10YR 7/4	灰白 10YR 7/3	回転ナデ	回転ナデ	口縁部	
461	92	17号埴	周溝	須恵器	环盖	(7.50)	(9.60)			密	良好	灰白 2.5Y 5/2	灰白 2.5Y 5/2	回転ナデ	回転ナデ	口縁部	
462	92	17号埴	周溝	須恵器	环盖	(7.10)	(1.60)			密	良好	灰白 2.5Y 7/2	灰白 2.5Y 7/2	回転ナデ	回転ナデ	口縁部	自然釉
463	92	17号埴	周溝	須恵器	瓶	(4.00)		(13.2)		密	良好	灰白 2.5Y 8/2	灰白 2.5Y 8/2	摩滅	摩滅	全体	
470	92	17号埴	埴丘	須恵器	壺	(3.00)		(18.6)		密	良好	灰白 2.5Y 7/1	灰白 2.5Y 7/1	回転ナデ	回転ナデ	体部	回転沈縫2条
471	92	17号埴	周溝	須恵器	壺	(3.70)		(18.4)		密	良好	灰白 2.5Y 7/1	灰白 2.5Y 5/2	回転ナデ	回転ナデ	体部 上半部(断面)	回転沈縫2条
472	92	17号埴	周溝	須恵器	脚付長颈壺	(4.20)		(高台部 14.8)		密	良好	淡黄 2.5Y 7/3	淡黄 2.5Y 7/3	ナデ	回転ナデ	高台部	自然釉
473	92	17号埴	周溝	須恵器	フラスコ形瓶	(10.80)				密	良好	灰白 5Y 7/1	灰白 5Y 6/1	回転ナデ	回転蓋刷り	体部	
474	92	17号埴	埴丘	須恵器	フラスコ形瓶	(10.60)				密	良好	灰白 7.5Y 7/1	灰白 7.5Y 7/1	回転ナデ	回転蓋刷り	体部	
475	92	17号埴	石室	須恵器	無蓋高环	11.20	14.30		脚部 10.0	密	良好	灰白 2.5Y 7/1	灰白 2.5Y 7/1	回転ナデ	回転ナデ	日付 完形品	沈縫2段孔
476	92	17号埴	石室	須恵器	壺	17.85	27.60		脚部 14.3 19.0	密	やや不良	灰白 2.5Y 7/1	灰白 2.5Y 7/1	ヘケ目 蓋刷り	回転ナデ	日付 完形品	ハケ付工具痕 輪郭み ハケ目
589	96	18号埴	表土	須恵器	無蓋高环	(14.60)	(3.60)			密	良好	灰 5Y 6/1	灰 5Y 6/1	回転ナデ	回転ナデ	口縁部	
590	96	18号埴	表土	須恵器	無蓋高环	(14.60)	(3.50)			密	良好	灰 5Y 6/1	灰 5Y 6/1	回転ナデ	回転ナデ	口縁部	
591	96	18号埴	表土	須恵器	長颈壺	(12.40)	(4.70)			密	良好	灰白 10YR 7/2	灰白 10YR 6/2	回転ナデ	回転ナデ	口縁部	
592	96	18号埴	表土	須恵器	平瓶	(5.20)		(体部 12.6)		密	良好	灰白 N 7/	灰白 2.5Y 7/1	回転ナデ	回転ナデ	底部 体下部 后部	自然釉
593	96	15号埴	表土	須恵器	フラスコ形瓶 或提壺					密	良好	灰白 2.5Y 7/1	灰白 2.5Y 7/1	ナデ	ナデ	体部	自然釉
594	102	19号埴	石室	須恵器	長颈壺	8.90	23.15	体部 15.7 高台部 9.55		密	良好	灰白 2.5Y 7/1	灰白 2.5Y 7/1	回転ナデ	回転蓋刷り	ほほ 完形品	シボリ痕 希初乳
595	102	19号埴	石室	須恵器	平瓶	6.65	17.15		脚部 14.2	密	良好	灰白 2.5Y 7/1	灰白 2.5Y 7/1	回転ナデ	回転ナデ	自然釉	完形品
596	102	19号埴	石室	須恵器	フラスコ形瓶 或提壺	(7.60)	4.10		(5.80)	密	良好	灰白 2.5Y 7/1	灰白 2.5Y 7/1	ナデ	ナデ	口縁部 ～体部	手捏ね成型
612	108	20号埴	石室	須恵器	フラスコ形瓶	7.85	22.30	体部 15.8		密	良好	灰白 2.5Y 7/1	灰白 2.5Y 7/1	回転ナデ	回転蓋刷り	ほほ 完形品	自然釉

遺物番号	詳細番号	遺物名	出土位置	種類	断面	口径	器高	最大径	底径	胎土	施成	内面色調	外面色調	内面調査	外面調査	残存部位	備考	
613	108_20号墳	石室	須恵器	平瓶	5.20	13.90		12.5		陶	良好	灰白 N 7/	灰白 N 7/	回転ナデ	回転窓割り ナデ	既往 完形品	算記号	
614	108_20号墳	石室	須恵器	平瓶	7.55	16.89		14.45		陶	良好	灰白 SY 7/1	灰白 SY 7/1	回転ナデ	回転窓割り ナデ	既往 完形品	自然釉 衣附	
615	108_20号墳	石室	須恵器	脚付盤	9.15	8.90			8.1	陶	良好	灰白 2.5Y 7/1	灰白 2.5Y 7/1	回転ナデ	回転ナデ	既往 完形品		
616	108_20号墳	石室	須恵器	脚付盤	9.50	10.30			8.95	陶	良好	灰 SY 6/1	灰 SY 6/1	回転ナデ	回転ナデ	既往 完形品		
617	108_20号墳	石室	須恵器	長縫盤	(10.10)	(16.1)				陶	良好	灰白 N 8/	灰 N 5/	回転ナデ	回転窓割り 後ナデ	体部	自然釉	
618	108_20号墳	上部		上部器	环	(1.70)				陶	やや 密	灰好 7.5YR 7/6	白 7.5YR 7/6	ナデ	底部 指屈丘部	ナデ	体部 ~底部	
626	123_23号墳	表土	須恵器	环瓶	(14.00)	3.70			(5.20)	陶	良好	灰 N 5/	灰 N 5/	回転ナデ	回転窓割り	全体		
627	123_23号墳	墓室内	須恵器	环瓶	(13.60)	(2.00)				陶	良好	灰白 N 7/	灰白 N 7/	回転ナデ	回転ナデ	口縁部		
628	123_23号墳	墓道	須恵器	环瓶	(16.90)	(1.70)				陶	良好	灰白 N 8/	灰白 N 8/	回転ナデ	回転ナデ	口縁部	薄誠	
629	123_23号墳	周溝外	須恵器	环瓶	(13.60)	(1.80)				陶	良好	灰白 N 6/	灰 N 6/	回転ナデ	回転窓割り	口縁部		
630	123_23号墳	周溝外	須恵器	环瓶	(17.10)	(1.30)				陶	良好	灰白 2.5Y 7/1	灰白 2.5Y 7/3	回転ナデ	回転ナデ	口縁部	自然釉	
631	123_23号墳	周溝	須恵器	环身	(11.70)	3.95			(6.30)	陶	良好	灰 N 5/	灰 N 5/	回転ナデ	回転窓割り	口縫部		
632	123_23号墳	周溝	須恵器	环身	(2.70)				(10.00)	陶	良好	灰白 N 7/	灰白 N 7/	回転ナデ	回転窓割り	底部	浅存	
633	123_23号墳	表土	須恵器	环身	(2.70)				(10.40)	陶	良好	灰白 N 7/	灰 N 6/	回転ナデ	回転窓割り	底部	貼り付け台台	
634	123_23号墳	表土	須恵器	楕円瓶	(7.00)				(17.10)	陶	良好	灰白 2.5Y 8/1	淡黄 2.5Y 8/1	回転ナデ	回転窓割り	体部上半	自然釉	
635	123_23号墳	表土	須恵器	瓶	(4.25)				(8.55)	陶	良好	灰白 N 7/	灰白 N 7/	回転ナデ	回転窓割り	体部下半		
636	123_23号墳	周溝	須恵器	瓶	(4.90)				(15.7)	陶	良好	灰白 N 8/	灰白 N 8/	回転ナデ	回転窓割り	体部	自然釉	
637	123_23号墳	石室上	十脚瓶	蓋付台付	(15.50)	(2.30)				陶	良好	にじむ青白 10YR 7/3	にじむ青白 10YR 7/2	摩滅	摩滅	口縁部		
638	123_23号墳	石室上	土器類	台付皿	(2.45)				(10.60)	陶	良好	淡黄 2.5Y 7/3	淡黄 2.5Y 7/3	摩滅	摩滅	脚部		
639	123_23号墳	墓道	土器類	皿	(1.05)				(13.30)	陶	やや 良	良好	にじむ青白 10YR 7/4	にじむ青白 10YR 7/4	摩滅	摩滅	底部	
640	123_23号墳	表土	灰陶	陶器	(14.80)	4.75			(8.50)	陶	良好	灰白 2.5Y 8/2	灰白 2.5Y 8/2	回転ナデ	回転窓割り	口縫部	底部	
641	127_24号墳	須恵器	壹頃	(10.80)	体部 (15.6)					陶	良好	灰白 2.5Y 7/1	灰白 2.5Y 7/1	回転ナデ	回転ナデ	体部	自然釉	
642	133_25号墳	周溝	須恵器	环盖	(9.80)	3.00	(10.00)			陶	良好	灰 SY 6/1	灰 SY 6/1	回転ナデ	回転窓割り	全体		
643	133_25号墳	須恵器	环蓋	9.00	3.00	9.20				陶	良好	灰 7.5Y 5/1	灰 7.5Y 5/1	回転ナデ	回転窓割り	既往 完形品	算記号	
644	133_25号墳	石室	須恵器	环蓋	9.00	3.10	9.20			陶	良好	灰 SY 6/1	灰 SY 6/1	回転ナデ	回転窓割り	既往品	算記号	
645	133_25号墳	東自然	須恵器	环蓋	(10.20)	(2.60)				陶	良好	灰白 2.5Y 7/2	にじむ青白 10YR 7/3	回転ナデ	回転ナデ	口縫部	自然釉	
646	133_25号墳	表土	須恵器	环身	(9.00)	(3.40)	(10.80)			陶	良好	灰 SY 6/1	灰 SY 6/1	回転ナデ	回転窓割り	口縫部		
647	133_25号墳	周溝	須恵器	环身	(8.50)	(1.80)	(9.60)			陶	良好	灰白 2.5Y 7/2	灰白 2.5Y 7/2	回転ナデ	回転窓割り	口縫部		
648	133_25号墳	周溝	須恵器	环身	(1.50)					陶	良好	淡黄 2.5Y 7/3	淡黄 2.5Y 7/2	回転ナデ	回転ナデ	口縫部		
649	133_25号墳	周溝	須恵器	环身	(2.20)					陶	良好	灰白 2.5Y 7/1	灰 N 6/ 灰白 SY 8/1	回転ナデ	回転ナデ	体部 ~底部		
650	133_25号墳	表土	須恵器	楕瓶	(10.00)	(1.40)			(10.4)	陶	良好	灰白 2.5Y 8/2	淡黄 2.5Y 8/3	回転ナデ	回転ナデ	口縫部		
658	138_26号墳	墓道	須恵器	环瓶	(19.00)	(2.30)				陶	良好	灰白 N 7/	灰白 N 7/	回転ナデ	回転窓割り	口縫部		
669	138_26号墳	埴丘	須恵器	环瓶	(17.70)	(2.00)				陶	良好	灰白 N 7/	灰白 N 7/	回転ナデ	回転窓割り	口縫部	体部	
670	138_26号墳	埴丘	須恵器	环瓶	(15.10)	(2.25)				陶	良好	灰白 N 7/	黄褐 2.5Y 5/3	回転ナデ	回転ナデ	口縫部	自然釉	

遺物番号	種類番号	遺構名	出土位置	種類	器種	口径	器高	最大径	底径	底成	内面色調	外面色調	内面調査	外表面調	焼存部	備考	
671	138	26号墳	埴丘	須恵器	环底	(19.00)	(2.25)			密	灰白 N 7/	灰白 N 7/	回転ナデ 前板剥削り	口縁部			
672	138	26号墳	東側	須恵器	环身	14.00	4.05	10.00	南	良好	灰白 N 7/	灰白 N 7/	回転ナデ 前板剥削り	口縁部	自然釉 光形貼付り付け窓合		
673	138	26号墳	埴丘	須恵器	环身	(17.40)	4.50	(12.40)	密	良好	灰白 N 7/	灰白 N 7/	回転ナデ 前板剥削り	底部	自然釉 貼り付け窓合		
674	138	26号墳		須恵器	环身	(15.50)	4.60	(11.40)	密	良好	灰白 N 7/	灰白 N 7/	回転ナデ 前板剥削り	底部	自然釉 貼り付け窓合		
675	138	26号墳	埴丘	須恵器	环身	(14.20)	(3.35)			密	良好	灰白 N 7/	灰白 N 6/	回転ナデ 前板剥削り	口縁部		
676	138	26号墳		須恵器	無類	(14.40)	(3.10)			密	良好	灰白 N 7/	灰白 N 5/	回転ナデ 前板剥削り	口縁部	自然釉	
677	138	26号墳	埴丘	灰陶	壺		(2.60)		7.60	密	良好	灰白 N 7/	灰白 N 7/	回転ナデ ナデ	底部	植物織紋瓦張 貼り付け窓合	
678	138	25号墳		須恵器	壺口	長颈瓶	17.35	19.10		密	良好	灰 N 4/	灰 N 4/	回転ナデ ナデ	口縁部	自然釉 粘土帶	
679	138	26号墳	埴丘	須恵器	瓶頸	(6.20)	(4.5)	14.5	南	良好	灰白 5Y 7/1	灰白 5Y 7/1	回転ナデ 前板剥削り	肩部	糊い沈彩		
680	138	25号墳		須恵器	長颈瓶	(6.70)	(9.10)			密	良好	灰白 5Y 7/1	灰白 5Y 7/1	回転ナデ 前板剥削り	口縁部	糊り模様	
681	138	26号墳	埴丘	須恵器	壺口	(26.80)	(2.50)			密	良好	灰白 5Y 7/1	灰白 5Y 7/1	回転ナデ 前板剥削り	口縁部		
682	138	26号墳	埴丘	須恵器	壺口					密	良好	灰白 5Y 7/1	灰白 5Y 7/1	回転ナデ 前板剥削り	口縁部	沈彩	
683	138	25号墳	埴丘	須恵器	壺口					密	良好	灰白 N 7/	灰白 2.5Y 7/1	回転ナデ 前板剥削り	体上部		
684	138	26号墳		須恵器	壺	(3.00)		豐部 (19.3)		密	良好	灰白 2.5Y 7/1	灰白 2.5Y 7/1	回転ナデ 半同心円 左にタクタキ目 菱点+上タキ目 形後ナデ	肩部		
685	138	25号墳	土師器	壺	(15.80)	2.50	(12.00)	南	良好	灰白 5Y 7/1	灰白 5Y 7/1	回転ナデ 前板剥削り	肩部	口縁部			
686	138	26号墳	石室	土師器	壺	(15.40)	(2.00)			密	良好	灰白 5Y 7/1	灰白 5Y 7/1	回転ナデ 前板剥削り	底部	内面赤彩	
687	138	26号墳	石室	土師器	壺	(15.80)	(2.20)			密	良好	灰白 5Y 7/1	灰白 5Y 7/1	回転ナデ 前板剥削り	口縁部	内面赤彩	
688	138	26号墳	石室	土師器	壺	(2.20)		(12.60)	密	良好	灰白 5Y 7/1	灰白 5Y 7/1	回転ナデ 前板剥削り	底部	内面赤彩		
689	138	26号墳	石室	土師器	壺	(3.70)				密	良好	灰白 10YR 7/4	灰白 10YR 8/4	摩滅	口縁部		
690	138	26号墳	須磨	土師器	壺	(23.80)	(4.10)			やや 粗	良好	灰白 10YR 8/4	灰白 7.5Y 8/3	摩滅	摩滅	口縁部	
692	139	1区表様	須恵器	环底	(9.10)	3.40	(9.30)			密	良好	灰オリヅ 5Y 6/2	灰 5Y 6/1	回転ナデ 前板剥削り	全体		
693	139	1区表様	須恵器	环底	(10.40)	3.50	(10.80)			密	良好	灰 5Y 5/1	灰 7.5Y 7/1	回転ナデ 前板剥削り	全体	沈跡1条 窓記号	
694	139	1区表様	須恵器	环底	(8.60)	(2.80)	(9.60)			密	良好	灰 2.5Y 7/2	灰 2.5Y 7/2	回転ナデ 前板剥削り	口縁部	沈跡1条 窓記号	
695	139	1区表様	須恵器	环底	(10.20)	(2.90)	(10.60)			密	良好	灰白 5Y 7/1	灰 5Y 6/1	回転ナデ 前板剥削り	口縁部	~体部	
696	139	1区表様	須恵器	环身	(9.00)	(3.10)	(11.00)			密	良好	灰白 2.5Y 7/2	灰 2.5Y 7/2	回転ナデ 前板剥削り	口縁部	~体部	
697	139	1区表様	須恵器	环身	(7.80)	(2.70)	(9.20)			密	良好	灰 N 5/	灰 2.5Y 6/2	回転ナデ 前板剥削り	口縁部	~体部	
698	139	1区表様	須恵器	环身		(1.70)		(7.40)	密	良好	灰 5Y 6/1	灰 5Y 6/1	回転ナデ 前板剥削り	底部	窓記号		
699	139	1区表様	須恵器	环底		(2.40)				密	良好	灰 2.5Y 6/2	灰 2.5Y 6/1	回転ナデ 前板剥削り	袖み ~体部		
700	139	1区表様	須恵器	环底		(2.80)				密	良好	灰白 2.5Y 7/1	灰 2.5Y 7/2	回転ナデ 前板剥削り	袖み ~体部		
701	139	1区表様	須恵器	环底	(20.00)	(2.70)	(20.60)			密	良好	灰白 3.5Y 6/2	灰 2.5Y 6/2	回転ナデ 前板剥削り	口縁部	自然釉	
702	139	1区表様	須恵器	环底	(15.40)	(1.60)	(15.80)			密	良好	灰白 2.5Y 7/1	灰 2.5Y 7/2	回転ナデ 前板剥削り	口縁部		
703	139	1区表様	須恵器	环底	(15.20)	(2.80)	(15.60)			密	良好	灰白 2.5Y 7/1	灰 2.5Y 6/3	回転ナデ 前板剥削り	口縁部	自然釉	
704	139	1区表様	須恵器	环身	(12.80)	(2.70)				密	良好	灰白 2.5Y 7/1	灰 2.5Y 6/2	回転ナデ 前板剥削り	口縁部		
705	139	1区表様	須恵器	环身		(2.20)		(高合25 (11.2))	密	良好	灰白 2.5Y 6/1	灰 2.5Y 6/2	回転ナデ 前板剥削り	底部	貼り付け窓合		

遺物 番号	神代 番号	施設名	出土 位置	種類	器種	口径	底高	最大径	底径	胎土	焼成	内面色	外面色	内面調整	外面調整	残存 部位	備考
706	139	1区 表揮	須恵器 环身			(1.40)		高台部 (8.8)	(9.40)	密 良好	灰白 2.5Y 7/1	灰白 2.5Y 7/1	回転ナダ	回転ナダ	底部		
707	139	1区 表揮	須恵器 环身			(1.90)		高台部 (10.6)		密 良好	灰白 2.5Y 6/1	灰白 2.5Y 7/1	回転ナダ	回転ナダ	底部	貼り付け高台	
708	139	1区 表揮	泥東 側面	須恵器 大型壺蓋 or 瓶蓋		(5.40)				密 良好	灰黄 2.5Y 6/2	灰白 10YR 7/2	回転ナダ	回転ナダ 回転蓋削り	袖み～ 体部 中央部		
709	139	1区 表揮	泥東 側面	須恵器 大型壺蓋 or 瓶蓋		(25.00)	(1.40)			密 良好	灰黄 2.5Y 7/2	灰黄 2.5Y 7/3	回転ナダ	回転ナダ	口縁部	自然釉	
710	139	1区 表揮	須恵器 長颈瓶			(11.40)	(3.40)	(11.70)		密 良好	灰黄 2.5Y 6/2	灰黄 2.5Y 5/1	回転ナダ	回転ナダ	口縁部	自然釉	
711	139	1区 表揮	須恵器 长颈瓶			(10.40)	(2.70)	(11.20)		密 良好	灰黄 2.5Y 7/2	灰白 2.5Y 7/1	回転ナダ	回転ナダ	口縁部		
712	139	1区 表揮	須恵器 瓶蓋			(10.00)	(2.80)	(10.90)		密 良好	浅黄 2.5Y 7/3	灰白 2.5Y 7/1	回転ナダ	回転ナダ	口縁部	沈拂1条	
713	139	1区 表揮	須恵器 瓶蓋			(10.60)	(2.80)	(11.40)		密 良好	灰白 5Y 7/2	灰白 5Y 7/2	回転ナダ	回転ナダ	口縁部		
714	139	1区 表揮	須恵器 瓶蓋			(3.45)		瓶蓋 (4.7)		密 良好	灰 N 6/	灰 N 6/	回転ナダ	回転ナダ	颈部	自然釉	
715	139	1区 表揮	須恵器 長颈瓶			(5.20)		瓶蓋 (7.3)		密 良好	灰白 5Y 7/3	灰白 5Y 7/1	回転ナダ	回転ナダ	颈部	自然釉	
716	139	1区 表揮	須恵器 高环			(5.50)		細部 (5.4)		密 良好	灰白 5Y 7/3	灰白 2.5Y 7/1	回転ナダ	回転ナダ	脚部		
717	139	1区 表揮	須恵器 瓶蓋			(2.30)		瓶蓋上半 (14.8)		密 良好	灰 N 6/	灰 N 6/	回転ナダ	回転ナダ	体部 上半部	他型品口縫 置き抜き瓶 自然釉	
718	139	1区 表揮	須恵器 瓶蓋			(3.75)				密 良好	灰白 5Y 7/1	オリーブ灰 5Y 6/3	回転ナダ	回転ナダ	体部 上半部		
719	139	1区 表揮	須恵器 瓶蓋			(5.90)		瓶蓋 (16.6)		密 良好	灰白 2.5Y 7/1	灰白 2.5Y 7/1	回転ナダ	回転ナダ	肩部		
720	139	1区 表揮	須恵器 プラスコ 形瓶			(8.25)				密 良好	褐灰 10YR 6/1	褐灰 10YR 6/1	回転ナダ	回転ナダ	体部		
721	139	1区 表揮	須恵器 プラスコ 形瓶							密 良好	灰白 N 7/	灰白 N 7/	回転ナダ	回転蓋削り	体部		
722	139	1区 表揮	山茶碗 碗			(2.85)		高台部 8.1		密 良好	灰白 2.5Y 8/1	灰白 2.5Y 8/1	回転ナダ	回転ナダ	底部～ 高台部	内面重ね使合 白泥物 外形容輪压痕 系出痕	
723	139	1区 表揮	唐津 斜口	須恵器 瓶蓋		(5.80)		高台部 12.65		密 良好	淡黄 2.5Y 5/3	オリーブ灰 10Y 4/2	回転ナダ	回転ナダ	底部	沈拂 機拂	
724	146	12号坑 墓道	須恵器 环蓋			10.30	3.30	開み 3.6		密 良好	灰白 2.5Y 8/2	灰白 N 7/	回転ナダ	回転ナダ	全体	自然釉	
725	146	12号坑 墓道	須恵器 环蓋			(10.30)	(1.95)			密 良好	灰白 N 7/	灰白 2.5Y 7/2	回転ナダ	回転ナダ	口縁部	自然釉	
726	146	12号坑 墓道	須恵器 环蓋			(10.50)	(2.10)			密 良好	灰白 N 8/	灰白 N 8/	回転ナダ	回転ナダ	金井		
727	146	12号坑 墓道	須恵器 环蓋			10.70	(2.90)			密 良好	灰白 N 8/	灰白 N 8/	回転ナダ	回転ナダ	全体	自然釉	
728	146	12号坑 墓道	須恵器 环蓋			(10.00)	(2.40)			密 良好	灰白 N 8/	灰白 N 8/	回転ナダ	回転ナダ	口縁部～体部		
729	146	12号坑 周溝	須恵器 环蓋			(8.90)	(1.20)			密 良好	灰白 N 7/1	灰白 N 7/1	回転ナダ	回転ナダ	口縁部	自然釉	
730	146	12号坑 亞道	須恵器 环身			(10.60)	3.70		(4.90)	密 良好	灰白 N 7/	灰白 N 7/	回転ナダ	回転ナダ	全体	自然釉 沈拂	
731	146	12号坑 亞道	須恵器 环身			11.80	4.00		6.60	密 良好	灰白 N 7/	灰白 N 7/	回転ナダ	回転ナダ	全体		
732	146	12号坑 周溝	須恵器 环身			(12.10)	(2.35)			密 良好	灰白 N 8/	灰白 N 8/	回転ナダ	回転ナダ	口縁部		
733	146	12号坑 墳丘	須恵器 环身			(12.40)	(2.50)			密 良好	灰白 2.5Y 8/1	灰白 2.5Y 8/1	回転ナダ	回転ナダ	口縁部		
734	146	12号坑 墳丘	須恵器 环身			(1.50)			5.00	密 良好	灰白 N 7/	灰白 N 7/	回転ナダ	回転蓋削り	底部		
735	146	12号坑 墳丘	須恵器 無蓋高环			(16.40)	(3.30)			密 良好	灰白 N 7/	灰白 N 7/	回転ナダ	回転ナダ	口縁部		
736	146	12号坑 墳丘	須恵器 無蓋高环			(16.00)	(3.70)			密 良好	灰 N 6/	灰 N 6/	回転ナダ	回転蓋削り	口縁部		
737	146	12号坑 墳丘	須恵器 無蓋高环			(14.00)	(2.80)			密 良好	灰白 N 7/	灰白 N 7/	回転ナダ	回転ナダ	脚部		
738	146	12号坑 墓道	須恵器 高环			(2.00)		脚部 (9.1)		密 良好	灰白 N 7/	灰白 N 7/	回転ナダ	回転ナダ			
739	146	12号坑 石室	土師器 台付器			(18.50)	4.50	台部 (10.8)		密 不良	淡黄灰 10YR 8/4	稻 SYK 7/6	耐耗	耐耗	口縁部 体部 合併	赤彩 質實	

遺物 番号	種類 分類	遺物名	出土 位置	種類	器種	口径	器高	最大径	底径	胎土	焼成	内面色調	外表面調	内面調査	外表面型	現存部	備考	
740	146	12号壙	墓道	須恵器	灰陶		(5.55)	体部下部 (18.8)	密	良好	灰白 N 8/	灰白 N 7/	回転ナデ 横ナデ	回転翼刷り	体部 下半部	東邦 木造丘墓 埴輪出		
741	146	12号壙	石室	土師器	坏身or盤	15.50	3.10		(10.00)	密	良好	に高い 良好 1 SYR	に高い 良好 1 SYR 8/4	に高い 良好 1 SYR 8/4	摩滅	摩滅	全体	
742	146	12号壙	墓道	土師器	皿	(21.80)	(1.95)			やや粗 良好	淡黃褐色 10YR 8/4	淡黃褐色 10YR 8/4	摩滅	摩滅	口縁部			
743	146	12号壙		土師器	皿	(21.70)	(2.45)			やや粗 良好	淡黃褐色 10YR 8/4	淡黃褐色 10YR 8/4	摩滅	摩滅	口縁部			
744	146	12号壙	石室	土師器	皿	(15.80)	2.25		12.10	密	良好	に高い 良好 1 SYR	に高い 良好 1 SYR 7/4	に高い 良好 1 SYR 7/4	摩滅	摩滅	口縁部 裏部	
745	146	12号壙	墓道	土師器	甕	(14.20)	(3.10)			やや粗 良好	褐色 5YR 6/6	褐色 5YR 6/6	ナデ	ナデ	口縁部			
746	146	12号壙	塗丘	土師器	甕	(17.50)	(2.50)			密	良好	に高い 良好 10YR 6/5	に高い 良好 10YR 6/5	ハケ ナデ	ハケ ナデ	口縁部		
747	146	12号壙	塗丘側	土師器	甕		(4.25)			密	良好	に高い 良好 10YR 6/3	に高い 良好 10YR 6/4	ハケ	ナデ	腹片		
748	146	12号壙	墓道	土師器	甕		(1.00)			やや粗 良好	褐色 5YR 6/6	褐色 5YR 6/4	ナデ	ナデ	底部 現存			
749	146	12号壙	墓道	灰陶	須恵器	(12.20)	(2.20)			密	良好	浅黄 2.5Y 7/3	浅黄 2.5Y 5/3	回転ナデ	回転ナデ	口縁部	沈跡 ハケ塗り葉物 +自然釉	
750	146	12号壙	墓道	灰陶	須恵器		(5.50)			密	良好	灰白 2.5Y 8/1	灰白 2.5Y 8/1	回転ナデ	回転ナデ	体上面	自然釉 ハケ塗り葉物	
761	151	13号壙	石室	須恵器	坏蓋	(10.80)	4.40	(11.10)		密	良好	灰 7.5Y 6/1	灰 7.5Y 6/1	回転ナデ	回転ナデ	全体	沈跡1条	
762	151	13号壙	塗丘	須恵器	坏蓋	(7.80)	(1.30)	(10.00)		密	良好	灰白 2.5Y 7/1	灰白 2.5Y 7/2	回転ナデ	回転ナデ	口縁部		
763	151	13号壙	周溝	須恵器	坏身	(12.40)	4.30		5.80	密	良好	灰白 2.5Y 8/1	灰白 2.5Y 8/1	回転ナデ	回転ナデ	口縁部		
764	151	13号壙	石室	須恵器	坏身	(9.60)	(4.70)	(12.20)		密	良好	灰 5Y 6/1	灰 7.5Y 6/1	回転ナデ	回転ナデ	全体	磨耗	
765	151	13号壙	周溝	須恵器	坏身	10.10	4.10		2.60	密	良好	灰白 N 7/1	灰白 N 7/	回転ナデ	回転翼刷り ナデ	全体		
766	151	13号壙	塗丘	須恵器	坏身	(10.00)	(3.30)	(11.30)		密	良好	灰白 2.5Y 7/1	灰白 2.5Y 7/2	回転ナデ	回転ナデ	全体		
767	151	13号壙	周溝	須恵器	坏身	(9.00)	4.10	(11.40)		密	良好	灰白 2.5Y 7/2	灰白 2.5Y 8/1	回転ナデ	回転ナデ	全体		
768	151	13号壙	周溝	須恵器	坏身		(2.10)			密	良好	灰白 2.5Y 7/1	灰白 2.5Y 7/1	回転ナデ	回転翼刷り	底部 済存	記号	
769	151	13号壙	周溝	須恵器	坏身		(1.80)			密	良好	灰白 2.5Y 8/2	灰白 2.5Y 8/2	回転ナデ	回転翼刷り	底部 現存	複記号	
770	151	13号壙	周溝	須恵器	坏身		(2.20)			密	良好	灰白 2.5Y 8/1	灰白 2.5Y 8/1	回転ナデ	回転翼刷り	底部~ 体部		
771	151	13号壙	周溝	須恵器	坏身		(3.00)			密	良好	灰白 2.5Y 7/2	灰白 2.5Y 7/1	回転ナデ	回転翼刷り	底部~ 体部		
772	151	13号壙	周溝	須恵器	坏身		(1.90)			密	良好	灰 5Y 6/1	灰 5Y 6/1	回転ナデ	回転翼刷り	底部		
773	151	13号壙	塗丘	須恵器	坏身	(10.60)	(2.90)			密	良好	灰白 2.5Y 7/1	灰白 2.5Y 7/1	回転ナデ	回転ナデ	口縁部		
774	151	13号壙	石室	須恵器	無蓋高坏		10.90	(9.80)			密	良好	に高い 良好 10YR 6/4	に高い 良好 2.5Y 8/2	回転ナデ	回転ナデ	口縁部 体部	沈跡 シボリ目 や軟質
775	151	13号壙	周溝	須恵器	無蓋高坏	(15.05)	(5.95)			密	良好	灰白 5Y 7/1	灰 N 6/	回転ナデ	回転ナデ	口縁部 体部	沈跡	
776	151	13号壙	石室	須恵器	無蓋高坏	(13.40)	(3.10)			密	良好	灰 10Y 5/1	灰黃 2.5Y 6/2	回転ナデ	ハケ 回転翼刷 ナデ	口縁部	施文 施接続状文 (6条) 施隔板施文 (1条)	
777	151	13号壙	周溝	須恵器	無蓋高坏	(13.00)	(2.80)			密	良好	淡黃 2.5Y 7/3	淡黃 2.5Y 6/1	回転ナデ	回転ナデ	口縁部		
778	151	13号壙	石室	須恵器	無蓋高坏	(15.50)	(2.90)			密	良好	灰白 5Y 7/1	灰白 5Y 7/1	回転ナデ	回転ナデ	口縁部		
779	151	13号壙	周溝	須恵器	無蓋高坏		(3.90)			密	良好	灰白 5Y 7/1	灰白 5Y 7/1	回転ナデ	回転ナデ	体部	沈跡 自然釉	
780	151	13号壙		須恵器	高坏		(0.70)	(10.00)	(9.40)	密	良好	灰白 2.5Y 6/1	灰白 2.5Y 6/1	回転ナデ	回転ナデ	脚部		
781	151	13号壙	周溝	須恵器	高坏		(2.80)			脚部 (5.7)	密	良好	灰 N 6/	灰 N 6/	回転ナデ	回転ナデ	脚部	沈跡
782	151	13号壙	周溝	須恵器	高坏		(1.70)			脚部	密	良好	灰白 5Y 8/1	灰白 5Y 8/1	回転ナデ	回転ナデ	脚部	自然釉

植物 番号	特徴 番号	遺物名	出土 位置	種類	形態	口径	器高	最大幅	基盤	胎土	焼成	内面色調	外面色調	内面調整	外表面調整	現存 部位	備考
783	151	13号壇	横丘	須恵器	甕	(10.60)	15.49	2.95 2部 11.6	密 良好	灰 N 5/	灰 5Y 5/1	回転ナデ 手持ち蓋取り	回転ナデ 手持ち蓋取り	口頭部 水輪 箱状瓦風到達 口沿部歪み	シボリ目 水輪 箱状瓦風到達 口沿部歪み		
784	151	13号壇	周溝	須恵器	瓶	(8.70)	(8.65)		密 良好	灰白	灰白	灰白	灰白	回転ナデ	回転ナデ	口頭部 水輪	
785	151	13号壇	周溝	須恵器	長盞	(7.45)	(9.85)		密 良好	黄灰	黄灰	黄灰	黄灰	回転ナデ	回転ナデ	口頭部 水輪	
786	151	13号壇	石室	須恵器	甕	(9.40)	(4.50)		密 良好	灰	灰	N 5/	回転ナデ 5Y 6/1	回転ナデ	口頭部 自然釉		
787	151	13号壇	石室	須恵器	短甕	(8.80)	5.40	頭部 (6.6) 2部 (9.4)	密 良好	灰白	灰白 2.5Y 7/1	灰白 10YR 7/2	回転ナデ 回転蓋取り	回転ナデ 回転蓋取り	全体 自然釉 (側立焼成)		
788	151	13号壇	周溝	須恵器	鋺		(4.20)		密 良好	灰白 2.5Y 7/1	灰白 2.5Y 7/2	回転ナデ 回転ナデ	回転ナデ 回転蓋取り 後ナデ	体部 自然釉 洗腹			
789	151	13号壇	周溝	須恵器	壺	(8.95)	(5.30)		密 良好	黄灰	黄灰	黄灰	黄灰	回転ナデ	回転ナデ	口頭部 自然釉	
790	151	13号壇	周溝	須恵器	鋺		(5.30)		密 良好	灰白 2.5Y 7/1	灰白 2.5Y 7/2	回転ナデ 回転ナデ	回転ナデ 回転蓋取り	体部 自然釉 洗腹			
791	151	13号壇	周溝	土器群	坏		(1.10)		(10.20)	灰 良好	灰 10YR 7/4	灰 10YR 7/4	ナデ	ナデ	底部		
792	151	13号壇	周溝	須恵器	油壺	4.10	10.20	体部 7.75 6.0	密 良好	灰 2.5Y 8/3	灰 7.5Y 2/2	回転ナデ 回転ナデ	回転ナデ 回転蓋取り	往1/3 ナデ底 手形 乳輪 残存			
793	152	13号壇	周溝	須恵器	壺	22.75	(49.40)	頭部 16.0 2部 47.7	密 良好	灰 5Y 6/1	灰 5Y 6/1	回転ナデ ナデ	回転状況 回転ナデ	口頭部 体部 カタキ目 カキ目			
799	161	27号壇	石室	須恵器	坏壺	10.30	3.05		密 良好	灰白 N 7/	灰 N 6/	回転ナデ 回転ナデ	回転ナデ 回転蓋取り	口頭部 体部			
800	161	27号壇	石室	須恵器	瓶	9.70	(2.25)		密 良好	暗オリーブ 5Y 4/3	灰 2.5Y 6/3	回転ナデ 回転ナデ	回転ナデ 回転ナデ	口頭部 自然釉			
802	168	29号壇	石室	須恵器	坪壺	8.90	3.35	10.35 3部 1.5	密 良好	灰白 N 7/	灰白 N 7/	回転ナデ 回転蓋取り ナデ	回転ナデ 回転蓋取り ナデ	ほほ 完品			
803	168	29号壇	石室	須恵器	坪壺	8.80	3.29	11.1 3部 1.6	密 良好	灰白 N 8/	灰白 N 7/	回転ナデ 回転蓋取り ナデ	回転ナデ 回転蓋取り ナデ	ほほ 完品			
804	168	29号壇	石室	須恵器	坪壺	8.80	3.05	11.1 3部 1.6	密 良好	灰白 N 7/	灰白 N 7/	回転ナデ 回転蓋取り ナデ	回転ナデ 回転蓋取り ナデ	ほほ 完品			
805	168	29号壇	石室	須恵器	坪壺	8.30	2.90	10.8 3部 1.6	密 良好	灰白 N 7/	灰白 N 7/	回転ナデ 回転蓋取り ナデ	回転ナデ 回転蓋取り ナデ	ほほ 完品			
806	168	29号壇	石室	須恵器	坪壺	8.40	2.75	10.6 3部 1.5	密 良好	灰白 N 8/	灰白 N 7/	回転ナデ 回転ナデ	回転ナデ ナデ	ほほ 完品			
807	168	29号壇	石室	須恵器	坪身	10.00	3.60		密 良好	灰白 N 7/	灰白 N 7/	回転ナデ 回転蓋取り	回転ナデ 回転蓋取り	全体			
808	168	29号壇	堆丘	須恵器	坪壺	(15.00)	(1.90)		密 良好	灰白	灰 5Y 6/1	回転ナデ 回転ナデ	回転ナデ	口頭部			
809	168	29号壇	堆丘	須恵器	坪身	(15.20)	3.90		(10.50)	密 良好	灰白 N 7/	灰白 N 7/	回転ナデ 回転ナデ	回転ナデ 回転蓋取り	口頭部 高台部 貼り付け萬合 記号		
810	168	29号壇	石室	須恵器	平瓶	7.45	(15.70)	頭部 5.1 3部 14.0	密 良好	灰白 5Y 7/1	灰白 5Y 7/1	回転ナデ 回転蓋取り	回転ナデ 回転蓋取り	口頭部 体部			
811	168	29号壇	石室	須恵器	舞笠高环	(14.50)	(2.90)		密 良好	灰白 N 7/	灰 N 6/	回転ナデ 回転ナデ	回転ナデ	口頭部			
812	168	29号壇	堆丘	須恵器	瓶		(3.15)		(8.20)	密 良好	灰 2.5Y 6/2	灰 2.5Y 6/2	回転ナデ 回転ナデ	回転ナデ 回転蓋取り	底部 角切板		
813	168	29号壇	堆丘	山茶碗	碗		(1.80)		6.40	やや 密 良好	灰白 N 7/	灰白 N 7/	回転ナデ 回転ナデ	回転ナデ 回転蓋取り	底盤付 底 残存 貼り付け萬合		
816	172	30号壇	致石 山上	須恵器	長瓶演	9.80	25.00	16.70	7.70	密 良好	灰白 N 7/	灰白 N 7/	回転ナデ 回転ナデ	回転ナデ 回転蓋取り	完品		
S17	177	31号壇	玄室	須恵器	坪壺	10.10	4.15		密 良好	灰白 N 7/	灰白 N 6/	回転ナデ 回転ナデ	回転ナデ 回転蓋取り	ほほ 完品			
818	177	31号壇	玄室	須恵器	坪壺	9.80	3.65		密 良好	灰白 N 7/	灰白 N 7/	回転ナデ 回転ナデ	回転ナデ 回転蓋取り	ほほ 完品			
819	177	31号壇	玄室	須恵器	坪壺	9.90	3.35		密 良好	青灰 5B 6/1	青灰 5B 6/1	回転ナデ 回転ナデ	回転ナデ 回転蓋取り	完品			
820	177	31号壇	玄室	須恵器	坪壺	9.70	3.20		密 良好	灰 N 6/	灰 N 6/	回転ナデ 回転ナデ	回転ナデ 回転蓋取り	ほほ 完品			

器物番号	碑銘	道線名	出土位置	種類	形態	口径	鉢高	最大径	高径	胎土	焼成	内面色調	外面色調	内面調査	外面部調査	焼存部位	備考
821	177 31号墳	玄室	須恵器	环甕	9.50	3.30				密	良好	灰白 N 7/ N 6/	灰白 N 7/ N 6/	回転ナデ	回転ナデ 回転蓋刷り	完品	複記号
822	177 31号墳	玄室	須恵器	环甕	10.00	3.50				密	良好	明齊底 SB 7/1	青灰 SB 6/1	回転ナデ	回転ナデ 回転蓋刷り のちナデ	ほほ 完形品	
823	177 31号墳	玄室	須恵器	环身	8.90	3.10	10.50	3.30		密	良好	灰白 2.5Y 7/2	灰白 5Y 7/2	回転ナデ	回転ナデ 回転蓋刷り	完品	
824	177 31号墳	玄室	須恵器	环身	8.80	3.35	10.70			密	良好	灰黄 2.5Y 7/2	灰白 5Y 7/2	回転ナデ	回転ナデ 回転蓋刷り	完形品	蛇鱗白斑底
825	177 31号墳	玄室	須恵器	环身	8.60	3.55	10.40	2.60		密	良好	灰 N 6/ N 5/	灰 N 6/ N 5/	回転ナデ	回転ナデ 回転蓋刷り	様様 完形品	複記号
826	177 31号墳	玄室	須恵器	环身	9.00	3.50	11.00	2.50		密	良好	灰 N 6/ N 5/	灰 N 6/ N 5/	回転ナデ	回転ナデ 回転蓋刷り	完品	複記号
827	177 31号墳	玄室	須恵器	环身	8.60	2.90	10.20	3.50		密	良好	灰 N 6/ SB 5/1	青灰 SB 5/1	回転ナデ	回転ナデ ナデ	完品	複記号
828	177 31号墳	玄室	須恵器	环身	8.60	3.05	10.70	4.40		密	良好	灰 N 6/ N 4/	回転ナデ	回転ナデ 回転蓋刷り	ほほ 完形品	複記号	
829	177 31号墳	石室	須恵器	环甕	14.50	3.20				薄	良好	灰黄 2.5Y 7/2	灰白 2.5Y 7/1	回転ナデ	回転ナデ 回転蓋刷り	ほほ 完形品	
830	177 31号墳	石室	須恵器	环甕	15.40	3.70				薄	良好	灰黄 2.5Y 7/2	灰黄 2.5Y 7/1	回転ナデ	回転ナデ 回転蓋刷り	全体	
831	177 31号墳	石室	須恵器	环甕	14.90	3.30				薄	良好	灰白 2.5Y 7/1	にじ、黄 2.5Y 6/3	回転ナデ	回転ナデ 回転蓋刷り	全体	
832	177 31号墳	石室	須恵器	环身	13.00	4.60				密	良好	灰黄 2.5Y 6/1	灰黄 2.5Y 6/1	回転ナデ	回転ナデ 回転蓋刷り	ほほ 完形品	乾燥台江底
833	177 31号墳	石室	須恵器	环身	14.40	(3.90)				密	良好	灰白 5Y 8/1	灰白 5Y 8/1	回転ナデ	回転ナデ	口縁部	
834	177 31号墳	玄室	須恵器	無蓋高坏	16.80	12.50				密	良好	灰白 N 7/	灰 N 6/	回転ナデ	回転ナデ 回転蓋刷り	ほほ 完形品	比較
835	177 31号墳	石室	土師器	坪	13.10	3.50				密	良好	般 SYR 6/6	般 SYR 6/6	ナデ	ナデ	全体	外延底部～内 頂口瓶部に2 次焼成
837	184 32号墳	周溝	須恵器	接底	(14.40)	(5.10)				密	良好	灰白色 N 7/1	灰 N 6/	回転ナデ	回転ナデ 回転蓋刷り	口縁部 全体	当て具瓶 タキキ目 ハケリ
838	184 32号墳	周溝	須恵器	环甕	(13.20)	4.00	(13.60)			密	良好	灰 N 6/ 5Y 6/1	灰 5Y 6/1	回転ナデ	回転ナデ 回転蓋刷り	全体	
839	184 32号墳	埴丘	須恵器	环身		(2.50)	(9.00)			密	良好	灰黄 2.5Y 7/2	灰 N 6/	回転ナデ	回転ナデ 回転蓋刷り	全体	
840	184 32号墳	埴丘	須恵器	环甕		(1.70)	(9.20)			密	良好	灰黄 2.5Y 5/1	灰 7.5Y 5/1	回転ナデ	回転ナデ 回転蓋刷り	天井部	
841	184 32号墳	埴丘	須恵器	环甕	(9.20)	(1.70)	(9.60)			密	良好	灰 5Y 6/1	灰 5Y 6/1	回転ナデ	回転ナデ	口縁部	
842	184 32号墳	埴丘	須恵器	环身	(10.40)	(4.00)	(12.80)			密	良好	灰黄 2.5Y 7/2	灰黄 2.5Y 7/2	回転ナデ	回転ナデ	全体	
843	184 32号墳	埴丘	須恵器	环身	(10.60)	(4.30)	(13.40)			密	良好	灰白 2.5Y 5/1	灰白 2.5Y 5/1	回転ナデ	回転ナデ	全体	
844	184 32号墳	埴丘	須恵器	环身	(8.60)	(1.90)	(10.00)			密	良好	灰 5Y 6/3	灰 5Y 6/3	回転ナデ	回転ナデ	口縁部	
845	184 32号墳	埴丘	須恵器	环身		(3.50)	(11.40)			密	良好	灰白 5Y 7/1	灰白 5Y 7/1	回転ナデ	回転ナデ 回転蓋刷り	全体	
846	184 32号墳	埴丘	須恵器	环身		(3.40)	(11.80)			密	良好	灰黄 2.5Y 5/1	灰白 2.5Y 7/1	回転ナデ	回転ナデ 回転蓋刷り	全体	複記号
847	184 32号墳	玄室	須恵器	环身		(1.80)		(9.00)		密	やや不良	灰白 2.5Y 8/1	灰白 2.5Y 8/1	回転ナデ	回転ナデ	底盤	軟質
848	184 32号墳	周溝	須恵器	环身		(0.90)				密	良好	灰白 2.5Y 7/1	灰白 2.5Y 7/2	回転ナデ	回転ナデ 回転蓋刷り	底盤	貼り付け高合
849	184 32号墳	玄室	須恵器	無蓋高坏	(10.60)	(2.60)				密	良好	灰白 2.5Y 7/1	灰白 2.5Y 7/1	回転ナデ	回転ナデ	口縁部	
850	184 32号墳	玄室	須恵器	高坏	(1.70)					密	良好	褐灰 10YR 5/1	褐灰 10YR 4/1	回転ナデ	回転ナデ	長方形透孔	
851	184 32号墳	玄室	須恵器	瓶頸	7.15	(9.10)				密	良好	灰白 2.5Y 7/1	灰白 2.5Y 7/1	回転ナデ	回転ナデ	口縁部	自然釉 シボリ目 沈綴
852	184 32号墳	玄室	須恵器	瓶頸	(6.20)	(4.00)				密	良好	灰オリーブ 5Y 5/2	灰白 5Y 5/2	回転ナデ	回転ナデ	口縁部	自然釉
853	184 32号墳	深追	須恵器	瓶頸	(5.00)	(3.30)				密	良好	灰 5Y 6/1	灰白 5Y 7/1	回転ナデ	回転ナデ	口縁部	
854	184 32号墳	埴丘	須恵器	平瓶	(5.85)	(3.90)				密	良好	灰白 5Y 7/1	灰白 5Y 7/1	回転ナデ	回転ナデ	口縁部	焼き不均 シボリ目
855	184 32号墳	埴丘	須恵器	瓶底膨	(4.00)					密	良好	灰白 2.5Y 7/2	灰白 5Y 7/1	回転ナデ	回転ナデ	頸部	
856	184 32号墳	埴丘	須恵器	追加瓶	(10.40)	(2.30)				密	良好	褐灰 10YR 4/1	褐灰 10YR 4/1	回転ナデ	回転ナデ	口縁部	

造物 器名	御用 品名	山土 紋名	種類	器種	口径	高さ	最大径	底径	胎土	焼成	内面色調	外面色調	内面調整	外面調整	焼成 部位	備考
857	184 32号壇	彦丘	須恵器	瓶頸		(2.60)	休葉上半 (12.4)		密	良好	灰白 2.5Y 8/1	灰黄 2.5Y 7/2	回転ナダ	回転ナダ	体部 上半部	焼成工具9本 焼成実験 焼成工具削除 立體
858	184 32号壇	玄室	須恵器	脚付盃	10.50	14.80	休錫 13.1	脚部 9.95	密	良好	灰白 2.5Y 8/1	灰白 2.5Y 8/1	回転ナダ ナダ	回転ナダ 回転窯割り	体部	完成品 焼成工具削除 立體
859	184 32号壇	彦丘	須恵器	提縄or フラスコ瓶					密	良好	灰白 2.5Y 7/1	灰 5Y 6/1	回転ナダ ナダ	ハケ目	体部	接合痕 当て具痕 把手: 極ナダ
860	184 32号壇	彦丘	須恵器	度瓶	(12.00)		度部 (10.0)		密	良好	灰白 2.5Y 6/1	灰白 2.5Y 6/1	回転ナダ	回転ナダ	口部 体部	口部痕 当て具痕 把手: 極ナダ
861	184 32号壇	玄室	土師質上器	カワラケ	(10.50)	2.80			密	良好	黄白 2.5Y 8/3	灰白 2.5Y 8/2	ナダ後 ミガキ	ナダ	口部 光形柄	内面工具痕 外面部窯庄痕
862	184 32号壇	玄室	土師質下器	カワラケ	(10.50)	3.30			密	良好	灰白 2.5Y 8/2	灰白 2.5Y 8/1	ナダ後 ミガキ	ナダ	口部 光形柄	内面工具痕 外面部窯庄痕
1165	189 33号壇	心水	須恵器	耳舟	14.70	4.55		8.60	密	良好	灰白 5Y 7/1	灰白 N (7)	回転ナダ	回転ナダ	金体	貼り付け高台 後ナダ
1166	189 33号壇	心水	須恵器	耳舟	(10.80)	(2.60)			密	良好	灰白 2.5Y 7/1	灰白 2.5Y 6/2	回転ナダ	回転ナダ	口部	
1167	189 33号壇	右室	須恵器	脚台舟	(12.55)	5.60		脚部 6.8	密	良好	灰白 5Y 7/1	灰白 5Y 7/1	回転ナダ	回転ナダ	全体	焼成工具 脚部
1168	189 33号壇	右室	須恵器	長颈甌	10.00	(8.10)			密	良好	灰白 10YR 8/1	灰白 10YR 8/1	回転ナダ	回転ナダ	口部	自然釉
1169	189 33号壇	石室	須恵器	瓶頸		(3.70)	休錫 (17.0)		密	良好	灰白 2.5Y 7/1	灰白 2.5Y 7/1	回転ナダ	回転ナダ	休部 上半部	自然釉 改進
1170	189 33号壇	周邊外	須恵器	瓶頸		(5.80)	休錫 (15.7)		密	良好	灰白 2.5Y 7/1	灰白 2.5Y 7/1	回転ナダ	回転ナダ	体部	自然釉 沈痕
1171	189 33号壇	周邊	須恵器	瓶頸		(4.15)		3.30	密	良好	灰白 2.5Y 8/1	灰白 2.5Y 8/1	回転ナダ	回転ナダ	底部	自然釉
1172	195 34号壇	臨道	須恵器	环甌	(14.90)	(2.85)			密	良好	灰白 N 7/	灰白 N 7/	回転ナダ	回転ナダ	口部	
1173	195 34号壇	臨道	須恵器	环甌	15.80	(1.85)			密	良好	灰白 N 7/	灰白 N 7/	回転ナダ	回転ナダ	口部	
1174	195 34号壇	臨道	須恵器	环甌	(16.40)	(1.95)			密	良好	灰白 N 7/	灰白 N 7/	回転ナダ	回転ナダ	口部	
1175	195 34号壇	臨道	須恵器	环甌	(15.80)	(2.10)			密	良好	灰白 N 7/	灰白 N 8/	回転ナダ	回転ナダ	口部	
1176	195 34号壇	臨道	須恵器	环身	15.40	4.65		12.60	密	良好	灰 N 6/	灰 N 6/	回転ナダ	回転ナダ	全体	貼り付け高台 後ナダ
1177	195 34号壇	臨道	須恵器	环身	(14.20)	3.95		9.60	密	良好	灰白 N 7/	灰白 N 7/	回転ナダ	回転ナダ	底部	貼り付け高台
1178	195 34号壇	臨道	須恵器	环身	(14.40)	(2.80)			密	良好	灰白 N 7/	灰白 N 8/	回転ナダ	回転ナダ	口部	
1179	195 34号壇	臨道	須恵器	环身	14.70	(3.00)			密	良好	灰白 N 8/	灰白 N 7/	回転ナダ	回転ナダ	口部	
1180	195 34号壇	臨道	須恵器	环身	9.20	(1.40)			密	良好	灰白 N 7/	灰白 N 7/	回転ナダ	回転ナダ	底部	貼り付け高台
1181	195 34号壇	臨道	須恵器	环身		(1.10)			密	良好	灰白 N 7/	灰白 N 7/	回転ナダ	回転ナダ	底部	
1182	195 34号壇	臨道	須恵器	瓶頸	(19.00)	(1.60)			密	良好	灰黄 2.5Y 7/2	灰白 N 6/中開	回転ナダ	回転ナダ	口部	自然釉
1183	195 34号壇	臨道	須恵器	长颈瓶	11.00	(2.20)			密	良好	灰黄 2.5Y 7/2	灰白 5Y 7/1	回転ナダ	回転ナダ	口部	自然釉
1184	195 34号壇	周邊	須恵器	瓶頸	6.90	(4.30)			密	良好	灰白 2.5Y 4/	灰白 N 4/	回転ナダ	回転ナダ	口部	自然釉
1185	195 34号壇	周邊付近	須恵器	瓶頸		(7.30)	脚部 (7.15)		密	良好	灰白 2.5Y 7/1		回転ナダ	回転ナダ	脚部	自然釉
1186	195 34号壇	基道	須恵器	高环		(1.15)	脚部 (13.5)	密	良好	灰白 N 7/	灰白 N 7/	回転ナダ	回転ナダ	脚部		
1187	195 34号壇	彦丘盛士	須恵器	フラスコ 形瓶		(20.80)			密	良好	灰白 2.5Y 7/1	灰白 2.5Y 7/1	回転ナダ	回転ナダ	体部	
1188	195 34号壇	派通	土師器	蓋	(16.00)	(2.40)			密	良好	灰白 10YR 7/4	赤 10R 4/6	摩滅	ナダ	口部	赤痕
1189	195 34号壇	玄室	土師器	ミニチャウ 瓶	(4.00)	休錫 (0.3)			密	良好	灰白 10YR 7/4	灰白 10YR 7/4	摩滅	摩滅	体部	やや高い 把手指痕
1190	195 34号壇	彦丘	須恵器	裝飾口絞 土器	(16.80)	(2.90)			密	不良	灰白 7.5YR 6/6	灰 7.5YR 6/6	摩滅	摩滅	口部	指痕直角 脚部斜子文
1194	202 35号壇	彦丘	須恵器	魚籃高环	(13.00)	(2.80)			密	良好	灰白 5Y 7/1	灰 N 6/	回転ナダ	回転ナダ	口部	

遺物 番号	器名	出土 位置	種類	形態	口径	縦高	最大径	底径	土色	焼成	内面色調	外面色調	内面調査	外表面調	残存 部位	備考
1195 207 37号壙	石室	須恵器	环身	(10.20)	3.30				密 良好	灰 N 6/	灰 N 6/	回転ナダ	回転ナダ 輪廻割り	体部		
1196 207 37号壙	石室	須恵器	环蓋	(9.80)	(3.40)				密 良好	灰 N 6/	灰 N 6/	回転ナダ	回転ナダ 輪廻割り	口部		
1197 207 37号壙	石室	須恵器	环身	(3.20)					密 良好	灰 N 6/	灰 N 6/	回転ナダ	回転ナダ 輪廻割り	体部		
1198 207 37号壙	石室	須恵器	环身	(9.00)	(3.05)	(11.00)			密 良好	灰白 SY 7/1	灰 N 6/ 灰 N 5/	回転ナダ	回転ナダ 輪廻割り	口跡部	真記号	
1199 207 37号壙	石室	須恵器	环身	8.50	(2.25)	10.40			密 良好	灰白 SY 7/1	灰白 SY 7/1	回転ナダ	回転ナダ 輪廻割り	口跡部		
1200 207 37号壙	石室	須恵器	环身	8.30	3.60	10.30	4.20		密 良好	灰白 SY 7/1	灰白 SY 7/1	回転ナダ	回転ナダ 輪廻割り	ほぼ 窓記号		
1201 207 37号壙	石室	須恵器	环身				(2.15)		密 良好	灰白 SY 7/1	灰白 SY 7/1	回転ナダ	回転ナダ 輪廻割り	体部	窓記号	
1202 207 37号壙	石室	須恵器	环身				(2.10)		密 良好	灰白 SY 7/1	灰白 SY 7/1	回転ナダ	回転ナダ 輪廻割り	窗部	窓記号	
1203 207 37号壙	石室	須恵器	环身				(1.60)		密 良好	灰白 SY 7/1	灰白 SY 7/1	回転ナダ	回転ナダ 輪廻割り	体部	窓記号	
1204 207 37号壙	埴氏	須恵器	高环				(2.10)		密 良好	灰白 SY 7/1	灰白 SY 7/1	回転ナダ	回転ナダ 輪廻割り	脚部		
1205 207 37号壙	石室	須恵器	瓶型	(8.50)	(1.65)				密 良好	灰白 10YR 7/4 SY 7/1	灰 N 4/	回転ナダ	回転ナダ 輪廻割り	口部	自然釉	
1206 207 37号壙	埴丘	須恵器	壺				(3.15)		密 良好	灰白 2.5Y 7/1	灰白 2.5Y 7/1	回転ナダ	回転ナダ 輪廻割り	肩部	自然釉 擦付工具剥離	
1207 207 37号壙	石室	須恵器	瓶型				(2.75)		密 良好	灰白 SY 7/1	灰白 SY 7/1	回転ナダ	回転ナダ 輪廻割り	肩部	自然釉	
1208 207 37号壙	石室	須恵器	瓶型	(10.10)	(5.00)		伴活 (15.3)		密 良好	灰白 2.5Y 7/1	灰白 2.5Y 7/1	回転ナダ	回転ナダ 輪廻割り	底部 体下部	自然釉	
1209 207 37号壙	石室	土師器	壺	(15.70)	2.10				密 良好	灰 7.5Y 7/6	灰 7.5Y 7/6	摩滅	摩滅	口部	赤影	
1211 211 38号壙	埴丘	須恵器	环蓋	(2.10)	3.7				密 良好	灰白 SY 7/1	灰白 SY 7/1	回転ナダ	回転ナダ 輪廻割り	口部	全体	
1212 211 38号壙	埴丘	須恵器	高环	(1.35)					密 良好	灰白 SY 7/1	灰白 SY 7/1	回転ナダ	回転ナダ 輪廻割り	腰部		
1213 211 38号壙	左側壁 墓室内	須恵器	壺				(6.20)		密 良好	灰白 N 7/ N 7/	灰白 N 7/ N 7/	同心四ヶ タキ後 横ハケ	同心四ヶ タキ後 横ハケ	全体		
1214 215 39号壙	埴丘	須恵器	高环				(4.00)		密 良好	灰白 SY 7/1	灰白 SY 7/1	回転ナダ	回転ナダ 輪廻割り	脚下部	長方形透孔	
1215 215 39号壙	石室	須恵器	壺				(2.70)		密 良好	灰白 N 7/ N 6/	灰白 N 7/ N 6/	同心四ヶ タキ後 横ハケ	同心四ヶ タキ後 横ハケ	全体		
1221 223 40号壙	周溝	須恵器	环蓋	(12.00)	(3.40)				密 良好	灰 N 6/	灰 N 6/	回転ナダ	回転ナダ 輪廻割り	口部		
1222 223 40号壙	周溝	須恵器	环蓋	(10.80)	(2.40)				密 良好	青灰 SB 6/1	青灰 SB 6/1	回転ナダ	回転ナダ 輪廻割り	口部		
1223 223 40号壙	周溝	須恵器	环蓋	(9.10)	(3.05)				密 良好	灰白 N 7/	灰白 N 7/	回転ナダ	回転ナダ 輪廻割り	口部		
1224 223 40号壙	周溝	須恵器	环蓋				(1.80)		密 良好	灰白 N 7/	灰白 10YR 7/4 SY 4/2	回転ナダ	回転ナダ 輪廻割り	天井部	自然釉 窓記号	
1225 223 40号壙	周溝	須恵器	环蓋				(2.00)		密 良好	灰 N 6/	灰 N 6/	回転ナダ	回転ナダ 輪廻割り	天井部	窓記号	
1226 223 40号壙	周溝	須恵器	环身	(9.30)	(2.40)				密 良好	灰白 N 6/	灰白 N 6/	回転ナダ	回転ナダ 輪廻割り	口部	自然釉	
1227 223 40号壙	石室	須恵器	环身	(11.30)	(4.00)	(13.50)			密 良好	灰 N 6/	灰 N 6/	回転ナダ	回転ナダ 輪廻割り	口部		
1228 223 40号壙	周溝	須恵器	环身	(10.00)	(2.60)	(12.20)			密 良好	灰白 N 7/ N 6/	灰 N 5/	回転ナダ	回転ナダ 輪廻割り	口部		
1229 223 40号壙	石室	須恵器	环身	(7.80)			(10.20)		密 良好	暗青灰 SPB 4/1	暗青灰 SPB 3/1	回転ナダ	回転ナダ 輪廻割り	口部		
1230 223 40号壙	周溝	須恵器	环身				(1.40)		(4.90) 密 良好	灰白 N 8/	灰白 N 7/ 灰 N 6/中間	回転ナダ	回転ナダ 輪廻割り	底部	窓記号	
1231 223 40号壙	周溝	須恵器	壺						密 良好	灰白 SY 7/1	灰白 SY 7/1	回転ナダ	回転ナダ 輪廻割り	口部	底部~ 体部 下半部	
1232 223 40号壙	石室	須恵器	無蓋高杯	(10.80)	(4.20)				密 良好	灰白 N 5/0	灰白 N 5/0	回転ナダ	回転ナダ 輪廻割り	口部	沈縞	
1233 223 40号壙	石室	須恵器	壺	(19.70)	(9.20)				密 良好	灰白 N 7/	灰白 N 6/	回転ナダ	回転ナダ 輪廻割り	口部	外面部状文	
1234 223 40号壙	石室	須恵器	横櫛				(23.00)		密 良好	灰白 N 7/	灰白 N 6/	タタキ後 横ハケ	タタキ後 横ハケ	口部~ 底部	内面當て具痕	

成物 番号	種類 名	出土 位置	種類	器種	口径	湯高	底径	底径	胎土	焼成	内面色調	外面部調	内面調整	外面部調	残存 部位	備考
1235 223 40号墳	漆器	須恵器	手持器	持手器	(21.20)	(8.15)	(24.20)		密	良好	灰白 SY 7/1	灰 SY 6/1	回転ナダ	回転ナダ	口綫部 外底面削除 底内タキ目	ハケ目 全体削除 底内タキ目
1236 223 40号墳	埴丘外	須恵器	器台			(4.95)			密	良好	灰白 SY 7/1	灰白 SY 7/1	回転ナダ	回転ナダ	脚部上	脚部回転文 長方形透孔
1237 223 40号墳	石室	須恵器	長颈壺			(12.05)	12.7 颈部 5.8		密	良好	青っぽい N 7/	灰白 N 7/	回転ナダ	回転ナダ 回転蓋削り	頭部 体部 底部残存	頭部 体部 底部残存
1238 223 40号墳	石室	土師器	高环		16.45	19.40		脚部 14.35	密	良好	に赤い碧 7.5VR 7/4	に赤い碧 7.5VR 7/4	範削り	範削 範ナダ? 範ナダ?	口綫部 脚部 一部 結合部	口綫部 脚部 一部 結合部
1245 227 41号墳	石室	須恵器	坏身		(8.70)	(2.00)	(10.60)		密	良好	灰 N 8/	灰 N 4/	回転ナダ	回転ナダ	口綫部	口綫部
1246 227 41号墳	石室	須恵器	無蓋坏身		(13.80)	4.90			密	良好	灰白 2.5Y 7/1	灰白 2.5Y 7/1	回転ナダ	回転ナダ 回転蓋削り	坏部	自然施 口綫部同み
1247 227 41号墳	石室	須恵器	無蓋坏身		(15.20)	(3.45)			密	良好	灰白 N 7/	灰 N 6/	回転ナダ	回転ナダ 回転蓋削り	口綫部	口綫部
1248 227 41号墳	石室	須恵器	高环		(6.50)			脚部 (9.8)	密	良好	灰白 2.5Y 7/1	灰白 2.5Y 7/1	回転ナダ	回転ナダ	脚部	長方通孔
1249 227 41号墳	石室	須恵器	高环		(1.70)			脚部 (9.5)	密	良好	灰 SY 6/1	灰 SY 6/1	回転ナダ	回転ナダ	脚部	自然施
1250 227 41号墳	石室	須恵器	横瓶		(22.50)				密	良好	青灰 5B 6/1	灰 10Y 6/1	指削痕 後力キ目	指削痕 後力キ目	体部	
1264 233 42号墳	埴丘	須恵器	坏身			8.70	(1.70)		密	良好	灰 N 6/	灰 N 6/	回転ナダ	回転ナダ	口綫部	
1265 233 42号墳	埴丘	須恵器	坏身		(8.50)	(1.75)	(10.50)		密	良好	灰 N 6/	灰 N 6/	回転ナダ	回転ナダ 回転蓋削り	口綫部	
1266 233 42号墳	墓道	須恵器	坏身		(1.60)			(6.60)	密	良好	灰白 N 8/	灰白 N 8/	回転ナダ	回転ナダ 回転蓋削り	底部	
1267 233 42号墳	表土	須恵器	坏身		(1.75)			(6.00)	密	良好	灰 N 6/	灰 N 6/	回転ナダ	回転ナダ	対記号	
1268 233 42号墳	墓道	須恵器	フラスコ 形瓶		(13.15)				密	良好	灰白 5Y 1/1	灰 7.5Y 5/1			体部	自然施
1269 233 42号墳	周溝外	須恵器	高瓶		(4.70)			横合部 (8.7)	密	良好	灰白 7.5Y 7/1	灰白 7.5Y 7/1	回転ナダ	回転ナダ	脚部上	丸孔? 窓状工具痕?
1275 235 43号墳	北側 表土	須恵器	瓶頸		(5.80)	(4.20)			密	良好	灰黄 2.5Y 7/2	灰肉 2.5Y 7/1	回転ナダ	回転ナダ	口綫部	自然施
1276 237 44号墳	石室	須恵器	坏盖		(8.80)	(2.60)			密	良好	灰 N 6/	灰 N 5/	回転ナダ	回転ナダ 回転蓋削り	口綫部	
1277 237 44号墳	石室	須恵器	高环		(4.20)			脚部 (12.8)	密	良好	灰白 SY 7/1	灰白 SY 7/1	回転ナダ	回転ナダ	脚部	自然施 長方通孔
1279 243 61号墳	埴丘	須恵器	瓶頸		(3.25)				密	良好	灰白 N 7/	回転ナダ	回転ナダ	回転ナダ	頭部	
1286 243 61号墳	石室	須恵器	フラスコ 形瓶		9.80	27.30	9.8 5.8 体重 19.5		密	良好	灰白 SY 7/1	灰白 SY 7/1	回転ナダ	回転ナダ 回転蓋削り	ほほ 完品品	シボリ施 抜け板 自然施
1281 243 61号墳	石室	上師器	脚付蓋		11.49	3.89			密	良好	明治赤 SYR 5/8	明治赤 SYR 5/8	指ナサ後 腰位蓋磨 き	指ナサ後 腰位蓋磨 き	ほほ 完品品	赤系 内面削位、腰 位施き痕 腰位斜糸斜 磨痕
1282 243 61号墳	石室	土師器	脚付蓋		11.40	14.30			密	良好	緑 7.5Y 6/6/3 7.5Y 7/8	緑 SYR 6/6	指ナサ後 腰位蓋磨 き	指ナサ後 腰位蓋磨 き	ほほ 完品品	先施位 (合母)全 周磨痕
1283 244 2区 表探	直立壺	坏身	(8.40)	(2.85)					密	良好	灰 SY 6/1	灰 SY 6/1	回転ナダ	回転ナダ 回転蓋削り	口綫部	
1284 244 2区 表探	表土	須恵器	坏身		(2.25)			(3.20)	密	良好	に赤い碧 2.5Y 6/3	奥灰 2.5Y 6/3	回転ナダ	回転ナダ 回転蓋削り	底部	自然施
1285 244 2区 表探	表土	須恵器	坏身		(3.00)			(4.30)	密	良好	灰黄 2.5Y 7/2	灰黄 2.5Y 7/2	回転ナダ	回転ナダ 回転蓋削り	底部	
1286 244 2区 表探	表土	須恵器	坏身		(1.60)			(6.40)	密	良好	灰白 2.5Y 7/1	灰白 2.5Y 7/1	回転ナダ	回転ナダ	底部	
1287 244 2区 表探	表土	須恵器	瓶頸		(6.00)				密	良好	黄灰 2.5Y 7/1	黄灰 2.5Y 6/1	回転ナダ ナダ	回転ナダ	頭部	自然施 底板
1288 244 2区 表探	須恵器	長颈壺			(5.00)			脚部 (4.2)	密	良好	灰白 SY 7/1	灰白 SY 7/1	回転ナダ	回転ナダ	頭部	
1289 244 2区 表探	須恵器	長颈壺			(2.55)				密	良好	灰白 2.5Y 7/1	灰白 2.5Y 7/1	回転ナダ	回転ナダ	肩部	施位 自然施
1290 244 2区 表探	表土	須恵器	短颈壺		(3.95)	11.3 11.0			密	良好	灰 N 6/	灰 N 6/	回転ナダ	回転ナダ 回転蓋削り	肩部	丸脚状突起 自然施
1291 244 2区 表探	表土	須恵器	蓋		(3.45)			(3.90)	密	良好	灰 N 6/	灰 N 5/	回転ナダ	回転ナダ 回転蓋削り	底部	自然施 底板

遺物番号	絆縫名	出土位置	種類	器種	口径	器高	最大径	底径	胎土	焼成	内面色調	外面色調	内面調査	外面部調査	残存部位	備考
1292 244	2区 表探	須恵器	平瓶	(4.45)	(4.16)			密	良好	灰白 2.5Y 7/1	灰白 2.5Y 7/1	回転ナダ	回転ナダ	口縁部	沈継	
1293 244	2区 表探	須恵器	高环		(2.05)			脚部 (10.0)	密	良好	灰白 2.5Y 7/1	灰白 2.5Y 7/1	回転ナダ	回転ナダ	脚部	透光(外から 内工具) 長方形透孔 沈継?
1294 244	2区 表探	須恵器	フラスコ形瓶		(7.75)			密	良好	灰 N 6/	灰 N 6/		回転ナダ 回転蓋置り	体部	笠冠守	
1295 244	2区 表探	須恵器	フラスコ形瓶		(6.90)			密	良好	灰白 5Y 8/1	灰白 5Y 8/1	回転ナダ	回転ナダ 回転蓋剥り ナダ	体部	沈継	
1296 244	2区 表探	灰釉陶器	碗		(2.10)			密	良好	灰白 2.5Y 7/1	灰黄 2.5Y 7/2	回転ナダ	回転ナダ	口縁部		
1297 244	2区 表探	灰釉陶器	碗		(1.20)		(6.90)	密	良好	灰白 2.5Y 8/1	灰白 2.5Y 8/2	回転ナダ	回転ナダ ナダ	底部	貼り付け高台 輪廻引き底 ハンドペイント	
1298 244	2区 表探	土師器	环		(2.80)		(9.30)	密	良好	灰白 2.5Y 8/2	灰 N 4/	回転ナダ	摩滅	底部	貼り付け高台	
1299 257 47号墳	石灰	須恵器	环蓋	11.20	5.50			密	良好	灰白 N 7/	灰白 N 7/	回転ナダ	回転ナダ 回転蓋剥り	ほぼ 完品	凹線文	
1300 257 47号墳	石灰	須恵器	环蓋	11.10	5.90			密	良好	灰白 N 7/	灰白 N 7/	回転ナダ	回転ナダ 回転蓋剥り	完品	筒體文	
1301 257 47号墳	周溝	須恵器	环蓋	11.10	2.90			密	良好	灰白 N 7/	灰白 N 7/	回転ナダ	回転ナダ 回転蓋剥り	全体		
1302 257 47号墳	石灰	須恵器	环蓋	(11.50)	(2.90)			密	良好	灰 N 6/	灰白 N 7/	回転ナダ	回転ナダ 回転蓋剥り	全体		
1303 257 47号墳	石灰	須恵器	环蓋	(8.80)	(2.40)			密	良好	灰白 N 7/	灰白 N 7/	回転ナダ	回転ナダ 回転蓋剥り	全体	受け漆	
1304 257 47号墳	周溝	須恵器	环身		(1.55)		4.30	密	良好	灰白 N 7/	灰 N 6/	回転ナダ	回転蓋剥り	底部~	体部	
1305 257 47号墳	周溝	須恵器	环身		(1.40)		(8.10)	密	良好	灰白 N 7/	灰白 N 7/	回転ナダ	回転ナダ 回転蓋剥り	底部	自然釉	
1306 257 47号墳	石灰	須恵器	短腹壺	6.30	6.40			密	良好	灰白 7.5Y 6/1	灰白 N 7/	回転ナダ	回転ナダ 回転蓋剥り	ほぼ 完品		
1307 257 47号墳	石灰	須恵器	短腹壺	(8.60)	(8.40)			密	良好	灰白 N 7/	灰白 N 7/	回転ナダ	回転ナダ	口縁部	自然釉	
1308 257 47号墳	周溝	須恵器	短腹壺	6.40	7.25		2.70	密	良好	灰 N 6/	灰 N 6/	回転ナダ	回転ナダ 回転蓋剥り	全体 口縁部 残存	自然釉	
1309 257 47号墳	周溝	須恵器	短腹壺	6.70	(6.45)			密	良好	灰 N 6/	灰 N 6/	回転ナダ	回転ナダ 回転蓋剥り	口縁部 肩部	自然釉	
1310 257 47号墳	周溝	須恵器	短腹壺	6.40	(4.40)			密	良好	灰 N 6/	灰白 N 7/	回転ナダ	回転ナダ 回転蓋剥り	口縁部 肩部	重み大きい	
1311 257 47号墳	石灰	須恵器	短腹壺	(8.10)	(3.00)			密	良好	灰白 N 7/	灰 N 6/	回転ナダ	回転ナダ	口縁部		
1312 257 47号墳	周溝	須恵器	短腹壺		(3.40)	体部 (11.2)		密	良好	灰白 N 7/	灰白 N 7/	回転ナダ	回転ナダ 回転蓋剥り	体部 上半部		
1313 257 47号墳	周溝	須恵器	短腹壺	(5.50)		体部 (12.9)		密	良好	黄灰 2.5Y 6/1	黄灰 2.5Y 6/1	回転ナダ	回転ナダ 回転蓋剥り?	体部	自然釉 浮文	
1314 257 47号墳	石灰	須恵器	無蓋高环	(13.60)	(4.90)			密	良好	灰白 N 7/	灰白 N 7/	回転ナダ	回転ナダ	口縁部		
1315 257 47号墳	石灰	須恵器	無蓋高环	(16.00)	(4.65)			密	良好	灰 N 6/	灰 N 6/	回転ナダ	回転ナダ	口縁部	自然釉 沈継	
1316 257 47号墳	石灰	須恵器	無蓋高环	(15.00)	(7.40)			密	良好	灰 7.5Y 6/1	灰白 N 7/	回転ナダ	回転ナダ	口縁部	自然釉	
1317 257 47号墳	石灰	須恵器	無蓋高环	(19.60)	(4.20)			密	良好	灰 N 6/	灰白 N 7/	回転ナダ	回転ナダ	口縁部	自然釉	
1318 257 47号墳	石灰	須恵器	高环		(1.50)	脚部 (10.2)	密	良好	灰白 N 7/	灰白 N 7/	回転ナダ	回転ナダ	脚部			
1319 257 47号墳	石灰	須恵器	高环		(2.10)	脚部 (12.4)	密	良好	灰 N 6/	灰 N 6/	回転ナダ	回転ナダ	脚部	自然釉		
1320 257 47号墳	石灰	須恵器	高环		(3.00)	脚部 (12.8)	密	良好	灰 N 7/	灰白 N 7/	回転ナダ	回転ナダ	脚部	自然釉 浮文		
1321 257 47号墳	石灰	須恵器	高环		(3.10)	脚部 (13.0)	密	良好	灰白 N 7/	灰白 N 7/	回転ナダ	回転ナダ	脚部			
1322 257 47号墳	石灰	須恵器	無蓋高环	14.25	11.10	脚部 9.45	密	良好	灰 N 6/	灰 N 6/	回転ナダ	回転ナダ 回転蓋剥り ナダ	完品	沈継 適合底		
1323 257 47号墳	石灰	須恵器	無蓋高环	13.80	11.60	脚部 9.65	密	良好	灰 5Y 6/1	灰 5Y 6/1	回転ナダ	回転ナダ 回転蓋剥り ナダ	ほぼ 完品	自然釉 沈継 適合底 脚部		
1324 257 47号墳	石灰	須恵器	無蓋高环	17.40	16.80	脚部 14.2	密	良好	灰 5Y 6/1	灰 5Y 6/1	回転ナダ	回転ナダ 回転蓋剥り ナダ	脚部 口縁部	自然釉 適合底		

測定番号	採集場所	山土位相	種類	形態	口径	周長	最大径	高さ	動土	発成	内面色調	外面色調	内面調査	外面調査	残存部位	備考
1325 257 47号場	石室	須恵器	無蓋灰坏	16.15	15.50		脚部 13.8	密	良好	灰白 SY 7/1	灰白 SY 7/1	回転ナダ	回転ナダ 回転蓋削り	完形品	自然釉 シボリ目 吹墨 方形透孔	
1326 257 47号場	石室	須恵器	無蓋灰坏	13.70	12.69		脚部 10.25	密	良好	灰 N 6/	灰 N 6/	回転ナダ	回転ナダ	环部 脚部	シボリ目	
1327 258 47号場	周溝	須恵器	蓋	5.80	4.10	溝み 1.7		密	良好	灰白 N 7/	灰黄 2.5Y 6/2	回転ナダ	回転ナダ 回転蓋削りナダ	全体	自然釉	
1328 258 47号場	周溝	須恵器	蓋	(2.45)		溝み 1.6		密	良好	灰白 N 7/	灰 N 6/	回転ナダ	回転ナダ 回転蓋削り	溝み		
1329 258 47号場	周溝	須恵器	蓋	8.10	2.95	10.6 溝み 2.45		密	良好	灰白 N 7/	灰白 N 7/	回転ナダ	回転ナダ 回転蓋削り	金体	自然釉 縦擦剥点文 穿孔	
1330 258 47号場	周溝	須恵器	蓋	(7.70)	(1.65)	(10.10)		密	良好	灰白 N 7/	灰白 N 7/	回転ナダ	回転ナダ 回転蓋削り	全体	縦擦剥点文 穿孔	
1331 258 47号場	周溝	須恵器	蓋	(8.00)	(1.55)	(11.20)		密	良好	灰白 N 7/	灰白 N 7/	回転ナダ	回転ナダ	II型穿孔	自然釉 縦擦剥点文 穿孔	
1332 258 47号場	周溝	須恵器	平瓶	8.15	(8.40)	垂耳 5.9		密	良好	灰白 10YR 7/1	灰白 10YR 7/1	回転ナダ	回転ナダ	口部部	自然釉	
1333 258 47号場	周溝	須恵器	垂耳瓶	6.20	(6.95)			密	良好	灰 N 5/	灰 N 5/	回転ナダ	回転ナダ	口指部	水滴き旗 吹墨	
1334 258 47号場	周溝	須恵器	垂耳瓶	5.60	(3.50)			密	良好	灰白 N 7/	灰白 N 7/	回転ナダ	回転ナダ	口部		
1335 258 47号場	周溝	須恵器	垂耳口詰瓶	6.20	(1.45)			密	良好	灰白 N 7/	灰白 N 7/	回転ナダ	回転ナダ	口径部	自然釉	
1336 258 47号場	周溝	須恵器	半瓶	7.10	(12.60)	牛津 (17.5)		密	良好	灰白 5Y 8/1	灰白 5Y 8/1	回転ナダ	回転ナダ 回転蓋削り	口部部 全体	自然釉	
1337 258 47号場	石室	須恵器	平瓶		(10.50)		体部 (17.0)	密	良好	灰白 N 7/	灰白 N 7/	回転ナダ	回転ナダ 回転蓋削り	体部	自然釉	
1338 258 47号場	周溝	須恵器	平瓶		(5.50)		体部 12.4	密	良好	灰白 5Y 7/1	灰白 5Y 7/1	回転ナダ	回転ナダ 回転蓋削り	体部		
1339 258 47号場	周溝	須恵器	瓶		(3.10)			密	良好	灰 N 6/	灰 N 6/	回転ナダ	回転ナダ 回転蓋削り	体部 ～底部		
1340 258 47号場	須恵器	瓶	(10.80)	(3.50)				密	良好	灰白 N 7/	灰白 7.5Y 7/1	回転ナダ	回転ナダ 回転蓋削り	体部 ～底部		
1341 258 47号場	石室	須恵器	壺		(7.80)	体部 (17.7)		密	良好	灰白 N 7/	灰白 N 6/	回転ナダ	回転ナダ 回転蓋削り	体部	沈紙	
1342 258 47号場	須丘	須恵器	瓶		(11.60)	(3.30)		密	良好	灰白 N 7/	灰白 N 6/	回転ナダ	回転ナダ 回転蓋削り	底部		
1343 258 47号場	周溝	須恵器	持手長颈壺		(7.70)	26.60	体部 15.1 合掌 10.7	密	良好	灰白 5Y 7/1	灰白 N 6/	回転ナダ	回転ナダ 回転蓋削り	口部部 ～脚部 合掌	口部部 ～脚部 合掌 シボリ模	
1344 258 47号場	周溝	須恵器	脚付長颈壺		8.90	25.70	体部 16.6 合掌 11.5	密	良好	灰白 7.5Y 7/1	灰白 7.5Y 7/1	回転ナダ	回転ナダ 蓬頭削り	ほぼ 完形品	吹墨 シボリ底 模様	
1345 258 47号場	石室	須恵器	碗	(14.60)	(4.30)			密	良好	灰白 N 7/	灰白 N 7/	回転ナダ	回転ナダ 魚骨切り後 回転ナダ	底部	貼付け高台 鉢	
1350 264 48号場	心室	須恵器	坪壠	16.30	4.50			密	良好	青灰 SB 5/1	灰 N 5/	回転ナダ	回転ナダ 回転蓋削り	完形品		
1351 264 48号場	石室	須恵器	坪壠	11.20	3.90			密	良好	青灰 SB 5/1	灰 N 5/	回転ナダ	回転ナダ 回転蓋削り	ほぼ 完形品	四輪1条 算記号	
1352 264 48号場	石室	須恵器	坪壠	16.90	3.90			密	良好	青灰 SB 5/1	灰 N 5/	回転ナダ	回転ナダ 回転蓋削り	ほぼ 完形品	四輪1条 算記号	
1353 264 48号場	石室	須恵器	坪壠	8.90	4.60			密	良好	青灰 SB 5/1	灰 N 5/	回転ナダ	回転ナダ 回転蓋削り	ほぼ 完形品	四輪品 算記号	
1354 264 48号場	石室	須恵器	坪壠	10.10	4.00			密	良好	青灰 SB 5/1	灰 N 5/	回転ナダ	回転ナダ 回転蓋削り	ほぼ 完形品	四輪品 算記号	
1355 264 48号場	石室	須恵器	坪壠	9.40	3.80			密	良好	青灰 SB 5/1	灰 N 5/	回転ナダ	回転ナダ 回転蓋削り	ほぼ 完形品	四輪品 算記号	
1356 264 48号場	石室	須恵器	坪壠	4.95	14.35	体部 14.9		密	良好	灰白 7.5Y 7/1	灰白 7.5Y 7/1	回転ナダ	回転ナダ 回転蓋削り ナダ	全体	算記号	
1357 264 48号場	石室	須恵器	坪壠	9.40	3.80			密	良好	灰白 SB 5/1	灰 N 5/	回転ナダ	回転ナダ 回転蓋削り	口部部 ～体部	算記号	
1371 270 49号場	石室	須恵器	坪壠	9.40	3.80			密	良好	灰 N 6/	青灰 SB 6/1	回転ナダ	回転ナダ 回転蓋削り	全体	算記号	
1372 270 49号場	石室	須恵器	坪壠	(9.30)	(3.90)			密	良好	灰 N 6/	青灰 SB 6/1	回転ナダ	回転ナダ 回転蓋削り	口部部 ～体部	算記号	
1373 270 49号場	墓室	須恵器	坪壠	9.80	3.10			密	良好	灰白 N 7/	灰白 N 7/	回転ナダ	回転ナダ 回転蓋削り ナダ	ほぼ 完形品		

遺物番号	神社名	出土地点	出土位置	種類	器種	口径	底高	最大径	高径	胎土	焼成	内面色調	外面部調	内面調査	外面部調査	残存部位	備考
1374	270 49号塙	石室	須恵器	环身		10.20	3.40			密	良好	青灰 SB 5/1	灰 N 5/	回転ナデ	回転箆削り	ほぼ 完品	
1375	270 49号塙	石室	須恵器	环身		10.20	3.90			密	良好	灰白 N 7/	灰白 N 7/	回転ナデ	回転ナデ 箆削り	ほぼ 完品	裏記号
1376	270 49号塙	石室	須恵器	环身		(9.30)	3.00	10.90		密	良好	灰白 N 7/	灰白 N 7/	回転ナデ	回転ナデ 箆削り	口部	
1377	270 49号塙	石室	須恵器	环身		(5.40)	(1.90)	(10.00)		密	良好	灰 N 6/	灰 N 6/	回転ナデ	回転ナデ	口部	
1378	270 49号塙	石室	須恵器	环身		(8.00)	(1.70)	(10.20)		密	良好	青オーブ 2.SGY 7/2	灰 2.SGY 7/1	回転ナデ	回転ナデ	口部	
1379	270 49号塙	石室	須恵器	脚付盤		(7.50)	(3.80)			密	良好	灰白 N 7/	灰白 N 7/	回転ナデ	回転ナデ	口部 ～体部	
1380	270 49号塙	石室	須恵器	脚付盤		(3.50)		(7.9)		密	良好	灰白 N 7/	灰白 N 7/	回転ナデ	回転ナデ 箆削り	体部	
1381	270 49号塙	石室	須恵器	無蓋高环		13.60	5.20			密	良好	灰白 N 7/	灰白 N 7/	回転ナデ	回転ナデ	全体	
1382	270 49号塙	墓道	土師器	环		(10.20)	(3.10)			密	良好	灰 7.SYR 7/6	灰 7.SYR 7/6	模倣ハケ 目	模倣ハケ 目	口縁部	
1383	279 51号塙	表土	須恵器	フラスコ 形瓶		(9.75)				密	良好	灰 N 6/	灰 N 6/	回転ナデ	回転ナデ 箆削り	体部	自然釉
1384	279 51号塙	石室	須恵器	瓶類		(2.60)				密	良好	灰 N 6/	灰 N 6/	回転ナデ	回転ナデ	頸部	
1385	279 51号塙	底込め	須恵器	瓶類		(1.55)				密	良好	灰 N 6/	灰白 N 8/	回転ナデ	回転ナデ	肩部	自然釉
1386	279 51号塙	表土	須恵器	瓶類		(5.70)		外部 (14.2)		密	良好	灰白 5Y 7/1	灰白 5Y 7/1	回転ナデ	回転箆削り	体部	
1389	284 52号塙	石室	須恵器	环身		(8.90)	(3.00)	(11.30)		密	良好	灰 N 6/	灰 N 6/	回転ナデ	回転ナデ	口縁部	
1390	284 52号塙	石室	須恵器	环身		(2.30)		(11.60)		密	良好	灰 N 6/	灰 N 4/	回転ナデ	回転ナデ	体部	
1391	284 52号塙	石室	須恵器	無蓋高环		(16.00)	(4.70)			密	良好	灰白 N 8/	回転ナデ	回転ナデ	口縁部 ～体部		
1392	284 52号塙	石室	山茶碗	輪花碗		(17.20)	(5.10)			やや 粗	良好	灰白 2.SY 8/2	灰白 2.SY 8/1	回転ナデ	回転ナデ	口縁部	自然釉
1393	284 52号塙	石室	灰釉陶器	壺		(5.10)		外部下 (33.4)		密	良好	灰白 2.SY 8/4	灰白 2.SY 8/4	板ナデ	板ナデ	体部下 半	
1394	288 53号塙	石室	須恵器	环蓋		11.10	4.20			密	良好	灰白 N 7/	灰白 N 6/	回転ナデ	回転ナデ 箆削り	全体	裏記号
1395	288 53号塙	混乱	須恵器	环瓶		10.30	3.10			密	良好	灰白 N 7/	灰白 N 7/	回転ナデ	回転ナデ 箆削り	注乱	完品
1396	288 53号塙	石室	須恵器	环蓋		(13.60)	(1.20)			密	良好?	灰 N 4/	灰 N 4/	回転ナデ	回転ナデ 箆削り	口縁部	
1397	288 53号塙	攪乱	須恵器	环身		(10.00)	(3.70)			密	良好	灰白 N 7/	灰白 N 7/	回転ナデ	回転ナデ	口縁部 ～体部	
1398	288 53号塙	石室	須恵器	环身		(9.30)	(2.50)			密	良好	灰白 N 7/	灰白 N 7/	回転ナデ	回転ナデ	口縁部	
1399	288 53号塙	石室	須恵器	無蓋高环		(10.00)	(3.40)			密	良好	灰白 N 7/	灰 N 4/	回転ナデ	回転ナデ	口縁部	
1400	288 53号塙	石室	須恵器	無蓋高环		(10.20)	(3.40)			密	良好	灰 N 6/	灰 N 4/	回転ナデ	回転ナデ	口縁部	
1401	288 53号塙	混乱	須恵器	無蓋高环		(7.60)		脚部 8.15		密	良好	灰白 5Y 7/1	灰白 5Y 7/1	回転ナデ	回転ナデ	体部 脚部	
1402	288 53号塙	石室	須恵器	フランコ 形瓶						密	良好	灰白 SY 7/1	灰白 SY 7/1	回転ナデ	回転ナデ 箆削り	体部	
1403	288 53号塙	混乱	須恵器	横瓶		(5.15)		体部 (12.2)		密	良好	灰白 N 7/	灰 N 4/	回転ナデ	回転ナデ 箆削り	口縁部	
1404	288 53号塙	石室	須恵器	横瓶or 提瓶?						密	良好	7.SY 7/1	灰 N 5/	回転ナデ	回転ナデ	肩部	カキ目?
1405	288 53号塙	石室	須恵器	フランコ 形瓶						密	良好	7.SY 7/1	灰白 7.SY 7/1	回転ナデ	回転ナデ 箆削り	体部	
1406	288 53号塙	石室	須恵器	加頭壺		(8.30)	5.25		4.60	密	良好	灰白 N 7/	灰 N 6/	回転ナデ	回転ナデ 箆削り	全体	口縁部歪み
1407	288 53号塙	石室	土師器	环		(14.00)	(2.10)			密	良好	浅黄褐 10YR 8/3	浅黄褐 10YR 8/3	摩滅	摩滅	口縁部	外面ハケ
1408	288 53号塙	混乱	土師器	环		(16.00)	(3.80)			密	良好?	明赤褐 2.5YR 5/6	明赤褐 2.5YR 7/4	摩滅	摩滅	口縁部 全体	内外面剥離
1409	288 53号塙	混乱	土師器	無蓋高环		(16.00)	(13.20)			密	良好?	淡黄褐 10YR 8/3	淡黄褐 10YR 8/3	摩滅	摩滅	全体	
1423	295 54号塙	石室	須恵器	無蓋高环		16.30	13.15			密	良好	灰白 10Y 7/1	灰白 10Y 7/1	回転ナデ	回転ナデ 箆削り	脚部 脚上部	沈縫 三角形透孔
1424	295 54号塙	石室	須恵器	無蓋高环		16.30	13.15			密	良好	灰白 N 7/	灰白 N 7/	回転ナデ	回転ナデ 箆削り	全体	

通号	標記号	種類名	出土位置	種類	原種	口径	底高	最大径	内深	胎土	施成	内面色調	外面部調	焼存部位	備考	
1425	295	54号壙	石室	須恵器	平瓶	7.45	17.65	15.6	密	良好	灰白 5Y 7/1	灰白 5Y 7/1	回転ナダ	回転ナダ ハク伏工具 回転施成	焼松任原 完品 自然施成 施記号	
1426	295	54号壙	石室	灰釉陶器	碗	12.60	4.30		密	良好	灰白	灰白	回転ナダ	回転ナダ	ほぼ 荒形調	
1427	295	54号壙	石室	土師質土器	カワラケ	(12.80)	2.25		(6.60)	密	不良	10YR 8/2 10YR 8/4	10YR 8/4 10YR 8/4	摩滅	摩滅	全体
1428	295	54号壙	石室	土師質土器	カワラケ		(1.55)		5.80	密	不良?	10YR 8/4 10YR 8/4	10YR 8/4 10YR 8/4	摩滅	摩滅	底部
1429	304	55号壙	通道	須恵器	环瓶	(10.20)	4.60		密	良好	灰 N 6/	灰 N 6/	回転ナダ	回転ナダ 回転施成	全体 天井部指痕	
1430	304	55号壙	通道	須恵器	坪皿	(9.30)	(4.36)		密	良好	灰白 N 7/	灰白 N 7/	回転ナダ	回転ナダ 回転施成	口部 ~体部	
1431	304	55号壙	通道	須恵器	环瓶	(9.10)	(3.00)		密	良好	灰 N 6/	灰 N 6/	回転ナダ	回転ナダ	口部部	
1432	304	55号壙	通道	須恵器	坪皿	10.40	3.50		密	不良	灰白 N 8/	灰白 N 4/	回転ナダ	回転ナダ 回転施成	全体 周縁	
1433	304	55号壙	通道	須恵器	坪皿	(9.20)	(3.60)		密	良好	青灰 5B 6/1	青灰 5B 6/1	回転ナダ	回転ナダ 回転施成	口部部 ~体部	
1434	304	55号壙	通道	須恵器	环瓶	(11.00)	(3.55)		密	良好	青灰 5B 6/1	灰 N 5/	回転ナダ	回転ナダ 回転施成	口部部	
1435	304	55号壙	通道	須恵器	坪皿	10.50	4.00		密	良好	青灰 5B 6/1	青灰 5B 5/1	回転ナダ	回転ナダ 回転施成	全体 施記号	
1436	304	55号壙	通道	須恵器	环瓶	(8.90)	(2.10)		密	良好	灰白 N 8/	灰白 N 7/	回転ナダ	回転ナダ 回転施成 發光ナダ	体部 周凸あり	
1437	304	55号壙	通道	須恵器	环瓶	(9.80)	(2.10)		密	良好	灰 N 6/	灰 N 4/	摩滅	摩滅 ミガキ	口縁部	
1438	304	55号壙	通道	須恵器	坪皿	10.20	4.00		密	良好	灰白 N 7/	灰白 5Y 7/1	回転ナダ	回転ナダ 回転施成	ほぼ 完品	
1439	304	55号壙	石室	須恵器	坪皿	(1.60)	3.8		密	良好	灰白 N 7/	灰白 N 8/	回転ナダ	回転ナダ	筒み身 自然施成	
1440	304	55号壙	通道	須恵器	环瓶	(8.40)	(1.80)	(11.20)	密	良好	灰白 5Y 7/1	灰白 5Y 7/1	回転ナダ	回転ナダ	口部部	
1441	304	55号壙	通道	須恵器	坪皿	(11.50)	(3.40)		密	良好	灰白 2.5Y 8/1	灰白 2.5Y 8/1	回転ナダ	回転ナダ 回転施成	口縁部 ~体部	
1442	304	55号壙	通道	須恵器	环瓶	11.50	3.60		密	良好	灰白 2.5Y 8/1	灰白 N 7/	回転ナダ	回転ナダ 回転施成	ほぼ 完品	
1443	304	55号壙	通道	須恵器	环瓶	11.70	3.20		密	良好	灰白 N 7/	灰白 N 7/	回転ナダ	回転ナダ 回転施成	ほぼ 完品	
1444	304	55号壙	通道	須恵器	坪皿	11.80	3.10		密	良好	灰白 2.5Y 8/1	灰白 2.5Y 8/2	回転ナダ	回転ナダ 回転施成	完品 自然施成	
1445	304	55号壙	通道	須恵器	坪皿	9.40	3.75	12.00	4.90	密	良好	青灰 5B 6/1	回転ナダ	回転ナダ 回転施成	全体 施記号	
1446	304	55号壙	通道	須恵器	坪皿	(8.80)	3.55		4.70	南	良好	青灰 5B 6/1	回転ナダ	回転ナダ 回転施成	全体 口縁部 施記号	
1447	304	55号壙	通道	須恵器	坪皿	(3.45)	(11.10)	3.70	密	良好	灰 N 5/	灰 N 5/	回転ナダ	回転ナダ 回転施成	全体 施記号	
1448	304	55号壙	通道	須恵器	坪皿	11.30	3.70		密	良好	青灰 5B 5/1	青灰 5B 5/1	回転ナダ	回転ナダ 回転施成	ほぼ 施記号	
1449	304	55号壙	通道	須恵器	坪皿	(10.10)	(2.75)	(11.70)	密	良好	灰白 5Y 8/1	灰白 5Y 7/1	回転ナダ	回転ナダ 回転施成	口縁部	
1450	304	55号壙	通道	須恵器	坪皿	(9.50)	(1.70)	(11.00)	密	良好	灰白 5Y 8/1	灰白 5Y 8/1	回転ナダ	回転ナダ	口縁部 摩滅	
1451	304	55号壙	通道	須恵器	坪皿	(10.90)	(2.10)	(12.50)	密	良好	灰白 N 8/	灰 N 4/	回転ナダ	回転ナダ	口縁部 摩滅	
1452	304	55号壙	須恵器 復元上	須恵器	坪皿	(9.50)	(3.20)	11.40	密	良好	灰白 N 7/	灰 N 6/	回転ナダ	回転ナダ 回転施成	口縁部 ~体部	
1453	304	55号壙	通道	須恵器	坪皿	(11.20)	(2.00)		密	良好	灰 N 6/	灰 N 6/	回転ナダ	回転ナダ	口縁部	
1454	304	55号壙	通道	須恵器	坪皿	(9.70)	(2.35)	(11.40)	密	不良	灰白 5Y 8/1	灰 N 5/	摩滅	摩滅	口縁部	
1455	304	55号壙	通道	須恵器	坪皿	(8.50)	(1.60)	10.50	密	良好	灰白 N 7/	灰 N 6/	回転ナダ	回転ナダ	口縁部	
1456	304	55号壙	通道	須恵器	坪皿	(8.40)	(2.95)	(10.00)	密	不良	灰白 2.5Y 8/1	灰 N 4/	回転ナダ	回転ナダ 回転施成	口縁部 摩滅	
1457	304	55号壙	通道	須恵器	坪皿		(2.75)		(4.00)	密	不良	灰白 N 8/	灰 N 4/	摩滅	摩滅	施記号 底盤

物語 品名	部目 分号	器種名	出土 位置	種類	器幅	口径	器高	最大径	通径	動土	焼成	内面色調	外面色調	内面調整	外而調整	残存 部位	備考
1458	304	55号壇	廣道	須恵器	环身		(2.90)		4.20		密 良好	灰白 N 8/	灰白 N 7/	回転ナデ	回転窓割り	全体	
1459	304	55号壇	廣道	須恵器	环身	10.00	(3.10)			密 良好	灰白 2.5Y 8/1	灰白 2.5Y 8/2	回転ナデ	回転ナデ	口縁部		
1460	304	55号壇	廣道	須恵器	环身	(10.70)	(3.30)			密 良好	灰白 2.5Y 8/1	灰白 2.5Y 8/2	回転ナデ	回転ナデ	口縁部		
1461	304	55号壇	前庭	須恵器	短頸壺	瓶 10.3	5.05	柱紐 S.1		密 良好	灰 N 5/ 灰 N 4/	灰 N 5/ 灰 N 4/	回転ナデ	回転ナデ	体部 口縁部	沈縫 自然釉 記号	
1462	304	55号壇	廣道	須恵器	壺	(9.60)	(1.75)			密 良好	灰 N 5/	灰 N 5/	回転ナデ	回転ナデ	口縁部		
1463	304	55号壇	廣道	須恵器	壺	10.25	(13.05)	体部 9.7 頸部 3.35		密 良好	灰白 N 7/	灰白 N 7/	回転ナデ	回転ナデ	口縁部 体部 頸部	シボリ痕 沈縫	
1464	305	55号壇	廣道	須恵器	無蓋高壺	(12.90)	(4.75)			密 良好	灰 N 5/	灰白 N 7/	回転ナデ	回転ナデ	口縁部	自然釉	
1465	306	55号壇	廣道	須恵器	無蓋高壺	(14.40)	(5.00)			密 良好	灰 N 6/	灰白 N 7/	回転ナデ	回転ナデ	口縁部		
1466	306	55号壇	廣道	須恵器	無蓋高壺	15.40	(4.70)			密 良好	灰白 N 7/ 灰 N 6/	回転ナデ	回転ナデ	口縁部	沈縫 自然釉 波状文 口縁部歪み		
1467	306	55号壇	前庭	須恵器	無蓋高壺	(10.40)	(2.55)			密 良好	灰白 N 7/	灰白 N 7/	回転ナデ	回転ナデ	口縁部		
1468	306	55号壇	廣道	須恵器	無蓋高壺	16.80	(5.90)			密 良好	灰白 N 8/	灰白 N 6/	回転ナデ	回転窓割り?	口縁部	摩滅	
1469	305	55号壇	廣道	須恵器	無蓋高壺		(2.10)	接合部 (3.4)		密 良好	灰白 SY 7/1	灰白 SY 7/1	回転ナデ	回転ナデ	体部		
1470	305	55号壇	前庭	須恵器	無蓋高壺	14.90	(3.75)			密 良好	灰白 2.5Y 8/2	灰白 2.5Y 8/2	回転ナデ	回転ナデ	口縁部		
1471	305	55号壇	廣道	須恵器	無蓋高壺	(10.10)	11.00	脚部 (3.7)	密 良好	灰白 N 7/	灰白 N 6/	回転ナデ	回転ナデ	脚部	自然釉		
1472	305	55号壇	前庭	須恵器	高壺	(4.60)			脚部 (11.8)	密 良好	灰白 SY 8/1	灰白 SY 8/1	回転ナデ	回転ナデ	脚部	厚底 外而黒斑	
1473	305	55号壇	前庭	須恵器	高壺		(3.30)		脚部 (11.2)	密 良好	灰白 N 7/ 灰 N 3/ 灰 N 5/	回転ナデ	回転ナデ	脚部	自然釉		
1474	305	55号壇	前庭	須恵器	高壺		(2.25)		10.80	密 良好	灰白 N 7/	灰白 N 7/	回転ナデ	回転ナデ	口縁部		
1475	305	55号壇	廣道	須恵器	瓶頸	(9.80)	(3.40)			密 良好	灰白 N 5/6	灰白 N 6/	回転ナデ	回転ナデ	脚部	自然釉	
1476	305	55号壇	廣道	須恵器	瓶頸	9.20	(6.30)			密 良好	灰白 N 6/	灰白 N 6/	回転ナデ	回転ナデ	口縁部	自然釉 口縁部歪み	
1477	305	55号壇	廣道	須恵器	藤村式指 蓋	(14.60)	(7.70)			密 良好	灰白 N 7/	灰白 N 7/	回転ナデ	回転ナデ	口縁部～体部	苔斑 燒きき跡 藤村式丸皿	
1478	305	55号壇	前庭	須恵器	長颈壺		(9.50)	脚部 (5.6) 背部 (9.8)	密 良好	灰白 10Y 7/1	灰白 10Y 6/1	回転ナデ	回転ナデ	脚部 ～背部	沈縫 子母製品の 蓋形? 部?		
1479	305	55号壇	廣道	須恵器	壺蓋	7.90	3.10			密 良好	灰白 N 7/	灰白 2.5Y 7/1	回転ナデ	回転窓割り	口縁部	自然釉	
1480	305	55号壇	廣道	須恵器	壺蓋	(6.20)	(4.70)			密 良好	灰白 N 7/	灰白 N 7/	回転ナデ	回転ナデ	口縁部	自然釉 あり	
1481	305	55号壇	前庭	須恵器	広口壺	(12.60)	(14.50)	脚部 (9.8)	密 良好	灰白 5Y 7/1	灰白 5Y 7/1	回転ナデ	タキヨ 板ナデ?	口縁部 体部	自然釉 自然軋 記号		
1482	305	55号壇	廣道	須恵器	平瓶		(10.15)	脚部 (17.3)	密 良好	灰白 SY 7/1	灰白 SY 7/1	回転ナデ	手持らしき 窓割り	脚部	自然軋 脚部		
1483	305	55号壇	廣道	須恵器	フラスコ 形瓶		(10.15)			密 良好	灰白 SY 7/1	灰白 SY 7/1	回転ナデ ナデ	回転ナデ ナデ	体部	自然釉	
1484	305	55号壇	廣道	須恵器	半瓶	(6.10)	体部 (12.8)	密 良好	灰白 SY 7/1	灰白 SY 7/1	回転ナデ	回転窓割り ナデ	体部 底部	厚底			
1485	305	55号壇	廣道	須恵器	壺		(3.05)		(5.80)	密 不良	灰白 N 8/	回転ナデ	回転ナデ	底部	厚底		
1486	305	55号壇	廣道	須恵器	壺		(2.55)			密 不良	灰白 N 8/ 灰 N 4/	回転ナデ	回転窓割り	脚部	摩滅 黒斑		
1487	306	55号壇	廣道	須恵器	圓筒口酒井 形子母	5.30				密 良好	灰白 SY 7/1	灰白 SY 7/1	回転ナデ	後シボリナデ 脚ナデ	口縁部	シボリ痕	
1488	306	55号壇	廣道	土師器	壺	11.20	2.95			密 良好	灰白 10YR 8/2	灰白 10YR 8/2	回転ナデ	摩滅	全体	手握ね	
1489	306	55号壇	前庭	土師器	壺		(2.90)			やや 良好	灰白 SYR 7/6	灰白 SYR 7/6	ハケ調整	ナデ	全体		

番号	種類	遺傳者名	出土位置	種類	形種	口径	幅高	最大径	底径	胎土	施成	内面色調	外外面色	内面調査	外面調査	残存部位	備考
1490	306	55号壙	東道	土師質土器	カワラケ?	(12.20)	(3.50)			密	良好	淡青緑 10YR 8/2	淡青緑 10YR 8/2	同軸ナデ	同軸ナデ	口縁部	
1491	306	55号壙	東京	土師質土器	カワラケ	19.90	(1.80)			密	良好	灰白 2.5Y 8/2	灰白 2.5Y 8/2	同軸ナデ	同軸ナデ	口縁部	手捏ね
1492	306	55号壙	西施	土師質土器	カワラケ	(10.40)	(2.50)			密	良好	灰白 2.5Y 8/2	灰白 2.5Y 8/2	ナデ	ナデ	口縫部 手捏ね	
1493	306	55号壙	東道	土師質土器	カワラケ	8.00	2.20			密	良好	灰白 10Y 8/2	灰白 10Y 8/2	ナデ	ナデ	全体 手捏ね	
1494	306	55号壙	東道	土師質土器	カワラケ	(11.00)	2.15		5.30	密	良好	淡青緑 10YR 8/4	淡青緑 10YR 8/3	同軸糸切り	同軸糸切り	底部 口縁部	
1495	306	55号壙	東道	土師質土器	カワラケ	(8.60)	(1.55)			密	良好	灰白 2.5Y 8/2	灰白 2.5Y 8/2	同軸ナデ	同軸ナデ	口縫部	
1496	306	55号壙	西施	土師質土器	カワラケ	(8.90)	(1.55)			密	良好	灰白 10Y 8/3	灰白 10Y 8/3	同軸ナデ	同軸ナデ	全体	
1497	306	55号壙	西施	陶文土器	体?		(3.70)			粗	良好	灰白 10YR 5/3	灰白 10YR 4/2	ナデ	陶文	体部	
1498	306	55号壙	北側トレンチ	陶文土器	浅鉢					密	良好	灰 SYR 6/6	灰 SYR 6/6	ナデ	ナデ	口縫部 狹脚部位	
1635	313	56号壙	須恵器	环蓋		9.60	3.25			密	良好	灰白 N 7/	灰 N 6/	同軸ナデ	同軸ナデ	口縫部 扇形割り	全体 扇形割
1636	313	56号壙	須恵器	环蓋		(10.60)	3.50			密	良好	灰白 N 7/	灰 N 6/	同軸ナデ	同軸ナデ	口縫部	
1637	313	56号壙	石室	須恵器	环蓋	(8.70)	(2.70)			密	良好	灰 N 6/	灰 N 6/	同軸ナデ	同軸ナデ	口縫部	
1638	313	56号壙	須恵器	环蓋		(9.30)	(11.30)			密	良好	灰 N 6/	灰 N 4/	同軸ナデ	同軸ナデ	口縫部 自然釉	
1639	313	56号壙	石室	須恵器	环身	(9.20)	3.55	(11.90)	(5.20)	密	良好	灰 N 5/	灰 10Y 5/1	同軸ナデ	同軸ナデ	口縫部	
1640	313	56号壙	須恵器	环身		(11.60)	(3.75)	13.60		密	良好	灰 N 6/	灰 N 6/	同軸ナデ	同軸ナデ	口縫部	
1641	313	56号壙	須恵器	环身		(11.00)	(2.30)	(13.40)		密	良好	灰 N 6/	灰 SB 5/1	同軸ナデ	同軸ナデ	口縫部	
1642	313	56号壙	須恵器	环身		(9.70)	(2.50)	(11.90)		密	良好	灰 N 6/	青灰 SB 5/1	同軸ナデ	同軸ナデ	口縫部	自然釉
1643	313	56号壙	須恵器	环身		(8.00)	(2.60)	(10.70)		密	良好	灰 N 5/	青灰 SB 5/1	同軸ナデ	同軸ナデ	口縫部	
1644	313	56号壙	須道	須恵器	环身		(2.60)	(9.90)		密	良好	灰白 N 7/	灰白 N 7/	同軸ナデ	同軸ナデ	口縫部	
1645	313	56号壙	須恵器	环身			(2.70)		(4.80)	密	良好	灰白 N 7/	灰 N 6/	同軸ナデ	同軸ナデ	口縫部	
1646	313	56号壙	須恵器	环身			(2.10)		(4.70)	密	良好	灰白 N 7/	灰 N 6/	同軸ナデ	同軸ナデ	口縫部	
1647	313	56号壙	石室	須恵器	無蓋窓坏	16.85	13.70		脚部 (9.5)	密	良好	灰 N 5/	灰 N 5/	同軸ナデ	同軸ナデ	口縫部 体部	沈旗 シヨリ目
1648	313	56号壙	石室	須恵器	無蓋窓坏	(17.40)	(2.10)			密	良好	灰 N 6/	灰 N 5/	同軸ナデ	同軸ナデ	口縫部	自然釉
1649	313	56号壙	石室	須恵器	無蓋窓坏	(13.60)	(3.60)			密	良好	灰白 N 7/	灰 N 6/	同軸ナデ	同軸ナデ	口縫部	
1650	313	56号壙	石室	須恵器	無蓋窓坏	(13.60)	(4.95)			密	良好	灰 N 6/	灰 N 6/	同軸ナデ	同軸ナデ	口縫部	自然釉
1651	313	56号壙	須恵器	無蓋窓坏		(14.80)	(5.70)			密	良好	灰白 N 7/	灰 N 6/	同軸ナデ	同軸ナデ	口縫部	自然釉
1652	313	56号壙	石室	須恵器	無蓋窓坏	(12.40)	(2.95)			密	良好	灰白 N 7/	灰 N 6/	同軸ナデ	同軸ナデ	口縫部	
1653	313	56号壙	石室	須恵器	無蓋窓坏	(14.30)	(3.85)			密	良好	灰白 N 8/ N 7/	灰白 N 8/ N 7/	同軸ナデ	同軸ナデ	口縫部	沈旗
1654	313	56号壙	須恵器	附付盤?		(5.10)			脚部 (10.75)	密	良好	灰白 5Y 7/1	灰白 5Y 7/1	同軸ナデ	同軸ナデ	脚部	長方透孔 直縫隙
1655	313	56号壙	石室	須恵器	附付盤?	(4.15)			脚部 (11.4)	密	良好	灰白 N 8/	灰白 N 8/	同軸ナデ	同軸ナデ	底盤	透孔 沈旗
1656	313	56号壙	石室	須恵器	不明	(1.75)			(19.70)	密	良好	灰白 N 7/	灰 N 6/	同軸ナデ	同軸ナデ	脚台	自然釉
1657	313	56号壙	須恵器	平瓶		5.40	(7.55)		体部 13.8	密	良好	灰白 5Y 7/1	灰白 5Y 7/1	同軸ナデ ナデ	同軸ナデ	口縫部 体上部	シヨリ目
1658	313	56号壙	石室	須恵器	瓶形の蓋	(10.20)	(3.10)			密	良好	灰白 N 7/	淡黄 2.5Y 7/3	同軸ナデ	同軸ナデ	口縫部	自然釉
1659	313	56号壙	石室	須恵器	壺盖	(8.20)	(4.15)			密	良好	灰白 N 7/	灰オリーブ 5Y 6/2	同軸ナデ	同軸ナデ	口縫部	自然釉
1660	313	56号壙	石室	須恵器	蓋?	(1.15)				密	良好	灰白 5Y 7/1	灰白 5Y 7/1	同軸ナデ	同軸ナデ	口縫部	補み? 自然釉
1661	313	56号壙	石室	須恵器	加類	(11.20)	(7.15)			密	良好	灰 5Y 6/1	灰 5Y 5/1	同軸ナデ	同軸ナデ	口縫部	自然釉

遺物番号	標識番号	遺物名	出土位置	種類	器種	口径	高さ	最大径	底種	胎土	焼成	内面色調	外面部調	内面調査	外面部調査	残存部位	備考
1662	313	56号壇	石室	須恵器	瓶	7.00	(9.16)		密	良好	灰 N 6/	灰 N 6/	回転ナダ	扁平ナダ	口縁部	自然釉	
1663	313	56号壇	石室	須恵器	瓶	(5.40)	(4.65)		密	良好	灰白 N 7/	灰白 N 7/	回転ナダ	回転ナダ	口縁部	自然釉	
1664	313	56号壇	須恵器	瓶	?	(7.30)	(12.5)		密	良好	灰 5Y 7/1	灰白 5Y 7/1	回転ナダ	回転ナダ	全体上部	沈黙	
1665	313	56号壇	須恵器	瓶	?	(4.50)			密	良好	灰 N 5/	灰 N 4/	回転ナダ	回転ナダ	底部		
1666	313	56号壇	石室	須恵器	瓶	(3.00)			(4.80)	密	良好	灰白 N 8/	灰白 N 7/	回転ナダ	回転ナダ	全体～ 等付下部	
1667	313	56号壇	石室	須恵器	罐	(8.30)	(2.75)		密	良好	灰白 N 7/	灰白 N 7/	回転ナダ	回転ナダ	口縁部		
1668	313	56号壇	石室	須恵器	瓶	(7.80)	(2.55)		密	良好	灰 N 7/	灰 N 5/	回転ナダ	回転ナダ	口縁部	自然釉	
1669	313	56号壇	石室	須恵器	瓶	(10.80)	(3.30)		密	良好	灰 N 6/	灰 N 5/	回転ナダ	回転ナダ	口縁部		
1670	313	56号壇	須恵器	瓶	?	(6.40)	(3.05)		密	良好	灰白 N 7/	灰 N 6/	回転ナダ	回転ナダ	口縁部	自然釉	
1671	313	56号壇	須恵器	瓶	?	(5.60)			密	良好	灰 N 6/	灰 N 5/	回転ナダ	回転ナダ	全体上部	自然釉 沈黙	
1672	313	56号壇	石室	須恵器	罐	(5.00)			密	良好	灰白 N 7/	灰白 N 7/	回転ナダ	回転ナダ	カリ目	休部	
1673	313	56号壇	石室	灰陶器	瓶	(17.80)	(1.90)		密	良好	灰白 N 8/	灰白 N 8/	回転ナダ	回転ナダ	口縁部	灰釉	
1674	314	56号壇	山茶碗	碗		(18.00)	(3.10)		やや粗	良好	灰白 N 8/	灰白 N 8/	回転ナダ	回転ナダ	口縁部	貼り付け高台	
										(3.60)	6.60		回転ナダ	回転ナダ	自然釉 切妻注痕 底部	切妻注痕底 底部	
1675	314	56号壇	石室	山茶碗	碗	16.20	4.30	6.80	密	良好	灰白 N 8/	灰白 N 8/	回転ナダ	回転ナダ	口縁部	貼り付け高台	
1676	314	56号壇	端文土器	浅鉢？		(2.80)			今冬粗	良好	灰白 10YR 4/3	灰白 10YR 6/3	摩滅	摩滅	口縁部		
1705	317	57号壇	須恵器	环蓋	9.90		12.20		密	良好	灰白 N 7/	灰 N 6/	回転ナダ	回転ナダ	口縁部	～休部	
1706	317	57号壇	須恵器	長頸壺	(10.60)	(8.00)			密	良好	灰白 5Y 7/1	灰 N 6/	回転ナダ	回転ナダ	口縁部	薄唇	
1707	317	57号壇	石室	須恵器	長頸壺	(10.30)	(15.6)		密	良好	灰白 N 7/	灰白 N 7/	回転ナダ	回転ナダ	休部	自然釉	
1709	323	58号壇	須恵器	環	11.60	4.00			密	良好	灰白 N 7/	青灰 SB 6/1	回転ナダ	回転ナダ	全体	沈黙内外面 各1枚	
1710	323	58号壇	石室	須恵器	环身	(11.10)	(2.90)		密	良好	灰白 N 7/	灰白 N 7/	回転ナダ	回転ナダ	口縁部		
1711	323	58号壇	石室	須恵器	壺蓋	9.20	8.00		揃み	良好	灰白 N 7/	灰 N 5/	回転ナダ	回転ナダ	完形品	自然釉	
1712	323	58号壇	石室	須恵器	脚付短腹盤	(5.80)	18.90		休部	良好	灰白 N 7/	灰白 N 7/	回転ナダ	回転ナダ	口縁部	自然釉 休部 底部 欠損	
1713	323	58号壇	石室	須恵器	平瓶	5.70	14.95	牛乳 12.95	密	良好	青灰 SB 6/1	青灰 SB 6/1	回転ナダ	回転ナダ	口縁部	自然釉 沈黙/施記号 部欠損	
1714	327	59号壇	須恵器	环蓋	(9.20)	(2.60)			密	良好	灰白 N 7/	灰 N 6/	回転ナダ	回転ナダ	口縁部		
1715	327	59号壇	須恵器	环蓋	(8.80)	(2.10)			密	良好	灰白 N 7/	灰 N 6/	回転ナダ	回転ナダ	口縁部		
1716	327	59号壇	表土	須恵器	环身	(11.30)	(2.70)	(13.80)	密	良好	灰白 N 8/	灰白 N 8/	回転ナダ	回転ナダ	口縁部		
1717	327	59号壇	須恵器	环身	(8.90)	(1.80)			密	良好	灰白 N 7/	灰白 N 7/	回転ナダ	回転ナダ	口縁部		
1718	327	59号壇	石室	須恵器	环身	(8.20)	2.85	10.00	密	良好	灰 N 6/	灰 N 6/	回転ナダ	回転ナダ	全体	施記号	
1719	327	59号壇	須恵器	环身	(5.80)	2.65	(10.40)	4.60	密	良好	灰 N 6/	灰 N 6/	回転ナダ	回転ナダ	全体		
1720	327	59号壇	石室	須恵器	环身	(1.85)			4.60	密	良好	灰白 N 7/	灰 N 6/	回転ナダ	回転ナダ	底部	施記号
1721	327	59号壇	須恵器	环身	13.00	4.70			6.20	密	良好	灰白 N 7/	灰白 N 7/	回転ナダ	回転ナダ	全体	
1722	327	59号壇	須恵器	环身	12.40	4.50			6.00	密	良好	灰白 5Y 7/2	灰白 5Y 7/1	回転ナダ	回転ナダ	口縁部	底部
1723	327	59号壇	須恵器	無蓋环身	(9.30)	(3.50)				密	良好	青灰 5YR 4/1 赤褐色 10R 5/3	青灰 7.5YR 5/1	回転ナダ	回転ナダ	口縁部	追み

建物 番号	標題 番号	地盤名	出土 位置	鉛錠	錫錠	口錠	器高	最大径	底径	胎土	施成	内面色調	外面色調	内面調整	外面調整	熟存 部位	備考	
1724	327	59号壙	須恵器 撫首	圓筒窯跡	(10.20)	(2.70)				密	良好	灰白 N 7/	灰白 N 7/	回転ナダ	回転ナダ	口錠部		
1725	327	59号壙	須恵器 高耳		(9.10)			3.35		密	良好	灰白 5Y 7/1	灰白 5Y 7/1	回転ナダ	回転ナダ	脚部	シボリ目	
1726	327	59号壙	須恵器 高耳	(11.80)	(3.16)					密	良好	灰白 N 7/	灰白 N 7/	回転ナダ	回転ナダ	脚部		
1727	327	59号壙	須恵器 平瓶?	9.20	(4.25)					密	良好	灰白 N 4/	灰白 N 5/	回転ナダ	回転ナダ	口錠部		
1728	327	59号壙	須恵器 縦	(9.70)	(2.30)					密	良好	灰白 2.5Y 7/1	灰白 2.5Y 7/1	回転ナダ	回転ナダ	口錠部	自然釉	
1729	327	59号壙	須恵器 形乳		(16.90)					密	良好	灰白 2.5Y 8/1	灰白 2.5Y 8/2	回転ナダ	回転ナダ	体部		
1730	327	59号壙	須恵器 縦		(1.95)					密	良好	灰白 N 7/	灰白 N 7/	回転ナダ	回転ナダ	破片	外側 ハケ焼り有	
1731	327	59号壙	土師器 鉢	(13.80)	(6.85)		(5.60)			やや 粗	良好	灰白 10YR 7/2	灰白 10YR 7/2	横ナダ ハケ焼整	摩滅	全体	粗製	
1734	333	60号壙	壙丘	須恵器 高耳		(6.55)				密	良好	灰白 5Y 8/1	灰白 5Y 8/1	回転ナダ	回転ナダ	脚部	長方形透孔	
1735	333	60号壙	壙丘	須恵器 丸顔		(5.00)		強部 (7.9)		密	良好	灰白 N 8/	灰白 N 8/	回転ナダ	回転ナダ	頭部		
1736	333	60号壙	壙丘	土師器 高盤		(3.85)				密	良好	にぶい黄 7.5YR 6/4	にぶい褐 7.5YR 6/4	指ナダ ハケ付 無ミガキ	指ナダ ハケ付 無ミガキ	脚上部	指面压痕 半影	
1737	337	62号壙	石室	須恵器 环身	(9.60)	(4.46)				密	良好	灰白 N 6/	灰白 N 7/	回転ナダ	回転ナダ	口錠部 体部		
1738	337	62号壙	石室	須恵器 环身	11.20	4.10				密	良好	灰白 N 6/	灰白 N 6/	回転ナダ	回転ナダ	全体		
1739	337	62号壙	石室	須恵器 环身	(10.30)	(4.80)				密	良好	灰白 N 6/	灰白 N 6/	回転ナダ	回転ナダ	体部		
1740	337	62号壙	石室	須恵器 平瓶	(10.60)	(14.60)		体部 29.2		密	良好	灰白 5Y 7/1	灰白 5Y 7/1	回転ナダ	回転ナダ	口錠部 体部	自然釉	
1742	340	3区 表側	須恵器 环淮	10.20	3.60					密	良好	灰白 N 7/	灰白 N 7/	回転ナダ	回転ナダ	全体		
1743	340	3区 表土	山茶碗	碗		(2.16)				(7.40)	密	良好	灰白 5Y 8/1	灰白 5Y 8/1	回転ナダ	回転ナダ ナダ	高台～ 切妻江底 底部	

第4表 大慶歎A古墳群出土玉類観察表

遺物番号	捕用番号	遺構名	出土位置	種類	材質	色調	直径 (mm)	孔径 (mm)	厚さ (mm)	重 量 (g)	備 考
25	23	2号墳	石室北壁	勾玉	蛇紋透	暗灰	12.5	3.0	28.5	6.761	
26	23	2号墳	石室北壁	勾玉	蛇紋透	灰白	9.6	2.5	21.0	2.010	
27	23	2号墳	石室北壁	管玉	碧玉	深綠	11.5	2.0	33.5	8.531	欠損
28	23	2号墳	石室北壁	管玉	翡翠	綠	9.0	3.0	24.3	3.589	
29	23	2号墳	石室北壁	白玉	透紋岩	灰	11.5	2.3	7.0	1.147	
30	23	2号墳	石室北壁	丸玉	ガラス?	黄緑	7.5	2.5	4.5	0.434	亜製
31	23	2号墳	奥壁面	丸玉	鈍十	瑪瑙	10.0	2.0	7.5	0.755	
72	60	9号坑	玄室北	小玉	ガラス	青	3.7	1.0	3.3	0.058	
73	60	9号坑	玄室北	小玉	ガラス	緑	3.8	0.8	3.0	0.057	
74	60	9号坑	玄室北	小玉	ガラス	緑	3.9	0.9	2.7	0.047	
75	60	9号坑	玄室北	小玉	ガラス	緑	3.9	1.0	2.7	0.053	
76	60	9号坑	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.0	1.0	2.5	0.042	
77	60	9号坑	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.0	1.0	3.0	0.060	
78	60	9号坑	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.0	1.0	2.5	0.055	
79	60	9号坑	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.0	0.9	3.7	0.081	
80	60	9号坑	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.0	1.0	3.0	0.061	
81	60	9号坑	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.0	1.3	3.0	0.058	
82	60	9号坑	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.0	1.2	2.8	0.052	
83	60	9号坑	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.0	1.2	2.3	0.044	
84	60	9号坑	玄室北	小玉	ガラス	緑	3.9	0.8	3.0	0.055	
85	60	9号坑	玄室北	小玉	ガラス	緑	3.8	1.0	2.8	0.054	
86	60	9号坑	玄室北	小玉	ガラス	緑	3.8	1.0	3.0	0.055	
87	60	9号坑	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.0	1.0	2.5	0.054	
88	60	9号坑	玄室北	小玉	ガラス	緑	3.8	0.9	3.0	0.061	
89	60	9号坑	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.0	1.0	3.6	0.055	
90	60	9号坑	玄室北	小玉	ガラス	緑	3.9	1.1	3.0	0.057	
91	60	9号坑	玄室北	小玉	ガラス	緑	3.9	1.2	3.0	0.060	
92	60	9号坑	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.0	1.1	3.0	0.057	
93	60	9号坑	玄室北	小玉	ガラス	緑	3.8	1.0	3.0	0.050	
94	60	9号坑	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.0	1.2	2.7	0.054	
95	60	9号坑	玄室北	小玉	ガラス	緑	3.8	1.0	3.0	0.056	
96	60	9号坑	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.0	1.1	3.0	0.056	
97	60	9号坑	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.0	1.0	3.6	0.057	
98	60	9号坑	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.0	1.2	3.0	0.064	
99	60	9号坑	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.0	1.2	3.9	0.060	
100	60	9号坑	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.0	1.0	2.8	0.051	
101	60	9号坑	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.0	1.0	3.0	0.058	
102	60	9号坑	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.2	1.0	2.8	0.056	
103	60	9号坑	玄室北	小玉	ガラス	緑	3.9	1.0	2.8	0.055	
104	60	9号坑	玄室北	小玉	ガラス	緑	3.8	1.2	2.9	0.054	
105	60	9号坑	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.3	1.4	3.3	0.075	
106	60	9号坑	玄室北	小玉	ガラス	緑	3.7	0.9	2.7	0.050	
107	60	9号坑	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.0	1.1	2.5	0.057	
108	60	9号坑	玄室北	小玉	ガラス	緑	3.9	1.2	2.7	0.047	
109	60	9号坑	玄室北	小玉	ガラス	緑	3.8	1.0	3.0	0.064	
110	60	9号坑	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.0	1.4	2.8	0.046	
111	60	9号坑	玄室北	小玉	ガラス	緑	3.9	0.8	3.0	0.059	
112	60	9号坑	玄室北	小玉	ガラス	緑	3.9	0.9	3.0	0.062	
113	60	9号坑	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.0	1.3	3.4	0.073	
114	60	9号坑	玄室北	小玉	ガラス	緑	3.9	0.8	3.2	0.068	
115	60	9号坑	玄室北	小玉	ガラス	緑	3.5	1.0	2.8	0.054	
116	60	9号坑	玄室北	小玉	ガラス	緑	3.8	1.0	3.0	0.059	
117	60	9号坑	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.0	1.0	3.2	0.060	
118	60	9号坑	玄室北	小玉	ガラス	緑	3.8	1.0	3.0	0.056	
119	60	9号坑	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.0	1.2	2.6	0.056	
120	60	9号坑	玄室北	小玉	ガラス	緑	3.8	1.0	3.0	0.052	
121	60	9号坑	玄室北	小玉	ガラス	緑	3.8	1.1	2.9	0.058	
122	60	9号坑	玄室北	小玉	ガラス	緑	3.8	1.2	3.0	0.059	
123	60	9号坑	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.2	1.0	2.9	0.061	
124	60	9号坑	玄室北	小玉	ガラス	緑	3.9	1.2	3.0	0.060	
125	60	9号坑	玄室北	小玉	ガラス	緑	3.8	1.1	2.9	0.055	
126	60	9号坑	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.2	1.2	3.0	0.067	
127	60	9号坑	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.1	1.2	3.0	0.066	
128	60	9号坑	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.1	1.1	2.9	0.060	
129	60	9号坑	玄室北	小玉	ガラス	緑	3.9	1.0	3.0	0.060	
130	60	9号坑	玄室北	小玉	ガラス	緑	3.8	1.2	2.8	0.050	
131	60	9号坑	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.0	1.0	2.9	0.055	
132	60	9号坑	玄室北	小玉	ガラス	緑	3.5	1.0	2.9	0.055	
133	60	9号坑	玄室北	小玉	ガラス	緑	3.9	1.0	2.5	0.049	
134	60	9号坑	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.0	1.2	2.8	0.059	
135	60	9号坑	玄室北	小玉	ガラス	緑	3.7	1.0	3.0	0.054	
136	60	9号坑	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.1	1.2	3.0	0.067	
137	60	9号坑	玄室北	小玉	ガラス	緑	3.9	1.0	2.8	0.054	
138	60	9号坑	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.0	1.3	2.8	0.056	

遺物番号	拂留名	出土位置	種類	材質	色調	高さ (mm)	孔径 (mm)	管さ (mm)	重量 (g)	備考
139	60 9号墳	玄室北	小玉	ガラス	白	3.9	1.1	3.0	0.051	
140	60 9号墳	玄室北	小玉	ガラス	白	4.0	1.2	3.0	0.068	
141	60 9号墳	玄室北	小玉	ガラス	白	4.0	1.2	2.7	0.051	
142	60 9号墳	玄室北	小玉	ガラス	白	3.8	1.0	2.7	0.050	
143	60 9号墳	玄室北	小玉	ガラス	白	3.8	1.0	3.0	0.061	
144	60 9号墳	玄室北	小玉	ガラス	白	4.0	1.0	2.8	0.055	
145	60 9号墳	玄室北	小玉	ガラス	白	3.9	1.0	3.0	0.050	
146	60 9号墳	玄室北	小玉	ガラス	白	4.2	1.5	3.3	0.072	
147	60 9号墳	玄室北	小玉	ガラス	白	4.0	1.0	3.0	0.056	
148	60 9号墳	玄室北	小玉	ガラス	白	3.9	1.2	2.5	0.046	
149	60 9号墳	玄室北	小玉	ガラス	白	3.8	1.2	3.3	0.057	
150	60 9号墳	玄室北	小玉	ガラス	白	4.0	1.0	3.0	0.055	
151	60 9号墳	玄室北	小玉	ガラス	白	4.0	1.0	3.0	0.070	
152	60 9号墳	玄室北	小玉	ガラス	白	3.9	1.2	2.9	0.048	
153	60 9号墳	玄室北	小玉	ガラス	白	4.0	1.0	3.0	0.053	
154	60 9号墳	玄室北	小玉	ガラス	白	4.0	1.1	3.0	0.062	
155	60 9号墳	玄室北	小玉	ガラス	白	4.0	1.0	3.0	0.053	
156	60 9号墳	玄室北	小玉	ガラス	白	3.8	1.1	2.4	0.050	
157	60 9号墳	玄室北	小玉	ガラス	白	4.0	1.0	3.0	0.057	
158	60 9号墳	玄室北	小玉	ガラス	白	4.0	1.7	2.7	0.055	
159	60 9号墳	玄室北	小玉	ガラス	白	4.0	1.2	3.2	0.059	
160	60 9号墳	玄室北	小玉	ガラス	白	4.0	0.8	2.8	0.062	
161	60 9号墳	玄室北	小玉	ガラス	白	4.0	1.3	3.0	0.050	
162	60 9号墳	玄室北	小玉	ガラス	白	4.1	1.3	2.8	0.053	
163	60 9号墳	玄室北	小玉	ガラス	白	3.9	1.0	3.0	0.055	
164	60 9号墳	玄室北	小玉	ガラス	白	3.9	1.1	2.6	0.049	欠損
165	60 9号墳	玄室北	小玉	ガラス	白	3.8	1.5	3.0	0.051	
166	60 9号墳	玄室北	小玉	ガラス	白	4.0	1.3	2.5	0.052	
167	60 9号墳	玄室北	小玉	ガラス	白	3.8	1.0	3.0	0.051	
168	60 9号墳	玄室北	小玉	ガラス	白	4.0	1.1	3.0	0.057	
169	60 9号墳	玄室北	小玉	ガラス	白	4.0	1.0	3.0	0.061	
170	60 9号墳	玄室北	小玉	ガラス	白	3.8	0.8	3.5	0.057	
171	60 9号墳	玄室北	小玉	ガラス	白	3.9	1.0	2.8	0.051	
172	60 9号墳	玄室北	小玉	ガラス	白	3.7	1.0	3.0	0.054	
173	60 9号墳	玄室北	小玉	ガラス	白	4.1	1.2	2.8	0.044	
174	60 9号墳	玄室北	小玉	ガラス	白	3.9	1.0	3.0	0.054	
175	60 9号墳	玄室北	小玉	ガラス	白	4.0	1.0	3.2	0.069	
176	60 9号墳	玄室北	小玉	ガラス	白	4.0	1.2	3.0	0.058	
177	60 9号墳	玄室北	小玉	ガラス	白	4.0	1.1	3.2	0.061	
178	60 9号墳	玄室北	小玉	ガラス	白	4.0	1.5	3.3	0.063	
179	60 9号墳	玄室北	小玉	ガラス	白	4.0	1.0	2.7	0.052	
180	60 9号墳	玄室北	小玉	ガラス	白	3.9	1.0	3.0	0.054	
181	60 9号墳	玄室北	小玉	ガラス	白	3.9	1.0	3.1	0.051	
182	60 9号墳	玄室北	小玉	ガラス	白	3.7	1.1	3.0	0.047	
183	60 9号墳	玄室北	小玉	ガラス	白	4.0	1.1	2.8	0.060	
184	60 9号墳	玄室北	小玉	ガラス	白	4.0	1.4	3.0	0.063	
185	60 9号墳	玄室北	小玉	ガラス	白	3.8	1.2	3.0	0.051	
186	60 9号墳	玄室北	小玉	ガラス	白	3.7	1.3	3.0	0.054	
187	60 9号墳	玄室北	小玉	ガラス	白	4.0	1.5	2.5	0.064	
188	60 9号墳	玄室北	小玉	ガラス	白	3.8	1.0	2.6	0.044	
189	60 9号墳	玄室北	小玉	ガラス	白	4.0	1.1	2.8	0.057	
190	60 9号墳	玄室北	小玉	ガラス	白	4.0	1.1	3.1	0.063	
191	60 9号墳	玄室北	小玉	ガラス	白	4.0	1.1	3.0	0.063	
192	60 9号墳	玄室北	小玉	ガラス	白	4.0	1.3	3.0	0.056	
193	60 9号墳	玄室北	小玉	ガラス	白	4.0	1.0	3.1	0.065	
194	60 9号墳	玄室北	小玉	ガラス	白	3.9	1.1	3.1	0.064	
195	60 9号墳	玄室北	小玉	ガラス	白	3.6	0.9	3.0	0.050	
196	60 9号墳	玄室北	小玉	ガラス	白	3.7	1.0	3.2	0.061	
197	60 9号墳	玄室北	小玉	ガラス	白	4.0	0.8	3.2	0.066	
198	60 9号墳	玄室北	小玉	ガラス	白	4.0	1.0	3.0	0.055	
199	60 9号墳	玄室北	小玉	ガラス	白	3.8	0.8	3.2	0.057	
200	60 9号墳	玄室北	小玉	ガラス	白	4.0	1.2	2.3	0.054	
201	60 9号墳	玄室北	小玉	ガラス	白	3.8	1.2	3.0	0.057	
202	60 9号墳	玄室北	小玉	ガラス	白	3.7	1.0	2.7	0.048	
203	60 9号墳	玄室北	小玉	ガラス	白	4.0	1.0	3.0	0.062	
204	60 9号墳	玄室北	小玉	ガラス	白	3.8	1.2	2.8	0.068	
205	60 9号墳	玄室北	小玉	ガラス	白	3.7	1.2	3.5	0.061	
206	60 9号墳	玄室北	小玉	ガラス	白	3.9	1.0	3.0	0.057	
207	60 9号墳	玄室北	小玉	ガラス	白	4.0	1.1	3.0	0.052	
208	60 9号墳	玄室北	小玉	ガラス	白	3.8	1.1	2.5	0.050	
209	60 9号墳	玄室北	小玉	ガラス	白	4.0	1.0	3.0	0.059	
210	60 9号墳	玄室北	小玉	ガラス	白	4.0	1.0	2.3	0.045	
211	60 9号墳	玄室北	小玉	ガラス	白	4.0	1.0	3.0	0.051	
212	60 9号墳	玄室北	小玉	ガラス	白	3.9	1.4	3.2	0.062	

遺物番号	辨別番号	遺物名	出土位置	種類	材質	色調	直径 (mm)	孔径 (mm)	高さ (mm)	重量 (g)	備考
213	60	9号環	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.9	1.2	2.7	0.055	
214	60	9号環	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.9	0.8	3.2	0.062	
215	60	9号環	玄室北	小玉	ガラス	緑	3.7	0.8	3.0	0.057	
216	60	9号環	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.0	1.2	3.0	0.052	
217	60	9号環	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.0	1.0	3.0	0.054	
218	60	9号環	玄室北	小玉	ガラス	緑	3.8	1.0	3.0	0.058	
219	60	9号環	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.0	1.2	2.3	0.059	
220	60	9号環	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.3	1.2	3.0	0.065	
221	60	9号環	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.0	1.6	3.0	0.059	
222	60	9号環	玄室北	小玉	ガラス	緑	3.8	1.0	2.7	0.048	
223	60	9号環	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.0	1.5	3.5	0.069	
224	60	9号環	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.0	1.0	2.6	0.056	
225	60	9号環	玄室北	小玉	ガラス	緑	3.8	1.3	3.0	0.057	
226	60	9号環	玄室北	小玉	ガラス	緑	3.7	1.0	3.3	0.057	
227	60	9号環	玄室北	小玉	ガラス	緑	3.8	1.4	3.0	0.056	
228	60	9号環	玄室北	小玉	ガラス	緑	3.7	1.0	3.8	0.051	
229	60	9号環	玄室北	小玉	ガラス	緑	3.8	1.8	2.7	0.051	
230	60	9号環	玄室北	小玉	ガラス	緑	3.9	1.0	2.9	0.052	
231	60	9号環	玄室北	小玉	ガラス	緑	3.8	1.2	3.3	0.065	
232	60	9号環	玄室北	小玉	ガラス	緑	3.8	1.1	3.0	0.055	
233	60	9号環	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.0	1.0	2.5	0.051	
234	60	9号環	玄室北	小玉	ガラス	緑	3.9	1.0	2.7	0.044	
235	60	9号環	玄室北	小玉	ガラス	緑	3.8	0.8	2.7	0.042	
236	60	9号環	玄室北	小玉	ガラス	緑	3.9	1.0	2.8	0.051	
237	60	9号環	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.1	1.2	3.0	0.054	
238	60	9号環	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.3	1.2	3.5	0.066	
239	60	9号環	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.0	1.2	2.7	0.056	
240	60	9号環	玄室北	小玉	ガラス	緑	3.8	1.1	3.2	0.055	
241	60	9号環	玄室北	小玉	ガラス	緑	3.7	1.2	3.2	0.053	
242	60	9号環	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.0	1.0	3.0	0.070	
243	60	9号環	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.0	1.0	3.0	0.062	
280	68	10号環	玄室北	小玉	ガラス	緑	3.9	1.0	2.7	0.047	
281	68	10号環	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.0	1.5	2.7	0.050	
282	68	10号環	玄室北	小玉	ガラス	緑	3.7	1.5	2.8	0.044	
283	68	10号環	玄室北	小玉	ガラス	緑	3.8	1.4	2.0	0.032	
284	68	10号環	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.0	1.2	2.3	0.043	
285	68	10号環	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.0	1.3	3.0	0.046	
286	68	10号環	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.0	1.7	2.8	0.045	
287	68	10号環	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.0	1.5	2.8	0.059	
288	68	10号環	玄室北	小玉	ガラス	緑	3.7	1.0	3.0	0.051	
289	68	10号環	玄室北	小玉	ガラス	緑	3.8	1.0	2.2	0.037	
290	68	10号環	玄室北	小玉	ガラス	緑	3.7	0.8	2.7	0.046	
291	68	10号環	玄室北	小玉	ガラス	緑	3.7	1.0	2.7	0.045	
292	68	10号環	玄室北	小玉	ガラス	緑	3.7	0.8	2.2	0.037	
293	68	10号環	玄室北	小玉	ガラス	緑	3.7	1.0	2.8	0.043	
294	68	10号環	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.0	1.3	2.2	0.035	
295	68	10号環	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.0	1.2	3.0	0.060	
296	68	10号環	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.0	1.0	2.8	0.045	
297	68	10号環	玄室北	小玉	ガラス	緑	3.7	0.9	2.3	0.038	
298	68	10号環	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.0	1.0	3.0	0.055	
299	68	10号環	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.0	1.0	2.8	0.055	
300	68	10号環	玄室北	小玉	ガラス	緑	3.9	1.0	2.8	0.049	
301	68	10号環	玄室北	小玉	ガラス	緑	3.9	1.2	2.0	0.033	
302	68	10号環	玄室南	小玉	ガラス	緑	3.8	1.3	2.5	0.035	
303	68	10号環	玄室南	小玉	ガラス	緑	3.7	0.8	3.0	0.044	
304	68	10号環	玄室南	小玉	ガラス	緑	4.0	1.2	2.3	0.043	
305	68	10号環	玄室南	小玉	ガラス	緑	3.7	1.0	2.3	0.032	
306	68	10号環	玄室南	小玉	ガラス	緑	3.8	1.0	3.0	0.056	
307	68	10号環	玄室南	小玉	ガラス	緑	3.8	1.0	2.5	0.036	
308	68	10号環	玄室南	小玉	ガラス	緑	3.7	0.8	2.7	0.044	
309	68	10号環	玄室南	小玉	ガラス	緑	3.9	0.8	2.7	0.040	
310	68	10号環	玄室南	小玉	ガラス	緑	3.7	1.0	2.3	0.039	
311	68	10号環	玄室南	小玉	蛇紋岩	墨	4.0	1.0	3.5	0.066	
312	68	10号環	玄室南	小玉	ガラス	緑	4.0	1.0	2.7	0.049	
313	68	10号環	玄室南	小玉	ガラス	緑	3.9	1.0	2.0	0.033	
314	68	10号環	玄室南	小玉	ガラス	緑	3.9	1.3	2.8	0.047	
315	68	10号環	玄室南	小玉	ガラス	緑	(4.0)	(1.0)	2.5	0.022	欠損
316	68	10号環	玄室南	小玉	ガラス	緑	4.0	1.0	3.0	0.056	
317	68	10号環	玄室南	小玉	ガラス	緑	3.8	1.0	3.0	0.048	
318	68	10号環	玄室南	小玉	ガラス	緑	3.8	1.0	3.0	0.044	
319	68	10号環	石室	小玉	ガラス	緑	3.6	1.0	2.0	0.021	
320	68	10号環	石室	小玉	ガラス	緑	3.7	1.0	3.0	0.052	
321	68	10号環	石室	小玉	ガラス	緑	3.8	1.0	3.3	0.062	
322	68	10号環	石室	小玉	ガラス	緑	3.8	1.0	3.3	0.054	

道府 都道 府県	編 番号	港名	沿岸位置	種類	材質	色	調	直 径 (mm)	孔 径 (mm)	長 さ (mm)	重 量 (g)	備考
323	68	10号港	丸玉	蛇紋鉄	錆びり灰白	11.3	3.0	11.0	8.769	沈鉛削剝		
343	73	11号港	玄室北	白玉	ガラス	緑	7.6	1.8	5.7	0.304		
344	73	11号港	玄室北	白玉	ガラス	緑	6.6	2.2	5.0	0.225		
345	73	11号泊	玄室北	小玉	ガラス	緑	5.4	1.3	4.9	0.172		
346	73	11号泊	玄室北	白玉	ガラス	錆びり青	6.3	1.6	4.0	0.171		
347	73	11号港	玄室北	小玉	ガラス	錆びり青	5.8	1.6	3.5	0.149		
348	73	11号港	玄室北	小玉	鉄	黒	5.0	1.0	3.5	0.114		
349	73	11号泊	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.0	1.0	4.0	0.092		
350	73	11号泊	玄室北	小玉	ガラス	緑	5.0	1.0	3.5	0.092		
351	73	11号港	玄室北	小玉	ガラス	緑	5.0	1.5	3.0	0.089		
352	73	11号港	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.3	1.2	2.7	0.059		
353	73	11号泊	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.2	1.5	2.8	0.062		
354	73	11号泊	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.2	1.4	2.3	0.053		
355	73	11号泊	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.2	1.1	2.6	0.057		
356	73	11号泊	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.3	1.2	2.7	0.058		
357	73	11号泊	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.1	1.1	2.9	0.058		
358	73	11号泊	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.3	1.8	2.5	0.046		
359	73	11号泊	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.2	1.6	2.3	0.055		
360	73	11号泊	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.3	1.9	2.6	0.054		
361	73	11号泊	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.0	1.0	3.0	0.063		
362	73	11号泊	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.2	1.3	2.3	0.053		
363	73	11号泊	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.0	1.1	2.4	0.043		
364	73	11号泊	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.0	1.0	2.3	0.041		
365	73	11号泊	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.0	1.1	2.3	0.049		
366	73	11号泊	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.3	1.3	2.3	0.047		
367	73	11号泊	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.6	1.4	2.3	0.044		
368	73	11号泊	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.2	1.5	2.4	0.049		
369	73	11号泊	玄室北	小玉	ガラス	錆びり水色	4.2	1.1	2.5	0.056		
370	73	11号泊	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.0	2.0	2.3	0.041		
371	73	11号泊	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.0	2.0	2.3	0.036		
372	73	11号泊	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.5	1.8	2.5	0.045		
373	73	11号泊	玄室北	小玉	ガラス	緑	3.8	1.7	2.5	0.041		
374	73	11号泊	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.0	1.5	2.7	0.048		
375	73	11号泊	玄室北	小玉	ガラス	緑	3.7	1.4	2.3	0.037		
376	73	11号泊	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.0	1.3	2.5	0.049		
377	73	11号泊	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.0	1.9	2.5	0.051		
378	73	11号泊	玄室北	小玉	ガラス	緑	3.5	1.0	2.6	0.042		
379	73	11号泊	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.0	1.0	2.7	0.052		
380	73	11号泊	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.0	1.0	2.3	0.043		
381	73	11号泊	玄室北	小玉	ガラス	緑	3.8	0.9	2.0	0.037		
382	73	11号泊	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.3	2.0	2.7	0.059		
383	73	11号泊	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.6	1.5	2.2	0.056		
384	73	11号泊	玄室北	小玉	ガラス	緑	3.8	1.8	2.2	0.037		
385	73	11号泊	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.0	1.0	2.4	0.044		
386	73	11号泊	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.2	1.3	2.6	0.050		
387	73	11号泊	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.0	1.1	2.3	0.045		
388	73	11号泊	玄室北	小玉	ガラス	緑	3.8	1.3	2.3	0.035		
389	73	11号泊	玄室北	小玉	ガラス	緑	3.6	1.2	2.7	0.035		
390	73	11号泊	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.0	1.3	2.1	0.037		
391	73	11号泊	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.0	1.1	2.0	0.038		
392	73	11号泊	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.0	1.1	2.3	0.034		
393	73	11号泊	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.0	1.4	2.0	0.032		
394	73	11号泊	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.0	1.8	2.2	0.037		
395	73	11号泊	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.0	1.2	2.2	0.034		
396	73	11号泊	玄室北	小玉	ガラス	青緑	3.4	1.0	2.0	0.025		
397	73	11号泊	玄室北	小玉	ガラス	緑	3.3	0.9	2.5	0.031		
398	73	11号泊	玄室北	小玉	ガラス	緑	3.0	0.9	2.3	0.027		
399	73	11号泊	玄室北	小玉	ガラス	錆びり緑	3.0	0.8	2.3	0.029		
400	73	11号泊	玄室北	小玉	ガラス	緑	3.1	1.0	2.2	0.024	欠損	
401	73	11号泊	玄室北	小玉	ガラス	青緑	2.8	0.9	2.0	0.021		
402	73	11号泊	玄室北	小玉	ガラス	青緑	2.6	0.7	2.0	0.018		
403	73	11号泊	玄室北	小玉	ガラス	緑	2.3	0.7	2.8	0.025		
404	73	11号泊	玄室北	小玉	ガラス	緑	2.6	0.6	2.3	0.015	欠損	
405	73	11号泊	玄室北	白玉	ガラス	緑	8.0	2.0	6.0	0.532		
406	73	11号泊	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.0	1.2	2.3	0.036	亜森	
407	73	11号泊	玄室北	小玉	ガラス	緑	5.8	2.3	5.1	0.116	1/2弱残存	
408	73	11号泊	玄室北	小玉	ガラス	緑	3.6	1.6	2.2	0.017	1/2強残存	
409	78	15号泊	石室	丸玉	鈍土	にじい黄緑SYR 6/3	8.0	(2.0)	6.0	0.195	1/2弱残存	
415	78	15号泊	石室	丸玉	鈍土	にじい黄緑SYR 7/2	(7.5)	(1.5)	6.5	0.098	1/2弱残存	
416	78	15号泊	弘前南	丸玉	鈍土	鵠灰 10YR 4/1	8.0	2.0	6.8	0.346		
417	78	15号泊	弘前南	丸玉	鈍土	鵠灰 10YR 5/1	7.5	1.8	6.5	0.366		
418	78	15号泊	弘前南	小玉	ガラス	緑	4.8	1.2	3.2	0.068		
419	78	15号泊	弘前南	小玉	ガラス	緑	5.3	1.3	3.8	0.130		
420	78	15号泊	弘前南	小玉	ガラス	緑	4.5	1.1	3.6	0.091		

測定番号	測定番号	出土位置	種類	材質	色調	直径 (mm)	孔径 (mm)	長さ (mm)	重量 (g)	備考	
421	78	15号壙	玄室南	小玉	ガラス	青緑り緑	4.3	1.2	3.3	0.077	
422	78	15号壙	玄室南	小玉	ガラス	緑	5.6	1.8	3.0	0.126	
423	78	15号壙	玄室南	小玉	ガラス	緑	4.4	1.6	3.0	0.088	
424	78	15号壙	玄室南	小玉	ガラス	緑	4.0	1.5	2.2	0.045	
425	78	15号壙	玄室南	小玉	ガラス	緑	4.3	1.3	3.2	0.083	
426	78	15号壙	玄室南	小玉	ガラス	緑	4.0	1.5	2.8	0.047	
427	78	15号壙	玄室南	小玉	ガラス	緑	4.0	1.3	2.8	0.062	
428	78	15号壙	玄室南	小玉	ガラス	緑	4.8	1.0	3.3	0.106	
429	78	15号壙	玄室北	小玉	ガラス	青緑り緑	5.4	1.0	3.3	0.142	
430	78	15号壙	玄室南	小玉	ガラス	緑	5.3	1.9	3.0	0.118	
431	78	15号壙	玄室南	小玉	ガラス	青緑り緑	5.7	1.5	4.0	0.178	
432	78	15号壙	玄室南	小玉	ガラス	緑	5.4	1.4	3.0	0.108	
433	78	15号壙	玄室南	小玉	ガラス	緑	5.2	1.5	4.0	0.124	
434	78	15号壙	玄室南	小玉	ガラス	緑	4.0	1.5	2.8	0.048	
435	78	15号壙	玄室南	白玉	ガラス	青緑り緑	6.0	1.6	3.2	0.165	
477	92	17号壙	玄室北	白玉	ガラス	緑	6.0	1.3	3.0	0.134	
478	92	17号壙	玄室北	白玉	ガラス	緑	6.7	0.9	3.5	0.133	
479	92	17号壙	玄室北	小玉	ガラス	青緑り緑	5.5	0.9	3.1	0.104	
480	92	17号壙	玄室北	小玉	ガラス	淡い青緑	4.7	1.1	3.0	0.074	
481	92	17号壙	玄室北	小玉	ガラス	淡い青緑	4.7	1.6	3.1	0.063	
482	92	17号壙	玄室北	小玉	ガラス	淡い青緑	4.3	1.4	2.6	0.045	
483	92	17号壙	玄室北	小玉	ガラス	青緑り緑	4.0	1.1	3.1	0.050	
484	92	17号壙	玄室北	小玉	ガラス	緑	3.9	1.1	2.2	0.035	
485	92	17号壙	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.0	1.2	2.2	0.037	
487	92	17号壙	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.3	2.0	2.5	0.048	
488	92	17号壙	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.0	1.4	2.4	0.041	
488	92	17号壙	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.0	1.0	2.3	0.047	
489	92	17号壙	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.0	1.0	2.6	0.051	
490	92	17号壙	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.2	1.0	2.8	0.052	
491	92	17号壙	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.2	1.0	2.6	0.049	
492	92	17号壙	玄室北	小玉	ガラス	緑	3.7	0.9	2.5	0.037	
493	92	17号壙	玄室北	小玉	ガラス	緑	3.9	1.1	2.3	0.032	
494	92	17号壙	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.2	1.1	2.3	0.037	
495	92	17号壙	玄室北	小玉	ガラス	青	4.0	1.2	2.0	0.037	
496	92	17号壙	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.0	1.1	2.3	0.036	
497	92	17号壙	玄室北	小玉	ガラス	緑	3.8	1.0	2.4	0.038	
498	92	17号壙	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.0	1.1	2.3	0.049	
499	92	17号壙	玄室	小玉	ガラス	青	3.9	1.1	2.0	0.029	
500	92	17号壙	玄室	小玉	ガラス	緑	4.0	1.0	2.5	0.043	
501	92	17号壙	玄室	小玉	ガラス	緑	4.0	1.0	2.3	0.045	
502	92	17号壙	玄室	小玉	ガラス	青	3.9	1.4	2.1	0.033	
503	92	17号壙	玄室	小玉	ガラス	青	4.0	1.0	2.2	0.040	
504	92	17号壙	玄室北	小玉	ガラス	青	4.0	1.1	2.3	0.044	
505	92	17号壙	玄室北	小玉	ガラス	青	4.0	1.4	3.1	0.055	
506	92	17号壙	玄室北	小玉	ガラス	青	4.0	1.2	2.4	0.043	
507	92	17号壙	玄室北	小玉	ガラス	緑	3.8	1.0	2.2	0.031	
508	92	17号壙	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.3	1.9	3.0	0.044	
509	92	17号壙	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.0	1.1	2.8	0.047	
510	92	17号壙	玄室北	小玉	ガラス	緑	3.9	1.1	2.4	0.041	
511	92	17号壙	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.0	1.1	2.4	0.043	
512	92	17号壙	玄室北	小玉	ガラス	緑	4.0	1.1	2.2	0.045	
513	92	17号壙	玄室	小玉	ガラス	緑	3.7	1.0	2.3	0.034	
514	92	17号壙	玄室	小玉	ガラス	緑	3.7	1.8	2.3	0.031	
515	92	17号壙	玄室北	勾玉	ガラス	灰白 黄茶	長さ 35.0	3.0	11.0	9.069 欠損	
516	92	17号壙	玄室北	丸玉	ガラス	黒上	焦 7.SYR 2/1	8.3	1.5	6.0	0.430
563	185	32号壙	石室北	小玉	ガラス	淡い青緑	4.4	1.0	3.6	0.072	
864	185	32号壙	石室北	小玉	ガラス	淡い青緑	4.1	1.0	3.9	0.062	
865	185	32号壙	石室北	小玉	ガラス	淡い青緑	4.2	1.7	2.5	0.031 欠損	
866	185	32号壙	石室北	小玉	ガラス	淡い青緑	3.8	1.4	2.6	0.041	
867	185	32号壙	石室北	小玉	ガラス	淡い青緑	5.0	2.0	3.2	0.120	
868	185	32号壙	石室北	小玉	ガラス	淡い青緑	3.9	1.0	2.4	0.042	
869	185	32号壙	心室	小玉	ガラス	淡い青緑	4.5	1.2	3.0	0.062	
870	185	32号壙	心室	小玉	ガラス	淡い青緑	3.8	1.0	2.0	0.034	
871	185	32号壙	心室	小玉	ガラス	緑	3.6	1.0	2.2	0.036	
872	185	32号壙	心室	小玉	ガラス	緑	4.0	1.0	2.5	0.046	
873	185	32号壙	心室	小玉	ガラス	緑	4.0	0.8	2.3	0.011	
874	185	32号壙	石室	小玉	ガラス	緑	3.2	1.0	2.2	0.028	
875	185	32号壙	石室	小玉	ガラス	緑	4.2	1.0	2.2	0.049	
876	185	32号壙	石室	小玉	ガラス	緑	4.7	0.9	2.3	0.035	
877	185	32号壙	心室	小玉	ガラス	緑	4.6	1.2	2.1	0.048	
878	185	32号壙	石室	小玉	ガラス	緑	3.2	1.2	2.6	0.025	
879	185	32号壙	石室	小玉	ガラス	緑	4.0	1.0	2.0	0.038	
880	185	32号壙	石室	小玉	ガラス	緑	3.8	0.9	2.2	0.039	
881	185	32号壙	心室	小玉	ガラス	緑	4.0	1.1	2.1	0.037	

造物番号	標題	標題名	出土位置	種類	材質	色調	高さ (mm)	直径 (mm)	奥行き (mm)	重量 (g)	備考
882	185	32号墳	石室	小玉	ガラス	黒	3.8	1.1	2.2	0.049	
883	185	32号墳	石室	小玉	ガラス	緑	4.0	1.1	2.2	0.038	
884	185	32号墳	石室	小玉	ガラス	緑	4.0	1.0	2.3	0.043	
885	185	32号墳	石室	小玉	ガラス	緑	3.8	1.1	2.6	0.046	
886	185	32号墳	石室北	小玉	ガラス	黒	4.3	1.0	2.5	0.049	
887	185	32号墳	石室北	小玉	ガラス	黒	3.3	1.0	2.3	0.031	
888	185	32号墳	石室北	白玉	ガラス	黒	8.9	4.1	4.0	0.240	
889	185	32号墳	石室北	白玉	ガラス	黒緑	6.4	1.8	6.2	0.377	
890	185	32号墳	石室北	白玉	ガラス	黒	7.0	2.2	6.1	0.377	
891	185	32号墳	石室北	白玉	ガラス	黒	6.2	2.2	4.0	0.217	
892	185	32号墳	石室北	白玉	ガラス	青緑	6.2	1.5	3.9	0.209	
893	185	32号墳	石室北	白玉	ガラス	黒	7.3	3.0	4.6	0.239	
894	185	32号墳	石室	白玉	ガラス	黒	6.0	1.9	5.3	0.228	
895	185	32号墳	石室	白玉	ガラス	黒	6.2	1.8	4.0	0.213	欠損
896	185	32号墳	石室	小玉	ガラス	緑	3.7	1.0	2.1	0.036	
897	185	32号墳	石室	小玉	ガラス	黒緑	3.8	1.0	1.9	0.038	
898	185	32号墳	石室	小玉	ガラス	青緑	3.7	2.3	4.3	0.161	
899	185	32号墳	石室	小玉	ガラス	波状	4.0	1.1	2.6	0.054	
900	185	32号墳	石室北	小玉	ガラス	淡い青緑	5.0	2.0	2.2	0.039	
901	185	32号墳	石室北	小玉	ガラス	黒	3.3	1.0	2.1	0.024	
902	185	32号墳	石室北	小玉	ガラス	黒	3.8	1.1	2.5	0.038	
903	185	32号墳	石室北	小玉	ガラス	黒	4.2	1.1	3.0	0.055	
904	185	32号墳	石室北	小玉	ガラス	黒	4.9	1.3	2.2	0.037	
905	185	32号墳	石室北	小玉	ガラス	黒	3.9	0.9	2.4	0.045	
906	185	32号墳	石室北	小玉	ガラス	黒	4.0	1.0	2.0	0.027	
907	185	32号墳	石室	小玉	ガラス	緑	4.0	0.9	2.8	0.046	
908	185	32号墳	石室	小玉	ガラス	緑	4.0	0.9	2.7	0.049	
909	185	32号墳	石室	小玉	ガラス	黒	4.1	1.0	2.7	0.048	
910	185	32号墳	石室	小玉	ガラス	黒	4.0	1.0	2.4	0.044	
911	185	32号墳	石室	小玉	ガラス	黒	4.0	0.9	2.2	0.045	
912	185	32号墳	石室	小玉	ガラス	黒	3.2	0.9	2.6	0.038	
913	185	32号墳	石室	小玉	ガラス	黒	4.0	1.0	2.5	0.048	
914	185	32号墳	石室北	小玉	ガラス	黒	4.0	0.9	2.8	0.051	欠損
915	185	32号墳	石室北	小玉	ガラス	緑	3.5	1.0	2.7	0.036	
916	185	32号墳	石室北	小玉	ガラス	淡い青緑	4.2	1.3	2.8	0.055	
917	185	32号墳	石室北	小玉	ガラス	淡い青緑	4.3	1.2	3.3	0.071	
918	185	32号墳	石室北	小玉	ガラス	淡い青緑	4.0	1.0	2.6	0.036	
919	185	32号墳	石室	小玉	ガラス	黒	3.3	1.0	2.1	0.027	
920	185	32号墳	石室	小玉	ガラス	黒	3.5	1.0	1.9	0.024	
921	185	32号墳	石室北	小玉	ガラス	黒	4.0	1.1	2.3	0.038	
922	185	32号墳	石室北	小玉	ガラス	黒	3.1	1.1	2.6	0.023	
923	185	32号墳	石室北	小玉	ガラス	黒	3.0	0.8	2.0	0.023	
924	185	32号墳	石室北	小玉	ガラス	黒	4.0	1.0	2.2	0.037	
925	185	32号墳	石室北	小玉	ガラス	黒	4.7	1.0	3.0	0.039	
926	185	32号墳	石室北	小玉	ガラス	黒	3.2	1.0	2.2	0.033	
927	185	32号墳	石室北	小玉	ガラス	淡い青緑	4.0	1.2	2.8	0.043	
928	185	32号墳	石室北	小玉	ガラス	黒	4.4	1.0	2.7	0.059	
929	185	32号墳	石室北	小玉	ガラス	黒	3.3	1.1	2.9	0.022	
930	185	32号墳	石室北	小玉	ガラス	黒	3.7	1.5	2.0	0.019	
931	185	32号墳	石室北	小玉	ガラス	黒	3.9	1.1	2.1	0.034	
932	185	32号墳	石室北	小玉	ガラス	黒	4.0	1.0	2.5	0.044	
933	185	32号墳	石室北	小玉	ガラス	黒	3.5	1.0	3.0	0.040	
934	185	32号墳	石室北	小玉	ガラス	黒	3.2	1.1	2.1	0.027	
935	185	32号墳	石室北	小玉	ガラス	黒	4.0	0.9	2.5	0.043	
936	185	32号墳	石室北	小玉	ガラス	青	3.6	1.0	2.0	0.022	
937	185	32号墳	石室北	小玉	ガラス	黒	3.9	1.0	2.5	0.049	
938	185	32号墳	石室	小玉	ガラス	黒	4.0	0.8	2.7	0.046	
939	185	32号墳	石室	小玉	ガラス	黒	4.0	1.0	2.6	0.034	
940	185	32号墳	石室	小玉	ガラス	黒	3.5	1.2	2.5	0.036	
941	185	32号墳	石室	小玉	ガラス	黒	4.0	1.0	2.7	0.047	
942	185	32号墳	石室北	小玉	ガラス	黒	4.0	1.1	2.3	0.044	
943	185	32号墳	石室北	小玉	ガラス	黒	4.2	1.2	2.6	0.050	
944	185	32号墳	石室北	小玉	ガラス	黒	4.4	1.0	2.6	0.047	
945	185	32号墳	石室北	小玉	ガラス	黒	4.0	1.0	2.8	0.051	
946	185	32号墳	石室北	小玉	ガラス	黒	3.5	1.0	1.9	0.025	
947	185	32号墳	石室北	小玉	ガラス	淡い青緑	4.0	1.3	2.3	0.040	欠損
948	185	32号墳	石室北	小玉	ガラス	黒	4.0	0.9	2.5	0.043	
949	185	32号墳	石室北	小玉	ガラス	黒	4.0	1.1	2.0	0.040	
950	185	32号墳	石室北	小玉	ガラス	黒	4.2	1.0	2.3	0.046	
951	185	32号墳	石室北	小玉	ガラス	黒	4.0	1.0	2.7	0.045	
952	185	32号墳	石室北	小玉	ガラス	黒	4.0	1.0	2.4	0.041	
953	185	32号墳	石室北	小玉	ガラス	黒	4.0	1.0	2.2	0.037	
954	185	32号墳	石室北	小玉	ガラス	黒	4.0	1.1	2.5	0.041	
955	185	32号墳	石室北	小玉	ガラス	黒	3.9	1.1	2.2	0.028	

器物 番号	鉢 曲号	造形名	出土位置	種類	材質	色 調	直 径 (mm)	孔 径 (mm)	高 さ (mm)	重 量 (g)	備 考
956	185	32号埴	石室北	小玉	ガラス	赤	4.0	0.9	2.5	0.040	
957	185	32号埴	石室北	小玉	ガラス	赤	4.1	1.0	2.8	0.048	
958	185	32号埴	石室北	小玉	ガラス	赤	4.0	0.9	2.5	0.049	
959	185	32号埴	石室北	小玉	ガラス	赤	4.0	1.0	2.7	0.050	
960	185	32号埴	石室北	小玉	ガラス	赤	4.3	1.0	2.3	0.044	
961	185	32号埴	石室北	小玉	ガラス	赤	4.0	1.1	2.3	0.045	
962	185	32号埴	石室北	小玉	ガラス	赤	4.0	1.0	2.4	0.040	
963	185	32号埴	石室北	小玉	ガラス	赤	4.0	1.0	2.2	0.039	
964	185	32号埴	石室北	小玉	ガラス	赤	4.5	1.0	2.9	0.055	
965	185	32号埴	石室北	小玉	ガラス	赤	4.6	0.9	2.3	0.049	
966	185	32号埴	石室北	小玉	ガラス	赤	4.2	1.1	2.1	0.024	
967	185	32号埴	石室北	小玉	ガラス	赤	3.4	1.0	2.1	0.026	
968	185	32号埴	石室北	小玉	ガラス	水色	5.0	1.3	2.9	0.045	欠損
969	185	32号埴	石室北	小玉	ガラス	赤	3.7	0.7	2.9	0.038	欠損
970	185	32号埴	石室北	小玉	ガラス	赤	3.3	1.0	2.1	0.022	欠損
971	185	32号埴	石室北	小玉	ガラス	赤	(4.0)	0.9	2.7	0.020	欠損
972	185	32号埴	石室北	小玉	ガラス	赤	(4.0)	1.0	2.5	0.018	欠損
973	185	32号埴	石室北	小玉	ガラス	赤	(4.0)	1.2	2.3	0.015	欠損
974	185	32号埴	玄室	小玉	ガラス	淡い青緑	5.6	1.9	3.1	0.088	
975	185	32号埴	玄室	小玉	ガラス	淡い青緑	4.0	1.5	2.9	0.045	
976	185	32号埴	玄室	小玉	ガラス	赤	4.1	1.0	2.7	0.056	
977	185	32号埴	玄室	小玉	ガラス	淡い青緑	4.7	1.6	2.3	0.044	
978	185	32号埴	玄室	小玉	ガラス	赤	4.0	0.9	2.7	0.052	
979	185	32号埴	玄室	小玉	ガラス	赤	4.1	1.0	2.4	0.058	
980	185	32号埴	玄室	小玉	ガラス	赤	4.3	1.2	2.5	0.052	
981	185	32号埴	玄室	小玉	ガラス	赤	3.8	1.1	2.6	0.059	
982	185	32号埴	玄室	小玉	ガラス	淡い青緑	4.0	1.1	2.2	0.044	
983	185	32号埴	玄室	小玉	ガラス	赤	4.5	1.5	2.5	0.052	
984	185	32号埴	玄室	小玉	ガラス	赤	4.1	1.0	2.3	0.051	
985	185	32号埴	玄室	小玉	ガラス	赤	4.2	1.2	2.2	0.048	
986	185	32号埴	玄室	小玉	ガラス	赤	3.5	0.9	2.0	0.024	
987	185	32号埴	玄室	小玉	ガラス	赤	5.0	2.5	4.8	0.110	
988	185	32号埴	玄室	小玉	ガラス	赤	4.5	1.5	2.8	0.055	
989	185	32号埴	玄室	小玉	ガラス	赤	4.0	1.2	3.7	0.063	
990	185	32号埴	玄室	小玉	ガラス	赤	4.5	1.2	2.8	0.049	
991	185	32号埴	玄室	小玉	ガラス	赤	4.0	1.0	2.9	0.060	
992	185	32号埴	玄室	小玉	ガラス	赤	4.0	1.1	2.0	0.037	
993	185	32号埴	玄室	小玉	ガラス	赤	3.4	1.0	2.6	0.032	
994	185	32号埴	玄室	小玉	ガラス	赤	3.3	1.0	1.9	0.026	
995	185	32号埴	玄室	白玉	ガラス	赤	7.4	1.2	4.8	0.384	
996	185	32号机	玄室	白玉	ガラス	淡い青緑	7.0	2.1	4.0	0.194	
997	185	32号机	玄室	白玉	ガラス	赤	7.9	1.5	5.2	0.380	
998	185	32号机	玄室	白玉	ガラス	赤	7.7	1.8	5.8	0.430	
999	185	32号机	玄室	白玉	ガラス	羅紺り緑	7.8	2.9	6.0	0.355	
1000	185	32号机	玄室	白玉	ガラス	赤	7.3	2.2	5.4	0.333	
1001	185	32号机	玄室	白玉	ガラス	羅紺り緑	6.2	1.5	4.8	0.241	
1002	185	32号机	玄室	白玉	ガラス	羅紺り緑	8.0	2.1	5.3	0.472	
1003	185	32号机	玄室	白玉	ガラス	赤	6.2	1.0	4.9	0.245	
1004	185	32号机	玄室	小玉	ガラス	紫呂呂り緑	5.2	2.0	4.6	0.162	
1005	185	32号机	玄室	小玉	ガラス	羅紺り緑	5.6	1.1	3.4	0.133	
1006	185	32号机	玄室	小玉	ガラス	越	4.8	1.8	2.9	0.074	
1007	185	32号机	玄室	小玉	ガラス	淡い青緑	3.9	1.2	3.6	0.049	
1008	185	32号机	玄室	小玉	ガラス	淡い青緑	3.8	1.0	3.0	0.060	
1009	185	32号机	玄室	小玉	ガラス	赤	4.2	1.1	2.7	0.051	
1010	185	32号机	玄室	小玉	ガラス	赤	4.3	1.0	3.0	0.060	
1011	185	32号机	玄室	小玉	ガラス	赤	5.2	1.2	3.3	0.117	
1012	185	32号机	玄室	小玉	ガラス	赤	4.6	1.1	2.9	0.053	
1013	185	32号机	玄室	小玉	ガラス	淡い青緑	3.7	1.0	3.3	0.048	
1014	185	32号机	玄室	小玉	ガラス	齒掛り緑	3.8	1.1	2.6	0.043	
1015	185	32号机	玄室	小玉	ガラス	齒掛り緑	4.3	1.1	2.8	0.059	
1016	185	32号机	玄室	小玉	ガラス	赤	4.0	1.0	2.4	0.040	
1017	185	32号机	玄室	小玉	ガラス	淡い青緑	4.8	1.1	2.8	0.063	
1018	185	32号机	玄室	小玉	ガラス	赤	4.8	1.2	2.8	0.064	
1019	185	32号机	玄室	小玉	ガラス	赤	3.9	1.2	2.7	0.032	
1020	185	32号机	玄室	小玉	ガラス	赤	3.3	0.9	2.9	0.025	
1021	185	32号机	玄室	小玉	ガラス	赤	4.2	1.2	1.5	0.048	
1022	185	32号机	玄室	小玉	ガラス	赤	4.0	1.2	2.5	0.051	
1023	185	32号机	玄室	小玉	ガラス	赤	4.2	1.2	2.5	0.053	
1024	185	32号机	玄室	小玉	ガラス	赤	4.0	1.1	2.6	0.032	
1025	185	32号机	玄室	小玉	ガラス	淡い青緑	4.7	1.1	3.7	0.077	
1026	185	32号机	玄室	小玉	ガラス	赤	4.0	1.0	2.2	0.038	
1027	185	32号机	玄室	小玉	ガラス	赤	4.1	0.9	3.0	0.064	
1028	185	32号机	玄室	小玉	ガラス	赤	4.2	1.1	3.0	0.057	
1029	185	32号机	玄室	小玉	ガラス	赤	4.0	1.2	2.4	0.038	

造物番号	牌印番号	造物名	出上位置	種類	材質	色調	直径 (mm)	孔径 (mm)	片さ (mm)	重 量 (g)	備 考
1030	183	32号鏡	玄室	小玉	ガラス	緑	4.9	1.3	2.8	0.049	
1031	185	32号鏡	玄室	小玉	ガラス	緑	3.7	1.1	2.9	0.041	
1032	185	32号鏡	玄室	小玉	ガラス	緑勝り緑	3.5	1.2	2.2	0.036	
1033	185	32号鏡	玄室	小玉	ガラス	緑	4.6	1.0	3.0	0.068	
1034	185	32号鏡	玄室	小玉	ガラス	緑勝り緑	4.3	1.4	3.1	0.064	
1035	185	32号鏡	玄室	小玉	ガラス	水色	4.0	1.3	2.1	0.035	
1036	185	32号鏡	玄室	小玉	ガラス	緑	5.0	1.7	2.9	0.079	
1037	185	32号鏡	玄室	小玉	ガラス	緑	4.6	1.0	3.0	0.064	
1038	185	32号鏡	玄室	小玉	ガラス	緑	3.5	1.1	2.7	0.040	
1039	185	32号鏡	玄室	小玉	ガラス	緑	4.5	1.2	3.0	0.056	
1040	185	32号鏡	玄室	小玉	ガラス	緑	3.8	1.0	2.1	0.031	
1041	185	32号鏡	玄室	小玉	ガラス	緑	3.3	1.1	2.0	0.021	
1042	185	32号鏡	玄室	小玉	ガラス	緑	4.1	1.5	2.3	0.047	
1043	185	32号鏡	玄室	小玉	ガラス	緑	4.5	1.1	2.9	0.057	
1044	185	32号鏡	玄室	小玉	ガラス	緑勝り緑	3.2	1.0	2.2	0.026	
1045	185	32号鏡	玄室	小玉	ガラス	淡い青緑	4.4	1.3	2.7	0.053	
1046	185	32号鏡	玄室	小玉	ガラス	緑	3.9	1.1	2.6	0.039	
1047	185	32号鏡	玄室	小玉	ガラス	水色	4.0	1.2	2.1	0.038	
1048	185	32号鏡	玄室	小玉	ガラス	緑	4.2	1.2	2.9	0.050	
1049	185	32号鏡	玄室	小玉	ガラス	緑	4.0	1.0	2.7	0.046	
1050	185	32号鏡	玄室	小玉	ガラス	緑	4.0	1.1	2.9	0.056	
1051	185	32号鏡	玄室	小玉	ガラス	緑	4.2	1.5	2.5	0.054	
1052	185	32号鏡	玄室	小玉	ガラス	流い青緑	5.0	1.2	2.8	0.054	
1053	185	32号鏡	玄室	小玉	ガラス	緑	3.3	1.0	2.7	0.034	
1054	185	32号鏡	玄室	小玉	ガラス	緑	4.3	1.2	2.6	0.056	
1055	185	32号鏡	玄室	小玉	ガラス	緑	3.8	1.0	2.2	0.034	
1056	185	32号鏡	玄室	小玉	ガラス	緑	3.8	1.0	2.3	0.032	
1057	185	32号鏡	玄室	小玉	ガラス	緑	4.0	1.2	2.2	0.041	
1058	185	32号鏡	玄室	小玉	ガラス	緑	3.8	1.1	2.4	0.036	
1059	185	32号鏡	玄室	小玉	ガラス	緑	4.2	1.0	3.0	0.062	
1060	185	32号鏡	玄室	小玉	ガラス	緑	4.0	1.3	2.1	0.040	
1061	185	32号鏡	玄室	小玉	ガラス	緑	4.1	1.2	2.9	0.056	
1062	185	32号鏡	玄室	小玉	ガラス	緑	4.2	1.3	2.4	0.050	
1063	185	32号鏡	玄室	小玉	ガラス	淡い青緑	4.7	1.2	3.5	0.082	
1064	185	32号鏡	玄室	小玉	ガラス	緑	3.5	1.0	2.2	0.029	
1065	185	32号鏡	玄室	小玉	ガラス	緑	4.3	1.1	2.7	0.055	
1066	185	32号鏡	玄室	小玉	ガラス	緑	4.0	1.0	2.6	0.052	
1067	185	32号鏡	玄室	小玉	ガラス	緑	3.7	1.1	3.0	0.055	
1068	185	32号鏡	玄室	小玉	ガラス	緑	4.1	2.0	2.7	0.042	
1069	185	32号鏡	玄室	小玉	ガラス	緑	4.4	1.0	3.0	0.052	
1070	185	32号鏡	玄室	小玉	ガラス	水色	3.8	1.0	1.9	0.020	
1071	185	32号鏡	玄室	小玉	ガラス	緑	4.6	1.2	2.7	0.043	
1072	185	32号鏡	玄室	小玉	ガラス	淡い青緑	3.3	1.1	3.0	0.034	
1073	185	32号鏡	玄室	小玉	ガラス	緑	3.7	1.0	2.2	0.037	
1074	185	32号鏡	玄室	小玉	ガラス	緑	4.0	1.0	2.8	0.051	
1075	185	32号鏡	玄室	小玉	ガラス	緑	4.6	1.1	2.8	0.050	
1076	185	32号鏡	玄室	小玉	ガラス	緑	4.2	1.1	2.8	0.054	
1077	185	32号鏡	玄室	小玉	ガラス	緑	4.8	1.0	3.0	0.074	
1078	185	32号鏡	玄室	小玉	ガラス	淡い青緑	4.2	1.1	3.3	0.055	
1079	185	32号鏡	玄室	小玉	ガラス	緑	4.0	1.0	2.5	0.041	
1080	185	32号鏡	玄室	小玉	ガラス	緑	4.2	1.1	2.5	0.047	
1081	185	32号鏡	玄室	小玉	ガラス	緑	4.6	1.0	2.8	0.035	
1082	185	32号鏡	玄室	小玉	ガラス	緑	3.7	1.2	2.2	0.036	
1083	185	32号鏡	玄室	小玉	ガラス	緑勝り緑	3.7	1.1	2.3	0.038	
1084	185	32号鏡	玄室	小玉	ガラス	緑	4.4	1.0	2.8	0.050	
1085	185	32号鏡	玄室	小玉	ガラス	水色	4.3	1.6	3.0	0.049	
1086	185	32号鏡	玄室	小玉	ガラス	緑	4.6	1.2	2.5	0.055	
1087	185	32号鏡	玄室	小玉	ガラス	緑	4.0	1.1	2.3	0.046	
1088	185	32号鏡	玄室	小玉	ガラス	緑	4.0	1.1	2.2	0.040	
1089	185	32号鏡	玄室	小玉	ガラス	緑	3.8	1.1	2.3	0.035	
1090	185	32号鏡	玄室	小玉	ガラス	緑	3.9	1.0	2.3	0.038	
1091	185	32号鏡	玄室	小玉	ガラス	淡い青緑	4.3	1.1	3.9	0.068	
1092	185	32号鏡	玄室	小玉	ガラス	緑	3.8	1.0	2.9	0.048	
1093	185	32号鏡	玄室	小玉	ガラス	淡い青緑	4.0	1.2	2.6	0.046	
1094	185	32号鏡	玄室	小玉	ガラス	緑	3.8	1.3	2.1	0.039	
1095	185	32号鏡	玄室	小玉	ガラス	緑	4.2	0.9	3.9	0.061	
1096	185	32号鏡	玄室	小玉	ガラス	緑	3.9	1.6	2.0	0.033	
1097	185	32号鏡	玄室	小玉	ガラス	緑	3.8	1.0	2.6	0.033	
1098	185	32号鏡	玄室	小玉	ガラス	淡い青緑	4.0	1.2	2.9	0.046	
1099	185	32号鏡	玄室	小玉	ガラス	緑	3.7	1.1	2.3	0.037	
1100	185	32号鏡	玄室	小玉	ガラス	緑	4.0	1.1	2.2	0.033	
1101	185	32号鏡	玄室	小玉	ガラス	緑	4.5	1.0	3.6	0.064	
1102	185	32号鏡	玄室	小玉	ガラス	緑	3.3	1.0	2.6	0.025	
1103	185	32号鏡	玄室	小玉	ガラス	緑	4.2	1.2	2.5	0.049	

遺物番号	博認番号	遺構名	出土位置	種類	材質	色調	直 径 (mm)	孔 径 (mm)	長 度 (mm)	重 量 (g)	備 考
1104	185	32号堆	玄室	小玉	ガラス	水色	3.9	1.1	3.0	0.051	
1105	185	32号堆	玄室	小玉	ガラス	緑	4.2	1.1	2.8	0.053	
1106	185	32号堆	玄室	小玉	ガラス	青	4.2	1.1	2.9	0.056	
1107	185	32号堆	玄室	小玉	ガラス	淡い青緑	3.5	1.2	2.6	0.034	
1108	185	32号堆	玄室	小玉	ガラス	青	4.3	1.0	2.8	0.063	
1109	185	32号堆	玄室	小玉	ガラス	緑	3.9	1.0	2.5	0.034	
1110	185	32号堆	玄室	小玉	ガラス	淡い青緑	3.9	1.1	2.9	0.042	
1111	185	32号堆	玄室	小玉	ガラス	緑	3.6	1.2	2.0	0.030	
1112	185	32号堆	玄室	小玉	ガラス	緑	3.9	1.0	2.0	0.035	
1113	185	32号堆	玄室	小玉	ガラス	緑	4.5	1.2	3.0	0.061	
1114	185	32号堆	玄室	小玉	ガラス	緑	4.9	1.1	2.1	0.035	
1115	185	32号堆	玄室	小玉	ガラス	緑	3.8	1.0	2.3	0.037	
1116	185	32号堆	玄室	小玉	ガラス	緑	3.7	1.0	2.3	0.030	
1117	185	32号堆	玄室	小玉	ガラス	緑	3.9	1.1	2.0	0.030	
1118	185	32号堆	玄室	小玉	ガラス	緑	3.6	1.2	2.0	0.027	
1119	185	32号堆	玄室	小玉	ガラス	緑	3.9	1.1	2.6	0.038	
1120	185	32号堆	玄室	小玉	ガラス	緑	3.5	1.0	2.1	0.029	
1121	185	32号堆	玄室	小玉	ガラス	緑	3.8	1.0	2.0	0.033	
1122	185	32号堆	玄室	小玉	ガラス	緑	3.5	1.2	2.0	0.030	
1123	185	32号堆	玄室	小玉	ガラス	緑	4.0	1.0	2.0	0.031	
1124	185	32号堆	玄室	白玉	ガラス	白	6.1	1.7	4.0	0.050	破片
1125	185	32号堆	玄室	小玉	ガラス	緑	3.9	1.1	2.5	0.030	破片
1126	185	32号堆	玄室	小玉	ガラス	緑	5.8	2.0	4.9	0.050	破片
1127	185	32号堆	玄室	小玉	ガラス	緑	3.2	1.6	2.3	0.021	破片
1128	185	32号堆	玄室	小玉	ガラス	淡い青緑	4.2	1.1	2.6	0.025	破片
1129	185	32号堆	玄室	小玉	ガラス	緑	3.8	0.9	2.2	0.030	破片
1130	185	32号堆	玄室	小玉	ガラス	淡い青緑	4.0	1.0	2.0	0.023	破片
1131	185	32号堆	玄室	小玉	ガラス	緑	3.5	0.9	2.3	0.019	破片
1132	185	32号堆	玄室	小玉	ガラス	淡い青緑	3.2	1.0	2.8	0.020	破片
1133	185	32号堆	玄室	小玉	ガラス	黄緑	4.1	0.9	2.8	0.016	破片
1134	185	32号堆	白玉	ガラス	緑	6.0	1.9	5.6	0.271		
1135	185	32号堆	白玉	ガラス	緑	6.0	2.2	5.0	0.285		
1136	185	32号堆	白玉	ガラス	緑	6.3	3.0	5.0	0.211		
1137	185	32号堆	白玉	ガラス	緑	7.0	2.0	5.9	0.298		
1138	185	32号堆	白玉	ガラス	淡い青緑	4.4	1.1	2.3	0.044		
1139	185	32号堆	白玉	ガラス	緑	8.0	2.0	5.7	0.372		
1140	185	32号堆	白玉	ガラス	淡い緑	3.7	1.0	2.7	0.039		
1141	185	32号堆	白玉	ガラス	緑	3.5	1.1	2.2	0.045		
1142	185	32号堆	白玉	ガラス	緑	4.5	1.0	2.5	0.053		
1143	185	32号堆	白玉	ガラス	淡い緑	3.2	0.9	2.0	0.026		
1144	185	32号堆	玄室北	勾玉	瑪瑙	明暦	長さ 22.0	2.7	8.0	2.527	
1145	185	32号堆	玄室北	勾玉	瑪瑙	無縫板	長さ 30.5	3.2	10.0	6.287	
1251	227	41号堆	白玉	ガラス	青緑	7.0	2.2	3.9	0.251		
1252	227	41号堆	白玉	ガラス	緑	6.0	2.0	4.2	0.251	調整瓶？	
1253	227	41号堆	白玉	ガラス	青緑	7.0	1.9	3.8	0.153		
1254	227	41号堆	白玉	ガラス	淡青	6.8	2.9	3.5	0.197		
1255	227	41号堆	白玉	ガラス	淡青	6.3	1.9	4.9	0.272		
1499	306	55号堆	玄室	小玉	ガラス	緑	3.9	1.0	2.7	0.044	
1500	306	55号堆	玄室	小玉	ガラス	緑	3.8	1.0	3.3	0.061	
1501	306	55号堆	玄室	小玉	ガラス	緑	3.8	1.2	2.2	0.035	
1802	306	55号堆	玄室	小玉	ガラス	緑	3.7	0.8	2.4	0.042	
1503	306	55号堆	玄室	小玉	ガラス	緑	4.0	1.3	3.0	0.056	
1504	306	55号堆	玄室	小玉	ガラス	緑	3.7	0.8	2.8	0.048	
1505	306	55号堆	玄室	小玉	ガラス	緑	3.8	0.8	2.5	0.047	
1506	306	55号堆	玄室	小玉	ガラス	緑	4.0	1.0	3.0	0.056	
1507	306	55号堆	玄室	小玉	ガラス	緑	4.0	1.5	2.3	0.044	
1508	306	55号堆	玄室	小玉	ガラス	緑	4.0	1.0	3.0	0.054	
1509	306	55号堆	玄室	小玉	ガラス	緑	4.3	1.2	3.0	0.052	
1510	306	55号堆	玄室	小玉	ガラス	緑	4.0	1.6	2.6	0.043	
1511	306	55号堆	玄室	小玉	ガラス	緑	4.0	0.9	2.0	0.062	
1512	306	55号堆	玄室	小玉	ガラス	緑	4.1	1.0	3.0	0.055	
1513	306	55号堆	玄室	小玉	ガラス	緑	4.1	1.0	2.5	0.047	
1514	306	55号堆	玄室	小玉	ガラス	青	4.0	1.0	2.1	0.040	
1515	306	55号堆	玄室	小玉	ガラス	青	4.0	1.2	2.2	0.037	
1516	306	55号堆	玄室	小玉	ガラス	青	4.0	1.1	2.9	0.051	
1517	306	55号堆	御道	小玉	ガラス	緑	4.0	1.0	2.8	0.053	
1518	306	55号堆	御道	小玉	ガラス	緑	4.1	1.1	2.7	0.048	
1519	306	55号堆	御道	小玉	ガラス	青	4.1	1.0	3.0	0.046	
1520	306	55号堆	石室	白玉	ガラス	青緑	6.0	2.4	2.3	0.078	
1521	306	55号堆	石室	白玉	ガラス	緑	6.0	1.7	4.0	0.121	欠損
1522	306	55号堆	石室	小玉	ガラス	緑	5.9	1.0	3.6	0.084	
1523	306	55号堆	石室	小玉	ガラス	緑	3.7	1.1	2.7	0.045	
1524	306	55号堆	石室	小玉	ガラス	緑	3.7	1.4	2.6	0.044	
1525	306	55号堆	石室	小玉	ガラス	緑	4.4	1.4	2.0	0.041	

植物 番号	部 番号	種 名	出 土位 置	種 類	材 質	色 調	直 径 (mm)	孔 径 (mm)	長 さ (mm)	重 量 (g)	備 考
1526	306	55号壙	石室	小玉	ガラス	緑	4.3	1.4	2.6	0.050	
1527	306	55号壙	石室	小玉	ガラス	緑	4.0	1.2	3.0	0.050	
1528	306	55号壙	石室	小玉	ガラス	緑	3.8	1.1	0.3	0.049	
1529	306	55号壙	石室	小玉	ガラス	緑	3.8	1.2	2.0	0.028	
1530	306	55号壙	石室	小玉	ガラス	緑	3.7	1.0	3.2	0.059	
1531	306	55号壙	石室	小玉	ガラス	緑	3.6	1.0	2.6	0.034	
1532	306	55号壙	石室	小玉	ガラス	緑	4.0	1.4	2.3	0.041	
1533	306	55号壙	石室	小玉	ガラス	緑	3.6	1.4	2.5	0.040	
1534	306	55号壙	石室	小玉	ガラス	緑	3.8	1.0	3.0	0.056	
1535	306	55号壙	心室	小玉	ガラス	緑	3.6	0.8	2.3	0.036	
1536	306	55号壙	石室	小玉	ガラス	緑	3.6	1.3	2.3	0.038	
1537	306	55号壙	石室	小玉	ガラス	緑	3.7	1.3	2.3	0.039	
1538	306	55号壙	石室	小玉	ガラス	緑	3.5	1.2	2.0	0.028	
1539	306	55号壙	石室	小玉	ガラス	緑	2.8	0.7	2.8	0.048	
1540	306	55号壙	石室	小玉	ガラス	緑	3.6	1.2	2.2	0.038	
1541	306	55号壙	石室	小玉	ガラス	緑	4.0	1.3	2.6	0.047	欠損
1542	306	55号壙	石室	小玉	ガラス	緑	3.8	1.2	2.8	0.043	
1543	306	55号壙	石室	小玉	ガラス	緑	4.3	2.0	2.8	0.059	
1544	306	55号壙	石室	小玉	ガラス	緑	3.6	1.5	2.0	0.031	
1545	306	55号壙	石室	小玉	ガラス	緑	4.0	0.8	2.7	0.051	
1546	306	55号壙	石室	小玉	ガラス	緑	3.7	0.8	2.3	0.041	
1547	306	55号壙	石室	小玉	ガラス	緑	3.7	0.8	2.7	0.048	
1548	306	55号壙	石室	小玉	ガラス	緑	3.8	1.1	2.0	0.040	
1549	306	55号壙	石室	小玉	ガラス	緑	4.0	1.8	2.3	0.045	
1550	306	55号壙	石室	小玉	ガラス	緑	4.0	1.2	2.0	0.035	
1551	306	55号壙	石室	小玉	ガラス	緑	4.0	2.0	2.3	0.038	
1552	306	55号壙	石室	小玉	ガラス	緑	3.7	1.2	2.7	0.040	
1553	306	55号壙	石室	小玉	ガラス	緑	3.6	1.2	2.3	0.036	
1554	306	55号壙	石室	小玉	ガラス	緑	3.7	1.0	2.2	0.045	
1555	306	55号壙	石室	小玉	ガラス	緑	3.7	0.8	2.2	0.032	
1556	306	55号壙	石室	小玉	ガラス	緑	3.8	1.5	2.2	0.031	
1557	306	55号壙	石室	小玉	ガラス	緑	3.8	0.9	3.0	0.052	
1558	306	55号壙	石室	小玉	ガラス	緑	3.8	1.4	2.8	0.059	
1559	306	55号壙	心室	小玉	ガラス	緑	3.8	1.2	2.5	0.040	
1560	306	55号壙	石室	小玉	ガラス	緑	3.8	1.2	2.2	0.034	
1561	306	55号壙	石室	小玉	ガラス	緑	3.7	1.0	2.6	0.031	
1562	306	55号壙	石室	小玉	ガラス	緑	3.5	1.1	2.2	0.039	
1563	306	55号壙	石室	小玉	ガラス	緑	4.0	1.0	3.0	0.047	欠損
1564	306	55号壙	石室	小玉	ガラス	緑	4.0	7.0	3.0	0.054	
1565	306	55号壙	石室	小玉	ガラス	緑	3.8	1.0	3.3	0.053	
1566	306	55号壙	石室	小玉	ガラス	緑	3.7	0.8	2.5	0.044	
1567	306	55号壙	石室	小玉	ガラス	緑	3.8	1.1	2.5	0.041	
1568	306	55号壙	石室	小玉	ガラス	緑	3.8	0.7	2.5	0.039	
1569	306	55号壙	石室	小玉	ガラス	緑	3.6	1.3	2.3	0.038	
1570	306	55号壙	石室	小玉	ガラス	緑	3.7	0.8	2.8	0.044	
1571	306	55号壙	石室	小玉	ガラス	緑	3.6	1.0	2.5	0.042	
1572	306	55号壙	石室	小玉	ガラス	緑	3.8	1.3	2.3	0.029	
1573	306	55号壙	石室	小玉	ガラス	緑	4.0	0.8	2.8	0.051	
1574	306	55号壙	石室	小玉	ガラス	緑	3.8	1.4	3.0	0.056	
1575	306	55号壙	石室	小玉	ガラス	緑	3.8	1.1	2.4	0.040	
1576	306	55号壙	石室	小玉	ガラス	緑	4.5	1.5	2.5	0.055	
1577	306	55号壙	石室	小玉	ガラス	緑	4.2	1.0	2.7	0.054	
1578	306	55号壙	石室	小玉	ガラス	緑	3.9	1.1	2.3	0.039	
1579	306	55号壙	石室	小玉	ガラス	緑	3.7	1.0	2.7	0.039	
1580	306	55号壙	石室	小玉	ガラス	緑	3.6	1.2	2.2	0.032	
1581	306	55号壙	石室	小玉	ガラス	緑	3.8	1.1	2.4	0.043	
1582	306	55号壙	石室	小玉	ガラス	緑	3.7	1.1	3.3	0.057	
1583	306	55号壙	石室	小玉	ガラス	緑	3.6	1.0	2.0	0.023	
1584	306	55号壙	石室	小玉	ガラス	緑	3.4	1.0	2.0	0.023	
1585	306	55号壙	石室	小玉	ガラス	緑	4.0	1.5	2.5	0.057	
1586	306	55号壙	石室	小玉	ガラス	緑	3.7	0.8	2.2	0.035	
1587	306	55号壙	石室	小玉	ガラス	緑	3.9	1.1	2.2	0.039	
1588	305	55号壙	石室	小玉	ガラス	緑	4.0	1.5	2.7	0.049	
1589	306	55号壙	石室	小玉	ガラス	緑	3.6	1.2	2.1	0.033	
1590	306	55号壙	石室	小玉	ガラス	緑	3.7	0.9	2.7	0.046	
1591	306	55号壙	石室	小玉	ガラス	緑	3.6	1.0	2.9	0.046	
1592	306	55号壙	石室	小玉	ガラス	緑	3.8	1.0	2.6	0.041	
1593	306	55号壙	石室	小玉	ガラス	緑	3.7	1.4	3.3	0.053	
1594	306	55号壙	石室	小玉	ガラス	緑	3.8	1.2	2.6	0.029	
1595	306	55号壙	石室	小玉	ガラス	緑	4.2	1.6	2.7	0.052	
1596	306	55号壙	石室	小玉	ガラス	緑	3.6	1.0	2.2	0.031	
1597	306	55号壙	石室	小玉	ガラス	緑	3.7	1.2	2.2	0.032	
1598	306	55号壙	石室	小玉	ガラス	緑	3.6	1.1	2.3	0.044	
1599	306	55号壙	石室	小玉	ガラス	緑	3.7	1.1	2.2	0.039	

遺物 番号	牌印 番号	造構名	出土位置	種類	材質	色調	直 径 (mm)	孔 径 (mm)	長 さ (mm)	重 量 (g)	備 考
1600	306	55号墳	石室	小玉	ガラス	黒	3.8	1.2	2.7	0.043	
1601	306	55号墳	石室	小玉	ガラス	黒	3.7	1.1	2.7	0.043	
1602	306	55号墳	石室	小玉	ガラス	黒	3.8	1.0	2.0	0.035	
1603	306	55号墳	石室	小玉	ガラス	黒	3.8	1.1	2.3	0.036	
1604	306	55号墳	石室	小玉	ガラス	黒	3.8	1.5	2.2	0.031	
1605	306	55号墳	石室	小玉	ガラス	黒	4.0	0.6	3.0	0.060	
1606	306	55号墳	石室	小玉	ガラス	黒	3.7	1.0	2.7	0.037	
1607	306	55号墳	石室	小玉	ガラス	黒	3.7	0.9	2.3	0.034	
1608	306	55号墳	石室	小玉	ガラス	黒	3.6	0.8	2.3	0.034	
1609	306	55号墳	石室	小玉	ガラス	黒	(4.0)	(1.6)	2.0	0.015	破片
1610	306	55号墳	石室	碧玉	水晶	黒った透明	14.5	3.0	(1.6)	3.533	欠損
1611	306	55号墳	石室	丸玉	蛇紋岩	灰白	12.0	3.2	19.5	1.558	
1612	306	55号墳	石室	丸玉	蛇紋岩	明緑灰	11.2	3.0	20.0	1.001	
1613	306	55号墳	石室	管	ガラス	黒	5.2	2.2	16.0	0.769	

第5表 大屋敷A古墳群出土金属製品観察表

番号	埋蔵	遺物名	出土位置	種類	材質	直徑	長さ	幅	厚さ	備考
32	23	2号墳	石室	刀子	鉄	(5.55)	通身0.65	0.30	本質既存	
33	23	2号墳	石室	刀子?	鉄	(1.55)	身0.65	0.20		
34	23	2号墳	耳環	金銅	1.9				0.50	
57	46	6号墳	玄室北部	鉄鏡	鉄	(4.65)	鏡身1.0 鏡頭0.55	0.25		
68	59	9号墳	玄室	両面金具	鉄	(2.70)	鏡身0.55		本質既存	
69	59	9号墳	玄室	刀子	鉄	(3.70)	身1.25	0.20		
70	59	9号墳	玄室	刀子?	鉄	(3.35)	身1.05	0.20		
71	59	9号墳	玄室	刀子	鉄	(2.45)	身0.6	0.20	本質既存	
244	67	10号墳	玄室	鉄鏡	鉄	(9.25)	鏡身0.9 鏡頭0.65 元0.55	0.50		
245	67	10号墳	玄室	鉄鏡	鉄	(7.10)	鏡身0.8 鏡頭0.65	0.50		
246	67	10号墳	玄室	鉄鏡	鉄	(2.00)	鏡頭0.55	0.30		
247	67	10号墳		鉄鏡	鉄	(4.50)	鏡身1.15 鏡頭0.6	0.25		
248	67	10号墳		刀子	鉄	(3.50)	身0.7	0.25	本質既存	
249	67	10号墳	石室	鉄鏡	鉄	(2.80)	鏡身0.8 鏡頭0.65	0.25		
250	67	10号墳		刀子	鉄	(6.20)	身1.4以上 元1.0	0.25	本質既存	
251	67	10号墳	玄室	刀	鉄	(12.2)	身3.4 元1.65		直径6mmの刃剥孔	
252	67	10号墳	玄室	両面金具	鉄	(3.75)	鏡金0.8			
253	67	10号墳		両面金具	鉄	(3.50)	鏡頭0.55			
254	67	10号墳	玄室	両面金具	鉄	(1.40)	鏡金0.65			
255	67	10号墳	玄室	両面金具	鉄	(1.70)	鏡頭0.55			
256	67	10号墳		刀	鉄	(9.30)	身(1.55)	0.40		
257	67	10号墳		刀子?	鉄	(5.55)	身1.35	0.30		
258	67	10号墳	心室	切跡式鋸	鉄	(5.50)	0.85	0.40		
259	67	10号墳	玄室	鏡	鉄				0.10	
409	73	11号墳	玄室	刀子	鉄	(3.35)	身1.3	0.35		
436	78	15号墳	玄室	両面金具	鉄	(1.90)	鏡金0.5			
437	78	15号墳	玄室	刀子	鉄	(3.65)	身0.85 元0.4	0.25		
438	78	15号墳	玄室	刀子	鉄	(7.50)	身0.8	0.35		
439	78	15号墳	石室	耳環	錫銅	3.07			0.70	
440	78	15号墳	石室	耳環	錫銅	3.15			0.70	
450	83	16号墳	墓道	鉄鏡	鉄	(5.30)	鏡頭0.45 元0.35	0.35		
461	83	16号墳	玄室	鉄鏡	鉄	(4.45)	鏡頭0.45	0.50		
462	83	16号墳	墓道	鉄鏡	鉄	(4.45)	鏡頭0.45	0.30		
463	83	16号墳	墓道	鉄鏡	鉄	(3.10)	鏡頭0.45	0.35		
464	83	16号墳	墓道	鉄鏡	鉄	(1.95)	鏡頭0.45	0.30		
465	83	16号墳	墓道	鉄鏡	鉄	(1.75)	鏡頭0.45	0.30		
517	92	17号墳	玄室	耳環	錫銅	3.27			0.83	
518	92	17号墳	玄室北	鏡	鉄	(2.10)	0.70	0.17		
519	92	17号墳	玄室北	両面金具	鉄	(2.85)	鏡金0.35			
520	92	17号墳	玄室	両面金具	鉄	(3.00)	鏡金0.4			
521	92	17号墳	玄室北	両面金具	鉄	(2.35)	鏡金0.5			
522	92	17号墳	右片袖部	円錐状鉄製品	鉄	(4.27)	1.05	1.10		
523	92	17号墳		刀	鉄	(6.55)				
524	92	17号墳	女塚北	刀子?	鉄	(5.15)	身1.05 元0.9	0.40		
525	92	17号墳	玄室北	刀子	鉄	(2.15)	身0.9	0.20	裏身破片	
526	92	17号墳	右片袖部	刀子	鉄	(3.75)	身0.65	0.35	裏筋れ抜	
527	92	17号墳	玄室北	刀子	鉄	(3.40)	身0.6	0.30		
528	92	17号墳	玄室北	刀子	鉄	(2.50)	身1.2	0.35	裏身破片	
529	92	17号墳		鉄鏡	鉄	(3.60)	鏡身0.7 鏡頭0.35	0.25		
530	92	17号墳		鉄鏡	鉄	(2.80)	鏡身0.85	0.20		
531	92	17号墳		鉄鏡	鉄	(2.30)	鏡身0.45 鏡頭0.55	0.30		
532	92	17号墳		鉄鏡	鉄	(3.70)	鏡身0.4 鏡頭0.5	0.40		
533	92	17号墳		鉄鏡	鉄	(3.00)	鏡身0.45 鏡頭0.49	0.20		
534	92	17号墳		鉄鏡	鉄	(3.60)	鏡身0.79 鏡頭0.49	0.30		
535	92	17号墳		鉄鏡	鉄	(2.30)	鏡身0.50	0.35		
536	93	17号墳		鉄鏡	鉄	(10.85)	鏡頭1.15 鏡頭0.35 元0.3	0.30	樹皮痕跡	
537	93	17号墳		鉄鏡	鉄	(13.10)	鏡身0.95 鏡頭0.5 元0.35	0.40		

遺物 器名	地圖 號	遺物名	出土位置	類 類	材 質	直 徑	長 度	幅 幅	厚 度	備 考
538	93	17号坑		鉄錐	鐵	(15.20)	圓Φ0.8 圓Φ0.45 圓Φ0.45	0.30		
539	93	17号坑		鉄錐	鐵	(11.70)	圓Φ0.8 圓Φ0.65 圓Φ0.65	0.30		
540	93	17号坑	玄宮南	鉄錐	鐵	(7.80)	圓Φ1.0 圓Φ0.45	0.30		
541	93	17号坑	右片袖部	鉄錐	鐵	(3.30)	圓Φ1.0 圓Φ0.45	0.23		
542	93	17号坑	右片袖部	鉄錐	鐵	(3.55)	圓Φ0.85 圓Φ0.43	0.20		
543	93	17号坑	玄宮南	鉄錐	鐵	(3.25)	圓Φ0.4	0.20		
544	93	17号坑	右片袖部	鉄錐	鐵	(2.30)	圓Φ1.0	0.10		
545	93	17号坑	玄宮南	鉄錐	鐵	(4.20)	圓Φ1.35 圓Φ0.67	0.20	鐵身殘存	
546	93	17号坑	玄宮北	鉄錐	鐵	(2.60)	圓Φ0.75	0.20	鐵身殘片	
547	93	17号坑	右片袖部	鉄錐	鐵	(2.80)	圓Φ0.7	0.20		
548	93	17号坑	玄宮南	鉄錐	鐵	(2.10)	圓Φ0.55	0.20	鐵身殘存	
549	93	17号坑		鉄錐	鐵	(1.90)	圓Φ0.95	0.20		
550	93	17号坑	玄宮北	鉄錐	鐵	(5.75)	圓Φ1.35 圓Φ0.9 圓Φ0.5	0.30		
551	93	17号坑	玄宮南	鉄錐	鐵	(2.95)	圓Φ1.9 圓Φ0.55	0.25		
552	93	17号坑	右片袖部	鉄錐	鐵	(2.33)	圓身0.7 圓頭0.45	0.20		
553	93	17号坑		鉄錐	鐵	(3.65)	圓Φ0.8 圓Φ0.35	0.20		
554	93	17号坑	玄宮南	鉄錐	鐵	(5.00)	圓Φ0.45	0.30		
555	93	17号坑		鉄錐	鐵	(7.80)	圓Φ0.5 圓Φ0.3	0.30		
556	93	17号坑	右片袖部	鉄錐	鐵	(5.35)	圓頭0.43 圓Φ0.4	0.30	本質殘存	
557	93	17号坑		鉄錐	鐵	(15.60)	圓Φ0.45 圓Φ0.45	0.30		
558	93	17号坑	玄宮南	鉄錐	鐵	(8.75)	圓頭0.5 圓Φ0.4	0.30	木質殘存	
559	93	17号坑		鉄錐	鐵	(8.20)	圓頭0.45 圓Φ0.3	0.20		
560	93	17号坑		鉄錐	鐵	(7.55)	圓頭0.4 圓Φ0.45	0.20		
561	93	17号坑		鉄錐	鐵	(9.50)	圓頭0.4 圓Φ0.3	0.30		
562	93	17号坑		鉄錐	鐵	(7.40)	圓頭0.45 圓Φ0.4	0.25		
563	93	17号坑		鉄錐	鐵	(6.30)	圓頭0.35 圓Φ0.25	0.30	樹皮痕跡	
564	93	17号坑		鉄錐	鐵	(6.00)	圓頭0.45 圓Φ0.3	0.25		
565	93	17号坑	玄宮南	鉄錐	鐵	(4.00)	圓頭0.6 圓Φ0.4	0.35		
566	93	17号坑	玄宮南	鉄錐	鐵	(2.85)	圓頭0.45 圓Φ0.4	0.20		
567	93	17号坑	玄宮南	鉄錐	鐵	(4.20)	圓頭0.47	0.20		
568	93	17号坑	玄宮北	鉄錐	鐵	(4.00)	圓頭0.4	0.25	開面部損	
569	93	17号坑	右片袖部	鉄錐	鐵	(2.75)	圓頭0.45 圓Φ0.4	0.20		
570	93	17号坑	右片袖部	鉄錐	鐵	(2.00)	圓頭0.47 圓Φ0.4	0.20		
571	93	17号坑	右片袖部	鉄錐	鐵	(3.37)	圓頭0.65	0.30		
572	93	17号坑	玄宮南	鉄錐	鐵	(4.00)	圓頭0.5	0.53		
573	93	17号坑	右片袖部	鉄錐	鐵	(3.00)	圓頭0.45	0.25		
574	93	17号坑	玄宮南	鉄錐	鐵	(2.30)	圓頭0.5	0.30		
575	93	17号坑	右片袖部	鉄錐	鐵	(3.55)	圓頭0.4	0.37		
576	93	17号坑	右片袖部	鉄錐	鐵	(3.18)	圓頭0.47	0.20		
577	93	17号坑	右片袖部	鉄錐	鐵	(4.00)	圓頭0.35	0.40		
578	93	17号坑	圓錐	鉄錐	鐵	(2.85)	圓頭0.48	0.35	木質殘存	
579	93	17号坑		鉄錐	鐵	(3.73)	圓頭0.5	0.40		
580	93	17号坑		鉄錐	鐵	(4.90)	圓Φ0.4	0.35	樹皮痕跡	
581	93	17号坑	右片袖部	鉄錐	鐵	(3.45)	圓Φ0.4	0.35	木質殘存	
582	93	17号坑	玄宮南	鉄錐	鐵	(1.70)	圓Φ0.35	0.27	木質殘存	
583	93	17号坑	玄宮南	鉄錐	鐵	(3.40)	圓Φ0.4	0.20		
584	93	17号坑		鉄錐	鐵	(4.60)	圓Φ0.3	0.25		
585	93	17号坑		鉄錐	鐵	(2.95)	圓Φ0.3	0.25		
586	93	17号坑	玄宮南	鉄錐	鐵	(2.20)	圓Φ0.5	0.40	木質殘存	

器物番号	探査区	遺構名	出土位置	種類	材質	直径	長さ	幅	厚さ	備考
587	94	17号墳		小刀	鉄	(35.00)	身2.6 茎1.45		0.70	
				鑑	鉄	(3.20)	目打目(3.6) 茎0.5			
588	94	17号墳	右片袖部	鑑	鉄		3.49	1.50	0.20	
597	103	19号墳		鍛錠	鉄	(15.80)	頭0.6 茎2.0 基0.3		0.30	
598	103	19号墳	石室	鉄錠	鉄	(11.20)	頭0.8 茎0.45		0.45	
599	103	19号墳		鉄錠	鉄	(2.85)	頭身0.8		0.15	
600	103	19号墳		鉄錠	鉄	(3.55)	頭身0.45		0.35	
601	103	19号墳	石室	刀子	鉄	(3.05)	身0.6		0.15	
602	103	19号墳	石室	両面金具	鉄	(2.35)	頭身0.45			木質残存
603	103	19号墳	石室	両面金具	鉄	(2.75)	身0.4			木質残存
604	103	19号墳	石室	両面金具	鉄	(2.95)	頭身0.45			木質残存
605	103	19号墳	石室	両面金具	鉄	(3.05)	身0.5			木質残存
606	103	19号墳	石室	両面金具	鉄	(2.80)	頭身0.45			木質残存
607	103	19号墳		刀子	鉄	(13.05)	身1.1 茎0.65		0.35	
608	103	19号墳		刀子	鉄	(9.55)	身0.8 茎0.6		0.30	
609	103	19号墳	石室	刀子	鉄	(2.90)	身1.2		0.25	
610	103	19号墳	石室	刀子	鉄	(5.00)	身0.75		0.35	木質残存
611	103	19号墳	石室	櫛?	鉄	(7.60)	2.15		0.70	
619	109	20号墳	石室	刀子	鉄	(5.35)	身0.8		0.25	樹皮痕跡
620	109	20号墳	石室	刀子	鉄	(2.30)	身0.7		0.20	
621	109	20号墳	石室	刀子	鉄	(2.60)	身1.1			木質残存
622	109	20号墳	石室	耳環	銀銅	2.08			0.60	
623	109	20号墳	石室	耳環	銀銅	2.10			0.65	
624	109	20号墳	石室	耳環	銀銅	2.40			0.65	
625	109	20号墳		耳環	銀銅	2.37			0.63	
651	133	25号墳		刀子	鉄	(8.55)	身0.7		0.20	鍍金存 木質残存
652	133	25号墳		耳環	金鋼	2.50			0.63	円形鎖芯
653	133	25号墳		耳環	金鋼	2.55			0.75	円形鎖芯
654	133	25号墳		鍛錠	鉄	(3.10)	身0.3		0.20	
655	133	25号墳	石室南	鍛錠	鉄	(2.10)	身0.15		0.15	
656	133	25号墳		鍛錠	鉄	(1.90)	頭身0.35		0.30	
657	133	25号墳		鍛錠	鉄	(2.50)	頭身0.8		0.18	
658	133	25号墳	石室南	鍛錠	鉄	(6.50)	頭身0.55 茎0.35		0.35	樹皮痕跡
659	133	25号墳		鍛錠	鉄	(20.00)	頭身0.8 頭身0.65 茎0.3		0.30	樹皮痕跡
660	133	25号墳		鍛錠	鉄	(4.90)	頭身0.8		0.20	
661	133	25号墳		鍛錠	鉄	(4.30)	頭身0.45		0.35	
662	133	25号墳		鍛錠	鉄	(7.90)	頭身0.5 茎0.7		0.30	
663	133	25号墳		鍛錠	鉄	(4.40)	頭身0.5 茎0.4		0.30	木質残存
664	133	25号墳	石室南	鍛錠	鉄	(3.65)	身0.35		0.25	樹皮痕跡
665	133	25号墳		釘	鉄	(5.70)	釘身0.5		0.50	木質残存
666	133	25号墳	石室北	釘	鉄	(4.95)	釘身0.5		0.35	
667	133	25号墳		釘	鉄	(9.75)	釘身0.5		0.45	
691	138	26号墳		釘	鉄	(3.45)	釘身0.85		0.35	
751	147	12号墳		鍛錠	鉄	(10.45)	頭身0.5 茎0.4		0.30	
752	147	12号墳		鍛錠	鉄	(2.25)	頭身0.8 頭身0.45		0.25	
753	147	12号墳		鍛錠	鉄	(2.95)	頭身0.45		0.30	
754	147	12号墳		鍛錠	鉄	(2.60)	頭身0.5 茎0.35		0.33	
755	147	12号墳	石室北	鍛錠	鉄	(3.45)	頭身0.35		0.35	
756	147	12号墳		鍛錠	鉄	(2.05)	頭身0.4		0.30	
757	147	12号墳		鍛錠	鉄	(2.20)	身0.4		0.35	
758	147	12号墳		鍛錠	鉄	(2.80)	身0.45		0.25	樹皮痕跡
759	147	12号墳		鍛錠	鉄	(1.35)	身0.35			
760	147	12号墳	石室北	鑑?	鉄	(2.05)				木質残存
794	152	13号墳	石室	鑑	鉄	(1.40)			0.15	
795	152	13号墳	支室南	鑑	鉄	(2.70)	身0.8		0.30	
796	152	13号墳	石室	刀子	鉄	(4.35)				
797	152	13号墳	石室	刀子	鉄	(4.45)	身(1.05) 茎(0.78)		0.40	木質残存
798	156	14号墳		両面金具	金鋼	1.75	3.03		0.40	
801	161	27号墳		鍛錠	鉄	(4.45)	頭身0.67 頭身0.45		0.30	

出土地番号	地図番号	遺物名	出土状態	種類	材質	直径	長さ	幅	厚さ	備考
814	168	29号埴		鉄鋸	鉄		(2.30)	断面0.45	0.35	
815	168	29号埴		鉄鋸	鉄		(3.50)	断面0.4	0.30	
536	177	51号埴	石室	刀子の鐵	鉄		(1.45)	断面0.55	(0.15)	
1146	186	32号埴	石室北	鉄鋸	鉄		(6.60)	断面0.5	0.30	
1147	186	32号埴	石室北	鉄鋸	鉄		(5.45)	断面1.2	0.25	
1148	186	32号埴		鉄鋸	鉄		(2.30)	断面1.25	0.20	
1149	186	32号埴	石室北	鉄鋸	鉄		(3.35)	断面0.5 高さ0.4	0.25	本質残存
1150	186	32号埴	石室北	鉄鋸	鉄		(2.80)	断面0.55	0.25	
1151	186	32号埴	石室北	鉄鋸	鉄		(5.30)	断面0.55	0.33	
1152	186	32号埴	石室北	鉄鋸	鉄		(2.35)	断面0.3	0.20	樹皮痕跡
1153	186	32号埴	石室北	鉄鋸	鉄		(2.27)	断面0.3	0.25	
1154	186	32号埴		刀子	鉄		(8.15)	断面1.15 高さ0.9	0.30	
1155	186	32号埴		小刀	鉄		(6.10)	断面1.6	0.30	
1156	186	32号埴		刀子	鉄		(5.50)	断面1.25	0.30	
1157	186	32号埴	石室北	刀子	鉄		(3.70)	断面0.95	0.20	
1158	186	32号埴	石室北	刀子	鉄		(5.20)	断面1.05	0.30	
1159	186	32号埴		刀子	鉄		(3.35)	断面0.95 高さ0.77	0.20	
1160	186	32号埴		刀子?	鉄		(2.75)	断面0.6	0.25	孔径0.22
1161	186	32号埴	石室北	刀子	鉄		(2.00)	断面0.6	0.20	
1162	186	32号埴	玄室南	刀子	鉄		(3.55)	断面1.15	0.40	
1163	186	32号埴	奥壁裏込	耳環	銅銅	3.05			0.67	
1164	186	32号埴	石室	耳環	銅銅	3.10			0.62	
1191	195	34号埴	玄室北	羽羽	金網		4.40	0.90	0.40	木質残存
1192	195	34号埴	玄室北	刀子	鉄		(2.65)	断面0.55	0.27	木質残存
1193	195	34号埴	玄室北	釘	鉄		(4.80)	断身0.6	0.50	
1210	207	37号埴	石室	花弁形飾り金具	銅銅	2.25			0.25	
1216	215	39号埴	玄室	刀子	鉄		(3.90)	断身0.8	0.25	
1217	215	39号埴	玄室	耳環	銅銅	1.90			0.50	
1218	215	39号埴	玄室	耳環	銅銅	1.90			0.50	
1219	215	39号埴	玄室	耳環	銅銅				0.60	
1220	215	39号埴	玄室	耳環	銅銅				破片	
1229	224	49号埴	石室	刀子	鉄		(3.80)	断面0.75	0.25	
1240	224	49号埴	石室	刀子	鉄		(4.45)	断面0.65	0.35	
1241	224	49号埴	石室	鉄鋸	鉄		(3.45)	断面0.45	0.35	
1242	224	49号埴	石室	刀子	鉄		(4.75)	断面0.75	0.25	樹皮痕跡
1243	224	49号埴	石室	鉄	鉄		(1.30)			
1244	224	49号埴	石室	鉄	鉄		(1.05)			木質残存
1256	227	41号埴		刀鞘尻	鉄		(3.10)			
1257	227	41号埴		耳環	金網	2.15			0.65	
1258	227	41号埴	石室	鉄鋸	鉄		(1.70)	断面0.7	0.15	
1259	227	41号埴		鉄	鉄		(1.35)			
1260	227	41号埴		鉄	鉄		(0.85)			
1261	227	41号埴		刀子	鉄		(1.95)	断面0.9	0.25	
1262	227	41号埴	石室	刀子	鉄		(1.90)	断面1.2	0.20	
1263	227	41号埴		刀子	鉄		(2.70)	断面1.35	0.30	刀部破片
1270	233	42号埴	石室	刀子	鉄		(14.40)	断面0.65 高さ7.75	0.40	銅皮質残存
1271	233	42号埴	石室	鉄鋸	鉄		(13.90)	断面0.67 高さ0.4	0.32	樹皮痕跡
1272	233	42号埴	石室	鉄鋸	鉄		(5.75)	断面0.5 高さ0.4	0.50	
1273	233	42号埴	石室	鉄鋸	鉄		(5.55)	断面0.45	0.35	
1274	233	42号埴	石室	鉄鋸	鉄		(5.30)	断面0.4	0.28	
1278	237	44号埴	石室	鉄	鉄		(1.10)			
1346	258	47号埴		鉄鋸	鉄		(2.65)	断面0.35	0.35	
1347	258	47号埴	石室南	刀子	鉄		(2.65)	断面0.95	0.25	
1348	258	47号埴		鉄	鉄		(1.85)			木質残存
1349	258	47号埴	石室北	耳環	銅銅	2.42			0.54	
1358	264	48号埴	石室北	鉄鋸	鉄		(14.35)	断面0.9 高さ0.55 高さ0.5	0.30	
1359	264	48号埴		鉄鋸	鉄		(4.65)	断面0.85 高さ0.58	0.18	
1360	264	48号埴	石室北	鉄鋸	鉄		(9.60)	断面0.8 高さ0.75	0.30	
1361	264	48号埴		鉄鋸	鉄		(4.65)	断面0.85 高さ0.5	0.35	
1362	264	48号埴		鉄鋸	鉄		(3.45)	断面0.8	0.25	
1363	264	48号埴		鉄鋸	鉄		(4.90)	断面0.5 高さ0.58	0.25	

遺物番号	種別	通鑑名	出土位置	種類	材質	直徑	長さ	幅	厚さ	備考
1364	264	48号墳		鉄鏡	鉄	(6.10)	縦幅0.5	0.25		
1365	264	48号墳		鉄鏡	鉄	(7.00)	縦幅0.6	0.25		
1366	264	48号墳		鉄鏡	鉄	(5.00)	縦幅0.9	0.19		
1367	264	48号墳		鉄鏡	鉄	(2.55)	縦幅0.6	0.22		
1368	264	48号墳	石室北	刀子	鉄	(2.55)	縦幅0.85	0.25	木質残存	
1369	264	48号墳	石室北	刀子	鉄	(5.50)	身1.5	0.45	木質残存	
							縦幅1.73	(1.20)		
						(7.60)	身1.1	0.30	木質残存	
1370	264	48号墳	石室北	刀子	鉄		縦幅1.45		縦一部残存	
1387	279	51号墳	石室	鉄鏡	鉄	(7.50)	縦幅0.55	0.40		
1388	279	51号墳	石室	鉄鏡	鉄	(5.45)	縦幅0.65	0.25		
1410	289	53号墳	石室	鉄鏡	鉄	(8.40)	縦幅0.85	0.25		
1411	289	53号墳	石室	鉄鏡	鉄	(3.90)	縦幅0.7	0.17		
1412	289	53号墳	石室	鉄鏡	鉄	(3.60)	縦幅0.85	0.20		
1413	289	53号墳	石室	鉄鏡	鉄	(7.35)	縦幅0.85	0.20		
1414	289	53号墳	石室	鉄鏡	鉄	(7.15)	縦幅0.65	0.25		
1415	289	53号墳	石室	鉄鏡	鉄	(2.05)	縦幅0.75	0.20		
1416	289	53号墳	石室	鉄鏡	鉄	(5.30)	縦幅0.45	0.25		
1417	289	53号墳	石室	鉄鏡	鉄	(3.85)	縦幅0.65	0.25		
1418	289	53号墳	石室	鉄鏡	鉄	(3.95)	縦幅0.45	0.30		
1419	289	53号墳	石室	鉄鏡	鉄	(4.65)	縦幅0.65	0.50		
1420	289	53号墳	石室	肉頭金具	鉄	(2.52)	縦幅0.5		木質残存	
1421	289	53号墳	石室	刀子	鉄	(4.60)	身0.75	0.30		
1422	289	53号墳	石室	刀子	鉄	(6.75)	身0.75	0.30	木質残存	
				鍔	鉄	1.20		0.10		
1614	306	55号墳		鉄鏡	鉄	(3.80)	縦身0.6 縦幅0.4	0.13		
1615	306	55号墳		鉄鏡	鉄	(3.20)	縦身0.6 縦幅0.55	0.25		
1616	306	55号墳		鉄鏡	鉄	(4.15)	縦幅0.52	0.31		
1617	306	55号墳		鉄鏡	鉄	(4.00)	縦幅0.6	0.35		
1618	306	55号墳	腰盃	鉄鏡	鉄	(1.65)	縦幅0.35	0.30	木質残存	
1619	306	55号墳		武銚	鉄	(13.20)	縦幅0.5 縦幅0.32	0.30		
1620	306	55号墳		刀子	鉄	(5.00)	身0.8	0.30	縦一部残存 木質残存	
1621	306	55号墳	閉巻石闇	刀子(逆)	鉄	(2.40)		0.30	木質残存	
1622	306	55号墳		刀子	鉄	(3.40)	身0.89	0.28		
1623	306	55号墳		刀子	鉄	(2.70)	身1.32	0.30		
1624	306	55号墳	腰盃	刀子の茎?	鉄	(2.20)			表面剥離 目打孔?	
							孔 長径0.25	短径0.15		
1625	306	55号墳	大刀の治金具		鉄	(4.55)				
1626	306	55号墳		鍔	鉄	(2.10)	(2.70)	0.20		
1627	306	55号墳		鍔	鉄	(2.20)	(2.20)	短径1.15	木質残存	
1628	306	55号墳	玄室	刀子	鉄	(6.35)	身1.4	0.35	縦一部残存	
1629	306	55号墳	鍔道	鉄鏡	鉄	(5.55)	縦幅0.45 縦幅0.45	0.30	周部欠損	
1630	306	55号墳	玄室	鉄鏡	鉄	(2.67)	縦身0.5 縦幅0.5	0.25		
1631	306	55号墳	羨道	鉄鏡	鉄	(1.53)	縦幅0.55	0.25		
1632	306	55号墳	玄室	刀子	鉄	(3.05)	身1.55	0.30	木質残存	
1633	306	55号墳	羨道	刀子	鉄	(3.90)	身1.4	0.40		
1634	306	55号墳	羨道	刀	鉄	(5.60)	縦幅0.6 縦幅0.37	0.25	木質残存 基の破片	
1677	314	56号墳		鉄鏡	鉄	(5.50)	縦幅0.63	0.23		
1678	314	56号墳		鉄鏡	鉄	(5.90)	縦幅0.53 縦幅0.25	0.28	鋸痕痕跡	
1679	314	56号墳		鉄鏡	鉄	(6.95)	縦幅0.6 縦幅0.6	0.30		
1680	314	56号墳		鉄鏡	鉄	(2.20)	縦幅0.7	0.20		
1681	314	56号墳		鉄鏡	鉄	(3.12)	縦幅0.48	0.20		
1682	314	56号墳		鉄鏡	鉄	(2.87)	縦幅0.5	0.30		
1683	314	56号墳		鉄鏡	鉄	(3.28)	縦幅0.43	0.38		
1684	314	56号墳		鉄鏡	鉄	(2.15)	縦幅0.58 縦幅0.5	0.30		

遺物番号	鉢回	遺構名	出土位置	種類	材質	直径	高さ	幅	厚さ	備考
1685	314	56号坑		鉄鎌	鉄	(2.75)	頭部0.55	0.20		
1686	314	56号坑		刀子	鉄	(2.50)	頭0.5	0.23		
1687	314	56号坑		商賈金具	鉄	(2.66)	商金0.58			頭部欠損 花弁部欠損
1688	314	56号坑		商賈金具	鉄	(3.00)	商金0.5			花弁部欠損 商金2/3欠損
1689	314	56号坑		商賈金具	鉄	(2.87)	商金1.05			
1690	314	56号坑		刀子	鉄	(3.35)	身0.95	0.25		
1691	314	56号坑		刀子	鉄	(7.75)	身1.3	0.25		
1692	314	56号坑	石室	刀子	鉄	(7.90)	身1.35	0.30		
1693	314	56号坑		鍔	鉄	(1.30)	(1.00)	0.15		
1694	314	56号坑		鍔	鉄	(1.25)	(1.00)	0.10		木質残存
1695	314	56号坑		鍔	鉄	(1.40)	(1.05)	0.15		木質残存
1696	314	56号坑		鍔	鉄	(3.20)	(0.50)	0.10		
1697	314	56号坑		鍔?	鉄	(7.25)	身4.0	0.20		木質残存
1698	314	56号坑		釘	鉄	(1.55)	釘身0.55	0.30		
1699	314	56号坑		釘	鉄	(1.65)	釘身0.5	0.38		
1700	314	56号坑		釘	鉄	(2.67)	頭0.27	0.25		錯彫れ
1701	314	56号坑	吸石面下	耳環	銀銅	2.95		0.90		木芯?
1702	314	56号坑		耳環	銀銅	2.35		0.78		
1703	314	56号坑		耳環	銀銅	2.40		0.77		
1704	314	56号坑		耳環	銀銅	2.40		0.75		
1708	317	57号坑		刀子	鉄	(3.05)	頭0.6	0.30		木質残存
						(1.50)	頭身0.52	0.15		
						(4.90)	頭部0.5	0.26		
						(1.40)	頭0.25	0.20		頭皮痕跡
1733	327	59号坑		鍛鐵	鉄		(1.40)	頭部0.5	0.19	
							(3.60)	頭20.5	0.23	
1741	337	62号坑		刀子	鉄		(2.25)	身1.0	0.30	
遺物番号	鉢回	遺構名	出土位置	種類	材質	直径	孔径(cm)	重さ(g)	厚さ(cm)	備考
1749	342	2区 SX01	城平元寶	銅		9.60	1.041	0.10		初鉢998年
1750	342	2区 SX01	城平元寶	銅	2.00	6.60	0.941	0.10		
1751	342	2区 SX01	聖宋元寶	銅	2.50	0.70	3.741	1.05		初鉢1101年
1752	342	3区 55号坑	袋通	寛永通寶	銅	2.40	6.60	2.743	0.10	古寛永
1753	342	2区 表接	寛永通寶	銅	2.40	6.60	3.326	0.10		文銅
1754	342	2区 13号坑	石室	寛永通寶	銅	2.30	6.70	1.682	0.10	新寛永
1755	342	3区 60号坑 付近		十枚硬貨	銅	2.20	6.46	3.581	0.10	大正12年(1923年)調達

第6表 大屋敷A古墳群出土石器観察表

遺物番号	鉢回	遺構名	出土位置	種類	材質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
1744	341	3区 55号坑	石室	ナイフ形石器	曲摩石	3.05	1.48	0.47	2.382	ブランディング 座判断面
1745	341	1区 17号坑	玄室	凹基式石鏡	曲摩石	1.72	1.00	0.36	0.625	微細調整
1746	341	3区 55号坑	石室	凹基式石鏡	曲摩石	1.35	1.05	0.23	0.370	微細調整
1747	341	2区 表接		凹基式石鏡	曲摩石	2.00	0.97	0.44	0.784	微細調整
1748	341	3区 55号坑	石室	有茎石鏡	シルト岩	1.95	0.90	0.33	0.617	茎部欠損

第4章 大屋敷A古墳群の評価

第1節 大屋敷A古墳群の群構成と石室の変遷

1 支群・単位群の抽出

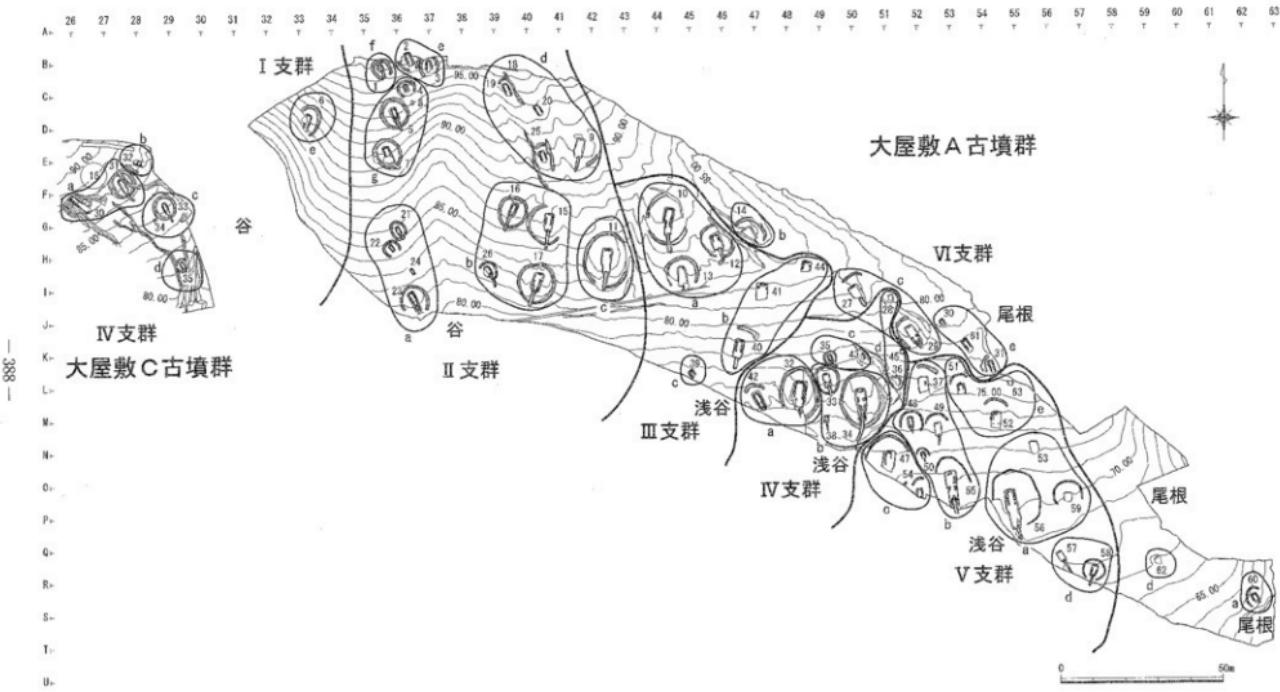
C古墳群報告書において、大屋敷C古墳群の支群・単位群認定が行なわれている。そこではまず、C古墳群の立地する丘陵を自然地形である谷または渓谷によって区分し、各谷地形に向かって墓道や石室の開口方向の延長線が収束する古墳を大きなまとまりと捉え、支群と称している。つまり、谷が各古墳に至る参道の幹線となっているのである。各支群において隣接して立地しながらも、墓道・開口方向の延長線がしばらく別方向に向かう古墳は少なからず存在し、これらはより小さなまとまりである単位群を異にすると見做される。このようにして、調査されたC古墳群51基のうち42基が4支群・20単位群に区分されている。この方法をA古墳群にも応用し、C古墳群の6基を含む68基を6支群・29単位群に区分した（第343図）。以下、大屋敷A古墳群の各支群・単位群の構成とそれにおける各古墳の消長（第7表）の様相を概観する。

I支群 A古墳群とC古墳群とを画する深い谷を挟んで対峙する古墳が同一支群を構成することは、すでにC古墳群報告書において述べられている。A古墳群1区最西端に単独立地するA6号墳、C古墳群最東端を構成するC30・C31・C32・C33・C34・C35号墳がこれに相当するが、C古墳群として登録されている6基についてはC古墳群報告書の単位群認定を尊重し、C古墳群IV支群のa～d単位群という区分を継承する。そして、A6号墳はA古墳群I支群のe単位群と認定した。

当支群はA古墳群としては最も遅れて形成が開始される支群であり、遠江IV期後半にa・c・e単位群の形成が始まるが、A古墳群中の他支群の形成状況を勘案すれば、e単位群が支群中最初に形成され、間もなくa・c単位群が続いて築造を開始した蓋然性が高い。当支群の終末は遠江V期前半であり、該期にa単位群のC30号墳で最後の追葬が行なわれたが、c単位群では同時期にC34号墳が築造された可能性が高い。また、C古墳群報告書で既述されているように、当支群a～d単位群はC古墳群の他の古墳と異なり、南東方面に所在する興覚寺後古墳に基点を有する古墳であり、その文脈ではC古墳群ではなくA古墳群に帰属させて然るべきとも言える。

II支群 1区中央部を南北に縱断する谷に向かって収束する古墳21基がa～gの7単位群に分かれてII支群を構成し、A古墳群最大の支群となっている。しかも、d単位群のA18号墳のように調査区外にもII支群を構成する古墳が存在する蓋然性が高い。遠江III期中葉にa単位群のA23号墳が築造されて支群形成が始まり、同IV期前半～後半に築造の盛期を迎へ、同V期前半にa・b単位群の3古墳に最後の追葬が行なわれて廃絶する。複数基から成る単位群では、古墳は基本的に南から先行して築造される傾向があり、例えばd単位群ではA25号墳がA19号墳より僅かに早く築造された可能性がある。

少々複雑な展開を見せるのはb単位群である。前章第2節で述べたように、出土遺物から見ればA15号墳の築造時期は遠江IV期前半に比定されてしまうが、遠江III期後葉に築造されたA16号墳の周溝がA15号墳の周溝を避けて掘削されていることから、A15号墳は遅くとも同III期後葉に築造され、b単位群中最古の古墳である蓋然性が高い。そもそも、A15号墳は斜面地が小尾根状に張り出した箇所に立地し、当単位群中では最も眺望が良いうえに南から仰ぎ見た場合、墳丘が最も高く見える位置を占めている。さらに、遠江III期後葉に築造されたc単位群のA11号墳およびd単位群のA9号墳の石室主軸方位が、b単位群ではA15号墳のそれに最も近いこともA15号墳の築造時期比定の傍証となろう。そして西側にA16号墳、統いて南側にA17号墳が築造され、かなり遅れてA17号墳の西側にA26号墳が造営されたの



第343図 大屋敷A古墳群支群・単位群区分図

第7表 大屋敷A古墳群単位群別古墳消長表

支群	単位群	古墳名	石室形態	石室全長	Ⅲ期中型	Ⅲ期後葉	Ⅲ期末葉	Ⅳ期前半	Ⅳ期後半	Ⅳ期末葉	Ⅴ期初頭	Ⅴ期前半
I 支群 (C古 墳群) 支群)	e 単位群	A 6	單室系櫛幅圓袖式	4.00								
		C31	單室系櫛幅圓袖式	4.00								
	a 単位群	C30	單室系櫛幅圓袖式	3.65								
	c 単位群	C23	單室系櫛幅圓袖式	3.05								
		C34	無袖式	0.55								
	b 単位群	C32	無袖式	2.40±								
	d 単位群	C35	無袖式	1.65								
	a 単位群	A23	單室系櫛幅圓袖式	5.37								
		A24	豎穴式小石室	1.45								
		A21	無袖式	2.09								
		A22	豎穴系橫穴式石室	1.82								
II 支群	b 単位群	A15	右片袖式	5.39								
		A16	單室系櫛幅圓袖式	3.52+								
		A17	右片袖式	5.30								
		A26	單室系櫛幅圓袖式	2.50+								
	c 単位群	A11	右片袖式									
		A 9	右片袖式?									
	d 単位群	A25	無袖式	2.75								
		A19	單室系櫛幅圓袖式	3.80								
		A20	無袖式	2.75								
		A18										
III 支群	e 単位群	A 3	無袖式	2.30								
		A 2	單室系櫛幅圓袖式	3.80								
	f 単位群	A 1	無袖式	2.18								
		A 7	單室系櫛幅圓袖式	2.93+								
		A 5	單室系櫛幅圓袖式	3.46								
	g 単位群	A 4	豎穴式橫穴式石室	1.70								
		A 8	無袖式	1.25								
	a 単位群	A10	右片袖式	5.74								
		A13										
		A12		2.31+								
IV 支群	a 単位群	A40		3.75+								
	b 単位群	A44		1.86+								
		A41		3.30+								
	c 単位群	A39	無袖式	1.96+								
	a 単位群	A32	右片袖式	7.50								
		A42	單室系櫛幅圓袖式	5.18								
		A34	板室系櫛幅圓袖式?	7.00±								
	b 単位群	A33	單室系櫛幅圓袖式?									
		A38	豎穴式橫穴式石室	1.70								
	c 単位群	A43	無袖式	1.86+								
V 支群	d 単位群	A35	無袖式	1.72								
		A36	無袖式	2.17								
		A45	無袖式?	0.91+								
		A28										
	a 単位群	A56	右片袖式?	11.20								
		A59		2.04+								
		A53		3.67+								
	b 単位群	A55	腹室系櫛幅圓袖式	9.60								
		A48	無袖式	2.70								
	c 単位群	A49		3.80±								
VI 支群		A37		2.80±								
	d 単位群	A50	無袖式	1.24								
	e 単位群	A47		5.45+								
		A54	腹似圓袖式	2.18+								
	d 単位群	A58	無袖式	3.03								
		A57		2.90±								
	e 単位群	A52		3.38+								
		A51	無袖式?	2.80+								
		A63		0.85+								
	a 単位群	A60	無袖式	2.22								
VII 支群	b 単位群	A14										
		A27										
	c 単位群	A29	單室系櫛幅圓袖式?	5.80±								
	d 単位群	A62		1.30+								
	e 単位群	A61	單室系櫛幅圓袖式	3.22+								
		A31	單室系櫛幅圓袖式	3.08								
		A30	無袖式	2.02								

■急速 ■業造の可能性あり ■遅非

である。

Ⅲ支群 2区西部の浅谷に収束する古墳7基がa～cの3単位群に分かれてⅢ支群を構成するが、大部分の古墳は石室形態が不明である。遠江Ⅲ期中葉にa単位群のA10号墳とb単位群のA40号墳が築造されて支群形成が始まり、両古墳が支群形成を巡って主導権を争っているかのような様相を呈す。支群中最後に築造された古墳はa単位群のA12号墳であり、最後の追葬も同古墳で遠江Ⅴ期前半に行なわれてⅢ支群は廃絶する。

Ⅳ支群 2区南東部の浅谷に収束する古墳10基がa～dの4単位群に分かれてⅣ支群を構成する。遠江Ⅲ期中葉、それも同Ⅲ期前葉に近い時期にa単位群のA32号墳が築造され、その後同Ⅳ期前半まで長らくA32号墳の単独立地が継続し、A32号墳の廃絶後、同Ⅳ期後半に同単位群のA42号墳が当支群における単独立地を継承するが、同Ⅳ期末葉に至つて俄に古墳築造が活況を呈し、同Ⅴ期前半にb単位群のA38号墳および恐らくd単位群のA28号墳が築造され、やがてⅣ支群は廃絶していく。

V支群 3区西北部の浅谷に収束する古墳15基がa～eの5単位群に分かれてV支群を構成する。V支群はⅣ支群に東接し、旧河岸段丘の段差が両支群の境界となっている。ただし、A37号墳はこの段差の上段面に立地しているが、石室の開口方位を重視し、V支群b単位群に包摂した。遠江Ⅲ期中葉にa単位群のA56号墳が築造されて当支群の形成が始まり、続く同Ⅲ期後葉にb単位群のA55号墳が築造され、同Ⅲ期末葉にはc単位群のA47号墳とd単位群のA58号墳が造営されており、V支群は次第に東西へ拡大していく。古墳築造の最盛期は遠江IV期前半であるが、同Ⅳ期末葉を最後に新たな古墳築造は見られなくなり、同Ⅴ期前半にA47号墳に最後の追葬が行なわれてV支群は廃絶する。

当支群で注目される現象はc単位群の動向である。A47号墳は横穴式石室とそれを擁する墓坑の主軸方位が大きく異なり、埋葬施設の設計ミスという見方もそれがちであるが、支群・単位群の視点から全く別の説明が可能と考えられる。A47号墳の墓坑の主軸方位はN-8°10'-Eとなっており、その延長線はV支群の浅谷に向かわず、むしろ西隣するⅣ支群の浅谷に収束する様相を呈す。これは、A47号墳がV支群の領域に立地しながら、当初はⅣ支群への帰属を志向していたということを示唆している。A47号墳が築造されようとしている遠江Ⅲ期末葉には、Ⅳ支群においてA32号墳が単独で威容を誇っており、A32号墳を奥津城とする有力な集団がV支群集団からA47号墳の造営主体を引き抜きにかかったのか、或いは後者から前者に宗主替えの申し出があったのかは定かではない。しかしいずれにせよ、すでに有力な古墳が追葬の段階にあったⅣ支群（a単位群のA56号墳、b単位群のA55号墳）側から見れば、A47号墳造営主体の動向は共同体秩序の惑乱であり、平たく言えば裏切りに他ならない。

そこで、V支群集団としてA47号墳造営主体に対し、基底石の設置による石室の設計が着手される直前に物言いを入れ、横穴式石室の開口方向がV支群の浅谷に収束するように強く勧告した。この勧告に従い、A47号墳造営主体は真南に向けて開口する横穴式石室を、すでに掘削施設してしまった墓坑内に構築した。A47号墳の横穴式石室が墓坑の右壁寄りに位置することも、石室の真南北方向主軸の延長線が墓坑の前辺中央を通過するための調整と考えられ、設計ミスどころか、設計変更を強いられたにもかかわらず開口部の設定を何とか成功させるに至った造営努力の証跡と見做すことができる。当古墳石室主軸の真南北方向も、墓坑と石室の開口部が一致することとV支群の浅谷に石室の開口方向が収束することを両立させるためのぎりぎりの設定であると考えられる。

こうして、もしあつたとすれば、A32号墳集団の勢力拡大への野望は頓挫した。この事件以降、V支群集団、就中a単位群（A56号墳）・b単位群（A55号墳）集団がⅣ支群（A32号墳）集団よりも相対的に優位な立場を占め、少なくともA古墳群東半部における権力を確立し、この領域における新規の古墳築造に対して干渉・規制する時期が長期間続いたと考えられる。その現れとして、Ⅳ支群ではA32号墳以外に遠江IV期前半まで古墳が築造されておらず、該期にA32号墳が廃絶すると、続く同Ⅳ期後半によ

うやく同じ a 単位群の A42 号墳が A32 号墳の家系を継承するかのように 1 基のみ築造されており、東隣の V 支群集団から監視されているかのような様相を呈す。また、遠江 IV 期後半では V 支群においても新規に築造される古墳のうち石室形態が明らかなものは無袖式横穴式石室ばかりで、一段階高級と目される単室系擬似両袖式横穴式石室さえも築造が許されなかったようであり、V 支群 a・b 単位群集団の専制が窺われる。

ところが、V 支群において遠江 IV 期後半に A55 号墳が追葬を終了して廃絶し、続いて A56 号墳最後の追葬を見計らうかのように同 IV 期末葉、大型の複室系擬似両袖式横穴式石室を擁する A34 号墳をはじめ、IV 支群 b・c 単位群の最大 4 基が新たに築造されている。また、V 支群においても該期に擬似両袖式横穴式石室を擁する A54 号墳が造営されているが、当古墳は A47 号墳と同じく真南北方向の石室主軸を有する c 単位群の古墳であり、そもそも問題を起こした A47 号墳に近しい系譜をもつ集団もこの時期に至ってようやく新規の古墳築造が可能になったと理解され、石室形態に対する規制も解除されたことが分かる。そして、V 支群の終末である遠江 IV 期前半までの長期間にわたり埋葬が継続した古墳が問題の A47 号墳 1 基であったことは、歴史の皮肉としか言い様がない。

VI 支群 2 区北端部から 3 区南東部を西北西一東南東方向に走る尾根上、またはこの尾根の南側斜面に立地する 8 基の古墳を VI 支群と認定した。8 基のうち A31・A62 号墳を除く 6 基が石室主軸を真北より 30° 以上西偏させており、I～V 支群のいずれにも属さないと判断される。a～e の 5 単位群に区分されるが、c・e 単位群付近には III～V 支群が食い込み、一部で錯綜した分布状況を呈す。谷に向かって収束するという、大屋敷 A・C 古墳群通有の支群構成原理とは異なる志向を以て形成された支群であるが、その展開の經緯もまた特異である。

VI 支群の形成は遠江 III 期後葉、尾根南東端部に a 単位群の A60 号墳が築造されて始まる。他の支群では形成初期の古墳はいずれも谷・浅谷の前端付近に立地しており、遠江 III 期後葉にはすでに丘陵南辺のどの谷・浅谷も大・中型横穴式石室を擁する有力古墳が占地し、支群形成開始に相応しい場所が残されていなかっただため、A60 号墳の造営主体は半ばやむを得ず丘陵東端の尾根が尽きる場所を選定したと考えられる。或いは、無袖式の小規模な横穴式石室に示されるように、A60 号墳の造営主体となった集団は階層性が低く、遠江 III 期中葉には古墳の築造そのものを規制されていた可能性がある。他の支群で最初の古墳が谷・浅谷の前端付近に立地する理由は、擬制的にせよ系譜上の祖と考えられていた興覚寺後古墳という基点に可能な限り近いことを重視したためであり、A60 号墳もまた尾根付近で可能な限り興覚寺後古墳に近い場所に位置する。

かかる VI 支群の貧弱な状況を開拓するべく築造された古墳が、恐らく A14 号墳であり、当支群 b 単位群に位置付けた。副葬された装饰刀の年代観はおよそ遠江 III 期中葉～IV 期前半と幅広いが、後続すると考えられる c 単位群の展開を考慮して、A14 号墳を同 III 期末葉に比定する。他支群に較べての圧倒的劣勢の挽回策として、尾根の最高所に立地し、天竜川平野全域を見渡すことができる眺望を確保したと考えられる。また、そうすることによって VI 支群の領域を一気に西へ拡張し得たのである。ただし、厳密には尾根の最高点より約 30m 東南東へ下った地点に立地しているが、尾根の最高点の直南にはすでに III 支群の有力古墳である A10 号墳が立地し、南方の眺望を遮っているうえに、敢えて尾根最高点に築造しようとすれば A10 号墳の兆域を侵しかねないため、標高 85m 辺りを占地し、無用の問題を回避したと考えられる。

遠江 IV 期前半には b 単位群より東南東約 30m の尾根上若干南側斜面寄りに c 単位群の A27 号墳が築造され、b 単位群（A14 号墳）が設定した路線を継承している。ところが、該期には a 単位群（A60 号墳）より約 25m 西北西に位置する A62 号墳も築造されており、VI 支群 d 単位群に位置付けた。ここに、高所よりの眺望を重視する b・c 単位群と、興覚寺後古墳との距離的繋がりを重視する a・d 単位群との路

論対立の表面化が看取される。最終的にe単位群がb単位群とd単位群との中间的な位置に形成されるが、これを眺望重視派と基点繋がり重視派との妥協の産物と見るか、e単位群の両者からの中立表明と解するか、或いは、前者がVI支群の主導権を掌握し、e単位群の各造営主体が眺望重視路線に従ったと考えるか、判断の分かれるところであるが、前者には当支群最大の横穴式石室を擁するA29号墳（c単位群）が存在し、当支群最後の古墳であるA30号墳（e単位群）がA29号墳に隣接して構築されていることから、件の路線闘争は眺望重視派の勝利に終わった可能性が高い。しかし、VI支群全体としては、Ⅲ～V支群による進出・侵食を許してしまっていることから、終始弱小な勢力であったと評価される。

2 石室の変遷

右片袖式横穴式石室 大屋敷A古墳群の6支群のうち、II～V支群が遠江III期中葉に形成を開始し、さらにIII～V支群では支群形成の契機となった古墳には右片袖式横穴式石室が構築されている。II支群においても遠江III期後葉に右片袖式横穴式石室がA15・A11・A9号墳に構築され、それぞれ同支群b・c・d単位群形成の契機となっている。これら3古墳の右片袖式横穴式石室はIII支群a単位群のA10号墳の影響のもとで成立した蓋然性が高く、後続するA17号墳とともに支群の境を越えて右片袖式横穴式石室墳が群集している（図版14）。そして、遠江III期末葉にII支群b単位群のA17号墳が構築されて以降、右片袖式横穴式石室は構築されていない。遠江IV期前半に群形成が始まる大屋敷C古墳群において右片袖式横穴式石室が見られないことも首肯できる状況である。

单室系擬似両袖式横穴式石室 单室系擬似両袖式横穴式石室が最も早く構築された古墳はII支群a単位群のA23号墳であり、遠江III期中葉に比定されるが、同IV期前半までに構築された同形態の石室はA古墳群全体で僅か3基を数えるに過ぎない。ところが、遠江IV期後半には单室系擬似両袖式横穴式石室が可能性のあるものを含めて9基の古墳で構築され、同形態としての盛期を突如として迎える。この時期の单室系擬似両袖式横穴式石室で特筆されるものとして、I支群e単位群のA6号墳の円礎積み奥壁が挙げられる。C古墳群においても、C48号墳が单室系擬似両袖式横穴式石室の奥壁を円礎積みし、該期の構築と考えられている。遠江IV期後半に円礎積み奥壁の情報・技術が伝播した可能性が高いというC古墳群報告書の記述がA6号墳によって補強された形となった。

大屋敷A古墳群では单室系擬似両袖式横穴式石室は遠江IV期末葉を最後に構築されなくなるが、C古墳群IV支群a単位群のC30号墳では同V期初頭に同形態の石室が構築されており、C古墳群IV支群はA古墳群I支群でもあるので、C30号墳がA古墳群最後の单室系擬似両袖式横穴式石室に位置付けられるとも言える。

複室系擬似両袖式横穴式石室 複室系擬似両袖式横穴式石室は遠江III期後葉構築のA55号墳（V支群b単位群）に構築され、当初より最高レベルの階層性を有する石室形態として出現する。A古墳群では少ない石室形態であり、他にIV支群b単位群のA34号墳1基が同形態の石室を有する可能性を指摘し得るにとどまる。遠江IV期末葉に比定されるA34号墳が複室系擬似両袖式横穴式石室を擁するのであれば、当古墳の埋葬施設は遠江で最も新しい複室系擬似両袖式横穴式石室の一つに位置付けられる。また、A34号墳の存在は、C古墳群報告書で述べられているような簡略化・省力化の流れにおける擬似両袖式横穴式石室の複室系から单室系への変化という図式が、少なくともA古墳群には当てはまらない可能性を示している。

無袖式横穴式石室 遠江III期後葉構築のA60号墳（VI支群a単位群）から同V期前半構築のA30号墳（VI支群e単位群）、つまりA古墳群の終末まで無袖式横穴式石室が構築されている。また、いずれの支群にも同形態の石室が存在する。階層性が低いの一言で片付けられがちな無袖式横穴式石室であるが、大屋敷A古墳群においては、單複両室構造の擬似両袖式横穴式石室が構築されなくなる遠江V期初頭以降に

構築された無袖式横穴式石室については必ずしも階層的劣位に位置付けられず、同IV期末葉以前では擬似両袖式横穴式石室を構築し得たほどの階層性を有する集団がA古墳群の末期に石室を簡略化したと解釈できる古墳も存在する（A30号墳）。

堅穴系横穴式石室 A古墳群ではA 4・A 22・A 38号墳の3基で堅穴系横穴式石室が確認されている。構築時期は遠江IV期後半～V期前半に及ぶ可能性があり、A 38号墳は単次埋葬の石室として必ずしも階層性が最低レベルであるとは言えない要素を有す。また、A 4・A 22号墳の堅穴系横穴式石室は間仕切石により狹小な内部空間がさらに分割されており、C 21号墳において中規模以上の単室系擬似両袖式横穴式石室の玄室床面に施設された屍床仕切石とは性格が異なり、例えば火葬等の埋葬形態を想定しなければならないのかもしれない。そうであれば、両古墳の築造時期をより新しく比定するのが妥当であろう。

堅穴式小石室 A24号墳1基のみに横穴式石室の系統を踏まない堅穴式小石室が構築されている。横穴式石室墳の築造が活況を呈する遠江IV期前半に比定される可能性が高く、階層性が著しく低いか、何らかの事情で成人と同じ横穴式石室に埋葬できなかった有力者の子供の墓である可能性も否定できない。

第2節 墳丘施設について

1 墳丘内配石

A 3号墳では玄室内奥壁付近で検出された自然崩落したと考えられる天井石の直上で、奥壁鏡石以外のどの構造材よりも大型の円礫1石が検出されている。この円礫はやはり石室の構造材として積載されていたとは考え難く、また、その法量から天井石として架構するにも長さが不足していることが明らかである。よって、消去法的ではあるが、恐らく墓坑後壁の背後に設置された墳丘内配石が墳丘盛土の流失に伴い、玄室内へ転落したものではないかと考えられる。より確実な墳丘内配石はA10号墳で確認されている。墓坑後壁上端の旧表土直上に板状の大型角礫1石が平置きされており、一次墳丘構築に関連する施設の可能性がある。

大屋敷C古墳群では遠江IV期前半に比定されるC 19号墳および同IV期後半に築造されたC 21号墳において明らかな墳丘内列石が検出されている。これらはいずれも埋葬施設の周囲に環状配置された多数の小型円礫から成り、石列を形成していたとは限らないA 3・A 10号墳の墳丘内配石とは同列に比較できないのかもしれない。しかし、A 3号墳は遠江IV期前半、A 10号墳は同III期中葉に築造されており、C古墳群の前述2基より先行し、また、遠江の他の確実な墳丘内石列（外護列石）を有する古墳（菊池2004）以上に古い。従って、特にA 10号墳の墳丘内配石がこれらの墳丘内石列の祖型である可能性が考慮される。A 10号墳では一次墳丘盛土直後に墳丘上で火を用いた祭祀が行なわれた可能性が高く、C 19号墳においても古墳築造直前に火を用いた祭祀が墳丘予定地の旧表土直上で催されたと考えられていることもこれを支持する要素である。しかしながら、埋葬施設の背後北側に設置されている点、大型礫を使用する点、そして单体配石であった可能性もある点が現在知られている墳丘内石列とは大きく異なる要素であり、墳丘内（墓坑後壁）配石は他所から伝播した施設ではなく、大屋敷A古墳群でその形成初期に独自に考案されたがその後群内で普及せず、遠江IV期前半にA 3号墳において何らかの必要性に基づき再び採用された可能性が高い。

2 区画帯

A 9号・A 11号墳における墳丘施設として区画帯（堤状盛土）が検出されている。両古墳は右片袖式横穴式石室を擁し、ともに遠江III期後葉に築造されたが、墳丘の構築法も共通している。また、区画帯

の存在によって墳丘盛土は一次墳丘と二次墳丘とに識別可能となる。区画帯は墳丘内石列を盛土で代用した施設と考えられ、上記の墳丘内配石と同様に大屋敷A古墳群で独自に発案されたものか、或いは遠江または三河の遠江Ⅲ期後葉以前の古墳（群）から伝播したものかを明らかにするためにも、類例（註4）の増加が期待される。

以上の墳丘施設は全てA古墳群のII支群および当支群に大きな影響を及ぼしたと考えられるIII支群のA10号墳で確認されている。特にA9・A10・A11号墳はいずれも右片袖形プランの墓坑内に右片袖式横穴式石室を構築しており、A10号墳の情報・技術が直接A9・A11号墳に伝わっている蓋然性が極めて高い。そこで、A10号墳で墳丘内石列の設置を試みたが何らかの要因で失敗し、一次墳丘の土止めとしては効果が期待されない単体配石となってしまったが、これを教訓にA9・A11号墳では土帯を石列に代用し、整然たる墳丘構築に成功したというあらましが想定される。

第3節 出土遺物について

1 土器

大屋敷A古墳群では出土土器のうち図化可能なものは691点を数え、大屋敷C古墳群の出土土器総数606点と較べればやや多いが、所属時期や種別を度外視すれば、古墳1基当たりの出土点数はほぼ拮抗し、むしろ厳密にはC古墳群がA古墳群を僅かに上回っている。A古墳群出土土器の内訳は多い順に須恵器613点、土師器42点、灰陶陶器11点、土師質土器11点、山茶碗7点、縄文土器3点、瀬戸・美濃製品2点、弥生土器1点、志戸呂製品1点となっている。以下、本来古墳に伴う土器として、須恵器の一部と土師器について概観する。

須恵器 出土点数は僅かであるが、A40・A55号墳で器台または子持ち器台が確認されている。A40号墳の子持ち器台1235は遠江Ⅱ期中葉に比定され、当古墳の初葬に伴う。A55号墳の「子」部1487は不確定要素が小さくないが、子持ち器台の装飾部の可能性が高く、器台自体の器種としての時期的下限が遠江Ⅲ期後葉となっていることから、やはりA55号墳の初葬者に伴う副葬品と考えられる。時期的にはC古墳群において出土することはあり得ないが、A古墳群においてもA40・A55号墳という最高レベルの階層性を有する古墳の、の中でも最重要人物である初葬者に限定されていることから、器台の希少的価値の程度が窺われる。

土師器 A古墳群の本来古墳に伴う土器のうち約6.4%を土師器が占め、C古墳群では出土土師器が僅か5点を数えることに較べても、高い比率で出土していると言える。A10・A16・A17・A19・A20・A23・A26・A12・A31・A34・A37・A40・A61・A49・A53・A55・A59・A60号墳の計18基で土師器が出土しており、器種別の内訳は壺が14点と最も多く、次いで皿が12点を数え、甕8点、台付皿2点と続き、脚付盤・同蓋・高盤・高杯・鉢・ミニチュア壺が各1点となっている。一方、時期別の内訳は遠江Ⅲ期中葉のA40号墳出土高杯1238が最も古く、同Ⅲ期後葉2点、同Ⅲ期末葉3点、同Ⅲ期末葉～IV期前半1点、同IV期前半5点、同IV期後半6点、同IV期末葉16点、同IV期末葉～V期前半1点、同V期初頭3点、同V期前半1点、時期不詳3点と続き、遠江IV期末葉に最も多く副葬または供獻されている。しかも、該期の土師器には赤彩されるものが多く、土師器の副葬・供獻が葬礼の重要な要素として確立された時期と捉えられる。

遠江IV期末葉以前の土師器には須恵器の特定器種を仮借した精巧な模倣品が存在する（A40号墳出土高杯1238、A61号墳出土脚付盤1282・同蓋1281）。早い時期の甕には注目すべき出土状況のものが見られる。本章第2節において、A10号墳の墳丘構築過程における火を用いた祭祀に言及したが、祭祀の痕跡

としては壺279が炭化物とともに出土している。また、石室内における壺の出土状況で原位置を保持していると考えられるものはA17号墳の右片袖部で須恵器無蓋高杯・小刀・鉄鎌束とともに立て掛けられていた476であるが、遠江Ⅲ期末葉における土器副葬の一つの在り方と捉えられる。壺476に内容物が存在したのかどうか定かではないが、少なくとも、遠江V期前半に比定されるC53号墳出土の土器壺について考えられているような改葬骨・火葬骨が収納されていた可能性は低い。

2 金属製品

大屋敷A古墳群出土の金属製品には鉄製品、銅製品、金銅製品、銀銅製品があり、図化可能なものの総数は315点を数え、出土金属製品総数36点の大屋敷C古墳群を圧倒的に凌いでいる。A古墳群の本来古墳に伴う鉄製品として鉄鎌、両頭金具、刀子、刀、鉄釘、円錐状鉄製品が挙げられ、銅製品としては花弁形飾り金具があり、金銅（銅地金銅張）製品には装飾刀、耳環、銀銅（銅地銀銅張）製品には耳環がある。このうち、全体の形状が分かれるものが僅か1点の刀（A17号墳出土587）、属性要素の乏しい刀子および耳環、用途不明の円錐状鉄製品（A17号墳出土522）については論及を避け、残りの製品について概観する。全体を通して言えることは、良好な一括資料がほとんど存在しないことであり、当古墳群における盗掘の猛威を物語っている。

鉄鎌 鎌身形態が判別可能な鉄鎌を出土した古墳として、A6・A10・A17・A19・A25・A12・A27・A32・A41・A48・A53・A55・A56号墳の計13基が挙げられる。このうち、最多数の鉄鎌が出土したのはA17号墳で、鎌身形態が判別できるものは22点を数える。A古墳群全体で鎌身形態が判別可能な鉄鎌の内訳は、平根鎌が脇抉柳葉式2点、長三角形式2点、脇抉三角形式1点の計5点を数え、尖根鎌が柳葉式38点、脇抉柳葉式1点、三角形式1点、長三角形式1点、盤箭式3点、片刃箭式2点の計46点となっている。この他、尖根鎌であることはほぼ間違いないが鎌身形態を確定できないもの1点（A6号墳出土57）と、前章において尖根鎌でありながら圭頭式と認定したもの1点（A10号墳出土247）が存在するが、後者は粗雑に製作された柳葉式の可能性が高い。

A古墳群出土の鉄鎌は一括性が極めて低いため、用語としては適切ではないかもしれないが、組成を見れば、柳葉式を主体とする両刃の尖根鎌が圧倒的多数を占めることに気付く。C古墳群では鎌身形態の分かれる鉄鎌は7点を数えるに過ぎないが、そのうち4点は尖根片刃箭式となっており、A古墳群とは異なり、両刃式はむしろ少数派となっている。また、平根鎌については、脇抉柳葉式がA17・A32号墳で各1点、長三角形式がA17号墳で2点、脇抉三角形式がA56号墳で1点出土しており、いずれの古墳も遠江Ⅲ期末葉までに築造された古墳である。従って、A古墳群においては遠江IV期前半以降に平根鎌を副葬しなかった可能性が指摘される。

両頭金具 C古墳群では出土していない両頭金具が、A古墳群では計18点出土している。両頭金具が出土した古墳はA9・A10・A15・A17・A19・A53・A56号墳の計7基であり、うち5基がII支群、2基がV支群の古墳である。また、最多数の出土はA19号墳における5点である。長期間追葬が継続する古墳の場合、築造から廃絶までのどの時点で両頭金具を装着した飾り弓が副葬されたのかを明らかにし難いが、仮に各古墳の初葬に両頭金具が伴うとすれば、両頭金具が副葬された古墳の時期別内訳は、遠江Ⅲ期中葉2基（A10・A56号墳）、同Ⅲ期後葉1基（A9号墳）、同Ⅲ期末葉1基（A17号墳）、同IV期前半3基（A15・A19・A53号墳）となり、遠江Ⅲ期中葉に両頭金具を伴う飾り弓の副葬が始まり、同IV期前半に副葬の盛期を迎えるという静岡県西半部の全体的傾向（井鍋2003）に合致する。

飾り弓を副葬する集団の階層性も、例えば地域の小首長クラス（井鍋2003）と称されるように高く位置付けられ、大屋敷A古墳群においてもII支群の右片袖式横穴式石室墳を主体とする有力古墳と、前述のA47号墳事件以後勢威を振るったV支群a単位群の古墳に両頭金具が認められる。また、両頭金具（飾

り弓）を伴う古墳における鉄讃との組み合わせは静岡県内では片刃箭式が多い傾向にあるとされているが（井鍋2003）、大屋敷A古墳群の場合、むしろ柳葉式を主体とする両方式の鉄讃と弓矢としてのセット関係を成すと考えられ（ただし、A53号墳は例外である）、この点は全県的な傾向に一致しない。

鉄釘・花弁形飾り金具 A古墳群では鉄釘がA25・A56号墳で各3点、A26・A34号墳で各1点の計8点出土している。頭部形態が判別できるものは全て、C古墳群報告書の鉄釘分類に従えば、釘頭を釘身からL字形に折り曲げて造り出すa類に相当する。ところで、C古墳群報告書では有力古墳の造営主体が釘付式木棺を採用したと考えられている。確かに、A34・A56号墳は群中最高レベルの階層に位置付けられるが、A25・A26号墳は石室の形態・規模から階層性はむしろII支群中でも低いほうと考えられる。また、A37号墳より木棺の座金具の可能性がある花弁形飾り金具が出土しているが、当古墳も階層性が高いとは言い難い要素を内包している。よって、C古墳群においては相対的に有力な古墳が釘付式木棺を採用したのであろうが、A古墳群では恐らく造営主体の階層性とはあまり関係なく釘付式木棺が使用されたと考えざるを得ない。或いは、大屋敷A古墳群全体として、釘付式木棺入手するための何らかの有利な条件を地域の上位首長または中央政権から保証されていた可能性も想定される。

結

大屋敷A古墳群で出土を見なかった遺物として、馬具が挙げられる。馬具の不在が、当古墳群が遠江或いは浜北北麓古墳群において階層的劣位にあることを示すのではないことは、A55・A56号墳などの長大な横穴式石室の存在からも首肯できる。この種の金属製品はより上位の権力構造から配布されるものであり、大屋敷A古墳群の場合、それは飾り弓であったと考えられる。すなわち、大屋敷A古墳群の各古墳造営主体およびその継承者に対して地域の上位首長または中央政権が期待した役割は、軍事的職掌に限定すれば、儀仗の弓箭隊であった可能性が高い。刀の副葬状況は不明な点が多いが、A17号墳で小刀を袖部に立て掛け、A32号墳にも確実な小刀が副葬されており、さらに群全体で67点の刀子が出土している。弓兵としては、大刀よりも小振りの刺突・斬撃用武器が実用的であり、これらの小刀・刀子は腰帯などに差し匕首的な武器と考えられる。しかも、刀子には研ぎ減りの顯著なものが少なからず認められ、実際に兵器として戦闘に使用されたことが窺われる。当時の主力兵器は弓矢であり、大屋敷A古墳群の被葬者たちは式典で飾り弓を立てて整列し、或いは戦場で実用の強弓を引き、そのはたらきが上位の権力構造から評価されて、釘付式木棺を他の古墳群の造営主体よりも豊富に賜与されたようである。大屋敷A古墳群の他の出土遺物としては、大屋敷C古墳群の10倍を超える総数753点の玉類も注目されようが、我が身を飾り立てる華美な貴人というよりも、式典と戦役の双方で活躍する上級の武人とするほうが大屋敷A古墳群の被葬者像に近いと考えられる。

第4章第1節において、大屋敷A古墳群が6支群に区分されるのみならず、それぞれの支群内部で、さらに隣接する支群間で主導権を争う様相が看取される。つまり、古墳築造に関する諸々の規制は専らより上位の権力構造からの外圧によるものと考えられがちであるが、同一古墳群内でも互いを規制・支配しようとする動きが見られるわけであり、遠江の他の古墳群においても丁寧に群構成を観察すれば、似たような動向が窺われるかもしれない。この点において、大屋敷A古墳群のII・III支群には、遠江III期末葉～IV期後半にIV支群をも規制したV支群a・b単位群の支配が及ばなかったようであり、その現れとして、營々と右片袖式横穴式石室墳を中心とする階層性の高い古墳を築造している。両頭金具（飾り弓）、鉄釘（釘付式木棺）といった注目すべき遺物の出土古墳分布状況も、このことを反映していると考えられる。

註

- 1) 静岡県および東海地方の古墳研究の慣例に従い、横穴式石室の規模の大小に言及する場合、石室の全長を指標とする。
- 2) 石材の大小に言及する場合、最大径50cm以上を大型礫、同30cm以上50cm未満を中型礫、同30cm未満を小型礫と、便宜上呼称する。
- 3) 直径の寸法が長さ以上となる管状の玉のうち、便宜上直径6mm以上のものを白玉、6mm未満のものを小玉と称す。
- 4) 浜松市字藤坂A 6号墳の埴丘には、一次・二次埴丘を固む環状盛土の区画帯が構築されている（鈴木一1998）。本書における区画帯なる用語も、当古墳の当該施設に対して用いられた名称を採用したものである。字藤坂A 6号墳は遠江III期中葉に築造され、右片袖形プランの墓坑内に右片袖式横穴式石室を構築しており、大屋敷A 9・11号墳に少なからず影響を及ぼした可能性がある。

引用・参考文献

- 井鍋誉之2003「静岡県内の飾り弓について」『研究紀要』第10号 貢静岡県埋蔵文化財調査研究所
井鍋誉之ほか2007『東原遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第173集 貢静岡県埋蔵文化財調査
研究所
- 大谷宏治2003『遠江の装飾付大刀三題』『静岡県考古学研究』No.35 静岡県考古学会
大谷宏治（編）2004『大屋敷C古墳群・大屋敷1号窯』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第151集
貢静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 小山正忠・竹原秀雄（編）農林水産省農林水産技術会議事務局（監修）1999『新版 標準土色帖』
22版 日本色研事業
- 菊池吉修2004「外護列石を持つ古墳—静岡県の事例ー」『静岡県埋蔵文化財調査研究所設立20周年記念論
文集』貢静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 静岡県考古学会（編）2003『静岡県の横穴式石室』
- 鈴木一有1998『宇藤坂古墳群』貢浜松市文化協会
- 鈴木一有2001『遠江における後期古墳の特徴』『東海の後期古墳を考える』第8回東海考古学フォーラム
三河大会・三河古墳研究会
- 鈴木敏則2001『湖西豪古墳時代須恵器編年』賛 元洋（編）『須恵器生産の出現から消滅—猿投
窯・湖西窑編年』第1回東海土器研究会資料 第5分冊 捕遺・論考編 東海
土器研究会
- 松井一明1989「宮口古窯跡群と清ヶ谷古窯跡群における須恵器・陶器生産についての考察」及川 司・
鈴木良孝（編）『静岡県の窯業遺跡（静岡県内窯業遺跡分布調査報告書）』静岡県文化財調
査報告書第42集 静岡県教育委員会
- 松井一明1993「久野城跡出土の陶磁器・土師質土器が提示する諸問題」加藤理文（編）『久野城IV』
袋井市教育委員会
- 若林淳之（監修）1989『浜北市史』通史 上巻 浜北市
若林淳之（監修）2004『浜北市史』資料編 原始・古代・中世 浜北市

報告書抄録

ふりがな	おおやしきえーこふんぐん
書名	大屋敷A古墳群
副書名	平成15~17年度 国道362号交通連携事業(2B)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
卷次	第1分冊
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告
シリーズ番号	第183集
編著者名	大林 元
編集機関	財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所
所在地	〒422-8002 静岡県静岡市駿河区谷田23-20 TEL 054-262-4261㈹
発行年月日	2008年3月10日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おおやしきえーこふんぐん 大屋敷A古墳群 ・大屋敷遺跡	しづかのなかはまつち 静岡県浜松市 はままちくのとみや 浜北区尾野・宮 くわいのうち	22218	59 54 57	世界測地系 34° 50° 5~6°	137° 46° 15~24°	20030228 20060331	21,600m ²	道路建設
				日本測地系 34° 49° 53~55°	137° 46° 26~35°			
所収遺跡名	種別	主な年代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
大屋敷遺跡	散布地	旧石器時代～ 縄文時代	(包含層)	ナイフ形石器、石鏃、 縄文土器				
	散布地、 墓地？	平安時代～ 鎌倉時代	祭祀遺構(中世墓?) 3基	土師質土器、灰釉陶器、 山茶碗、錢貨		古墳の埋葬施設 を再利用か？		
大屋敷A古墳群	古墳	古墳時代後期	古墳62基。原則として円墳に横穴式石室を施設する。	須恵器、土師器、玉類、 鐵鏃、両頭金具、 刀子、小刀、刀装具、 耳環、棺装具		大屋敷古墳群の 北東群を形成する 大規模群集墳		

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第183集

大屋敷 A 古墳群

平成15～17年度国道362号交通連携事業(2B)に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書
(第1分冊)

2008年3月10日発行

編集・発行 財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所
〒422-8002 静岡県静岡市駿河区谷田23-20
TEL 054-262-4261㈹
FAX 054-262-4266

印刷所 みどり美術印刷株式会社
〒410-0058 静岡県沼津市沼北町2丁目16番19号
TEL 055-921-1839㈹

